フリーザ様と灰原さん

おっとり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
フリーザ様と灰原さん

【Ｎコード】
Ｎ６４２６Ａ

【作者名】
おっとり

【あらすじ】
姉を失い、組織に追われ、気になる彼には好きな人がいる……。そんな不幸街道爆進中の少女、灰原哀の前に突然宇宙の帝王フリーザ様が現れた。そして、その日を境に不幸だった哀の人生は変な人生に変わって行く。これは二人の日常を描いたホラーバイオレンスアクションラブロマンスコメディカンフーパニック小説である。

1．フリーザ様現る！

暗い・・・

何より苦しい・・・

天国でも地獄でもないここで　ぼくは一体いつまでこうしているのでしょう？

あぁ・・・　光が見えてきました

これでこの苦しみも終わるのでしょうか・・・？

第1話　フリーザ様現る

「ふぅ・・・」

少女はため息をついた

ほんの休憩・・・　徹夜で続けていた作業に区切りをつけ　コーヒーブレイクといくことにした

彼女の名前は灰原哀・・・

本名は宮野志保

ある犯罪組織の中で育ち・・・　組織のために薬の開発に携わっていた天才である

しかし　組織に実の姉を殺されてからは組織を裏切り

現在では自分の作ってしまった毒薬ＡＰＴＸ４８６９の解毒剤の開発に着手している

「やっぱりデータが足りないわね・・・　この試作品も失敗だわ」

コーヒーを一口飲むと哀は再びため息をついた
組織を裏切った身であるため　薬のデータが揃わず解毒剤がうまく作れないのだ

「気長にやるしかないわね・・・　工藤君には文句を言われそうだけど・・・」

悠長にしていられるには訳がある
解毒剤を心待ちにする者が極めて少ないからである
ＡＰＴＸ４８６９の被害者で生きているのは彼女が言った工藤と言う男と
そして彼女自身だけである

彼女は作業を再開しようとデスクに近付いた

その時だった

「・・・っ！」

彼女の目の前の空間が妙に捻じ曲がり歪んだように彼女は感じた

「・・・目眩？少し休んだ方がいいかしら・・・私もヤワね・・・」

彼女は自嘲気味に笑った
そして　仮眠をとろうと研究室に使っている地下室を出ようとした
その時だった

「・・・おや？　なんですかここは？」

聞きなれない声

「急に目の前が明るくなったと思ったら・・・　見慣れない場所ですね」

哀は声のするほうを振り返り・・・　声の主を発見した

「・・・

「この私に先に名乗らせようとは・・・　たいした度胸ですね
どうやらここでは私は有名では無いようですね・・・　まぁいいでしょう　教えて上げますよ」

有名人なのかしら？　哀がそんなことを考えている間も話は続いた

「私の名前はフリーザ・・・　以後お見知りおきをお嬢さん？」

「フリーザ？」

「様をつけなさい様を！　私は全宇宙で恐れられた帝王フリーザ様ですよ！」

「はいはい・・・　フリーザ様ね・・・」

哀の頭はまだ混乱していたが
どうやらこの男は宇宙人でフリーザ・・・様というらしいことは理解できた

「人に名乗らせておいて考え事とは失礼な・・・　消し去りますよ？」

この一言で哀の考え事は中断された

「はいはい・・・　私は灰原哀よ
ところで二つ目の質問に答えてくれるかしら？」

なぜその「フリーザ様」がここに？　・・・である

「そんなこと私が知るわけ無いでしょう

真っ暗で息苦しいところを漂っていて　気が付いたらここにいたんですよ」

「良く分んないわね・・・　それまでは何してたのよ?」

「それまでは・・・」

すると　フリーザ様の表情は見る見る怒りの表情へと変わっていった

「あの忌々しいサル野郎め!　あの時消しておくべきだった・・・」

どうやらサルみたいな奴に何かされたらしい・・・

「あなた帝王とか言ってたわね・・・　部下を迎えに来させれば?」

「部下・・・　あのサル野郎!」

あぁ・・・部下もサル野郎に何かされたんだ・・・

哀は溜息をついた

分からないことだらけだが・・・　つまりは迷子のようだ

「まぁいいわ・・・　あても無いようだし・・・　興味深いからここに居ても良いわよ」

「当然です!　この私に住居を提供するのは部下の勤めでしょう」

部下?

その単語に哀は引っ掛かりを覚えた

「私がいつ部下になったのよ・・・」

哀はフリーザ様を睨み付けた
しかし　フリーザ様はその視線を無視すると話を続けた

「見たところ貴方は非常に使えそうです・・・　科学者のようですしね
私にはいま部下が居ません・・・　貴方には私の手足として働いてもらいますよ」

「拒否権は？」

「ありません！　全ての人間は私の下僕です！　あ～はっはっは！」

面倒なことになってしまった
ただでさえ解毒剤の研究で忙しいのに　こんな訳の分らないフリーザ様の世話なんて・・・
哀は頭が真っ白になったような気がした

「さあハイバラさん！　さっそく食事の用意からはじめなさ～い！」

さっそくかよ・・・
哀はまた大きな溜息をついた

とにもかくにも・・・
この日から哀とフリーザ様の不思議な生活がはじまるのであった

続く

1．フリーザ様現る！（後書き）

さてさて
初めての皆さん・・・
はじめまして　おっとりです
フリーザ様と灰原さんという異色コンビですがお付き合い下さい
なお　読んでいただくと分かると思いますが
この小説は句読点の類を一切使っておりません
なぜか？
何となく　形にとらわれたくなかったからです

目次を見るとすんごい話数があって「うわぁ・・・」って感じでしょうけど
大抵一話～数話で完結なのでがんばって下さい＾＾；

ってことで初めての皆さん向けの挨拶でした

読みなおしに来た人はちょっと変わってビックリ？　でしょうか？
一年以上続けてくると「こうした方が良いな」とか出てくるんですよなのでちょくちょく差し換えていくことにしました
読み返すと誤字も目立ちますしね＾＾；

2．老人とフリーザ様

家に帰って来て
部屋の明かりをつけたら・・・
フリーザ様がくつろいでいた
そんな状況になったら　あなたはどうしますか？

第2話　老人とフリーザ様

「フン・・・　まあまずくはないですね・・・」

いまフリーザ様はお食事中である
テーブルに置かれた料理を作ったのは哀・・・　フリーザ様の命令で・・・

「仕方ないでしょ・・・　私はシェフじゃないのよ？
あなたがシェフを連れていれば問題なかったのに・・・」

哀の口からため息がこぼれた
これで今日何度目だろうか？
哀は思わず笑ってしまいそうになった

「まぁいいでしょう・・・　それにしてもあのサル野郎・・・」

フリーザ様は相当サル野郎がお気に召さないようだ
哀はそんなフリーザ様を見ながらまたため息をついた
そう言えば昨日から寝て居ない・・・　いい加減疲れてきた

「ところでハイバラさん・・・　この家は貴方の物ですか？
その年の割には広い家に住んでいるんですね」

「私の家に見える？」

実際哀は１８歳だがＡＰＴＸの効果で現在は６歳程度にしか見えない
たしかに家を持っているようには見えない

「ここは阿笠博士の家よ・・・　私はただの居候」

「なるほど・・・　その『博士』とか言うのがこの家の持ち主ですね
あいさつをしておかなくては・・・　ふっふっふ・・・」

どんな意味だろうか？
とりあえず　ここに居座ることつもりであることは確からしい・・・
哀は気が遠くなった
それに頭が重い・・・　いや　これは眠気のせいだ

「ねぇ・・・寝ていいかしら？　私昨日から寝てないの・・・」

思い出したかのように哀は言った
今の哀の頭を支配するのはフリーザ様への興味ではなく強烈な眠気だ

「部下のくせにこのフリーザ様に睡眠を要求するんですか？
まぁいいでしょう・・・　貴方にはこれから何かと働いてもらうことになります
体を壊されては使い物になりませんからね・・・」

許可が下りたようだ

やっと眠れる・・・
哀は安心も重なり一気にまぶたが重くなるのを感じた

「そうだ・・・　博士が帰ってきたら脅かさない程度に自己紹介でもして
それから事情説明して頂戴・・・　泊めてくれると思うわ」

「また要求ですか？　まぁ良いでしょう・・・　眠りなさ～い」

「眠るわよ」

哀は一気にベッドになだれ込むとそのまま寝息を立て始めた
しかし　彼女はあまりの眠気のため気づかなかったようだ
フリーザ様がいくら努力したところでまともな自己紹介ができるわけがないということに・・・

・・・しばらくして
家の前に老人の姿が現れた
阿笠博士である
ちょっとしたパーティに呼ばれていて留守だったのである

「哀く～ん！　今帰ったぞい！　変わったことはなかったかね？」

「おかえりなさい博士さん・・・　待っていましたよ」

はて？
博士は首をかしげた
哀君は風邪でもひいたのだろうか？
声がいつもと違う

いつもは林原めぐみのような声なのだが　今はまるで中尾隆聖だ

「どうした哀君・・・？　声が変じゃぞ・・・っ！！！」

「今日からこの家の主になったフリーザと言う者です
『フリーザ様』とお呼びなさ～い！」

その瞬間博士は腰が抜けてしまった

・・・Ｚｚ

哀は静かに寝息を立てている
先ほどまでの混乱は嘘のように・・・

「ぎゃあぁぁあんのわあぎゃはぁあああああ！！！」

・・・・・・・・・・・・！！！
凄まじい叫び声が哀を夢から現へと呼び戻した

「う～ん・・・何よ・・・？　ふわぁ・・・騒々しい・・・あっ！
！！」

まさか・・・
そのまさかであった

「ばばばばば・・・ば・・・化け物・・・」

「何を腰を抜かしているのです？　この私に会えたことを光栄に思
いなさい」

「な・・・なんじゃお前は！　なんでここに居る！？　哀君・・・
哀君はどこじゃ！？」

博士はまるで悪夢でも見ているような心地だった
あぁ・・・これは夢だ・・・　悪い夢だ・・・　そうに違いない
昨日食べ物がおいしかったから・・・　その代金だ

「なんでわしがこんな・・・　哀君すまない！
パーティでは哀君に内緒でカロリーの高い洋食を食べた！
もう二度としないから助けてくれ！」

「あらそう・・・　あれほどダメって言ったのに」

あぁ！　この声が聞きたかった！
聞こえてきたのは林原め・・・ではなく灰原哀の声だ

「お目覚めですねハイバラさん
この老人を何とかしてください・・・　うるさくて仕方ありません」

フリーザ様は指先からエネルギー波を放つ寸前だった
危ない・・・・
哀はすぐに博士を落ち着かせると　これまでの経緯を語った
そしてだいぶ落ち着いたのか博士が口を開いた

「分かった・・　・困っておる様じゃし・・・この家にいてもいいぞい」

博士はフリーザ様の宿泊を許可した
しかし　フリーザ様はその博士の言葉に眉をひそめた

「たいした口の聞き方ですね・・・　消し去りますよ?」

「どうぞ気の済むまでこの家に居てください・・・」

「よろしい・・・　それではさっそく肩を揉みなさ～い!」

「マジっすか!?」

なにはともあれ
哀と博士とフリーザ様の共同?生活は今まさに始まったばかりである

「ハイバラさん!博士さん!楽しくやりましょうね
あ～はっはっはっはっはっはっは!」

続く

おまけ:今日のスカウター

ピピピ・・・灰原哀　戦闘力2

フリーザ様から一言
所詮は女の子ですね・・・まあ彼女に戦闘は期待していません
自分の領分で力を発揮しこのフリーザ様に貢献しなさ～い!

2．老人とフリーザ様（後書き）

ってことで第2話でした
博士とフリーザ様の初遭遇・・・
博士はすごいですね
もし私が部屋に帰ってそこにフリーザ様がいたら
きっと心臓麻痺を起して死にます
皆さんはどうですか？

フリーザ様の部下になりますか？

それとも

人間やめますか？

3．強襲！少年探偵団（前編）

部屋を綺麗に掃除して
ちょっと高めのお茶とお菓子を用意して待っている時は誰も来ないのに
部屋が汚れていて
あまり見られたくないような物が散乱している時に限って人が訪ねて来る
嫌がらせだろうか・・・？

第3話　強襲！少年探偵団（前編）

「いや～良い物ですね・・・　こののんびりとした朝食の一時・・・」

フリーザ様が現れた日の翌朝・・・
フリーザ様は優雅な朝食タイムを過ごしていた
トースト・・・サラダ・・・目玉焼き・・・
フリーザ様はそれらをいたくお気に召した
そんなフリーザ様の横で　哀はあくびをしながらランドセルや教科書を持ち出し
バタバタと学校へ行く準備を整え始めた

「何ですか騒々しい・・・　私のエレガントな朝食を邪魔しないでください」

フリーザ様は眉間にしわを寄せながら言った

「それで？　一体何をしているのですか？」

「学校に行く準備よ・・・」

「ガッコー？」

聞きなれない単語だったので聞き返すと　哀はその詳細を教えてくれた
どうも地球の子供達が勉学に励む場所らしい・・・

「それで・・・　ハイバラさんはこのフリーザ様よりガッコーの方が大切だと・・・？」

「まあね・・・　勉強は簡単すぎて退屈だけど・・・　仲間もいるし・・・」

哀は探偵団やコナンの顔を思い浮かべながら言った
しかし　フリーザ様はその「仲間」と言う言葉に鋭く反応した

「ほぅ！　それではそのガッコーにはあなたの仲間がいるのですね？
調度良い・・・　私もそのガッコーへ行ってそいつらを部下にしてやりましょう」

「ダメよ」

まさかの即却下・・・
フリーザ様の表情は一瞬硬直すると　次の瞬間みるみる険しいものへと変わっていった

「このフリーザ様に対して『ＮＯ』と言うことがどう言うことか・・・

分かっていないようですねハイバラさ・・・ってちょっと!?」

哀はフリーザ様を無視してさっさと行ってしまった

フリーザ様の顔が怒りのあまり真っ赤になる

「おのれぇ！　消し去られたいようですね！」

「まぁまぁ・・・　子供は学校にいかねばならんのじゃ」

そこに博士がやって来た

博士は怒り狂うフリーザ様を何とかなだめる

「そうじゃ！　その格好で外出すると目立ってしまうじゃろう?

フリーザ様が外出できるように　わしが何か変装用アイテムを発明してやろう」

「ほぅ！　それは素晴しい！　さっそく取りかかるんですよ博士さん！」

フリーザ様の機嫌はすっかり直った・・・

・・・数時間後

「ねぇ哀ちゃん！　今日博士の家に行っても良いでしょ?」

「ぬえっ!?」

それは突然だった
哀は思わず変な声を上げながら質問の主・・・吉田歩美の顔を見た
歩美の後にはいつものように元太や光彦もいる

「な・・・なんで？」

「探偵バッジの充電もしてもらいてぇしよ」

「それに博士が『そろそろゲームの新作ができる』って言ってましたしね」

普段の哀なら「えぇ良いわよ」の一言で片付けるところだが
今日に限っては全身から変な汗を流していた
無理も無い・・・
家に帰ればフリーザ様がいるのだ

「今から・・・？」

「うん！」

フリーザ様を隠している暇は無い・・・
とりあえず　哀は適当なことを言って誤魔化すことにした

「ごめんなさい・・・　今日博士いないのよ」

「えぇ～・・・　そうなんだ」

「また今度ね」

何とか誤魔化せたようだ・・・

と思ったのも束の間
哀の背後にメガネをかけた少年が現れた

「博士どっか出かけたのか？」

コナンである
いつものように頼んでもいないのに余計な詮索をしてくる・・・
哀はイラッとしながらコナンの方を見た

「知り合いのパーティにお呼ばれしてるのよ・・・」

実際パーティは昨日だったが・・・
哀は手っ取り早い理由としてそれを持ち出した
しかし　それがいけなかった

「それはおかしいな・・・　そのパーティは昨日終わったはずだぜ？」

どうやら博士に聞いていたらしい
推理オタクのクソチビが！
心の中でそう思いながら哀は舌打ちをした

「今日もなのよ」

「目が泳いでるぞ・・・」

コナンの目は完全に犯人を追い詰めている時のそれに変わっている
本当に余計なことをしてくれる・・・
今度解毒剤と偽って下剤でも飲ませてやろう
哀は固く心に誓った

「何か怪しいな・・・　とりあえず博士がいなくても家に寄らせてもらうぜ？」

コナンには後々下剤を飲ませるとしても・・・
困ったことになってしまった
このままではフリーザ様が見つかってしまう
哀は何とかやり過ごす方法を必死で考えた・・・

続く

おまけ：今日のスカウター

ピピピ・・・阿笠博士　戦闘力５

フリーザ様から一言
地球の成人男性の平均的な戦闘力値ですね・・・　ラディッツに殺された農夫も５でした
やれやれ・・・　地球人は戦闘要員としては失格ですね・・・
せめてあの地球人ぐらいの者がいればいいんですが（クリリンのことだ）

3．強襲！少年探偵団（前編）（後書き）

次の話に続きます
この辺り超ハイペースで書いてたからなぁ・・・
修正前はめちゃくちゃ雑でひどい内容でした
あと後書きで荒川静香とディープインパクトの話題が・・・
そんなこともあったな・・・
行け行け僕らのインパクト！
とか書いてました
結果　凱旋門賞は失格・・・＾＾；
う～ん・・・

種牡馬としてがんばれ！

4．強襲！少年探偵団（後編）

「ほっほっほ・・・　楽しみです・・・　実に楽しみです！」

フリーザ様は博士の帰りを待っていた
博士は今　フリーザ様外出用変装アイテムを作るための材料を買いに行っている
博士が帰ってきてそれが完成すれば　フリーザ様は地球人に紛れて自由に行動できる

「早く帰ってくるのですよ博士さん！　アッハッハッハッハ！」

第４話　強襲！少年探偵団（後編）

哀は必死に頭を働かせていた
哀と探偵団は現在博士の家に向っている最中
家に帰ればフリーザ様がいる・・・
別にフリーザ様を見られて困ることもないが・・・　余計な騒ぎは避けたい
やはりフリーザ様の存在は知らせない方が良いだろうと哀は考えた

「ちょっと良いかしら？」

「何　哀ちゃん？」

哀は苦渋の末　口を開いた

「実は博士なんだけど・・・　ウィルス性の病気にかかってしまったの
でもあなた達に言うと看病したいとか言い出すでしょ？
だから『博士はいない』って言ったのよ・・・　うつるといけないでしょ？」

「そうだったの？」

「博士は大丈夫なんですか？」

「えぇ・・・　今お医者さんがしっかり見てくれてるから大丈夫よ
だから今日のところは帰ってくれないかしら？」

納得した探偵団・・・
しかしこの少年は違った

「おい灰原・・・　ひょっとして博士は結構ひどいのか？」

「へ？」

「だって・・・　心配かけまいと黙ってたくらいだろ？」

まったく・・・
この男は毎度毎度よくも重箱の隅をつつくように・・・
うざったく思いながら哀はコナンに耳打ちした

「別に医者に任せておけば治る程度のものよ・・・
あなたが変に騒ぐとみんなも心配するでしょ？　黙っててくれるかしら？」

「わ・・・分かったよ・・・　博士に『お大事に』って伝えといてくれよ」

「わしがどうかしたのか？」

その時　突然背後から声をかけられた
それはそれは・・・　哀が聞き慣れた声だった
哀の全身からどっと汗が溢れだす

「あれ～！？」

「だ・・・大丈夫なんですか！？」

「ん？　何がじゃ・・・？」

探偵団が目を丸くして声の主に駆け寄る
哀はゆっくり・・・　後を振り返って見た・・・
そこにはウィルス性の病気で寝ていることになっている男が立っていた

「な・・・なんだってぇぇぇーッ！？」

まずいことになった
せめて探偵団だけなら誤魔化せたかもしれないのに・・・
しかし　それは無理である
哀の隣には「名探偵」と呼ばれる男がいるのだから

ベロ・・・

コナンは哀の頬を伝う汗を舐めた

そして　舌の上でその味を確かめると静かに口を開いた

「灰原・・・　これは『ウソをついている味』だぜ?」

バレた・・・
しかし　バレたと言ってもまだ「哀がウソをついていた」と言うことだけ
哀は決心した・・・　こうなったら強引に誤魔化すしかない

「『博士は病気』だと・・・お前はそう言ったよな灰原?」

「・・・何のことか分からないわね」

そう言って哀は突然走り出した
こうなったら家に先回りしてフリーザ様を隠すしかない

「待て!　灰原!」

「哀ちゃん!?」

「に・・・逃げたぞ!」

すごいスピードで走り去った哀を　探偵団も追いかけて行く
結局そこには訳を知らない博士だけが取り残された

「哀君は何か悪いことでもしたのかのぅ・・・?」

・・・・・・

「フリーザ様！」

「おやハイバラさん・・・　何をそんなに慌てているのですか？」

リビングでくつろいでいたフリーザ様の元に哀が物凄い剣幕でやって来た
哀はフリーザ様をソファーから立たせると　背中をぐいぐいと押し始めた

「何なんですか！？　鬱陶しいですよ！？」

「良いから早く！　隠れて！」

「灰原ぁ！」

遅かった・・・
調度そこへ探偵団がやって来てしまった

「どういうつもりだ灰・・・」

しかし　その表情は一気に硬直した
リビングに見慣れない・・・どころではない物凄く奇抜な男が立っている

「な・・・何だ？　それ？」

「あ・・・あはは・・・　その・・・お人形よ！」

「誰が人形ですか！　殺しますよハイバラさん？」

哀の最後の悪あがきも　フリーザ様の一言で木っ端微塵にされてしまった
もう誤魔化せない・・・　哀は全ての事情を話そうとした
しかし　その時フリーザ様が探偵団の方に向き直った

「それにしても・・・　人の家にずかずかと上がってくるとは・・・
最近のガキはしつけがなってませんね・・・」

そう言ってフリーザ様は人差し指を立てた
物凄い殺気・・・
それに気付いたコナンは叫んだ

「伏せろ！」

探偵団が伏せる
すると・・・　後ろの壁が黒く焼け焦げてしまった
フリーザ様がエネルギー波を放ったのである

「てめぇ・・・！」

コナンは麻酔銃を構えると　照準をフリーザ様に合わせてボタンを押した
針は真っ直ぐフリーザ様めがけ飛んでいく・・・
しかし命中直前でフリーザ様の指に摘まれてしまった

「何だと！？」

「こんな玩具でこの私を倒せると思っているとは・・・　幼いですねぇ」

人間の動体視力ではない・・・
コナンはその一瞬で　目の前の男が人知を超えた存在であることを悟った

「さて・・・　どうやって処刑してあげましょうか・・・」

「フリーザ様！　ダメ！」

一段と強くなった殺気に中てられ　哀が堪らず叫んだ
しかしその時だった・・・

「ただいま～！」

「おぉ！　博士さんですね！　待っていましたよ！」

フリーザ様の待ちに待った博士が帰って来たのだ
どうやら材料はうまいこと揃ったらしい・・・
すると　それまでリビングに張り詰めていた殺気がフッと消え失せた

「フフン・・・運が良いですね・・・　今日の僕は機嫌が良いんだ！
だから命だけは取らないで上げましょう・・・　感謝しなさ～い！」

危ういところだったが・・・　探偵団とコナンは助かった
しかし当然のことながら　彼らはフリーザ様の部下にされてしまったと言う・・・

続く

おまけ：今日のスカウター

ピピピ・・・江戸川コナン　戦闘力８　ただし道具などを使った際は５０相当

フリーザ様から一言
運動神経は良さそうですね・・・　サッカーをやっていた？　そうですか・・・
戦闘力は８ですが　道具と頭を使って実際にはそれ以上の力が出せるようですね
貴重な戦闘要員として頑張ってもらいますよ・・・　ふっふっふ・・・

4．強襲！少年探偵団（後編）（後書き）

ってことで強襲！少年探偵団でした
修正しました・・・
いやぁ・・・　こんな話を書いていた時代が私にもありました
懐かしいなぁ・・・
この頃はまだやんちゃ坊主って感じかな？
小説書き初めて2・3日目のクソガキでした

でも今はパンク野郎です

何でパンクになったか？
それは・・・後々の後書きで明らかに・・・^^；

5．ビジュアル系

その晩・・・
博士は遅くまで発明に没頭していた
今度の発明はフリーザ様のために・・・
異性人のフリーザ様が地球人に溶け込んで生活できるようにすること
それが目的である

第5話　ビジュアル系

朝・・・
フリーザ様が起きてくると　哀が朝食をテーブルに並べているところだった
大きな欠伸をして眠そうに目をこするとフリーザ様は椅子に腰掛けた
そしてトーストにかじりついた時・・・・・フリーザ様は博士がいないことに気が付いた

「ハイバラさん　博士さんはどこですか?」

「さぁ・・・・・まだ寝てるんじゃないの?」

「何?　部下の分際でこのフリーザ様より後に起きてくるつもりですか?」

額に血管が浮き出るフリーザ様
どうやらお仕置きが必要らしい・・・
フリーザ様がそう思った時・・・・・調度そこへ博士がやって来た

「おはよう二人とも・・・・・・おぉそうじゃ！　変装用アイテムが完成したぞいフリーザ様！」

「本当ですか博士さん！？」

すると怒りに満ちていたフリーザ様の瞳の色が一瞬で変わった
ここへやって来て数日・・・
騒ぎになるからとずっと家に軟禁状態が続いていたが　ついに開放の時が来たのだ
「早く発明を見せろ」とフリーザ様が急かすと博士は笑いながらそれを持ってきた

「何よ・・・・・それ・・・」

哀はそれを見ると食事をしていた手を止めて唖然とした
博士が持ってきた物・・・
カラフルなツンツンヘアーのカツラ・・・・・・サイケデリックなデザインの黒い服とズボン・・・

「見ての通り変装グッズじゃ」

「変わったデザインですね・・・・・・ちょっと着てみましょう」

「着るの・・・・・・？」

フリーザ様がそれを着込むと・・・・・・そこには何とも奇抜なビジュアル系の男が現れた

「デーモン小〇みたいね・・・」

「無理に普通の人になりすますぐらいなら『変わり者』に・・・・・と言うコンセプトじゃ」

「それで？　発明というぐらいだから特殊機能とかは無いんですか？」

フリーザ様が聞くと　博士は「その質問を待っていた」といった表情で何かを取り出した
手に持たれているのは・・・・・予備の追跡メガネ
博士がそのスイッチを入れると　調度フリーザ様のいる辺りに印が点滅した

「そのカツラにはＧＰＳ機能が搭載されていてな
追跡メガネ以外にもＧＰＳが使えれば居場所を知ることが出来るのじゃ」

「迷子にならずに済むわね・・・」

「このフリーザ様を子供扱いするつもりですか？　殺しますよ？」

「まぁまぁ・・・・・他にも機能はあるぞ！　腰のボタンを押してみるんじゃ」

博士が言うのでフリーザ様は自分の腰の辺りを見てみた
ベルトの所に３つボタンがある・・・・・
フリーザ様は一番左のボタンを押した

「痛ッ！」

哀はフリーザ様の側から飛び退いた
突然何かがバチッときたのだ

「これが一つ目の機能・・・・・・静電気を発生させて敵を撃退するのじゃ！」

「気休めにもなりませんね・・・」

そして真ん中のボタン・・・

ピピピピピピピピピピ・・・

「防犯ブザーじゃ・・・・・・特殊な音波でより遠くまで聞こえる」

「フリーザ様に必要な物なの？」

哀が呆れながら溜息をつく中
フリーザ様は最後のボタンを押した

「おぉ！　服が光始めましたよ」

「服の中に仕込んだ糸型発光体が光っておるのじゃ
待ち合わせの目印にもなるし　いざと言う時の緊急信号にもなる」

「なるほど！　って・・・・・・これじゃあ余計に目立つじゃあないかぁ！」

フリーザ様は博士にノリツッコミを入れた
しかしツッコミとは言え物凄い威力
博士は壁まで吹っ飛ばされて気絶してしまった

「まったく・・・・・使えないじじいですね！」

「まぁ良いじゃない・・・・・とりあえず地球人には見えることだし散歩でもしてくれば？」

哀がそう言うので　怒りを鎮めるためにもフリーザ様は出かけることにした
始めは頭が怒りで一杯だったが
自由に歩くことができる喜びと目に映る地球の街並みによって次第にそれは消えていった

「私としたことが・・・・・テンションが上がってきましたよ！」

フリーザ様はだんだんと嬉しくなってそこら中を歩き回った
公園ではおじいさんが餌をあげている鳩を追い払ってやった
ドライブスルーに徒歩で侵入し　注文を聞いてくる店員を文字通りスルーして出てきた
喫茶店ポアロに立ち寄り　ウェイトレスの梓に「フリーザ様」と１００回言わせた末に
必要の無い領収書を「フリーザ様」名義で書かせた

「ほっほっほ・・・・・地球！　実に楽しい星じゃないですか」

充実した時間・・・
次はどこへ行こうか？
フリーザ様がそんなことを考えていた時だった

「きゃあああああああ！」

「うるせぇ騒ぐな！」

突然悲鳴と怒声が響いた
騒々しい・・・・・・
フリーザ様が鬱陶しそうに声のした方を見ると　そこには女性を襲う男がいた

「てめぇ女ぁ！　俺様のことを今『気持ち悪い』って思ったろ！」

「そんな・・・・・・誤解です！」

「うるせぇ！　舐めやがって・・・・・・思い知らせてやる！」

騒然とする街中・・・
皆女性を助けてやりたいが・・・
しかし　男の手には大きなナイフが握られている
誰も彼も躊躇してしまい助けに入ることが出来ない
しかしそんな中　一人だけ異色の男がいた・・・
フリーザ様だ
フリーザ様は皆が固唾を飲んで見守る中
ナイフ男の方に歩いていくと男の目の前で立ち止まった

「人が気持ち良く散歩を楽しんでいると言う時に何ですか？
分かりませんかね？　私は騒々しいのが　キライなんですよ」

「なんだぁ？　良い度胸じゃねぇかこの野郎！」

男はナイフを振りかぶりフリーザ様を斬りつけようとした
しかし次の瞬間・・・
男はフリーザ様が軽く放った拳で吹っ飛ばされると

駆けつけた警察のパトカーにフロントガラスを突き破って突っ込んだ

「フン・・・・・・馬鹿な奴・・・」

予想外の瞬殺劇・・・
襲われていた女性も街の人達も全員目が点になってしまった

・・・次の日
哀はソファーで新聞を読んでいた
ペラペラとページをめくっていく・・・・・・

「ブッ！！！」

その時　哀は口にしていたコーヒーをぶちまけた
ゲホゲホと咽つつも口を拭い　もう一度新聞に目をやる

『謎のビジュアル系　女性を救う！』

そう見出しがついた記事の横にはフリーザ様の写真が載っていた

「結局目立ってるじゃない！　しばらく外出禁止！」

フリーザ様はそれから3日ほど　再び家に閉じ込められた・・・

続く

おまけ：今日のスカウター

ピピピ・・・少年探偵団　光彦　戦闘力３　元太　戦闘力５　歩美
戦闘力２

フリーザ様から一言
ガキの遊びですね・・・
部下にしようと思ったのに・・・・・・期待はずれです
ハイバラさんにとっては癒しの要素が強いようですね

5．ビジュアル系（後書き）

ってことで第5話です。
大幅に修正してみました。
話の内容すら変わってます・・・

ちなみに修正前の後書きでは「改善する気は無い！」
とか偉そうなことをほざいていた私ですが
見事に修正することになりました＾＾；

いやぁ・・・
過去の自分をこうして振り返って見ると幼稚ですよね。
やっぱ人間成長が大事だわな。
フリハイを書いていく中で私も少し成長できた気がします。

ってことで次回は6話をお楽しみに。

6．違いの分る男

コーヒー・・・・・・
エチオピア原産のコーヒーの木からとれるコーヒー豆
そのコーヒー豆から抽出された漆黒の液体・・・・・・
人類とは非常に古くからの付き合いである
現在ではインスタントに缶　ペットボトルなどでも楽しめる
もはやお馴染みの飲み物である
そんなコーヒーの話・・・・・・

第６話　違いの分る男

その日　喫茶店ポアロは空いていた
店にいるのはマスターとウェイトレスの梓
そしてレポートをする大学生が一人と女子高生が二人だけである

「最近　新一君から連絡はあるの？」

「ん？　う～ん・・・・・・なんかまた事件が忙しいみたいで・・・・・」

店の隅のテーブル席で女子高生二人はそんな会話をしていた

「あら？　彼氏の話？」

余程暇なのか・・・・・・そこに梓も加わってきた
梓の問いかけに女子高生の一人は顔を真っ赤にして手の平を振った

「そんなんじゃないですよ～！」

「『彼氏』じゃなくて『旦那』よね？」

「もう！　園子！」

悪ふざけをする友達に向って　彼女が拳を振り上げたその時だった
カランカラン・・・・・と　ポアロの扉に備え付けられた鐘の音が響き渡った

「いらっしゃいませ～！」

梓は　そう元気良く言いながら来客の方に向き直った
すると　そこにいたのは奇抜な格好のビジュアル系・・・・・・

「ほっほっほ・・・・・また来てしまいましたよ」

「あっ！　フリーザ様！」

フリーザ様だった・・・・・・
梓と二言三言交わすと　フリーザ様は店内をキョロキョロ見回し
そしてカウンター席でレポートをしているその男を見つけると　隣の席に腰掛けた

「やぁダイガクセイ！　テレポートとやらは順調ですか？」

「レポートです・・・・・・フリーザ様のおかげでそれはもう順調ですよ」

「ふむ！　そうでしょう　そうでしょう！」

ダイガクセイはポアロの常連で　フリーザ様がポアロで顔を良く合わせる男だった
フリーザ様は彼に会う度にレポートについて助言をしているのだが
実際　フリーザ様のアドバイスが役に立ったことは一度もなかった
しかし　ダイガクセイは敢えてそう答える・・・・・・
事なかれ主義なのだ
将来は公務員なのだ・・・・・・

「ちょっと蘭・・・・・・あの人この間新聞に出てたビジュアル系よ！」

「本当だ・・・・・・」

女子高生二人・・・・・・蘭と園子もフリーザ様の話を始めた

「おや？　この私をご存知なんですか？」

それを聞きつけ　フリーザ様はダイガクセイの隣を立つと
今度は蘭と園子が座るテーブル席に移動した

「新聞で見たわ！　女性を襲う暴漢をパンチ一発で倒したって！」

「あぁ・・・・・アレですか・・・・・・
まあ　おかげでこっちは三日間外出できなくなりましたけどね」

『目立つから外出禁止！』

そう哀に言われてからの三日間をフリーザ様は思い出した

そして　その額の血管がピクリと動いた時
調度　梓がコーヒーを持ってやって来た

「そう言う訳で　今日は久々のポアロなんですよ」

「へぇ～　ここには良く来るんですか？」

「えぇ・・・・・このコーヒーと言う飲み物が気に入ってしまいましてね」

蘭の問いかけにそう答えると　フリーザ様はコーヒーを口に運んだ
口の中に香ばしい味が広がる・・・・・・

「でも　うちのはそんなに特別なコーヒーじゃないですよ？」

フリーザ様のあまりに幸せそうな顔を見て　梓は笑いながらそう言った

「でも家でハイバラさんが淹れてくれるコーヒーより美味しいですよ？」

「そうなんですか？」

何がいけないというのか？
フリーザ様と梓は「う～ん」と考え込んだ
するとその時　二人の沈黙を破るように蘭が口を開いた

「ひょっとしてインスタントなんじゃないですか？」

「あぁ！　うちのはレギュラーだしね」

「インスタント・・・・・・？　レギュラー・・・・・・・？」

聞きなれない言葉にフリーザ様は首を傾げた
どうやら一口にコーヒーと言っても色々あるらしい・・・・・・
困惑気味のフリーザ様を見ると　梓は説明を始めた

「『インスタント』って言うのはスーパーとかに売ってる　お湯に溶かして飲むやつです」

「あぁ！　それですね　うちで飲んでるのは」

「それで『レギュラー』って言うのは・・・・・・こういうのを使って淹れるやつです」

そう言って　梓はフリーザ様の前にそれを持ってきた
年季の入ったサイフォン式のコーヒーメイカーである・・・・・・

「なるほど・・・・・・美味さの秘密はこれにある訳ですね！」

フリーザ様はそれを見て目を輝かせると
梓にコーヒー代を突き付けて　飛び出すようにポアロを出ていった

・・・・・・
リビングのソファーの上に寝転がって　哀はファッション誌を読んでいた
ゆったりとした時間・・・・・・
しかし　突然ドタバタと響き渡る足音によってそれは打ち壊された

「ハイバラさん！」

「おかえりなさい・・・・・・もっと静かに入って来れないの？」

そこに現れたのはポアロから帰ってきたフリーザ様だった
フリーザ様は怪訝そうな顔で見てくる哀を発見すると　息を整えてから口を開いた

「コーヒーメイカー・・・・・・」

「へ？」

「コーヒーメイカーを手に入れるんですよ！」

「いきなり何よ？」

帰ってきて一番に「コーヒーメイカー」
一体外で何を吹き込まれてきたのか・・・・・・
哀がそんなことを考えていると　奥の部屋から騒ぎを聞きつけた博士が出てきた

「はて？　コーヒーメイカーじゃったら　昔ビンゴの景品で当てたのがあった気がするぞい」

「本当ですか博士さん！？　今すぐ持ってくるんですよ！」

そう言ってフリーザ様は　嫌がる哀と博士に無理矢理物置の発掘をさせた
そして　凄まじい埃と格闘する二人を腕を組んで仁王立ちで監督する・・・・・・

そんなこんなで数分後
誰からも忘れられた　少し寂しげなダンボール箱の中からそれは発見された

「ほっほっほっ！　素晴しい！　さっそくコーヒーを淹れてみましょう！
ハイバラさんはコーヒー豆を買ってきなさい！　淹れるのは私がやります
さぁ・・・・・楽しいコーヒータイムの始まりですよお二人さん！」

その後・・・・・
コーヒーメイカーは三人の生活の一部に溶け込んでいった
忙しい朝の一時に・・・・・
ゆったりとした昼過ぎに・・・・・
皆が寝静まった夜遅くに・・・・・
いつでも　それはどこかホッとできる味を三人に与えてくれた

そして数日後・・・・・
フリーザ様と哀はポアロへ向っていた
ポアロのコーヒーを飲むために・・・・・

「自分で淹れるのも良いですけど　やっぱりポアロのコーヒーも良いですよね」

「そうね・・・・・喫茶店で飲むとまた一味違うものね」

そんな話をしながら　二人はポアロの扉を開いた

「ほっほっほっ！　パーフェクトなコーヒー通のフリーザ様ですよ～！」

そう言ってフリーザ様が店内に入ると　梓がいつものように出迎えてくれた

「やぁ！　君もコーヒーが好きなのかい？」

そして　見慣れぬ客も出迎えてくれた・・・・・
カウンター席に座って梓と話し込んでいたその男は　フリーザ様を自分の隣の席に招いた

「いやぁ　やっぱりコーヒーはモカだよね！　私なんか一日に五杯は飲んでいるよ！
なんと言ってもこの深い味わい・・・・・・もう病みつきだよ！
君もそう思うだろ？　なんと言ってもこの・・・・・・」

男はコーヒーについて熱く・・・・・熱くフリーザ様に語った
それこそフリーザ様に出されたコーヒーが冷めてしまうまで・・・・・
あまりにマニアックな話にフリーザ様は適当に相槌を打つのがやっとだった

「・・・・・ってことでやっぱりモカは・・・・・・って　もうこんな時間か
モカの話をするといつもこれだ！　ハッハッハッ！」

一時間後・・・・・男はそう言って席を立つと　会計を済ませて店を出ていった
怒りに震えるフリーザ様を残して・・・・・

「ああ言うのを本当の『コーヒー通』って言うのよね・・・・・・」

哀はそう言ってクスッと笑った
フリーザ様のプライドは丸潰れである

一週間後・・・・・
新聞の隅に小さな記事が載った
行方不明だった男性が栃木の山中を彷徨っているところを警察に保護されたというものだ
男性はかなり錯乱しており
「モカはもういらない・・・・・・モカはもういらない・・・・・・」としきりに呟いていたらしい
この件にフリーザ様が関与していたかどうかは・・・・・・不明である・・・・・・

続く

おまけ：今日のスカウター

ピピピ・・・・・・榎本梓　戦闘力3

さすがに女性ですね
戦闘力はこんなものですか
しかし彼女は雰囲気が良いですね
ポアロに行った時はいつも笑顔で・・・・・・
え？　作者の初恋の人に似てるですって？

あぁそう・・・・・・・

6．違いの分る男（後書き）

ってことで6話でした。
修正しました。
修正前の後書きでは「少し真面目に書いた」とか書いてありました。
すげぇ・・・・・・
これを書いていた頃は、これが真面目だったのか・・・・・・
過去の自分は限りなくアホな気がして仕方ありません。
でも、そんなアホだった頃に戻りたいような気もする今日この頃です・・・・・・
性的な意味で・・・・・・

あ・・・・・・今もアホだ＾＾；

7．サプライズ

人は誰しも予想を覆されると驚く
例えば・・・
有馬記念でディープインパクトに賭けたのに
ハーツクライが来た時の競馬ファン・・・
ぜったいＫＯされるだろう！と思っていたガオグライが
逆にマイティ・モーをＫＯした時のＫ－１ファン・・・
彼らは一様に驚きを表現してみせる
「なんてこった！」
「ありえない！」
そしてそんなことを言いながらも
人はどこかでそんな驚き体験を求めているのである
そう・・・ここにもひとり・・・

第７話　サプライズ

今日はフリーザ邸（阿笠邸）に少年探偵団が集まり会議をしている
議題は・・・「サプライズ」である

「煮詰まってるわね・・・なかなか出ないものね」

「大体何で俺がそんなもん考えなきゃいけないんだよ・・・」

コナンは先ほどからアイデアではなく文句ばかり出している
今日発売された新しい推理小説を早く読みたいのだ
それなのに哀に呼び出しを食らってイラついているのである

「あら・・・貴方もフリーザ様の部下ならまじめに考えたら？」

「俺がいつあいつの部下になったんだよ・・・」

「・・・とか言いながらもちゃんと来てるじゃない・・・忠義なことね」

さっきからこんな調子で全く良い案が出ない
そもそも何でこんなことを考えているかと言うと
話は1ヶ月ほど前にさかのぼる・・・

1ヶ月前・・・

「・・・オオグーロ・・・ヤナギサーワ・・・」

・・・・・・・・・・・・・

「・・・マキ！」

「なんと！そこでマキですか！これは驚きですねぇ！」

フリーザ様がテレビの前で驚きの声を上げた
ワールドカップのメンバー発表の会見の模様が放送されている・・・
フリーザ様は世間と同じく久保だと思っていたようだ

「やってくれましたね・・・これには少々驚きましたよ・・・」

哀はそんなフリーザ様を呆れた目で見つめている

そもそもフリーザ様はいつから地球のサッカーを見ていたのだろうか？
疑問は残るがフリーザ様はえらく興奮しているようだ
・・・今頃あの探偵さんも・・・
哀はふと自分と同じ境遇のコナンのことを考えた・・・が

「サプライズはいいですね！このワクワク感！わかりますかハイバラさん？」

「えぇ・・・少しはね・・・」

哀は直感で悟った・・・何か企んでいる、と

「もっとサプライズを味わいたいですね・・・そこでハイバラさん！私が忘れた頃に何かサプライズを用意してください
もし私が思い出すまでに用意できなければ・・・わかっていますね？」

時は現在に戻り・・・
ワールドカップも中盤にさしかかっていた
哀はフリーザ様にサプライズを用意しようと言うのだ

「うな重が降ってくるってのはどうだ？」

元太が案を出したが哀は「はいはい」と軽く無視して思考をめぐらせる
コナンはかなりイライラしている・・・周りからどす黒いオーラが出ていた
それに気づいたのか光彦はコナンにチョコレートを勧めた

コナンはチョコレートを受け取るとそれを口に入れ
舌の上で転がしながら言った

「やってらんねーよ・・・なんであいつのためにこんなこと・・・
いたずらでも仕掛けんなら話は・・・！」

コナンは何か思いついたようである
一人いやらしく笑っている

「あら・・・何か思いついたんなら話して欲しいんですけど・・・」

哀がそう言うと
待ってましたとばかりにコナンが話し始めた
コナンがその考えを話すと・・・
彼らは静かに行動を開始した・・・

しばらくして・・・
フリーザ様はお気に入りのコーヒーメイカーでコーヒーを淹れていた
鼻歌交じりでとても楽しそうである
コーヒーのできるところを楽しもうとフリーザ様がコーヒーメイカーに近付いた
その時！

ボン！！！

・・・・・コーヒーメイカーが爆発した
辺りはススと無残に飛び散ったコーヒー・・・
そして唖然とするフリーザ様
そこへ少年探偵団が顔を出した

「ビックリした？」

「俺が考えたんだぜ！なかなかのサプライズだっただろ」

悪戯な笑顔でフリーザ様にそう言う少年探偵団
するとフリーザ様は笑顔で口を開いた

「えぇ・・・とってもビックリしました・・・サプライズを用意してくれたんですか？
とっても・・・とっても驚きましたよ・・・」

が・・・ここでフリーザ様の顔色が変わった

「それにしても・・・後ちょっとでコーヒーができると言うところでコーヒーメイカーが吹き飛んでしまうとは・・・
コーヒーメイカーさんには残念だったでしょうが
私にはもっとでしょうか・・・
あのサル共に続いて2組目ですよ・・・
私をここまでコケにしてくれたお馬鹿さんたちは・・・」

コナン、哀、そして他の3人もそれに気が付いた・・・
フリーザ様のお顔が怒りで震えていることに

「ゆ・・・許さん・・・・・・絶対に許さんぞ虫けら共！
じわじわとなぶり殺してくれる！
一人たりとも逃がさんぞ覚悟しろぁ！」

・・・1時間後

キッチンには新しいコーヒーメイカーがあった
フリーザ様の怒りを静めるために急遽購入された物である
フリーザ様は早速コーヒーを淹れているようである

「危なかったですね・・・危うくコーヒーメイカーと運命を共にするところでした」

光彦は安堵のため息を漏らした
少年探偵団は無事のようである
主謀者のコナンを除いて・・・

「人の物を勝手に壊すのは良くないね・・・」

子供達はこうしてまたひとつ大人になったようである
皆さんも周りの人を驚かす際は是非気をつけて欲しい

翌日・・・ポアロにて

「へぇ～大変でしたね・・・」

「ふん！・・・まったくこれだから子供は嫌いです」

フリーザ様は梓に昨日の愚痴をこぼしているようだ
隣では大学生がレポートを作りながら「ははっ」と笑っていた
最近は大学生もフリーザ様になじんできたようである

「さ～てと・・・レポート完成！お勘定お願いしま～す」

「おやダイガクセイ・・・お帰りですか?それではごきげんよう・・・」

フリーザ様と挨拶を交わし
大学生が店を出ようとしたとき・・・

バン!カランカラン!

店のドアが勢い良く開けられると
そこには覆面を被り、左手には大きなカバンを・・・
そして右手に拳銃を持った男が立っていた

「き・・・きゃあああああああああああ!!!」

店内に悲鳴が響き渡る
なるほど・・・サプライズですか・・・
フリーザ様は静かに笑っていた・・・

続く

おまけ:今日のスカウター

ピピピ・・・ダイガクセイ　戦闘力6

フリーザ様から一言
戦闘力は低いですがテレポートとか言う書類を作る能力に長けてい

ます
それと地球における私の数少ない友人のひとりでしょう
私と同じくポアロの常連です

7．サプライズ（後書き）

サプライズですか・・・
単調な毎日を送っている私としては
ひとつやふたつ欲しいものですね
ところで話は次回に続きます
次回は遂にあの男が登場！
・・・誰にしよう＾＾；

8．理由（前編）

皆さんは大きなことをしたことがあるでしょうか？
人生において何度かしたことがあるかもしれません
そういった大きなことをする時
人は必ず理由と言うものを持ちます
理由はその人の行いを正当化し
その人を後ろから力強く押してくれます
さてさて
前回ポアロに乗り込んできた覆面男
彼の理由は何なんでしょうか？

第8話　理由（前編）

「きゃあああああああああ！！！」

「ご・・・強盗だ！」

突如店内に押し入ってきた拳銃片手の覆面男に
店内は大パニックである・・・

「うるせぇ！黙りやがれ！死にてぇのか！？」

とりあえず客を黙らせる覆面
客一人一人にその右手に持つ拳銃の銃口を見せ
あっという間に客を支配した
マスターは奥でホールドアップして困った顔をしている

梓はただ怯えている
大学生は腰を抜かして床にへたばっている
フリーザ様は・・・

「ふっふっふ・・・これは良い余興が始まりましたね」

お楽しみのご様子である

「いいか！俺は追われている！だからこの店に少しの間隠れさせてもらう！
もし刑事が来ても何も言うな！知らん顔をしろ！俺の命令に一人でも逆らってみろ・・・
この場で全員ぶち殺すぞ！！！」

拳銃を振りまわしながら凄みをきかせる覆面
客に逆らう意思がないことを確認するとカウンター内に入り身を潜めた
そしてしばらくすると刑事らしき男が入ってきた

「すみません！こういうものですが・・・
大きなバッグを抱えた男が来ませんでしたか？」

刑事は梓に尋ねた
しかし梓は後ろから銃を突き付けられていたので
本当のことを言うわけにはいかなかった

「・・・いえ、そんな人は来ていません」

「そうですか・・・では見かけたらご一報ください
くそっ！どこへ行ったんだ！」

刑事は店から出て行った
すると頃合を見はからって覆面が出てきた

「そうそうそれで良いんだよ・・・それじゃあ俺は逃げさせてもらうかな
だが・・・立ち寄ったのも何かの縁だ
こん中から人質を選んでやる！」

そう言うと覆面は客を品定めするように見始めた
そして選ばれたのは・・・

「店員の女！お前と・・・そこのビジュアル系！」

梓とフリーザ様である
フリーザ様は実に楽しそうな笑顔を浮かべていたが
覆面は気が触れた程度にしか思わなかったようだ

「おいそこの奴！その車のキーをよこせ！脳みそぶちまけるぞ！」

こうして覆面は梓とフリーザ様を人質に
客から奪った車で逃走を開始した
運が良かったのか検問などにも引っかからず
３人は気が付くとだいぶ遠くまで来ていた

「結構遠くまで来ちゃったな・・・一体何が目的なんですか？」

梓が尋ねた

「そうですね・・・そろそろ教えてほしいですね

いい加減ドライブは飽きてしまいましたよ」

フリーザ様はいささか退屈そうである

「そのうち分る・・・」

覆面はそれだけ言うとまた黙って運転に集中し始めた

一方そのころ警視庁では必死の捜査が続いていた

「と言うことは・・・ポアロに潜伏した奴は
客から車を奪い・・・店員と客を人質に・・・
いや正しくは誘拐して逃走したと言うわけか・・・」

その後ポアロから通報があったようである

「警部！逃走した車と同様の物が群馬で目撃されました！」

「良し！群馬県警に協力を要請しろ！
絶対にあの連続強盗誘拐犯を逃がすな！」

あの覆面男は最近都内で暴れ回っていた強盗犯で
今日も銀行を襲ったらしい
そして奇妙なのは必ず逃走中に何人か誘拐して行くことである
誘拐された人々は今だ発見されていない

ということで群馬県警に要請がかかったのだが・・・

「あ～あ・・・今日は本当は非番の日だから

久しぶりに家で一人人生ゲームしようと思ってたのに」

そう・・・原作切ってのダメ刑事山村であった
現在は警視庁の要請で検問を張っている最中だ
また一台検問にかかったようである
どうやら黄色いビートルのようだ

「あれ？貴方はいつぞやの・・・それにコナン君も・・・」

山村は車の中の人間を見て驚いた
そこに乗っていたのは博士、哀、コナン、そして少年探偵団であった
博士の群馬の知り合いに会うついでにドライブに来たらしい

「何かあったの？山村刑事？」

検問と聞いたら黙っていない
コナンが山村に尋ねた

「実は今話題の連続強盗誘拐犯がこの辺りをうろついてるらしいんだよ
なんでも人質も一緒らしいよ・・・２０代の女性とビジュアル系の小柄な男性らしいんだけど・・・」

その言葉に哀が反応した
それってもしかして・・・フリーザ様？

その頃フリーザ様達は同じ群馬の山奥にいた
車を降りしばらく山道を歩くと開けた丘に出た
そこは色とりどりの季節の花が咲き乱れる場所だった

良く見ると何人もの人がせっせと花を植えたり
手入れをしたりしている

「すごい・・・」

「ほう！これはこれは・・・」

あっけにとられる梓とフリーザ様
すると覆面は言った

「今日からここがお前らの住所だ！
ようこそ・・・フラワーキングダムへ！」

果たしてフラワーキングダムとは何か？
覆面の目的とは？
そしてフリーザ様と梓の運命は？
後編に続く！

続く

おまけ：今日のスカウター

ピピピ・・・山村刑事　戦闘力３

フリーザ様
群馬県警のダメ刑事と聞きましたが・・・この戦闘力値は驚きです
困難で刑事が務まるとは・・・しかし「水戸黄門にうっかり八兵衛」
というように

こんなキャラも必要なのかもしれませんね

8．理由（前編）（後書き）

なんかギャグがないですね＾＾；
いつものフリハイじゃない・・・
入れようと思ったんですけど
入る余地がなかったです
ちなみに前回言ったあの男は山村刑事でした
がっかり？
ってことで後編に続きます

9．理由（後編）

前回のあらすじ
いつものように喫茶ポアロで談笑していたフリーザ様
しかしそこに覆面を被った連続強盗誘拐犯がやってきた
覆面男は警察の検問をかいくぐり
フリーザ様と梓を謎の花畑
「フラワーキングダム」につれてきたのだが・・・

第9話　理由（後編）

「じゃあ人質になっているのはフリーザ様かも知れねぇのかよ?」
「小柄なビジュアル系・・・私にはあの人しか思い浮かばないけど」
山村刑事に話を聞いた哀たち
人質がフリーザ様ではないかと疑惑を抱いていた
「可能性はあるわ・・・今日出かけてたし」
哀たちはコナンの好奇心も手伝い
その犯人の追跡を開始することにした
「とりあえずその辺で聞いてみよう・・・」
コナンの提案で少年探偵団と博士は聞き込みを始めるため
それぞれ分れて町の中に散って行った

一方フリーザ様たちは

「これで良し・・・と」

覆面に何やら怪しげな装置をつけられていた

「なんですか？これは・・・」

「こいつは爆弾だ・・・小型だがてめぇらぐらい簡単に殺せる
もし俺の命令に逆らったら・・・ボン！！！っとバラバラになるってわけよ」

爆弾をつけられたフリーザ様と梓は再び花畑に連れてこられた
良く見ると他の作業している人たちも皆爆弾をつけられている
表情も青白くうつろである
みな誘拐されてきて働かされているのだ

「お前らにはこれから苗を植えてもらう！
これが担当するエリアのマップだ！品種を間違えるなよ？
いい加減な仕事をしたらペナルティもあるからな！」

「お花を植えるのですか・・・楽しそうですね」

怯える梓を尻目に一人楽しそうなフリーザ様であった

一方町では少年探偵団の聞き込みが続いていた
が・・・目撃情報は皆無だった・・・

それもそのはず、犯人は地元の者でもあまり知らない裏道を使っていたのだから

「灰原・・・どうだった？」

「ダメね・・・そっちは？」

「こっちもダメだった・・・くそ！どこへ行ったんだ！」

途方にくれる二人は歩いているうちに花市場へやってきていた
花か・・・こんな状況じゃなければ買って行きたいところね・・・
哀がそんなことを思っていると市場の人が出てきた

「それにしても最近は本当に繁盛してるよな」

「そうだな・・・あの客が札束出して苗をたくさん買って行ってくれるからな」

その言葉にコナンが反応した

「そのお客さんのこと詳しく教えて！」

・・・一方フラワーキングダムではフリーザ様と梓がせっせと花を植えていた

「梓さん！そこはその花ではなくこっちのバラですよ！」

「あ！本当だ！また間違えちゃった・・・ってまじめにやってどうするんですかフリーザ様！」

「いいじゃないですか・・・楽しくて」

こんな調子でフリーザ様が張りきって作業しているのでノルマはほぼ8割がた終了していた

「おぉ！仕事が早いじゃないか！やるな新人！」

覆面が様子を見に来た

梓はキッとにらみつけるがフリーザ様はにこやかである

「もうすぐ終わってしまいます・・・もっと植えるところはありませんか？」

「やる気がある様で結構だな・・・それじゃあ・・・」

と覆面が新しいノルマを渡そうとしたその時だった！

「そこまでだ！連続強盗誘拐殺人犯！」

山村刑事率いる群馬県警と少年探偵団、それに博士であった

あの後コナンは花市場の人から花を大量に買う客が

群馬の山奥に花園を作っていると聞き

犯人はその花園の持ち主と推理したのだ

「でも本当にその人とはかぎらんのじゃろ？」

「じゃあこれはどうやって説明する？」

コナンは博士と哀に追跡メガネを見せた

お忘れの方もいるかもしれないが
フリーザ様のツンツンヘアーからは電波が発信されていて
コナンの追跡メガネで探知できるのだ

「もう言い逃れはできないですよ！連続強盗誘拐殺人犯さん
いや・・・華槻大学教授の花田さん？」

「！！・・・くそ！なんでばれた！？
それに俺は殺人はやってないぞ！いい加減な刑事め」

覆面は覆面をとって見せた
中年の・・・まあなんとも微妙なお顔の男だった

「これはこれは・・・花を植えるより楽しそうなことが始まりましたね」

「呑気なことを言ってる場合じゃないでしょ・・・」

フリーザ様を発見した哀が近寄ってきた
花田は警察に取り囲まれている

「何で・・・こんなことをしたんですか？」

たまらず梓が聞いた

「ふん良いだろう・・・教えてやる！
おれの悲しく・・・そして切ない過去とともにな！」

花田は静かに語り始めた

あれは・・・俺が小学校3年生の時だった・・・
俺には美穂ちゃんと言う好きな女の子がいたんだ
彼女はかわいらしくて・・・まるで天使だった
ある日の放課後・・・俺は美穂ちゃんに告白したんだ

「み・・・美穂ちゃん!ぼ・・・ぼぼ・・・ぼく美穂ちゃんのこと
好きなんだ!」

精一杯の勇気を振り絞って言ったんだ・・・なのに

「えぇぇ～!花田君自分の顔見たこと無いの!
気持ち悪い!もう近寄らないでよ!」

彼女は予想以上に高飛車な女だったんだ・・・俺は泣いて帰って
帰り道で転んだ・・・その時だった!
転んだ俺の目の前に咲いていたんだ・・・一輪の花が・・・
まるで俺を慰めているかのように

「その時俺は気づいたんだ!おれの本当に愛するべきは花だと!
あんな女なんかより・・・人間なんかより・・・完璧な恋人なんだ!
だからこのフラワーキングダムを作ったんだよ!
そしてお前ら人間はこの王国の奴隷だ!」

「そんな理由でこれだけの人を・・・」

一同呆れながらも憎しみが込み上げた

「お前らには分らんさ!この花の香り!プロポーション!
人間の女など取るに足らん!あぁ・・・すばらしすぎる!
花たん萌え～はぁはぁ・・・」

もはや聞くに堪えない・・・山村刑事は花田を連行しようとしたが

「近寄るな!忘れたか?ここの奴らには爆弾をつけてある
それ以上寄るとこのリモコンで全員吹っ飛ばすぞ!」

花田はリモコンを握り締めて言った
人質たちはもちろんのこと警官も困惑している
長い沈黙・・・しかしそれは突然破られた

ボン!

突然人質たちの爆弾が一気に解体されてしまった
警官も人質も少年探偵団も花田も訳が分らなかったが

「ふぅ・・・花植えは飽きてしまいました・・・コーヒーが飲みたいですね」

そうフリーザ様であった・・・サイコキネシスで解体したのだ

「博士さん!ハイバラさん!帰りますよ!
そうだ・・・この花園・・・もう存分に堪能したので消してあげましょう」

そう言うとフリーザ様はエネルギー波で辺りを破壊し始めた
みるみる消し飛ばされて行く花たち

「やはり綺麗なものは散るときが一番綺麗ですね
あ~はっはっはっはっはっはっはっは!!!」

「やめろぉ～！！！」

花田がフリーザ様に飛びかかったが・・・
コナンの麻酔銃の針が花田を捉えていた

その後花田は警察に連行され事件は一件落着
人質たちも無事解放された
そしてフリーザ様と哀達は帰路についた

「最初から犯人をぶっ飛ばしていれば良かったじゃない」

「余興を楽しみたかったんですよ・・・
そもそも貴方達がろくなサプライズを用意しないからですよ！」

帰りの車はフリーザ様が加わった分狭かったが賑やかだった

さてさて
人は大きいことをするとき理由があります
理由はその人を正当化し
後ろから力強く押してくれます
でも正当化されるのは本人だけです
皆様も周りを省みずに突っ走りすぎるのはやめましょう・・・

続く

おまけ：今日のスカウター

ピピピ・・・花田教授（下の名前不明）　戦闘力１８

フリーザ様から一言

地球人にしては戦闘力が高いですね・・・合気道やってるんですか？

そうですか・・・全く触れられてないんで気が付きませんでした

それにしても楽しませてもらいました・・・良い休日になりましたよ

え？毎日休日じゃないかって？・・・消し去りますよ？

9．理由（後編）（後書き）

理由が完結しました
いやいや
変わり者の犯人に使用とは思いましたが
こんな変態になるとは・・・
書いていた自分が驚きました
っていうか目立ちすぎだよ犯人！
哀はおろかフリーザ様すら陰が薄い話でした

１０．思い出のフグトルネード

空手・・・
かつて琉球王国・・・今の沖縄県から日本に伝わり
いまや全世界に競技者が分布する格闘技である
その流派は様々で
極真や正道会館などが有名である
最近ではＫ－１などでも空手家が出場するので
憧れを持って始める人も多い
そして米花町にも空手家がいた・・・

第１０話　思い出のフグトルネード

「はぁ！！！つぁ！！！きえぇ～！！！」

朝から元気なフリーザ様
今日は早朝から何やら正拳突きの素振りをしているようである

「うるさいわね！何やってるのよ！こんな朝っぱらから！」

珍しく哀が怒鳴り込んできた

「おはようございますハイバラさん！
なにね・・・ちょっと空手を始めてみたんですよ」

フリーザ様が空手を？
哀は寝起きのためしばらく沈黙し

そして頭が回転を始めたのを確認してから聞いた

「何で？・・・あなたもともと強いんだからいいじゃない」

最もである
空手など始めなくともフリーザ様なら
サイヤ人の王子をコテンパンにできるし
戦闘型ナメック星人を片手で倒すことも可能なのだ

「確かに・・・しかし私たちの戦い方はエネルギーを力任せにぶつけ合うだけ
そんな戦い方は宇宙の帝王としてはふさわしくありません・・・
そこで技を身に付けより完璧な戦いをしようと思っているのです」

「ふ～ん・・・」

「・・・そしてあのサル野郎を！！！」

どうやらそれが一番の目的らしい・・・
忘れていたようで忘れていない
さすがはフリーザ様である

「はぁ！！！はぁ！！！つあぁ！！！」

「分ったからもう少し静かにやってくれない？」

哀はその後
フリーザ様の気合の雄叫びで無理やり覚まされた目をこすりながら
朝食を済ませると学校へと向かった
フリーザ様はその後も空手の練習を続けた

「ほぅ・・・空手か・・・」

博士がやってきたようだ

「そうなんですよ・・・それにしてもこの本のここの説明・・・
意味不明ですね・・・だれかお手本を見せてくれる方はいないのでしょうか?」

フリーザ様は空手の本とにらめっこしながら言った

「ふ~む・・・わしらの周辺で空手家と言ったら・・・
やっぱり蘭くんかの~」

フリーザ様は少し気になったのか
その「ラン」なる人物について博士に聞いてみた
どうも女子高生でコナンの居候先の人間らしい

「なるほど・・・コナンさんの知り合いですか
わかりました!コナンさんに案内させるとしましょう」

フリーザ様はそう言うと
物凄い速度でビジュアル系の変装をまとい
嵐のような勢いで帝丹小学校へと向って行った

「おい!蘭君ならいまごろ高校に・・・行ってしまったか」

そこには博士と空手の本だけが残された

帝丹小学校1年B組

眠い・・・
哀はまだ目をこすっていた
夢の世界の誘惑が哀を魅了し始める
・・・まぁどうせ聞いても意味ない授業だし
良いわよね・・・
Ｚｚ・・・
おやすみなさい哀ちゃん・・・
哀が寝てしまったようなのでこの話はここまでに

バン！！！

そうは行かないようですね・・・
フリーザ様帝丹小学校初上陸である
担任の小林先生は非常に混乱している

「あ・・・あの・・・どちら様？」

「失礼・・・コナン君いますか？」

突然のフリーザ様の来訪に哀も目が覚めてしまった
なんでこんな所に・・・騒ぎになるじゃない！
そんな哀の気持ちが分るはずもなく
フリーザ様は話を進める

「ったく・・・なんだよ！フリーザ！」

「様・・・つけなさいといつも言ってるでしょう？
生意気な部下ですね・・・消し去りますよ？」

「で・・・なんなんだよ?」

次の瞬間フリーザ様はコナンの手を掴むと
猛スピードで学校を出て行ってしまった

「コナン君!?大変連れて行かれちゃったわ!」

目の前での生徒誘拐に困惑する小林
しかし少年探偵団は

「今のフリーザだろ?問題ねーよ先生!」

「そうですね・・・明日には戻ってきますよ・・・」

しばらくして・・・帝丹高校前にフリーザ様とコナンの姿があった
フリーザ様は警備員を蹴散らして中に入ると事務を脅迫
無理やり校舎に侵入すると蘭のいる教室まで一直線
中では英語の授業なのか外人教師の片言の日本語が聞こえてくる

ガラ!

ドアが開く・・・そしてそこに現れるビジュアル系・・・とメガネ
少年

「コナン君!?・・・と、この間のビジュアル系の人」

「あはは・・・こんにちは蘭姉ちゃん」

蘭姉ちゃんと言う単語にフリーザ様がピクリと反応した

「ほう！すると貴方が噂のランさんだったのですか
それでは早速・・・私に空手を教えなさ～い！」

誰！？って言うか何様！？しかもここで！？
その場の誰もが心の中で突っ込みを入れた
唖然とする蘭・・・

「蘭の空手も弟子志願者が現れるまでになったか」

「オ～ウ！私もモウリさんに空手を習いたいデ～ス！」

カチューシャと金髪が茶化した
蘭は結局フリーザ様の気迫に押し負ける形で
放課後教えると言うことになった
それまでフリーザ様は高校で暇を潰すことに・・・
そしてお昼頃になった

「ほらよ・・・フリーザ！・・・様
昼飯買ってきてやったぜ！」

「おや・・・コナンさん・・・ガッコーは良いんですか？」

久々の高校が懐かしくなっちまったんだよ！
コナンは苦笑いを浮かべた

「ところでランさんの空手の腕はどれぐらいなんですか？」

「殺人的だよ・・・」

コナンはフリーザ様に蘭と空手についていろいろ話した
犯人を何人も撃退したこと・・・
都大会で優勝したこと・・・
そして・・・ある思い出を・・・

それは蘭と新一が小学生の時だった
蘭はテレビを食い入るように見つめていた
画面にはファイトを繰り広げる二人の男が・・・

ビシ!!!

一方の男の後ろ回し蹴りがもう一人の男の太腿を捉えた
食らった男は悶絶し・・・立ち上がることができなかった
勝った男はガッツポーズ

「やった!」

蘭は歓声を上げた・・・テレビ画面では男の腰にチャンピオンベルトが巻かれていた

次の日

新一は何かを必死で練習する蘭に出くわした

「蘭!何やってるんだよ!」

「あ!新一!新しい技を練習してるの・・・昨日ケイワンで見たんだ」

新一はしばらく蘭の練習を見ていたが蘭はなかなか納得できないでいた
それからしばらく蘭はこの技の練習ばかり
来る日も来る日も練習していた

そんなある日

蘭と新一はケンカをした口ゲンカは激しさを増し
そして・・・
蘭は思いっきり新一の足を蹴った!

「っ痛~・・・できたじゃねぇか!今度の空手大会も頑張れよ!」

つまり新一が自らサンドバックになってやったのである

「なぁ蘭・・・その技なんていうんだ?」

・・・・・・

「のろけ話ですか?」

「いや、そんなんじゃ・・・」

コナンが赤い顔をして否定する
フリーザ様は珍しくシラケ顔だ

「でも興味が出ましたよ・・・そのフグトルネードなる技にこの後是非教えてもらうとしましょう・・・」

そしてあのサル野郎を！
フリーザ様の野望は燃え上がるばかりである
しかし放課後になってフリーザ様はいろいろ知ることとなった
たくさんの形・・・儀礼・・・
フリーザ様にとって煩わしい物が多すぎて
結局フグトルネードを覚えることはできなかったようである

「なんと面倒くさいんでしょう・・・空手なんてもうやめです！」

家に帰ってからそう言ったフリーザ様を見て哀はほっとした
これで明日からは気持ち良く起きられる・・・

翌朝

「シッ！シッ！シッ！フェシ！！！フェシ！！！フェシ！！！」

「今度は何よ・・・」

「おはようございますハイバラさん
今度はムエタイを始めることにしました！」

もう嫌ぁ！！！
哀は目の前が真っ白になった

続く

おまけ：今日のスカウター

ピピピ・・・毛利蘭　戦闘力８６

フリーザ様から一言

さすが博士さんご推薦の空手家ですね・・・８６ですか

私から見ればまだまだですが・・・空手テクニックはなかなかなものです

また気が向いたら習いに行くことにしましょう・・・

１０．思い出のフグトルネード（後書き）

今回は蘭を登場させたくて空手の話にしました
もちろん蘭が見ていたのは
アンディＶＳベルナルドです
踵落しでも良かったんですが
私はあの決勝戦の印象が強かったので・・・
コナンの小説なんですけどね＾＾；

11．楽しい遊園地

高速でレールの上を走り回り
スカッと気持ち良く叫ばせてくれるジェットコースター
くるくると回転し
おとぎの国にでも居るかのように思わせてくれるメリーゴーランド
ハラハラドキドキ感がたまらない
スリルの館お化け屋敷
見晴らしも良くて素敵な時間のすごせる観覧車
遊園地には普段は味わえない楽しさが詰まっている
今回はそんな遊園地の話

第11話　楽しい遊園地

朝の6時
この時間のフリーザ邸（阿笠邸）はまだ誰も起きておらず静かである
・・・いつもならば

「ハイバラさん！博士さん！仕度はできたんですか？」

朝っぱらからビジュアル系に変装したフリーザ様が声を上げる
すると哀や博士が顔を出した

「はいはい・・・今やってるわよ」

「そう急がんでも・・・集合時間まであと1時間もあるんじゃし
・・・ほれ！朝食でも食べていたらどうじゃ？」

フリーザ様は博士にそう言われたので朝食をとり始めたが
どうも落ち着きがない・・・それにそわそわしていて
いつも眺めているコーヒーメイカーも今日はあまり目を惹かないようだ
フリーザ様は今日楽しみにしていることがあるのだ
それは・・・

3日前・・・

「ねぇ哀ちゃん!今度の日曜日予定空いてる?できれば博士も」

「えぇ・・・空いてるわよ」

歩美は少年探偵団と博士でトロピカルランドへ行こうというのだ
哀も博士も日曜は暇だったし
元太、光彦、コナンの了解も得たので行くことに決定した

「トロピカルラドン?なんですかそれは?怪獣か何かですか?」

哀と博士が日曜日のことについて話しているところに
フリーザ様が割って入ってきた

「ランドよ・・・何って・・・遊園地よ」

ユーエンチ?聞きなれない言葉だ・・・
フリーザ様の脳内のシナプスは?マークを形成した

「いろいろなアトラクションのある遊び場のことじゃ」

遊び場！
その言葉にすかさず食いつくフリーザ様
つまりこの地球人達は私を差し置いて楽しもうというのですか・・・

「私も行きます！文句を言う人は・・・」

「別に連れてかないなんて行ってないでしょ」

珍しく優しい哀だったが・・・
まぁ遊園地の中にはマスコットキャラや変な格好したのがいっぱい居るし
これが混ざっても気にならないわよね・・・ふふふ
などと考えていた

・・・と言うわけでなんだかんだでトロピカルランドへやってきたフリーザ様たち
開園数分前に正面ゲートに到着したようである

「ここがトロピカルランドですか・・・ふっふっふ
このフリーザ様をどれほど楽しませてくれるのでしょうか？」

「きっと楽しいよ！絶対にまた来たくなるんだから！」

歩美がフリーザ様にそう告げるとフリーザ様の期待度はさらにあがり・・・
開園と共に解き放たれた・・・
フリーザ様はダッシュで園内へ突撃！
少年探偵団は必死で後を追った・・・が見失い

結局コナンの追跡メガネで捜索し5分後に発見した

「世話焼かせんなよ！」

コナンが不機嫌そうに言ったがフリーザ様はお構いなしである

「ここの楽しみ方が良く分らないのですが・・・」

「ほら・・・フリーパス買っといたわよ・・・貴方の分
これでアトラクションに乗るのよ」

フリーザ様たちはその後様々なアトラクションに乗った
ジェットコースター
フリーザ様は超音速で飛べるんだからこんなのは・・・
と思ったがことの他お楽しみである
メリーゴーランド
フリーザ様にはこんなぬるいアトラクション・・・
と思いきや無邪気な笑顔を浮かべながらお楽しみである
お化け屋敷
フリーザ様は意外と恐いのが苦手なのか・・・
大絶叫でお楽しみであった
そして時間は昼前になっていた

「次あれに乗りませんか？新しく出来た新感覚アトラクションらしいですよ」

光彦がそのアトラクションを指差した
しかしそこには長蛇の列・・・

「ずいぶん並んでんな・・・」

「それだけ人気なんだよ！乗ってみようよ！」

そこで皆で並んでみることに
１０分経過・・・

「なぁ・・・別に皆で並んでなくても良くないか？」

コナンが言った
フリーザ達は７人組
まったくその通りである

「じゃあ貴方達ここに並んでて頂戴・・・お昼とか買ってきてあげるわ」

哀が言った「貴方達」とは・・・フリーザ様とコナンであった

「なんでこのフリーザ様が・・・」

「貴方一番目立つ格好してるじゃない」

確かに・・・フリーザ様は諦めた

２０分経過・・・
列は心なしか進んだように見えなくもない・・・

「長いですね・・・」

「こういうもんだよ・・・諦めて待つしかなさそうだな・・・」

３０分経過・・・
だいぶ進んだような気もするがまだ先は長い・・・

「昨日のサッカー見た・・・？」

「あぁ・・・見事な逆転負けでしたよね・・・」

フリーザ様とコナンはとりとめもない話で暇を潰すが・・・あまり楽しそうではなかった

４０分経過・・・

「くそ・・・灰原達まだかよ・・・」

愚痴がこぼれ始めたようだが列の先頭はまだ見えないおなかもすいて来たが哀達が帰ってくる様子もない
謀られた・・・コナンはがっくりうなだれた
そしてフリーザ様は

「この・・・このフリーザ様が４０分待ちだと・・・！」

かなりお怒りの様子である

５０分経過・・・
やっと列の先頭が見えてきた
まるで暗闇にさす一筋の光であった
しかし光は時に人を狂わせる

「ここまできたら・・・前のゴミ共を蹴散らして・・・」

フリーザ様ご乱心！
コナンは必死で止めにかかる
とそこへ哀達が帰ってきた・・・楽しそうに

「ただいま～！ごめんなさいね・・・
途中でマスコットと戯れてたら遅くなっちゃったわ」

殺す・・・フリーザ様とコナンは初めて意気投合した

お昼過ぎになり・・・大通りではパレードが行われている
哀達はパレードを楽しんでいる
フリーザ様もパレードを楽しんでいたが
ふと端っこの方で座り込んでいるマスコットキャラに気づいた

「そこの君・・・何をしているんです？」

「・・・・・・別に」

マスコットキャラがこんなんで良いのか？
どうやら悩みでもあるようなのでフリーザ様は相談に乗って上げることに

「俺さ・・・バイトでこんなことやってるけど・・・
俺の人生こんなんで良いのかなって・・・
暑い中馬鹿みたいに子供に媚びたりさ・・・」

重症だ・・・フリーザ様もさすがにそこは理解した
とそこへ別のマスコットがやってきた

「ダメですよ中野さん！早くパレードに参加してくださいよ！」

「わかってるよ・・・わかってるけど・・・」

中野さんは連れて行かれた
遊園地も楽しいばかりじゃないんですね・・・
その後のパレードは
皆楽しんで見ているようだったが
フリーザ様には少し哀しそうに見えた・・・

そして帰り道
哀達は数十分も待たせたことでコナンに文句を言われたが
フリーザ様は文句ひとつ言わなかった
フリーザ様の頭には
あのつらそうなマスコットのことがあったのかもしれない・・・

続く

おまけ：今日のスカウター

ピピピ・・・マスコット中野　戦闘力１０

フリーザ様から一言
暑い中がんばっているマスコットの中の人です
戦闘力はさておき悩まずに頑張って欲しいですね・・・

11．楽しい遊園地（後書き）

遊園地のマスコットの仕事大変ですよね
踊ってみたり跳ねてみたり
子供達にド突かれたり・・・
外は笑顔のキャラクターでも
中は汗だく涙まみれ・・・
中の人・・・乙！

１２．突撃！授業参観

たいていの子供は授業中張り切ることはない
「早く終わんねぇかな？」
「給食まだかよ！？」
「帰ったらゲームしよ・・・」
なんて下らないことを考えている
将来のために勉強に励まなきゃ！
なんて考えるのはごく少数のエリート層である
しかし、そんな子供たちでも張り切る日がある
そんな日の話

第１２話　突撃！授業参観

その日哀は一枚のプリントを持って帰ってきた
どうやら学校の配布物のようだが・・・

「ほう！授業参観か・・・」

博士がプリントを見ながら言った

「まあどうでもいいけど・・・
私や工藤君の生活を垣間見る機会ではあるかもね」

哀は興味なさそうにそう言うとファッション誌のページをめくった
一方博士はなんだか嬉しそうな目をしている
独身でこの歳まで来てしまった彼にとっては

父親になった気分なのかもしれない・・・が

「なんと！・・・この日は都合が悪いの・・・
学会なんじゃ・・・何とかして行きたいがのぅ」

「無理してくる程のイベントでないことは確かかね・・・」

残念がる博士

「ジュギョーサンカン？
またまた面白そうなイベントが開催されるようですね・・・」

うわぁ・・・
余計なのに見つかっちゃったわね・・・
哀は頭を抱えた

「来なくて良いから！お願いだからポアロにでも行ってて」

どうせ来てもろくなことをしない・・・
これ以上周りの人間を巻き込むのは良くない・・・
哀はそんな風に考えたが

「何を言ってるんですか！？部下のジュギョー態度は上司としても
気になるところ
是非見に行かせていただきますよ！覚悟はよろしいですか？」

よろしくねぇよ！
しかし哀の心の叫びはフリーザ様には届かなかった・・・

授業参観当日　帝丹小1年B組・・・

今は休み時間である
教室の端の方で哀とコナンが話をしていた

「ったく・・・この歳で授業参観かよ・・・」

コナンはいつも愚痴ばかり・・・
そんなに愚痴ばっかり言ってると根暗な人間になるわよ
と思いながらも自分も明るくはなれないでいた・・・

「いいじゃない・・・愛しの彼女が見に来てくれるんでしょ?」

「バーロォ・・・蘭は学校だよ・・・おっちゃんが来るんだ」

哀はクスクスと笑った・・・が
次のコナンの言葉でその笑顔は消し飛んだ

「おめぇんとこは博士だろ?良いよな・・・俺たちの状況わかってるし」

「・・・フリーザ様よ」

・・・・・・・・・・
重苦しい沈黙
コナンはこんがらがった糸を解くように頭を整理する
フリーザ様よ?
あぁ・・・博士じゃなくてフリーザが来んのか・・・

「まじかよ・・・」

「おおまじよ・・・」

そして運命の時間はやって来た
どんどん保護者が集まってくる・・・
やってくる自分たちの親にワクワクする子供たち
良い所を見せよう・・・親を天狗にしてやるんだ！
そんな思いが伝わってくるようだ
コナンの保護者のチョビヒゲも現れた
が・・・あのビジュアル系の姿は一向に現れない・・・
そしてチャイムが鳴った
担任の小林が入ってくる

「保護者のみなさんこんにちは
みなさ～ん！今日はお父さんやお母さんが見えていますが
いつも通りの皆さんを見せてあげましょうね！」

このテンションの子供達がいつも通りにできるわけがないのに
小林は建前上のありきたりな挨拶をする
そして授業が始まった
始まったのだが子供達はそわそわ
時折後ろを振り返っては親に「前を向け」と注意される
・・・そしてここにも後ろを振り返る少女が一人
哀である
後ろを振り返り・・・
フリーザ様はいないわね・・・良し！
こんな調子で授業が半分くらい終わった
その時！

「遅れて申し訳ありません
いや～私としたことが・・・ついつい知り合いと話しこんでしまいました」

突如教室に降り立つビジュアル系

「あぁ！貴方はこの間の！」（第１０話思い出のフグトルネード参照）

小林も思わず大声を上げる
動揺する保護者と子供たち
どこの人？
何者？
あれ？この間雑誌で見たような・・・
様々な声が飛ぶ中

「さぁハイバラさん！ジュギョーを見に来てあげましたよ！」

こっちを見るなぁ！名前を呼ぶなぁ！
哀は心の中で雄叫びを上げた
哀はそれまでの人生で一番恥ずかしい瞬間に遭遇していた

「それじゃあ・・・えっと・・・哀ちゃんの保護者の方ってことで・・・」

「さあ！先生さん！ジュギョーとやらをはじめなさ～い！」

何様！？
全員が心の中で突っ込んだ

その後は散々な授業参観となった
近くの保護者に肩を揉ませたり
問題の答えが分らない子供に罰ゲームをやらせたり
しまいには黒板に巨大な落書きをして授業を妨害
哀は顔から火が出る恥ずかしさにずっと顔を伏せていた
そしてチャイムが鳴る

「おや・・・もうジュギョーは終わりですか・・・物足りませんね
そうだ!たしかこの後ホゴシャカイとか言うのがありましたね
それにも参加させていただきましょう・・・」

まだ居座るんだ・・・
小林は今にも辞表の「辞」の字を書きそうになっていた

「灰原・・・顔が真っ赤だぞ・・・大丈夫か?」

コナンが声をかけた

「えぇ・・・大丈夫・・・じゃないわ」

いっそ殺して・・・
哀は組織以外にこんな感情を持ったのは初めてだったそうだ・・・

その後保護者会ではどこから覚えてきたのか王様ゲームが展開された
と言う
保護者も小林もただただ流されるのみ
そして混乱と困惑が入り乱れる中その日は終わった・・・

「ふっふっふ・・・今日は実に楽しかったですよ・・・
ハイバラさん！次の授業参観も私が出ますよ！」

もう絶対に授業参観のプリントは出さない！
そう心に誓う哀であった・・・

翌日　ポアロ・・・

カランカラン・・・

「いらっしゃいませ！あ、フリーザ様！
どうでしたか？授業参観は？」

梓がいつもの笑顔で出迎える

「いや～実に良かったですよ！あんなに楽しいイベントとは・・・」

フリーザ様がいつもの席に着く
隣には今日もレポート中の大学生がいる

「で・・・王様ゲームはやりましたか？」

大学生が聞いてきた

「ホゴシャカイとかいう所でやりましたよ
楽しいゲームをありがとうダイガクセイ！」

どうやらこの男が黒幕だったようである
侮り難し！ダイガクセイ！

なおそのせいで小林が3日間寝込んだことを彼は知らない・・・

続く

おまけ：今日のスカウター

ピピピ・・・小林教諭　戦闘力3

フリーザ様からの一言
ジュギョーを行う人です・・・よって戦闘力は要らないようですね
それにしてもジュギョーとは具体的に何をするのでしょうか？
もう少し先生さんに任せておけば良かったですね・・・

１２．突撃！授業参観（後書き）

授業参観っていつもと違いますよね
私もいろいろ思い出があります
テンション上がりすぎて親に恥をかかせたり
親との共同制作をつくる図工の時間
親が来ずに一人で完成させたり・・・
あの時は周りの同情の目が痛かった＾＾；

13．フリーザ様追放計画

前回授業参観に出席したフリーザ様
しかしその行動が何かと波紋を呼んでいたことを・・・

「ねぇ田辺さん・・・知ってる?この間のB組の授業参観に・・・・」

主婦たちの噂話にまでなっていることを・・・

「なんですって!」

新たなる危機が迫っていることを・・・
フリーザ様はまだ知らない

第13話　フリーザ様追放計画

「ふぅ・・・久しぶりに解毒剤の研究なんかしたから疲れたわ」

その日哀はフリーザ様が現れてから滞っていた
解毒剤の研究を再開していた
そして一区切り付いたのでコーヒーでも飲もうとリビングにやってくると
・・・いつもと違うフリーザ様がいた

「何よその服・・・」

いつものビジュアル系の服ではなく・・・

「ワイルドなあんちゃん」と行った感じの服である

「おや覇威婆羅(ハイバラ)さん・・・珈琲破壊(コーヒーブレイク)ですか？」

「はぁ？」

なんか漢字が多いな・・・

フリーザ様に一体何があったのか

哀にはわけが分らなかった

「いやぁ・・・この間の授業参観に行って思ったのですよ

教育は大事だ！とね・・・子供たちの未来を作る教育・・・

しかし本当の教育とは何か？・・・それが疑問でしたが・・・」

「・・・・・」

「答えはこれだったのですよ・・・」

なんでだよ！

哀はあまりの突っ込みどころの多さに何も言えなかった

しかしフリーザ様の言葉の意味を理解するのに

そんなに時間は要らなかった・・・

哀の足元には一冊のマンガが落ちている

「・・・なるほど・・・これの影響ね・・・」

表紙には「ＧＴＯ」と書いてある

「そう言うことで私はこのスタイルで教育を行うことにしました！

夜露死苦！！！」

夜露死苦じゃないわよ・・・またこの男は・・・

その頃帝丹小学校では臨時保護者会が行われていた
集まっているのは主に一年生の保護者であった
そこに学年委員長がやってきた・・・

「みなさま・・・お集まりザマスね」

本日の議題は
「この間授業参観にやってきたビジュアル系について・・・」
である

「我々A組の保護者は詳しく知らないザマスが
聞いたところに寄ると?授業の妨害・・・
そして保護者会での王様ゲーム・・・何を考えているザマスか!?
なんて下品なんザマショ!」

学年委員長の田辺はすごい剣幕でしゃべっている
保護者たちはそれを時折うなずきながら聞いていた
その中には蘭の姿も・・・

「とにかく・・・あんな下劣な男が近くに居たのでは
私たちの子供に悪影響が出るザマス!
即刻排除するべきザマス!」

「しかし田辺さん・・・排除ったってどうやって・・・?」

たしかに日本国民には住居の自由が認められている

いや・・・フリーザ様は日本国民ではないが・・・
一応はそう言う建前である

「要はあの男がこの学校に来なくなればいいんザマス
そこで小林先生!灰原哀の転校を要求するザマス!」

「ちょ・・・ちょっと待ってください・・・幾らなんでもそれは・・
・」

小林は非常に困惑している
元はと言えば自分の力量のなさが招いたことと思っていた彼女にと
って
そのことで哀が転校になるのは納得出来なかった

「待ってください!そんなの哀ちゃんが可哀想です!」

蘭が反論するが・・・

「うるさいザマス!高校生の小娘が偉そうな口を聞くなザマス!」

この田辺と言う人は現在1年生の学年委員長を勤めるとともに
帝丹小学校ＰＴＡ会長を勤める通称「帝丹の猛虎」である
彼女に逆らえる者は少ない

「皆さんが反対しても私は絶対に灰原哀を転校させるザマス!」

大変なことになってしまったようである・・・

そのころフリーザ様は哀とポアロにいた

「良いですねその格好・・・ワイルドで素敵ですよ！」

梓はフリーザの服をほめながらいつものコーヒーを出した

「そうでしょう」とフリーザ様はご機嫌である

哀は呆れながらもファッション誌に目を落としながらコーヒーを口に運ぶ

そしてその隣には大学生がいる・・・もちろん今日もレポート

そんな感じでしばらくとりとめもない世間話が展開されていたが

「あら・・・あれ蘭さんじゃない？」

哀は店の前を通る蘭に気づいた

梓はウィンドウをコンコンと叩いて蘭に挨拶する

店の中ではフリーザ様が手を振っていた

「こんにちは・・・」

店に入ってきた蘭・・・だが表情は暗い・・・

「なにかあったんですか？」

梓が聞いた

蘭は哀の顔をみるとため息を付き

それからフリーザ様を見て言った

「フリーザさんこの間授業参観にいったでしょ？

その時のことが保護者会で問題になってて・・・

その・・・哀ちゃんを転校させるべきだって・・・」

蘭は横にいる哀に遠慮しながら言った
哀はフリーザ様をにらみ付ける

「何でも保護者会で王様ゲームやったとか・・・」

「・・・ごめん・・・それ・・・俺が吹き込んだ」

大学生が申し訳なさそうに言った・・・
重苦しい沈黙・・・
最初に口を開いたのはフリーザ様だった

「様・・・」

「え？」

「私を呼ぶときはフリーザ様と呼びなさ～い！」

そっちかよ！
全員もう呆れるしかなかった・・・

そして次の朝
フリーザ邸（阿笠邸）の前にあの人が現れた

「おっほっほ・・・灰原哀・・・そしてビジュアル系・・・
私の子供達が良い子に育つには邪魔な存在・・・
消えてもらうザマス！」

遂に哀達のところに迫ってきた
学年委員長ザーマス田辺・・・

哀は転校してしまうのか？

続く

おまけ：こぼれ話

「楽しい遊園地」にて・・・ジェットコースターに乗ったフリーザ様達

「ジェットコースター楽しかったね」

「えぇ！あのアクロバティックな動きはなかなかの物でしたよ・・・ふっふっふ」

楽しそうなフリーザ様一向
しかしコナンはジェットコースターを見て考え事をしていた

「あら・・・なにぼーっとしてるのよ・・・」

哀が声をかける

「いや・・・あのジェットコースター・・・前乗った時は人の首が飛んでたなぁって」

この男の頭の中には常に事件のことしかないようである・・・

１３．フリーザ様追放計画（後書き）

なんかこの小説オリキャラが活躍気味です
花田教授・・・ダイガクセイ・・・
マスコット中野・・・そしてザーマス田辺
・・・コナンの小説だと言うことを忘れそう＾＾；
忘れないように頑張っていきます

１４．迷惑

人と人との間にはトラブルが発生する
そして現在の日本の警察は
こういったトラブルを解決する能力が極めて低い
事件になるまで動かないからである
だから事件になったときは
「警察対応の遅れ」などと記事になって
ワイドショーの餌になる
さてさて
こちらのトラブルはどう転ぶのでしょうか？

第１４話　迷惑

早朝のフリーザ邸（阿笠邸）
哀は新聞を取りに郵便受けまでやって来た
そして新聞を取り出す・・・が

「なによ・・・これ・・・」

その新聞は文字がクレヨンで書かれていた
「良い子新聞」と言うタイトル
一面トップはお友達のルミちゃんが男の子にいじめられた
というものだった・・・

「黄泉売新聞はどこよ・・・」

そんな哀の様子を影から見るザーマス田辺・・・

「おほほ・・・まだまだジャブ程度ザマス・・・」

次の日
家の前には巨大スピーカー搭載の車が現れ
大音量でトランスミュージックを流し始めた

「・・・うるさいわね！」

さらに次の日
今度は物干し竿と布団を搭載したトラックが現れ・・・

「・・・まさか・・・」

「引っ越～し！引っ越～し！さっさと引っ越～し！しばくずぉ！」

とどこかで聞いたことのある嫌がらせ
こうして嫌がらせは数日続き・・・

「もう我慢出来ないわ・・・！」

「そうじゃのぅ・・・警察に相談するか」

二人で警察に行くことにした哀と博士・・・だったが

「事件になってないんでしょ？警察は動けませんよ」

と警察はペン回しはすれどもちっとも対応してくれず
仕方なく帰ってきた哀と博士・・・
そこへ蘭がやってきた

「コナン君に聞きました・・・最近嫌がらせされてるそうですね」

「おぉ・・・蘭君・・・そうなんじゃ
警察はちっとも動いてくれんしのぅ」

そこで蘭は父親で探偵をやっているチョビヒゲ・・・
毛利小五郎に相談してみては?と持ちかけた
解決するのはコナンだろうと思いつつも
二人は小五郎の所へ言った

そして次の日

「おっほっほ・・・そろそろ根をあげているころザマスかね」

ザーマス田辺がやって来た

「待っていましたよ・・・田辺さん!」

そこに小五郎、コナン、蘭、博士、哀
そして一応責任を感じているのか大学生が現れた

「あなたでしょう・・・ここ最近嫌がらせをしていたのは」

「んま!なんですって!何を証拠に!」

見苦しくいい逃れをするザーマス田辺・・・が

「あれれ～」

コナンの「あれれ～」が始まってしまった

「おばさん声が枯れてるよ～どうしたの？
それに手に包帯巻いて・・・痛そ～」

声が枯れているのは「引っ越～し！」のせい
手の包帯は布団の叩きすぎによる腱鞘炎というわけである
そして極め付けが・・・

「この新聞・・・昨日A組の田辺さんに聞いたわ・・・
そしたら保育園の時に書いた物だって行ってたわよ・・・」

「つまり貴方しかいないんですよ・・・田辺さん」

追い詰められて気まずそうな顔をしていたザーマス田辺
しかし次の瞬間開き直った

「分ったからどうするザマス？警察に相談？
また動いてくれないザマス！それとも私を殴るザマスか？
今度はそっちが捕まるザマス！
もう良いザマス・・・こうなったら意地でも灰原哀に転校させるザマス！」

そうわめき散らすザーマス田辺
小五郎たちも困惑していて言葉が返せない

とそこへ

「そこまでですよ！ザーマスさん！」

フリーザ様が登場した

「そう言えば最近見なかったけどどこ行ってたのよ？」

哀が聞いた

実はフリーザ様は嫌がらせが始まった頃に嫌になり

博士の金を勝手に使って熱海に避難していたのだ

「これお土産です」

お前が原因だろ・・・

呆れる一同にお土産を配るフリーザ様

そして配り終えると・・・いつものフリーザ様ではなかった

「この下劣なビジュアル系め！私たちの前から消えるザマス！

貴方みたいなのが子供達をだめにするザマス！」

フリーザ様に罵声を浴びせるザーマス田辺・・・が

「貴方のやってることの方が子供に悪影響だと思いませんか？」

フリーザ様ＧＴＯモード発動である

「そんな臭い物にふたみたいな教育がなんになるんです？

子供達にはもっと現実を見せてその上で善悪を教えるべきでしょう」

自分が宇宙の帝王として何をしてきたかはすっかり忘れて
熱く教育をかたるグレートティーチャーフリーザ様
しかし言ってることはもっともなのでザーマス田辺は言葉につまる

「う・・・うるさいザマス！」

こんな反論が精一杯
そして次の瞬間フリーザ様は指の先でデスボールを作ると
一気に膨らませた

「くだらねぇ教育してんじゃねぇよ！
そんなもん・・・この星もろともゴミにしてやる！」

それはダメだろ！
小五郎や蘭が止めに入る中灰原は一言・・・

「コーヒーもポアロもゴミになるけどね・・・」

もっともだった・・・
フリーザ様はすぐに破壊中止
しかし効果はあったようである
ザーマス田辺は腰を抜かしている

「ふぅ・・・まぁとりあえずもうこんなことはしないことです
もし同じようなことをしたら・・・消し去りますよ？」

その言葉にザーマス田辺は一目散に逃げて行った
何はともあれ一件落着である
ちなみにフリーザ様が買って来たお土産は
「鉄腕波平」や「やっちゃん」といったパチモンのTシャツだった・

・・

「みなさん！早速明日からそれを着なさ～い！」

こいつが一番迷惑だ・・・

そこにいた誰もがそう思ったという・・・

・・・その後ザーマス田辺は

「きぃぃぃ！！！・・・この恨み・・・晴らさで措くべきか！ザマス・・・・」

続く

おまけ：今日のスカウター

ピピピ・・・ザーマス田辺　戦闘力３（ただし物理的）

フリーザ様から一言

戦闘力は並ですがあの迷惑行為はたまったもんじゃないですね・・・

私は熱海に逃げたから良かったもののハイバラさん達は大丈夫だったんでしょうか？

精神的、社会的な面も合わせれば実質１００以上の戦闘力の持ち主です

１４．迷惑（後書き）

ザーマス田辺編が終了しました
なんかそろそろまじめにコナンキャラ出したいな
なんて思ってしまったので
次回は遂にあの人の登場です！
・・・とか言って
この間は山村刑事だったけど・・・
今回こそは＾＾；

１５．色黒！大阪より来る有り

朋、遠方より来る有り、また楽しからずや・・・
あの孔子の有名な一節である
遠くから友がやってきた！
なんと楽しいことではないか！
といった意味である・・・
そしてここにも遠くから友がやってこようとしている
今回ははそんな遠くから来た友達の話

第１５話　色黒！大阪より来る有り

「ほれ！追跡メガネの充電・・・終わったぞい！」

博士がコナンにメガネを渡す
サンキューなどと軽く返事をしたコナンがそれを受け取った
そこへ

「コナンさん！これはこれはいい所に！」

今日も皆に迷惑をかけるべく・・・フリーザ様登場！
手にはなにやらガイドブックのような物を・・・

「実は私は米花町以外あまり行ったことがないので
今度の連休に東京見物にあちこち行ってみようと思うのです
そこでコナンさん！」

「パス」

瞬殺ならぬ瞬却下
フリーザ様は頭に血が上ってきたのかこめかみがピクピクしている

「このフリーザ様のガイドを断ろうとは・・・痛い目に会いた」

「わりぃ！その日は服部が来んだよ」

「あら・・・彼がくるの？」

ハットリ？
初めて聞く単語にフリーザ様が考え込んでいる
コナン、博士、そして哀はその久しぶりの来訪の話をしているようだが
フリーザ様にはなにがなんだか・・・
はて・・・ハットリ・・・忍者？

「忍者が来るんですか？忍者など好きにさせておいて
この私の観光をですね・・・」

「バーロォ！忍者じゃねぇよ・・・まあいわば俺の同志かな」

このフリーザ様を差し置いて・・・
と思ったが・・・そこまでコナンが言うので
フリーザ様もハットリに興味がわいたようだ

「分りました！ならばその忍者も東京の観光に参加させましょう！」

うわぁ・・・また突っ走り始めた

その時コナンにはすでに拒否権はなかった・・・

そして連休初日・・・
東京駅にやってきたのは
コナン、小五郎、蘭、哀、そしてやっぱりフリーザ様
もちろんビジュアル系である

「すみませんねぇ・・・私までお邪魔してしまうとは・・・」

「良いんですよ!大勢の方が楽しいし!ねぇコナン君」

蘭は楽しそうだがコナンは
お前が無理やりついて来たんだろ・・・とやや不機嫌であった
と・・・そんなことをしているうちに時間になった

「よう!くど・・・やのうて・・・コナン君!それにおっさんらも!」

「蘭ちゃ～ん!久しぶりやな～」

服部と和葉が現れたようだ
しかしフリーザ様はその声に鋭く反応した

「・・・こ・・・この声は・・・ベジータ!」

フリーザ様はすかさず声の主を見やる・・・が
そこにいたのはまったく知らない男だった
しかしフリーザ様はベジータと信じて疑わない

「みんな元気そうで何よりやなあ！・・・ん？
そっちの・・・なんやけったいな格好した奴は知らへんな」

「ふっふっふ・・・何をとぼけているのです？
この私が分らないわけないでしょう・・・変装までしちゃってえぇ？ベジータ」

なんか変な名前付けられてるよ！
服部も突然の改名に困惑する

「なんやお前！？俺はお前みたいなん知らへんぞ・・・」

「とぼけるな！どうやらもう一度死にたいようですね・・・」

と問答無用でエネルギー波を繰り出す
服部は危険を察知していたのか寸での所で避けていた
たまらず皆でフリーザ様を落ち着かせ
服部はベジータでないことを説明
フリーザ様は何とか理解したようだ

「まったく！何やってんのよ！駅の中でビーム出してんじゃないわよ！
まぁ被害が出なかったから良かったものの・・・」

と哀がフリーザ様にお説教している少し先では・・・

「ぎゃあ！！！俺のＳｕｉｃａが焼けた！」

しっかり被害が出ていたようである

そして東京観光が始まった
幸いにも蘭がガイドを買って出てくれたので
コナン一人でフリーザ様と服部の面倒を見ずにすんだ

「ここがお台場よ！封鎖できません！でおなじみレインボーブリッジや
ライ○ドアに乗っ取られそうになったりＰＲ○ＤＥから手をひいたりして
何かとお騒がせの某テレビ局もあるわ」

そして移動・・・

「ここが六本木ヒルズ！さっき言ったライ○ドアや楽○なんかのＩＴ企業の巣窟みたいなところよ！いまや玉の輿と言えばヒルズ族よ」

以上！蘭の東京案内であった
・・・時事ネタかよ

・・・六本木ヒルズ大展望台

皆が楽しそうにしている中
哀は東京の街を見下ろしながら考え込んでいた
その顔はどこか浮かない感じだった

「どないしたんや？ちっこい姉ちゃん」

服部が近寄ってきた

哀は軽く微笑むとまた街を見下ろした

「この街のどこかに・・・いるのよね」

服部は黙って聞いていた
哀の眼前に広がる街のどこかに必ず奴らがいる
組織の人間ははそれこそどんなところにでもいるのだ
それを考えてしまうから
哀はあまり高いところが好きではなかった・・・

「あれが来てからは組織のことなんて忘れかけてたけどね・・・」

哀は少し離れたところを見る
コナンとフリーザ様が戯れている・・・
と言うかコナンが振りまわされている
フリーザ様はえらくご機嫌のようだ・・・

「それでええんとちゃうの?・・・ずっと考えててもしゃあないやろ」

服部は言った
その言葉に哀は黙っていたがしばらくすると
それもそうね・・・と笑った

「せやせや!ほれみぃ!笑ったほうがかわいいでぇ!」

その日哀は少し肩が軽くなったような気がした
哀の柔らかい視線の先では
フリーザ様がエネルギー波を放っていた・・・
・・・・・・・・・・・・

ダメだろ！
すかさず哀は止めに入るのだった・・・

「忙しそうやな・・・」

・・・その頃ヒルズから数キロのところでは

「こ・・・今度は買ったばかりのＰＳＰが・・・焼けた・・・」

今回の一番の被害者は彼である
が・・・コナン達も服部達もフリーザ様も
そんなことは知る由もなかった・・・

続く

おまけ：今日のスカウター

ピピピ・・・毛利小五郎　戦闘力　５４

フリーザ様から一言
一見するとただのチョビヒゲおやじですが
実は柔道はかなりの腕前です・・・
普段はスケベで下品な男ですが
いざと言うときの度胸も据わっていますしね・・・

１５．色黒！大阪より来る有り（後書き）

服部を登場させました
今回は哀の悲しい部分を再起させる目的も有りました
最近ただのツッコミキャラでしたからね
まぁ今後もただのツッコミキャラですけど＾＾；
ってことで折角服部が来たんで
次回は軽く殺人でも起こします（笑）

１６．赤いフェスティバル（前編）

皆さんは学校行事にどんな思い出があるだろうか？
仲間達と笑ったり泣いたり
良い青春の思い出がいっぱいあることだろう
しかし全員が全員良い思い出ばかりとは限らない
中には苦い思い出やつらい思い出
そして・・・

「殺す・・・殺す・・・」

こんな感じに憎しみすら感じた人もいるかもしれない

第１６話　赤いフェスティバル（前編）

連休で服部と和葉が遊びに来ている毛利家・・・
今日はどこへ行こうか・・・などとポアロで話をしている
フリーザ様と哀もいて話に加わっている

「おまえらまだついてくる気かよ・・・」

コナンは頭が重くなった
昨日さんざんフリーザ様に振りまわされたのだ
当然である

「なんかイベントとかあれば良いんだけど・・・」

蘭が考え込んでいると

「そう言えばダイガクセイの通っているダイガクなる施設でガクサイなる物が開催されると聞きましたよ」

そう言えばいつもレポートをしている彼がいない・・・
梓によると学祭の準備でここ数日は来ていないらしい

「なんや面白そうやし、そこでええんちゃうの？ええやろ平次！」

おう・・・とそっけなく返事をする服部
彼としてはコナンと推理の話が出来ればそれでいいのだ
と言うことで皆で大学の学祭に行くことにした

並凡大学・・・

ここはダイガクセイが通っている並凡大学
別に頭が良い人間が揃っているわけでもない
平凡な大学だが規模は中々のもので
学祭ともなれば多くの人が詰め寄せる盛況ぶりだ

「うわ！むっちゃ盛り上がってんなぁ！蘭ちゃん！早よ行こ！」

楽しそうにはしゃぐ蘭と和葉・・・
その後ろを平次とコナン・・・そして哀とフリーザ様が追って行った
6人はまず屋台を見て周ることにした
さすがは大規模な学祭である
様々な店がでている

「射的だって・・・やって行こう！」

結構かわいい景品が並んでいる
女３人とフリーザ様が挑戦するようだ
２００円で４発
蘭と和葉は一発ずつ命中
哀は・・・さすがである
全弾命中・・・組織の力は伊達ではない・・・
さてさて・・・フリーザ様は・・・
もう２００円追加・・・青筋が浮き出ている
しかしそれでも景品は取れない

「くそ・・・当たりさえすれば・・・」

フリーザ様はかなり熱くなっている

「当ててみろよ・・・」

そこにさらに挑発的な言葉を浴びせる射的屋の学生・・・
ぶち切れたフリーザ様
今までにないくらい集中して的を狙う・・・クマのぬいぐるみだ

・・・パン！

フリーザ様の弾は・・・命中！
・・・しかし的は倒れない

「なんだと！？」

「あ～あ・・・当たり所が悪かったようだね・・・

星は壊せてもたったひとつのクマのぬいぐるみは倒せないようだな」

この学生何者だよ！？
そんな疑問を残しつつ
哀達は怒るフリーザ様を引きずりながら射的屋を去った

そして焼きそば屋の前に来たときだった

「あぁ！フリーザ様！来てたんだ」

ダイガクセイが焼きそばを焼いている
皆で買って食べることにした

「いただきま・・・あ！」

哀が焼きそばを食べる直前にフリーザ様が大量の青のりをかけた
哀はすでに焼きそばを口に入れてしまっていた

「なにするのよ！？」

「部下の分際で私より大量の景品を得た罰です
これでうかつに口は開けられませんね・・・ふっふっふ」

まさに暴君だ・・・
哀はダッシュで口をすすぎに行ってしまった

「ところで何か見どころとかありませんか？」

蘭がダイガクセイに聞いた

「見どころか・・・そうだ！劇を見に行きなよ
うちの演劇部の劇はちょっとした物だよ！
テレビで紹介されたこともあるし」

と言うことでフリーザ様達は劇が行われるホールに向った
人気の演劇部なのか人がいっぱいいて
6人座れる席を作るのが大変だった

「で・・・劇は何をやるの？」

口をすすいできた哀が聞いた

「えっと・・・なになに・・・
『世界の中心で、俺はリアルプロレスラーだぁ！と叫ぶ』
だって・・・ラブロマンス物みたいね・・・」

「なんや・・・推理もんやないんかい・・・
がっかりや・・・なぁくど・・・やのうてコナン君」

まったくこの2人は・・・
呆れる女3人をよそに劇は始まろうとしていた

劇場が暗くなる・・・
そして幕が開いた・・・が

「ぎゃぁあ！！ぐ・・・がふぁ・・・ああ！」

叫び声とも取れない悲鳴が聞こえてきた

「素敵な効果音ですね・・・」

フリーザ様だけ浮いた発言
が・・・地球人からすればかなり異常だった
舞台の裏の方でも何やらざわついている

「様子がおかしいで・・・」

「ぼく見てくる！」

コナンがダッシュで舞台に上り裏まで行くと
そこでは首を切り裂かれた女性が倒れていた・・・
かなりおびただしい血を流している
・・・そして程なく絶命した

「どうや工藤・・・」

「かなり鋭利な刃物でやられてる・・・」

そこへ哀と興味本位のフリーザ様がやってきた

「これはこれは・・・素敵な赤ですね・・・」

「まったく・・・客は出さないように言って来たわ・・・
もっとも犯行が行われた時には全員客席にいたんだから
裏方の誰かでしょうけど・・・」

たしかにそうだがコナンにも服部にも釈然としないところがあった
なにかが妙である
２人が考え込んでいると哀が何かを発見した
カードのようである

「なんて書いてあるんだ？」

そのカードには

『天誅！人斬り学園斎』

と書かれていた

はたしてこの事件の真相は？

そして人斬り学園斎とは何者なのか？

続く

おまけ：今日のスカウター

ピピピ・・・服部平次　戦闘力６５

フリーザ様

戦闘力はそこそこありますね・・・特に刀の類を使った戦闘に長けています

それと戦闘力だけでなく「西の名探偵」と呼ばれる頭脳も持っています

是非部下に加えたいところですが・・・大阪って遠いですよね

16．赤いフェスティバル（前編）（後書き）

学園祭の思い出ですか・・・
まあ私は人並みに楽しかったし
人並みに感動しました
ってことで
「人斬り学園斎編」に突入しました
またオリキャラですがね＾＾；
久しぶりにるろうに剣心みて思いつきました

17．赤いフェスティバル（中編）

前回のあらすじ
連休で服部と和葉が東京に遊びに来た
コナン、蘭、服部、和葉、哀、そしてフリーザ様は
フリーザ様のポアロ仲間
ダイガクセイの通う並凡大学の学祭に行くことになる
そこでダイガクセイに演劇部の劇を勧められた彼らだが
劇の幕が開くと同時に女性が殺される事件が発生
はたして事件は解決されるのか？
そして謎の犯人「人斬り学園斎」とは？

第17話　赤いフェスティバル（中編）

野次馬などが集まってきた
「今度は殺しかよ」
などと楽しそうにしている不謹慎な者もいる
そして数分後・・・警察が到着した・・・
捜査一課の目暮警部と高木刑事、千葉刑事である
目暮達は服部やコナンを見ると
「またか」と軽く呆れながらも現場検証を始めた

「また人斬り学園斎か・・・くそ！」

目暮が現場にあったカードを見て言った

人斬り学園斎はここ最近日本を騒がせている連続殺人鬼である

小、中、高、大、専門学校に養護学校・・・
学校と言う学校の行事の日を狙い
その学校の関係者の首を切り裂いて殺して行くと言う恐ろしい殺人鬼である
今月も都内を中心に全国で１０人もの人が殺された

「人斬り学園斎か・・・大阪でも暴れとったで・・・
工藤！ここで捕まえんで！」
服部とコナンは現場に踏み出して行った
その間にも警察の捜査は進む

被害者は遠藤はるみ（１９）
大学一年生で今日が初舞台の演劇部員だったらしい
仲の良かった同級生や先輩が遺体の傍らで泣いている・・・
が・・・別れを惜しむ間もなく司法解剖にまわされた

「容疑者は演劇部員か・・・」

「しかし激励に訪れていた人もいたようですから
その人たちも容疑者に入るかと・・・」

そこで千葉刑事がそれらの人を集めることに・・・

「演劇部員と言っても・・・彼女が死んでた舞台裏の通路にいた人なんて・・・」

演劇部員の一人が反論した
彼女が頃されていたのは舞台裏の更に裏のような場所・・・
演劇部員はその日は使っていなかったと言う

「でも大道具の森田君はあそこでさぼってたわね・・・」

「なんだよ!そんなこと言ったら部長だって・・・」

こういうときに起こる疑り合いである
人間関係はこういうところで白黒付くものだ
フリーザ様は楽しげに眺めていた

「ハイバラさん!臭いますよ!絶対に何かトリックが有りますよ!」

「何決めつけてるのよ・・・まぁでも
探偵さんたちが嗅ぎ回っているからそうなのかもしれないわね」

服部とコナンは現場をうろちょろしている
それを見たフリーザ様は

「決めました!この事件は私が解決して見せます!
ってことでハイバラさん!舐め回すように現場を調べてきなさ~い」

灰原はコナンや服部に任せておけば良いと
何度もフリーザ様に言ったが
消し去られそうになったのでしぶしぶ捜査を開始した

そんなことをしている間に容疑者が出揃った

綿貫康子（２１）演劇部部長
犯行当時は舞台そでで劇の進行を見守っていたと言う
現場に行った理由は軽く食事をとるため
舞台を汚したくなかったらしい

森田俊夫（１９）演劇部大道具
犯行当時は大道具の入れ替え順などを確認していたらしい
現場に入った理由は一服するため（さぼり）

栗原森蔵（５２）観客
近くの魚屋の店主で娘が演劇部だから応援に来たらしい
犯行当時は客席にいた
現場に入ったのは道を間違えたから
やや泥酔気味

福留まゆみ（２５）演劇部ＯＢ
後輩に差し入れを持ってやってきたらしい
犯行当時は客席にいた
現場に入ったのはファーストキスの場所で懐かしくなったから

仁村健一（３０）観客
東都大学病院勤務の医者で数日前に捻挫した被害者を診察したらしい
被害者と仲良くなり今日は舞台を見に来たとか
犯行当時は客席にいた
現場に入ったのは被害者がそこにいると思ったから

という５人である

「しかし全員犯行当時はアリバイがありますね・・・」

刑事たちは頭を抱える

一方哀は舐めまわすように現場を調べさせられていた
本当はコナン達と一緒にいれば何か分りそうだが
コナンと服部を出し抜きたいフリーザ様がそれを許さなかった

「私は警察犬じゃないわよ・・・あら?」

哀は滑車のような物にピアノ線のような物と糸くずが絡まっているのを見つけた
滑車は幕を開けるためのワイヤーを巻き取るための物の様だ

一方フリーザ様は警察と容疑者のやり取りを聞いていた
その後分ったのは現場に入った順番は
栗原→綿貫→仁村→森田→福留である
最後に彼女を目撃したのは森田・・・現場で仮眠をとっていたらしい
福留が現場に入ったときにはすでに彼女はいなかったらしい

「じゃあ貴方が彼女を幕が開くまで隠して
幕が開くと同時に殺したんじゃないの?」

綿貫が森田に言うと森田は怒鳴りながら反論した

「なんだと!?ふざけるな!それを言ったら福留先輩の方が怪しいだろ!」

「なんですって!?」

言い争う容疑者たち
まぁまぁと落ち着かせる目暮
これこそ殺人現場だと喜ぶフリーザ様!
そこへ哀がやって来た
気になる点をフリーザ様に伝える

「警部!司法解剖の結果が出ました!」

高木刑事もやってきた
司法解剖の結果
死因は頚動脈からの出血多量によるショック死で
物凄い威力で切り裂かれたのか
傷の患部は相当な損傷だったと言う
それと切り傷の周辺に針で細かく刺されたような痕が発見されたらしい

「ふーむ・・・犯人を断定するような物はなしか
針で刺されたような痕と言うのが気になるが・・・」

目暮達はまた考え込んでしまった
しかしフリーザ様は

「ハイバラさん！私にはこのトリックが解けましたよ！」

突然自信満々に言い始めたフリーザ様
早速警察の所に行こうとする

「ちょっと待って・・・工藤君たちいないわよ！
きっとまだ証拠のような物があるんじゃ・・・」

「いいえ！彼らはきっとトリックが解けずに尻尾を巻いて逃げたんです
それではフリーザ様の推理ショーですよ！あ～はっはっは！」

本当に大丈夫かよ・・・
哀は物凄く不安だった

「とりあえず最後に被害者を目撃した森田さん
貴方には署の方で聞きたいこともありますし・・・
ご同行願えますか？」

「なんでだよ！俺は殺人犯じゃねぇ！さぼりの常習犯だ！」

わめき散らす森田
任意同行ですからと高木や千葉がなだめても
まったく聞く耳を持たない

「見苦しいわよ！人殺し！」

綿貫が罵声を浴びせたそのときだった

「お待ちください警部さん・・・その方は犯人ではありませんよ・・
・ふっふっふ」

フリーザ様が現れた
突然ビジュアル系がでしゃばって来たので
その場にいた全員唖然とした

「あれ・・・この間の連続強盗誘拐犯にさらわれた人・・・」（第
8・9話理由参照）

「じゃあ誰が犯人だと言うのだね・・・」

フリーザ様は自信たっぷりに右手の人差し指を天に掲げると
犯人向けて振り下ろした！

「犯人は貴方ですよ！」

はたしてフリーザ様のさした犯人とは?
むしろフリーザ様の推理はあっているのか?
そして人斬り学園斎の正体は?

続く

おまけ:今日のスカウター

ピピピ・・・ボン!測定不能
ちっ!ならばこの最新型で・・・

ピピピ・・・射的屋のテツ　戦闘力１５０００００００

フリーザ様から一言
せ・・・戦闘力１５０００００００だと!ばかな・・・あんな地球人が・・・
私の最大戦闘力１２０００００００を超えているではないか!
おのれ・・・あの射的屋め・・・絶対にいつかバラバラにしてやる
あの地球人のようにな!(クリリンのこと)

17．赤いフェスティバル（中編）（後書き）

さてさて
推理編です
皆さんも犯人を当ててみましょう
でも多分証拠不十分で当たらないと思います＾＾；
ってことで次回いよいよ完結です
人斬り学園斎はあの人だ！

18．赤いフェスティバル（後編）

前回までのあらすじ
連休で東京に遊びに来た服部と和葉
そして蘭とコナンと共に
並凡大学の学祭に来たフリーザ様と哀
しかしそこで連続殺人鬼「人斬り学園斎」の
殺人に遭遇してしまう
捜査を進める服部とコナンそしてフリーザ様と哀
フリーザ様は犯人が分ったと言い出すが・・・

第18話　赤いフェスティバル（後編）

「犯人は貴方です！・・・そうでしょう仁村さん」

フリーザ様の右手の人差し指は仁村を指した
その場にいた誰もが仁村を見る

「何を馬鹿な！犯行時刻に私は客席にいたんですよ！？
仮に現場に行った時に殺したのだとしても
その後森田君が彼女を見ているじゃないですか・・・」

「それこそ貴方の狙い！そうやって自分を容疑者からはずしたんでしょう？」

フリーザ様はその推理を話し始めた

まず貴方は被害者に会うと言う口実で舞台のそでに入り
彼女を何らかの手段で犯行現場に呼び出します
そして・・・貴方はお医者さんだそうですね・・・
貴方は病院から持って来た麻酔を使い彼女を眠らせた
その間に貴方は同じく病院から持ってきた手術道具を使って
首を開くとそこにピアノ線を埋め込んだんです・・・
そしてそのピアノ線は天井の梁を通して
幕を開閉するこの滑車に取り付けた・・・
そしてピアノ線を埋めた状態で縫合し・・・ピアノ線と一緒に糸も
ありましたよ
幕が開くと同時に滑車がピアノ線をひっぱり
彼女の首は切り裂かれる・・・

「こうして貴方は見事にアリバイを作り彼女を殺したんですよ!」

一同感心する・・・
フリーザ様の推理は１００点満点・・・ではなかった

「ばかばかしい!麻酔を使ったって言いますけど・・・
彼女は悲鳴を上げていたじゃないですか?
手術中の患者は悲鳴を上げませんよ?麻酔してますけど・・・」

「・・・それは幕が開くと同時に切れるように・・・」

「そんな秒単位の調整出来るわけないでしょう・・・」

犯人の反論にひるむフリーザ様
フリーザ様としては
がっくりとうなだれた犯人が自白を始める予定だったのだ

「それに彼は・・・接骨医よ・・・」

「彼の所持品や周りのゴミからも手術道具や麻酔は見つかってませんよ」

味方からも反論が飛び交う・・・フリーザ様四面楚歌状態
哀は頭を抱えた
だからやめろって言ったのに・・・

「まぁ確かに私は外科医としても仕事をしてますがね・・・
でも貴方の推理は穴だらけですよ！
大体人間だってヤワじゃない！
ピアノ線ぐらいじゃあんなに豆腐みたいに切れませんよ！
例え手術後の傷を通してもね！見当違いも良い所だ！」

がっくりヒザを付いてうなだれるフリーザ様
まるで犯人である・・・が

「見当違いでもないで！５０点ってとこやな」

服部とコナンが現れた

「確かに今のじゃ穴だらけや・・・でもこいつを使こたらどうなる？」

服部がコナンに目配せするとコナンは小瓶を取り出した
「水酸化ナトリウム」と書いてある

服部とコナンの推理ショーが始まった

ピアノ線を滑車に取り付けたところまでは同じや
ただし・・・ピアノ線の途中には縫合用の糸も引っ掛けて
自動で抜糸したんやこれなら糸は検出されへんからな
どうせ最初から殺す気や・・・糸が抜けやすいように適当な縫合したんやろ
この糸かて釣り糸みたいなもんや・・・
そして縫合の時・・・あんたはひとつの仕掛けをしたんや

平次は水酸化ナトリウムを取って見せる

開いた傷口にこれを塗ったんや・・・水溶液にしてな・・・
理科の授業でやったやろ？
水酸化ナトリウムはタンパク質を溶かす
授業中間違えて手に付けてぬるぬるしてる奴おらへんかったか？
溶けてもろくなった皮膚をスッパリ切り裂くぐらい
ピアノ線なら造作もないことや！

「なるほど・・・しかしまだ悲鳴の件が片付いてないが・・・」

「あんた最初からそんなに強い麻酔は使わんかったんやろ・・・
大体劇の前くらいに目が覚めれば良かったんや
その代わりあんたは彼女の体に細工をして動けなくしたんや
首から下の神経を傷つけてな・・・
意識が戻りかけ朦朧とする彼女は突然自分の首が裂けていくショックと
苦痛で悲鳴を上げたってこっちゃ」

ちなみに犯行に使った道具は全てこの大学の物
数日前に盗まれた物だった
服部とコナンは「今度は殺しかよ」と言っていた野次馬にこのこと

を聞いたのだ
「じゃあ前には何があったのか」と・・・

「使ったもんは小包でどっかに送ったんやろ・・・
近くのコンビニ店員がさっき小包をだしたあんたを覚えてたで
まあ調べればわかるこっちゃ」

証拠は出揃った・・・

「貴様が人斬り学園斎か・・・」

目暮は恐る恐る聞く・・・
仁村はしばらく黙っていたが全てを悟ったのか口を開いた

「如何にも・・・拙者が学園斎だ」

全てを認めた学園斎・・・
顔には氷のように冷たい笑顔を浮かべていた
蘭や和葉はぞっとして鳥肌がたった

「なんで学校を・・・それも行事の日ばかり狙うんや・・・」

服部が聞くと学園祭はその動機を語りだした

拙者は小学校から大学まで常に努力して来た
それは幼い頃より夢だった医者になるため・・・
「医者になってたくさんの人の役にたちたい」
そんな風に思っていた
だから拙者は学校行事・・・学園祭や修学旅行なども極力参加せず
ただひたすら勉強に励んだ・・・例え周りからなんと言われようと

そして拙者は医者になり・・・人々のために日夜努力していた
そんなある日、元クラスメイトが患者としてやって来た
そいつは拙者とは違い、行事に積極的に取り組む奴だったが・・・
勉強はさっぱりだった

「よう仁村・・・お前医者になったのか・・・すげぇな！
いつも勉強ばかりしてたもんな！
おれ？おれは今・・・ニートよ・・・なんか熱くなれないっていうかさ・・・
学生の頃が懐かしいよ・・・まぁ人間なんていかに青春したかだよ！ははっ」

その言葉を聞いた時思ったよ・・・
なんで努力して来た拙者は人々の役にたたなくては行けないのに
なんの努力もしてないこいつら青春オタクが役にたたなくて良いのかいや・・・むしろこいつらは日本を侵すガンだ！
本当に人々の役にたちたいならこのガンを・・・
学校行事などに現をぬかし・・・なんの努力もしない馬鹿どもを切除することだと！
そして拙者は人斬りになった・・・

「わかったか！？拙者のメスは愚民どもを・・・
そしてこれからの日本の進むべき道を切り開くためにあるのだ！！！」

あまりの話のスケールに一同ついて行けずに呆れかえる
そんな中哀が口を開いた

「・・・私も学校行事とか下らないって・・・最初はそう思ってた・・・

なんでこんなことに参加する必要があるんだろうって・・・
でも参加してみれば結構楽しめるし・・・それに大切なことも学んだわ
あなたはその大切なことを学べていない・・・」

哀がまっすぐに学園斎を見て言う
ふぅ・・・と溜息を吐くと学園斎は口を開いた

「残念だよ・・・まぁお譲ちゃんにはまだ分らないかもね・・・
難しい話をしてごめんね・・・でも直に分るよ・・・
拙者の手で日本が生まれ変わったときに」

そうはさせるかと警官達が取り囲む
目暮の「確保！」と言う叫び声と共に１０人近くの警官が飛びかかった
が・・・次の瞬間それは１０個の肉の塊になっていた
全員首を一文字に切り裂かれている

「まだメスを隠し持っていたのか！？」

「拙者には人斬り学園斎としての仕事が残っている・・・さらばだ」

そう言うと学園斎は煙幕を放ちあっという間に消えてしまった

・・・逃げる学園斎

「ふぅ・・・新しいトリックだったんだが・・・まさか服部平次がいるとはな」

「そこまでですよ学園斎さん・・・」

フリーザ様が現れた
それもかなりお怒りのご様子・・・青筋をたてて鬼の形相である

「なぜ・・・」

「？」

「なんで俺の推理の時に自白しやがらなかったぁ！
おかげでとんだ赤っ恥をかいちまったじゃないか！
おまけに後から現れたベジータなんぞに手柄をかっさらわれた！
それもこれも貴様のせいだ！！！」

さすが怒るところが一般人と違うフリーザ様
学園斎はわけがわからんと言う顔をしながらもメスを取り出した

「おかしなビジュアル系だ・・・くずめ！貴様も粛清してやる！」

喉を一閃！・・・と思われたが
メスはフリーザ様の指ににつままれていた
流石の学園斎も驚いたようだ・・・

「こんな刃物じゃぼくは倒せませんよ・・・ふっふっふ
しかし度胸と戦闘力は気に入りました・・・部下にしてやっても良いですよ？」

驚いていた学園斎だがフリーザ様の言葉を聞くと
また氷のような笑顔を浮かべた

「おかしな奴だ・・・拙者の『天駆ける医者の憂鬱』を指だけで防ぐとは
貴様人間ではないな・・・まぁ良い
残念だが部下にはなれんな・・・さっき言ったろ？
おれは日本を変えなきゃいけないんだ・・・あばよビジュアル系！」

去っていく学園斎だが・・・フリーザ様は今度は追わなかった
あれだけの実力差を見せつけたはずなのに・・・
あの男には力ではねじ伏せられない信念があるのだろう・・・
フリーザ様はそんなことを考えながら
哀たちのところへ戻って行った

続く

おまけ：今日のスカウター

ピピピ・・・人斬り学園斎　戦闘力３４０

フリーザ様から一言
ふむ・・・この間の射的屋は例外としても・・・地球人でこれだけの戦闘力とは・・・
驚きましたよ！たしかに警官では適わないでしょうね・・・
あのメスさばき・・・習得するのにも相当な努力をしたのでしょうね・・・

18．赤いフェスティバル（後編）（後書き）

遂に赤いフェスティバルが完結です
今回はまじめにトリック考えました
でも穴だらけだな・・・
多分実際やったら失敗するのでやっちゃダメですよ＾＾；
ってことで学園斎
今後もちょくちょく出す予定です・・・

１９．恋は梅雨前線と共に

誰しも人生に一度は味わうであろう
甘く切ない衝動・・・
人はそれを恋と呼ぶ
そして恋は突然にやってくるものである
それこそ一目で・・・
シェークスピアは自身の作品「お気の召すまま」の中でこう述べている
「恋する運命にある者は誰でも一目で恋をする」と
そしてここにも一人
一目で恋した者がいる・・・

第１９話　恋は梅雨前線と共に

カランカラン・・・

今日もポアロのドアが鳴る
いつも通りの音で・・・
しかしそれを見つめる者の瞳はいつもと違っていた

「行っちゃった・・・はぁ・・・」

梓は大きく溜息をついてボーっとしている・・・
あまりにボーっとしているのでマスターが咳払いをした
我に返り仕事に戻る梓・・・
しかし傍から見ても身が入っていなかった

カランカラン・・・

またポアロのドアが鳴った・・・
そこにはもはやいつも通りとなった光景
今日も面白いことを探す宇宙の帝王フリーザ様がやって来たのだ

「こんにちは・・・やぁダイガクセイ！
この間は大変でしたね・・・ふっふっふ」

「あ！フリーザ様！
まぁ俺は焼きそば焼いてただけなんだけどね・・・」

こちらもいつも通りのレポート魔
ダイガクセイは今日もレポートである

「もう焼きそばの話は良いわ・・・青のりがまた夢に出てくる・・・」

完全に青のり恐怖症に陥った哀もやって来た
3人はコーヒーやサンドイッチをつまみながら談笑している
しかしいつもなら一緒に話をしている梓は今日はうわの空
まったく話に加わってくる様子もない
フリーザ様が声をかけた

「梓さん・・・どうかしたんですか？」

「・・・・・・・・・・・・へ？なんですか？」

様子がおかしいだろ・・・

ダイガクセイとフリーザ様は梓にどうかしたのか聞くことにしかし梓は別になんでもないとしか言わない

「その様子は・・・ずばり恋ね」

哀がずばり言った
梓は否定しているが思いきり顔に出ていた
面白そうなことを発見したフリーザ様は嬉しくて仕方がないどんな人か?などと梓を質問攻めにする

「あの・・・マスターには内緒ですよ・・・
ここ最近良く来るようになったお客さんなんです・・・」

「・・・聞こえてるんだけど」

しっかり聞いていたマスター・・・はさておき
梓の恋の相手は
最近来るようになった年上の男性で
いつもブラックのコーヒーを頼むだけらしい

「で・・・その様子じゃ告白もしてないんでしょ・・・・」

哀が突っ込む・・・今日の彼女は某占い師のようだ・・・

「しかしボーっとするまで夢中とは・・・
死環白でも突かれたんですかね」

ダイガクセイが言うと・・・

「・・・アハラ」

フリーザ様が返す・・・

「あ！ヌメリでしょ！ヒョウにやられた所だ！」

フリーザ様とダイガクセイはマニアな会話を始めてしまった
やれやれと呆れる哀

「とりあえず想いだけでも伝えなきゃ・・・いつごろ来るの？」

「みなさんよりちょっとだけ早い時間にいつも来るけど・・・告白なんて」

梓は顔を赤くしてもじもじしている
そしてマスターの顔をチラチラ・・・
たしかに従業員が客に告白なんてあまり好ましくない

「恋に店員も客も関係ないわよ・・・ねぇマスター？」

「えぇ！？いや・・・その・・・」

突然の哀のキラーパスに言葉に詰まるマスター

「良いわよね・・・」

あまりの哀の気迫にこのままでは地獄に落とされると思ったマスター
彼には「はい」と言うしか選択肢は残されていなかった・・・

次の日・・・

フリーザ様たちはいつもより早めにポアロに来ていた
梓の恋をいじって遊ぶ・・・じゃなくて応援するために・・・

「にしても最近良く降るわね・・・」

空は生憎の雨模様である
梅雨だから仕方ない・・・

「お客さんが来るようになったのも梅雨の始めごろからだけどね・・・」

梓は言った
表情はどこか幸せそうであり
恋をしている人のそれであった

「ふっふっふ・・・良いではないですか！
雨に降られる2人の男女！ラブロマンスの王道です！」

フリーザ様もダイガクセイも楽しそうである
人の恋ほど面白い物はない
人間の悲しい性である・・・
そんなことをしているうちに目当ての人物がやって来た

カランカラン・・・

「いらっしゃ・・・いませ・・・」

そこに立っていたのはくたびれたスーツを来た３０歳くらいの男だった

ところどころ雨に濡れているが本人は気にしていない
ワイルドである・・・

「いつもの・・・」

「あ・・・はい！」

緊張で梓の声が裏返る
それにしても・・・渋い・・・裕次郎か？
男は出されたブラックコーヒーを飲みながら新聞に目を通している

「ちょっと・・・さっさと告白しなさいよ！」

哀がＧＯサインを出す
しかし梓は勇気が出ない・・・言おうとしても言葉が喉で止まる
そんな彼女を見守る３人・・・だが段々イライラして来た
裕次郎はタバコを吸い始めていた・・・ちなみにハイライトである・・・
ハイライトの紫煙がモクモク
フリーザ様たちのイライラもモクモク
そして梓はもじもじ

「そこの君！モクモクしすぎだよ！この裕次郎気取りが！」

突然フリーザ様がブチギレた

「なんだお前？・・・悪いが俺は愛煙家でここは喫煙席だ・・・
俺とこいつを切って離すことはできねぇぜ・・・」

クールに言い放つ裕次郎・・・

フリーザ様とメンチの切り合い・・・激しく火花を散らす

「やめて！」

梓が叫んだ・・・静寂が店を包む・・・

と・・・裕次郎が帰り仕度を始めた

「迷惑かけちまったな・・・もう2度と来ないでやるから勘弁してくれ・・・」

そう言って去ろうとする裕次郎

「待ってください！・・・そんなこと言わないで！もう来ないなんて・・・

私は貴方が好きです！だから・・・また・・・

・・・それとお勘定がまだです」

勢いに任せて告白する梓

その成り行きを見守る哀とダイガクセイ・・・

「・・・俺なんかに惚れちまったのか・・・

悪いことをしたな・・・あんたの想いには・・・答えられない

俺なんかに惚れちゃダメだ・・・俺は人を幸せになんかできねぇんだ

神様に嫌われてるからな・・・」

ふられてしまったようだ

梓の目に涙が浮かぶ・・・が表情は晴々としている

「そうですか・・・分りました！残念だけどすっきりしました！」

満面の笑顔を作る梓
その笑顔を見ると・・・裕次郎はふっと微笑み
そして静かにドアに向った

「あの・・・せめて名前だけでも教えてもらえますか?」

「・・・雨宮」

その言葉を最後に雨宮は去って行った・・・

「あ～すっきりした!」

梓はどこか幸せそうである

「よかったですね・・・私はこれを計算して喧嘩を売ったんですよ」

どうだか・・・哀とダイガクセイは呆れた目でフリーザ様を見た
しかし結果オーライである
今の梓の心はちょうど雨が止んだ空のように晴れ渡っていたのだから・・・

「・・・ていうかあの人お金払ってないよ・・・」

続く

おまけ:今日のスカウター

ピピピ・・・ハイライト雨宮　戦闘力６５

フリーザ様から一言
結局何者だったのでしょう?まぁ今回は梓さんの恋で
なかなか楽しませていただいたので別に良いですけど・・・
それにしても最近オリキャラしかスカウターに登場してませんよ!
どうなってるんですか!?

１９．恋は梅雨前線と共に（後書き）

すみません・・・
確かにスカウターにオリキャラしか出てません
最後に出たコナンキャラが平次で
そのあとテツ→学園斎→ハイライト
まじめにやらなきゃ＾＾；
てことで次回コナンキャラで新しいの出します

２０．入門！哀の漢道

漢・・・
昔の中国？否！
漢字の「漢」と書いて
これすなわち「おとこ」と読む
漢とは・・・
己の肉体を省みず
その信念のために慢心する者のこと・・・
劇画タッチの人生を送る人々のことである
今日の「フリーザ様と灰原さん」は
そんな漢達の宴・・・

第２０話　入門！哀の漢道

哀は久々に夜更かししている
フリーザ様が「寝坊と言うのを私もしてみましょう」などと言ったので
朝早く起きて朝食の準備をせずとも消し去られないからである
なので哀は最近滞っていた解毒剤の研究を進める

「今回のはなかなかいい具合ね・・・パーフェクトには程遠いけど」

ビーカーを見つめながら哀がつぶやく
思いのほか順調に進んでいるようである

「さてと・・・これで良しと・・・

はぁ疲れたわ・・・ちょっと休もうかしら・・・・」

一段落ついたのか眠ることにした哀
地下室から出てベッドへ向った・・・
ビーカーを残して静まり返る地下室・・・
だったが真夜中の侵入者が現れた・・・

「はぁ・・・まったく・・・慣れないことなどするものではありませんね
寝坊しようと思ったら興奮して眠れなくなってしまいました・・・
ハイバラさん!なんとかしなさ・・・いないのですか・・・」

真夜中のフリーザ様登場
哀は寝てしまったのでいない・・・
仕方ないのでベッドに叩き起こしに行こうと
地下室を出ようとしたフリーザ様だったが・・・
良く考えると哀が使っているこの地下室に入ったのは初めてである・・・
妙にワクワクしてきたフリーザ様・・・
いろいろいじくってみることにした・・・

まずパソコンを起動・・・IDとパスワードだと!?生意気な・・・
本を手に取る・・・なんですか?このわけの分らない公式は・・・
そして遂に解毒剤の試作品であるビーカーに手が伸びた・・・

「これを研究中なんでしょうか・・・
そう言えばいつも試作品がどうとか言ってましたね
あまりうまく言っていないようなことも言っていましたっけ・・・」

フリーザ様は自分が完成させることにした

とりあえずその辺りにある薬品を適当にビーカーに注ぐ・・・
混ぜる・・・アルコールランプで加熱・・・
しかし特に変化のないビーカーの内側・・・
フリーザ様は飽きと眠気で研究室を後にした

翌朝・・・
学校に行く前にビーカーの中の薬品を処理しておこうと思った哀
地下室に向う・・・そこには加熱されるビーカー

「なんでアルコールランプがついてるのよ・・・」

不審に思ったがとりあえず消そうと近付いた時だった

ボン!!!

「きゃあっ!!!」

ビーカーの中の薬品がいっきに吹き飛んだ
部屋の中に充満する怪しげな煙・・・
哀は煙に咽ている
数秒して煙が消えた・・・と同時に博士とフリーザ様がやってきた

「どうしたんじゃ哀君!?」

「いきなりビーカーの中の薬品が爆発しただけよ・・・
ところで誰か試作品をいじらなかった・・・?」

「あぁ・・・私がやっておきました・・・お役にたちましたか?」

何の悪びれもなくフリーザ様が言った
哀は2・3小言を言うと学校へ行くため出て行った
しかしこの時哀の体には少しずつだが変化が現れ始めていた・・・

帝丹小学校・・・

いまは算数の授業中である・・・小林が簡単な足し算の問題を黒板に書く
これからこれを生徒に解かせようと言うのだ・・・

「は～い！だれかこの問題解ける人いるかな～？
それじゃあ・・・松坂くんどお？」

まぁさすがは小学一年生・・・算数と言えども頭がごっちゃだ・・・

「う～ん・・・それじゃあ灰原さんに答えてもらおうかしら」

哀なら答えられるだろう・・・そう期待する小林・・・
哀はいつも通りかったるそうに椅子から立った
しかし口から出た言葉はいつもと違った・・・

「ならばこの拳で応えてやろう・・・」

「え・・・いや・・・普通に答えて欲しいんだけど・・・」

あまりに意外な言葉にキョトンとする小林・・・
隣の席のコナンも目を丸くする

「え！？・・・あぁそうね・・・12よ・・・」

「はい正解」と流す小林・・・
しかし哀は困惑した・・・なんであんな言葉が出てきたのかしら?
寝不足でおかしくなった?
あり得るわ・・・フリーザ様の影響ね・・・きっと
とりあえずそれで納得することにした哀

症状1　拳で応えようとするようになる

昼休み・・・コナンと哀は屋上にいた
哀は解毒剤の試作品が完成しかけたが
フリーザ様に妨害されたことをコナンに愚痴っている
ははっと笑うコナン・・・

「ところでお前・・・さっきなんであんなこと言ったんだ?」

コナンが聞く
嫌なことを蒸し返すわね・・・哀はイラっとしたが
疲れてるんだろうとだけ言った
・・・そこへ光彦達がやって来た

「あ!2人ともこんなところにいたんですか・・・
今日の放課後皆で博士のうちへ行こうと思うんですが」

コナンは別に暇だからと返事をする
どうやら久々に探偵団の会議をするらしい・・・実質遊びだが

「分ったわ・・・博士にメールしておく」

そう言うと哀は携帯を取り出すと・・・
目にも止まらぬ速さでメールを打ち始めた

「あ～ったたたたたたたたたたたた・・・ほぅあたぁ！！！」

その間わずか2秒・・・恐ろしい高速メール打ちに唖然とする探偵団
しかも「あたたたたたたたた！！！」という謎の雄叫び付きである
明らかにいつもの哀ではない

「灰原さん・・・どうかしたんですか？」

呆然としながらも光彦が聞く・・・

「え？あ！・・・えっと・・・声を出したほうが体にいいからよ」

なんだよ・・・その言い訳・・・
コナンは軽く呆れた・・・が
確かに哀の様子はおかしかった

症状2　百裂拳が使えるようになる

放課後・・・

学校が終わり探偵団より一足早く校庭に出た哀
すると数人の男子に女の子がいじめられていた
良く見るといじめられているのは同じクラスの杏
いじめているのは1年A組の男子3人・・・通称「バカガキ三銃士」
だ
哀はすかさず止めに入る

「やめなさい！女の子を寄ってたかっていじめるなんて・・・
男として最低よ！恥ずかしいと思わないの！？」

「あぁ！お前はB組の灰原！
なんだよこの茶髪女！不良！不良！」

「俺たちのストレス解消の邪魔するなよ！」

何を言っても無駄なのがこの歳の男の子である・・・
それにしてもストレス解消なんて・・・
お前らそれほどストレス溜まる生活してねぇだろ！
哀は呆れながらお説教することに・・・

「ストレス解消って理由でこんなことして良いと思ってるの？
そんなことじゃろくな大人にならないわよ・・・」

しかし聞く耳を持たない・・・聞かザル、聞かザル、聞かザルのバカガキ猿三銃士
哀が説教している目の前で杏をいじめる・・・
三銃士の一人が砂を投げつけた
その時哀は遂に切れた！

「てめぇらに今日を生きる資格はねぇ！」

そう言うと同時に哀の上半身の衣服が破れ飛び・・・
中からは筋肉の鎧が・・・出るわけはない
我に返った哀

「きゃあああああ！！！」

「おい！灰原！なにやってんだよ！」

コナン達がやってくる・・・三銃士は「や～いロシュツキョー！」
と叫びながら逃げて行く
それにしても一体哀の体はどうなってしまったのだろうか・・・
哀もようやっとことの重大さに気が付いた・・・

症状３　怒ると服が破れるようになる

続く

おまけ：今日のスカウター

ピピピ・・・目暮警部　戦闘力１５

フリーザ様から一言
小太りの警部さんです・・・コナンの原作ではもっともお馴染みの
警察関係者でしょう
特に格闘技をやっているわけでもなさそうです・・・捜査一課最弱
との声も・・・
ところで帽子のなかはどんなヘアースタイルなんでしょう？

２０．入門！哀の漢道（後書き）

前回コナンキャラを登場させると約束しました
・・・すまん・・・ありゃうそだった（爆）
その代わりバカガキ三銃士が登場する結果に＾＾；
でもまぁスカウターでは目暮警部が出てきましたし
良いってことにしてくれると幸いです
ってことで次回に続きます
次回こそコナンキャラを・・・

21．決戦！漢と漢・・・

２００Ｘ年・・・
世界は核の炎に包まれそうになったりもしたけど（キューバ危機とか）
とりあえず上っ面だけの平和外交とおべんちゃらで
なんとか危機を回避して来た・・・
たまに戦争とかどんぱちやるけど・・・
・・・・・・
しかし・・・人類は死滅してはいなかった！

「ひゃっは～！南アルプスの天然水だ～！！！」

「弁当もたっぷりあるぜ！あ・・・温めてください」

「何？お前フィリピンの金持ってんの？
日本じゃケツを拭く紙にもなりゃしねぇってのによ！」

世界はちょっとだけ暴力が支配する世界になっていた・・・

第２１話　決戦！漢と漢・・・

フリーザ邸（阿笠邸）・・・

服を着替えた哀と少年探偵団・・・
そして博士とフリーザ様がいる・・・

「それでは会議を始めます・・・今日の議題は
灰原さんがなぜこうなってしまったかです・・・」

議長　円谷光彦

「検討はついてるわ・・・フリーザ様・・・貴方のいじった薬よ・・
・」

哀は思いっきりフリーザ様をにらみつけた
フリーザ様はいつものようになんの悪びれもなく・・・
のはずだったが異変に気づいた
何かがまずい！

「う・・・うわぁ！」

フリーザ様は突然襲ってきた無数の拳に思わず身を屈める

「なんですか今のは？」

「貴様が見たのは私のオーラだ！・・・あ」

症状４　オーラが出るようになる・・・

米花駅・・・

そこには学校を終えた蘭と友人の園子がいた・・・

「もうすぐ・・・もうすぐ帰ってくる・・・」

「しばらく会ってなかったもんね・・・」

二人が今待っているのは・・・
電車が到着したのか改札から人が出てくる
その中に色黒のその人はいた・・・
蹴撃の貴公子・・・京極真
園子の交際相手であり・・・空手の腕は世界でもトップクラスである・・・

「真さん！こっちよ～！」

園子は嬉しそうに手を振る
京極も嬉しそうだ・・・一応は遠距離カップルである

「京極さんももっと園子のそばにいてあげれば良いのに・・・」

「私も園子さんのそばにいたいのですが・・・まだまだ私は園子さんにふさわしくありません
だから世界中の強い男達を倒してもっともっと自分を磨かなくては・・・」

燃える空手家京極真・・・凄まじいオーラである

「はっ！！！」

「どうしたの哀ちゃん・・・」

皆で哀が元に戻る方法を考えているときだった・・・
哀が突然何かに反応した

ビックリして皆哀を見る・・・

「呼んでいる・・・」

哀が突然外に駆け出した
フリーザ様とコナン達は止めようと後を追いかけた

「強敵が俺を呼んでいる・・・」

症状5　強敵に敏感になる・・・末期

「それじゃあ私そろそろ帰るね・・・2人の邪魔しちゃ悪いし・・・」

近くのファーストフード店で食事中の3人
蘭は折角久しぶりに会ったカップルを気遣って席を外す
・・・が

ドガン!!!

店のドアが消し飛ぶ・・・そして現れる哀

「見つけたぞ・・・京極真・・・強敵(とも)よ!」

どこで拾ったのか肩パットをしている
蘭と園子が唖然としてみている中・・・この男は違った
哀から放たれる凄まじいオーラを感じ取ったのだ・・・
この子・・・できる!

「私と勝負ですか？・・・良いでしょう！
園子さんのために絶対に勝ちます！」

「え・・・でも相手哀ちゃんだし・・・」

蘭と園子が困った顔で成り行きを見守る・・・
フリーザ様やコナン達も到着した

そして二人の死合が始まった・・・
蹴りの連撃を入れる京極・・・高速の突きを返す哀・・・
テリヤキバーガーとスマイルを注文するフリーザ様
両者の実力は互角・・・
やがて闘いは拮抗し・・・膠着状態が訪れた・・・

「なんてすごい緊張感・・・両者とも隙の無さと疲労で間合いに入れない・・・
まるでヒョードルＶＳミルコを見ているようだわ！」

蘭が力説する・・・

「どうやら・・・お互い間合いに入れんようだな・・・」

「奥義を出すより道はなさそうですね・・・」

凄まじいオーラを放つ2人・・・いつの間にか天からは雹が降り
激しい雷鳴が鳴り響く・・・

「天が興奮している！この闘いの結末は神でもわからない・・・」

「蘭・・・コナンのキャラの言うセリフじゃないわよ・・・」

そんな会話の間にも2人の間合いはじりじり詰まる
そして・・・両者が必殺の間合いに入った！

「ほぅあ！！！」

「はぁあ！！！」

「ご一緒にポテトも如何ですか？」

・・・・・決着

地面に伏せているのは哀・・・静かに寝息をたてている・・・
京極の拳は哀を捉えていない・・・何が起こったか分らない京極・・・

「盛り上がってるところごめんね京極さん・・・でもこうした方が良かったんだ」

コナンが近寄ってきた・・・
麻酔銃で哀を撃ったようだ
その後コナン達は迷惑をかけた店に謝り
何とか損害賠償請求だけは避けることが出来た
フリーザ様が圧力をかけたと言う目撃証言もあるが・・・
なにはともあれ哀たちは家路についた

翌日・・・

算数の授業中・・・小林は黒板に問題を書く・・・そして

「それじゃあ灰原さん・・・解いてくれる?」

「・・・・・8よ」

いつもの哀に戻っていた・・・どうやら京極との闘いで全オーラを
使い切ったためのようだ
何はともあれ一件落着・・・

「あぁ!ロシュツキョーの灰原が来た!」

「や~いロシュツ!ロシュツ!」

多分・・・一件落着・・・

おまけ:今日のスカウター

ピピピ・・・京極真　戦闘力176

フリーザ様からの一言
テリヤキとポテトをいただきながら見せていただきましたよ・・・
私もちょっと空手をかじりましたが・・・あそこまで使いこなせる
とは
もはや達人ですね・・・ところで今回のはなし・・・
この俺が全然目立ってないじゃないか!!!

21．決戦！漢と漢・・・（後書き）

哀ちゃん元に戻れました・・・＾＾；
本当は一話で元に戻る予定だったんですけど
きっとバカガキ三銃士のせいです
でも彼らもいいキャラしてるので
どこかでまた使います・・・

22．高原の風

吹きぬける爽やかな風
青く澄んだ空
静かに揺れるシラカンバの林
そして優しくそびえ立つ山・・・八ヶ岳
そしてそこに立つビジュアル系がひとり・・・
彼は今標高１０００ｍの高原の町
清里に来ていた・・・

第２２話　高原の風

ある夜・・・
フリーザ様と２人の部下はテレビを見ていた
どうやら旅番組のようだ・・・本日のゲストは沖野ヨーコである

「・・・あ！おいしぃ！このソフトクリーム！」

「ここのソフトクリームは皆清里の牧場にいる牛の乳から作られてますから」

本日紹介されているのは山梨県の北部
八ヶ岳南麓の町清里である・・・ソフトクリームがおいしいらしい

「いいですねぇ・・・旅ですか・・・
よく宇宙船で他の星へ行ったりはしましたが・・・
地べたを歩いていく旅はまた格別でしょうね・・・」

フリーザ様はすっかり見入っている
哀や博士もなんだかんだで旅番組は好きみたいである
博士は次のキャンプ地の候補として考えているようだ

「・・・と言うことで今日の『行こう！田舎を馬鹿にしに』
いかがだったでしょうか？本日のゲストは沖野ヨーコちゃんでした」

番組が終わった
ＣＭが始まる・・・その時突然フリーザ様が立ち上がった
かと思ったらそそくさとリビングを後にした・・・

「あれ・・・何かたくらんでるわね」

翌朝・・・

「ふぁ～・・・おはよう・・・」

「大変じゃ！哀君！こ・・・これを！」

朝一でうるせぇじじいだな・・・
そう思いつつも哀は博士が手に持つ紙に目をやる
置手紙か何かのようだ・・・
なになに・・・キヨサトニイッテキマス　フリーザ
・・・・・・！？

「清里って・・・本気！？」

はたしてフリーザ様の運命は？

さてさて・・・旅立ったフリーザ様は・・・
まず米花駅から新宿へ・・・そして中央線に乗り換え小淵沢まで
そして小淵沢でディーゼルエンジンのイカス電車
小海線に乗り換え３０分ほど電車に揺られると・・・
フリーザ様は清里に到着していた・・・
新宿からは本当にある経路なので皆さんも是非やってみましょう

「ここが清里ですか・・・初夏だと言うのに涼しいですね・・・」

八ヶ岳南麓の町は都心から電車で1～2時間・・・
また標高１０００ｍという高地故の涼しさで避暑地としてにぎわう

「とりあえずおなかが空きましたね・・・
そうだ!ヨーコちゃんが食べていたホートーとか言うのを食べましょう」

ホートーではなく「ほうとう」
山梨県の・・・早い話がうどんの一種である・・・
野菜がたっぷりと入ったヘルシーな田舎の味
フリーザ様はお気に召したようである・・・

「さ～て・・・食後のデザートはもちろんソフトクリームです・・・
たしかこの道をまっすぐ登って行けばあると言っていましたね・・・」

フリーザ様はとぼとぼ歩き始めた・・・見渡す限り森と牧場・・・
たまにすれ違う馬や牛を眺めながらフリーザ様はソフトクリームをめざした

歩くこと２０分・・・目的のソフトクリームをゲットした
爽やかな風に吹かれながらソフトクリームを舐め
そのまま気の趣くままに高原の道を散歩する・・・

「やれやれ・・・こんなにのんびり出来るとは・・・気に入りましたよ」

いつも好き勝手にやっている人のセリフとは思えない

「おや・・・なんでしょうか?真っ赤に塗られて・・・素敵な橋ですね・・・」

フリーザ様はいつの間にか赤い橋に来ていた
ここも清里の観光名所・・・山と山の間にかけられた真っ赤な橋
秋になると紅葉も綺麗である・・・
山と山の間の谷を渡るようにかけられた橋なので
当然その手の輩も引き付けることになる・・・

「よ～し!よ～し!飛ぶぞ～飛ぶぞ飛ぶぞ～!
バンジーだ・・・ヒモの無いバンジーだ!」

そう言う輩である・・・
橋から山の景色を眺めていたフリーザ様は
あまりのやかましさに声をかけた

「うるさいですね・・・何をわめいているんですか?
せっかくの気分が台無しではないですか・・・」

「なんでぇ!しゃらうるせぇな!もう飛びてぇんだよ!
そうすりゃあ開放されるずら!?こんな人生からも!

そして何もねぇこの田舎からも！」

どうやら死ぬ気らしい・・・フリーザ様はここでやっと気づいた

「何が不満なんですか？何もない？ありますよ
ソフトクリームとホートーが・・・」

「へっ！そんなもん！満ち足りたおめっとーら都会の人間のためのもんだ！
実際に住んでみろし！ゲーセンもカラオケもろくにねぇ！
デパートや大型のスーパーに行くのだって車で２０～３０分！
不便なんだよ！田舎はよ」

でも自殺するほどじゃ無いだろ・・・
フリーザ様でもそう思った・・・しかし話を聞くとそれだけでは無いようだ
田舎を出ようと都会の大学を受験したがみごとに落ち
親に農業を継ぐように言われたらしい

「おれはこんな田舎で一生を終える気なんてねぇ！
今こそ開放の時だ！見ろ！これがコードレスバンジーの真髄だ！」

飛んでしまった・・・がフリーザ様のサイコキネシスでまた元の位置へ・・・

「こんなところで死なれたらせっかくの景色が台無しです」

「うるせぇ！邪魔しちょし！」

方言たっぷりに言い放つとまた飛び降りた・・・が

また戻される・・・これは楽しい・・・
フリーザ様はいつの間にかそうやって遊んでいた・・・
そして1時間後・・・コードレスバンジーは９９回を数えた

「あ・・・あと1回で・・・１００回ずら?」

「そうですよ・・・頑張るのです若者よ!」

さすがに疲労の色が隠せ無い若者・・・
しかし最後の力を振り絞り橋の真っ赤な手すりに足をかける
本来の目的はすでに忘れたようだ・・・

「うおおおお!バンジー王に・・・俺はなる!」

飛んだ・・・とそこへ・・・

「やっと見つけたわよ!」

哀と博士が予備の追跡メガネで探しに来たようだ

「あ・・・ハイバラさん・・・」

一瞬気が散ったフリーザ様・・・

「あれ・・・止まんないんですけど?
・・・・・・・・ぎゃあああああああ!
おれはまだ死にたくねぇよ～!!!」

全力の雄叫びは何とかフリーザ様に届き
後３０ｃｍの所で助かった・・・それにしても本当は死にたく無か

ったようだ

「フリーザ様・・・ありがとうよ・・・おれはもう一度親父と話してみる・・・
バンジーで度胸もついたし・・・見ててくりょ・・・
いざとなりゃ親父を殴ってやらぁ！」

爽やかな顔で去っていく若者を見送る3人
日が傾き始めた高原に爽やかな風が吹きぬけた

「帰るわよ・・・」

「そうですね・・・結構楽しんだし・・・もう良いでしょう
あ・・・あとこれお土産です・・・」

それは近くの店で買った山菜だった
今日は山菜御飯にでもするか・・・などと話しながら
フリーザ様たちは清里を後にした

続く

おまけ：今日のスカウター

ピピピ・・・高木渉　戦闘力３２

フリーザ様から一言
まぁ・・・並の刑事さんですね・・・若干ドジです
野球でもやっていたのか缶を相手に投げて倒したこともあります

しかしなんと言ってもあの悪運の良さが特徴ですね
私もあやかりたいですよ・・・ふっふっふ

22．高原の風（後書き）

ふと書いて見ました清里
知ってます？
私の地元の近くです・・・＾＾；
ほうとう食べたくなっちゃいましたよ
あと私のお勧めは
便器型の容器に盛られるソフトクリーム
「くそふと」です
チョコレート味で頼みましょう（爆）

23．逮捕されちゃうぞ！

婦警・・・
女性の警察官のことである
正義のために日々働くおまわりさん
しかし
世の中の男は婦警と聞くと・・・
ミニスカポリス・・・手錠・・・
と良からぬ想像ばかりしてしまう
そんな凛々しくも悲しい婦警さんの話

第２３話　逮捕されちゃうぞ！

フリーザ様は今日は一人でブランチ
哀は探偵団と出かけ・・・博士も近所の集まりに行ってしまった
非常に退屈そうなフリーザ様は何度目かの欠伸をかいた

「退屈ですね・・・一人じゃんけんも一人ババヌキも飽きてしまいました」

退屈すぎて死にそうなフリーザ様
仕様が無いのでテレビをつける・・・
いいとも増刊号がやっている
しばらく見入るフリーザ様・・・
しばらくしてＣＭに切り替わる・・・今話題の人たちがちらほら・・・
次は自動車のＣＭが流れ出したようだ・・・

ハイウェイを走るメタリックなボディが目に入る・・・

「ドライブですか・・・良いですね・・・
そうだ!ドライブに行きましょう・・・ちょうど博士さんが車を置いて行ったことですし」

さっそく車のキーを持ち出し博士の黄色いビートルに乗り込む

「さて・・・運転方法ですが・・・確かこんなことをやっていたような?」

見よう見まねでいろいろ試すフリーザ様
そしてアクセルを踏んだ・・・

「おぉ!走り出しました!ではドライブに行きましょうか!」

門をぶち壊しながらフリーザ様はドライブに出かけた・・・

フリーザ様はファミレスの駐車場に車を停めた
もちろん隣の高級車にぶつけて・・・
中から強面のお兄さん達が出てくる
が・・・次の瞬間泣きっ面のお兄さん達に変わっていた・・・
ファミレスで食事を済ませて次に行く場所を考えるフリーザ様
非常に楽しそうだったが・・・

「あなたがこの車の持ち主?」

ミニパトの婦警が声をかけてくる

「えぇ・・・まあ博士さんの物ですが・・・イコール私の物でしょう」

「あそう・・・まったくこんなに事故を起こすなんて・・・
反則切符切るわよ！・・・じゃあ免許証だして・・・」

免許証？
フリーザ様の初めて聞く言葉・・・
もちろん持っているわけが無い

「じゃあフリーザ様の顔パスってことで・・・」

「なるわけ無いでしょ！仕方ない・・・署まで来てもらうわよ！」

フリーザ様は連行されてしまった
まあミニパトで警視庁までドライブ出来たが・・・

その頃家に帰ってきた哀・・・

「まったく・・・子供は元気で良いわね・・・この暑い中良く動き回れるわ」

汗を拭きながら冷蔵庫からウーロン茶をだして飲む
コップが空になったところで電話が鳴った・・・

「はいもしもし阿笠です・・・
はい？・・・えぇ・・・そうです・・・
えぇ！？はい・・・分りました・・・すぐ向います」

受話器を乱暴に置くと汗をかいた服を着替え
物凄い剣幕で家を出る哀
彼女が向った先は・・・

警視庁交通課・・・

「あのね・・・私ビジュアル系のバンドに興味はないの・・・
わかった?もう一度聞くわよ?お名前は?」

「フリーザだと言っているでしょう・・・もちろん呼ぶときは様を
つけなさ～い!」

「だから!芸名なんか聞いて無いわよ!本名言えっつってんのよ!」

ぶち切れる婦警さん・・・否ブチギレポリス
さっきからずっとこの調子でまだ名前も聞けていない
調書は全く埋まっておらず真っ白・・・
しかしフリーザ様は名前を名乗っているだけなので仕方ない

「フリーザさん?いい加減にしないと留置所に放り込むわよ?
入りたく無いでしょ?・・・それじゃあ本名は?」

「様をつけなさい!フリーザ様ですよ!・・・それよりカツ丼まだ
ですか?」

頭から湯気を上げながら怒鳴り散らすブチギレポリス
その声は警視庁の建物の隅々まで響き渡る・・・
そんな騒ぎを聞きつけたのか一人刑事がやって来た

「ちょっと由美！なに騒いでるのよ！」

「あ！美和子・・・どうもこうもないわよ！このビジュアル系の違反野郎が・・・」

ブチギレポリスは由美と言う名前らしい
由美はかなりヒートアップしている・・・

「そっちの貴方刑事さんですか？この制服警官じゃ話しになりませんよ・・・変わってもらえます？」

由美の大火に更にガソリンを注ぐフリーザ様・・・
今にもその辺りの物をぶち壊しそうな由美を何とかなだめ
美和子が変わりに調書をとることに・・・

「まだ名前も書いて無いじゃない・・・何やってんのよ・・・で・・・お名前は・・・」

「フリーザです・・・ちょっと！カツ丼まだですか！？」

・・・だめだこりゃ
美和子は一瞬で諦めた

「こりゃ留置所で絞るしかなさそうね・・・」

二人でフリーザ様を留置所に入れる算段を始めた時だった

「すみません！遅くなりました！」

博士と哀がやって来た・・・

美和子や由美と目が合う・・・

「あれ?阿笠さん・・・この人阿笠さんの知り合いだったんですか?」

「すみません・・・実はかれ南米の奥地に住む『ンポタヌヘ族』の青年で
今わしの家に居るんじゃが・・・
日本語は結構喋れるんじゃが日本のことが良く分らなくてのぉ・・・」

必死にうそをついて謝る博士
横では哀が「なにやってるのよ!」とフリーザ様を小突いている
その後30分ほど謝り続けた末に
何とか反則金だけで勘弁してもらえることに・・・

「ふぅ・・・良かったわねフリーザ様・・・もうするんじゃ無いわよ」

「そんなことよりカツ丼出せよ!」

この一言で博士は更に20分謝ることになった・・・
博士にしてみれば寿命が縮まるような思いだった
しかしその後
莫大な反則金と公共物破壊に対する町からの賠償請求・・・
そしてぼこぼこにされたビートルを目の前にして
博士は泡を吹いて失神したと言う・・・
そのことで1ヶ月の入院を余儀なくされたことは言うまでも無い・・・

・

続く

おまけ：今日のスカウター

ピピピ・・・宮本由美　戦闘力１０

フリーザ様から一言

女性にしては戦闘力は高めですし、男の憧れのひとつ婦警であること
も

非常にポイントが高いのですが・・・如何せんやかましいです

それとカツ丼を出さないところもマイナスです

23．逮捕されちゃうぞ！（後書き）

婦警・・・いいですねぇ＾＾
ロマンです！
それにしても
久々に本腰の入ったギャグ話だった気がします
最近シリアスだったり
トーンダウンしてたりでしたから・・・

２４．アルバイト

博士が入院した・・・
莫大な賠償金と罰金・・・
ボコボコにされた愛車・・・
悪びれる様子も無いフリーザ様・・・
博士は追い詰められ
そしてその重圧に勝つことが出来なかった
博士がいなくなた後の哀達には
負債だけが残されていた・・・

第２４話　アルバイト

とりあえずローンを組んでもらった哀
しかし罰金の賠償金を払うには収入が必要である
博士が入院した今彼らの収入はゼロ
生活を切り詰めてもどこまで持つか・・・

「ってことで・・・貴方には働いてもらうわよ！」

今日の哀は一味違う
目は真剣そのもの
その視線は真っ直ぐにフリーザ様を射抜いている

「この私が？このフリーザ様に働けと？いい度胸です・・・消し去られたいようですね」

フリーザ様がいつもの如く威圧する

しかし哀は一歩も退かない・・・
フリーザ様は人差し指を哀に向けエネルギー波を放とうとしている

「撃つの?良いわ!それでこの状況が変わるなら撃ちなさい!」

この哀の気迫に押し切られる形となったフリーザ様
仕方なくワー○ンを手にする

そんなこんなでフリーザ様最初の面接がやって来た・・・
近所のコンビニである

「こんにちは・・・面接を受けに来ましたよ」

「あぁ・・・よく来てくれたね・・・」

口ではそう言っている店長だったが顔が引きつっている
いきなりビジュアル系が来たのだから仕方がない・・・

「それじゃあ・・・なんでここで働こうと?」

面接が始まった
はっきり言ってコンビニのバイト程度で大した理由などあるわけ無いのだが
建前上そう聞いてくる店長・・・

「お金が欲しいからです・・・」

「でも他にも働ける所いっぱいあるよね？なのになんで？」

「ふっふっふ・・・なんとなくですよ・・・」

・・・常識なしと
店長は完全に雇う気を無くしたようだ

「あのね・・・大体コンビニで働こうって言うのに何？その格好
そのカラフルな髪も・・・ポリシーなのか何なのか知らないけど
そんなんじゃ無理だよ！ってことでお引取りください」

その頃フリーザ様が心配でついてきていた哀
ファッション誌を立ち読みしている・・・
そこへフリーザ様がやって来た

「どうだったの？」

「腹立たしい！人を見た目で判断するとは！」

ま・・・フリーザ様だしね・・・
哀は一瞬挫けそうになった
が・・・博士が楽になるように早く仕事を見つけなくてはならない
哀とフリーザ様は次へ向った・・・

次はパチンコ店だった

「面接を受けに来ました」

フリーザ様が店長に話しかける
が・・・店長は黙ってフリーザ様を見る・・・
1分ほど凝視すると店長は口を開いた

「今忙しいんだよね・・・見てよこのお客さんの数・・・
ってことでさ・・・まともな格好が出来るようになってから出直してきて」

予想外の即不合格に頭に血が登ったフリーザ様・・・
エネルギー波を放ってパチンコ台を4台ほど吹き飛ばす

「いい加減になさい・・・見た目だけでこのフリーザ様を雇わないとは・・・
どうやら痛い目に会わないとわからないようですね・・・」

フリーザ様は店長の胸倉を掴んで持ち上げる
店長ビビって店員を呼び寄せるが
皆気合だけで吹き飛ばされてしまった

「ちょっと!?何やってるのよ!」

気付いた哀が止めに入った

「彼が悪いんですよ・・・このフリーザ様を雇わないから」

「その格好で雇う方がどうかしてるわ・・・大丈夫ですか?すみません」

店長は大丈夫とだけ言うと服をはたいて行った

「とにかくうちじゃ雇えないよ・・・他を当たってくれ・・・下さい」

フリーザ様はしぶしぶパチンコ店を後にした
店の客も困惑していたが・・・フリーザ様がいなくなるとそれまで通りパチンコを再開した
ただ一人を除いては・・・

仕事が決まらず2人はとぼとぼ歩いていた
このままでは負債に潰されフリーザ様と心中だ・・・
哀は気分が暗くなる
一方のフリーザ様はまだ腹が立っているのか
顔には青筋が立っている
傍から見ればかなり近付きにくいオーラを出している2人
しかしそんな2人に近付く者がいた

「おいあんた!さっきパチンコ屋で暴れてたろ?」

2人は驚いて振り返る
哀は「また警察だ」とでも思ったのか冷や汗をかいている
しかしそこにいたのは
いかにもそっち系の男だった・・・

「さっき見てたよ・・・すごい腕前だな・・・」

フリーザ様も哀も突然現れた「そっち系」に唖然としている
しかし男はお構いなしに話を続ける

「聞いていたが仕事を探しているんだって?

ならピッタリの仕事を紹介してやれるんだが・・・俺と一緒に来ないか?」

「なに!仕事を!?すばらしい!地獄に仏とはこのこと!」

思わぬスカウトに手放しで喜ぶフリーザ様
しかし哀は喜べない・・・目の前にいる男は「そっち系」なのだ

「帰るわよ!」

哀はフリーザ様の手を引いて言った

「何を言っているんです?せっかく仕事が見つかったと言うのに」

「仕事って・・・彼を見なさいよ・・・どう見ても裏の仕事に決まってるじゃない」

そう言うと哀はフリーザ様の手をぐいぐい引っ張る
しかしフリーザ様はとても納得できない・・・せっかく仕事が見つかったのだ
表も裏も知ったことか

「いいじゃないですか・・・裏の仕事ってことは貰いもそれ相当と言うこと
そうでしょう?おにいさん」

「あぁ・・・あんたなら即高給取りだ
それと俺の名前は桜塚だ・・・これから同僚だから覚えといてくれ」

「だそうですよ?それでは行きましょう!ハイバラさん!サクラヅ

カさん！」

こうしてフリーザ様は桜塚について行くことにことに・・・
はたしてフリーザ様の仕事はなんなのか？
そして哀は無事に帰って来られるのだろうか？

続く

おまけ：今日のスカウター

ピピピ・・・清里バンジー王　戦闘力７

フリーザ様から一言
１００回コードレスバンジーに挑戦してくれたすばらしい青年です
あれからどうしているのかは知りませんが
あれだけの根性があれば出来無いことはないでしょう

24．アルバイト（後書き）

アルバイトの面接で
なぜうちを志望したか？
って聞いてくるの面倒ですよね
大した理由なんてねぇよ＾＾；
それとも
「ここの職場の明るい雰囲気とか
働いている皆が活き活きとしているところが
気に入ったからです」
とでも言って欲しいんでしょうか？

25．ダーティ・ワーカーズ

世の中表があれば裏がある
どんなに裏を嫌って光で照らしても
必ずまた影になる部分が出来る
ちょうど太陽が地球全体を照らすことが出来ないのと同じである
光があるから陰がある
昼があるから夜がある
表があるから裏がある
さてさて・・・
表から裏へ行ったフリーザ様と哀は・・・

第25話　ダーティ・ワーカーズ

中央自動車道を一台の車が走る・・・
毛利一家を乗せたレンタカーである
目的地は山梨県と長野県の県境にある田舎町
そこに本日の依頼人がいる・・・

それから車を走らせること2時間・・・
私立探偵毛利小五郎は八ヶ岳の麓の小さな町に降り立った
高速道路や中央線の特急が通り
牧場があるこの町は乗馬好きのセレブや芸能人が馬を所有していることで有名だ
大河ドラマの撮影も行われる・・・

「馬ねぇ・・・競馬の時はお世話になるが・・・

俺もサラブレッドを一頭この町に持ってみるか？」

「そんなお金がどこにあるのよ！
馬なんか買ってるお金があったらお母さんにプレゼントでもしたら？」

馬を見ながらつぶやいた小五郎に蘭が文句を言う
いつもながらの光景にコナンは呆れつつも
気持ちの良い牧草の香りに体を伸ばした

そうしているうちに依頼人が現れた・・・
６０代と思われる女性である
コナン達は牧場を離れ車で１０分ほどの依頼人の家に向った

依頼して来たのは三枝真由美さん
最近土地を明け渡せ！と脅迫状や脅迫電話
更に家の窓ガラスを割るといった物理的嫌がらせをしてくる輩がいて
そいつらが電話で「今日直接話をしに行く」と言ってきたらしい

「警察に言っても『言ってるだけで来ない』と相手にしてくれず
困って毛利さんに相談した次第です・・・」

「なるほど・・・そいつらを追い払い・・・正体を暴いて欲しいと」

今回の以来はそう言う物であった
小五郎達はとりあえずその輩が現れるのを待つことに・・・

１時間後・・・

ピンポーン

チャイムが鳴った・・・三枝が見に行く

「はい・・・どちら様?」

「おれだよ!電話したろ?さっさとドアを開けるぉ!」

強い口調で言ってくる男
三枝は思わず小五郎を見た・・・

「開けてください・・・いきなり襲ってきたりはしないでしょう
それにいざと言うときは我々がついています」

その言葉を聞くと三枝は恐る恐るドアを開けた
そこに立っていたのはいかにも「そっち系」の男
つんつん頭のビジュアル系
赤みがかった茶髪でショートボブの少女
・・・・・・

「っておい!」

コナンがすっとんきょうな声を上げる
そこにいたのはフリーザ様と哀だった

「ん~?おめえらは確か阿笠博士のとこの・・・」

小五郎も気付いたようである

「これはこれは皆さん・・・どうしてこのような所に?」

「お前らこそなにやってんだよ!?」

コナンが聞くと哀がずいと出てきた

「ごめんなさい・・・私にもまだ黒い血が流れていたみたい」

なんのこっちゃ
コナン達は頭がこんがらがってしまった
しかしこの状況から見て
この件にフリーザ様達が関与しているようである
小五郎はとりあえず三枝を交えて話を聞くことにした

「さぁ三枝さん?今日はじっくりお話しましょうか・・・
さっそくですがねぇ・・・この土地を明け渡して欲しいんですよ」

桜塚が切り出した
三枝は怯えながら聞いている

「あんたどうせ田舎で余生をってやつでしょ?
こっちはね・・・もっと有効にこの土地を利用してやろうって言ってんですよ」

桜塚は容赦なく畳み掛ける・・・
口調は穏やかだが静かな威圧感を漂わせているあたり
さすが「そっち系」だ・・・

「なるほど・・・そう言うことか・・・
それで・・・この土地を何に利用する気なんだよ?」

小五郎が口を挟む
桜塚は舌打ちをすると小五郎をにらみつけた

「俺らは依頼されてやってるだけだ
何でもここを牧場にしてサラブレッドを囲うんだとよ」

「まったく！みんな人より馬の方が大切なんですね・・・」

蘭はさっきの小五郎の発言もありかなり怒っている
尋常で無い殺気を感じて桜塚が少したじろいでいる
しかしコナンの興味は他の所にあった

「おめぇらは何でいるんだよ！」

フリーザ様と哀を見て言った

「仕事ですよ・・・お金が必要でねぇ」

「博士も入院してるし・・・仕方ないのよ」

それにしてもこの仕事は無いだろ・・・
コナンはかなり呆れている
痛い視線がフリーザ様と哀に降り注ぐ

「・・・お兄ちゃんおなか空いたよ～え～ん！」

「大丈夫・・・この仕事が終わったらお金が貰えるからね
そのお金でおとっつぁんと一緒においしい物をたべよう」

フリーザ様と哀が猿芝居を始めている間に
小五郎は話を進めていた

「それにしても・・・バブル期じゃあるまいし今時地上げかよ」

「俺らもそうは思ったけどよ・・・クライアントの要望なんだ・・・
俺たちは下請け・・・理由なんて知ったこっちゃねぇよ」

確かに・・・コナンもその点が気になっていた
それに三枝の持っている土地は広いといってもそれは庭としての話
サラブレッドを囲う牧場とするには少々手狭な感じがする・・・
どうも裏がありそうな予感がコナンの頭を駆け巡った

「ひもじいよ～」

「いつまでやってんだよ！」

続く

おまけ：今日のスカウター

ピピピ・・・桜塚やっさん　戦闘力１３

フリーザ様から一言
私の同僚で「そっち系」の人です・・・戦闘力は１３ですが
脅し文句や恐い顔を駆使して１００位ありそうな感じを作り出します
でもケンカは弱いと言っていました

25．ダーティ・ワーカーズ（後書き）

また八ヶ岳か・・・
この間清里で使ったのでやめたかったんですが
芸能人が馬を持っていたり
これからの展開にいろいろ都合のいい点が満載なので
仕方なく連発しました・・・
うん＾＾；こういうこともあるよね
牧場ネタなので千葉でも良かったんですが
ちょっと事情が・・・その点はおいおい分ります

26．裏の裏

世の中には表と裏がある
だが果たしてそれだけだろうか？
世の中を表と裏の２つに区切ることは案外難しい
特に人間の社会は複雑に入組んでいる
安易に裏表の二元論にとらわれると
時として大きなしっぺ返しを貰うことになる
世の中はそれだけ広がりを持っている
表から裏に行ったフリーザ様と哀
はたして本当に裏に行ったのだろうか？

第２６話　裏の裏

小五郎と桜塚の話は続いていた
が・・・話は平行線をたどるばかりで
全く進展が無い・・・
両者の意見が完全に対立しているので仕方がない
その時桜塚の携帯が鳴った

「はい、桜塚です・・・あ！これはどうも・・・ええぇ今例の家に来ています
・・・それなんですが毛利小五郎が来てまして・・・え？
はい・・・そうですか・・・分りました」

「例のクライアントか？」

「あぁ・・・これからここに来るとよ・・・」

桜塚の言葉通り数刻後その人物が現れた
運転手付きの高級車から降りて来たその男は
全身をブランド物のスーツで包んだいかにも金持ちそうな人物だった

「あれ・・・この人どこかで見たことあるわ！」

蘭がその男の顔を見て言った

「知ってて当然よ・・・この人・・・ＩＴで有名な轟グループの会長・・・轟隆介だもの」

「あぁ・・・私も新聞で見たことありますよ・・・でＩＴってなんですか？」

突然の轟グループ会長の登場に驚く一同
フリーザ様や哀もクライアントの顔を見るのは今日が初めてだったらしい

「これはこれは轟様・・・今交渉中です・・・すぐに追い出しますんで」

桜塚はさっきまでとは打って変わってヘコヘコしている
まるでジャイアンの隣のスネ夫のようにおべっかを使う

「こらこら桜塚君・・・乱暴はいけないよ・・・もっと平和的に話し合わなくちゃ・・・
こんにちは三枝さん・・・そろそろ考え直していただけたでしょうか？」

そして轟は穏やかに話を始めた
どうやら何か提案を持ってきたらしい・・・
その提案とは
1．変わりの土地を無償で譲渡
2．家は三枝さんの好きなように新築
3．もちろん費用は全て轟負担で
と言う物だった

「でも私はこの町が好きで選んだので・・・」

「もちろんですとも！しかしこの土地が第一志望ではなかったそうですね」

轟が言うと三枝ははっとして目を見開いた

「不動産屋で聞きましたよ・・・最初は別の土地を購入したかったそうですね・・・」

「えぇ・・・でも高くて手が出なかったんです・・・」

その土地とは森の奥にある拓けた原っぱで
八ヶ岳が綺麗に見える最高の場所だった・・・

「その土地を無償で差し上げようと言っているんですよ・・・家付きでね」

その時小五郎が割って入った

「気にいらねぇな・・・地上げ屋までよこした割には気前がいいじ

ゃねぇか」

あ・・・いたの？
そんな感じに轟はいやらしい笑顔を浮かべながら小五郎を見た

「いやいや・・・我々は三枝さんの背中を押したんですよ・・・
せっかくの好条件なのに引越しを面倒がってなかなか決断しないから
もちろん彼女に危害を加えないように言ってありました・・・ねぇ
？」

桜塚は「そうそう」と調子よく相槌をうつ
それでもまだ渋い顔をしている小五郎達
轟は更に続けた

「分りますよ毛利さん・・・せっかく依頼を受けて東京から出てきたのに
このままでは依頼料も貰えませんからね・・・でもご安心下さい
迷惑料としてそれ相応の代金をお支払いします
沖野ヨーコのコンサートチケットもいっしょにね」

沖野ヨーコのコンサートチケット！
この単語に小五郎が反応をした
さっきまで渋い探偵の顔だったのに
今では餌を与えられた犬である

「ちょっと！お父さん！」

「うるせぇ！いいじゃねぇか！問題なく和解できたんだから」

そう言うと調子よく轟と話をし始めた小五郎

桜塚や三枝と皆で飲みにでも行こうかと話を始めている

「そうそう君たちに報酬をあげないとね・・・これで足りるかな?」

思い出したかのように轟が切り出した
フリーザ様に小切手を手渡したようだ・・・

「なんと!こんなにいただけるんですか!?」

「良かったわね・・・これでおとっつぁんもひと安心よ」

相当な額が書いてあったらしい・・・
大喜びの2人
轟の出現によって全てが丸く治まったようである

しかし・・・
コナンだけはまだ腑に落ちないでいた
なんなんだ?この人・・・妙に気前が良すぎる・・・
しかしその日は一同帰ることになってしまった
コナンは後ろ髪を引かれる思いがしたが
仕方なく帰ることにした・・・

数日後・・・
コナンは再びこの田舎町にやってきていた
フリーザ様や哀・・・そして桜塚も同行している・・・

「で・・・腑に落ちない点って言うのは分ったの?」

「それを今から確かめに行くところだよ」

コナンは三枝の家があった場所へ行った
もう家はなくなりサラブレッドを囲った柵がある・・・
馬が一頭牧草を食べている

「ふぅ・・・暇ですね・・・すぐそこ清里ですよね・・・
また遊びにでも行きますか？」

「そんなことより何で俺まで一緒なんだよ・・・」

フリーザ様と桜塚は退屈そうに青い空を見上げた
コナンはサラブレッドの世話役と思しき人物に話を聞いている
終わったのかフリーザ様たちの所へ戻ってきた

「やっぱり妙だ・・・」

「何がよ・・・」

コナンが聞いた話によると
囲っているサラブレッドはここにいる一頭のみ
一頭だけならわざわざこんな所に置かずに牧場に預けたほうが
もっと楽で費用もかからないのに・・・
それにせっかく買った馬なのに一度も見に来ないし
調教師などを付ける様子もないと言う

「なるほど・・・それは確かに妙ですね・・・臭いますよ」

「そうかぁ？金持ちの道楽なんてそんなもんだと思うけどな・・・」

皆であれこれ言っているうちにコナンの携帯が鳴った

高木刑事からの様である・・・
コナンはしばらく電話でやり取りすると考え込んでしまった

「退屈ですよ・・・どこか遊びに行きませんか?」

「そうだ!この近くに波の出るプールがあるって話だぜ!」

桜塚がそう言ったときだった・・・

「いや・・・行くのはプールじゃない・・・轟さんの所だ」

コナンが口を開く
全ての謎が解けたのか
その口元には自信の笑みを浮かべている

「あら・・・じゃあ轟会長は何かやらかしたのかしら?」

「あぁ・・・許されない罪を犯したのさ・・・
桜塚さん・・・案内してよ!轟会長の所にさ・・・きっと桜塚さんも許せないよ」

桜塚は唖然としていたが
なにやらただ事でないようなので従うことにした

「なんですか?さっきまで退屈だったのに・・・
急に面白そうなことになってきたじゃないですか」

続く

おまけ：今日のスカウター

ピピピ・・・轟会長　総資産額７５０００００００００円

フリーザ様から一言
なんですかこのスカウター・・・総資産額？嫌味ですか！？
それにしてもすごい金額ですね・・・これから彼の所に行くなら
少し貰ってきてもばれないかも知れませんね・・・ふっふっふ

26．裏の裏（後書き）

じっくり読み返してみると誤字が結構あるな＾＾；
ってことで今回は入念に見直ししました
でもまたあるかも・・・
助けて～＞＜
まぁこればかりは注意深く見直すしかないですね
ってことで次回は遂に
轟と直接対決です

27．隠蔽

もしもしコナン君かい？
この間頼まれた轟グループと関係のある事件だけど
2年前に一件あったよ・・・
轟グループ会長の轟隆介の甥の貴之氏が
突然消息不明になってしまったらしいよ
でもそんなこと調べてどうするんだい？
まぁいいや・・・
毛利さんによろしく伝えてね

「いや・・・行くのはプールじゃない・・・轟さんの所だ」

第27話　隠蔽

フリーザ様達は桜塚の運転する車で轟の所へ向っていた

「俺は運転手かよ・・・」

桜塚は文句を口にはしているが
目は真剣である
コナンの言っていることが気になって仕方がないようである
そうしているうちに車は轟邸に到着した・・・

「普段轟の野郎は自宅で仕事をしていることが多い・・・
今日もここにいるはずだ」

そう言うと桜塚は大きな門のインターホンを押した・・・

「会長・・・桜塚様がお会いしたいと・・・・」

秘書が轟の所にやって来た

「そうですか・・・上がってもらいなさい」

そうは言ったものの轟は少し気になった
あのチンピラめ・・・金は渡したはずだが？
そうしているうちに桜塚が・・・
そしてフリーザ様達が現れた・・・

「何か用かね桜塚君・・・報酬なら渡したはずだが・・・・」

「いえ会長・・・用があるのはこいつらでして」

轟は仕事机の椅子から立つとソファーの方へやって来た
フリーザ様たちにもソファーを勧める

「で・・・何の用かな？」

それじゃあ打ち合わせ通り頼むぜ・・・
コナンがフリーザ様に目配せした

「もちろん貴方の罪を暴きに来たのですよ・・・轟会長」

フリーザ様が口を開く
喋っているのはコナンだが・・・

「最初から疑問だったんですよ・・・
サラブレッドを囲うのになぜあの狭い土地が必要なのか？
牧場に預けたほうが安上がりだと言うのに」

轟は黙って聞いている
さらにフリーザ様・・・コナンは続けた

「それに三枝さんに譲った土地・・・あの拓けた原っぱ・・・
あちらの方が馬を飼うには最適だと思うのですが？」

「・・・何が言いたい？」

「つまり貴方は馬などどうでも良かった！
要はあの土地を手に入れたかったのです・・・
そう！自分の罪を隠すために・・・」

秘書がお茶を持ってきた
轟がお茶を勧めるが・・・フリーザ様たちはおろか
桜塚でさえお茶には手をつけない

「で・・・私の罪とは？」

「ずばり言いましょう・・・
あなた・・・殺したんでしょう？甥の貴之氏を
そしてあの土地に埋めた！違いますか？」

「そんなわけないでしょう・・・なんであんな民家の庭に？」

「いや・・・貴方が埋めた時はまだ山だったんです

あの町は交通の便が良いのに山だらけ・・・死体を隠すには絶好の場所
過去に何度か死体遺棄事件があったそうです・・・
しかし誤算だったのは後にその土地に三枝さんが来てしまったことだから桜塚さんや私を向わせたんでしょ？」

「証拠は？」

「あの土地を掘り起こせば分ることです・・・」

轟は黙って下を向いた・・・
何分経っただろうか・・・やっと顔を上げた時にはもういつものいやらしい笑顔は消えていた

「いや・・・掘り起こすのは無理だよ・・・
埋まるんだよ！君たちは！」

そう言うと銃を取り出す轟・・・
秘書が合図すると１０人ほどの黒服の男達が入ってきた・・・手に銃を握り締めて

「あいつが悪かったんだ・・・親戚だから我が轟グループに入れてやったのに
こともあろうにこの私の椅子を狙っていたとは！
馬鹿な子だったからお仕置きしたのさ・・・そしてお前らも！」

完全に囲まれた４人

「轟！てめぇ！」

桜塚が声を上げる

「子供2人にチンピラ2人・・・どうせそのネタで私をゆするつもりだったんだろうが・・・
まぁ良い・・・毛利小五郎さえ来なければバァ共々始末する予定だったんだ・・・
全ての罪をお前らに着せてな！・・・さぁ命乞いをしろ！」

「命乞いをするのはあなたですよ・・・」

フリーザ様はそう言うと共にエネルギー波で銃を粉砕していた
１０人の部下は何が起こったのか分らずに混乱する・・・

「貴方が捕まってくれなきゃ私が名探偵として賞賛を受けられないではないですか
往生際の悪い・・・無駄な抵抗はやめて大人しくお縄につきなさ～い！」

「くそ！構わん！この人数だ！こいつらをぶちのめせ！」

そう言うと１０人の部下は素手で襲い掛かってきた
同時にコナンはベルトからボールを出して蹴りつけた

「ま・・・待て！俺はケンカは強くねぇんだ・・・ぶあ！が！あべし！」

「サクラヅカさん！下がっていてください！」

あっという間の出来事だった・・・
床にはボコボコにされた黒服達と寝息を立てる秘書

・・・そして桜塚が転がっていた

「く・・・な・・・なんなんだお前は!?」

「成敗!」

フリーザ様が叫ぶとコナンが灰皿を蹴って轟を倒した

「まるで暴れん坊将軍ね・・・」

哀はいつの間にか隠れていたようだ
静かになったのを見はからってこそこそ出てきた
傍らにはボコボコにされた桜塚が倒れている

「ちょっと・・・大丈夫?」

「あぁ・・・昔から殴られ慣れてるからな・・・俺、いじめられっ子だったし」

桜塚がカミングアウトした数分後警察が来た
轟とその部下たちは銃刀法違反で逮捕されたが
後日例の場所から貴之氏の遺体が発見され
殺人罪で再逮捕された・・・

「へぇ~轟さんの事件フリーザさんが解決したんだ・・・
やっぱりあの会長悪者だったのね!最初に会った時から感じ悪かったもの」

蘭は新聞を見ながら言った

「でもこれで一件落着だね・・・」

「そうでもないみたいだよ・・・」

ポアロにて・・・

「フリーザさん！轟氏の殺人を暴いたと言うことですが！？」

「黄泉売新聞です～！」

「あなた探偵だったんですか！？」

マスコミの取材に追われていた

「またですか！？いい加減にしないと消し去りますよ！」

続く

おまけ：こぼれ話

桜塚の車の中で・・・

「フリーザ様・・・今回探偵役なんだから口パクちゃんと頼むぜ！」

「任せなさい！このフリーザ様が名探偵となって見せましょう」

「練習すれば良いじゃない・・・まだ到着しない見たいだし」

「よ～しいくぞ！・・・つまり貴方は馬などどうでも・・・ってズレてんじゃねぇかよ！」

「じゃあいっこく堂探偵ってことに・・・」

「できるわけねぇだろ！！！」

「おいうるせぇな！運転に集中できねぇだろ！ってうわ！ちょっと擦ったじゃねぇかよ～！」

この後三回擦ったらしい・・・

27．隠蔽（後書き）

轟編完結です
またコナンキャラださなきゃなぁ
なんて思っています
ご期待下さい！
まあ期待を裏切るの得意ですけどね＾＾；

28．探偵団ＶＳバカガキ三銃士（勃発編）

割と最近・・・東京の一角にある小学校で・・・
帝丹小学校1学年は混乱を極めていた
Ａ組が誇る暴れん坊の3人組・・・
「バカガキ三銃士」がここ最近勢いを増しているからである
目に付く女子はいじめられ・・・
弱い男子は給食のパンを奪われる
何の秩序もない暴力の荒野で子供達は祈った・・・
少年探偵団が現ることを・・・ただひたすら（ＳＴＡＲＷＡＲＳ風味）

第２８話　探偵団ＶＳバカガキ三銃士（勃発編）

「平和だねぇ～」

「そうね・・・組織と戦ってる人間には見えないわね」

今日も小学校で平和を貪るコナンと哀
手にはプリントの山を抱えている・・・
小林から教室に持って行くように頼まれたらしい

「ったく・・・奴らの情報は全く手に入らないのに・・・
その代わりプリントの山かよ・・・」

その時哀が自分の持っているプリントの山から

一束程コナンの方に追加した

「愚痴ってる罰よ・・・」

この尼・・・

そんな馬鹿をやっているうちに教室に着いた・・・が

女子が数人泣いている・・・そしてそれを慰めるため更に群がる女子

男子は男子で群れをなし何かを話し合っている・・・

「何かあったようね・・・」

良く見ると光彦が教室の隅にいる

顔にアザがあり所々怪我している・・・

「どうした光彦!?何があった?」

「とりあえず手当てするわ・・・保健室に行ってそこで話しましょう」

三人は保健室へ向った・・・

保健の先生の手当てが終わると光彦は話を始めた

それは数分前のことだった

それはそれは平和な休み時間の教室・・・

だったのだが・・・

「ブンブブン!ブンブブーン!どけどけ!おらおら!」

「ひき殺されてぇのか馬鹿野郎め!」

「葬式してぇのか!?馬鹿野郎め!」

「いつもこ○から」みたいなノリで何者かが教室に侵入して来た・・・

バカガキ三銃士である・・・

手に広告を丸めて作ったサーベル・・・

頭には広告を折って作った兜

そして胴体は改造された学級文庫の鎧で完全に防護されている

「今日からこのB組のやつらは俺たちA組の奴隷になることになった」

「これからはA組の人間のことは様をつけて呼べよ!」

「分ったかうじ虫共!」

声を張り上げて無茶苦茶な宣言を始めたバカガキ三銃士

当然こんな要求を聞くわけにはいかない・・・

1年B組一致団結である

相手はたったの三人・・・総力戦で蹴散らすのみ!

「で・・・どうなったんだよ」

「見ての通りですよ・・・」

光彦は更に話を続けた

団結したのは良かったもののバカガキ三銃士は強かった
広告サーベルで華麗な目突付きを繰り出す「アトス大久保」
小学1年にして１４０ｃｍ４５ｋｇという帝丹のセーム・シュルト
「アラミス竹中」
素早い動きと3日でやめた空手で戦う「ポルトス東」
3人の息の合った連携攻撃・・・
それに対しB組は
元太とコナンと言った主戦力を欠き防戦一方
あっという間に壊滅させられた

「それでも何とか教室から追い払ったんです・・・」

「そうだったのか・・・」

その日の夕方・・・
光彦はコナンを連れて元太の家にやって来ていた

「なに！俺の休んでいる間にあいつらが！？」

「そうなんですよ川崎さん」

「光彦・・・どこでそんな古い言葉を・・・」

光彦は元太に配布物を届けるついでに
今日学校であった三銃士の襲撃事件について話した

「くそぅ！歩美に怪我はなかったんだろうな！？」

「えぇ・・・歩美ちゃんと灰原さんはその時教室にいませんでした

から」

歩美はトイレに行っていて難を逃れたらしい
しかし数名の女子が泣かされ
戦った男子のほとんどが怪我をさせられた・・・
この事実に元太はひどく腹をたてた

「明日あいつらに仕返しするぞ！クラスの男子全員に決戦の準備をさせろ！」

「そうこなくっちゃ元太君！」

「おい・・・お前ら・・・」

一方哀は家に帰っていた

「お帰りなさいハイバラさん！学校はいかがでしたか？」

「どうもこうもないわ・・・子供の世界も大変ね・・・」

哀はフリーザ様と博士に学校で起きたことを話した

「そうか・・・まぁ小学生にありがちな話じゃな」

「そうね・・・私も昔はよくいじめられたし・・・でも自然に解決するでしょ」

気楽に大人の会話をする哀と博士
しかしこのお方は違っていた

「何を馬鹿なことを言っているんですか!?いじめ?大問題でしょう!
無くそうとしないと無くならないんですよ!こういう問題は!」

宇宙の帝王なのに教育問題に付いて熱弁を振るうフリーザ様
余計なことを話したな・・・
哀は少しだけ後悔した

「無くそうとしても無くならないこともあるわよ」

「そうじゃな・・・それにほら!先生もいることじゃし・・・」

消極的な2人に遂にフリーザ様がぶち切れた

「先生?あんな人たちが何の役に立つと言うのです!?
どうせ『私の生徒に限って・・・』なんて思っているんです!
ワイドショーで見た情報だから間違いありません!」

ワイドショーかよ・・・
今回もフリーザ様を止めることは出来ないようである
もう諦めることにした哀
「諦めたらそこで試合終了ですよ」
そんな言葉も今の彼女には届かない

「で・・・私にどうしろと?」

「ハイバラ特戦隊を結成しなさい!」

はぁ?

哀と博士はもうフリーザ様が何を言っているのか分らない

「何よ?灰原特戦隊って・・・」

「要は戦隊ヒーローで対抗と言うことですよ」

果たしてフリーザ様は何を考えているのか?
そして灰原特戦隊は結成されるのか?
全ては次回明らかになる

続く

おまけ:今日のスカウター

ピピピ・・・バカガキ三銃士　アトス大久保　戦闘力4
アラミス竹中　戦闘力7
ポルトス東　戦闘力5

フリーザ様から一言
ハイバラさんに話を聞いた時はどれほどの猛者達かと思いましたがこの程度ですか・・・所詮は探偵団と同じガキの遊びですね・・・
ハイバラ特戦隊が結成されればぼこぼこでしょう・・・
私の作戦に死角はありません

28．探偵団ＶＳバカガキ三銃士（勃発編）（後書き）

本格的にバカガキ三銃士の登場です
私の学校にもこんな奴らいました・・・
ぶちのめしてやりましたけどね（昔は過激派でした）
いまはペンネームの通りおっとりです＾＾；
まぁ大人になったんでしょうね
大人になった皆さんは懐かしがりながら読んで下さい

２９．探偵団ＶＳバカガキ三銃士（決起編）

１８６８年・・・
日本では様々な思惑と主張が入り乱れる中
明治新政府が江戸徳川幕府を倒した
戊辰戦争である・・・
幕府はこの戦で驚愕したと言う
新政府が天皇の旗の下に戦っていることに
自分達が朝敵になっていることに・・・
江戸幕府は「天皇のため」と言う大義名分を失ったのである
このように大義名分は大事である

第２９話　探偵団ＶＳバカガキ三銃士（決起編）

「・・・とこのように大義名分をゲットした新政府は
見事に徳川幕府を倒したのです・・・どうです？大義名分の力は？」

フリーザ様はいつの間にやら歴史の授業を始めている
哀と博士はホワイトボードの前に座らされている

「それで・・・それとこれと何の関係があるのよ・・・」

「ふむ・・・グッドクエスチョンですよハイバラさん
ずばり子供の大義名分・・・それはすなわち正義！
そして正義と言えば戦隊ヒーローしかないでしょう」

と言うわけで灰原特戦隊・・・と言うわけである

「言いたいことは分かったけど・・・そんなの効果あるの？」

「いいからさっさとメンバーを集めるんですよ！」

物凄いやる気のフリーザ様に圧倒され
哀は仕方なく灰原特戦隊を集めることになってしまった・・・

翌日・・・
歩美を合流させとりあえず特戦隊員を探すことにした哀
図書室でめぼしい男子をリストアップし放課後勧誘することにした
まあ結局は少年探偵団なんだが・・・
そうして哀と歩美は教室に戻ってきた
・・・杏が泣いている
どうやらまた三銃士が現れたらしい
杏は前々からやつらのターゲットにされていて
ここ最近は更にいじめられるようになったようだ

「またいじめられたの？少しはやり返したら？」

「灰原さん・・・でも・・・男の子だって敵わないんだよ？恐いよ・・・」

とりあえず肩を抱いて慰めてやる
そのとき哀にある考えが浮かんだ・・・

「ねぇ・・・あなた灰原特戦隊に入らない？」

「えぇ！哀ちゃん・・・コナン君達を入れるんじゃ・・・」

突然の哀の言葉に歩美と杏は困惑している

「灰原特戦隊は女だけにするわ・・・
前々から思ってたけどあの3人は女性に対する接し方がなってないわ
私たちで躾けてやるのよ！貴方だって仕返しぐらいしたいでしょ？」

杏は考え込んでしまった
しかししばらくすると凛とした表情で言った

「わかった・・・私戦う！」

このとき歴史は動いた
女性の味方「灰原特戦隊」が形を成し始めた瞬間である

「でもさすがにこの3人じゃ勝てないよね・・・」

「そうね・・・フリーザ様の出した条件は5人だから・・・
後2人は戦闘要員が必要ね・・・もちろん女の子の」

そこで3人は強い女子をリストアップし
そのうち最も強い2人をスカウトすることにした・・・

放課後・・・
3人は三銃士がいないことを確認してA組に侵入した・・・
ここに問題の1人目がいる・・・
教室を見渡すとクマのような体が目に入った・・・
彼女である
太田まさみ・・・

生まれたときの体重が３８００ｇ・・・その後誰よりも食べる女の子に・・・
そのせいか小学１年にしてあだ名は「横綱」
腕相撲なら男子にも勝つ豪腕の持ち主である

「貴方が太田さん？」

「あら・・・あなた達はＢ組の子達よね・・・ごめんね
最近うちのクラスの馬鹿３人がうざいでしょ？」

まさみは明るく笑いながら言う
性格的にはかなり明るいようだ・・・
３人で話し合った結果スカウトすることにした

「貴方の力を貸してくれないかしら？」

哀は灰原特戦隊の趣旨を説明した
まさみは興味深そうに聞いている

「面白そうね！是非参加させて貰うわ！」

まさみは腕を振り回しながらやる気をアピールしている
すでにアドレナリンＭＡＸといった感じだ・・・

次に哀たちが向ったのはキックボクシングジム
ここにもう一人の強者女子がいるらしい・・・
しばらく待つとポニーテールの女の子が出てきた
グローブを肩に下げ拳にバンデージを巻いている・・・
目は切れ長で美形・・・だが常に殺気を放っている・・・

彼女は黒坂咲
３歳の時からキックボクシングをやっている
すでに小学１年とは思えない打撃を繰り出すことができる
得意技はハイキックで全盛期のピーターアーツを思い起こさせる

「咲ちゃん！」

「まさみ？・・・それにＢ組の子達・・・」

どうやらまさみと友達の様なので哀はスカウトを始めた
咲は腕を組んで聞いている・・・

「なるほど・・・それでぼくの力が必要なんだね・・・
わかったよ！ぼくのハイキックが役に立つなら参加する」

こうして豪腕まさみとぼくっ娘咲を加えて
灰原特戦隊が誕生した・・・

一方その頃元太たちは毛利探偵事務所にいた

「よし・・・こんなもんだろ！」

「いいですね・・・これなら米軍が相手でも勝てますよ！」

勝てねぇよ・・・
コナンは一人呆れている
どうやらバカガキ三銃士を倒す作戦を立てているようだ

「あとは果たし状だな！よし・・・なんて書く？」

はたして作戦はうまく行くのだろうか？
小五郎が邪魔そうに見守る中果たし状作りは日暮れまで続いた・・・

「そうですか・・・この5人が特戦隊ですか・・・ふっふっふ」

哀達は結成された灰原特戦隊のお披露目の真っ最中だった

「ちなみに決戦は今度の日曜に決めさせていただきましたよ
あと5日です・・・その間に貴方たちには戦隊ヒーローとしての全
てを授けます
覚悟はよろしいですか？」

力強くうなずく5人
フリーザ様は軽く微笑むと特訓の準備に入った・・・

「おっと・・・その前に・・・ハイバラさん！はい、これ果たし状
ダイガクセイに書いて貰いました・・・後で連中に渡すなりしてく
ださい」

どこでもやることは同じようである・・・

こうして・・・それぞれの思惑を胸に5日間は過ぎて行った
それはそれは静かに・・・
嵐の前の静けさとはこのことだろう・・・
そして遂に運命の日曜日がやって来た
後にそこにいた者はその日のことをこう呼んだ・・・
「ジャッジメント・サンデー」

続く

おまけ：今日のスカウター

ピピピ・・・灰原特戦隊　木下杏　戦闘力２
太田まさみ　戦闘力５
黒坂咲　戦闘力８

フリーザ様から一言
遂にそろいましたね特戦隊・・・クロサカさんの戦闘力が高いですね・・・
手元のメモによると変質者の足をキックでへし折ったことがあるそうです
これはこれは・・・次回は彼女たちの活躍が見られますよ！

２９．探偵団ＶＳバカガキ三銃士（決起編）（後書き）

探偵団ＶＳ・・・なのに
なんだかコナン達の影が薄いです・・・
まぁ次回は特戦隊と共に活躍する予定です
ってことで次回遂に決戦です！

３０．探偵団ＶＳバカガキ三銃士（死闘編）

果たし状
次の日曜日に米花公園まで来られたし
時間は午前１０時・・・
場所は噴水前とする
此度の貴殿らの浅ましき行いの数々・・・
これらはおよそ黙殺にあたわず
よってこの決戦にて雌雄を決したし
勝負を捨て置き逃げそうらば
敗北を認めたものと受け取りそうろう
時間に遅れず来られたし・・・

灰原特戦隊・・・代筆ダイガクセイ

第３０話　探偵団ＶＳバカガキ三銃士（死闘編）

ＡＭ９：４０・・・米花公園

日曜の朝の爽やかな空気が公園を包む
ベンチで本を読む人
犬の散歩をする人
楽しそうに遊ぶ親子
平和・・・
これから全てがぶち壊されようとしている・・・
ぶち壊す側の一組目・・・探偵団が現れた・・・

「遂に来ちまったな・・・この日が・・・・」

さすがに緊張の色が隠せない・・・
ふと元太は隣の光彦を見た

「おい・・・大丈夫かよ光彦・・・震えてんじゃねぇかよ！」

「な！？大丈夫ですよ・・・武者震いですって！」

「別にやんなきゃ良いだろ？こんなことしなくても他に解決方法はあるぜ？」

後ろからコナンが口を挟んだ・・・
ったく・・・ガキのケンカになんか付き合ってられるかよ
組織とケンカ中の彼にとっては子供同士の小競り合いなど
はっきり言ってどうでも良かった・・・

「あら・・・そんなこと言って・・・怖気づいたんじゃないの？」

「ば・・・バーロォ！なんで俺が！」

哀がコナンを挑発する

「とにかく・・・みんな頑張ってね！歩美応援するから！」

この言葉で元太と光彦は戦闘モードに切り替わった
光彦に至っては漢の顔になっている

「ったく・・・しょうがねぇな・・・」

ＡＭ９：５０
バカガキ三銃士が現れた・・・

「よう！少年探偵団！俺らにケンカを売るなんて馬鹿は２組目だぜ！」

「ここが貴様らの墓場だ！」

いつもの調子の三銃士・・・非常にリラックスしている
さすが日頃から馬鹿をやってる奴は違う

「お前らを倒して俺達がＢ組を守る！」

アドレナリンを撒き散らしながら元太が言った
が・・・言い終わると同時だったろうか・・・
三銃士以外に十数人ほど男子が現れた

「悪いけどさぁ・・・この後も約束あんだよ・・・
だからこの人数で行くけど？どうする？逃げる？」

ほとんどのＡ組男子が集まったようだ
もはやバカガキ十字軍である・・・
中にはサッカーをするものと勘違いして来た者までいる

「おい！やべぇぞ・・・一旦逃げたほうが」

「うるせぇなコナン！逃げたきゃ１人で逃げろよ！」

男元太・・・歩美が見ている前で弱い姿は見せられない・・・

そんな元太の男気もなんのその
バカガキ十字軍が襲い掛かってきた
必死に応戦する3人・・・コナンもボールを出して数人倒す・・・
しかしすぐに取り囲まれてしまった

「くそ・・・数が多すぎる・・・本気を出すわけにも行かないし」

おまけに全員バカガキで行動の予測も出来ない・・・
さすがのコナンもお手上げである

「光彦！」

元太が叫んだ・・・２ｍほど先でボロ雑巾にされている

・・・一方の傍観者

「ねぇ哀ちゃん・・・そろそろ良いんじゃない？」

「そうね・・・ちょうど１０時・・・お仕置きの時間よ・・・」

そのころコナン達はやられる寸前
もう立っているのがやっとの状態である・・・

「よし！止めを刺せ！」

「そこまでよ！」

そこに遂に５つの影が現れた

「だれだ！」

そう彼女たちである

「太田まさみ！」

「黒坂咲！」

「木下杏！」

「吉田歩美！」

「灰原哀・・・」

「5人そろって・・・灰原特戦隊！」

見事に5人がポージングを決める・・・

呆れるコナンと動揺するバカガキ十字軍

「なんで？俺らが正義じゃないの？」

「向こうは戦隊ヒーローってことは・・・俺らは悪の組織だったんだ！」

完全に動揺している間に一気になだれ込む特戦隊

必死に応戦するバカガキ十字軍だったが・・・

まさみの怪力、咲のハイキック、杏の恨み、歩美の可愛さ

そしてそれらを統率する哀の見事な指揮に防戦一方

なにより大義名分を失った彼らに戦う気力は残っていなかった・・・

フリーザ様の特訓で培われた戦隊ヒーロー連携技が次々と炸裂する・・・
あっという間にバカガキ十字軍は壊滅状態である

「うわぁ・・・なんてこった！」

「やられる・・・」

「落ち着け！まだやれるさ！竹中！東！
特戦隊にジェットストリームアタックをかけるぞ！」

バカガキ三銃士の全身全霊のジェットストリームアタックも
灰原特戦隊の前では何の力も発揮しなかった・・・

数分後・・・

「ごめんなさ～い！」

泣きわめく三銃士・・・そばでは杏と歩美によるけが人の手当てが進んでいる
が・・・咲が何人かサンドバッグにしているのでまだ終わりそうにない・・・
そんな中治療の終わったコナンが立ち上がった・・・

「だいたいなんでＢ組を奴隷にしようとしたんだよ・・・」

「えぐ・・・頼まれたんだもん・・・げほ・・・おばちゃんに・・・
Ｂ組をいじめたら・・・ぐす・・・レアなヤイバーカードくれるって・・・」

「おばちゃん・・・？」

そうこの事件には黒幕がいたのである・・・
ここまでフリーザ様と灰原さんを読んできた人なら知っている
あの人が・・・

「ちぃっ！失敗したザマスか！所詮はバカガキザマスね・・・」

次回・・・あの人が帰ってくる・・・

続く

おまけ：こぼれ話

ポアロにて・・・

「ってことでダイガクセイ！果たし状書いてください」

「良いよ！任せときなって！こういうの得意なんだから！
えっと・・・拝啓・・・夏の日差しがいっそうまぶしく・・・」

「あの・・・相手バカガキなんでもっと分りやすく・・・」

「あぁ・・・了解了解！えっと・・・
ゃっレま→元気→？ξяёょレ）今度月券負ЏЙё？」

「いや・・・ギャル文字は・・・ちょっとね・・・」

「じゃあこれ！時代劇風！」

「だから読めないって・・・」

「大丈夫！時間と場所さえ分れば何とかなるよ」

この結果・・・サッカーと勘違いする者が現れた・・・
ちなみにサッカーをしに来ただけなのに
咲のサンドバッグになったと言う・・・

３０．探偵団ＶＳバカガキ三銃士（死闘編）（後書き）

バカガキ三銃士編終わりですが・・・
次回は彼女が帰ってきます
それとコナンキャラのあの人を登場させます
どの人？
今回はちょっとビッグな方ですよ・・・
ってことで波乱の次回へ続きます

31．リベンジャーの詩

リベンジ・・・やられたらやり返す・・・
太古の昔から人々はリベンジして来た
古代メソポタミア文明の頃は
「目には目を」でお馴染みハンムラビ法典があった
イスラムに征服されたスペインを奪い返した
キリスト教の熱狂的再征服（レコンキスタ）
主君の仇を打つ為に四十七人で討ち入った
大石内蔵助ら赤穂浪士の忠臣蔵事件
パールハーバーを胸に太平洋で戦った米軍
この様に世界はリベンジを繰り返してきた
そしてここにも・・・

第３１話　リベンジャーの詩

カランカラン・・・

いつものようにポアロのドアが鳴る
そしていつものようにフリーザ様ご来店

「いらっしゃいませ～」

梓もいつも通りの対応
いつもの席でいつものコーヒー
ここまではいつも通りであった・・・

「おや?ダイガクセイがいませんね・・・今日は来ないのでしょうか?」

フリーザ様が来店する日はなぜかいつもいるダイガクセイ
おそらく授業は代返を頼んでいるのだろう・・・
しかし今日はそのダイガクセイがいない・・・

「また学祭でしょうか?」

「まさか・・・たまたまじゃないですか?」

首を傾げるフリーザ様と梓・・・

カランカラン・・・

またドアが鳴った・・・
2人はドアの方を見る・・・

「いらっしゃ・・・きゃあ!!!」

梓が悲鳴を上げる・・・そこにいたのは傷だらけのダイガクセイだった
息も絶え絶えやって来た・・・といった感じだ

「呆れた人ですね・・・そんな怪我なのにポアロに来たかったんですか?」

「違うって・・・フリーザ様・・・あんたに・・・言伝が・・・
『モカの恨み・・・ここに晴らさん』・・・だってさ・・・」

それだけ言うとダイガクセイは倒れた・・・
それにしても最後の言葉が気になる・・・
モカの恨み?いったい何者でしょう?
付き添いとして救急車に乗ってからもフリーザ様はそれを考えた

幸いダイガクセイは命に別状は無く
2・3日すれば退院できるそうだ・・・
あとからやって来たダイガクセイの家族にそのことを告げると
フリーザ様は帰宅した

「『モカの恨み・・・ここに晴らさん』か・・・一体どういう意味じゃろう?」

フリーザ様は哀と博士も交えて考えることにした・・・

「そもそもモカってどういう意味じゃ?」

「普通に考えたらコーヒーですね・・・」

フリーザ様も博士もチンプンカンプンである
フリーザ様はコーヒーを愛していると言っても過言ではない・・・
そのフリーザ様がモカに恨まれるわけがないのだ

「でも・・・モカに関して恨まれる理由はあるわよね・・・」

「何のことですか?」

「あら?忘れたの?『フリーザ様と灰原さん』を読み返した方が良さそうね・・・

そうね・・・たしかあれは・・・第６話『違いの分る男』よ」

フリーザ様が初めてコーヒーに魅せられた時の話である・・・
そう言えばフリーザ様に恨みを持ちそうなのがいたような・・・
だんだん記憶が鮮明になって来た・・・その時

「思い出してくれたようだね・・・」

見知らぬ男が窓ガラスにべったり張り付いている
どこからどう見ても変態だ・・・
あぁ・・・こいつだったんだ・・・

「思い出すのに随分時間がかかったね・・・仕方ないか・・・
私はおまけのスカウターにも登場していなかったからね・・・
・・・射的屋やマスコットすら登場していたと言うのに！！！」

みるみるうちに男の顔は怒りの形相に変わる
その間に哀は１・１・０をプッシュする

「貴様にやられた後・・・もうコーヒーは飲むまいと誓った・・・
私は精神病院の一室で余生を過ごすはずだった・・・
だがそこに天使ジブリールが現れたんだ！そして私の口にモカを口移しで・・・
そして復活し・・・貴様にリベンジしに来たんだよ！」

なるほど・・・頭がおかしいんだ
哀の指は１・１・９をプッシュした

「ふ・・・警察を呼んじゃったのかい？」

「救急車もね・・・」

「まぁ良いよ・・・今日は挨拶程度さ・・・おい！ビジュアル系の君と茶髪の君！
明後日の正午に貴様にリベンジする・・・尾瀬に来い！
国立公園をお前らの墓にしてやるんだ！光栄に思いたまえ」

そう言うとモカ野郎は窓から離れて去って行った
残されたのは息がかかって白く曇った窓だけだった・・・

その頃少し離れた民家に数人の人影が集まっていた・・・

「ただいま帰りました・・・」

「遅かったザマスね・・・それで首尾は？」

「ちゃんと呼び出してきたよ・・・」

「そうザマスか・・・明後日が楽しみザマス・・・
今度はバカガキ三銃士の時の様にはいかないザマス」

それは明らかに不穏な動きだった・・・

モカ野郎とそれを捕まえに来た警察と救急車が帰り
フリーザ様達は夜のニュースを見ていた・・・

「ねぇフリーザ様？本当に明後日尾瀬に行くの？」

「当然です・・・一度懲らしめただけではあの男は分らなかったようですからね」

そんな会話をしているときだった

「次のニュースです・・・
ここ2・3日の間に・・・刑務所に服役中の受刑者が
相次いで脱獄する事件が多発しています・・・」

「ほう・・・それはそれは・・・」

「警察の調べでは単独での脱獄は困難で協力者がいると見られ
大規模な犯罪組織などが関与しているとの見方も強まっています」

犯罪組織・・・
哀がわずかに反応する・・・
まさか彼らが・・・考えすぎ?

「おっと・・・新しくスタートするドラマを見なくては・・・」

黒い思い出に浸る哀からリモコンを奪い
ニュースの途中にも関わらずチャンネルを返るフリーザ様・・・
そんなフリーザ様を見ながら哀は微笑を浮かべる

「考えすぎよね・・・」

しかし彼女は気付いていなかった・・・
予想外に黒い影が接近していることに・・・

「きゃあ!!!ゴキブリ!!!」

「何ですと！」

「ゴキジェット発射じゃ！」

それは果たしてゴキブリだったのだろうか？

続く

おまけ：今日のスカウター

ピピピ・・・ゴキブリ　戦闘力１

フリーザ様から一言

地球でもっとも代表的な害虫です・・・

戦闘力は低いですが黴菌を媒介したり飛びついて精神的ダメージを与えたりと

結構侮れない奴らです・・・え？なんでモカ野郎じゃないかって？

・・・あんな奴どうでも良いですよ

31．リベンジャーの詩（後書き）

次回遂にあの人登場です
ヒントは黒い酒・・・
だいぶ絞れたと思います
どのお酒かはお楽しみ・・・
ちなみにゴキブリじゃないです＾＾；
私の部屋には出ましたけどね

32．水芭蕉は見た

「アニキ・・・」

都内の一角にあるバー・・・
店内の片隅にあるテーブルに二人の男が腰掛けている
二人とも全身黒ずくめである

「最近姉さんの顔を見ませんね・・・」

「どうせまた何か企んでやがるんだろ・・・
まぁあの女のことだ・・・何も教えちゃくれねぇよ」

タバコの煙を吐きながら「アニキ」と呼ばれるその男は言った

第３２話　水芭蕉は見た

決戦の日はやって来た・・・
フリーザ様と哀は正午前に尾瀬の湿原地帯にやってきた
いろいろな花が咲き乱れている・・・
見ごろは過ぎたが尾瀬の代名詞水芭蕉も咲いている

「出来れば旅行として来たかったわね・・・」

哀がつぶやく・・・なんでここなのだろう?

「来たようですよ・・・」

フリーザ様の声にふっと前を見る哀
そこにはモカ野郎がいた

「来たな！モカの良さを分らぬ愚者どもめ！」

「ふふん！たった一人で挑んでくるとはとんだお馬鹿さんだ！
消してあげますよ！この花達と一緒にね・・・」

エネルギー波を放とうとするフリーザ様・・・が

「そうはさせん！」

もうひとり乱入して来た
またまたどこかで見たような男だ・・・

「あなたは確か・・・花田教授！逮捕されたはずじゃ・・・」

「ニュースを見なかったか？脱獄したのさ！
ちなみにここを選んだのは私だよ・・・素敵な花たちだろ・・・はぁはぁ萌え～
・・・この花達を守りながら勝ってこそ・・・あの時のリベンジは完了する！」

花田教授とモカ野郎がじりじり間合いを詰めてくる
哀は警戒して後ずさる・・・
そこへ背後からもう一つの影が・・・

「逃げようったって無駄ザマス！」

そう・・・今回の黒幕
帝丹小学校ＰＴＡ会長ザーマス田辺である

「また貴方ですか・・・私の優雅な生活の妨害をしたのは」

「ふん！貴方たちに敗北してから・・・私のＰＴＡ会長としての面目は丸つぶれ！
『帝丹の猛虎』とまで言われた信用も失ったザマス・・・
だからこの恨み！絶対に晴らす！そう誓ったザマス！」

鬼の形相のザーマス
荒々しい鼻息からは彼女のエキサイト具合が伺える

「それで教授やモカさんと手を組んだのね・・・」

「そうザマス！私と同じく貴方たちに恨みを持つ者を集めて軍団を作ったザマス
見るが良いザマス！３人だけだと思ったら大間違いザマス！」

すると周りからぞろぞろと人が出てきた・・・
今までフリーザ様が迷惑をかけた人間や
哀が巻き込まれた事件の犯人などがいる

「目障りな奴らザマス！今日ここで消えるザマス！」

ザーマス田辺が指を鳴らして叫んだ
軍団はどっとフリーザ様に襲い掛かる・・・

「始まったわね・・・」

その様子を遠くから見守る二つの瞳・・・

「シェリーと行動を共にするビジュアル系のタフガイ・・・
実力拝見と行かせて貰うわよ・・・」

女は口元に笑みを浮かべながら双眼鏡を覗き込む

「あわわわわ・・・私の尾瀬が・・・国立公園が・・・」

管理人さんも見守る・・・

「ふっふっふ・・・お疲れのようですね・・・」

「馬鹿な・・・あれだけ居た仲間が・・・」

その人数はもう4分の1程度になっている
フリーザ様は左手の小指だけで戦っているのに・・・

「きぇあああああああ!!!」

臆せずに襲い掛かる者・・・
しかしあっという間にKOされる
次々と水芭蕉の咲く湿地にその身を横たえていく

「くだらない・・・この程度でリベンジとは・・・」

「なんですって!ムカつく野郎ザマス!
モカ!殺るザマス!」

待っていたとばかりにモカが出てくる

「私をただのその辺のコーヒー好きだと思ったら大間違いだ！
コーヒーに含まれるカフェインの覚醒効果を私は１００％引き出し
常人にないパワーを生み出すことが出来る！
これがモカ流珈琲神拳だ！」

ムキムキに隆起した両腕で攻撃を繰り出すモカ
が・・・フリーザ様が小指で軽く触れると
指先から破裂した

「ぎにゃぁあああ！」

「知ってますか？体が膨らむようなパワーアップをする者は
破裂する運命にあるんですよ？」

フリーザ様はモカの傷口を踏みつけて余裕の発言
この男・・・ドSじゃない・・・
哀はあまりの惨状に吐き気がした

「ちっ！花田行けザマス！殺ってしまうザマス！」

花田が前に出る・・・全身汗でびっしょりだ

「フリーザ君・・・君のその力・・・やはりすごいよ・・・
どんなに努力しても君には勝てないのかも知れない
でも俺は心で君にぶつかって行くよ！
今の俺は一人じゃない・・・そう！こんなにすばらしい花達が」

ドン！

花田が吹っ飛んだ・・・

「話が長い・・・」

花田教授の心・・・あっけなくやられる
所詮ただの花フェチである

「はぁはぁ・・・水芭蕉たん・・・僕・・・もう疲れたよ・・・
なんだかとっても眠いんだ・・・水芭蕉たん・・・」

花田教授昇天
仲間を失ったザーマスは慌てふためいている

「さてと・・・お仕置きは何が良いですかね・・・」

腰を抜かすザーマスに詰め寄るフリーザ様

「ちょうど前に作った風邪の症状を引き起こす薬があるけど・・・」

その言葉を聞いたフリーザ様は薬のビンを受け取ると
中に入っていたカプセル全てをザーマスに投与した・・・

「げぇ・・・がは・・・全部飲んじまったザマス・・・げほっ！」

「早速効果が出ているわね・・・飲ませすぎよ」

「良い気味です・・・さて・・・こんなの放置して帰りますよ！」

「待って・・・ゲフ・・・せめて・・・エホッ・・・救急車・・・
プリーズ」

ザーマスの懇願も虚しく本当に帰ってしまったフリーザ様
哀はそのサディストぶりを目の当たりにし
今度からはもう少し大人しくしていようと思ったそうだ・・・

「うふふ・・・せっかく脱獄を手伝ってあげたのに・・・
やっぱりただのビジュアル系じゃないわねタフガイ・・・」

一部始終を見届けた女がミステリアスな笑みを浮かべる
その顔には満足の色が伺える
まるで新しい玩具を買って貰った子供のようだ

「今後彼がどう組織に絡んでくるか・・・楽しみだわ
ジン・・・クールガイ・・・こんなイレギュラーがいる中で
貴方たちは思うように動けるのかしら?」

女は再び微笑を浮かべる
日の傾き始めた午後の尾瀬で・・・

「私の尾瀬がぁあああ!!!」

「うるさいわね!人がクールに締めてるのに!」

続く

おまけ：今日のスカウター

ピピピ・・・クリス・ビンヤード（ベルモット）　戦闘力１５３

フリーザ様から一言

ん？誰？

32．水芭蕉は見た（後書き）

ベルモット姉さん登場です
え？あんま出てないじゃないかって？
Ａ ｓｅｃｒｅｔ ｍａｋｅｓ ａ ｗｏｍａｎ ｗｏｍａｎ．．．

って言うじゃないですか＾＾；
まぁ今後は黒い人たちもちょっと絡めて行こうかな
なんて思ってます
まぁあくまでこの小説はギャグですから
組織をどうにかしようなんて目標はありませんけど

33．美食倶楽部

食・・・
それは生きるためには欠かせない行為
野に生きる獣たちはおなかを空かせながら
その日を生き抜くために必死で食を求める
しかし人間は生き抜くための食だけでは飽き足らなかった
いつしか料理を覚えた彼らは
グルメなどと称して贅沢な食を求め出したのである
料理は食を楽しみの段階へ
ステップアップさせたのである・・・

第３３話　美食倶楽部

その日哀はファッション誌の立ち読みに夢中になり
帰りが遅くなってしまった・・・
日は傾き空は淡い紫色に染まっている
慌てて家に帰る哀

「ごめんなさい・・・遅くなったわ
すぐに晩御飯の仕度するからちょっとまってて」

荷物を置くなりエプロンを着けながら哀が言う

「あぁ・・・おかえり哀君・・・じゃが夕飯の仕度は間に合っているようじゃ・・・」

え？
哀は博士が妙なことを言うので一瞬固まってしまった
見たところ博士は料理していないようだし・・・
外食したと言うわけでもないようだ・・・
それに台所から湯気が起ちこめている
そう・・・今日の晩御飯を作っているのは・・・

「お帰りなさいハイバラさん！御覧なさいこの華麗な包丁さばきを！」

フリーザ様であった・・・

「あなた・・・料理できるの？」

「その辺のカスどもに出来るのにこのフリーザ様には出来ないと？」

半信半疑の哀
しかし唯でさえ凶悪なフリーザ様が現在は包丁を持っている
この間の尾瀬での出来事も忘れたわけでは無い
哀は放っておくという事なかれ路線を選択した・・・

１０分後・・・
フリーザ様の料理が完成した
見た目は・・・案外美味しそうである

「なかなかやるじゃない・・・」

「ほぅ・・・たいしたもんじゃ！早速いただこう！」

得意げなフリーザ様の目の前で料理を口に運ぶ2人
・・・・・まずい

「お味はいかがですか?」

珍しくキラキラと光る笑顔で聞いてくるフリーザ様

「えぇ!?・・・まぁ・・・うん・・・うまいぞ」

博士耐える・・・
きっと今年の忍耐・オブ・ザ・イヤーは彼が受賞することだろう
それとは対照的に全く我慢しない者が・・・

「まず・・・」

ピクリとフリーザ様が反応する

「ハイバラさん・・・今なんと?」

「『まずありえない!こんな美味しい料理が存在するはずが無い』と言ったんじゃよ!・・・あぁ美味しい」

慌てて取り繕う博士・・・
まずさに耐えながら料理をパクパク口に運ぶ
でも涙目だ・・・

「ねぇ・・・調味料何使った?」

哀はフリーザ様に聞いた
フリーザ様は使った物を持ってきて並べる・・・

塩・・・コショウ・・・砂糖・・・
醤油・・・オリーブオイル・・・
ここまでは良かった・・・が

「・・・・・・・・・チャーミーマイルド」

まさかの台所洗剤の登場に唖然とする2人

「隠し味に大量に使ってみました」

呆れる哀・・・

ドサ！

その後ろで何かが倒れる音がした
哀が振り返るとそこには・・・

「きゃあ！」

シャボン玉を口から噴き出す博士が青い顔で倒れていた

米花中央病院・・・

「助かって良かったですね博士さん」

「『良かったですね』じゃないわよ・・・後ちょっとで死ぬところよ」

博士は何とか一命を取りとめた

哀の応急処置と割と早く到着した救急車のおかげである
ベッドの上で笑いながら2人の会話を聞く博士・・・
しかしもう二度とフリーザ様を台所には入れまいと
固く心に誓うのであった

「あれは料理じゃないわ・・・毒ね・・・」

鋭く突き刺さる哀の言葉・・・フリーザ様はかなり腹を立てたようだ

「おのれぇ！灰原雄山め・・・言ってくれるじゃないですか
今に見ていなさい！必ず貴方に『う～ま～い～ぞ～！！！』
と言わせてあげますよ！」

「それは雄山じゃなくて味皇よ・・・」

まだ料理する気なんだ・・・博士の入院期間は3日延びた

哀に料理をけなされたフリーザ様・・・
哀を唸らせる至高の料理を求め・・・様々な特訓をした
ポアロで料理してダイガクセイと梓を病院送り・・・
蘭に教わりながら料理して探偵事務所を1週間休業に・・・
更には哀達の家庭科の授業に参加し学級閉鎖に導くなど
それはそれは地獄のような特訓だった・・・
その甲斐あってフリーザ様の料理はみるみる上達して行った

そして博士の退院祝いの日・・・
食卓には豪勢な食事が並ぶ・・・もちろんフリーザ様作である
恐る恐る口に運ぶ哀と博士・・・

「・・・うまいぞ！」

「あら本当・・・美味しいわ」

「ほら御覧なさい！この私が本気を出せばこんな物ですよ！
あ～はっはっはっはっはっはっは！！！」

そしてその日の晩・・・
3人はフリーザ様の料理を大いに堪能したのだった
お皿が寂しくなるまで・・・
フリーザ様の料理の力で
その日は久しぶりに温かい食卓になったのであった

翌朝・・・

「ねぇフリーザ様・・・」

「なんですかハイバラさん？」

「おなか痛いんだけど・・・」

激しい腹痛に悩まされる哀がそこにはいた
怪しいのは昨日のフリーザ様の料理である・・・
すると台所から博士がよろよろ出てきた

「ひょっとして・・・これ使わんかったか？」

手に持っているのは卵のパック・・・

賞味期限・・・１０日前・・・

「私・・・トイレ行ってくるから・・・」

「待ってくれ哀君！わしが先に！」

トイレの取り合いを始めた哀と博士

「うるさいですよ！優雅な朝が台無しじゃないですか！」

「お前のせいだろ馬鹿野郎！！！」

続く

おまけ：こぼれ話

米花中央病院にて・・・

「大丈夫哀ちゃん？」

「大丈夫じゃないわ・・・」

哀を見舞いに来た探偵団

哀は食中毒で１週間の入院中である・・・

「変な物でも食べたんじゃねぇか？」

元太が聞く

「元太君じゃあるまいし」と笑う一同

「変な物を食べたのよ・・・だからこうなってるんでしょ」

・・・その後しばらくの間
哀は元太と同じポジションにされたと言う・・・

33．美食倶楽部（後書き）

私は良く料理を失敗します
食べていると親のありがたみが分りますよ＾＾；
自分のまずい料理を食べてから
好き嫌いも無くなりましたしね
早く美味しいご飯を作ってくれる
お嫁さんがほしいですね（´▽｀＊）

３４．あしたのためのデート術

町行く恋人達を迷惑に思ったことは無いだろうか？
人目をはばからずにイチャイチャ・・・

「まったく最近の若い者は・・・」

「見せ付けてくれんじゃねぇかよコラ！」

・・・もはや定番のセリフである
彼らは一様に周りを省みない・・・
自己中心的と言ってもいいかも知れない
しかしそれが恋人の本質である
君が居て僕がいる・・・それで良いじゃないか
そう・・・２人だけである
もしその間に割って入ったら・・・

第３４話　あしたのためのデート術

とある公園のベンチ・・・
高木刑事が座っている・・・非番の日なのかカジュアルな格好だ
それにしても落ち着かない高木刑事
腕時計を見ながらそわそわしている

「ごめ～ん高木君！待った？」

かなり待った高木刑事・・・

「いえ・・・僕も今来たところです」

うそつけ！
この会話ももはや待ち合わせの王道パターンである
と言うわけで高木とその彼女佐藤刑事のデートは無難に始まった・・
・

渋谷ハチ公前・・・

「かえって来ない主をずっと待っていたんですか・・・
そうですか・・・ハイバラさんもそれぐらい忠義者になってほしい
ですね」

今日も暇を持て余すフリーザ様渋谷に降臨

「悪かったわね・・・」

哀もやって来た
2人はここで待ち合わせをしていたのである

「なんで一緒に電車で来たのに待ち合わせする必要があるのよ・・・
」

「渋谷と言ったらハチ公前で待ち合わせでしょう！」

無茶苦茶だ・・・
いつもの調子で漫才を繰り広げる2人・・・だったが
哀の目にあるものが映った

「あら・・・高木刑事と佐藤刑事ね・・・」

少し離れたところを高木刑事と佐藤刑事が仲良さそうに歩いている
哀はデート中と言うことを察しそっとしておくことに・・・
しかし面白そうなものを見つけてしまったフリーザ様
デート?仲がいいのね・・・などと見過ごすはずがなかった
2人に近付き声をかける

「これはこれは刑事さん!」

「あれ・・・あなたは確か・・・学園斎の事件の時の・・・」

「あら・・・由美とケンカしてたカツ丼さんじゃない」

あの馬鹿・・・
哀も仕方なく2人の許へ行くことにした

「ほぅ・・・お2人とも今日はデートですか・・・そうですか・・・
職場恋愛ってやつですね?ドラマで見たことありますよ
で・・・誰が邪魔してくるんですか?」

ドラマではこういう場合必ず邪魔してくる奴がいる・・・
そこの所の配役が気になるフリーザ様
もちろん白鳥警部であるが・・・

「そんな邪魔する人なんていないわよ!ねぇ高木君・・・」

「え!?えぇ・・・まぁ・・・」

あえて口に出されることはなかった

「なんと!邪魔する者がいないのですか!?
それはいけませんね・・・恋は障害があるからこそ燃えあがる物
今の貴方たちはまるで冷麺ですよ・・・
本来はもっと熱いはずです!ラーメンになりなさ～い!」

この男・・・絶対何か企んでる・・・
横にいた哀はもはやザーボンさんやドドリアさん以上に
フリーザ様のことを理解していた・・・
その哀の直感がそう囁いて来る

「よろしい・・・私が2人の障害になってあげましょう!
さぁ存分に燃えあがりなさ～い!そして燃え尽きなさ～い!
真っ白な灰になるまで!私は丹下段平になりますよ!」

うわ・・・始まったよ・・・
こうして4人は魔のダブルデート?に突入したのだった・・・
高木刑事と佐藤刑事のあしたはどっちだ!?

あしたのために・・・その1「ショッピング」

「高木君!これ似合うかな?」

「良いんじゃないですか?とっても良く似合ってますよ」

仲良く買い物をする2人・・・
哀も服などを物色している
今の所フリーザ様は邪魔する様子は・・・あれ?いない・・・

そのころ当のフリーザ様は・・・

「そこのお兄さん！」

厳ついあんちゃんに話しかけていた

「なんだよ・・・」

「あそこにいる貧相な顔した女連れが貴方のこと『木偶の坊』って言ってましたよ」

「なんだと！」

木偶の・・・じゃなくて厳ついあんちゃんは一直線に高木の許へ

ふふ・・・と笑うフリーザ様・・・

突然因縁をつけてくる男を打つべし打つべし打つべし！

大丈夫だよ美和子・・・おれが君を守る！

あぁ！渉さん・・・なんて素敵なの！

・・・とこのように2人の愛は燃えがるのですよ！

「おい！誰が木偶の坊だと！貧相な面しやがって！」

良い感じですね・・・さぁ高木さん！

ぶちのめして男をあげなさ～い！

「ちょっと！何なのあなた？高木君は何もしてないわよ！

変な言いがかりつけると逮捕するわよ！」

警察手帳をだす佐藤・・・

馬鹿な・・・台本と違う！

「な・・・なんだ・・・刑事さんでしたか・・・
やだなぁ・・・今流行の挨拶ですよ・・・ははっ」

・・・ちっ

あしたのために・・・その２「ボウリング」

ボウリング場にやって来た４人・・・
そこでフリーザ様チームＶＳ刑事カップルチームで対決することに

ふっふっふ・・・高く大きく立ちはだかる絶対的な力・・・
それを２人で乗り越えてこそ愛は燃えあがるのです！
ボウリングで強敵に勝つべし勝つべし勝つべし！

・・・・ガタン

「ねぇフリーザ様・・・」

「なんですかハイバラさん・・・」

「今のでガター何本目かしら？」

フリーザ様はオールガターで締めくくった・・・
刑事カップルチームの大圧勝である
ちっ・・・こんなはずでは・・・ボウリングめ・・・侮り難し！

あしたのために・・・その３「食事」

フリーザ様達は食事をするためとあるビルの中にある洋食屋に入ったここでもフリーザ様は壁になる気である・・・
ふっふっふ・・・このごはんつぶを高木さんのほっぺたに高速で付けそれを佐藤さんが取る・・・これを繰り返すうちに二人の間は・・・

「大変だ～上の階で人殺しがあったぞ！」

「なんですって！」

突然のハプニングでデートは思わぬ方向へ・・・
２人のあしたは本当にどっちだ！？

ふふっ・・・天然のハプニングですか・・・これは好都合・・・

続く

おまけ：今日のスカウター

ピピピ・・・佐藤美和子　戦闘力４３

フリーザ様から一言
さすがは刑事さん・・・犯人を捕まえるためのあらゆる格闘技をマスターしています
原作の中でも様々なアクションや格闘術を披露してくれています

しかも人気と来たものです・・・高木さん・・・やるじゃないですか

３４．あしたのためのデート術（後書き）

刑事カップルです・・・
佐藤刑事ってどうなんですかね？
意外と良い嫁になるのか・・・
それとも鬼嫁？
そしてブログで愚痴る高木刑事・・・
原作での今後の展開が気になるところです
ってことでこちらでは事件発生！
次回に続きます

35．巻き込まないでセニョリータ（前編）

とある研究所・・・一人の若い研究員が古いレポートを整理している・・・
するとひとつのレポートが目を惹いた・・・読んでみることにした
研究員

『・・・よってこの病気は患者と長時間行動を共にすることで感染すると見られる』

どうやら病気についてまとめたレポートのようだ

『感染した者はプライベートな時間に必ず殺人等の事件に巻き込まれる
それもただの殺人ではなく巧妙なトリックを駆使した物に・・・
思うにこの病気は何らかの作用で謎を引き寄せると言う特徴があるのかもしれない』

研究員は最後のレポートを開く・・・

『長年この病気の研究をして来たが・・・遂にこの病気の正体を特定するには至らなかった
私ももう年である・・・これ以上の研究は望めない・・・
この病気の研究は次世代を担う若い力に託すことにする・・・』

研究員はレポートをしまう・・・目に志の強い火を灯して・・・

『感染性工藤症研究報告・・・宮野志保』

今回の話はその病気の症例の一部である

第３５話　巻き込まないでセニョリータ（前編）

なんでなんだ・・・なんで僕と佐藤さんがデートする時っていつも・・・

高木は虚しく・・・悲しく・・・腹立たしかった

せっかくのデートなのに近くで殺人・・・

普通のカップルなら「や～ね」で終わりであるが・・・

「高木君！何ぼさっとしてるの？行くわよ！」

刑事と言う職業柄仕方の無いことである

高木も腹をくくったのか佐藤に続き現場に向う・・・

「フリーザ様？どうするわけ？」

「もちろんこんな面白そうな余興を見逃すわけにはいきません・・・

我々も向うんですよ！」

「お待たせしました！チョコレートパフェです！」

「・・・このチョコレートパフェを食べてからですけどね」

一方高木と佐藤は現場に到着していた

先ほどの洋食屋の上にある漫画喫茶でそれは起こった

現場の保全をしながら佐藤は第一発見者の話を聞く・・・

「朝早くに来られてずっと個室に入っていたお客様なんですが
あまりに長いので料金の方のご確認に伺ったところ・・・この有様で・・・」

被害者は横田次郎（２７）
この漫画喫茶の常連だったらしい・・・
個室で十数本にも及ぶ刃物で滅多刺しにされていたらしい・・・

「その刃物は？」

「最初見た時は刺さってたんですけど・・・戻ってみたら・・・」

「まぁいいわ・・・このフロアーからは誰も出ていないんでしょ？
そんなに大量の刃物を片付けていたんならまだここにいるでしょう」

佐藤はそのフロアーにいた客を集めさせる・・・
かったるそうに出てくる客たち

「容疑者は３人か・・・」

「えぇ・・・空いてましたから」

１人目は山口智子（２１）専門学生
漫画家志望で良く他の漫画家の作品を参考に練習するため
この漫画喫茶を訪れていたらしい

「被害者との関係は？」

「コミケで良く見かける人です・・・何度か言葉も交わしました」

2人目は滝沢コネリー（27）フリーター
被害者の友人で今日はここで待ち合わせをしてコミケに行くつもりだったらしい

「ところでそれ本名？」

「うるせぇな・・・親父がショーン・コネリーの大ファンなんだよ・・・」

「ふ～ん・・・コナン君と似たようなもんか・・・」

そして3人目は・・・

「あれ・・・桜塚さんじゃないですか？」

「ん？フリーザ様じゃねぇかよ！奇遇だな！」

フリーザ様・・・チョコレートパフェを食べ終え登場
そして3人目の容疑者は

桜塚やっさん（32）そっち系の人

「あら・・・フリーザさんの知り合い？」

「えぇ・・・前の職場の同僚で・・・」

「ふ～ん・・・で・・・貴方はここで何してたの？マンガって柄には見えないけど」

「人を見た目で判断すんじゃねぇよ！まぁ・・・確かに
今日はマンガを読みに来たわけじゃねぇけどよ・・・
おっ死んだ横田の野郎はうちで借金してよ・・・
なかなか返さねぇからここで張ってたんだよ」

とりあえず佐藤刑事は他の警察が来る前に
高木と協力して所持品検査と身体検査をすることにした・・・

「どうでした？佐藤さん・・・」

「山口さんの持ち物で人を刺せそうな物って言ったらGペンぐらいね・・・」

「でも刑事さん！私が見たのは確かに包丁か何かでしたよ！」

店員が口を挟んできた・・・山口さんは白か？

次は滝沢・・・
カバンの中からは・・・

「佐藤刑事！たくさんの刃物が見つかりました！」

「なんですって！」

そこから出てきたのは十数本に及ぶ銃剣
滝沢が犯人か？

「それはコスプレに使う小道具だよ！
見ろ！ゴムでできてるだろうが・・・こんなので人が殺せるか？」

確かにそうである
そして桜塚・・・
「ナイフ・・・」
「いや・・・商売柄防衛手段としてさ・・・ははっ」
桜塚のズボンのポケットからナイフが出てきた
笑って誤魔化す桜塚
「他にもあるんでしょ！出しなさい！」
「ねぇよ！」
「でもねぇ・・・桜塚さん・・・今の所凶器を持っているのは貴方しかいないんですよ」
高木と佐藤はじりじりと桜塚につめよる
借金取りが保険金をかけて・・・ありがちな話である
「でも・・・彼が人殺しをできるたまだとは思わないわ・・・」
哀が口を挟む・・・
桜塚は轟グループの社員に何もできずにボコボコにされた男
こんなことをする度胸はないだろう・・・
「そうそう・・・俺は人殺しはしねぇよ！脅迫や詐欺は得意だけど・・・」

「ふ～ん・・・」

佐藤がにらみつける

「やだなぁ・・・ブラジリアンジョークですよ刑事さん」

結局桜塚はナイフ一本しか持っていなかった・・・
犯人はこの中にいるとしか思えない
しかしだとしたら犯人はどうやって十数本もの凶器を隠したのか・・・
・

佐藤は必死で頭を回転させる

「・・・あら・・・フリーザ様は？」

そんな中フリーザ様がいないことに気付いた哀

「トイレにでも行ったんじゃねぇのか？」

この桜塚の予想は外れていた・・・
そのころフリーザ様は別の所にいたのだった・・・

続く

おまけ：こぼれ話

「ところでそれ本名？」

「うるせぇな・・・親父がショーン・コネリーの大ファンなんだよ・・・」

「ふ～ん・・・コナン君と似たようなもんか・・・」

・・・・・・

「へっくしょん！」

「あらコナン君風邪？」

誰か噂してやがるな・・・それにしても退屈だぜ・・・

あ～あ・・・殺人事件でも起こらねぇかなぁ・・・

そのころコナンの不謹慎な願いは現実の物となっていたことを

彼はこの少し後に知ることになる・・・

35．巻き込まないでセニョリータ（前編）（後書き）

次回謎解きです
ところで最近評価コメントに返信できることに気付きました（遅）
なんだか無視してるみたいですみませんでした＾＾；
これからはちゃんと返信していきます

36．巻き込まないでセニョリータ（後編）

「なるほど・・・そうして謎に近付き・・・その謎を解こうとするのか・・・
不思議な症状だな・・・どうしてそんな行動をとるんだろう・・・
感染性工藤症・・・何て奥が深いんだ・・・・」

研究員はレポートを読みあさる
ノートに自分なりの仮説を書いてはボツにしている

「宮野博士が生涯に渡って研究したこの病・・・
僕が絶対に正体を解明してやる・・・」

研究員の作業は空が暗くなり・・・そして再び明るくなるまで続いた

第３６話　巻き込まないでセニョリータ（後編）

現場は殺伐としていた・・・容疑者同士の疑り合いが始まったのである

「そのヤクザがやったに決まってんだろ!もう帰らせてくれよ刑事さん!」

「なんだと?やんのかこらぁ!てめぇこそたくさん獲物を持ってんじゃねぇかよ!」

「やめろ」と止めに入る高木刑事

だがやめる気配はない・・・

「そこの女だって動機はあるぜ！
この間のコミケで自分の書いたマンガをけなされてたもんな！横田によ！」

「そんな・・・確かにひどい言われ方だったけど・・・
私はもっと頑張らなきゃって思った！殺そうだなんて・・・」

泣き出す山口
それを横目に滝沢は更にわめく

「あんただってそうだ！第一発見者が一番怪しいもんじゃねぇのか？」

「な・・・私まで疑ってるんですか？」

「いい加減にしなさい！」

怒鳴る佐藤刑事・・・
店内を静寂が襲う
あまりの静けさに耐え切れず口を開いたのは高木だった

「でも佐藤さん・・・肝心の凶器が・・・」

「凶器ならありますよ！今ここに・・・」

突然フリーザ様が現れた
自信たっぷりのしたり顔・・・まるで彼を思わせる
哀はコナンとフリーザ様を重ね合わせたが・・・重なるわけがなか

った

「あなた・・・また恥をかきたいの？」

学園斎の時のフリーザ様の推理は穴だらけ・・・信用できるはずも無い

「まぁ見てなさい・・・私の推理ショーを・・・
ってことで推理ショーを手伝ってくれますよね？滝沢さん？」

一同が滝沢を見る・・・

「俺を犯人扱いしようってのかよ！たしかに俺のカバンには銃剣がいっぱいだが
ぜんぶゴム製の模造品・・・人なんか殺せねぇよ！」

「そうですね・・・ただ・・・ゴジラの皮膚が剥がれると
中からメカゴジラが出てくるんですよ・・・」

「まさか！このゴム製の模造品の中に本当の刃物が！」

高木が慌てて滝沢のカバンを取り出す
そして銃剣を手に取り調べるが・・・
中からは何も出て来ない

「良い推理だけど・・・はずれよ・・・私もそう思って調べたけど
分解は確かに出来るけど・・・何も隠されてなかったわ・・・」

佐藤刑事が反論する
あ～あ・・・またやっちゃったよ・・・哀は頭を抱える

だが・・・フリーザ様は余裕の笑みである

「全部の銃剣を調べたんですか？」

「え？」

おもむろにカバンの前にしゃがむと
全ての銃剣をサイコキネシスで分解したフリーザ様
その中の一本から血の付いた刃が出てきた・・・

「つまり・・・凶器は一本だった・・・ってことですよ」

「でも私が見たときにはたくさんの刃物が・・・」

今度は店員が口を挟むが

「どうせ良く見なかったんでしょう？驚いたのだから当然ですちなみに被害者を見てください・・・変じゃありませんか？」

一同遺体を見る・・・
血が大量にあふれ出し・・・赤いコートを更に赤く染めている

「コートを着ているわね・・・」

「そう・・・夏なのに・・・つまりあれはコスプレなんですよ・・・
たしか今日コミケに行くんでしたよね・・・それに見てください！
このコートには何かを引っ掛けるための出っ張りがあります・・・
この出っ張りに分解した銃剣の一部を取り付けると・・・」

刺さっているように見える・・・

と言うわけであった

「滝沢さん・・・貴方はまずコスプレのリハーサルでもしようと持ちかけ
この銃剣の刺さったようなコートを着せたのです・・・外にいたオタクに確認しました
『ヘルシング』というマンガにそう言うシーンがあるそうです
そしてその隙に横田さんを眠らせ・・・店員さんに目撃させる・・・
そして銃剣を外した貴方は本物の刃で彼を滅多刺しにしたんですよ」

「でも・・・そんなことしたら返り血が・・・」

「ここに一際血の付いた雑誌がありますね・・・おや良く見ると穴が・・・
これの上から付き刺し返り血を雑誌でガードしたのでしょう・・・
どうなんですか?滝沢さん!?違うというならこの刃の説明を!」

スパッと言い切るフリーザ様
再び静寂が店内を襲う・・・
今度静寂を破ったのは佐藤だった

「今のは本当?」

佐藤が詰め寄る・・・滝沢は崩れ落ちた

「あいつが悪いんだ・・・過去の俺の弱みを種に・・・連帯保証人になれなんて言うから・・・」

滝沢は動機を語り始めていた

間もなく警察が到着した
目暮警部である・・・

「2人ともすまなかったね・・・非番だと言うのに・・・」

「後は我々でやっておきますからお2人はデートの続きでもしてください」

後ろから千葉刑事が茶化すように言う
「この」と高木が千葉の頭に拳を当てる

「一件落着ね・・・」

その時だった・・・

「何がデートだ!お前らがここにいなければ俺の計画は成功したんだ!」

怒り狂った滝沢が佐藤めがけて刃を突き立ててきたのである

「あぶない!」

その刃は間に割って入ってきた高木刑事の
胸を捉えていた・・・

続く

おまけ：こぼれ話

「赤いコート・・・たくさんの銃剣・・・
こんなマンガありますか？」

「あぁ・・・それヘルシングですよ！間違い無いです」

「そうですか・・・睨んだ通りですね・・・」

「ところでヘルシングって言ったらどのキャラが好きですか？」

「いや私は読まないし・・・って言うかもう行かなきゃ」

「僕はアンデルセンも好きなんだけど
やっぱりリップバーン中尉激萌えっていうか・・・」

「いや・・・だからね・・・これから現場に・・・」

「ショタって言われるかも知れないけどシュレディンガーたんも・・・」

「てめぇのオタク話に付き合ってる暇は無いんだよ！！！消えうせろ！！！」

その後・・・そのオタクを見た者は誰もいない・・・

36．巻き込まないでセニョリータ（後編）（後書き）

なんか・・・後味悪い終わり方だな・・・
高木刑事どうなるんだろう・・・
だれか教えて（馬鹿）
まぁこの小説の性質上どうなるかぐらい
皆様も察しがついているのでは？
たぶん皆様の想像どおりです＾＾；
あ！石投げないで＞＜

37．あしたへ・・・

「君は今工藤症の研究をしているそうだね・・・」

「はい・・・いくつか仮説を立てたんですが・・・なかなか・・・」

「まぁあせらずじっくりやりたまえ・・・
なにせ工藤症はあの宮野博士が生涯をかけても解明できなかった奇病だ
君はまだ若い・・・」

そうだ・・・自分はまだ若い・・・
宮野博士が生涯をかけたように自分も人生を捧げよう・・・

「ところで資料が少なくはないかい？良かったら提供するよ？
うちにたくさんあるからね・・・」

「え？そうなんですか？でもなんで・・・」

「私の祖父が宮野博士と深い親交があってね・・・」

「そうなんですか・・・ありがとうございます！阿笠教授！」

第３７話　あしたへ・・・

「高木君！」

胸を押さえてその場に崩れ落ちる高木
苦しそうに咳き込む・・・

「てめぇ!!!」

千葉刑事が滝沢を押さえつける
鈍い音を立てて床に落ちる刃・・・

「高木君!しっかり!誰か救急車を・・・」

「その必要は・・・ないわ・・・」

哀が口を開く・・・

「この刃・・・ゴム製だし・・・」

「ゴムでも痛いよ・・・ゲホ」

咳き込みながらも無事を伝える高木
顔は笑顔だが溝に入ったのか顔が青い

「なんだ・・・生きてたんですか・・・せっかく感動の最終回だと思ったのに」

フリーザ様の不謹慎発言が飛び出す中
滝沢は連行されて行った・・・

・・・・・・

「それにしても大変な一日になったわね・・・」

「まったくだ・・・結局借金も踏み倒しかよ！」

警視庁での諸々の事情聴取も終わり
帰路に着いたフリーザ様達

「それにしても名推理だったわね・・・フリーザ様」

「あぁ・・・あれね・・・」

・・・数時間前

・・・～♪
コナンの携帯が鳴り始めた

「コナン君電話よ！」

携帯を手にするコナン
着信・・・フリーザ様・・・
うわ・・・

「・・・もしもし」

「あ！コナンさんですか？私です！」

もう切りてぇ・・・
声を聞いた瞬間コナンのテンションは最低まで低下した

「実は殺人事件が置きましてね・・・
また名探偵やるんで推理をお願いします」

推理と聞いちゃ黙っていられないコナン
よだれを垂らしながら事件の概要を聞く・・・
テンションは一気にＭＡＸへ・・・忙しい子

「なるほど・・・じゃあ外にいるオタクっぽいのに話を聞くんだぞ！
そう言うマンガが無かったかどうか・・・
多分この推理であってるはずだ・・・あとで報告しろよ！」

・・・・・・

「ってわけです」

「結局轟の時とやってること変わらねぇじゃねぇかよ！」

「まぁ・・・どうせフリーザ様だし・・・そんなもんよ・・・」

言いたい放題の哀と桜塚
フリーザ様はぶち切れた

「消し去られたいようですね！」

事件のことも忘れ大騒ぎ
そんな３人の愉快な光景を眺めながら
高木と佐藤が後ろを歩いている

「もう大丈夫なの？」

「えぇ・・・結構苦しかったですけど・・・もう大丈夫です」

笑顔で返す高木・・・
だが佐藤はどうしても笑えなかった
もしあれが本物の刃だったら・・・
どうしてもそんなことが頭をよぎる
そして耐え切れずに・・・高木の胸の中に飛び込んでいた

「さ・・・佐藤さん？」

心臓の鼓動が聞こえる・・・その脈動がたまらなく愛しい

「へっ・・・見せ付けてくれるじゃねぇかよ！」

「まぁ良いじゃないですか・・・やはり愛は障害があってこそ燃え上がる物です」

「貴方の場合障害って言うよりただの迷惑よ・・・」

2人を温かく見守るフリーザ様たち
今すぐにでも夕日に向ってレッツゴーしたい気分であった
・・・が残念ながら夕日はすでに沈んでいたので予定変更

「そうだ・・・カラオケにでも行きません？あの2人に迷惑かけちゃいましたしね」

珍しく自分の迷惑加減を自覚していたフリーザ様

「よし！じゃあ俺がてめぇら4人分おごってやるよ！」

「あら・・・随分気前が良いのね」

「あぁ！最近振り込め詐欺で儲け・・・あ・・・刑事さん！？
やだなぁ・・・ジョークですよジョーク・・・今度のはカナディアンです・・・」

いつの間にか桜塚の背後にいた佐藤刑事

「まぁいいわ・・・カラオケが終わったらたっぷり話を聞いてあげる」

そしてそこにいたのはいつもの佐藤刑事だった

「そんなぁ！俺なんかと話すよりほら！そっちの旦那とホテルにでも・・・」

バキ！

「きゃあ！俺ケンカは苦手なんですよ～！た・・・助けておまわりさ～ん！」

「私がおまわりさんでしょうが！」

・・・ややゴタゴタしたものの
こうして彼らはそれぞれのあしたに向って歩き始めたのだった

「・・・なるほど・・・工藤症にかかると悪運が強くなるのか・・・

なんでだろう？・・・ひょっとして！
工藤症の原因は未知のパラサイト生命体か何かで宿主を守るために！
良し！これで仮説を立ててみよう・・・」

・・・こちらもあしたに向って歩き始めたようである

続く

おまけ：こぼれ話

カラオケにて・・・

それにしても高木君が生きていてくれて本当に良かったわ
・・・そうよね・・・彼が死にそうになったことを悲しむより
彼が生きて隣にいてくれることを喜ばないとね・・・

「次私歌いますよ～」

「よっ！フリーザ様！」

私も歌ってすっきりしようかな・・・
佐藤刑事がリフレッシュした所でフリーザ様の歌が始まった

「・・・朝目覚める度に～
君の抜け殻が～横～に～い～る♪」

「嫌なこと連想させないでよ！！！」

ぶち切れた佐藤はその後マイクを独占
炎の佐藤リサイタルは延々三時間続き
延長料金で桜塚の懐を泣かせたという・・・

37．あしたへ・・・（後書き）

４話に渡ってお送りした
高木・佐藤両刑事のデート話もこれにて終了です
次回辺りＦＢＩでも出したいな・・・
こんなこと言って出した覚えがないですけどね＾＾；
まぁ近々ＦＢＩからませるつもりです

38．FBIの赤い彗星

ＦＢＩ・・・アメリカ合衆国連邦捜査局
州ごとの自治権が強いアメリカにおいて
州の枠をこえアメリカ全土に渡って活動する司法執行機関
彼らの任務は犯罪の捜査と言うより
アメリカ合衆国を守ることである・・・

そして今
そのＦＢＩが日本で活動している・・・
ある国際犯罪組織を壊滅させるため
・・・すなわち合衆国のために

第３８話　ＦＢＩの赤い彗星

「水無怜奈の意識はまだ戻らないのかね・・・」

「えぇ・・・戻る気配もありません・・・」

病院の中庭でひげを蓄えた男と金髪の女が話をしている
彼らは今日本で捜査中のＦＢＩ捜査官である・・・

「そうか・・・ところで・・・あの茶髪の少女・・・
灰原・・・とかいったかな?その後どうだね?」

「今のところこれと言って・・・
ベルモットは彼女から本当に手を引いたのかもしれませんね」

そんななかもう1人の男がやって来た

「それはどうかな・・・」

ニット帽をかぶった日系の男である

「シュウ・・・どう言うこと?」

「最近彼女の近辺を嗅ぎ回るおかしな奴がいる・・・
まだ奴らとは断定できないが・・・可能性は0ではない」

逃げたくない・・・その言葉を汲み取り
あえて彼女に証人保護プログラムを適用しなかったジョディーは
自分の判断が正しかったのか分らなくなった

「まぁそう心配するな・・・相手は大した奴じゃない・・・
しばらくは俺が見張っていてやる・・・」

一方その頃・・・
哀の後をつける怪しい影が1つ・・・

「ふっふっふ・・・ハイバラさん・・・
今日こそ貴方が何をしているのか暴いてあげますよ!」

フリーザ様だった・・・
いつものビジュアル系ではなく
全身地味な黒尽くめである
その格好があらぬ誤解を招いているとも知らずに・・・

「おっと・・・右に曲がりましたか・・・今日はバレていない様ですね」

そもそもなぜフリーザ様が哀の後をつけているのか?
話は1週間前に遡る・・・

「最近哀ちゃんが私たちと一緒に帰ろうとしないの・・・」

歩美のこの相談から全てが始まった・・・
どうも最近哀は学校が終わるとそそくさと何処かへ行ってしまうらしい
どこへ行っているのか?聞こうとしたがなんとなく聞けず
博士とフリーザ様に相談に来たらしい

「たしかに最近の灰原は付き合い悪いぜ・・・」

「ふむ・・・帰ってくるのも少し遅い気がするのぅ・・・」

考え込む博士とコナン

「分りました!きっと非行に走っているのです!
私が現場を押さえて白状させてあげますよ!」

人の秘密が大好きなフリーザ様・・・
目を輝かせながら尾行を決意した

「お前・・・尾行なんて出来るのかよ・・・」

「コナンさんに教えて貰えれば問題ありませんよ・・・」

妙に殺気だったフリーザ様に
コナンは渋々尾行のイロハを伝授するのであった

そして今日で尾行3日目・・・
実際何度も撒かれたが・・・今日は撒かれないで来ている
しばらくすると哀はとある民家の敷地内へ入って行った・・・
こんなところで何を・・・フリーザ様も後を追った・・・

・・・そこから少し離れた場所で
ニット帽のＦＢＩ捜査官・・・赤井秀一はその様子を伺う

「随分執拗につけまわるな・・・やはり奴らの仲間か・・・
それともただのロリコンストーカーか・・・
見せてもらおう・・・尾行初心者君の正体を・・・」

赤井はライフルを取り出しフリーザ様に狙いを定めた・・・

・・・一方フリーザ様は

「ハイバラさんはここで何を・・・ん?」

その目に飛び込んで来たのは・・・犬とじゃれる哀だった
これが・・・ハイバラさんの秘密?

「フリーザ様・・・そこにいるのは分ってるのよ・・・」

「・・・・・・！！！ほぅ・・・バレていましたか・・・居直りましたね
良いでしょう！バレたからには消えてもらいましょう！」

エネルギー波を放とうとするフリーザ様

「元からバレバレよ・・・良いからこっちへ来てみなさいよ」

そう言われて哀の方に歩み寄る・・・
セントバーナードが尻尾を振って出迎えてくれた

「これが貴方の秘密ですか？」

「別に秘密じゃないわよ・・・貴方がレディを無断で尾行するからちょっとからかって撒いてやっただけよ・・・
この子はこの矢吹さん家の犬で
矢吹さんが旅行に行っている間だけ面倒を頼まれたのよ・・・」

なんだ・・・
タバコを吸う哀・・・シンナーを吸う哀・・・覚醒剤を回し打ちする哀・・・
想像とのギャップにがっかりのフリーザ様であった

「さてと博士がお腹を空かせてる頃よ・・・帰りましょ！
じゃあね！バイバイジャクソン！」

フリーザ様と哀はセントバーナードのジャクソンに別れを告げて帰って行った
・・・その去った後には・・・

「灰原の奴犬の世話なんかしてやがるらしいぜ・・・」

「ムカツク・・・犬も灰原も死ねば良いのに・・・」

久々のバカガキ三銃士が現れた

「なぁ・・・この犬いじめちゃおうぜ!落書きとかしてさ!」

「良いねぇ・・・明日この犬見て・・・あいつ泣いちゃうぜ」

泣きはしないと思うが・・・
とりあえず広告紙サーベルをマジックに持ち代え
ジャクソンに迫るバカガキ三銃士
その邪悪なオーラに怯えるジャクソン・・・
その時だった

「やめな坊主共・・・」

三銃士が振り返ると・・・赤井が立っていた

「なんだよニット帽!落書きしちゃダメだってのか!?
それなら理由を言ってみろよ!どうなんだよ!」

アトス大久保が吠える・・・
普通の大人なら怒鳴りつけそうな生意気ぶりだが
赤井はそんなことはせずにアトスの目をじっと見た
あまりの迫力にびびる三銃士
赤井はそんな三銃士に一言だけ答えた・・・

「坊やだからさ・・・」

たまらず退散する三銃士であった・・・

「やれやれ・・・あれは知り合いだったのか・・・
とんだ無駄足だったな・・・それにしてもまた妙なのが仲間に入ったんだな・・・
ライフルの弾が効かない奴がいるとはな・・・」

赤井はタバコをふかすと夕日の中へ消えて行った

「ねぇ・・・どうでも良いけど服に穴が空いてるわよ・・・」

「あれ・・・本当ですね・・・
さてはあの服屋！とんだ物をつかませてくれましたね・・・」

本当は赤井のせいなのだが
後日服屋のご主人はフリーザ様にボコボコにされたらしい

続く

おまけ：今日のスカウター

ピピピ・・・赤井秀一　戦闘力２１４

フリーザ様から一言
だから誰ですか？この間のベルモットとか言うのもそうですけど・・

・
ってことで原作読んでみたら・・・渋いですね・・・・
私としては全身赤で決めて欲しかったのですが・・・・

38．ＦＢＩの赤い彗星（後書き）

声優ネタです・・・
ってか名前自体声優ネタです・・・
もっとシャア少佐をやって欲しいので
これからもガンガン出して行きます＾＾；

39．ウルルに行きませう

世界の中心・・・それはどこだろう?
昔の人は世界はまっ平らだと思っていたから
「ここが世界の中心!」と答えることが出来ただろう
・・・大抵自分の住んでるところだろうが
しかし実際には世界は丸かった
人々は自分の世界を地面の球・・・「地球」と呼んだ
しかし丸くなると困ってしまった
世界の中心はどこだろう?
この問いに・・・日本人ならこう答えるかもしれない

第３９話　ウルルに行きませう

『助けて下さい・・・助けて下さい・・・俺はリアルプロレスラーだぁ!』

フリーザ様はレンタルビデオ屋で映画のビデオを借りて来ていた
『世界の中心で、俺はリアルプロレスラーだぁ!と叫ぶ』
日本中を泣かせた（曖昧）感動の純愛物語である
ラストの死に行く恋人にリアルプロレスラー宣言をするシーンはハンカチを離せない
フリーザ様もボロボロ泣いている

「なによ・・・2年も前の映画でしょ?それ・・・」

「歩美さんにお勧めだと言われたから見ているんですよ」

哀は呆れながらも一緒に画面に目をやる
終了したようだ・・・ヒライケンジの歌う主題歌が流れている

「いやぁ・・・実に良い映画でした・・・
今度は『今アイ～ンしに行きます』を借りましょう」

それも歩美のお勧めらしい・・・
多分今年の映画に到達することはないんだろうな・・・
哀は軽く溜息をつくとファッション誌を手に取った

「それにしてもあのウルルと言う場所が世界の中心なんですか・・・
世界の中心と言えばこの私にこそ相応しい場所・・・」

そら来た・・・フリーザ様お得意のオ・モ・イ・ツ・キ

「『ウルルに行きましょう』・・・と言う・・・」

「ウルルに行きましょう・・・あれ?
なんで私の言いたいことが分ったんですか?」

やっぱり・・・

「あのね・・・オーストラリアに行くのにいくら掛かると思ってんの?
そんなお金・・・あのハゲに捻出できると思ってんの?」

「ハ・・・哀くん・・・いまさりげにひどいことを・・・」

いつも通りの哀の小言・・・

だがフリーザ様はまったく聞く耳持たない

「大丈夫ですよハイバラさん・・・だれもオーストラリアまで行こうなんて言ってません」

???

「ウルルに行くんです・・・」

同じだろ!

おそらく感動するだけでまじめに映画を見ていなかったようだ・・・

「とにかく・・・今度ばかりは絶対に我侭には付き合わないわよ!」

強い反対をうけがっかりのフリーザ様

ウルルに行きたいな・・・とすっかりいじけてしまった

自分に飛行能力があることをすっかり忘れてしまったようだ・・・

数日後・・・

「行きたいですね・・・ウルル」

「ウルルか・・・2年前映画になってちょっとした話題になったよな」

ダイガクセイと一緒に商店街を歩くフリーザ様

まだウルルを諦め切れずにいる・・・

カランカラン・・・

軽快な鐘の音が響く
商店街の福引のようだ
何気なく見つめるフリーザ様・・・とそこには

『1等オーストラリア7泊8日の旅
エアーズロックからコアラまで・・・全てを満喫！4名様分』

エアーズロック・・・ウルル・・・
これしかないだろ！
早速フリーザ様は持っている金全てを商店街での買い物につぎ込んだ
そして数枚の福引券が手に入った・・・

「よ～し！頑張れフリーザ様！」

ダイガクセイの応援を背に・・・フリーザ様の福引は始まった・・・

・・・・・福引券残り2枚

「・・・・・あ・・・当たらない・・・」

フリーザ様の手元には6等の商品券（５０円）と5等のティッシュ箱が・・・

「くそ！これでどうだ！」

・・・カラ

「はい6等商品券！」

「なんだと!?」

残り1枚
フリーザ様焦りと苛立ちで青筋が立っている
横にいるダイガクセイも汗をびっしょりかいて応援している
・・・白熱しすぎ

「くそ・・・当たりさえすれば・・・当たりさえすればウルルに・・・」

「当ててみろよ・・・」

「ん?き・・・貴様は!」

良く見ると射的屋のテツがいる
どうやらバイトのようだ・・・それにしても相変わらず挑発的である
フリーザ様の怒りのボルテージはＭＡＸに

「俺が世界の中心に立つんだぁ!!!」

ガラガラガラガラ・・・ドジャララジャラジャラ・・・・・・

・・・・・カラ

「ふ・・・フリーザ様・・・」

ダイガクセイがフリーザ様を見た

カランカラン!

「出ました1等賞！オーストラリア7泊8日の旅～！」

フリーザ様最後の最後で1等を出した
やはり宇宙の帝王と呼ばれた男は一味違う
ダイガクセイと抱き合って大喜びである

「ふ・・・星は壊せても・・・たった一つのオーストラリア旅行は嬉しいようだな・・・」

テツは静かにその場を去る・・・

「バイト君！？まだ仕事終わってないよ？お～い！」

・・・・・・
こうしてフリーザ様は哀、博士、そしてダイガクセイと共にウルルにやって来た・・・
世界の中心に立つフリーザ様・・・

「ここが世界の中心・・・なんだか殺風景ですが・・・
ただならぬ趣を感じますね・・・ふっふっふ・・・私に相応しい」

世界の中心で、世界の支配者を気取るフリーザ様・・・
しかしあることに気付いた・・・

「なんか・・・映画で見たのと・・・感じ違いますね・・・」

なんかこう映画とは風景が違うのだ・・・

「あぁ・・・ウルルって言ってるけど
実際のロケ地は違うところでやったみたいよ」

フリーザ様は虚しくなった
なんだか自分の立っている所がえらくちっぽけな場所のような気がしてきた
せっかく世界の中心に立ったのに・・・
なんだか世界の中心ではないみたいだ

「それじゃあ意味ないじゃないですか！ウルルで撮り直しなさ～い！！！」

「きゃあ！無理言わないでよ！」

怒りに我を忘れるフリーザ様

「ふ・・・星は壊せてもたった一つの世界の中心には辿り着けないようだな」

「テツ・・・どうやって来たんだよ・・・」

兎にも角にも・・・フリーザ様のオーストレイリア旅行は続くのであった

続く

おまけ：こぼれ話

突如ウルルに現れたテツに驚くダイガクセイ

「テツ・・・どうやって来たんだよ・・・」

「教えて欲しいか?」

するとテツはおでこに指を当てた・・・

そして次の瞬間いなくなっていた

「て・・・テツ!?」

「こっちだ・・・」

後ろにテツがいた

「これな~んだ?」

テツは帽子を被っている・・・

「瞬間移動・・・俺にはそれが出来る・・・」

・・・その頃東京では

「あれ警部?今日は帽子被ってないんですか?」

39．ウルルに行きませう（後書き）

いいですね・・・オーストレイリア・・・
私も行きたいです
グレートバリアリーフとか＾＾；
海が良いです（爆）
あとコアラが見れればそれで良いんです・・・
出来れば抱っこを（´▽、＊）

４０．カンガルーの帝国

オーストラリア旅行に来ているフリーザ様
ウルルでのがっかりも忘れ
ホテルで眠りについていた
隣のベッドでは哀も寝息を立てている
しかし２人はまだ気付いていなかった
真夜中の来訪者がすぐそこまで来ていることに
そして・・・
これからとんでもないことに巻き込まれようとしていることに

第４０話　カンガルーの帝国

「・・・ザ様」

何かが聞こえたような気がした・・・

「・・・リーザ様・・・フリーザ様・・・」

どうやら自分を呼んでいるようだ
だが哀の声ではない・・・
哀の声はＣＶ．林原めぐみだからだ・・・

「だれですか？こんな夜中に？」

「フリーザ様・・・お迎えに上がりました・・・」

そこにいたのは・・・一匹のカンガルーだった

「はて・・・何でこんなところにカンガルーが・・・
ハイバラさん!起きてください!誰かのペットが逃げ出して来たようですよ!」

フリーザ様が足で哀の顔をぐいぐいと押す
あまりの不快感に哀も目を覚ました

「う～ん・・・何よ・・・・・・っ!!!
ちょっと!どこから連れてきたのよ!このカンガルー!」

「私じゃありませんよ・・・いきなり入ってきたんです・・・」

突然のカンガルーの入室に困惑する2人

「さぁ・・・行きましょうフリーザ様・・・我が主の許へ・・・」

カンガルーが喋った!
さすがの哀も気が動転して言葉が出ない・・・
だがどうやらこのカンガルーはフリーザ様に用があるらしい

「ハイバラさん・・・どうやら飼い主の所に招待してくれるみたいですよ・・・
行ってみましょう!」

「え・・・でも夜だし・・・カンガルーだし・・・」

「ごちゃごちゃ言わずに行くんですよ!」

哀とフリーザ様は着替えるとカンガルーに連れられ外に出た
そしてカンガルーの背に乗ると
カンガルーは物凄いスピードで町を離れていった

「で・・・貴方の飼い主はどこに住んでいるんです?」

カンガルーの背でフリーザ様が聞く

「飼い主ではありません・・・私の主君です・・・この先の草原にいます・・・」

・・・数分後
フリーザ様は広大な草原のど真ん中に来ていた

「こちらです・・・フリーザ様」

カンガルーに案内され
巣穴と思しき所に招かれるフリーザ様
長いトンネルのような穴を突き進む

「ちょっと・・・本当に行く気?」

「くどいですよ!ハイバラさん!ここまで来たら腹をくくりなさ~い」

私はこれでも普通の人間よ・・・
哀はゴタゴタはまっぴらだった
喋るカンガルーなど相手にもしたくない
ただ自分が薬で小さくなった異常な人間だと言うことは忘れている

らしい

「それにしても長い巣穴ね・・・」

トンネルのように長い穴を抜けると・・・古代都市のような場所にやって来た

「ここは我々カンガルーしか立ち入れない聖域・・・カンガルー帝国です・・・」

そう言われてその都市を見渡すフリーザ様
恐ろしく広い・・・
東京より広そうだ・・・

「さぁ・・・我が主の屋敷へご案内いたします・・・ついてきて下さい」

最初にカンガルー帝国を目にしたのは帝国一番の高台・・・
そこからしばらく行ったところにその屋敷はあった
今までに見たことも無いような建築である

屋敷に入ったフリーザ様と哀は大広間に通された
食事の用意がされている

「しばらくここでお待ち下さい・・・主を呼んで参りますどうぞ召し上がって下さい・・・歓迎の料理です」

とりあえず食事の前に腰掛けるが
得体の知れない料理が並んでいる
哀はフリーザ様の料理のことを思い出して手をつけるか迷った

「やや！・・・これ美味しいですよ」

フリーザ様は気にせずバクバク食べている

「あとでお腹壊しても知らないわよ・・・」

そこへさっきのカンガルーと別のカンガルーがやって来た

「フリーザ様・・・お目にかかれて光栄です・・・
私はナグリタオ・スゾと申します・・・この辺りを取り仕切るカンガルーです」

ナグリタオは話を続ける

「貴方の噂はかねがね・・・幾多の星での武勇伝・・・
いやはや・・・なんと勇ましいことでしょうか」

「ほぅ・・・カンガルーの皆さんにまで私の名前が知れ渡っているとは・・・」

食事を口にしながら話を聞くフリーザ様
しかし突然こんなところに連れてこられた哀は不機嫌極まりない

「で・・・なんで私たちをここに連れて来たのよ?」

「はて・・・そちらのお嬢さんは?」

突然口を挟んできた哀にナグリタオは首を傾げた

「気にしないでください・・・私の下僕です」

・・・いつの間にか自分は下僕にされていたらしい
哀はフリーザ様をにらみつけた

「そうですか・・・・・
フリーザ様・・・貴方をお呼びしたのはこの帝国の政乱を解決して
欲しいからです」

ナグリタオが言うには
カンガルー帝国にはいくつもの部族が存在し
昔からそれぞれの部族同士が覇権を争っていたらしい
しかし・・・数世代前に現れたコラ族は強大な力をつけ
カンガルー帝国を手中に治めるとコラ族を特権階級とした
独裁政治を始めたのだと言う

「いくつもの部族が奴隷にされたり滅ぼされたりしました・・・
我々スゾ族のように反抗できる者はまだましです・・・」

「でもどの部族も覇権を狙ってるんでしょ?
覇権を取ったのが自分たち以外の部族だからって
それじゃあまりに勝手すぎない?」

哀が容赦なく指摘する

「確かに・・・覇権は常に誰かの手に納まるものです・・・
しかしコラ族の横暴ぶりはカンガルー帝国史上最凶最悪!
詳しくは後ほど話しますが・・・奴らをこのまま野放しにすれば
いずれ人間にも被害が及ぶのですよ!」

どうやらただならぬことになっているらしい
哀も少なからずこの事態に興味が沸いてきたようだ

「で・・・私にどうしろと・・・」

「簡単に言えばコラ族と戦って倒して欲しいのですが・・・
今夜はもう遅い・・・詳しい話は明日にしましょう・・・」

そう言うとナグリタオは先ほどフリーザ様達を案内して来たカンガルーを呼んだ

「この国にいる間はこの者がお２人のお世話を務めます
ケリトバ・スゾと申しまして私の甥にして忠実な部下です」

ケリトバは２人を寝室に案内した
簡素だがふかふかで良く眠れそうな寝床が用意されている
２人はそのふかふかに吸い込まれるように眠りに落ちた・・・

続く

おまけ：今日のスカウター

ピピピ・・・ナグリタオ・スゾ　戦闘力１２０

フリーザ様から一言
刑事さんや探偵さん達より全然上ですね・・・そうは見えませんけどやはり野生動物って恐いですね・・・恐ろしい戦闘力を秘めています
大自然の前に人間は無力なのでしょうか？

４０．カンガルーの帝国（後書き）

カンガルー帝国編に突入です
これからしばらくの間は続くと思います
多分哀以外コナンキャラは出ません＾＾；
これより先はわけの分らないオリキャラ（カンガルー）
そしてフリーザ様・・・＾＾；
まぁでもコナンと全く無関係にはしないつもりです

41．聖域の陰謀

遠い昔・・・
人類がやっと火を使い始めた頃
オーストラリアの草原に彼らはいた
カンガルー達は当初自由に大地を駆け回り
アボリジニー達と交流もあったと言う
しかし・・・オーストラリアに別の人間がやって来た
その科学力に恐怖した彼らは
大地に住む精霊達の協力を得て
カンガルーの聖域を作り上げ・・・そこに身を隠した
・・・カンガルー帝国誕生の言い伝えである

第４１話　聖域の陰謀

フリーザ様はカンガルー帝国で気持ちの良い朝を向えた
辺りではカンガルー達がすでに活動を始めている
隣で気持ち良さそうに寝ている哀を無理矢理叩き起こすと
フリーザ様は外を散策してみることにした

「太陽が出ているようですから・・・地球の何処かだとは思うのですが・・・」

あまり見たことのない風景が辺りに広がっている
こんなに広大なのに人類に見つからずに来たと言うのだろうか？

「案外桃源郷みたいな所なのかも知れないわね・・・」

桃源郷・・・もう一度行きたいと思っても
2度とは辿り着けない夢の里
しかし・・・ここはそんな夢の里とはかけ離れているようだった
カンガルー達は一見平和に暮らしてはいるが
何処か殺気だっている
やはり政乱が原因なのだろう・・・
しばらく歩くと2人は屋敷に戻った

「おはようございますフリーザ様
朝食の用意が出来ております・・・どうぞこちらへ」

ケリトバが玄関で待っていた
2人は昨日の大広間に通される

「おはようございますフリーザ様
さぁ召し上がって下さい！散歩は如何でしたか？」

ナグリタオが朝食を勧める
さすがにお腹が空いたので哀も食事に手をつける
思っていたよりずっと美味しかった

「皆さん殺気だっていますね・・・政乱というのも納得できますよ」

ナグリタオは静かにうなずく

「そう言えば私たちを見てもあまり驚いてなかったけど・・・」

ふと哀が気付いた
この国はカンガルーの聖域・・・人間が本来いるはずが無いのに・・

・

「あぁ・・・フリーザ様の来訪は1週間前に皆に伝えておきましたから」

「1週間前!?って・・・私達がオーストラリアに来たのは一昨日よ・・・なんで・・・?」

「東京の動物園に派遣した我々の同胞から情報は得ておりましたあのフリーザ様が地球に来ている・・・と」

ナグリタオが言うにはフリーザ様をカンガルー帝国に招くために歩美の脳に干渉しフリーザ様に映画のビデオを見せさらにテツに協力してもらい福引でオーストラリアへのチケットを当てさせたのだという

「なるほど・・・全ては仕組まれていたってわけね」

「ところで・・・昨日の話の続きを聞きたいのですが?」

お皿を空にしたフリーザ様が口を開いた

「そうですね・・・お話しましょう」

ナグリタオは今カンガルー帝国で起きていることを語り始めた

「実はコラ族は・・・人間界の支配を目論んでいるのですそしてその計画はすでに始まっている・・・」

衝撃の事実・・・世界はカンガルーに乗っ取られそうになっていた!

「数世代前・・・コラ族の若い戦士に凄まじい戦闘力を持った者が現れました
1万年に一匹生まれると言われるスーパーカンガルーです・・・
しかし彼は凄まじい野心家でした・・・彼は1世代で終わってしまうスーパーカンガルーの力を
自分の子孫たちへ受け継がせるため人間の生物学者を引きこみ
そしてそれを実現させてしまった!」

つまりコラ族にスーパーカンガルーがコロコロ生まれるので
他の部族では歯が立たないのである

「そして最近になって・・・彼らは遂に人間界に干渉を始めました
我々カンガルーしか手に入らない精霊の水を餌に邪悪な人間を集めているのです
コラ族はその人間たちを利用し人間界を思うがままに支配する気なのです」

「そんなこと言ったって・・・どうせたいしたのは来てないんでしょ?
こっちじゃ噂にすらなってないわよ・・・」

「コラ族だって下手に目立って計画を潰したくはない・・・
目立たずに裏社会で行動できる者をうまく集めたのです
国際犯罪組織です!それも極めて世間に露出度の低い・・・」

哀がピクリと反応した

「犯罪組織?どんな?」

「さぁ・・・詳しくは・・・
ただ一度見ましたが黒尽くめの不気味な連中です」

やはり奴らだ・・・哀は自分が震えていることに気がついた
しかし彼らが絡んでいるとなると厄介である
せめて彼がいてくれたら・・・
しかし隣にいるのは頼りにして良いのかすら分らないフリーザ様である

「なるほど・・・それは厄介ですね・・・
で?具体的に私にどうしろと?」

「我々だけでコラ族に立ち向かっても返り討ちにされるのは目に見えています
そこでフリーザ様には数名いるスーパーカンガルーを倒して欲しいのです
スーパーカンガルーさえいなければ我々スゾ族だけでも十分戦えます」

その後フリーザ様とナグリタオは
どうやってスーパーカンガルーをフリーザ様に差し向けるかについて話し合った
しかし・・・哀は別のことを考えていた
組織のことを・・・確かに戦力的にはスーパーカンガルーの方が上かもしれない
しかし本当に厄介なのは組織のほうだと哀は痛いほど分っていたからだ

「あなたならどうするの?・・・工藤君・・・」

その頃・・・

「これはこれは・・・お待ちしておりました」

宮殿の前で一匹のカンガルーがペコペコしている
その前には・・・黒尽くめの女とその部下達がいた

「王はいるの？」

「はい・・・玉座の間に・・・ただいま取り次いでおりますので」

・・・今
世界の命運はカンガルーたちと
哀、そしてフリーザ様に託されようとしていた

続く

おまけ：今日のスカウター

ピピピ・・・ケリトバ・スゾ　戦闘力３０２

フリーザ様から一言
彼はスゾ族の最強戦士です・・・確かに高い戦闘力ですね・・・
３００代は学園斎さんに続いて２人目です
それにしても彼でも敵わないスーパーカンガルーとは・・・
楽しみですね・・・ふっふっふ

41．聖域の陰謀（後書き）

黒い人たちを絡ませてみました
ってことで次回から黒い女が本格参戦です
カンガルー帝国編長くなりそうだなぁ・・・
スタミナつけて頑張らなきゃ
うなぎでも食べますか＾＾；

42．許されぬ愛

『・・・分った・・・お前の言うことを信用しよう
成功を祈る・・・』

ボスからメールが来た
メールを削除しながら女は不敵に笑う

「精霊の水を持ち帰れば我々の目的に限りなく近付ける」

そのためにはなんとしても
カンガルーの帝王を丸め込んでおかないと・・・
強い野望を胸に
女は玉座の間へ入って行った

第４２話　許されぬ愛

黒尽くめの女は玉座の間に通された
玉座・・・人間の感覚からすればそうは見えないが・・・
とにかく玉座らしいそれにそのカンガルーは寝そべっている
女は顔に笑みを浮かべてその様子を見ていた・・・
が・・・後ろから小突かれた

「貴様！自分の立場が分っていない様だな！
シバクゾ・コラ様の御前であるぞ！頭が高い！」

「やめろヤンノカ・・・おい人間！計画の方は順調なんだろうな？」

かなりえらそうな態度である
女は今にも怒りを爆発させそうになったが
精霊の水のためこらえることにした

「はい陛下・・・もちろん順調に進んでおります・・・
我が組織の力を持ってすれば裏から世界を支配するなど容易いことです」

「そうか・・・」

そうか？
それだけ？
女はもどかしくなった・・・いつ来てもこいつらの態度は変わらない
精霊の水は愚か褒美一つ出しはしない
あまり収穫が無くてはボスに良い顔をされないだろう
女は思い切って聞いてみることにした

「あの・・・それで精霊の水は？」

「ん？・・・あぁ・・・貴様らの仕事には満足している・・・
だが精霊の水を分けてやるのに見合う働きをまだ見せてもらっていないな・・・」

女は遂に切れた・・・
銃を取り出すとシバクゾの眉間に押し当てた

「陛下・・・あまり私達を見くびらないことね・・・
私が合図すれば部下達が貴方と貴方の一族を皆殺しにするわよ？」

しかしシバクゾはいたって冷静である
顔には笑みまで浮かべている

「部下？外でくたばっている奴らのことかね？」

はっとして窓から外を見る・・・部下達がまるでボロ雑巾のようにされている

「お前たちはスーパーカンガルーの恐ろしさを分っていない・・・
しかし度胸は気に入ったぞ身の程知らずめ
そこで少し仕事を頼みたい・・・働き次第では・・・」

・・・一方フリーザ様達は作戦会議を開いていた

「面倒くさいですね・・・そのコラ族と言うのを片っ端から片付けては？」

フリーザ様の力を持ってすれば可能である・・・が

「いえ・・・そうなると混乱と報復で国全体が荒れることに・・・
もっとスムーズに政権を倒す作戦を練らなくては・・・」

ナグリタオも他のスゾ族の者も難しい顔で考え込む

「向こうと連絡は？」

哀が聞いた
何か考えがあるようだ

「取れますが・・・」

哀はある作戦を思いついていた
まずスゾ族はコラ族に降伏し奴隷となる旨をコラ族や他の部族に伝える
そしてコラ族のための式典を広場で開きたいと・・・

「向こうはまさかスーパーカンガルーに対抗できる手段があるとは思わずに
きっとノコノコ出てくるはずよ・・・信用されるかは別として・・・」

そして広場にコラ族を集め・・・フリーザ様が一気に叩く!
一ヶ所に集めて倒せば残党が残る心配も少なくなる
これが哀の作戦であった
ナグリタオは感心しながら聞いていた

「よし・・・じゃあその作戦で行こう!皆の者異存ないな?」

スゾ族全会一致で可決・・・かと思われたが一人反対する者が・・・
ケリトバであった

「叔父上!私はそのような皆殺しの殺戮のような作戦には乗れません!」

ケリトバはその後皆の説得を受けたが
全く意見を変えようとせず・・・怒ってその場を去ってしまった

「ハイバラさん・・・何なんでしょうね?」

「さぁ・・・何か裏がありそうね・・・後を追ってみましょう・・・」

あまりのケリトバの態度に2人はこっそり後を追うことにした
もう日の沈もうとしているカンガルー帝国・・・
町からはなれた丘の上でケリトバを発見した
もう1匹のカンガルーと共に・・・
2匹は何か話をしているようだった

「私はケリトバのことを信じてるわ・・・」

「うん・・・ごめんよナメンナ・・・全てが終わったら必ず・・・
だから君は絶対に死なないでくれ・・・」

会話が終わったのかケリトバが帰ってくる
そこへフリーザ様と哀が現れた・・・

「・・・聞いていたんですか?」

「ケリトバさん・・・今のは誰ですか?」

フリーザ様の問いにケリトバは固く口を閉ざしたがしばらくして口を開いた

「叔父上にはこの話は伏せておいて下さい・・・
今の女性はナメンナ・コラ・・・コラ族の方で・・・私の恋カンガルーです」

恋カンガルー?・・・あぁ恋人ね・・・
つまりカンガルー版ロミオとジュリエットのようだ

「それで・・・さっきあんなに反対したのね・・・」

「えぇ・・・自分勝手な話ですが・・・彼女を死なせたくはないんです
だからフリーザ様・・・どうか皆殺し作戦だけはお考え直しください」

それだけ言うとケリトバは去って行った
困り果てた2人を残して・・・

・・・そんな2人を見つめる女が1人

「あれがシバクゾに反乱するための助っ人?・・・ただのビジュアル系にしか・・・!!!」

その時彼女はその隣の人物に気がついた

「あれは・・・シェリー・・・」

続く

おまけ：今日のスカウター

ピピピ・・・シバクゾ・コラ3世　戦闘力１００００

フリーザ様から一言

地球の生物でありながらここまでの戦闘力を身につけるとは・・・
少々驚きましたよ・・・しかし参考までに教えておきますが
私のこの状態での最大戦闘力は５３００００です・・・
ですがもちろんフルパワーでは戦いませんから
読者の皆様は安心してハラハラして下さい・・・ふっふっふ

42．許されぬ愛（後書き）

次回は遂に黒い人と哀が・・・
まぁこの小説に限って
哀が屋上で血まみれになるとか
煙突から血まみれで落っこちるとかは
ありえないんですけどね

43．黒い負け組

赤みがかった茶髪・・・
ウェーブのかかったそのヘアースタイル
少女の姿をしているが・・・
間違いない・・・あれはシェリーだ
なんであんな姿になっていて・・・なんでここにいるのか？
それは分らない・・・
もしかしたらあいつのしていた研究に関係あるのかもしれない
とりあえずあれはシェリー
憎き裏切り者・・・
黒から無理矢理白を塗っただけの
灰色の女・・・

第４３話　黒い負け組

「こんなところで佇んでいても仕様がありませんよ・・・帰りましょう」

フリーザ様の一言で
呆然と考え事をしていた哀も来た道を戻り始めた
するとそこに

「久しぶりね・・・シェリー！！！」

黒尽くめの女が現れた
哀の体は一瞬にして強張る

「おや・・・随分黒いカンガルーさんですね」

「あのね・・・私がカンガルーにみえるの？
あんた達を始末に来た人間だよ！」

フリーザ様のボケに律儀に突っ込む黒女
哀はその顔に見覚えがあった・・・

「あ・・・あなたは・・・」

「思い出したようね・・・シェリー！」

空気が凍りつく
その場にいるだけで体が引き裂かれそうな緊張感
しかし哀の口から出てきた言葉は・・・

「・・・・・泡盛！！！」

「漢字で表記しないで！ＡＷＡＭＯＲＩよ！」

間抜けなコードネームだが危険人物であることに変わりはない
それが証拠に哀の緊張状態は依然として続いている

「まさかこんなところで裏切り者に出会えるなんてね・・・」

しかしその時
置いてけぼりにされていたフリーザ様が口を挟んだ

「ハイバラさん・・・誰ですか？このヌケサクは？」

ヌケサク・・・
ヌケサクだと!!!

・・・ヌケサじゃなくてＡＷＡＭＯＲＩのコンプレックス
それはそのコードネームだった

「お前のコードネームは泡盛だ」

え?洋酒の名前じゃ・・・

「泡盛だ!!!」

・・・・・・

ハーイ!キャンティ!今度あんたと仕事することになったからよろしく!

「はぁ?あんたの仕事はあたいらの弾運びだよ!泡盛!」

「お前・・・邪魔・・・大人しく弾だけ運んでろ・・・」

「余計なことしてみろ?てめぇを的にするぜ?ヌケサク!」

コルン!?カルバドスまで!?そんな・・・

・・・・・・

「やぁ・・・初めての顔だね・・・これからよろしく・・・
まぁ俺らの仕事なんて大したもんじゃないけどね・・・」

よろしく・・・私は・・・泡盛・・・

「・・・恥ずかしがらなくて良いよ・・・
俺なんてスーパードライだぜ!?なぁグビ生!」

「そうそう仲良くやろうぜヌケサク!」

・・・・・・

「精霊の水?不思議の国を冒険中なの?・・・アリスちゃん?」

「まったく・・・シェリーの奴は着実に研究の成果を上げてるってのに・・・」

でもこの精霊の水さえあれば・・・

「くどいぜ!首から上はいらねぇってのか?ヌケサク!」

「うわあああああああああああああああ!!!!
うるせぇ!うるせぇ!うるせぇ!うるせぇ!うるせぇ!
泡盛じゃねぇ!ヌケサクでもねぇ!」

突然ＡＷＡＭＯＲＩが切れた・・・
唖然とするフリーザ様と哀

「確かに私は使えねぇよ！さっきもカンガルーごときに出し抜かれた！
でも使えないなりに組織のためにやって来た！精霊の水も後ちょっとで手に入る！
最後にボスを喜ばせるのはこのＡＷＡＭＯＲＩだ！！！」

ヌケサク呼ばわりが相当気に入らなかったのか
かなりヒステリックに切れるＡＷＡＭＯＲＩ
哀はガタガタ震えているが

「おい泡盛！邪魔だよ！通れないでしょう！」

フリーザ様の容赦ない発言
完全に切れたＡＷＡＭＯＲＩ

「くたばれ！」

銃口を真っ直ぐフリーザ様に向けて引き金を引いた
発射された９ｍｍパラベラム弾は一直線にフリーザ様めがけて飛んで行く
が・・・

パシッ！

フリーザ様の手にキャッチされた
驚くＡＷＡＭＯＲＩ

「ふふ・・・この僕にこんな弾が通用すると思ってるんですか？
こんな鉛弾持ってても仕方ないし返しますよ・・・」

フリーザ様は腰を抜かしたＡＷＡＭＯＲＩめがけ指で弾丸を弾いた
今度はヌケサクめがけて真っ直ぐ飛ぶ９ｍｍパラベラム弾・・・
だがヌケサクの目の前で弾きおとされた

「・・・ったく・・・だから言ったんだ・・・こんなヌケサクに出来るわけがねぇって」

そこにいたのはカンガルーだった

「なんですか貴方は？」

「ふふっ・・・てめぇがフリーザか・・・話に聞いてはいたがまさかこんなチビスケとはな・・・
おれの名はヤンノカ・コラ・・・帝王シバクゾ・コラ様の側近だ」

いろいろ言っているが
フリーザ様にここまで言えるとはかなりの命知らずのようだ
フリーザ様も無礼な発言の数々に青筋を立てている

「スゾ族に雇われたのか？まぁいい・・・
そっちがその気なら明日にでも決着をつけてやる！」

「ほぅ・・・どうしようと言うのですか？」

「この俺も含めスーパーカンガルー全員でてめぇを叩く！
勝ったほうが国を獲る・・・分りやすいだろ？あした出向いてやるからな
逃げるなよ！・・・行くぞヌケサク・・・」

そう言うとヤンノカはヌケサクを引きずって帰って行った
フリーザ様はしばらくその去って行く方角を見つめていたが
辺りが暗くなってきたので強張る哀を引きずって帰って行った

「ふっふっふ・・・思いのほか短期決着になりそうですね・・・」

そして・・・
カンガルー帝国の・・・
世界の命運をかけた戦いの日がやって来た・・・

続く

おまけ：今日のスカウター

ピピピ・・・泡盛　戦闘力７４

フリーザ様から一言
え？７４？・・・２ぐらいだと思ってました・・・
まぁさすがは組織の一員・・・一応あのお方からメールを受け取るだけのことはありますね
でも努力は認めますがヌケサクはヌケサク・・・
ハイバラさんはなんであんなのにビビってるんでしょうか？

43．黒い負け組（後書き）

暇だったので一気に更新しました
そろそろ後2回でカンガルー帝国編は終わります
ふぅ（；´Д｀）
カンガルーで良くこんなに話が書けたな・・・

４４．井の中の蛙

２００Ｘ年・・・カンガルー帝国
遂にその日はやって来た・・・
コラ族のスーパーカンガルー達とフリーザ様
人類の知らないところで
人類の命運をかけた戦いが始まろうとしている
最後まで立っていられるのは
スーパーカンガルーか・・・
それともフリーザ様か・・・

第４４話　井の中の蛙

フリーザ様がカンガルー帝国に来て2度目の太陽が登った
早朝だが・・・スゾ族の者たちは一層殺気だっている
哀もその凄まじい殺気の中でいつもより早く目が覚めた
しかしフリーザ様は決戦の日だと言うのにまだ寝ている

「まったく・・・呑気なものね・・・」

その時ケリトバがやって来た

「おはようございます・・・あの・・・フリーザ様は？」

「まだ寝てるわよ・・・何か用？」

「いえ・・・遂に今日で決まるんだな・・・と」

正直なところケリトバも落ち着いていられないようだ
とくにケリトバはナメンナのこともある
ただ勝つだけでは彼にとってのハッピーエンドにはならない
その後ナメンナと一緒になれて初めてハッピーエンドなのだ

「大丈夫よ・・・誰と一緒になるかなんて貴方の勝手
とりあえず今は2人で生き残ることだけ考えなさい・・・」

「そうですね・・・」

やや憂いを帯びた顔でケリトバが笑う

・・・AM10:00（人間時間）
フリーザ様たちは町の闘技場にやって来ていた
ここで決着をつけるのだ
闘技場には世紀の戦いを見届けようと
たくさんのカンガルーがやって来ている
しばらくするとシバクゾ率いるスーパーカンガルー達がやって来た

「ふふふ・・・なるほどこいつがフリーザか・・・
思ったほどではないな・・・」

シバクゾはフリーザ様を一瞥するとそう言った
スゾ族以外のカンガルーは皆頭を下げている

「ふん・・・スゾ族の連中はリスペクトを知らんな・・・死ぬ準備
は万端らしい・・・」

「ごちゃごちゃ言ってないでさっさと始めましょう・・・死にたい方からどうぞ」

緊張が走る
シバクゾが合図すると
若いスーパーカンガルー数匹が飛びかかった

「はあああぁぁぁぁぁ！！！」

手からエネルギー波を出すカンガルー達
それらはフリーザ様を捉えた
爆煙に包まれる闘技場

「ふぅ・・・せっかく博士さんが用意してくれた服なのに・・・破れてしまいました」

煙が消えると蹴散らされたカンガルー達と無傷のフリーザ様が現れた

「やれやれ・・・この程度では後の展開が予想出来ますね」

シバクゾが合図を送る
しかしカンガルー達は恐ろしさのあまりかかることが出来ない
初めて味わう恐怖に逃げ出すカンガルー達
が・・・次の瞬間やられていた

「王を差し置いて逃亡とは・・・恥を知らんやつらめ！」

ヤンノカが出てきた

「フリーザ・・・俺は昔からてめぇと戦いたかった

数々の武勇伝・・・子供心に震えが走る内容だったよ・・・
でも本物にあってがっかりだ・・・地球で丸くなったんじゃないか？」

しかしフリーザ様はいなくなっていた
周りを見渡すヤンノカ

「ヤンノカ！上だ！」

シバクゾが叫んだが遅かった
フリーザ様の蹴りがヤンノカを完全に捉える

「丸くなった？何のことです？」

闘技場は揺れに揺れていた
今までシバクゾを恐れて決してフリーザ様を応援しなかったカンガルー達
だが・・・今ではコラ族以外の全てのカンガルーがフリーザ様を応援している

「黙れ！貴様らこいつを倒したら強制労働だ！」

「では早く終わらせましょう」

余裕たっぷりのフリーザ様

「私を他のスーパーカンガルーと一緒にしないことだ・・・」

シバクゾが気を入れ始める・・・

すると大地が揺れ始めた

グラグラ・・・

「やだ・・・地震かしら?」

探偵事務所・・・掃除をしていた蘭が揺れに気付いた
それにしても長い揺れである

「妙に長い地震だな・・・どれ・・・テレビでも見てみるか」

テレビをつける小五郎
いつもなら情報番組がやっている時間だが

「臨時ニュースです!ただいま続いている地震は
震源地が特定できず、世界的に同じ震度で揺れているとのことです
原因はまだ発表されていません・・・繰り返します・・・」

人間たちは何が何だかさっぱり分らなかった

「ほぅ・・・戦闘力１０００００と言った所でしょうか
たしかに少し貴方を見くびっていましたよ・・・」

ニヤリと笑うシバクゾ
次の瞬間フリーザ様を殴りつけていた
あまりの速さに他の者はついていけない

「・・・なるほど・・・いいパンチだ・・・」

「分ったか・・・お前が倒したスーパーカンガルーは所詮人の科学で作り出された出来損ない
しかし俺は違う！おれはオリジナルのスーパーカンガルーの力を１００％継承した！」

さらに殴りかかるシバクゾ
今度は避けるフリーザ様

「馬鹿め！見えているぞ！！！」

逃げるフリーザ様を追いかけ遂にその背中を拳が捉えた
・・・と思われたが

「なに・・・どこに行った？」

フリーザ様を見失ったシバクゾ

「ふっふっふ・・・ちょっと本気を出せばついて来れないようですね」

唖然とするシバクゾ

「すごい・・・これがフリーザ様の力なの？」

哀も目の前で起こる超常的な戦いに困惑する
組織で揉まれ・・・大抵のことには動じない彼女ですら・・・

「な・・・何てことだ・・・俺は・・・俺は・・・
俺はスーパーカンガルーだぁ！！！」

シバクゾ全身全霊のエネルギー波
しかしフリーザ様に蹴り飛ばされる

「昔ベジータって奴が貴方と同じセリフで同じことをしましたけど
今回と同じような展開になりましたよ・・・もう良いでしょう？そ
ろそろ終わらせましょう」

フリーザ様がジリジリとシバクゾに歩み寄る
シバクゾは恐ろしさに動くことが出来ない

「おい！何をしている！お前たち！早く私を助けろ！」

しかしすでにコラ族も彼から離れていた
闘技場にはもはや彼の味方はいなかった

「諦めなさい・・・所詮は井の中の蛙だったんですよ」

コラ政権崩壊が近付いていた

続く

おまけ：今日のスカウター

ピピピ・・・ヤンノカ・コラ　戦闘力８０００

フリーザ様から一言
私としたことが・・・もっと遊んであげれば良かったですね・・・

いささか大人気なかったかもしれません・・・
それにしてもスーパーカンガルーさん達・・・
私が相手でなければ恐ろしい敵となったでしょうに
出る作品を間違えましたね・・・

４４．井の中の蛙（後書き）

次回遂にカンガルー編完結です
感動のラスト?に向け頑張ります
カンガルーの皆さん
本当にお疲れ様＾＾；

45．崩壊

祇園精舎の鐘の声
諸行無常の響き有り
沙羅双樹の花の色
盛者必衰の理を表す
奢れる者も久しからず
ただ春の夜の夢の如し
猛き者もついには滅びぬ
ひとえに風の前の塵に同じ
・・・これは平家物語の冒頭である
諸行無常、盛者必衰・・・
カンガルー帝国もまた同じ

第４５話　崩壊

追い詰められたシバクゾ
しかし彼の目に一匹のカンガルーが飛び込んできた

「まだツキはおれにある・・・」

そうつぶやくと物凄いスピードでそのカンガルーを捕らえた

「近寄るな！この娘の首をひねり落とすぞ！」

帝王としての意地もプライドも・・・
全てをかなぐり捨ててシバクゾは惨めな人質・・・

否・・・カンガルー質作戦にでる
それほどまでにフリーザ様との実力差に絶望しているのだ

「くだらないですね・・・そんな小娘勝手に殺せば良いでしょう
なんなら仲良く2匹で逝きますか?」

フリーザ様がエネルギー波を放とうとした
しかし1匹のカンガルーがそれを遮った

「待ってくださいフリーザ様!彼女を殺さないで下さい!」

「なんですかケリトバさん・・・」

「!!!・・・フリーザ様!あのカンガルーはナメンナさんよ!」

哀の言葉に目を凝らして良く見ると
たしかに昨日ケリトバといたメスのカンガルーである

「ふはははは・・・ナメンナと貴様が密会していることなどお見通しだ
さぁ・・・大切な恋人を失いたくないだろう?俺を安全な所まで逃がせ!」

「ケリトバ・・・もういいのよ・・・私よりシバクゾを撃って!」

ナメンナは健気に言う
しかしこの涙目で健気に訴えたのが返って逆効果だった
乙女だけが放てる健気オーラがビンビンに出てしまったため
彼女の萌エネルギーは通常の2倍から2乗にまで及んでしまった

「う・・・撃てないよ・・・ナメンナ・・・萌え～」
その様子を見て笑みを浮かべるシバクゾ
「良し・・・分ったら道を・・・」
道を開けろ・・・そう言いたかった
なのに「道」をまでしか言えなかった
声が突然出にくくなった
「き・・・貴様・・・」
「シバクゾ様・・・俺は貴方を真のスーパーカンガルーだと・・・
真の帝王だと思ったから・・・ここまでお仕えして参りました
だが今の貴様は姑息な作戦で助かろうとする下衆野郎だ！」
「黙れ！」
ヤンノカはシバクゾに粉々に粉砕された
しかし気がつくとナメンナはケリトバの許にいた
「可哀想に・・・主人に粉砕されてリストラなんて・・・
でも大丈夫・・・すぐにご主人様もそちらに逝きますよ・・・
あの世で主従契約更新ってことで・・・」
「やめろ・・・来るなぁ！誰か！誰か私を助けろ！」
惨めに逃げ回るシバクゾ
その場にいた誰もが哀れみの視線を送る
その時

「陛下・・・ここに逃げ道を用意したわ・・・」

ヌケサク・・・ＡＷＡＭＯＲＩが現れた

「おぉ！人間！よくやった！」

「よくやった？そうじゃないでしょ・・・渡す物があるでしょう？」

ここぞとばかりに上から物を言うＡＷＡＭＯＲＩ
腐っても組織の人間だったようだ

「分った・・・ほら！受け取れ！精霊の水だ！」

シバクゾが小瓶を投げ渡す
ＡＷＡＭＯＲＩはそれを受け取ると満足げに笑みを浮かべた

「さぁ・・・逃げ道はどこだ？」

その瞬間シバクゾは体が痺れていることに気付いた
喉の奥から熱い何かが込上げて来る・・・
たまらず吐き出すと目の前が真っ赤に染まった
血だ・・・

「な・・・に・・・？」

「朝食に盛っておいたわよ・・・効果が出るまでに時間が出る毒・・・
スーパーカンガルーと言えども毒には勝てないようね・・・
用意したわよ・・・あの世への逃げ道を」

その瞬間の彼女はもはやヌケサクではなかった
黒の組織の女幹部・・・ＡＷＡＭＯＲＩだった

「ふふ・・・この賭け・・・フリーザに賭けた私は間違って無かった
そして遂に精霊の水を・・・ジン・・・ベルモット・・・もうヌケ
サクなんて呼ばせない」

哀には彼女から凄まじい後光が出ているように見えた・・・
と言うより後ろが光っていた
エネルギー波のようだ・・・彼女を捉える

「・・・ふ・・・イタチの最期っ屁ってやつか・・・」

シバクゾはそう言うと絶命した
崩れ落ちるＡＷＡＭＯＲＩ

「ＡＷＡＭＯＲＩ！！！」

哀が駆け寄る
だが・・・どう見ても助かる傷ではなかった

「やっと・・・ＡＷＡＭＯＲＩって呼んでくれた・・・
ずっと・・・誰かにそう呼んで欲しかった・・・」

息も絶え絶えしかし精霊の水はしっかりと握っている

「シェリー・・・精霊の水を手に入れたわよ・・・これで・・・ボ・
・・スに・・・
ねぇシェリー・・・最期に・・・教・・・えて・・・私はやったの

よね・・・私は・・・
ヌケサク・・・なんかじゃ・・・ないのよね・・・？」

目から涙をこぼし最期の質問を綴ったＡＷＡＭＯＲＩ
凶悪だった顔も少女のようにあどけなくなっている
最期の最期で彼女はやっと自分の存在意義を確認できた気がした
が・・・

「いいえ・・・貴方はヌケサクよ・・・詰が甘かったわね・・・」

「・・・ちくしょおぉあ！！！」

ヌケサク死亡
その死に顔は恐ろしく醜かったという・・・

「ハイバラさんって・・・ひどいんですね・・・」

「ん？・・・自分でもそう思うわ」

・・・・・・

「博士～本当にこっちで良いんすか？どう見ても草原っすよ？」

「うむ・・・予備の追跡メガネに反応があるからの・・・よく探すんじゃ！」

行方不明になったフリーザ様と哀を探す博士とダイガクセイ
地元警察の運転するジープに乗って捜索活動中である

「ヘイ！ミスターアガサ！あそこにいるのがそうじゃないか！」

警官に言われて見てみるとそこには見慣れたビジュアル系と茶髪が・・・

ジープを止めて駆け寄る・・・フリーザ様と哀である

「どこへ行っていたんじゃ・・・まぁ良い・・・とにかくホテルへ帰ろう」

ジープに乗り草原を去るフリーザ様達

その時ダイガクセイが気付いた

「おぉ！カンガルーが２匹いる！」

全員ダイガクセイの指差すほうを見る

草原の真ん中にカンガルーが２匹・・・寄り添っている

「ありゃカップルだぜジャパニーズ！”Ｓｅｅ　ｙｏｕ　！”って言ってんのさ・・・」

警官がふざけて言う

しかし哀にはその２匹がケリトバとナメンナに見えた

きっとお礼とお別れを言いに来てくれたのだろう

「お幸せに・・・」

「ん？哀君・・・どうかしたのか？」

「なんでもないわ・・・」

続く

おまけ：こぼれ話

「アニキ・・・泡盛のやつ・・・蒸発したらしいですぜ」

「ん？あぁ・・・あのヌケサクのことだ・・・
また精霊の水なんておとぎ話に夢中になってコアラにでも食われたんだろうぜ」

「やだなぁアニキ・・・相手がヌケサクだとしてもそんなコアラいやしませんよ」

・・・しかしそのころホテルのフリーザ様の部屋では・・・

「・・・ザ様・・・フリーザ様！」

「う～んフリーザ様何騒いでるのよ・・・っ！！！」

「ハイバラさんどうしましょう・・・コアラが・・・」

「フリーザ様！我がコアラ共和国の内戦を・・・」

皆さんの周りにいる動物も・・・何処かで国を成しているかもしれません・・・

45．崩壊（後書き）

やっとカンガルー編終わりです
ちょっと飛ばし気味に書いたので疲れました
それはもうパトラッシュとネロぐらい＾＾；
ってことで少し休みます
2・3日くらい
ネタ思いついたら明日にでも書きますけどね
でも休んでいる間に天使さんたちが来たら・・・
（（（（（；゜Д゜））））ガクガクガクブルブルブル

46．ザーマスの逆襲（2度目）

「ほぅ・・・あれが今回の目的地ですか・・・」

船の甲板に立つ男
彼の名前はフリーザ
宇宙の帝王フリーザ様である
しかし今は・・・

「ねぇフリーザ様・・・そろそろ降りる仕度を」

「フリーザ様ありません！私は海の男フリーザです！」

海を見て興奮したのか海の男を気取るフリーザ様
どうにかなだめて降りる仕度をさせる哀であった
これが野望の序章とも知らずに・・・

第４６話　ザーマスの逆襲（２度目）

帝丹小学校1年生の面々は無人島にやって来ていた
ＰＴＡ主催の「親子ふれあい学習キャンプ」という企画のためである
船を降りる哀とフリーザ様
気持ちの良い潮風が二人を迎える

「ふ・・・二人とも待ってくれ！」

後ろから博士が青い顔をして現れる

「船酔い?少し休んでた方が良いんじゃない?」

「まったく・・・足手まといですよ博士さん
・・・私の前でゲロでも吐いてみなさい・・・跡形も無く消し去りますよ?」

容赦の無いフリーザ様の一言に薬を飲んで耐えることにした博士
その後ろからコナンが現れた

「ったく・・・その辺に座って大人しく休んでろよ」

「あら?貴方の連れはチョビヒゲだけ?」

哀がコナンの後ろを見て言った
小五郎が荷物を持ってかったるそうに出てくる
おそらく沖野ヨーコの番組の留守録が気になっているのだろう

「あぁ・・・蘭は『無人島ってろくな事があったためしが無いし』だってよ」

まぁ確かにコナン達が無人島に行っても
待っているのは事件だけだった
常人なら二度と無人島など行きたくないと考えるのが普通である

そうこうしているうちにキャンプ前の集会が始まった
先生達が諸注意などをしている
退屈なのか早速あくびをしたり隣の子と突っつき合ったりしている

「それでは続きましてＰＴＡ会長の田辺さんのご挨拶です」

ピクリと反応する哀とフリーザ様・・・
先生に呼ばれて少しやつれたザーマスが出てきた

「皆さん・・・本日は私の突拍子も無い企画に賛同していただき
この『親子ふれあい学習キャンプ』を開催できたことを本当に嬉し
くおもいますザマス」

ザーマスの発案・・・
哀は一抹の不安を覚えた
嫌がらせ・・・尾瀬での報復戦・・・彼女の頭はろくな方に働かない

「それじゃあ質問ある人はいるかな～？」

小林が子供達に聞く
一人が挙手した・・・哀である

「何か企んでませんか？」

普段滅多に公の場で発言しない哀がよりによってこの質問
唖然とする一同・・・

「してないザマス・・・」

「え・・・えっと・・・それじゃあ他に質問ある人～」

また手が挙がる・・・今度はフリーザ様である

「あの後尾瀬からどうやって返ったんですか？」

意味不明な質問・・・またまた唖然とする一同
しかしザーマスは質問の意味を理解していた

「救急車で病院経由で帰ったザマス・・・」

あくまで平静に答えるザーマス
怪しい・・・あからさまに怪しい・・・
だが哀はあえて楽しむ子供達に水を挿すまいと気にしないことにした

「フリーザめ・・・過去何度も味わわされた屈辱
今回の計画で倍返しザマス!」

その後・・・
哀の不安とは裏腹にキャンプは何事も無く行われた
夕食のカレーを食べ終えた頃・・・辺りはすっかり暗くなっていた

「ハイバラさん・・・この後の日程ってどうなってるんですか?」

「たしかレクリエーションやるって話だけど・・・」

食器を片付けながら二人が話をしている
そこへ博士がやって来た

「ぬっふっふ・・・そのレクリエーション・・・楽しみにしといてくれ!
なんと言ってもわしの発明品が大活躍するんじゃからな・・・」

どうやらこの企画には博士も一枚噛んでいるらしい
しばしの食休みの後・・・子供たちと保護者は最初に集会をやった場所に集められた

「それではこれより『親子ドキドキ肝試し』を行いま～す！」

妙にテンションの高い小林に少し引き気味の子供たち
どうやらレクの内容は肝試しらしい・・・

「古典的ね・・・」

内容は簡単・・・子供と保護者の2人ペアで森の道を進み奥にある印を取ってくることである
先ほどの博士の態度から言って脅かしグッズが仕掛けられているのだろう・・・

肝試しが始まり子供達は母親や父親の腕を引いて森の中へ入って行く
博士の発明品は思いのほか効果があったのか森の中から悲鳴が聞こえてくる
コナン・小五郎ペアが森から出てきた

「まぁ今回の発明は成功のようですなぁ・・・子供達はさぞ楽しんでいることでしょう」

小五郎が博士に言う
良く言うぜ・・・大絶叫して恐がってたくせに・・・
横でコナンが呆れていた

「まぁ・・・そんなに期待してないけど・・・行って来るわ」

コナンにそう告げると哀とフリーザ様のペアが出発した・・・

「ククク・・・行ったザマス・・・やっとメインイベントの始まりザマス」

フリーザ様と哀は森の中を進む・・・
そろそろ脅かしグッズが出る頃かしら？
哀はそんなことを考えながら進む

シュッ！

何かが風を切る音がした・・・何かが飛んでくるようだ

「博士の発明品の様ね・・・」

しかしそれは哀の髪をかすめると後ろにあった木に突き刺さったボウガンの矢の様である

「これはこれは・・・なかなか素敵な仕掛けですね・・・」

「・・・過激すぎないかしら・・・ちょっと髪が切れたわ・・・」

更に進むと今度は上から網が降ってくる
捕らえられる二人

「え？」

そしてそのまま引きずられる二人

３０ｍほど行ったところで止まった

「痛いわね・・・ちょっと擦り剥いたわ・・・」

「博士さん・・・なかなかのスリルを用意してくれますね」

「後で文句を言ったほうが良さそうね・・・矢印があるわ・・・こっちのようね」

しかしこの時二人は本来の道から大きく外れていた
そして哀はミスを犯した・・・
この時彼女は博士ではなくザーマスを疑うべきだったのである

続く

おまけ：ニュース・フリーザ

こんにちは・・・
本日午後２時頃
トロピカルランドのマスコットの仕事をしていた
マスコット中野さん（２５）がマスコット引退を表明しました
中野さんは以前からマスコットと言う仕事に疑問を感じており
記者会見では「もっと自分を主張するべき・・・」
「多くのマスコットが本当の自分を出せないこの世の中は異常だ」
と語り
また「子供たちの夢は？」という記者の質問に対し
「夢は自分で見る物・・・こんな所で見る夢はスーパーで買うお惣菜といっしょだ」

と遺憾の態度をあらわにしましたが
最後のパレードで声援を送る観客を目にした際は
目に涙を浮かべる場面も見られました
中野さんは実家のある山形に帰り
家業であるさくらんぼ農家を継ぐ方針だと言うことです
以上・・・水無怜奈がお伝えしました

46．ザーマスの逆襲（2度目）（後書き）

再開しました
そして再開と同時にいきなりザーマス
次回ザーマスの復讐に終止符が打たれます
それと今回から新コーナー
水無怜奈の「ニュース・フリーザ」が始まりました

47．ザーマス・ファイナル・ウォーズ

暗い夜の無人島
森の中をただひたすら逃げる４本の足
得体のしれない何かに追われながら
奥へ奥へ突き進む
ジェイソンに追われる美女の気分といったところか
フリーザ様と哀への執拗な攻撃は続いていた

「危ないわね・・・博士にこんなイカれた趣味があったなんて驚きね」

しかし二人はことの重大さにまだ気付いていなかった

第４７話　ザーマス・ファイナル・ウォーズ

フリーザ様と哀は洞窟の前にやって来ていた

「いかにも・・・な洞窟ね」

「矢印ありますよ・・・肝試しの印はこの洞窟の中にあるようですね」

二人は洞窟に入ることにした
その背後にある二つの瞳には気づかずに

「ねぇ・・・灰原さん達遅くない？」

歩美は一向に帰って来ないフリーザ様と哀が心配になった
もうすでに哀達より後に出たペアも全て帰って来ていたのに

「もしかしたら道に迷ったんじゃ？」

大人達も不安になり始める

「それは無いと思うぞ！わしの発明品は誘導の役目もしておる
故意に逆らわない限り道には迷わんはずじゃ」

「故意に逆らわない限り・・・」

コナンはフリーザ様の顔が思い浮かんだ
不安だ・・・
あれは故意に逆らう顔だ・・・

ジジ・・・

ザーマスのトランシーバーに通信が入る
コソコソ影の方へ行くザーマス

「なんザマスか？首尾はどうザマス？」

『ザザ・・・良好だ・・・ザ・・・予定の洞窟に追い込んだ・・・
ジジー・・・後は狩るだけ』

ニヤリと笑うザーマス
やはりプロに任せるのが一番ザマス

「皆さん・・・とりあえずもう少し待ってみましょう・・・
それで帰ってこなければ対策を考えるザマス・・・
夜の森の中は危険ザマス・・・無闇に探す物でもないザマス」

もっともなザーマスの意見
コナンですら同意している

ククク・・・後で捜索して出てくるのは二つの死体ザマス・・・

「こっちのようですね」

いくつもの分かれ道がある複雑な洞窟・・・
地面に書かれた矢印を見ながら2人は進む

「・・・行き止まりね・・・印があるはずよ・・・早く取って帰りましょう」

二人で印を探す
しかしそれらしい物は見つからない
良く探す・・・もっと見つけやすくしとけよ・・・そんな愚痴もこぼれ始めた時
印が上から降ってきた

「探しているのはそれだろ?」

「そうそうこれですよ!」

二人は声のした方を振り返る
暗くて良く見えないが男が立っていた

「やれやれ・・・後続の方に追いつかれてしまいましたね・・・」

しかし哀がライトを当てると見たことも無い男の顔が現れた

「貴方誰のお父さん?連れのお子さんは?・・・っ!!!」

男は子供を連れていなかった・・・その代わり
鋭いナイフを両手に携えていた

「俺の名は骸岩繁雄・・・ちょっと悪めの友達はハンターMなんて呼ぶがね」

「ハンターM?いたぶられるのが好きなんですか?」

「ちがわい!マゾのMじゃねぇ!MurderのM!Murder!殺人デース!」

それはジョディ先生のセリフだろ・・・
心で突っ込みつつ頭の引き出しをひっくり返す哀
そして目的の物をその中から取り出した

「ハンターM・・・聞いたことあるわ・・・
裏社会の仕事人で・・・人を専門とした狩人だとか・・・」

「ふん・・・ご名答だ・・・宮野志保」

哀は驚いた
何で私の名前を・・・

「驚いたな？お前の組織からお前の抹殺依頼を受けたことがあってな
もっとも居場所すらわからねぇってんで受けなかったがな」

バシ！

哀と話す骸岩を突然の打撃が襲った
フリーザ様が洞窟に伸びていた木の根のような物で叩いたのだ

「フリーザ様とお呼びなさ～い！」

「だから俺はマゾじゃねぇって言ってんだろうが！」

ナイフを握り締めフリーザ様に飛びかかる骸岩
しかしデコピンだけで弾かれた

「癖になりそうでしょう？もっと欲しいですか？」

「僕は犬ですはぁはぁ・・・なわけねぇだろ！！！
しかしお前の強さは異常だな・・・まぁ良い・・・俺はずらかるぜ
ここは天然の迷路・・・矢印を消した今お前らに脱出の手段は無いぜ
皮肉なもんだな・・・自分で自分の墓穴に入るなんてよ」

それだけ言うと骸岩は煙幕を放って行ってしまった

「お～い！灰原～！いるなら返事しろ～！」

外では帰って来ない二人の捜索が開始されていた
その時ザーマスのトランシーバーに連絡が入る

『ザザ・・・俺だ・・・奴らは洞窟に閉じ込めてきた・・・ジビジュアル系は何者だ?殺せなかったが・・・まぁ野垂死には確実だろうがな・・・』

「良くやったザマス・・・報酬は後で口座に」

『あぁ・・・ザ・・・そうし・・・ん?何だ・・・あ・・・あああああ!!!ザザザジー」

「どうしたザマスか?」

『ごきげんようザーマスさん・・・やっぱり懲りてなかったんですね』

突然トランシーバーから聞こえるフリーザ様の声
エネルギー波で穴を開けて脱出したのである

『今からお仕置きに行くから待っていて下さいね・・・プツ』

フリーザ様が来る・・・
頼みの骸岩もいない・・・トランシーバーでの会話がバレないように捜索隊とは離れていたので助けも請えない

「こ・・・今度は何をされるザンス?」

「何もされはしないさ・・・」

突然優しい声をかける何者かが現れた
もしかして助けてくれる天使が・・・
ザーマスが振り返ると
目の前が赤く染まっていた・・・

「私怨にかこつけて教育を乱すなど愚の骨頂・・・今ここで死ぬが良い」

フリーザ様と捜索隊が戻ってくると・・・そこには首を一文字に切り裂かれたザーマスが
いや・・・ザーマスだった物があった・・・
そう言えばこれは学校行事でしたね・・・
潮風を浴びる花のそばにカードだけが残されていた

『天誅！人斬り学園斎』

続く

おまけ：今日のスカウター

ピピピ・・・骸岩繁雄（ハンターM）　戦闘力２１１

フリーザ様から一言
一応組織から依頼を受ける程の戦闘力は持っているようですね
ぶっ飛ばしちゃいましたけど組織御用達の殺し屋だったようですな
なんでザーマスさんとつるんでたんでしょうね？

47．ザーマス・ファイナル・ウォーズ（後書き）

ザーマス死にました
今回の話は今後に色々つなげて行こうかなぁと
書いたものです
最後学園斎出て来ましたけど次回はまた別の話です
ちなみに今回出てきた骸岩さん
名前の由来はゴジラに出てきたガイガン
ファイナルウォーズのパロです＾＾；
ハンターMはガイガンの出身地
M宇宙ハンター星雲から

48．梓はチョーお暇

「マスター!?大丈夫ですか?」

開店前のポアロ・・・
しかしマスターの顔色は悪く腹痛を訴えている
心配そうに尋ねる梓の声が店に響いた

「大丈夫・・・これぐらいで店は休めないよ」

そうは言っているが涙目で限界を訴えている
もはやレフェリーストップ物である
梓は嫌がるマスターを尻目に救急車を呼んだ

「嫌だよ～!病院なんて行きたくないよ～!」

第48話　梓はチョーお暇

『店主急病のためしばらくの間休業いたします』

シャッターの下ろされたポアロに張り出された一枚の紙
梓はその前で呆然と立ち尽くす

「間違えて来ちゃった・・・」

マスターが入院したため彼女もしばらくの間休業の身なのだが
ポアロでの仕事が長いせいかいつものようにポアロに来てしまった

のだ

「あれ?梓さん?ポアロ閉まってるんですか?」

聞きなれた声に振り返る梓
フリーザ様と哀がいた

「そうなんですよ・・・実はマスターが入院しちゃって・・・」

「なんですって!?せっかく今日はポアロ一番乗りをしてみようとやって来たのに・・・」

「無駄足だったわね・・・ふぁ・・・眠い・・・」

まだ朝9時前なので哀はあくびをした
そして眠い目をこすりながら聞いた

「で・・・店が閉まってるのになんで来てるのよ?休みじゃないの?」

梓は間違えてきてしまったと笑いながら話す

「それに私急に長期休暇なんか貰っても何して良いか分らないし・・・」

別に趣味が無いわけではない・・・
しかし普段そんなに休みが取れない彼女は
短い休みのうちにいかに楽しむかが重要なのである
だから自然と短い休みに楽しめるような趣味になってしまっているので

長い休みなど渡されても時間が手からこぼれてしまう

「なるほど・・・それは困りましたね・・・
まぁ積もる話はちょうどいい所にある探偵事務所でしましょう」

「・・・勝手にいいの？」

案の定まだ探偵事務所は閉まっていたので
フリーザ様は上の階の毛利宅に行くと蘭に探偵事務所を開けさせ
嫌がる小五郎やコナンを強制参加させて梓の悩み相談会を開いた

「なるほど・・・なんか趣味とかないのかい？梓ちゃん・・・競馬
とか麻雀とか」

そりゃあんたの趣味だろ・・・
小五郎に呆れながらもコナンは口を開いた

「ゲームでもしてれば案外あっさり過ぎちゃうんじゃない？」

「うん・・・そうしようかとも思ったんだけど・・・」

梓の表情が暗くなる

「どうしたの？」

「私ゲームあんまり持ってなくて・・・その・・・ぷよぷよだけ・・
・」

長期休暇・・・

朝から晩までぷよぷよ・・・
ばよえ～ん・・・ばよえ～ん・・・ばよえ～ん・・・
・・・・・・
ランキングに載るような人ならともかく

「・・・まず無理そうね」

「じゃあさぁ・・・なんかバイトでもすれば・・・短期のやつ」

再びコナンが提案する

「それはグッアイディ～ア！こんなこともあろうかとワーキン持ってて正解でした」

「準備が良いわね・・・」

コナンは早速フリーザ様の持っていたワーキンを見てみる

「短期バイトはねぇ・・・道路工事の作業員・・・」

・・・・・以上
フリーザ様や空手で鍛えた蘭ならともかく梓には無理であるバイトも無理か・・・と思われたが

「仕方ない・・・私が良い働き口を見つけてあげましょう」

そう言うとフリーザ様はどこかに電話をかけた

・・・数分後

探偵事務所のドアが開いた
入ってきたのは・・・桜塚である

「君だね？働きたいって娘は・・・
それじゃあ仕事なんだけど・・・まずこのリストの電話番号に電話
をかけていって
『オレオレ』って言って・・・それから」

「桜塚さん！」

突然蘭が止めに入る

「あの・・・そう言う仕事は・・・ちょっと」

引き気味の梓
桜塚は慌ててメモをしまう
そして新たなメモを取り出した

「これはちょっとダメだったか・・・それじゃあ次のはちょっと違
って
まず勤務地は米花商店街なんだけど・・・
最近さ・・・みかじめ料をちゃんと払ってくれないお店があってさ・
・・
そう言う悪いお店に乗り込んで他のお客に因縁つけたりして」

「桜塚さん！」

またもや蘭に止められてしまった

「給料もそこそこなんだけど・・・あ！もしかして風俗のほうが良

かった？」

「桜塚さん・・・ありがとう・・・もう良いの・・・」

蘭にそう言われてキョトンとする桜塚
仕方ないので帰っていく

「あのね・・・あなた梓さんをそっち系にしたいの？」

哀は呆れながらフリーザ様に言った

・・・・・・
重苦しい沈黙・・・
最初に沈黙を破ったのはなんと小五郎だった

「なんならやってみるかい？探偵事務所の助手・・・」

「じょしゅ・・・って！毛利さんの助手ですか！？ジョシュ・バーネットじゃなくて？」

「おうよ・・・期間はマスターが退院してポアロが再開するまで・・・
一応給料も出すけど・・・どうする？」

梓は乗り気のようだ・・・実は前から探偵と言う物に興味があったらしい
蘭も「お父さんがサボらないように監視してくれる人がいてくれて助かる」と大歓迎のようだ
こうして梓は毛利探偵事務所で助手として働くこととなった

・・・翌日
自宅で楽しそうに着慣れないスーツに袖を通す梓
今日から毛利探偵事務所での勤務が始まる
軽めの化粧を済ませるとスキップで探偵事務所を目指す
しかし彼女は毛利探偵事務所の本当の恐ろしさを
何も分かっていなかった・・・

続く

おまけ：ニュース・フリーザ

こんにちは・・・
昨夜１１時ごろ
新宿のバー「ビオランテ」で
「ウォッカ」と名乗る不審な男性が
「ヤイバーパンチ」「ヤイバーキック」などと叫びながら
一緒にいた長髪の男性と外国人女性に怪我を負わせたとして
新宿署により書類送検されるという事件が起きました
男性は「むしゃくしゃしてやった・・・せめて一瞬でも正義の味方になりたかった」
と供述したとのことです
では被害者男性のインタビューです

「相当飲んでたからな・・・かなり泥酔してたんじゃないかな？
それと最近仕事でうまくいかないことが多かったからストレスのせいもあるかもしれない」

どうして暴行に？

「こっちが聞きたいくらいだぜ・・・いきなりだった・・・何の前触れも無く」

被害者の方々には謹んでお見舞い申し上げます

以上水無怜奈がお送りしました

48．梓はチョーお暇（後書き）

次回に続きます
梓は探偵事務所でやっていけるのでしょうか？
多分やっていけません＾＾；
探偵事務所の運命や如何に！？

４９．クーデター

飼い犬に手を噛まれる
昔からあることわざである
うちの娘に限って・・・
世のお父さんはみんなそう思っている
ブルータス！お前もか！？
はい私もです
この様に人間は裏切り裏切られてきた
１００％信頼できる人間などこの世に存在しない
そんなことは無いと思っているそこの貴方・・・
可愛いあの子に要注意です
今日はそんな反逆のお話

第４９話　クーデター

空はそれとなく晴れ、風も心地良く吹くある日
素敵な散歩日和に外をぶらつくフリーザ様と哀
別にどこかに寄るでもなくひたすらぶらつく
するとそこへ見覚えのある人物がやって来た
梓だ・・・

「おや梓さん・・・スーパーでお買い物ですか？」

「あ！フリーザ様・・・そうなんですよちょっと買い出しに」

良くある会話から運命の歯車は狂い始めた

「ところで探偵助手はどうしたのよ?」

哀が聞いた
途端に梓の顔色が変わる

「はぁ・・・実は・・・」

探偵事務所に助手としてやって来た梓
しばらくは気合十分、やる気に満ち溢れていたのだが・・・

「・・・依頼人来ないですね」

探偵助手になって6時間が経った
しかし依頼人が来る気配は無い

「いつもこんなもんだよ・・・おっと!そろそろヨーコちゃんのドラマの時間だ
梓ちゃん!そこの棚から「ヨーコちゃんドラマ9」のビデオ取ってくれる?」

梓は小五郎が指差した棚を開ける
沖野ヨーコ関係のビデオがびっしりである
毛利さんてミーハーだったんだ・・・
梓は「ヨーコちゃんドラマ9」を小五郎に渡した

「サンキュー・・・録画録画と・・・」

・・・・・・

「って感じで結局一週間で依頼はゼロ
毎日沖野ヨーコの番組ばかり見てるんですよ・・・毛利さん
私の仕事と言えば事務所の掃除とヨーコビデオの出し入れ
あまりに暇だったので蘭ちゃんにおつかいの仕事をもらったんですよ」

「なるほど・・・チョビヒゲはだめですね・・・」

このままでは長期休暇を有意義に過ごすと言う梓の目的が失われてしまう
フリーザ様は打開策を考えた

「・・・仕方ない・・・小五郎さんは探偵失格のようですね」

・・・・・・毛利探偵事務所

「L・O・V・E・ヨ～コ！L・O・V・E・ヨ～コ！」

ヨーコライブビデオを見ながら小五郎が声援を送っている
その横でコナンが推理小説を読んでいる
ったく・・・懲りねぇおやじだな・・・

ドガッ！！！

その時探偵事務所のドアが開かれた
・・・と言うより爆破されたと言った方が良いかもしれない

「だれだぁ!?俺のヨーコちゃんタイムを邪魔する奴は!」

爆煙の中から現れたのは・・・

「ひと～つ!人の世暇を貪り・・・
ふた～つ!不埒なヨーコ三昧・・・
み～っつ!醜い浮世のダメ探偵を懲らしめてくれよう!
名探偵榎本梓」

フリーザ様と哀を率いる梓であった

「あ・・・梓ちゃん?」

突然派手な着物と袴・・・そして腰にさした日本刀という侍スタイルで現れた梓
小五郎もコナンも口を開けてぽかんとしている

「梓さん・・・次のセリフを・・・」

「あ・・・はい!えっと・・・台本台本・・・」

事情が全く見えないのでコナンは哀の所に行った

「おい!何やってんだよ!?」

「・・・ちょっとしたゴミ掃除よ」

そうこうしているうちに梓が台本を手にとり
次のセリフに移行していた

「毛利小五郎・・・名探偵と世間にもてはやされながら
その実質探偵の仕事を進んでするでもなく朝から晩までヨーコ三昧・
・・
探偵を頼る人々の苦しい悲鳴の聞こえぬえっと・・・悪鬼め！
この榎本梓が真の探偵となってくれる！・・・ふぅ・・・言えた」

「え？はぁ？何言ってるの梓ちゃん？」

小五郎はまだ事の詳細を掴めずにいる
そんな小五郎にフリーザ様が言った

「要するに昼間からヨーコ三昧のダメ探偵の助手はもう疲れた
それなら梓さんがこの探偵事務所の所長になると言っているんです
よ！」

「な・・・なんだと！」

ようやっと状況が掴めた小五郎・・・どうやらこの事務所を乗っ取
るつもりらしい
いくら梓ちゃんでもそれはさせねぇ・・・この名探偵毛利小五郎の
名にかけて・・・
ヨーコちゃん・・・君は俺が守るよ・・・ぐぇっへっへっへ！

「・・・やれやれ・・・この期に及んでなおヨーコですか・・・
もう良いでしょう・・・ハイバラさん！汚物は消毒ですよ～！」

フリーザ様が指を鳴らすと
ライターとスプレー缶を持った哀が小五郎に歩み寄った

「おい！まさか・・・」

そのまさかである

「そこ・・・どいてくれる？」

ゴウゥ！

即席火炎放射器が火を吹く
炎に包まれる小五郎

「あちちちちち！火が～火が～！」

あまりの熱さに思わずどいた小五郎の机をすかさず占領する梓
ダメ探偵の分際で椅子は中々悪くない物を使っている・・・

「な・・・なぜなんだ・・・梓ちゃん・・・・」

「そうですね～・・・一言で言うなら・・・失望かな」

失望・・・
小五郎は梓が来てからの自分の行動を省みた
ヨーコちゃんのテレビ見て
ヨーコちゃんのビデオ見て
それでまたヨーコちゃんのテレビ見て・・・
あぁ・・・そうか・・・探偵っぽいことしてなかったな・・・俺

「まったく・・・だからお母さんも出て言っちゃったのよ・・・」

蘭が呆れながら入ってきた

「くそ・・・それでも俺は名探偵毛利小五郎・・・その椅子は渡さん！」

最後の力を振り絞り飛びかかる小五郎
柔道殺法で形勢逆転を狙うが・・・

「ハイバラさん・・・Ｆｉｒｅ！」

小五郎の前にまたも降り立つ哀

「ヨ○フレイム！」

ゴウゥ！

うわあ！・・・うわあ・・・うわあ・・・うわあ・・・うわあ・・・

ＫＯ！

「ご苦労ハイバラさん・・・梓新探偵・・・ご命令を」

「そうですね・・・とりあえずそこのヨーコビデオ？
見るからにウザイから処分して下さい・・・
あ！あとこの窓ガラス・・・変えてください
ここはもう榎本探偵事務所なんですから」

「あなた・・・ちょっとアドリブ効きすぎじゃない？」

薄れ行く意識の中で小五郎は見た
一生懸命録画したヨーコビデオ・・・そして蘭が自分の部屋から持ってきたヨーコグッズ

それらが処分される様子を・・・
窓ガラスの毛利探偵事務所の文字が榎本探偵事務所に変わって行く様を・・・

「うぅ・・・ユリア・・・ユリア～！！！」

ふふっ・・・良い声で鳴きますね毛利さん・・・
私の探偵事務所のオープンを祝うファンファーレにはピッタリ
明日から私が世の事件をズバズバ解決しちゃおう！

フリーザ様と哀・・・そして梓の野望？を胸に
今榎本探偵事務所がオープンする・・・

続く

おまけ：こぼれ話

「ユリア～！！！」

「・・・誰よ・・・ユリアって」

探偵事務所の入り口に女性が一人立っていた
妃英理・・・小五郎の妻である

「ぬ！・・・ラオウ！」

「誰がラオウよ！
蘭が貴方が困ってるからって電話をよこすから来てみれば・・・も

う知らない！」

「待て英理！今のは声優ネタで・・・頼む！見捨てないで！」

今回の作戦「梓！私こそが名探偵作戦！」

・・・サブタイトル「ドサクサにまぎれてお父さんとお母さんをくっつけよう作戦」

と言うのは蘭しか知らない事実である・・・

49．クーデター（後書き）

次回から名探偵梓の事件簿！
・・・って言っても解くのはコナンだし
たいした事件を起こす気ないんですけどね
殺人とか面倒くさいし・・・
そんなにコロコロ人を殺すのもどうかと思いますよね（爆）

５０．事件を訪ねて三千メートル

行きつけのお店が潰れた・・・
そんな経験は無いだろうか？
固く閉ざされ開く事の無いシャッター
テナント募集の張り紙
そして今まであった当たり前の光景を侵食する
憎きインベーダー・・・
人はそれを「新しいお店」と呼ぶ
そしてここにもお店ではないが
新しい事務所が一つ・・・

第５０話　事件を訪ねて三千メートル

クーデターの末・・・
ヨ○フレイムで小五郎を倒したフリーザ様、哀、梓
三人の榎本探偵事務所が開業して三日が経った
しかし・・・

「依頼人・・・来ないわね・・・」

探偵事務所を静寂が包む
時折聞こえるのはそれぞれが暇つぶしの本をめくる音
そしてくしゃみなどの生理的な音
・・・以上である
哀がぼやくのもうなずける

「仕方ねぇよ・・・おっちゃんの時でもそんなに頻繁に依頼はこねぇんだ
榎本探偵事務所なんて看板を変えた今じゃ怪しんでだれも来ねぇよ・・・」

諦めて待つしかない・・・
そんな流れになりつつあった
しかしフリーザ様がその流れを変えた

「もう待つのは飽きましたよ・・・
事件は探偵事務所で起きてるんじゃない・・・現場で起きてるんだ！」

「なるほど！自分から事件に巻き込まれに行けば良いんですね！」
はっとして梓は悟ったように言う
早速出かける仕度を始めた

「おいおい・・・そんな簡単に事件なんて・・・」

コナンはそそくさと外出準備をするフリーザ様や梓を止めようとしたが

「あら・・・大丈夫よ・・・
あなたが一緒に来ればね・・・」

嫌でも事件が寄ってくる体質のコナンがいれば何も問題は無かった

正午過ぎの住宅街・・・

奥様たちの裏の顔が表に出る時間である
事件の起こる可能性は通常の５％から３０％にまで上昇する

「ってことで・・・昼ドラ級の奥様達による血みどろの事件を探したいと思います」

そしてそれを狙ってやって来たハイエナが四匹・・・

「コナンさん！早速事件を呼び寄せなさ～い！」

「あのな！おれは磁石じゃないん」

ドン！

余所見をしながら歩いていたコナンに誰かがぶつかって来た
見たところ３０代前半の女性である

「おお！さすがコナンさん！もう事件を呼び寄せましたよ！」

「・・・・・事故よ」

とりあえず倒れているコナンと女性を起こす哀
そこへ梓がひょっこり顔を出して来た

「それにしても何でこんな所で走ってたんですか？」

梓が聞いた途端に女性の顔はみるみる強張り

「殺される！」

それだけ言うと一目散に逃げて言った

「・・・ほら見なさい」

「・・・・・事件ね」

とりあえずぼぼけっとしていても仕方ないので
梓とフリーザ様はその周辺で聞きこみ
哀とコナンは女性の追跡と保護・・・と言う形をとることになった

聞き込みを始めた梓とフリーザ様
住宅地では定番の奥様達のおしゃべり会が催されている
何か知ってるかも・・・梓は聞いてみることにした

「それってウィリアムスさんとこの奥さんじゃない?」

「ウィリアムス?外国の方ですか?」

「えぇ・・・奥さん日本人でね!国際結婚て奴よ・・・
それがね!この間の夜・・・羽柴さんとこの奥さんが見ちゃったのよ・・・」

数日前の夜・・・
買い物の帰り・・・夜道を急ぐ羽柴さんとこの奥さん
すると前を歩く長身の男が目に入った・・・日本人ではない
きっとウィリアムスさんだ

「くっくっくっくっく・・・」

それにしても不気味に笑う・・・外国人はみんなこうなのか？
しかし次の瞬間羽柴さんとこの奥さんは目を疑った
ウィリアムスさんが尖った何かを手に持っている

「オー・・・マイハニー・・・もうすぐこいつでくり貫いて
君の真っ赤な血を飲み干して上げるからね・・・」

「って感じで・・・すっごく凶悪な顔で笑ってたらしいのよ！
でねでね！その尖ってた物なんだけど・・・どうも輸入ものの凶器
らしいわよ」

そうすると自体は思ったより深刻なようだ
さっきの女性は今にも吸血鬼気取りの夫に殺されようとしているのだ

「この榎本梓の目の黒いうちはそんなことさせないわ！」

「その通りですよ梓さん！
さあ奥さん！そのオスカー・ウィリアムスさんの所へ連れて行って
下さい！」

「良いけど・・・危ないわよ？・・・それと旦那さんはピーターよ」

何はともあれウィリアムスさん宅へ向った梓とフリーザ様
こんな真昼間に家にいる夫も少ないだろう・・・
そんな事を思いながらもインターホンに手を伸ばした

ピンポーン

・・・・・・
静まり返る昼の住宅街・・・
しかしそこに音が侵入して来た

「ハーイ？」

いた・・・もしかしたら妻を殺すために会社は休みか？

「あ！ピーター・ウィリアムスさんですか？」

梓が物腰穏やかに応対するが・・・

「新聞！要りまセーン！」

「いえ・・・私達は新聞の勧誘では無くてですね」

「宗教！お断りしマース！」

「そうじゃなくて・・・私は・・・」

「消防署の方から来た人でも消防署の人とは限りまセーン！
それにうちの消火器ピカピカね！新しいやつ要りまセーン！」

手強い・・・
梓は早くも挫折しそうになった
するとフリーザ様がインターホンに手をかけた

「フリーザ様・・・」

「こう言うのは助手の役目ですよ・・・」

今こそ宇宙の帝王と恐れられた私の力を見せてあげますよ
外人一人引きずり出すぐらい造作も無い事・・・
こうしてフリーザ様のネゴシエーションは始まった
果たして難攻不落のお留守番
ピーター・ウィリアムスに扉を開かせることは出来るのだろうか？

続く

おまけ：ニュース・フリーザ

こんにちは・・・
今日午前１１時ごろ
全国規模で詐欺を行っていた
地下探偵組織「ホームズ友の会」が一斉摘発を受け
幹部ら数名が逮捕されました
警視庁の調べによると「ホームズ友の会」は
「推理さえ出来れば自ずとイケメンになり
可愛い彼女もゲットできる」などと虚偽の説明を行い
入会者から莫大な入会金を得ていたとの疑いが強く
現在も捜査は続いています

この件に関して
組織の宣伝に使用されていた服部氏、毛利氏他
数名の探偵は組織との関与を否定していますが
工藤新一氏については連絡が取れず
現在も行方をくらましています

警察では組織と何らかの関係があると見て捜索を開始する方針です

以上水無怜奈がお送りしました

50．事件を訪ねて三千メートル（後書き）

いやいや
めちゃくちゃ忙しい一週間でした
おかげで更新がかなり滞ってしまいましたね
皆様には
「おっとりの奴飽きたんじゃねぇか？
どうしようもないうじ虫野郎だ！」
なんて思った方もいたかもしれませんが
ちゃんと更新はしていくつもりです＾＾；

51．虚像の住宅街（前編）

真実はいつも一つ
しかしその一つの真実に辿り着くのが難しい
そして全ての真実に辿り着けるわけではない
探偵達はあっという間に事件の真実に辿り着く
しかし天文学者達が宇宙の果てに辿り着くことは無い
探偵達は犯人の動機をずばり当ててしまう
しかし哲学者達は人間の生まれた本当の理由をずばり当てられない
決して天文学者や哲学者が無能なのではない
探偵達にそれが解けるかと言ったら無理だろう
世の中辿り着くことなどそもそも不可能な
有って無いような真実もあると言うことである

第５１話　虚像の住宅街（前編）

「セールス！うざったいデース！
そんなガラクタより１００円ショップの物の方が使えマース！」

一向に扉を開かないピーター
梓に変わってフリーザ様が交渉に挑むことに

「おい外人野郎・・・あまり調子に乗るなよ・・・」

「ちょ・・・フリーザ様！？」

いきなり強気のフリーザ様

明らかに扉を開けてもらう人間の態度ではない

「どうしたんですか?外に出てくるのが恐いんですか?
これだから○△※☆人は・・・腰抜けの集まりですね」

あまりの暴言に静まり返る
もうだめだ・・・梓は思いっきりそう思った
しかし次の瞬間静寂は打ち破られた

ガチャ・・・

ドアが開いたのだ
中から１９０ｃｍはあろうかと言う男が出てきた

「ふん!チビスケジャパニーズのくせにビッグマウスが過ぎマース
ワタシの祖国を馬鹿にして覚悟はＯＫですか?」

ふっふっふ・・・やっぱりこの手の外国人は愛国心が強いですね
それを逆撫でしてやればおびき出すぐらい簡単なことです・・・

「ってことで梓さん・・・後よろしく」

「あ!はい」

梓は静かにピーターに歩み寄った・・・

そのころ哀とコナンは

「くそ・・・完全に見失った・・・」

「情報が少なすぎるわ・・・一旦フリーザ様達と合流して情報を得ましょう」

コナンは追跡メガネをつけようとしたがその手は止められた
民家の前で二人を発見したのだ

「おい・・・なんか分かった・・・ってなんだよ!?この状況は!?」

二人が驚くのも無理は無い・・・
目の前にはフリーザ様と梓
そして道に横たわる白人男性が一人・・・

「何があったのよ・・・」

「それがねぇ・・・」

「ってことで梓さん・・・後よろしく」

「あ!はい」

梓がピーターの目の前に歩み寄る
ピーターは血走った目で梓を睨みつけた

「ヘイ!ガール!あなたに用はありまセーン!
私は私と私の祖国を侮辱したそっちの男に用がありマース!」

「どけよ!」と言わんばかりに詰め寄ってくるピーター

しかし何を思ったのか梓は突然ファイティングポーズをとった
腕を上げ背中を丸めたムエタイスタイルである

「ちょ・・・梓さん？」

「アイアムブアカーオ！」

突然の片言英語・・・
そして「私はブアカーオだ！」発言に唖然とするフリーザ様
ピーターはさらに侮辱されたと思ったのかかなり怒っているようだ

「Ａｈａ・・・とってもキュートなＫ－１チャンプデース
Ｂｕｔ！私はそう言うジョークが許せない質デース！
一度思い知らせて上げマー・・・」

ごちゃごちゃ言っている間に梓の拳がみぞを捉えていた
ピーターは苦しそうに旨を押さえて跪く・・・

「こ・・・こんな・・・こんな屈辱！
おがあああああ・・・Ｆ☆※ｋ　Ｙｏｕ　Ａｓ△○ｏｌｅ！」

「きゃあ！」

思いっきり殴りかかったピーター
・・・だったが次の瞬間のびていた
パンチをかわそうと屈みこんだ梓の頭が
思いっきり踏み込んで来ていたピーターのあごを捉えたのだ

「・・・やったー！勝った～！」

「勝った～じゃないですよ！何やってんですか！？」

喜ぶ梓の横で呆れるフリーザ様
当たり前だ・・・話を聞きに来ておいて相手と格闘技をする探偵など聞いた事がない

「えぇ？後よろしくとかいうからぶっ飛ばせって意味だと・・・」

なるほど・・・
梓さんって意外と馬鹿なんですね・・・

「ってことで今に至るわけです・・・」

半ば呆れながら聞いていた哀とコナン
だがピーターが何かを知っている可能性は高そうである
また暴れられないように縄で縛りあげてその目覚めを待った

「う・・・オー・・・私としたことが・・・
あまりに気持ちのいい陽気だったのでお外でお昼ねしてしまいましータ」

幸いなことに脳にかなりのダメージを追ったのか
1時間前までの記憶を失っていた

「ところで・・・あなた達はドチラサマですか？」

「私は榎本梓・・・探偵です」

「Ｄｅｔｅｃｔｉｖｅ？それで・・・何のご用件でショーカ？」

梓は「奥さんを殺そうとしてませんか？」と聞こうとしたが
あまりにもストレート過ぎるので
とりあえず羽柴さんとこの奥さんの見たことについて聞いてみた

「オーアレネ！あれはワインの話デース！
私ワイン・・・特にレッドが大好きデース！」

その時哀はコナンに耳打ちをした

「ねぇ・・・この話信用できる？」

「さぁな・・・とりあえず今確かめられるのは・・・
ねぇ！ピーターさん！それなら今もワイン持ってるの？」

本当にワイン好きならワインを常に持っているのが自然

「もちろんデース！地下室は丸々ワインセラーになってマース！
なんなら見て行きますか？自慢のコレクションをお見せシマース！」

四人はとりあえずそのワインコレクションを見せてもらう
スーパーなどで手に入る安価な物から
通好みの高い物まで揃っている・・・

「一応は信用しても良さそうだな・・・」

ピーターはさっきとは裏腹にとても楽しそうにワインの自慢をしている
その無邪気な顔が演技とはとても思えない

「コナンさん・・・一旦引き上げましょう・・・
もうあの外人の自慢話も飽きてしまいましたよ・・・」

「きっと奥さんは他の人から噂でピーターさんの事を聞いて勘違いしちゃったんですよ・・・」

四人はとりあえず引き上げることにした
その時

「ただいま～！」

「オー！マイワイフが帰ってきたネ！」

なんだって!?
さっきまで「殺される！」と訴えていたあの人が？
わざわざ自分を殺そうとしている夫の許へ？
四人は急いで玄関まで行く

「あら？お客さん？」

違う・・・
さっきの人じゃない・・・
今回の捜査は難航しそうである

続く

おまけ：今日のスカウター

ピピピ・・・ピーター・ウィリアムス　戦闘力２１

フリーザ様から一言
ただのワイン好きです・・・
ただ体格は良いのでそれなりの戦闘力はあるようですが
とんだ見当違いでした！

51．虚像の住宅街（前編）（後書き）

ふぅ・・・まったく忙しい＾＾；
バイト入れられまくりました
夏休みなのに夏休みじゃないみたい
フリーザ様にバイト先吹っ飛ばして欲しいくらい（爆）
もちろんおっとりもコナゴナ・・・
真面目に働かなきゃダメですよね＾＾；

52．虚像の住宅街（後編）

前回までのあらすじ
ポアロのマスターがぶっ倒れた
そこで梓には長期休暇が与えられることになったのだが
暇を持て余した彼女は毛利探偵事務所を占拠
榎本探偵事務所にする・・・
しかし依頼人は全く訪れず
再び暇を持て余す彼女は助手のフリーザ様の助言で
事件が起こる確率３０％のお昼の住宅街に足を運び
そこで事件と出くわす
・・・でなんやかんやで怪しい外人ピーターの元を訪れるが
彼はただのワイン好きだった上
彼のワイフは被害者とは違っていた

第５２話　虚像の住宅街（後編）

「じゃああれは誰だったのかしら?」

四人は頭を抱える
かなり当てにしていたウィリアムス家がはずれとなると
当てはまったく無くなってしまう

「ここら辺で命の危険を感じるような人っている?」

考えていても埒があかないのでコナンはウィリアムス夫妻に聞いてみた

「オー・・・それきっと土居さんデース！
彼の奥さんベリーベリー鬼嫁ネ！この間も飲み屋で
『殺される・・・』って言いながら震えてまシータ」

「いや・・・男じゃなくて女なんですけど」

するとウィリアムス夫人が口を開いた

「それならきっと・・・村瀬さん所の奥さんよ！
彼女最近旦那さんに暴力を振るわれてるって言ってたわ」

「イエース！あの家のドメスティック・バイオレンスはひどいデース！
この間も奥さんアザだらけでシータ！」

と言う事で四人は村瀬さんのうちに行くことにした

村瀬宅

ピンポーン

梓がインターホンを押す
家の中でドタバタと音がした

「梓さん・・・我々は探偵です・・・ブアカーオではありません」

「やだなぁ・・・分かってますよ・・・」

そうしているうちにインターホンのスピーカーから声がしてきた

「どちら様?」

男の様だ・・・と言うことは暴力夫である
ここは慎重に話を進めないと・・・
フリーザ様、哀、コナンの三人は固唾を飲んで梓を見守る

「私榎本梓と言う者ですが・・・奥様ご在宅でしょうか?」

うまい・・・自然な流れだ・・・
先ほどの行動がうそのようだ

「あぁ・・・妻なら今ちょっと出てまし・・・あぐぅ!」

・・・・・・

あぐぅ?
突然スピーカーから漏れて来たのは明らかに女性の物と思われるうめき声
いよいよ怪しくなってきた・・・

「梓姉ちゃん!変わって!」

すかさずコナンがインターホンの前に・・・
フリーザ様に持ち上げてもらい、変声器を梓の声に合わせる

「今のうめき声何ですか?奥さんの声に聞こえましたけど・・・」

「えぇ!?そ・・・そんな事ないでしょう・・・」

怪しい・・・明らかに動揺している

「奥さんいるなら代わって下さいよ」

「いや・・・今のは妻ではなくて・・・その・・・猫です・・・うぁぁ・・・痛い」

うあぁ・・・痛い・・・
素敵な泣き声の猫である

「痛い・・・って言いましたよね・・・何やってるんですか?警察呼びますよ?」

「いや・・・その・・・本当に違・・・な!なんだお前らは!?」

そ~ら・・・どんどんボロが出てくる・・・
と考えていたコナンだったが次の瞬間首を傾げた
「なんだお前らは」?
良く見るとフリーザ様達がいない・・・いつの間にかポリバケツの上で喋っていた
まさかと思い玄関の方に目をやると・・・
壊されたドアと哀が目に入った

「夢中になりすぎね・・・だからジンにもやられたのよ・・・」

嘲笑うようにそういうと哀は家の中に入って行った
ったく・・・あいつら・・・不法侵入じゃねぇか!

「最初からこうすれば良かったんですよ・・・」

ドアをぶち壊して侵入したフリーザ様と梓は家捜しを始めていた
声がしていたからそんなに苦労はしないはず・・・

「いたわよ・・・」

発見したのは哀だった・・・
そこへコナンもやって来た
四人が部屋をのぞくとそこには夫に拷問された女性がいた

「どういうことか・・・説明してもらえますね?」

下を向いて黙っていた村瀬さんとこの旦那さんだったが
観念したのか口を開いた

「実は私・・・サディストなんです!!!」

・・・・・はぁ?

「彼女は周りには妻と行ってありますが実は愛人で
本当の妻は仕事の関係上滅多に帰ってきません
そこで妻がいない間に僕の隠れた欲求を満たそうと
出会い系サイトで知り合った彼女と・・・」

「そう・・・そういうこと・・・」

そのとき村瀬でも愛人でもフリーザ様達でもない声が部屋に響いた
皆の視線が部屋の入り口に集まる
そこにいたのは・・・怒りに震える村瀬さんとこの奥さん(本妻)

であった

「私がいない間に・・・お仕置きが必要ね・・・」

「ちょ・・・ま・・・助け・・・」

その後・・・村瀬宅の前には救急車が来ていたと言う・・・

「やれやれ・・・SはドSに食われる・・・ってとこですか」

「何にせよ一件落着ですね」

「どこがだよ」

安堵の表情を浮かべていたフリーザ様達の話にコナンが割って入ってきた

「さっきの愛人ってのも奥さんも・・・さっきの女の人じゃなかったろ？」

そう言われてみればそうだ
また振り出しか・・・足取りが重くなる四人
するとコナンがまた吹き飛んだ
さっきの女性がまたぶつかって来たのだ

「殺される！」

そして再び逃げ出す女性
しかし今度はフリーザ様が捕まえた

「落ち着いてください・・・一体何に殺されるんですか？」

息も絶え絶えに女性は何とか口を開く

「ご・・・」

「ご？」

「ゴキブリ・・・」

こうして榎本探偵事務所最初の依頼はゴキブリ駆除に決定した

続く

おまけ：こぼれ話

「・・・俺の推理ではここが奴らの巣だな」

１０匹ほどゴキブリを倒して辿り着いたのはあまり使われていない戸棚

フリーザ様達の額を冷たい汗が濡らす

「何もたもたしてんのよ・・・さっさと駆除して帰りましょう」

そういうと哀は戸棚に手を伸ばす

「あ！やめろ！灰原！」

叫ぶコナン・・・しかし遅かった
哀の目の前に広がるのは大小様々の何万匹にも及ぶゴキブリの群れ
哀の目の前はクロゴキブリの黒から真っ白に変わって行った

「灰原～！！！」

「メディコ！メディコ！」

「ほっほっほ・・・ハイバラさんも失神するんですね・・・」

52．虚像の住宅街（後編）（後書き）

あぁ忙しかった＾＾；
やっと時間が空いてきました
また最初のころみたいなハイペースになるかもしれません
更新を待ってた方には本当に申し訳ありませんでした
そして「二度と更新するなクズが！」と思ってた方も
・・・まだ続きます・・・スマン（爆）
本当に申し訳ないです
藁人形でもなんでもやって下さい＾＾；

53．探偵墓地へようこそ

工藤新一、服部平次、白馬探・・・
高校生探偵と呼ばれる者を軽くあげてもこれこの通り
名探偵を挙げろと言われれば結構な人数が出てくることだろう
しかし月の周りに星は見えず・・・
探偵としてそれほど悪くない人間も
名探偵の周りでは霞んでしまう
そして彼らは・・・路頭に迷うのである

第５３話　探偵墓地へようこそ

プルルルルルル・・・

今日数十回目の電話がなった
ここは榎本探偵事務所・・・旧毛利探偵事務所である

「はい、榎本探偵事務所・・・」

電話応対担当の哀が受話器を取る
電話の内容はもちろん仕事の依頼だ

ガチャ・・・

受話器が静かに置かれる

「どうでした?」

「ダメね・・・また害虫駆除の依頼よ・・・」

「ぬぅ・・・たった一回のゴキブリ退治が・・・
おばさんの噂話の力がまさかこれほどとは・・・」

先日のゴキブリ退治の結果
榎本探偵事務所はその害虫駆除の腕を買われ
いまや奥様達が我先にと駆除依頼の電話をかけてくるまでに成長を遂げた
しかしあくまで探偵事務所
そんな依頼を受けるわけにはいかなかった

「でも困りましたね・・・このままじゃ廃業になっちゃう」

梓は頭を抱えた

プルルルルルル・・・

また電話が鳴る
どうせまた害虫駆除の依頼だろう・・・
嫌になったフリーザ様達は町に繰り出すことにした
もちろん事件遭遇率を高めるためコナンを連れて

随分遠くまで歩いた気がする
もう米花町を出てしまっただろう・・・
都内ではあると思うが見覚えのない場所までやって来た

「事件・・・起こらないですね」

梓の口から溜息が漏れる

「役に立たないですね・・・ほら！事件を吸い寄せるんですよ！」

「あのなあ・・・俺は別に疫病神じゃないんだぜ？」

「うそ臭いわね・・・」

途方に暮れる四人・・・

遅めの昼食でも食べて帰ろうとしたその時だった

「もしかして・・・君達は探偵じゃないのか？」

声のした方を振り返ると

そこには初老の男性が一人立っていた

「そうですけど・・・もしかして！ご依頼ですか！」

梓の目が一気に輝く

まるで少女漫画の主人公のような輝きである

「いや・・・残念だが・・・

見たところ仕事がない様だね」

嫌なところをついてくる

一気にテンションが下がる四人

だが初老の男はあくまで優しく微笑みながら話を続けた

「そうかそうか・・・では良いところに連れてってあげよう・・・

来なさい」

特に予定もないので四人は男について行くことにした

連れてこられたのは町の外れにある小さな図書館
人も疎らでこれと言ってすごい図書館には見えない
そのうち男とフリーザ様達は一つの本棚の前にやって来た

「推理小説か・・・寂れた図書館の割りにいい本が揃ってるじゃねぇか」

コナンは嬉しそうに言ったが
男は静かに首を横に振った

「いやいや・・・見せたい物はこれでは無いんだよ・・・」

そう言って本をあれこれ取り出したり元に戻したりを繰り返す
すると突然本棚が動き始めそこに扉が現れた

「さぁ行こう・・・」

町の小さな図書館に隠し扉が・・・
まるでＲＰＧのような展開に四人はただただ唖然とした

扉の向こうは通路になっていた
いくつもの扉を通って辿り着いたのは妙に広く薄暗い部屋
そこには人がたくさんいた
一人一人に椅子と机がワンセット用意され

皆そこに腰掛けてそれぞれ思い思いに過ごしている

「図書館の一室ですか？それにしては随分広いですね・・・」

部屋に入った時は広いぐらいにしか思わなかったが
よくよく考えるとおかしい
部屋の端が見えない・・・
奥の方に行くほど暗くフェードアウトしている

「ここは君達がさっきまでいた場所とは少し違う・・・
時はゆったり流れゆっくりと人をその中に溶かしていく」

「意味が分からないわ・・・ここは何なの？」

たまらず哀が聞いた

「ふむ・・・ここは役目を失くした探偵達が最期の休息をとる場所
探偵墓地・・・とわしは呼んでいるがね・・・わしは墓守だ」

突然の「ここはお墓」宣言・・・
まるでシータと追いかけっこをして玉座の間についたムスカ大佐の
気分だ

「あの～・・・なんで私達をここへ？」

「君達にはもう探偵としての役目がないからだ」

梓の問いに優しく答える墓守
言ってることはストレートだがどこと無く安心する一言である

「神は全知全能と思われるがそうではない・・・
神は悲しいほどに何も知らない・・・そして知りたい
だから神は探偵を生み出したのだよ
一つでも多くの真実を見つけるために
でも人間は名探偵を生み出しその他の探偵を蔑ろにした
神の使者で有りながら仕事を失くした哀れな天使達
その心と体に安らぎを与えるのが探偵墓地の役目だ」

つまり仕事が無いからここで過ごせと言うことらしい
なんだか妙なことに巻き込まれてしまった
頭を抱える哀とコナンとは対照的に
良い暇つぶしに出会えたフリーザ様と梓は静かに笑った

続く

おまけ：ニュース・フリーザ

こんにちは
本日行われた夏の甲子園決勝戦で
対戦した港南高校と大金高校は抜きつ抜かれつの接戦を展開し
延長１０回に港南高校が接戦を物にし優勝しました
優勝した港南高校のエース長島茂雄君は
「この喜びを父と母に伝えたい」
とありきたりなコメントを出す一方
高校球児としては珍しい伸びた髪の毛に話が及ぶと
「球児は坊主なんて古い、髪が無ければ彼女も出来ない」
と今時の若者らしい一面を覗かせましたが
この一言について高野連は

「女と乳繰り合ってる暇があったらバットを振れ！」
と厳しく批難し
同校の出場権の剥奪も視野に入れている旨を明らかにしました
高校球児は爽やか坊主が一番ですね
以上水無怜奈がお届けしました

53．探偵墓地へようこそ（後書き）

忙しいです
主にバイトが＾＾；
でも来週からはゆっくり出来そうです
とりあえず海に行きたいです

５４．探偵達の魂を鎮めちゃう歌

前回までのあらすじ
榎本探偵事務所の最初の依頼はゴキブリ退治だった
そしたら奥様方に評判になり
事務所には害虫駆除の依頼が殺到
梓達は町に逃げ出した
そこで出会った初老の男に連れられて図書館の隠し扉をくぐると
そこに有ったのは用済みになった探偵達の集まる部屋
通称探偵墓地だった

第５４話　探偵達の魂を鎮めちゃう歌

そうこうしているうちに四人の前に机と椅子が用意された

「さあお座りなさい・・・そして時に溶かされるまで好きにすると良い」

「好きにって・・・机と椅子だけでどうやって・・・
私死ぬならその前にブランド物のバッグ大量購入したいんだけど」

哀が不満を漏らす
墓守はまた優しく微笑んだ
いい加減この笑顔も見飽きた・・・

「たしかに机と椅子だけじゃあ座ってぼけっとしてるぐらいしかできない・・・

でもさっきいっただろう?これは肉体の休息
肉体では出来なかったことも魂ではできる様になる
彼らを見たまえ!」

墓守は部屋の暗くなった部分・・・
もうそろそろ時に溶かされるであろう探偵達の集まりを指差した
どいつもこいつも馬鹿面でよだれを垂らしながら嬉しそうな顔をしている

「彼らはかなり魂を使いこなしている・・・さぁ!君達も!」

いやだなぁ・・・
魂、魂って・・・要は妄想して楽しめってことだろうが・・・
死ぬ前にすることが妄想なんて・・・絶対に嫌だ!

「おい!ふざけるなよ・・・僕を誰だと思ってるんだい?
かつて誰もが恐れた宇宙の帝王フリーザ様だぞ!
分かったら出口を教えろよ!消し去りますよ?」

凄みを効かせるフリーザ様・・・しかし墓守はまた優しい微笑を浮かべた
その微笑がフリーザ様の堪忍袋の緒をまるで飛天御剣流龍槌閃の如く断ち切った

「どうやら口で言っても分からないようだね・・・」

フリーザ様は怒りに任せて全力で墓守を殴りつけた
吹っ飛んで地べたにうずくまる墓守

「くくく・・・さぁどう料理して・・・!?」

墓守をなぶり殺しにしてやろうと近付いたフリーザ様
しかし墓守の顔はいつの間にか初老の男ではなく見覚えのある顔に
変わっていた

「貴様は！孫悟空！」

噂のサル野郎になっていた・・・

「そうかお前だったのか！ふっふっふ・・・ちょうど良い
ナメック星のお返しだ！覚悟しろぉ！！！」

・・・・・・

「ダメね・・・フリーザ様は完全に妄想の世界に行ってしまったわ」

「そんな・・・」

いつの間にかフリーザ様は椅子に座り
時折なにかブツブツ言いながら妄想の世界に取り込まれてしまった

「さぁ！お嬢さん達も！れっつえんじょい！」

えんじょいって言われても・・・
哀と梓はまた暗くなっている所をみた

「えへへへへへへ・・・ヨーコちゅわ～ん・・・」

・・・・・小五郎だ

彼もここへ来ていたのか
かなり重症のようだ・・・

「どうしたんだい？座らないのかい？」

「あれを見て座る気にはならないわよ・・・」

よだれを垂らし鼻の下を伸ばす小五郎・・・
「スーパーサイヤ人が聞いて呆れる」「まだまだ５０％だ」
などとブツブツ言っているフリーザ様・・・
この二人を見るだけでもその机と椅子を拒むには十分だった

「ところで・・・机も椅子も一つたりないんだけど」

コナンが口を挟んできた
哀を捕らえていた二つの瞳がくるりと回転する

「ん？君はまだ探偵として生きているだろう・・・ここへ来るべきではなかったんだ
立ち去りなさい！そしてここでのことは忘れ・・・一つでも多くの真実を見つけなさい」

「やったぜ！俺は出れんのか！
じゃあな灰原！俺は一足お先に帰るぜ」

そう言うと墓守に連れられ部屋を出ようとするコナン

「ちょっと！まさかこんなか弱くて可憐で健気で
ちょっと不幸な過去を持つっていう男心をくすぐるポイントを持つ
薄幸の美少女を置いていくの？」

哀は嬉しそうに去ろうとするコナンを睨みつけた

「ん～？大丈夫だって・・・組織から逃げ出せたんだお前ならまたうまくやれるだろ・・・梓さんをよろしく！」

「ふざけんじゃないわよ！女の子を残して一人だけ逃げようなんて最低よ！」

フリーザ様にも慣れてきてまたクールな彼女に戻りつつあったのにコナンのあまりの態度についに感情を露にして怒鳴り散らした

「逃げるな灰原・・・自分の運命から・・・まぁでも『素敵でかっこいいコナン様、どうかこの牝豚をお救い下さい』って言えたら助けてやる・・・」

なんてサディスティックなやつだ・・・哀は人一倍プライドが高いのだ・・・そんなこと口が裂けて裂け目が一周して口から上が飛んでも言えない

「じゃあな！」

どうもコナンは遊びではなく本気で帰るらしいそれもそのはず・・・今日は新作の推理小説の発売日だ・・・彼には時に溶かされている暇など無いコナンの本気ぶりを察した哀そのプライドは遂に崩れた

「あ・・・す・・・素敵でかっこいいコナン様！どうかこの牝豚を

お救い下さい！」

「もう本屋行かなきゃ行けないからまた明日な・・・」

バタン・・・

コナンはドアの向こうへと消えて行った

「ねぇ・・・時に溶かされるまでどれぐらい掛かるの？」

「１０時間ぐらいかな・・・」

「そう・・・じゃあ明日には溶けてるわね・・・」

「ピザの上のチーズの様にな・・・」

・・・・・ダメじゃん！

哀と梓は妄想しそうになるのを必死で堪えた
妄想の世界に取り込まれないように
何が現実かを頭の中で整理しながら・・・

「哀ちゃん・・・無事？」

「えぇ・・・何とかね・・・江戸川君が来るまで堪えるのよ」

「ヨーコちゅわん・・・俺の娘になりたいだって？」

「もうおねんねか？孫悟空」

・・・・・一時間後

「哀ちゃん・・・無事？」

梓はこれで８回目となる質問を哀に投げかけた
しかし哀からの返答はない・・・

「哀ちゃん？」

「ごめんなさい・・・ちょっとこの部屋の変化が気になって・・・
いつの間にあんなところにブランド店がオープンしたのかしら」

・・・・・灰原哀　再起不能（リタイア）

「何？ヨーコちゃん！いかん！俺には別居中の妻が・・・」

「今のでＢＯ％ってところだ！」

哀まで妄想の世界に行ってしまった・・・
他の二人に至っては重症だ・・・
フリーザ様の席はだいぶ暗がりに近付いたし
小五郎の席はもうほとんど見えない・・・

「コナン君・・・早く来て・・・」

梓の孤軍奮闘が始まった・・・

・・・・・更に一時間

「やったぞ!遂にスーパーサイヤ人を倒したぞ!」

「助けてお姉ちゃん!ブランドバッグに潰される~うふふ」

二人ともう随分暗いところへ行ってしまった
小五郎は30分前に時の中に溶けて行った
最期に彼が残した言葉は
「蘭・・・落ち着いて聞きなさい・・・今日からヨーコちゃんがお前のお母さんだ」
であった
・・・そして梓は

「いらっしゃいませ~!あらダイガクセイさん!またレポートですか?」

妄想ワールドにどっぷり浸かっていた

・・・・・そしてコナンが小説の2度読みを終えようとしていたころ
3人はゆっくりと時の中に溶かされて行った

・・・長らく続いてきたフリーザ様と灰原さん・・・
これにて終了・・・長い間ありがとうございました!

・・・・・・

梓はマスターが入院して暇だった・・・
暇だったので以上のような妄想をしていた

「どうですか梓さん？」

フリーザ様が梓の顔を覗きこむ

「なかなか深いラストシーンでした・・・でもちょっと重苦しいかな？」

「じゃあ次はハッピーエンドバージョンで妄想しましょう」

そんな二人を見て哀は溜息をついた

「ねぇあなたたち・・・」

「なんですかハイバラさん？」

「マスターが帰ってくるまでずっとそうしてるつもり？」

・・・・・・こうして

梓の長期休暇は何の意味も成さずに終わった

続く

おまけ：今日のスカウター

ピピピ・・・墓守　戦闘力０

フリーザ様から一言
そもそも梓さんの妄想の中に出てきた人ですからね
戦闘力もヘチマもないですよ
皆さんも暇が出来たら妄想でもすると良いですよ
気付けば時計の針なんて回ってるんですから
それじゃ！チャオ！

５４．探偵達の魂を鎮めちゃう歌（後書き）

梓の休暇編感動のフィナーレ？
ちなみに終わりませんから＾＾；
にしてもお盆実家帰らないでバイトばかりしてたら
気付けばフリーザ様を放置していました
お待たせしてすみません
ちなみに妄想はただの時間の無駄遣いに過ぎません
８０年生きる人でも６０分×２４×３６４×８０
で４２０４８０００分
一億分も無いんですね・・・しかも寝る時間に
寝たきり時間を引くと・・・（（（（；゜Д゜）））
妄想してる暇なんてないよ＞＜

55．米花公園の教祖

宗教・・・
人は昔から何かを信じて生きてきた
いつしか人々は自分の信じる物を神と呼ぶようになり
世界に多種多様な神を生み出した
ヤハウェ、アッラー、イエス、八百万の神々・・・
もしかしたら一人しか信じていない神もいるかもしれない
そして米花町にも神を信じる者達がいた
今日はそんな人達の話

第５５話　米花公園の教祖

「それにしても退院できて良かったですね」

「いやいや・・・ご心配をおかけしました」

この日久々にポアロのシャッターが開けられた
マスターが退院し今日から復帰する事となったのである

「さてと・・・おい灰原・・・そろそろ行くぞ」

珍しく一緒に来ていたコナンが席を立った

「ん？コナンさんにハイバラさん・・・どこへ行くのですか？」

「米花公園だよ・・・元太達とサッカーやる約束してるからな」

「何?あれだけジー○ジャパンがやられたと言うのに
日本人はまだ懲りていないんですか?
まあ良いでしょう・・・私も参加します!」

結局こうなるのかよ・・・
コナンは半ば諦め気味にフリーザ様にコーヒーを飲み干すよう促した
しかしコーヒーカップを空にしたフリーザ様にダイガクセイが声を
かけてきた

「フリーザ様・・・米花公園に行くなら気をつけた方が良いよ・・・
最近頭のイカレたやつが妙な宗教の勧誘だの集会だのを開いてるら
しいから」

・・・・・・

ダイガクセイの言葉は気になったが
フリーザ様と少年探偵団は米花公園でサッカーを興じていた

「フリーザ様!しっかりセンターリング頼むぜ!」

「任せなさい!カーブをかけて入れてやりますよ・・・
食らえ!フリーザシュート~そよ風のテーゼ~!」

が・・・そよ風のテーゼはゴールとは全く違う方向に飛んで言った

「何やってんだよ!」

少年探偵団からブーイングが飛ぶ

ボン！

その時鈍い音がした・・・
どうやらそよ風のテーゼは何かを直撃したようだ
何にぶつかったのか気になり恐る恐る皆で取りに行く・・・

「メテオだ！メテオが降って来た！」

「教祖様の頭にメテオが降って来たぞ！」

なにやら騒がしい・・・最悪の事態だ
誰かの頭を直撃したようだ
声のするほうに言ってみると妙な集団・・・
そして明らかに奇抜な格好をした男が頭を抱えてうずくまっていた

「大丈夫ですか？」

とりあえず男を心配してみる探偵団
しばらくうめき声を上げていたが痛みが引いたのか立ち上がった
そしてボールを手に取り開口一番大声で叫んだ

「諸君！今目にした事が全てである！
今私の頭にメテオが降って来た！神からの怒りのメッセージである！
我ら愚民は悔い改める必要があるのだ！」

男が叫ぶとその周りに座っていた集団がざわめた
そしていきなりひざまずいて祈りを捧げ始めた
どうやらダイガクセイの言っていた集団は彼らのようだ

「ぬう！諸君！このメテオには文字が刻まれている！
神からのメッセージが刻まれているぞ！」

「ａｄｉｄａｓ」とメーカー名が記されている・・・
どんなメッセージだよ・・・コナン達は呆れながら聞いていた

「Ａ・Ｄ・Ｉ・Ｄ・Ａ・Ｓ・・・どうやら暗号化されているようだ・・・
待っていたまえ諸君・・・今解読する・・・」

だからメーカー名だよ・・・
コナンはさっさとボールを返して欲しかったが
ぶつけてしまった手前あまり強く言えずにいた
そうしている間に男は暗号の解読を始めていた

「ヌルタラポモンティピタパヌシヌシムーンタリーヌ
ポロアメコスニサンタンバルイブスナカヤヌケソメリクターノ・・・」

「・・・教祖」

呪文と思しき言葉を唱え終えると
教祖と呼ばれた男は静かに口を開いた

「神がもうすぐ降臨される・・・遂に審判の時がやって来たのだ！」

ａｄｉｄａｓがなぜそういう意味に・・・
聞くに堪えずコナンはボールを返してもらう事にした

「灰原・・・頼む」

「・・・はいはい
ねぇおじちゃん!そのボール私達のなの!返して!」

灰原が出来るだけ無邪気な子供っぽく教祖に頼んだ
しかし教祖は顔を強張らせてまた叫んだ

「恐ろしい!神からの啓示を・・・無知で汚れた子供が!
なんと恐ろしい!きっと愚民をのさばらせようとする魔界の使徒に
違いない!」

だめだ・・・話がかみ合わない・・・
探偵団はボールを諦めかけた・・・その時だった

「そのボールは私達のですよ!返さないと消し去りますよ?」

フリーザ様がボールの奪還に乗り出した

「ちょっと!フリーザ様!こんな人達に関わるのはやめましょう
ボールは諦めて・・・博士の所でゲームでもしてましょうよ」

哀はフリーザ様を止めたがフリーザ様は笑顔を浮かべた
いつにも増して確信に満ちた表情・・・
そう・・・事件を解く前のコナンのような表情である

「大丈夫ですよ・・・ことボールを奪うことに関しては
私は貴方達とはレベルが違います
ナメック星では良いとこまで行ったんですよ」

ナメック星って何?

哀達の心の叫びは無視しつつフリーザ様は自信たっぷりに語った
ベジータにボールを横取りされた部分などを省略して・・・

「あ・・・あなたは・・・」

自分達に勝るとも劣らない変な格好のフリーザ様を見て
妙な集団は突然ざわつき始めた・・・
教祖に至っては強張っていた顔が更に強張っている
傍から見ればかなり笑える顔だ

「さぁ!早くボールを渡しなさ～い!」

「これはあなたが?」

「そうですよ!またぶつけられたいんですか?」

自分からぶつけておいてこの傍若無人な態度
哀たちは呆れつつも見守った
しかし教祖はその言葉を聞くとゆっくり信者の方を向いた

「諸君!ついに神が降臨された!
そして今神はこうおっしゃられた!
『私のエデン・・・ボール・・・すなわち地球を返せ
さもなくばメテオが降り注ぐであろう』と!」

なんでそんな解釈になるんだろう・・・
そう言えば最近暑かったな・・・きっとそのせいだ
哀はフリーザ様に無理矢理奪い取るようGOサインを出した
しかしフリーザ様は動かない

「いかにも！私こそ神です！
さぁ愚民共！恐れなさ～い！崇めなさ～い！」

「おぉ！神よ！」

フリーザ様は神と呼ばれたことに気を良くしてしまったようだ
サッカーボールのことはすでにフリーザ様の頭の中に無かった

「さぁ！諸君！神を我らの寺院へお連れするのだ！」

教祖の声と共に信者達が列をなしてフリーザ様を先導する
完全にその気になってしまったフリーザ様
天狗状態でついていく

「神様？あの子供達は・・・？」

フリーザ様の横を歩く教祖が探偵団をみて聞いた

「私の下僕の天使たちです」

「やっぱりそうなんですか！
おい諸君！天使様達も忘れるてはならんぞ！」

なんで私達が・・・
哀は行くのを拒もうとしたが

「私達天使だって～！」

「なぁなぁ！行こうぜ！うまいもん食わしてくれるかもしれねぇしよ！」

「崇められるのも悪くないですね」
コナンと哀を除いて乗り気の様である
二人も渋々ついて行くことにした
「ハイバラさん！一番天使っぽい人が遅れないで下さい！」
「誰が天使っぽいのよ」
続く
おまけ：ニュース・フリーザ
こんにちは
また警察の不祥事です
本日警視庁捜査一課の白鳥任三郎警部が
警察の捜査器具や職権を私的に利用し
同僚の刑事二名のプライベートを監視していたとして
懲戒免職処分を受けていたことが明らかになりました
白鳥元警部は
「元太と同じ声のくせに美和子さんとイチャイチャしているのが気に入らなかった
二人の仲を引き裂いてやりたかった・・・」
と動機を語ったとのことです
白鳥元警部は警視庁の名物警部の一人で
警部になってから声変わりをしたという事で知られており
声変わり前は南斗水鳥拳の使い手でもあり

以前は「名探偵の毛利氏とは強敵と書いて友と読む仲」と語っていました
警視庁は近く公務員職権濫用の疑いで逮捕する方針を明らかにしています
以上水無怜奈がお伝えしました

５５．米花公園の教祖（後書き）

高木刑事と佐藤刑事がトロピカルランドでデートした時
あんなに多くの刑事が二人を張ってるなんて・・・
刑事って暇なんですか？
まぁ刑事は暇なほうが良いとは思いますがね
それだけ平和って事ですからね
コナンワールド・・・案外平和なんでしょうね

５６．嘘つき教祖と愉快な仲間達

たまに聞いた事の無いような宗教の勧誘がやってくる
熱心に「このままでは人類滅亡！」「大地震が起こる」
などとドアの前で熱弁をふるう
作者は完全に無視するのが常套手段である
しかしやっている方は真剣そのもの
例えどんなに無視されようと
例えどんなに罵声を浴びせられようと
自分の信じたこの道・・・ずっと行けば・・・
あの町に続いてる気がする・・・カントリーロード
・・・今回はどこにも続いていなかった場合の話

第５６話　嘘つき教祖と愉快な仲間達

フリーザ様と少年探偵団は妙な集団に先導され
とあるマンションの前にやってきていた
そしてマンションの一室の前につくと
「宗教法人悔愚転生教寺院」と張り紙がしてある

「マンションの一室が寺院なんですか？」

「残念ながら愚民の世ではお金が必要で・・・
ここを借りるのが精一杯だったのです」

とは言えマンションとしては一級である
広々したリビングは３０人ほどの信者が通うには十分な広さがだ

しかしその自称寺院に入った瞬間
哀や探偵団の目にある物が飛び込んできた

「あれって・・・」

「我々の神・・・ヌムリーン様の肖像です」

壁にかけられた仏画のような絵画
そこにはフリーザ様そっくりの神様と
五人の子供達・・・天使が描かれていた

「ヌムリーン様！今こそ我ら愚民に裁きの鉄槌を！」

「ヌムリーン様！世界に安定を！」

「病んだ地球をお救い下さい！ヌムリーン様！」

一気に信者達がフリーザ様を取り囲む
そしてあれやこれやと言葉をかける
聖徳太子でも全てを聞き分けるのは難しそうであるのだから
フリーザ様では絶対に無理である

「コラコラ諸君！忘れたのかね？
ヌムリーン様は降臨されたらまず力を蓄えなくてはならない
私はこれからヌムリーン様を錬気の部屋に案内する
諸君らはここでいつも通り祈りを捧げて待っていなさい」

そう言うと教祖はフリーザ様達を一つ上の階にある
「錬気の部屋」なる場所へ連れて行った
部屋に入ると・・・生活感あふれる光景が広がっていた

コナンがあちこち見て周る
どう見てもついさっきまで誰かが生活していた痕跡がある

「錬気の部屋って・・・？」

哀が聞くと教祖は突然土下座した

「すみません！ここは僕の部屋です！
錬気の部屋と称して教団名義で借りているんです」

教祖は語り始めた
悔愚転生教の誕生秘話を・・・

私は所謂窓際族というやつでした
会社に行けば「何だ来たのか」と同僚の溜息
愛想が良くてバレンタインデーに義理チョコを振りまく女子社員も
私の事を避けていてチョコをくれたことはありませんでした
そんなある日会社に行くためいつもの様に電車に乗ったんですが
そこで痴漢の疑いをかけられてしまったんです
会社はいい機会だとばかりに私をクビにしました

「冤罪だったの？」

「はい・・・ちょっと触りたくなったから軽く触れただけなのに」

「やってんじゃない・・・」

なんとか被害者の方に納得してもらい
逮捕だけは免れたのですが私は無職に・・・
そんな時この本に出会ったのです

『ぬるはち和尚の儲ける宗教』

「なぁ・・・ぬるはち和尚って・・・逮捕されたよな・・・」

「えぇ・・・詐欺罪で・・・」

私はこの本を読んでビビっと来ました
私は宗教を始めるべきだと!
とりあえず神様でも決めようと歩いていた時でした
五人の子供をひき連れたヌムリーン様に出会ったのは

「ところが公園で集会をしていたら突然現れるからビックリしました」

「ビックリしたのはこっちよ」

「とにかく・・・彼らはあなたが本当に裁きの神と信じていますもしこのうそがバレたら私のハッピーライフが壊れてしまいますだからお願いです!これから彼らの所に行きますが口裏を合わせて下さい」

はっきり言って嫌だった
自業自得感たっぷりのお話に探偵団もフリーザ様もうんざりだった

「お願いです!お礼はいくらでも!お金はありますから」

お礼とくれば話が違う
フリーザ様達は快く口裏を合わせることにした

その後・・・
フリーザ様と探偵団は見事に裁きの神ヌムリーンと天使を演じ
「いつ裁きを下すのか？」と言う質問には
「こんなに改心の心があるのならもう少し様子を見てみたい」
ということで納得させることに成功した
こうして教祖は夢のハッピーライフを失わずに済んだのである

・・・・・・

「今日は本当にありがとうございました」

「いえいえ・・・困ったときはお互い様ですよ」

「それよりおめぇ！お礼のこと忘れてんじゃねぇか？」

元太にお礼をせがまれ
急遽教祖とフリーザ様達はお礼めぐりをすることに

・・・・・・

「じゃあ次はうな重食べに行きますか」

哀の要求したプラダのバッグ
コナンの要求したサッカードリームマッチのチケットを手に入れ
辺りも暗くなり夕飯時になったので皆でうなぎ屋へ行く事にした

「すみませんね・・・
歩美ちゃんの白いお城と・・・光彦君のＮＡＳＡ見学・・・

それからフリーザ様のパンダコパンダのでかい方のパンダ・・・
この三つはちょっと待ってもらって良いですか?」

むしろ実現可能性の低い物ばかりである
特に・・・

「どうするのよ・・・パンダコパンダのでかい方のパンダなんて・・・

コパンダの方なら可愛いから私も欲しいけど」

「ビデオで見たら皆さんより使えそうだったんで・・・」

つまりは奴隷用である・・・
そうこうしているうちにうな重が運ばれてきた

「お待たせしました・・・ってあれ?
ヌムリーン様?それに教祖様も・・・うなぎなんて食べるんですね」

バイトをしているのか女性信者の一人と出くわした
あまりの気まずさに「あぁ・・・」とか「うん・・・」など
適当な返事しか返せない教祖

「バッカだなおめぇ!俺らだってうな重食いてぇよ
おめぇら騙したお礼に食わせてもらってるんだからな!」

元太の一言に一瞬で凍りつくうなぎ屋

「騙した?どう言う事ですか天使様!」

その時同僚の店員がさらにうな重を運んできた

「だから言ったじゃない！絶対騙されてるって・・・
月謝2万っておかしいと思わなかったの？」

「2万・・・」

「そんなに取ってたんですか・・・買収も可能なわけだ」

手のひらを返したように暴露を始めるフリーザ様と探偵団
でも全員うな重は食べている・・・
しかし女性信者の方は肩を震わせている
泣いているのかと思われたが違った

「てめぇ～騙してやがったんだな？この○※▲☆野郎！！！」

あまりの豹変ぶりにフリーザ様達も思わず箸が止まる
元太は相変わらずうな重を食べていたが

「おいガキ！箸置け！」

怒られてしまったので仕方なく箸を置く
他の客も「なんだ？」と一斉に注目する

「おいガキ共・・・説明しろ」

重苦しい空気が流れる・・・おもわず皆口をつぐんでしまう

「説明しろ！このバカガキ共が！
でかい口開けてられるのはうな重食ってるときだけか？」

光彦のうな重が宙を舞う・・・
女性信者が蹴り飛ばしたのだ

「彼・・・あなた達から撒き上げたお金で贅沢してたのよ」

「それを知った俺らに口封じのため色々くれたってわけさ」

哀とコナンが淡々と話す
だが女性信者の怒りのボルテージはグングン上がって行った

「ふざけんじゃねぇ！この窓際族が！」

「す・・・すみませんでした！
・・・ところで何で私が窓際族だったことを？」

女性信者はテーブルをひっくり返して暴れだした
星一徹も真っ青の地獄絵図である
歩美や光彦、元太は目に涙を浮かべている

「ちょっと！森沢くん！何やってんの！？」

「うるせぇ！店長ごときが首突っ込んでくんじゃねぇ！」

その後・・・
教祖は全財産を売却し
信者達から撒き上げた月謝を返した
森沢はうなぎ屋をクビになったが満足しているようだ
結局今回得をしたのはコナンと哀だけだった・・・

続く

おまけ：こぼれ話

ピンポーン！

インターホンが鳴る
博士がそれに応対した

「哀君！お客さんじゃぞ！」

「私？」

「どうも～こんにちは！」

「おや？あなたは教祖さん」

やって来たのは教祖だった

「この間はすばらしい手の平返しありがとう・・・
プラダのバッグ高かったな～・・・え？お詫びがしたい？」

「何勝手に話し進めてるのよ・・・」

「そうか～それじゃあ・・・
新しくたち上げた『灰原たん萌え萌え教』の神様になってね
全く・・・最初から頼んでおけば良かったんだよ」

「嫌に決まってるでしょ！」

その後・・・「灰原たん萌え萌え教」は
米花町を中心に順調に拡大して行ったと言う・・・

56．嘘つき教祖と愉快な仲間達（後書き）

宗教の勧誘は夜中に来られるとかなり迷惑
昼間に来られても鬱陶しいので迷惑
結局の所宗教の勧誘自体が迷惑
彼らは人に迷惑をかけてまで何がしたいのでしょうか？
セクハラ？＾＾；
真面目に活動してる方にはすみません

57．忘れられたヒーロー

特撮ヒーロー・・・
日本はウルトラマンや仮面ライダー
レンジャーシリーズなどで昔から子供達を楽しませてきた
ここにも一人特撮ヒーローがいる
「仮面ヤイバー」がその人である
ヤイバーキックにヤイバーパンチ
一発一発が子供達を魅了する
しかしヤイバーが注目される一方で
全く注目されないヒーローがいた

第５７話　忘れられたヒーロー

某特撮会社・・・

「大塚君！大塚君はいるかね！」

昼下がりのオフィスに男性の声が響く
心なしか怒っているようである

「なんですか社長！私はアルトゥールの撮影で忙しいんですよ！」

大塚はその怒った声に更に怒りながら声を返す
これから撮影がある・・・一刻も早く現場に向わねばならないのに

「そのアルトゥールのことで話があるんだよ！

最初から全然視聴率取れて無いけど・・・ここ最近は特にひどい！
これを見たまえ！」

社長は大塚に一枚の紙を押し付けるように渡した
視聴率が記録された紙だ・・・
大塚達が今撮っている「仮面戦士アルトゥール」は・・・

「視聴率４．２ってなんだね！？
地上波の夕時の放送なんだよ！？
放送局は打ち切りを検討中だそうだ！」

「そんな馬鹿な！話はまだ完結していないんですよ？」

「完結した所で視聴率４じゃ意味ないだろ！
ただ日売テレビさんはうちの作品を長年使ってくれていたからね・・・
最後のチャンスをくれたよ・・・
来月までに視聴率１５％以上を取ることだ」

社長はそれだけ言うと行ってしまった
視聴率１５％って・・・今４．２なんですけど・・・
大塚はがっくりうなだれた

・・・その夜大塚は荒れた
なれない強い酒を飲みべろんべろんに酔っ払い
ふらふらと夜の街をさまよった・・・
不良に絡まれ・・・ボコボコにされ・・・
気がつけばゴミ捨て場にいた

「ちくしょう・・・何が視聴率だよ・・・」
無性に悲しく、悔しくなった
「大塚君なのかね？」
不意に声をかけられた
誰だよ・・・鬱陶しそうに頭を上げると
「阿笠先輩！」
そこには博士がいた
博士はボロボロの大塚を家まで送り届けると
そのままそれまでの経緯を聞いた
「もう分からないんです・・・何がいけないのか・・・」
「ふ～む・・・わしにも分からんが・・・
そう言うことは子供達に聞いたらどうじゃ？」
「子供？」
「ほれ！特撮番組の一番の視聴者は子供じゃろ？」
それもそうだ・・・これだけ需要者層のはっきりした番組も無い
要は子供に気にいられる番組を作ればいいのだ
大塚は阿笠に会えて良かったと思った
「まあとりあえず今日は休むと良い
近いうちに近所の子供達を連れてお邪魔するよ」

そして夜はふけて行った・・・

・・・二日後

「お邪魔しま～す！」

撮影現場に子供達の元気な声が響き渡った
阿笠が少年探偵団を連れてきたのだ

「良く来てくれたね！僕は監督の大塚だ
それじゃあまず始めに先週撮ったアルトゥールのビデオを見てよ
それで感想を聞きたいな・・・今日の撮影の参考にしたいし」

と言うわけでアルトゥールの上映会が始まった
「仮面戦士アルトゥール！」
オープニングテーマが流れ出す・・・出だしは悪くない
しかし主人公が登場すると・・・

「日本人じゃないのね・・・」

画面に映っていたのは外国人
片言の日本語で一生懸命演技している

「彼は元キックボクサーなんだ・・・
キックボクシングの動きをアクションにしてみたかったんだ」

話が進んでいく

「サトル！アキが悪い奴らに捕まったの！お願い助けて！」

「どう見ても外国人なのに役名サトルなの？」

だんだん馬鹿馬鹿しくなって来たコナンと哀
サトル役の外人も一生懸命やってはいるが噛みまくりだった
それでも歩美や光彦、元太はまだ楽しそうに見ている
そして話は問題の戦闘シーンに・・・

「アキさんを返すんだ！ルンピニー団！」

「ほざけアルトゥールが！帰りうちにしてくれる！」

それほどつまらない内容とは思えなかった・・・が

「食らえ！必殺！ローキックの舞！」

アルトゥールの執拗なローキックが相手の足にダメージを与える

「説明しよう！ローキックの舞は相手の足にダメージを与え
相手の動きを封じ、尚且つ意識を下に集中させることで
パンチやハイキックを当てやすくする技なのだ！」

なんて地味な技だ・・・
探偵団も白けてしまった・・・

ピコーンピコーン！

突然アルトゥールのカラータイマーが鳴り響く
アルトゥールは地球では3分3ラウンド・・・

すなわち9分しか戦えないのだ
・・・ちょっと長い

「おい！もうすぐ時間切れになっちまうぜ！」

「うそ～！アルトゥールがんばれ！」

探偵団が一生懸命応援するが・・・
ピコーンピコーン・・・カンカンカン
時間切れである

「アルトゥールが・・・」

思わず目を覆う歩美
しかし・・・

「判定に入ります」

判定かよ！
判定決着ありのヒーローなど聞いた事がない

「・・・ジャッジ村田・・・３０－２８・・・赤アルトゥール！
よって判定３－０を持ちましてアルトゥールは今回も地球を守りました」

「おのれ！アルトゥールめ覚えていろ！」

・・・・・終わり

重苦しい沈黙が室内を支配する

あまりにつまらない・・・
皆そんな顔をしている

「・・・KO率はどれくらいなの？」

「これで13話目だけど・・・KOはまだ2回かな・・・」

そんなヒーロー聞いたこと無い

「せめて倒さないと見れたもんじゃねぇよ！」

「子供だと思って馬鹿にしてますね！」

「かっこいいヒーローさんじゃ無いと嫌だもん！」

探偵団から雪崩のようにブーイングが浴びせられる

「やっぱりキックボクシングを反映させすぎたか」

むしろただのキックボクシングになっていることに
彼は気付いていなかった

とりあえず探偵団の助言を基に撮影をすることにした
スタッフやキャストがぞろぞろ集まってくる
今日は戦闘シーンの撮影のようだ

「皆紹介するよ！アルトゥールでサトル役のライアン君だ」

「ライアンデース！コニーチワー！」

演技のときよりひどい日本語だ・・・
ただキックボクサーだっただけあって体は良い
それにイケメンだ
歩美はおろか哀も「ちょっと良いかな」と思ってしまった

「それじゃあ撮影始めようか
まずルンピニー団ボスのムエータ総統の登場シーンから」

そして撮影は始まった

「よーい！アクション！」

「ふはははは！恐れ慄け人間共！
今日こそ我らルンピニー団が全人類に肘打ちと膝蹴りの嵐を・・・」

「なんだよ！だっせ～ボスだな！」

カット・・・
元太がいきなり大声でいちゃもんをつけたのだ

「ダサい？」

「なんだか格好も微妙だしよぉ・・・」

「全人類に肘打ちと膝蹴りって・・・スケールも小さいですしねぇ」

少年探偵団のダメ出しは止まらない
あれやこれやと言っているうちに大塚もスタッフも
すっかり自信を無くしてしまった

「アルトゥール存続のためだ・・・ムエータ！お前リストラ！」

「マジッすか！？」

と言う事で大塚と探偵団は新しいボスを考えることにした
デザインがかっこよくてスケールのでかい悪役を・・・

「あぁ～ダメだ！思い浮かばねぇ！
ムエータ考えんのにも一ヶ月かかったのに・・・もう無理だ！」

大塚が全てを諦めようとしたその時だった・・・

「えぇ！諦めないでよおじちゃん！」

「そうよ・・・諦めたらそこで試合終了よ・・・」

大塚は探偵団の目を見た
輝く瞳・・・その瞳はアルトゥールを応援してくれている
大塚は嬉しくなった・・・まだアルトゥールは死んでいない

「うぅ・・・君達・・・
もう一度・・・アルトゥールが撮りたいです」

大塚が新たな決意表明をしたその時だった

「ちょっとあんた！ここは立ち入り禁止・・・うわぁ！」

ドン！！！

スタッフの悲鳴と同時に爆発が起こる
撮影用の火薬が爆発したようだ

「事故か・・・？何があった！？」

「は～はっはっはっはっは！ハイバラさん！やっと見つけましたよ！
このフリーザ様を差し置いてこんな面白イベントに参加するとは・・
・
随分と良い度胸ですね！消し去られたいようですね！？」

爆煙が収まるとそこに彼が現れた

「フリーザ様！」

「フリーザ様だ！」

突如現れたフリーザ様に大塚はあっけにとられた
何なんだよこいつ・・・
なんて悪役っぽい登場のしかたなんだ！！！

続く

おまけ：今日のスカウター

ピピピ・・・教祖　戦闘力５

フリーザ様から一言
ただの窓際族です

でもこの私を神として選んだセンスの良さは買っていますがね
ただ次にハイバラさんを神にしたセンスはいただけませんね
皆さんも宗教には気をつけるんですよ！

57．忘れられたヒーロー（後書き）

久しぶりに一日に二度の更新＾＾；
フリーザ様の出番がこんなに少ない話は初めて・・・
でも最後にインパクトを残したので良しとしましょう
うん・・・そうしてください（爆）

58．名悪役

マンガや映画の悪役達・・・
なんてクズ野郎だ！と思われる一方で
独特の魅力を持っていて人気を誇る者もいる
善悪が分かれるストーリーにおいて
善にはもちろん皆をひきつける魅力が要求されるが
悪にも善に倒されるだけの価値・・・
すなわち魅力が要求される

第５８話　名悪役

何なんだあいつは？何て悪役らしい登場だ！
きっと名のある悪役に違いない・・・
そうだ！彼を悪役にすればアルトゥールは・・・
いや・・・まだだ・・・早とちりは俺の悪いくせだ
じっくり・・・慎重に彼を観察するんだ
大塚は己の全監督生命を賭け
フリーザ様をじっくり観察することにした

「ハイバラさん！覚悟はよろしいですか？」

「一番連れて来たくないのが来ちゃったわね・・・」

フリーザ様がじりじりと哀に詰め寄る
現場に独特の緊張感が流れる
少女を冷徹に追い詰める悪役・・・

いい感じで雰囲気出してるじゃないか

「罰としてポカリ買って来なさ～い！
もちろん綾瀬はるかぐらいの爽やかさでね！
アクエリアスと間違えたら殺しますよ」

アクエリアスもポカリも大して変わらねぇだろ！
それとも奴のこだわりなのか？
こだわりを持つ・・・悪役らしいぜ

しばらくして哀が帰ってきた
・・・さぁ・・・嬢ちゃんがポカリ買ってきたぜ
どうする悪役？

「ハイバラさん？あなた人の話を聞いていたんですか？」

「何よ？ポカリ買ってきたじゃない」

「綾瀬はるかっぽくない！やり直し！」

それぐらいの事で・・・なんて横暴なんだ！
しかも帰ってくるところからやり直せば良いのに
また買いに行かせてる！・・・こいつは悪だ！

しばらくして・・・Ｔａｋｅ２
哀が爽やかに走ってきてフリーザ様にポカリを渡した
それはもう誰も見た事のないような笑顔で・・・
光彦など失神寸前だ

「乳の揺れが足りませんが・・・まぁそれは良いでしょう・・・

それよりハイバラさん？疲れましたか？」

「疲れたに決まってるでしょ・・・」

「やり直し！」

何でだよ！？彼女超可愛かったじゃん！

「全然ダメだ・・・って倒れなきゃ不合格です」

哀はＴａｋｅ３を向えることになった

・・・Ｔａｋｅ３

現場とコンビニを三往復・・・

何度もポカリを買いに来る変な子供と店員に思われながらも

輝く汗と爽やか笑顔で走ってくる哀

その輝く笑顔に現場の誰もが見惚れた

「お疲れ様・・・」

「全然ダメだ・・・」

バタ・・・

哀はその場に倒れる

「いやいやお疲れ様・・・ポカリ上げるから勘弁して下さい」

勘弁して欲しいんだ・・・

ちょっと憎めないところも高ポイントだな

良し・・・彼にアルトゥールの悪役に成ってもらおう

大塚は意を決してフリーザ様に話しかけた

「ちょっとあんた！今見てたよ！
何ていうか・・・すごい悪役だね！」

ポカリを飲みながらフリーザ様は大塚を見た

「何ですかあなたは？人を悪役呼ばわりするとは・・・
私を誰だと思ってるんですか？宇宙の帝王フリーザ様ですよ！
勝手に悪役にしないで下さい」

宇宙の帝王の時点で悪役だろ・・・
それにしても宇宙の帝王か・・・何てスケールだ

「宇宙の帝王のあんたに頼みがあるんだ！
実は今撮ってるアルトゥール・・・悪役がしょぼくてさっきリストラしたんだ
・・・だが後を引き継ぐ悪役が見つからなくてな・・・それをあんたにやって欲しいんだ
いや！あんたにしかできないよ！」

大塚はひざまずいてまでフリーザ様に頼み込む
彼のアルトゥールへの情熱が伝わってくる

「嫌ですね・・・特撮の悪役何て
ぐわあああああ！とか叫びながら爆発しなきゃいけない
謂わば使い捨ての綿棒のような物じゃないですか・・・」

「いや！あんたはラスボスだから簡単に爆発しない！
それに出演料も払うし・・・アルトゥールが成功すればあんただっ

て儲かるぞ」

結局は金である
大人の話になってきたので博士が止めに入った

「おい大塚君！子供達の前でそんな話・・・」

「博士さん！」

その博士をフリーザ様が制止した

「・・・世の中金ですよね！分かりましたお受けしましょう」

こうしてフリーザ様のアルトゥール出演が決定した
宇宙の帝王が金で動くって・・・
ちょっと地球に順応しすぎなんじゃないかしら？
哀は一人疑問に思った

フリーザ様が出演し始めてから
エネルギー波などのＣＧでは表現できないリアルな迫力映像により
仮面戦士アルトゥールは子供達を中心に大ブームになった
評判は口コミに広がって行き一ヵ月後には視聴率２２パーセントを記録
仮面ヤイバーと肩を並べるまでになった
またアルトゥール役のライアンのイケメンも手伝い
女性ファンも拡大
サイン会を開けば子供連れの奥様から女子高生までもが詰かけた

「博士・・・なかなかシャレた服着てるじゃねぇか」

「うむ・・・ちょっと値がはったが買ってしまったわい」

「羽振りが良いじゃねぇかよ」

追跡メガネの充電に来たコナンが博士と談笑している
フリーザ様が特撮俳優という仕事を得たため
博士達は金銭的に潤っていたのだ

「灰原も機嫌が良いな」

「別に・・・」

明らかに顔がにやけている
予想はつく・・・ブランド物でも買ってもらったんだろう
そこへフリーザ様がやって来た

「ちょっと皆さん！ポアロに行きたいので手伝って下さい！」

手伝う？何をどう手伝うんだ？
疑問に捕らわれるコナンをよそに哀と博士は手伝いを始めた
二人ともフリーザ様のビジュアル系の変装の上から
さらに変装を施している・・・

「何やってんだお前ら？」

「何って・・・もうフリーザ様は有名人なのよ」

「おかげでうかつに表を歩けなくなってしまいました」

しかしコナンは気づいてしまったのだ

「なぁ・・・ビジュアル系の上から変装しなくても
また別の変装をすれば済むことじゃないのか？」

・・・・・・

続く

おまけ：仮面戦士アルトゥールのテーマ

平和に暮らす老若男女
闇から迫る肘と膝
僕らの平和と僕らの地球を
壊す奴らだルンピニー団
「助けてアルトゥール！」
ガードを上げるな
アップライトのムエタイスタイル
ガードを下げろ！必殺ローキックの舞！
パンチが脅威の
一撃必殺ボクサースタイル
狙うは足だ！必殺ローキックの舞！
ローでも蹴ってりゃ無難だね
判定３－０
仮面戦士アルトゥール

作詞　おっとり

作曲　誰かやって（無理難題）

58．名悪役（後書き）

さてさて
この間待望の海に行って来ました
何ていうか良いですね
調子に乗って泳ぎまくったせいで
日焼けがひりひりします
痛いです
でも海は好きです

59．コナンのスランプ？

昨日できた事が今日出来ない
こんな状態に陥ったことは無いだろうか
あんなに完璧に出来ていたのに
なんて醜態だ・・・
人々は嘆き・・・それをスランプと呼ぶ
イチローも打てなくなる
ミキティも跳べなくなる
スランプとは実に恐ろしい物である
でも本当に自分が出来なくなっただけなのだろうか？

第５９話　コナンのスランプ？

「ん？」

コナンは出しっぱなしにしていた携帯を見た
不在着信が一件・・・哀からだ
見たところほんの一分前にかかって来たようだ
コナンは携帯を手にするとリダイアルした

「もしもし？工藤君？」

「おう、何の用だよ？」

電話の向こうの哀はどことなく慌てている様子だった
用件を言おうとした哀の声が突然変わった

「あ！もしもし！コナンさん？フリーザ様ですよ～」

フリーザ様だ・・・
この声を聞くだけで頭が痛くなる
今日はどんなトラブルに巻き込む気だろう・・・

「いやいや・・・今近くのショッピングセンターなんですけどね
殺人事件起きちゃいまして・・・
これもコナンさんのせいだと思うので責任とって下さい」

何だそりゃ！？
あいつら・・・誰か死ねば俺のせいだと思ってやがる
まぁでも事件なら行っても良いかな・・・どうせ暇だし

「分かったよ・・・場所は？」

フリーザ様に教えてもらった場所へ行くと
警察が来ているようだった・・・
コナンが店の中に入ろうとすると高木刑事が出てきた

「あれ？」

しかしその高木刑事は被疑者と思われる男を連れていた
もう解決してしまったんだろうか？

「もう解決したの？」

コナンが高木刑事に聞く

「あ！コナン君・・・うん
さっきフリーザ様が推理ショーを開いてそれが見事に的中したんだ」

あのフリーザ様が・・・怪しいな
一体どんな手段を使ったんだ？
そもそも本当に合ってるのか？

「あら工藤君」

その時哀がコナンに話しかけてきた

「フリーザ様が解決したんだって？」

「そうよ・・・まぁ他愛ない事件だったから」

「俺にもどんな事件だったのか教えろよ
もちろんトリックとかは省いてな・・・推理したいから」

哀はコナンに事件が起きたときの様子や
現場の状況などを臨場感たっぷりに話して聞かせた
そしてコナンはそれと現場の状況を基に推理を始めた

・・・・・１０分後

どうしたんだ・・・おれ
フリーザ様がたった５分足らずで解決した事件だぞ？
１０分考えても全然解けねぇ・・・
くそ！頭が働かねぇ・・・

「分かったの？」

哀が顔を覗きこんでくる

「悪い・・・今日ちょっと体調悪いんだ・・・帰って良い？」

「呆れた・・・あなたそんな状態で殺人現場に来たの？」

哀は呆れながらコナンを見送った

コナンの顔は冷や汗でびっしょりだったので病人に見えたかもしれない

しかしコナンは焦っていた・・・なんで解けないんだ？

フリーザ様が5分で解いたのに・・・

まぐれだ・・・そうだ！きっとまぐれだ・・・

後半は自分に言い聞かせるように家に帰った

家に戻ると探偵事務所から馬鹿笑いが聞こえてきた

小五郎の物だ・・・えらく機嫌が良いようだ

「あ！コナン君おかえり～」

蘭がコナンを出迎える

「おじさん機嫌が良いね・・・どうしたの？」

「ぶわっはっは・・・事件を解決してたんまりお礼を貰ったのさ！

蘭！コナン！今日は何でも好きな物食っていいぞ！」

あの迷探偵が・・・たまにはそんな事もあるんだ・・・

「ねぇ？どんな事件だったの？」

コナンが聞くと小五郎は饒舌に語りだした

・・・・・・

「って事件の内容だったんだが・・・
どうだ!おめぇらに解けるか?無理だろうな!がっはっは」

いつも俺が解いてやってんだろ・・・
コナンは呆れながらも焦った
あれ~おかしいな・・・全然分からねぇ・・・
部屋に戻りコナンは一人考える
これはスラップって奴だ・・・と

「まぁ今月は8件も解決したし・・・たまには良いか
そうだ!服部の奴に自慢してやろう・・・なにせ8件だからな」

コナンは携帯を手に取り大阪の名探偵に電話をかけた
そしていつもの今月の解決件数に話題を持って行く

「何とおれは今月8件だぜ!!!どうだ!?」

「・・・・・・」

服部は何も言わない・・・おっと!自信がなくなっちゃったかな?

「・・・・・・く・・・くく」

ん?声をかみ殺すような声が聞こえる
泣いてるのか?悔しいのは分かるけど泣くなよ・・・

「なっはっはっはっはっは！そんなもんかい工藤！
どうやら俺は力つけすぎてしもたようやな！」

いきなり自信たっぷりに言い放つ服部
いつもなら負け惜しみを言い出すころなのに・・・なんかムカツク

「じゃあお前何件だったんだよ？」

「１６件や！」

１６件？俺の倍じゃねぇか！？
こいつ・・・嘘ついてやがるな？
いや・・・嘘なんてついてもすぐバレる・・・じゃあ本当に

「お前・・・どうしたんだよ？
本当にお前服部平次なのか？違うのか？」

「・・・違うな」

「何？」

「俺はスーパー服部平次や！」

「スーパー服部平次？なんだよそれ！？」

「いちいち説明するのも面倒くさいわ・・・自分で考えろや！
ほな工藤！また機会があったら東京行くわ！」

「おい！」

そこで電話は切れてしまった

「ちくしょう・・・何だよ・・・スーパー服部平次って」

今日は一体どうなってるんだ?
真実はただ一つ・・・推理は競争では無い
そんなこと分かっている・・・でも自分が一番だと思っていた
それなのに今日は皆その俺を上回っている

「ちくしょう・・・どいつもこいつも平成のホームズを出し抜きやがって」

コナンはイライラした気分を鎮めようと博士の家に行く事にした

博士の家に着くとなにやら中が騒がしかった
どうせフリーザ様が騒ぎを起こしているのだろう

「博士~!」

ドアを開けて博士を呼ぶと慌しく博士が出てきた

「し・・・新一!大変じゃ!フリーザ様が・・・」

やっぱりフリーザ様か・・・

「フリーザ様が奴らの本拠地を見つけ出したのじゃ」

「奴ら?ゴキブリか?」

「そんな訳ないじゃろ！君を小さくした組織の本拠地じゃ！」

何を言ってるのか分からない・・・
何ヶ月も奴らの居場所を探ってきた・・・でも分からなかった
それがフリーザ様なんかにあっさり見つけられてしまうとは・・・

部屋に入ると皆が作戦会議を開いていた
博士と哀とフリーザ様と服部・・・

「なんでお前がいるんだよ！さっき電話で・・・」

「あぁ・・・あれ？ここで受け取った」

「そうじゃねぇよ！服部にまで連絡が行ってんのに
なんで俺には一言もねぇんだよ！」

自分は奴らをずっと追ってきた
少なくとも自分には一番に知る権利があるはずなのに
そう主張したが皆は何処か暗い顔をした

「工藤・・・ちがうんや！」

「服部君・・・もう良いわ・・・はっきり言いましょう
工藤君・・・あなた最近回りの皆が良く事件を解決すると思わない？」

・・・今日がまさにそれである
そういえば前々から皆自分の力で解くこともあった

「皆の推理力はあなたが知らない間にどんどん上がっていたのよ
だけどあなたは今の自分に満足し進歩を忘れてしまった・・・」

「つまり・・・推理力向上のインフレについてこられなかったんですね」

何を言ってるんだこいつら?
つまり今のこいつらは俺より推理が出来るっていうのか?

「はっきり言うで工藤・・・今のお前の推理レベルは・・・元太と同じや」

馬鹿げた話だ
俺が元太と同等?
誰がどう見たら平成のホームズとうな重小僧が?
コナンは鼻で笑った

「冗談はその位にしとけよ・・・それじゃあ作戦を立て・・・」

作戦会議に加わろうとしたが足がぐらついた
そしてその足はコナンを支えきれずに崩れ落ちた

「悪いな工藤・・・足手まといなんや・・・」

真っ暗になっていく視界に
コナンが最後に見た物は皆の冷ややかな視線だった

・・・・・・

しばらくしてコナンは気がついた
あれからどれぐらいの時間がたったのだろう?
部屋はすっかり暗くなっている
哀達の姿はない・・・

「もう行っちまったのか?」

コナンは辺りを見回す・・・少し明るい
いや!隣の自分の家に明かりが灯っている
・・・まさか奴らが!?
コナンは走って自宅のドアを開けた

「おやコナンさん?お目覚めですか?」

そこでは博士や服部・・・哀にフリーザ様
小五郎、蘭、探偵団、警察、FBI
工藤新一やコナンと親しくしていたありとあらゆる人が集まり
何かのパーティかと思うほどの宴会を開いていた

「あなたが寝ている間に組織は壊滅したわ・・・
フリーザ様のデスボールで一発よ」

「何だって?・・・!それより解毒剤は?」

思い出したように迫るコナンに哀はカプセルを差し出した

「はい・・・データさえそろえば簡単だったわ
でも工藤君・・・飲んでも元の生活に戻れるとは・・・」

「死ぬかもしれないってんだろ?覚悟はしてるよ」

コナンはカプセルを持って自分の部屋に行ってしまった

「・・・死にはしないわ・・・でも」

続く

おまけ：ニュース・フリーザ

こんにちは
ナイトバロンシリーズでお馴染み
作家の工藤優作さんが官能小説デビューすることになりました
工藤優作さんは長年推理小説を手がけてきましたが
今回の転向について優作さんは
「この間妻が着替えている所に出くわし久しぶりに妻の体をみたら
雷に打たれたようなショックを受けた・・・これだ！と思った」と
いらないところも力たっぷりに語ってくれました
また今回の転向について各界からもコメントが届いています

上〇彩さん
「前に原作が工藤先生のドラマに出ていたので・・・ビックリしました
まぁそちらも一つの文化なので頑張って欲しいです」

完成してドラマ化されたら出たい？

「・・・」

村泉首相

「日本を代表する推理作家ですからね・・・
日本を代表する官能作家にもなってほしいですね
また人々に感動を与えてくれれば私としても誇らしいことです」

参拝については？

「個人の心の問題です」

各界からのコメントでした・・・
以上水無怜奈がお伝えしました

59．コナンのスランプ？（後書き）

組織があっさりやられました
まぁフリーザ様の実力からいったら当たり前ですが・・・
このあとどうなるのかはお楽しみ
ってことで次回新一現るです

60．戻れないあの日々

コナンは汗がにじむほど握り締めた手を開いた
そこにはカプセルが一つ・・・
それは彼が求めて止まなかった物
１２時がやって来ないシンデレラのためにある
忌まわしい呪いを解くための魔法の薬
飲めば元の日常が戻ってくる・・・
少なくとも彼はそう信じている
開けて後悔の玉手箱とは知らずに・・・

第６０話　戻れないあの日々

コナンはメガネを外し着ている物全てを脱いだ
それを丁寧にたたむと脇へ置いた

「・・・今までありがとな」

小さくなってしまった彼を助けてくれた発明品
小さくなってしまった彼を包んでくれた服
それらにお別れを言うとコナンは意を決した

「信じてるぜ・・・灰原！」

そしてカプセルを一気に飲み干した
体が熱くなる・・・毎回同じだが気が滅入る
骨格や内臓に至るまで急激に成長するのだから無理はないが

覚悟していてもやはりつらい
コナンは気を失った・・・

「成功したようね」

突然声がして目が覚めた
哀が横にいる
しばらくボーっとしていたがはっとして鏡を見た

「戻ってる！」

そこに映っていたのは間違いなく工藤新一だった
あまりの嬉しさに彼は子供の様に飛び跳ねた

「ねぇ・・・工藤くん・・・」

喜んびに躍動する新一に哀が呆れながら声をかけてきた

「嬉しいのは分かるけどせめて服を着てからにしてくれない？
レディの前で妙な物振り回さないでちょうだい」

忘れていたとばかりに大人しくなった新一
タンスを開けてそそくさと服を着る

「おっと！こうしちゃいられない！
確かリビングに蘭がいたよな？
随分待たせたからな・・・顔を見せてやるか」

新一はダッシュで部屋を飛び出して行った

その背中を見送る哀

「・・・果たして現実を受け入れられるかしら？
ズボンのチャック開いてることも気づいて無いし」

そのころ新一はリビングのドアの前で深呼吸していた
このドアを開ければ念願だった彼女に会える
ずっと待たせていた愛しの毛利蘭に会えるのだ
まぁ顔は毎日会わせていたが・・・

ガチャ・・・

新一はドアを開けた
そこにはあの綺麗な長い髪があった

「蘭！」

大声で彼女の名前を呼ぶ
本当に寂しい思いをさせていたから
きっと泣いてしまうかもしれないな・・
そんなことを思いながら

「あ！新一！久しぶり～」

ん？
なんだこの反応は？
何ヶ月も会ってなかったんだぞ？
蘭の奴・・・まるで風邪をひいて休んでいたクラスメイトが
２・３日ぶりに学校に来たみたいな反応しやがって

もっとこう・・・抱きついたりとか
胸の中で泣いたりとか・・・あるだろ!?

「新一もこっち来て食べなよ!おいしいよ」

しかし新一の期待とは裏腹に蘭は寂しかった様子すら見せない
新一に二言三言かけるとこともあろうにフリーザ様と雑談を始めた
照れてるのか?
照れる必要ないのに・・・ここは俺が素直になるか

「蘭・・・ちょっと来てくれ」

新一は半ば強引に蘭を連れ出し二人っきりの環境を作った
そう・・・ずっと言いたかった事を言うために

「ちょっと新一?どうしたの急に?」

この状況でまだとぼけるか?
「私新一がだ~い好き」とか言ってたくせに・・・

「おめぇに言っておきたいことがあってよ」

新一は意を決した
前々から・・・小さくなる前から言いたかった事を

「俺は本当は・・・お前の事が好きなんだ!」

「・・・・・・」

蘭は黙っている

まぁいきなり告白したらビビるよな・・・

「・・・ごめん・・・私は・・・フリーザ様が好き」

・・・・・・

フリーザ様が好き？

ビジュアル系が好みってことか？

いや・・・おれが告白しているのにフリーザ様が好きってことは

つまり告白の返事は・・・

「ＮＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯ！！！」

「ごめんね新一！でも私達ずっと友達だから！」

蘭は申し訳なさそうにリビングに戻って行った

どうなってるんだ？

俺は昔からこうなるのが恐かった・・・

だから蘭に「好き」の一言が言えずにいた

いつも言えずに口から出るのはホームズ話ばかり・・・

でもコナンになってから彼女の気持ちに気付き

いろんな事を経験して

やっとその二文字の言葉を言う決心がついたって言うのに

「・・・でもこれが現実なのよ」

「灰原！」

「前も言ったわよね・・・

あなたは推理力のインフレに遅れたって」

「あぁ・・・それが？」

「それがすべて・・・インフレについていけなかった者は
いつしか全てを奪われるのよ・・・ほら！ヤムチャだって」

ヤムチャ・・・ドラゴンボールキャラの一人・・・
最初は狼牙風風拳の使い手としてさっそうと登場
ブルマの恋人役だった・・・
でも話が進むにつれ敵や味方との実力差は拡がり
遂には恋人をベジータに取られ
最後はただの脇役として冴えない余生を過ごしたキャラ
・・・そうか俺はヤムチャか

「くそ！俺はもう脇役なのか？」

「そうね・・・多分名探偵コナンＧＴになったら
出番すらもらえないんじゃないかしら？」

「俺の名前がタイトルなのにか？」

「きっとフリーザ様と蘭さんの子供がコナンって名前なのよ」

悪夢だ・・・
今日はすごく悪夢だ・・・
一番だと思っていた推理で皆に出し抜かれ
一番大切な人はフリーザ様に奪われた
そして灰原にヤムチャと言われた・・・
全てが悪夢だ・・・

誰でも良い！俺を助けてくれ！
優しく慰めて・・・温かく包んでくれ・・・

「灰原・・・」

涙の溜まった目で哀を見る

「・・・何期待してるの？」

しかし哀から帰ってきたのは冷ややかな視線だった

「『蘭がダメなら灰原だ』
そんなファンフィクション小説みたいな展開になると思う？」

「ならないのか？」

「悪いけど私・・・顔がキアヌ・リーブスで
体がアーノルド・シュワルツェネッガーみたいにマッチョで
それでいてエメリヤーエンコ・ヒョードル並の強さの男が好みなの
あなたみたいなＹＡ・ＳＡ・Ｏ・ＴＯ・ＫＯ眼中に無いのよ」

そう冷たく言い放つと
助けを求めるように伸びてくる新一の腕を振り払い
哀は新一に背を向けて言ってしまった
新一は哀の小さな背中をただ呆然としながら見つめた

「そんな男いるわけねぇだろバーカ」

「あら・・・解毒剤に下剤混ぜておいて正解だったわ」

どうりで腹が痛いわけだ・・・
新一は失意の中トイレにこもって泣いた
リビングからは蘭や灰原・・・そしてフリーザ様の楽しそうな声が
聞こえる
情けなくなって部屋に帰ろうと思ったが
トイレットペーパーが無かったため
結局皆が帰るまでトイレで泣き明かした

次の朝・・・
新一はかつて味わった事の無い喪失感の中で目を覚ました

「私フリーザ様が好きなの」

うるさい

「顔がキアヌ・リーブスで」

やめろよ

「体がアーノルド・シュワルツェネッガーみたいに」

黙れよ

「エメリヤーエンコ・ヒョードル並の」

「そんなのヒョードルぐらいしかいねぇよ！」

新一は必死で昨日聞いた言葉の一つ一つをかき消そうとした

「あぁ！くそ！」

朝食も食べずに新一はしばらく開けていなかった郵便受けを覗く
彼宛のファンレターが山のように残されている・・・

「ヤムチャだってモテるんだ」

もうやけになっていた
新一は自分がまだ待ち望まれていると信じたくて
ファンレターの送り主を一人一人尋ねた
だが返って来る反応は冷ややかな物だった

「なんですか？いきなり？」

「もっとクールな人だと思ってたのに」

「何だよこの必死なチェリー君」

誰か・・・

「いい加減にして下さい！」

「警察呼びますよ？」

誰でも良いから・・・

「推理オタク」

助けて・・・

「キモイ」

もう・・・分からない・・・

・・・・・

「コナン君？」

目の前に蘭の顔があった

俺を心配そうに覗きこんで来る

フリーザ様は良いのかよ？・・・俺なんかにかまうな

「恐い夢でも見たの?汗びっしょりだよ?
それよりコナン君・・・夕飯何が食べたい?」

ん?
コナン君?
慌てて鏡を覗きこむ・・・どう見ても小学生が映っている

「なんだ・・・夢か」

「寝ぼけてるの?もう・・・コナン君たら」

でも何だか安心した・・・そうだよな・・・夢だよな
それにしてもいつから寝ていたのだろう?
時間を確認しようと携帯を見た
不在着信が一件・・・哀からだ
見たところほんの一分前にかかって来たようだ
コナンは携帯を手にするとリダイアルした

「もしもし?工藤君?」

「おう、何の用だよ?」

電話の向こうの哀はどことなく慌てている様子だった
用件を言おうとした哀の声が突然変わった

「あ!もしもし!コナンさん?フリーザ様ですよ~」

フリーザ様だ・・・
いや・・・この展開はさっきの夢の!

「いやいや・・・今近くのショッピングセンターなんですけどね
殺人事件起きちゃいまして・・・
これもコナンさんのせいだと思うので責任とって下さい」

正夢だったんだ・・・
助けて・・・誰か・・・

コナンは頭が真っ白になり・・・電話を切った

「もしもし?コナンさん?・・・切れちゃいました」

「本当はただ荷物持ちさせようとしてただけってバレたんじゃない?」

続く

おまけ:こぼれ話

「もしもし?桜塚さん?」

「なんだフリーザ様か・・・」

「いまショッピングセンターなんですけど
ちょっとおいしい儲け話があるんですよ」

「てめぇ!また荷物持ちさせる気だろ!
その手はもう食わねぇぞ!」

ぶち・・・ツーツー

「ち・・・桜塚さんもダメですね」

「じゃあ次ダイガクセイで行きましょう」

買い物をする時は荷物の運搬手段を考えましょう

60．戻れないあの日々（後書き）

夢落ちです・・・ベタです
安田大サーカスのネタぐらベタベッタです＾＾；
いくらなんでも組織デスボール一発って・・・
そんな盛り上がらないことしませんよ
ってか今回コナンが主人公みたいですね
次からまたフリーザ様が主人公で

61．怪盗にあやかろう

怪盗
それはただの泥棒とは違う
罪で言えば窃盗でくくられるが
彼らは一様に独自の美意識やこだわりを持ち
それに基づいて行動する
いわば違法芸術家と言ったところだろう
日本にも多くの怪盗が存在する
石川五右衛門、鼠小僧次郎吉、キャッツアイ、ルパン三世
そして・・・

第６１話　怪盗にあやかろう

「あ～あ・・・また盗られましたよ」

「日本警察はふぬけね・・・」

フリーザ様と哀はテレビを見ていた
テレビ欄には「緊急特番！怪盗キッド生中継！」と書かれている
テレビ画面ではキッドが盗み出したビッグジュエルを誇らしげに掲げていた

「いいわね・・・宝石」

キラキラ光る宝石・・・
見ている方の目までキラキラしてくる

「ハイバラさんも宝石に興味がおありで?」

「あら・・・私も女の子なのよ」

二人が下らない宝石乙女話をしている間に
画面の中のキッドは自らのショーを締めくくっていた
華麗に消え去った彼に観衆は盛大な拍手と栄誉を送り
警察は頭を抱え必死に無駄な捜査網を張りめぐらせる

「うらやましいですね・・・」

フリーザ様から溜息が漏れる

「やってることはただの泥棒・・・
なのに皆からちやほやされて宝石まで頂けちゃうなんて!」

「まぁ・・・そうよね・・・」

祭終了ムード漂うテレビ画面を見ながら
フリーザ様は口から愚痴をこぼし始めた

「こっちは宇宙の帝王なのに・・・
二人の冴えない下僕と毎日食卓を共にする日々・・・
片や向こうはドブネズミの如きこそ泥の分際で
毎夜盗んだ宝石を餌に集めた金と美女で酒池肉林の宴!」

「そんなことしてるのかしら?」

「してます!この私がそう言ってるんですからしてます!」

顔を知られたらまずい怪盗がそんな派手なことするか？
哀は突っ込もうかと思ったが面倒くさかったのでやめた

「どうです！？ハイバラさん！同じ人生生きるなら
怪盗やってた方が百倍楽しいと思いませんか？」

「でも皆が怪盗だったら世の中こまるでしょ？」

「私は宇宙の帝王だから特別なんです！
一般ピープルは汗して働いていわしでも食べてれば良いんです！
分かったらさっさとキッドを探して怪盗のコツを聞いてきなさ～い
！」

無理に決まってんだろ・・・
哀は仕方なくコナンに泣きつく事にした

「怪盗キッドを見つけろ？無茶言うなよ」

そんなことは分かっている
だが他にキッドを見つけられそうな人物を哀は知らない

「口ほどにもないわね・・・平成のホームズが笑わせるわ」

「あのな・・・あいつの正体すら分かってないんだぞ？
そりゃあそのうち正体を暴くつもりだけど・・・今は無理だ」

「とりあえず・・・フリーザ様の命令なのよ！
あなたも部下なんだから一緒に探してもらうわよ」

こうして哀とコナンのキッド捜索は始まったが
一時間後・・・二人はマックでだれていた
普段は根気良く捜査するコナンであったが手がかり全くなしで捜査しろと言われても
そんなもの砂漠で落としたコンタクトを見つけろと言われるのと一緒だった

「サンタさんに会いたいって子供にせがまれるお母さんの気分ね」

「やっぱ無理だよ・・・警察がいくら頑張っても見つからないんだぜ？」

二人は帰ってフリーザ様に「無理」と報告する事にした

「で・・・のこのこ帰ってきた訳ですか」

帰宅した哀に開口一番「無理」と言われフリーザ様はお怒りである

「良いですかお二人さん？本来ならこのフリーザ様の与えた仕事をこなせないと
ザーボンさんとドドリアさんに始末してもらうはずなんですよ？
生憎ザーボンさんもドドリアさんもいませんし・・・私も手を汚したくない
命だけは助けてあげますがいい度胸してますよ」

「だったら自分で探せば良いじゃない」

無理矢理探させておいて見つからないとこの言い草

マンガの悪役に良くいるが実際にやられてみるととことんうざったいものである

「ふん・・・私がなぜあなた達を許したと思うのですか？」

しかしフリーザ様は余裕の笑み
先ほどの怒りもどこへやらである

「実は怪盗キッドとの交信手段を見つけたんですよ・・・」

「なんだって？」

怪盗キッド・・・世界中の警察、名探偵達が追い求めたが捕まえることはおろかその正体すら暴く事の出来ない人物
そのキッドがフリーザ様ごときに見つけられる交信手段を持つのだろうか？

「これですよこれ！」

フリーザ様はパソコンの画面を叩いた
『キッド様を愛でる会ホームページ・・・キッド様へのお手紙コーナー』
そう画面に表示されている

「ここにメールを出せばキッドと交信が取れますよ」

「いや・・・それって・・・」

「早速メールを出して見ましょう」

もはや聞く耳持たず
コナンは止めようとしたが哀はそれを制止した
さながらサンタさんに手紙を出す子供を見守る親の気分である

キッド様へ・・・
毎回テレビでご活躍を拝見しております
先日も悪徳企業社長の所有するビッグジュエルを颯爽と盗み出したシーン
とても感動いたしました・・・（＾Ｏ＾）
ところで突然ですが怪盗になるにはどうすれば良いんですか？
私も世界中の宝石を盗み出してウハウハ酒池肉林をやってみたいです
北斗の拳風に言うと「このウサもあやかりたいものですな」です
教えて下さい（＞＿＜）

フリーザ様より

「ふぅ・・・これで良しと」

フリーザ様はメールを送信した

三日後・・・

「ハイバラさ～ん！ハイバラさ～ん！」

学校から帰って一息ついている哀の耳にフリーザ様の呼ぶ声が聞こえる
鬱陶しそうにファッション誌を置くとフリーザ様の座るパソコンの所へ行った

「何よ？騒々しいわね」

「遂にキッドさんからメールが帰ってきたのですよ」

そう言えばメール出したんだっけ？
どうせサンタさんへの手紙と一緒で誰かが代わりに書いてるのだろうが
正直どんな返事なのか興味はある

「さっさと中身を見ましょうよ」

「ちょっと待って下さいよ」

哀は急かしてみるがフリーザ様はもじもじしている
この男はこの期に及んで何をもったいぶっているのだろう？

「いやいや・・・実はこの三日間・・・私なりに怪盗を研究したんですよ」

「ふ～ん・・・それで？」

早くメールを見れば良いのに・・・哀はイライラしてきた
哀が今興味があるのはメールの中身とファッション誌の続きだ

「最近の怪盗はマジックが出来るんです！なので私もマジックを習得しました」

そう言うとフリーザ様は手を握り締め耳に付けた・・・
そして開いた

「でっかくなっちゃった！」

フリーザ様の耳が・・・でっかくなっちゃった
哀は呆れながらその手品を見ていた

「で・・・それで何を盗むの？」

「あなたの心です」

・・・・・・

「メールを開けるわよ」

哀は無理矢理メールを開けようとしたが嫌がるフリーザ様に阻まれた

「全く・・・上司のギャグも笑えないなんて・・・
あなたがマスオさんなら海山商事で生きていけないでしょうね」

「アナゴさんより出世する気はないわ」

哀はまた無理矢理メールを開けようとしたが再びフリーザ様に阻まれた

「自分のタイミング！自分のタイミングで！」

そう言うとフリーザ様はマウスを握り締め精神を統一した
人差し指を上下させ自分のタイミングを伺っている
緊張しているのか全身から変な汗をかいている

「早く開けなさいよ」

「分かってますよ！開けます！開けますって！」

再度無理矢理メールを開けようと迫ってきた哀を退け
フリーザ様はやっとメールを開ける決心をした
これこそ三日間待ち望んだメール
ウハウハ酒池肉林というエデンへの一本道
いまこそ開け！ヘブンズドアー！

カチ・・・

そしてメールは開かれた

フリーザ様さんへ・・・
いつも応援ありがとう！
でも自分の欲望のために人の物を盗むのはよくないよ
北斗の拳風に言うと「うぬら下衆には分からぬ！」です
一般ピープルは汗して働いていわしでも食べようね
怪盗キッド

・・・・・・

「ぶっ・・・あっはっはっはっはっはっは！」

多分メールを返してくれたキッドになりきっている人は常識人なのだろう
当然の解答と言ってしまえばそれまでだが
あまりにもフリーザ様の期待と違っていたので哀は大爆笑である
フリーザ様はと言えば呆然としながら何度もメールを読み返し
八回目でようやく意味を理解したのか
腹を抱えて笑い転げる哀を尻目に怒りのボルテージをＭＡＸまで高

めていた

「はぁあああああああああ！」

怒りをぶちまけるようにパソコンを木っ端微塵に吹き飛ばすと
怒りながらリビングを後にした

「怪盗キッドめ・・・次に出現した場所がお前の墓場だ！」

キッドが返事をくれたわけではないのだが
キッドは知らないところでとんでもない恨みを買ってしまったようである

サンタのふりをして子供に返事を返す際は注意して欲しい
よかれと思ってやった事でも子供に憎しみをプレゼントすることになる

続く

おまけ：こぼれ話

「ただいま～ってうわあああ！！！」

帰ってきた博士の前に無残にも砕け散ったパソコンが現れた

「あらお帰りなさい・・・新しいパソコン注文しといたから」

「じゃ・・・じゃあ昨日徹夜で仕上げた新作ゲームは・・・？」

「お釈迦ね・・・諦めなさい」

「ゲームが・・・徹夜が・・・子供達の笑顔が・・・」

「またダメだしされるのが落ちよ・・・手間が省けて良かったじゃない」

「ＮＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯ！！！」

パソコンは精密機器です・・・
乱暴な扱いは止めましょう

６１．怪盗にあやかろう（後書き）

なんだか沈んだ気分の中で書きました
沈んだ気分が出ちゃってたらすみません
なるべく出さないように書きました
いや・・・むしろ自分を奮い立たせるように書いたかもしれません
まぁそんなおっとりは置いといて６１話です

62．魅惑のとんがりヘアー

毛利蘭
家庭的でスポーツ万能でナイスバディ
みんなの明るいヒロイン様である
しかし彼女には一つ謎がある
・・・・・・
あのとんがりは何？
である・・・
彼女のヘアースタイルはスネオ並の謎である

第６２話　魅惑のとんがりヘアー

午前のポアロ・・・
人も疎らで・・・と言うよりいつものメンバーだけがそこにいた
フリーザ様、ダイガクセイ、梓である
三人でとりとめのない話をしている

カランカラン・・・

「いらっしゃいませ～」

来店して来たのは蘭と園子・・・仲良し二人組みである

「今日はどうしたんですか？」

フリーザ様達と話していた梓は話を止めてお絞りを持って蘭の所へ

行った

「久しぶりに二人で何処か遊びに行こうと思って」

そう答える蘭・・・
アイスコーヒーを二つ注文するとどこに遊びに行くか園子と話を始めた
梓はアイスコーヒーを運ぶとフリーザ様達の所へ戻って行った

「それにしても・・・」

タモさんが休みを取れない事について討論していたところで
唐突にフリーザ様が話をさえぎった

「蘭さんのあのとんがりヘアー・・・どうなってるんでしょう?」

「そう言えば・・・３６０度どこから見てもとんがりが見えますね」

実際蘭は明るく健康的でルックス抜群・・・近所でも人気者だ
しかし皆が心の片隅で気になっているのはとんがりだ
小五郎に対してある女性は言った・・・
「彼女は太陽のようだ」と・・・
小五郎は明るく元気で皆に優しいからだと思ったが女性の真意は違った
どこから見てもとんがりが見える・・・
どこから見ても同じように見える太陽のようだ・・・と思ったのだ
もちろん明るく優しいが７０％くらいは占めていたが

「明るく優しくナイスバディ・・・そんな印象に誤魔化されて
私達は大切な物を見ようとしてこなかった・・・そうじゃないです

か？」

「言われて見れば・・・そうかも・・・」

「なんて嘆かわしい！政府のあやふや路線をあれだけ非難して置きながら
自分達は触らぬ神に祟りなし・・・見てみぬフリの事なかれ・・・
このままで良いんですか？あなた達は本当に正しいと胸が張れるのですか？」

フリーザ様が熱弁を振るう
幸い蘭や園子は話に夢中で聞いていなかったようだ・・・

「確かに・・・俺・・・確かめたい自分に嘘ついてた」

「私も・・・こんなのやっぱり間違ってる！私胸を張りたいです！
私は正しかったんだ！って胸を張って生きたいです」

梓とダイガクセイが目を輝かせながら賛同した

「じゃ・・・とんがり狩りますよー」

・・・・・・
狩るの？
せっかく目を輝かせて賛同した二人だったが
フリーザ様との温度差を感じてしまった

「当たり前でしょう！？何ですか？まさか『そのとんがり何？』って聞くつもりだったんですか？」

「違うのか？」

「あんな不思議な物の秘密をそう易々吐くと思いますか？」

言われて見れば・・・確かに
そもそもどの角度から見てもとんがりは見えるのだ
実際近所でも「あれは幻覚なのでは？」と言う意見も出たが
物理学者に遠くから観測してもらったところ「質量がある」
との事だったので物質であることは確かである・・・

「つまりあれは何らかの不思議物体なのです
それを身に着けていると言うことはアレは蘭さんにとって重要な物なのです
そんな物の秘密は彼女の口から聞くより直接分析した方が確実です」

「なるほど・・・よし！やるか！
ちょうどレポートのネタが無かった所だしな」

ダイガクセイが常にレポートをやってることもミステリーだが
そこは敢えて触れずにフリーザ様達は行動を開始した

「フリーザ様・・・あそこ！蘭さんを発見しました！」

蘭達を尾行したとん狩り隊一行は途中何度か見失いながらも
真実への熱い執念から何とか追跡を続けて来た

「梓さん・・・お店大丈夫だったんですか？」

「えぇ・・・マスターも『歴史の証人になって来い！』って言って

くれました」

「どこか抜けてるね・・・マスター」

そうこうしているうちに蘭と園子はショッピングを始めていた
二人とも楽しそうに服などを見て周っている
そしてそれを双眼鏡で眺める三人・・・
蘭のとんがり以上に怪しいとん狩り隊に周囲は警察に通報するか否か考えた

「あれ？一緒にいた茶髪は？」

フリーザ様が気付いた
蘭も園子がいないことに気付いたのかキョロキョロしている

「はぐれた様ですね・・・蘭さん方向音痴だから大変ですね」

「あ！茶髪発見！茶髪発見！」

二人はかなり離れてしまっている
これは蘭の迷子決定かと思われたそのときだった

「あれ？園子ちゃん・・・蘭さんに気付いたようですよ？」

確かに園子は一直線に蘭の方へ向っていく
あれだけ離れていたのにほんの数秒で見つけてしまうとは

「そうか！そう言うことだったのか！」

突然ダイガクセイが大声を出した

「なんですかダイガクセイ！大声出して」

「ビックリしたじゃないですか！」

しかし二人の非難の声を聞きながらもダイガクセイの目は光っていた
その眼光はフリーザ様と梓を黙らせるのになんら不自由しなかった

「分かってしまったんだよ・・・あのとんがりが何か・・・」

「うそ！？」

本当・・・と答えたダイガクセイの顔には自信があふれていた

「方向音痴な蘭さん・・・しかしそれによってひどい目には会っていない
なぜか？今回のように誰かがサクッと見つけてくれるからですよ」

「それがとんがりと何の関係が？」

「分からないか？どこからでも同じように見えるとんがり・・・
どの角度からでも・・・では距離はどうだろう？
どの距離からも同じように見えているとしたら？」

「ま・・・まさか・・・」

「そう！あれは蘭さんの存在を周囲に知らせる物！
方向音痴な蘭さんが生き残るために発達した特有の器官だったんだよ！」

「「な・・・なんだってぇ～！！！」」

盛り上がる三人・・・周囲は一斉に１１０をプッシュし始めた・・・

「じゃ・・・狩りますか」

とりあえずとんがりの役割は分かった・・・
しかしダイガクセイがレポートを仕上げるにはそれだけではダメである
ちゃんと構造や仕組みを調べて証明しなくてはいけない

「フリーザ様・・・連れてきましたよ」

「あ！梓さん・・・ご苦労さま」

梓は一人の男を連れて着ていた
妙に殺気立った眼をしたあしたのジョーの力石みたいな男である

「誰？」

ダイガクセイの口から当然の疑問がこぼれる

「蘭さんは空手の達人・・・しかも我々はその彼女の最重要器官を狩るのです
梓さんやダイガクセイの戦闘力では無理でしょう・・・
かと言って私がやれば器官が壊れてしまう可能性が高い・・・
で・・・プロを呼んだんですよ」

「プロ？何の？」

ダイガクセイの頭にはまだ?が浮かんでいる
フリーザ様は面倒くさそうに頭をかいた
そんなフリーザ様を見て梓が代わりに説明を始めた

「あのね彼はポアロに良く来てくれるシザーマン吉岡さん
神を切ることに関しては世界一の腕前よ・・・スポーツ刈なら5秒
で出来るわ」

ポアロにはまともな客がいないのか?
ダイガクセイの頭にふと疑問が浮かんだが
自分も変人になってしまうのでその考えをもみ消した

「大丈夫なんですか?」

「二ヶ月の間トレーニングを積んで調整して来た
コンディションは抜群だ・・・あんなとんがりコンマ1秒で狩ってやる」

ビッグマウスに期待を感じさせつつ
シザーマン吉岡は植え木用の大型のはさみを持って蘭の背後に回った

「頼みますよ・・・」

固唾を飲んで見守る三人・・・
緊張のまま時はながれ・・・そして

「今だ!」

吉岡は思いっきりはさみの柄を振り絞った

「浅い・・・！」

しかしとんがりを切除するには至らなかった
蘭の後回し蹴りが吉岡のレバーは捉えていたのである

「何すんのよ！この痴漢！」

蘭は間合いを取り第二撃を入れようとしている
もうだめか・・・三人が諦めかけたそのときだった

「やるな・・・二の太刀いらずと言われたおれが・・・何て様だ
だが・・・おれはシザーマン吉岡・・・床屋の帝王！
引かぬ！媚びぬ！省みぬ！とんがりを狩るまで逃走は無いのだ！」

・・・・・・

次の瞬間蘭は頭を押さえてその場にしゃがみこんだ
一体何が起こったのか？フリーザ様たちは吉岡に駆け寄った

「ほらよ・・・とんがりだ」

吉岡からとんがりが手渡される
フリーザ様がそれを受け取ると吉岡は血を吐いてその場に倒れた

「カウンターだ・・・」

あの瞬間・・・吉岡は蘭の攻撃をあえてかわさず
その攻撃の瞬間に生じた隙をついて蘭のとんがりを完全に狩ったのである

「見事でしたよ吉岡さん・・・いい仕事です！梓さんご褒美をあげなさい」

「はい・・・あ！もしもし？救急車一台お願いします」

かくして蘭のとんがりは切除されたが・・・

「園子・・・変なことになってない？」

ずっとしゃがんでいた蘭が隣の親友に恐る恐る尋ねる

園子はゆっくり蘭の手を退かす・・・すると蘭の髪が露になった

「・・・変になってるの？・・・ねぇ園子！」

蘭は必死に園子に尋ねる

「いや・・・変じゃないけど・・・」

「けど？」

「・・・・・・・・・・・・・並・・・かな」

蘭は「はぁ？」と言った感じの顔を作る

並？自分は牛丼や豚丼になった覚えは無い

「うわ・・・本当に蘭さんですか？パチモンみたいですね」

「ひどい・・・韓国とかで売ってるTシャツにありそう」

「そ・・・そんなぁ・・・」

その後・・・蘭は家に帰ったが小五郎に依頼人と勘違いされ
最初事務所に通されたと言う
さらにコナンですら「お姉ちゃんだれ？」が第一声だったそうだ
とんがりを狩ったフリーザ様達だったが
そのごとんがりを解析・・・しかしどう見てもただの髪で
ダイガクセイのレポートは完成することは無かった
切られ損の蘭はしばらくとんがり無しの方向で行くことになった

続く

おまけ：今日のスカウター

ピピピ・・・怪盗ＫＩＤ　戦闘力９０

フリーザ様から一言

体力もそこそこですが彼の場合奇術がすごいですね
どんどん飛び出す謎の奇術で警察の皆さんをかく乱します
その奇術で自分より戦闘力の高い人間にも打ち勝つことが出来るわけです
私の部下で言うとグルドに近いですね・・・
え？あんなのとキッド様を一緒にするな？
この間のメールのお返しですよ・・・ふん！

62．魅惑のとんがりヘアー（後書き）

どうもおっとりです
私、実家に帰らせていただいておりました
ってことでこんなに長い間更新もせずダラダラやっていたのです
しかしこうして帰ってきました
フリーザ様を書きに帰ってきました！
クロコップ・イズ・バック！（ミルコの試合後マイクより）
ってことでこれからもバリバリやって行きます（嘘臭）

63．哀と恐怖のたらこ祭

たらこ　たらこ　たっぷりたらこ
たらこ　たらこ　たっぷりたらこがやって来る
たらこ　たらこ　つぶつぶたらこ
たらこ　たらこ　つぶつぶたらこがやって来る
たらこたっぷり　たっぷりたらこ
たらこたっぷり　たっぷりたらこ
キューピーＣＭソングより抜粋

第６３話　哀と恐怖のたらこ祭

午後の米花町
学校の終わったコナンは珍しく一人で下校していた
探偵団はそれぞれ用があるとかで皆そそくさと帰ってしまったからである

「あ～あ・・・暇だな・・・最近事件も無いし」

書店に立ち寄ってみる
小説コーナーを見るも見たような本がずらっと並ぶばかり
新しい小説が発売された形跡も無い・・・
コナンは仕方なく店を出て歩き始めた

「あ～あ・・・だれか死なねぇかな・・・」

あまりの暇さに飛び出た不謹慎発言

本人は無意識だったが周りにはばっちり聞こえていたので
街行く人は皆驚いたようにコナンを見る

「まったく不謹慎ですね・・・探偵ってのは」

聞き覚えのある声にコナンは振り返った
うわ・・・フリーザ様だ

「何か用か?・・・ひょっとして事件か!?」

眼を輝かせたコナンだったがフリーザ様は頭を横に振った

「あなた不謹慎過ぎますよ!まったく・・・そのくせ犯人には
『人を殺す理由なんて分からねぇよ』とか言っちゃって・・・
そんなことよりハイバラさんは一緒じゃないんですか?」

「灰原なら用事があるとか言って先に帰ったぜ・・・」

それを聞いたフリーザ様の表情がみるみる変わる

「何!?今日は買い物に付き合って欲しいから早く帰って来いと言
ったのに・・・
最近のハイバラさんはちょっと態度悪いですね・・・ちょっとお仕
置きして上げましょう」

あ~あ・・・灰原のやつお気の毒に・・・
コナンはそんな事を思いながらさっさと立ち去ろうとした
が・・・後からランドセルを掴まれてしまった

「ってことでコナンさん・・・

ハイバラさん不在なので部下2号として付き合ってもらいますよ」

嫌だなぁ・・・・コナンは露骨に嫌な顔をして見せる
フリーザ様は気に障ったのか眉間にしわを寄せながら言った

「良いじゃないですか・・・どうせ暇なんでしょう?
それにほら!私と一緒に来れば事件が起きるかもしれませんよ」

「・・・それもそうだな」

不謹慎発言に対し眉をひそめる周囲をよそに
フリーザ様とコナンは買い物に出かけた・・・

PM11:00
フリーザ様はやっと帰宅した
案の定事件に巻き込まれたのである・・・

「遅かったわね?何やってたの?」

哀が何事も無かったかのように顔を出す
その無愛想な口ぶりがフリーザ様の怒りを煽った

「あなたが約束をすっぽかすからコナンさんを連れて行ったら
事件に巻き込まれてしまったんですよ!」

「あらそう・・・ご愁傷様・・・
あ!ご飯無いから・・・適当にカップ麺でも食べて」

こいつ・・・最近部下である事を忘れてやがる・・・

ふっふっふ・・・良いですよハイバラさん・・・
このフリーザ様を怒らせたらどうなるか教えて上げますよ

こうして・・・フリーザ様のお仕置きが始まった

「さて・・・どうやってお仕置きしましょうかね・・・」

フリーザ様は哀に効果的なお仕置きを考えてみた
今までいろいろお仕置きして来たがどれも哀にはあまり効果が無かった気がする

「う～ん・・・日頃からもっと厳しくしておけば良かったですね」

後悔先に立たず・・・
注文もせずに悩んでいるフリーザ様にダイガクセイが声をかけた

「今日は何を悩んでるんだい？」

覗きこんで来るダイガクセイの顔を見返すフリーザ様
その時フリーザ様にある考えが浮かんだ・・・

「そう言えばありましたね・・・一つだけ効果的だったお仕置きが」

ふっふっふ・・・待っていなさいハイバラさん！

「フリーザ様・・・そっちの趣味に目覚めたのか？」

翌朝・・・

「おはよ・・・あら?朝食できてるの?」

「えぇ・・・私が作りました」

そう・・・とテーブルに着く哀
目の前には普通の朝食が並んでいる・・・毒ではなさそうだ
哀は深く考えず食べる事にした

「バターとってちょうだい」

「はいはい・・・」

フリーザ様は哀にバターを手渡しする
哀はさっさとバターを塗るとトーストを頬張った

ぷちぷち

「・・・何?」

「面白いでしょう?たらこバターです」

トーストの上は良く見るとピンクの粒々で埋まっていた
たらこバターと言うより7割たらこであった・・・

「まぁ良いわ・・・マヨネーズとって」

「はいはい」

哀はサラダにマヨネーズをかけると軽く混ぜて口に入れた

ぷちぷち

「まさか・・・」

「たらこマヨネーズです」

「・・・たらこにはまったの？」

不審な顔をする哀だったが微妙に美味しかったので黙って食べた

・・・ふふん・・・食べた食べた・・・

歯を磨いたようですが歯の隙間に入ったたらこはそう簡単には落とせない

学校へいって「哀ちゃん歯にたらこ付いてるよ」と指摘され赤っ恥

そしてドンドンたらこノイローゼに・・・ふふ

以前青のりで同じような事がありましたからね・・・

この作戦はハイバラさんには効果的なはず

フリーザ様は普段より長めに洗面所に入った哀を見ながらほくそ笑んだ

その後・・・フリーザ様は朝昼晩の食事におやつ

飲み物に至るまでたらこで埋め尽くした

そして一週間もすると哀はすっかりノイローゼになっていた

「おいフリーザ様・・・もうお仕置きはやめてやれよ」

この日哀は探偵団に半ば運ばれるように帰宅した

「あの様子・・・相当応えてますね・・・ふふ」

「ふふじゃねぇよ!今日学校で大変だったんだぞ!」

コナンによると国語の時間「たらこ君の冒険」という話を読んだそうだが
そのときに泡を吹いてぶっ倒れたそうだ

「なるほど・・・文章にまで反応する段階まで来ましたかこれはもう一押しですね・・・ふっふっふ」

まだやるのかよ・・・コナンは呆れてしまった

一ヵ月後

「きゃあああああああああ!!!」

教室に哀の大絶叫がこだました
小林は驚いてチョークを落とした

「どうしたの灰原さん?」

小林が見るとそこには頭を抱えて悶え苦しむ哀がいた

「たらこ・・・たらこが切れた・・・」

「はぁ?何言ってるの灰原さ」

「早くたらこを！たらこをちょうだい！！！」

麻薬中毒者みたいになってる！？
とりあえず暴れる哀を皆で取り押さえコナンの麻酔銃で眠らせると
救急車で米花中央病院へ運んだ・・・

病院に到着した探偵団が見たのは梓とダイガクセイだった

「どうしたの？」

コナンは梓に聞いてみた
梓はコナンがいることに驚きつつもありのままを語った

「フリーザ様が・・・『たらこが切れた』とか言って・・・」

そこまで言ったところで後から声がした

「あれ？コナン君じゃないか？」

高木刑事だった
その傍らには担架で運ばれる阿笠博士

「それがさ・・・前に事件でお世話になった時のお礼に伺ったら
『たらこが切れた』とか何とかいって倒れちゃって・・・」

どうやら哀にお仕置きしようとたらこだらけの生活をしていたら
三人は知らず知らずにたらこの魅力に取り憑かれこの有様と言うことのようだ

「フリーザ様・・・自分もはまっちゃ意味ねぇよ」

その後三人は仲良く格子の付いた病院に入院したそうな・・・

「のぉ・・・二人とも」

「何ですか博士さん？」

「わしって・・・出番無かったのにこんなひどいめにあっとるんじゃが」

「・・・とばっちりね」

「・・・悪いですね・・・いつも」

「いや・・・良いんじゃよ」

「・・・早く格子の外に出たいわね」

・・・・・・

続く

おまけ：こぼれ話

「良かったですね退院できて」

無事格子の外に出た三人はポアロに来ていた

「ひどいめに会ったわ」

「たらこもあぶないのぅ」

「部屋の家具までたらこにしましたからね」

カランカラン・・・

お客の来店である

「いらっしゃいませ～！ご注文はお決まりですか？」

「う～ん・・・昼飯時だから・・・たらこパスタ」

その時・・・フリーザ様達の中で何かが切れた

「殺せぇえええええ！！！」

「え！？何が！？」

こうしてポアロからまた一人普通の客が消えた

63．哀と恐怖のたらこ祭（後書き）

なんか完結したことになっててビックリです
完結してません＾＾；
蘭のとんがり狩っておしまいって・・・どんな話ですか！
ってことで終わってないのでよろしくお願いします

６４．円谷さんちの光彦君

仲良しこよし
そんな間柄もある日何の理由も無く壊れてしまう
そんなことも時にはあり得る
ケンカしたとかそう言う理由なしに
まるでコーヒーに入れた角砂糖が溶けていくように
静かに・・・友情がフェードアウトしていくこともある

第６４話　円谷さんちの光彦君

「光彦君！帰ろう！」

今日も元気な少年探偵団
学校が終わったのでいつものように皆で帰ろうと集まる

「ごめんなさい・・・寄るところがあるので」

しかし光彦はそれだけ言ってそそくさと帰ってしまった

「何だ？光彦の奴・・・最近いつもそればっかじゃんか」

「好きな女でも出来たんじゃねぇの？ほっといて帰ろうぜ」

最近の光彦はあまり探偵団と行動を共にしなくなった
休みの日に遊びに誘っても出て来ない
登下校の時も普段と違う道を使っているようだ

「ハイバラさん！」

帰宅した哀に騒々しく声をかける男が一人・・・
もはや名を上げるまでも無い

「フリーザ様・・・何？」

「トロピカルランド行きましょう」

フリーザ様はトロピカルランドに行きたいらしい
行くとこ行くとこ騒ぎを起こすフリーザ様・・・
最近はもううんざりだ
自分が騒ぎの中心になる分コナンより厄介である
しかし哀はトロピカルランドに行くことにした

「最近一人の誰かさんを連れ出すのにはちょうど良いかもね・・・」

次の日曜
探偵団と博士、そしてフリーザ様は光彦の家の前にいた
トロピカルランドに光彦を誘ったのだが「行けたら行く」
としか言わなかったので返事を聞きに来たのである

「あら・・・君達はみっちゃんの・・・」

出迎えたのは光彦の姉朝美であった

「お姉さんこんにちは！光彦君いる？」

「こんにちは！・・・みっちゃんなら朝出かけたけど？」

皆は顔を見合わせた

別にトロピカルランドに行かないならそれで良いのだが

何の断りも無いと言うのが光彦らしくない

「みっちゃん最近朝早く出かけるのよね・・・

帰りも遅いし・・・君達何も聞いてないの？」

「何も・・・」

一体何をしているのか・・・皆はだんだん光彦が心配になってきた

「大丈夫じゃねぇの？蛍の時の前科があるわけだし」

コナンはお気楽にそう言った・・・が

友達がコソコソしているのに気楽にしていられる訳が無い

皆は押し黙って考え込んでしまった

「まぁまぁ・・・みっちゃんのことは気にしないで行って来て！

みっちゃんはきっと羅漢仁王拳を習得するために修行をしてるのよ

羅漢仁王拳をマスターして強くなったみっちゃんをまた誘ってあげて」

「なんとか拳は習得しないと思うけど・・・」

そのとき黙っていたフリーザ様がブーブー言い始めた

「結局光彦さんは欠席なんでしょう？早く行きましょうよ

私はトロピカルランドを楽しみにしていたんですよ？

部下の欠席如きでこのフリーザ様の楽しみを奪う気ですか？」

デリカシーの無い発言に皆は非難の視線を送ったが
フリーザ様は軽くデスボールを作り始めていたので
皆光彦を諦めトロピカルランドへ行く事にした

それから一週間後のある日

「あら？円谷君のお姉さんね・・・」

街を歩いていたフリーザ様と哀は朝美に気がついた
駆け寄って声をかける

「あら・・・あなたは確か灰原さんね・・・それとそのお付きの人」

「誰がお付きの人ですか！消し去りますよ？」

怒るフリーザ様を制しながら哀は光彦の様子について聞いた

「相変わらず家を出るのが早くて帰って来るのが遅いって感じ
でも何ていうか・・・最近妙に渋くなったような気がするわ」

「渋くなった？」

「あぁ！それなら大丈夫・・・風通しの良い所で干せば甘くなりますよ」

「渋柿じゃないの・・・ちょっと黙っててくれる？」

朝美によると
光彦は最近顔に風格が付いてきた上趣味が渋くなったのだと言う
朝飲むコーヒーや整髪量に妙にこだわりを持つようになり
さらに服装がダンディになったのだそうだ

「確かに最近黒を基調とした落ち着いた服を着ているわね」

「それだけなら良いんだけど・・・」

朝美は口をつぐんでしまった
表情もどこか暗い

「何かあったの?」

「カビでも生えたんですか?」

「黙れ!・・・・・それで?何かあったの?」

朝美はしばらくもじもじしていた
言うべきか悩んでいるようだ・・・
だが決心が付いたのかその重い口を開いた

「みっちゃんが自分の郵貯の通帳をこっそり持ち出してたの
あとで見てみたらお金が引き出されてたわ・・・
きっと羅漢仁王拳を習得するために必要なんだろうけど・・・」

「確かに怪しいわね・・・ところでナンタラ仁王拳ってなに?」

「羅漢仁王拳・・・5千年前の古代インドに伝わる殺人拳よ
これがとてつもない威力を発揮する拳法でその極意は・・・」

とにかく・・・お金が絡む以上何か危ない匂いがするわね
こうなったら本人に聞いてみるしかなさそうね・・・
哀は光彦を問いただす事にした

「・・・・・でもって時の皇帝に禁じ手とされてしまったの
って・・・聞いてる？灰原さん？」

「何が？」

次の日・・・
学校が終わると哀はすぐに光彦の所へ行った

「円谷君？ちょっと良いかしら？話があるんだけど」

いつもの光彦なら「はは・・・は・・・灰原さん！？話ですか！？」
などとデレデレしながら反応しそうだが今日は違った

「なんだ・・・灰原さんですか・・・
デートの誘いならお断りですよ？僕の手には灰原さんは大きすぎる
今の僕には一人の静けさと渋めのコーヒーがちょうど良い」

何言ってんだこいつ？
哀は露骨にそう言いたげな顔をして見せたが
光彦は全く気にする様子も無く背中を向けて去ろうとした

「ちょっと待ちなさいよ・・・
最近のあなたの行動について聞きたい事があるのよ」

そういうと哀は昨日の朝美の話について光彦に問い詰めた
光彦は黙って聞いていたが静かに口を開いた

「ふっ・・・男には自分の世界がある・・・ってことさ」

「それ答えになってると本気で思ってるの？」

「分からないですか？例えるなら・・・そう
空を駆ける一筋の流れ星・・・かな？おっとそろそろ行かなきゃ」

「あ！ちょっと！？」

何が何だかさっぱり分からない・・・
今まで哀は探偵団・・・とりわけ光彦に対して弟のような感情を持っていた
しかし今日の光彦は哀のまったく知らない世界の住人に思えてならなかった

「安心しろ・・・」

不意に声をかけられて振り返るとそこにはコナンがいた

「あいつの靴に発信機を仕掛けておいた・・・つけるぞ」

「良い趣味してるわね・・・まったく」

しばらくして・・・
光彦に付けられた発信機の反応はある一点で止まった
どうやら光彦が足繁く通っている場所のようだ

哀とコナン・・・そして途中から合流した探偵団、朝美、フリーザ様は
その発信源に向って歩を進めた
そしてコナンの追跡メガネの上でその点がちょうど真ん中に来た

「ここだな・・・」

やって来たのは道場のようだった・・・看板が出ている

『ハードボイルド道場』

「はーどぼいるど道場!?」

「羅漢仁王拳道場・・・」

「・・・眼科行けよ」

どうやら光彦はこの道場に通っているらしい
それにしても胡散臭い・・・

「これは相当心配ね・・・はやく円谷君を助けましょう」

「お!ハイバラさん道場破りですか?さすが私の部下ですね」

「あのね・・・あなたを何のために連れてきたと思ってるの?
戦闘要員よ!相手が襲ってきたら私はとんずらよ・・・」

何はともあれ道場に突撃することにした哀達
しかしその先に世にもハードボイルドな試練が待っているとは
この時は誰も気付かなかった

続く

おまけ：今日のスカウター

ピピピ・・・シザーマン吉岡　戦闘力２２

フリーザ様から一言
戦闘力はさておきはさみ裁きがすばらしい！
まさにカリスマ床屋！美容師は絶対に名乗らないのがポリシー
米花町の床屋「バーバーバババーバーバババ」の店主は伊達じゃない

６４．円谷さんちの光彦君（後書き）

羅漢仁王拳・・・詳しくは北斗の拳で・・・
まぁ今回の話には全く関係して来ないので別に知らなくても大丈夫です
ずばり「知る必要の無いこと」ってやつです
ところでみっちゃんと聞くとＤｒ．スランプに出てきた歌を思い出します
みっちゃん道々う○○垂れて
紙が無いから手で拭いて
勿体無いから食べちゃった
お食事中の方を中心に失礼しました＾＾；

65．惚れ直してよ！

冷めた夫婦仲はどうにも出来ないのか？
娘がコソコソお膳立てしたり
周りが「おしどり夫婦」と囃し立てたりしても・・・
一度冷めたらもう戻れないのか？
しかしコンビニ店員は問う・・・
「温めますか？」
あとは夫婦に「熱めにお願いします」
と言う勇気だけが必要なのかも知れない

第６５話　惚れ直してよ！

道場に入るとそこには門下生達が集っていた
フリーザ様達はその一人一人を見回すと目的の人物を発見した。

「みっちゃん！」

「・・・姉さん」

朝美が光彦に駆け寄る・・・が
突然現れたナイスミドルな男にさえぎられてしまった

「何ですか？弟を返して下さい！」

「残念だがそれは出来ない・・・」

姉の訴えにも男は仁王立ちのまま動かない

「光彦の意思ではない以上・・・お前達に引き渡すわけにはいかんなそれが例え恋人や親兄弟の頼みでもだ・・・それがハードボイルド」

そう言うと男はタバコを吸い始めた
慣れないタバコの煙に咽る朝美

「みっちゃん！私と帰りましょう！
こんなタバコの煙道場にいたら直に肺がんになってしまうわよ」

「・・・・・・」

朝美の声を黙って聞く光彦
だが全く動こうとしない・・・

「みっちゃん！」

「俺はもうみっちゃんじゃない！ハードボイルドな男光彦だ！」

騙されてる・・・！！！
もはやそこにいたのは皆の知っている光彦ではなかった
あの優しく言葉遣いの丁寧で、たまに下心丸出しだった光彦の死体・・・
そこにいたのは生ける屍・・・
キャラの方向性を見失いハードボイルドに迷い着いたハードボイルド光彦だった

「みっちゃん・・・あぁ・・・修羅に落ちたのね・・・」

「いや・・・別に修羅とかじゃ・・・」

がっくりうなだれる朝美を慰めることは誰にも出来なかった

「うだうだ言ってないで帰りますよ！」

静寂を破ったのはフリーザ様だった

「あなた方がここで何をしようと何になろうと知った事ではありません！
ただ光彦さん？あなたは私の部下なんですよ！あなたに自由はありません！」

道場に戦慄が走る・・・
突然飛び出した傍若無人な自己中発言に
ハードボイルド達は殺気を露にして身構えた
そんな中今度は哀が口を挟んできた

「まぁフリーザ様の戯言は放っておくとして・・・
師範さんかしら？あなたのやってることは誘拐に等しいんじゃないの？
未成年者を親元に帰さないって・・・警察呼ぶわよ？」

「警察だと・・・！？」

「どうすんだよ・・・」

さすがに警と察の二文字のコンビネーションは聞いたらしく
門下生は一斉にざわつき始めた・・・

しかしそんな門下生をナイスミドル師範は一喝した

「馬鹿者!うろたえるな!ハードボイルドはうろたえない!」

どこぞのドイツ軍人のようなセリフを吐くと
真っ直ぐに哀の目を見て良い放った

「ならこうしよう・・・お前らが我々より魅力的なら光彦を返す」

「警察を呼ぶわ」

「待て!?早いよ!・・・安心しろ・・・公平にやるから」

「別に良いわ・・・警察が公正にやってくれるから・・・」

「頼むよ・・・クールビューティーなお嬢さん・・・一回だけでいいから」

「仕方ないわね・・・一回だけよ?もしずるしたら１１０よ」

こうしてハードボイルドＶＳクールビューティー・・・
どっちの魅力ショーが幕を開けた

「ってことでお前らから一番魅力的なやつを出せ・・・
こっちは・・・俺が行ったら勝負にならんな・・・弟子を一人出す」

「なめられたもんね?まぁお言葉に甘えておくわ」

哀はそれだけ言うと皆を集め一番魅力的な者を選出することにした
大方は哀を押していたのだが・・・

「私が行きましょう」

Ｍｒ．出たがり・・・宇宙の帝王フリーザ様が黙っているはず無かった

「ここは灰原さんで堅実に行きましょうよ？」

そんな皆の言葉もどこ吹く風・・・聞く耳持たず

Ｍｒ．聞かざる・・・今日二冠王のフリーザ様は全く聞きいれようとしない

「大丈夫ですよ・・・私はその冷徹さと端正な顔立ちで
クールビューティーフリーザ様と全宇宙から恐れられた男ですよ？」

うそくさい・・・

何とかフリーザ様をなだめようとする一同

しかしコナンは違っていた

「まぁ良いんじゃねぇか？あん中に魅力的なのいると思うか？」

「・・・ただの変態にしか見えないね」

かくしてフリーザ様がクールビューティー代表となった

「言っとくけど・・・負けたらあなたのコーヒーメイカーは粉々にするわよ？」

哀のどぎつい脅しを背に受けながら出陣したフリーザ様を待っていたのは・・・

「おや？小五郎さんじゃないですか？」

「久しぶりだな・・・」

どうやら小五郎もハードボイルドに落ちたようである・・・
コナンは昨日の蘭のぼやきを思い出していた

『お父さんたら最近良く出かけるわね・・・
身なりもちゃんとしてるし・・・は！まさか浮気じゃ・・・』

なるほど・・・ここに来ていたと言うわけか
コナンは一人謎を解いた満足感に酔いしれた

「それではこれから二人に自分の魅力をＭＡＸまで高めてもらう
判定はそこの道を通っている人の中からランダムに選んで
その人に判定してもらう」

そう言うと門下生に適当に連れてくるように支持を出した

「知り合いを連れてくるんじゃ無いでしょうね？」

「そんなに疑うな・・・ちゃんと知らんのを連れてくる」

・・・５分後
門下生がボコボコになりながら帰ってきた
ナンパと間違われたようである
それでも何とか一人連れてきたようだ
女性だ・・・スーツでビシッとキメたメガネ美女・・・

「英理!?」

「あらあなた・・・」

突然の再会に戸惑う二人・・・

「それじゃあ試合開」

「ちょっと待って!あれはチョビヒゲの女よ!別の人にしてちょうだい」

「そうなのか?」

哀がいちゃもんをつけた
しかしコナンが耳打ちをしてきた

「いいじゃねぇか・・・おばさんの性格なら素直におっちゃんを選ばねぇよ
むしろこっちに好都合だ・・・このままで行くぞ」

なるほど・・・さすがコナン
両方からげんこつを食らった男は伊達ではない

「やっぱ良いわ・・・」

「え?でも不公平・・・」

「良いって言ってるのよ!警察呼ぶわよ?」

「分かったって・・・試合開始!!!」

師範が叫ぶとフリーザ様は即座にポーズを取り始めた
足をひねりながら開き・・・そのまま後に体を反らした

「・・・・・あれはイナバウアー（荒川バージョン）！？」

「ふっふっふ・・・どうですか？この私の華麗なポージングは？」

やっているのがフリーザ様なのが気になるが
それはそれは美しいイナバウアー（荒Ｖｅｒ．）であった
英理の感触は・・・

「あら・・・しなやかなのね・・・綺麗なポーズ」

もらった・・・哀は勝利を確信した
一方の小五郎は焦っていた・・・まさかフリーザ様がこれほどやる
とは
ふと英理を見ると楽しそうにフリーザ様を見ている
だめか・・・諦めから小五郎は膠着してしまった

「勝ったわよ？」

「くそ・・・わがハードボイルドが敗れるとは・・・」

そのときだった

「小五郎さん！？あなた何をしにここに通ってたんですか？」

普段温厚なフリーザ様が怒鳴った

「あなたはここでハードボイルドになるために通っていたんではないんですか?
あなたをただの甲斐性なしだと嘆いている娘やチョビヒゲと呼ぶ生意気小娘を
見返すために・・・」

「・・・・・悪かったわね生意気で」

「そして何より!大切な人を振り向かせるためじゃないんですか?
それなのに試合放棄ですか?ふざけるな!かかって来い!あのサイヤ人どものように!
そして大切な人に自分の全てを見せなさい!」

静まり返る道場・・・
珍しく良い事を言っているフリーザ様
だがイナバウアーの体勢で言っているのでその様はかなり滑稽だ
それでも小五郎を勇気付けるには十分だった

「英理・・・最高の俺を見てくれ!」

そう言うと小五郎はポージングを始めた
その目に迷いは一切感じられない

「食らえ!小五郎ハードボイルド究極奥義『無想転生』」

・・・・・それは
それは言葉にすら出来ない奇怪なポーズだった

「・・・ダサ」

哀が声を漏らした・・・
師範も敗北を悟ったのかがっくりうなだれた
しかしこの人は違っていた

「あなた・・・素敵よ」

「英理・・・」

パンパンパン・・・
手を叩く音が響いた
フリーザ様である

「最高でしたよ・・・最後のポーズ『無想転生』
私の完敗です・・・でもとても清々しい負けですよ」

この人達は頭がおかしいんだな・・・
哀はそう思いながらある言葉を思い出していた
「恋は人を盲目にする」
思えば小五郎のポーズは奇怪だったが英理を思う気持ちに溢れていた
心に勝る物は無いと言うことか

「英理・・・戻って来てくれるか?」

その問いかけに英理は静かにうなずき小五郎の胸に飛び込んだ
そして二人は抱き合っていた・・・いつまでも・・・

「一件落着・・・ですね」

「あぁ・・・長い長い戦いだったけどな・・・蘭も一安心だ」

「お熱いわね・・・まぁいいわ！帰りましょう」

こうしてフリーザ様達は道場を後にした

清々しい満足感と共に・・・

「ところで・・・」

・・・・・・

「なんであそこに行ったんでしたっけ？」

「さぁ・・・忘れたわ」

・・・・・・

「・・・・・・なぁ・・・光彦？」

「うるさい！僕はみっちゃんです！」

泣きながら家に帰ってきた光彦を見て

朝美一人だけが当初の目的を思い出したそうな・・・

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード1「黒の組織と対決だ！」

「わっはっは！私があの方だ！勝負だ名探偵」

「おのれあの方め！」

「食らえ！『フライングあの方ボンバー』」

「ぐあああ！くそ・・・こんな所で」

「どうした名探偵・・・その程度か？」

「バーロォ・・・俺はお前を倒して・・・蘭の所に帰る！
食らえ『シャイニング名探偵ボーダフォン』」

「何！？馬鹿な動きが予想できない・・・ぐわあああああ！！！」

こうして組織は滅び・・・世界に平和が訪れた

「予想外デス」

（※本編とは一切関係の無い話です）

６５．惚れ直してよ！（後書き）

ってことで６５話です
なるべくコナンワールドを崩さないようにやって来たのですが
良く考えたらフリーザ様がいる時点で壊れてるので
まあ良いかってことで・・・
よりを戻しちゃいました
うわ！すみません・・・石は投げないで・・・
てな感じの６５話でした
そして新たな新コーナーショート劇場
またの名を「何この駄文？」
これは私が一瞬思いついたものの使いようが無かったり
使うのはまずいだろ・・・って話をちょっとだけ紹介するコーナー
今回のは「予想外デス」をやりたかっただけで思いついた駄文です・
・・＾＾；

66．ランブル・オン・ザ・フォーチュン（Ｒｏｕｎｄ１）

第６６話　ランブル・オン・ザ・フォーチュン（Ｒｏｕｎｄ１）

風が涼しくなってきた午後の帝丹高校
とんがりが無くなった蘭ではあったが園子の異変には気付いていた

「どうしたの？妙にご機嫌だけど？」

蘭の問いかけに園子はますますにやけた
よほどご機嫌のようだ・・・

「分かる？」

分からない方がおかしいだろ・・・
蘭は園子に聞こえない程度のツッコミを入れつつ理由を聞いてみた

「占いよ！最近ハマってる占い師がいるんだけどね・・・
これがチョー当たるのよ！蘭も占ってもらいなよ！ハッピーになれるよ」

蘭は占いは嫌いでは無いがのめり込む方でもない
正直本気で信じるのもどうかと思ったが
園子が最近ハッピーなのは事実の様なので放課後一緒に行って見る事にした
・・・・・・

風が涼しくなってきた午後のポアロ
店員榎本梓はフリーザ様の異変に気付いていた

「今日は妙に不機嫌ですね・・・」

梓の問いにフリーザ様のこめかみの青筋が反応した
よほどご機嫌斜めのようだ・・・

「分かります?」

体の周りにオーラのような物が出てますよ・・・
梓はフリーザ様に聞こえない程度にツッコミを入れつつ理由を聞いてみた

「占いですよ・・・『めざまし、そして二度寝テレビ』の占いコーナー・・・
最近あれの言う通りに行動してるんですがいい事が全くないんですよ!」

「そりゃ無理ですよ・・・ところでフリーザ様って何座なんですか?」

「何座?あぁ・・・星座とか言う奴ですね・・・知りません!
なのでその日一位の星座へのアドバイス通りにしているのですが・・・」

占いが悪いというよりフリーザ様が１００％悪い
そう思ったが口に出すのは止めた梓だった

「そうだ!良く当たる占い師さんがいるんですよ!

その人に占ってもらったらどうですか?朝のテレビより当たると思いますよ」

そう言うと梓はその占い師の居場所を教えてくれた
フリーザ様は梓が書いてくれた地図を手にポアロを後にした
・・・・・・

米花町の一角にそこはあった
蘭は園子に手を引かれながら占いの館『夢命館』に入って行った
数名の先客が立ち去った後
蘭は園子に促されるままに占い師のいる部屋に入った

「良く来たね・・・」

覆面をした女性が水晶玉の前に座っている
声からすると老婆のようだが・・・
いかにも占い師という格好が逆にインチキ臭い

「あ・・・よろしくお願いします・・・私は毛・・・」

「名前は良いよ・・・」

名乗ろうとしたところで占い師にさえぎられた

「名乗りたくないこともあろう・・・」

「いや・・・別にないですけど・・・」

とりあえず蘭は占い師の前に腰掛け

何を占ってもらおうか考え始めた・・・が

「けぇえええぇぇぇぇぇぇえ！！！」

「うわあああ！！！」

いきなり雄叫びを上げた占い師に驚き
蘭は座っていた椅子から転がり落ちてしまった
慌てて体勢を立て直し椅子に座ると占い師は口を開いた

「おぬし・・・今日のパンツは緑じゃな？」

「えぇ！なんで分かったんですか？」

「今見えた・・・ジョークじゃよ・・・そう緊張するでない
ふむ・・・どれどれ・・・見えるぞ・・・最近何か大切な物を失くしたな？」

大切な物・・・
蘭はふと考えた・・・お母さんは戻ってきたし・・・

『パチモンみたいですね』

嫌なことを思い出してしまった
そう言えばつい先日長年連れ添ってきたとんがりを失ったばかりだ
あれが無くなってから毎日が平凡になった気がする
それはそれで幸せなのかもしれないが
蘭は心にぽっかり穴が空いたような気分だった

「思い当たる節があるようじゃな」

蘭は小さくうなずいて見せた
そうかそうか・・・と占い師は水晶玉を掌でこねくりまわす
「ふむ・・・まぁそれはそのうち戻ってくるじゃろうが・・・」
髪だしね・・・
「問題はそれが無い間におぬしが受ける負のエネルギーじゃ」
「負のエネルギー？」
なんのこっちゃ？
蘭は訳が分からなかったがとりあえず黙って聞くことにした
「今まではその大切な物がおぬしを負のエネルギーから守ってくれていた
しかし今は無い・・・その間おぬしが受ける負の影響は大きい
最悪の場合今後の人生に悪影響を及ぼすことになる・・・」
「悪影響？」
「ふむ・・・そうじゃな・・・
ひいいい

「見えたぞ・・・人じゃ・・・
おぬしには大切に思っている人間がおるの？」

そう言われて頭に思い浮かんだのは新一だ
両親ではなく新一が浮かんだ事に気付き蘭は顔が熱くなるのを感じた

「なるほど・・・想い人か・・・
その男・・・下手をすれば失うことになるぞ・・・」

「新一を？」

「うむ・・・負のエネルギーの影響じゃ・・・
失恋か・・・恋が実っても浮気か・・・くわあああ！！！げふぁ！！！」

また雄叫び？を上げた占い師だったが蘭は今度は黙って見ていた
よく叫ぶな・・・なんか引くなぁ・・・
そんなことを考えながら・・・
しかし占い師から告げられたのは思いもよらない言葉だった

「死別じゃ・・・おぬしはこのままではその男と死別する・・・」

「死別・・・私が死ぬんですか？」

「いや・・・男の方じゃ・・・医療ミスで死ぬ」

そんな・・・嫌よ・・・新一が・・・死ぬ？
医療ミスで？・・・詳しいなおい！・・・新一・・・やだ！信じたくない！

「安心せい！回避する方法はある・・・それを教えるのが占い師じゃ」

・・・・・・

「へくしゅん！」

「風邪ですか？うつさないで下さいよコナンさん！」

所変わって占いの館『現命館』前
フリーザ様は配下の哀とコナンを連れてやって来ていた

「誰かが噂してんだよ・・・名探偵はつらいぜ」

「死ねば良いのに・・・とか話してるんじゃない？」

「うっせ！」

いつも通りのコントを繰り広げながら彼らは現命館に入って行った
数名の先客がいたがフリーザ様が口には出せないような手段で追い払い
待つことも無くあっさりと占い師の部屋に入って行った

「ようこそ・・・あ！子供は隣の部屋で遊んでてね」

そこにいたのは凡そ占い師には見えない好青年だった
ポロシャツにデニムのズボンと言うラフな格好だ

「構いませんよ・・・この二人は私の下僕ですから・・・

あなたが占い師ですか?予想と大分違いますね」

「良く言われます・・・どうぞ座って下さい」

フリーザ様は占い師の前に腰掛けた

「さぁ~あ!このフリーザ様を占ってごらんなさ~い!」

「・・・・・・」

フリーザ様は占うよう促したが占い師はこれと言って何もしない
目をつぶって黙って座っている

「あの・・・占いを・・・」

「・・・・・・」

寝てしまったのか?フリーザ様がそう思った次の瞬間だった

「・・・・・・っ!!!来てます!」

「はぁ?来てるって・・・何がですか?」

「黙って!・・・よし・・・そうだ・・・来い!
来る・・・あ!あぁ!来る!あぁ!来た~!来た~!
うひょひょひょひょひょひょひょひょひょひょ!!!」

占い師は歓喜の表情で部屋の中を暴れ回った
その様子はどう見ても救急車を呼んだほうが良い状況だった

「・・・ねぇ警察も呼んだ方が良いかしら?」

「そうだな・・・」

コナンと哀がそんな会話を終えるかどうかと言うところだった
占い師はそれまでのイカれた表情とは正反対に真面目な顔つきになると
何かを掴むような動作で手を固く握り締めた

「捕らえました・・・」

何を!?哀はあまりのツッコミ所の多さに困惑してしまった

「機動隊に来てもらう?」

「まぁまぁ・・・僕の占いはいつもこんな感じだよ・・・
今捕らえてるから大丈夫・・・何でも聞いて良いですよ」

胡散臭い・・・ていうか何処かのマジシャンとかぶってる
半信半疑だったがとりあえず哀が最初の質問をした

「フリーザ様の出身は?」

「惑星コルド・・・へぇ・・・宇宙人なんだ?」

すごい!その場にいた三人は彼の能力のすごさに感心した
それまで黙って見ていたフリーザ様も拍手をしながら絶賛した

「すばらしいですよ・・・それでは・・・
私がハッピーになるにはどうすれば良いか教えなさ〜い!」

「OK！捕らえてるから簡単な質問だよ」

何を捕らえているのかは彼にしか分からなかった・・・

・・・・・

その日違った場所で違った人物に占われた彼ら

彼らの運命が交差する瞬間が近付いていることを

まだ誰も知らなかった

「けぇえええええぇえぇえぇえぇえ！！！」

「捕らえました・・・」

・・・彼らを除いて

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード2「灰原動物記」

私の名前は灰原哀・・・駆け出しの生物学者だ

私は今野生動物の生態を調査するため世界各地を飛び回っている

今回やって来たのはマダガスカル島・・・神秘の島だ

「見たまえ哀君！あそこにいるぞ！」

この人は阿笠博士・・・私の尊敬する生物学者の一人で
ここマダガスカル島に詳しいことで知られている

「素敵・・・やっぱり綺麗な角ですね」

今回調査するのは「マダガスカル・トンガリ・ラン」
美しい角を持つ霊長類の珍種だ

バーン!!!

その時だ!銃声が響き渡った!

「ちっ!外しましたぜ・・・アニキ」

「ヘタクソ・・・一発で仕留めろっていつも言ってるだろ?えぇウォッカ」

密猟者だ!マダガスカル・トンガリ・ランの角は美術品などにも用いられる
そのあまりの美しさに乱獲され・・・今ではレッドデータブックにも載っている
もちろんワシントン条約で狩猟も禁止されているが密猟が後をたたない

「ちょっと!マダガスカル・トンガリ・ランの猟は禁止されてるわよ!
今すぐやめてこの島を去りなさい!」

私は怯えて動けなくなっているトンガリ・ランの前に立った

「うるせぇ！そこをどかねえとお前も撃つぜ？」

「そうはさせないわ！」

私は密猟者を睨みつけた・・・でも次の瞬間右腕の鋭い痛みに気付いた
撃たれた・・・

「あの世で動物の世話でもするんだな・・・終わりだ！」

私は死を覚悟した・・・その時だった！

「こら！密猟はいか～ん！」

「ちっ！パトロールだ・・・ずらかるぞ！」

命拾いをしたようだ・・・博士が近寄ってくる

「大丈夫か！？哀君！？」

「えぇ・・・博士が呼んでくれたの？」

・・・・・
これからもこう言うことがあるだろうけど
私はこの仕事をやめるつもりはない・・・
こうしている間にも悲鳴を上げている動物達を助けるために
私が頑張らなくてはいけないから・・・
そして・・・動物達を愛しているから・・・

66．ランブル・オン・ザ・フォーチュン（Ｒｏｕｎｄ１）（後書き）

逆に来てませんね・・・
レポートも終わりさぁ書くぞ！
と思ったんですが・・・なんだかスランプに突入してました
書いても書いてもうまく行かず・・・
なのでいっそのことフリーザ様も灰原さんも忘れちゃおう
ってことでしばらく手を付けずにいました
で・・・しばらくしたら調子が戻ってきたので書いて見たのがこれです
で・・・いきなり次回へ続きます＾＾；

67．ランブル・オン・ザ・フォーチュン（Ｒｏｕｎｄ２）

前回それぞれの思惑を胸に占ってもらった二人
すなわち蘭とフリーザ様・・・
別々の場所で・・・別々の人物に占われた・・・
二人の運命はそのまま平行線をたどるように見えた
しかしそれは平行線に見えて実は互いに交差点に向って突き進む
二本の交わるべき直線だったのである

第６７話　ランブル・オン・ザ・フォーチュン（Ｒｏｕｎｄ２）

「それで・・・どうすれば新一は助かるんですか？」

「新一と言うのか・・・その男は」

占い師は水晶玉を撫でながらしばらく考えた
そして・・・

「ふぇえええええあああああがあああああああ！！！」

例の如く雄叫びを上げた
蘭は椅子から落ちる事もなく真剣な面持ちでその様子を見ていた
もうこの占い師に頼るしかない・・・
多少の奇行には目をつぶろう・・・

「見えたぞ！角じゃ！サイの角じゃ！」

「？・・・サイ？動物の？」

コクリとうなずく占い師
蘭の目を真っ直ぐに見て言った

「おぬしの失った物と一番近いエネルギーを発するのはサイの角じゃ！」

そんな事を言われても・・・
蘭は困ってしまった・・・サイの角などそこらにある代物ではない

「しかしサイの角を手に入れなければ・・・新一は死ぬぞ」

占い師の言い放った言葉に蘭は心を決めた

「行こう！わしも一緒に行ってやろう・・・」

占い師と共に占いの館を出た蘭の瞳は決意に満ちていた・・・
・・・・・・

「フリーザ様をハッピーにするには・・・」

所変わって占いの館「現命館」ではまさに占いの結果が出ようとしていた

「バイオレンスケーキのショートケーキを三つ食べる事」

占い師の口から放たれたのはその言葉であった

「バイオレンスケーキ・・・？」

「杯戸町にあるケーキ屋よ・・・美味しいらしいわ」

そこのショートケーキを三つ食べるだけ
なんとも簡単な内容である・・・
そんな事で幸せになれるのか？哀は少し疑った

「とりあえず行ってみますか・・・
占い師さん！あなたも来なさい！
外れていたら首を引きちぎって上げますからね！」

「疑り深いなぁ・・・ケーキ奢ってくれる？」

こうしてフリーザ様達と占い師はバイオレンスケーキに向った
・・・・・・

「放して下さい！」

米花動物園に蘭の声が響いた
その手にはノコギリが握られている

「ちょっと君！なにやってんの！？檻から出なさい！」

慌てて係員が蘭を取り押さえにかかった
蘭はサイの角を手に入れようと檻の中に侵入したのである

「危ないから！危ないから出なさい！」

「放して!私は・・・私はサイの角を手に入れるの!」

「ちょ!君何狩ろうとしてるの!?やめなさい!」

「放せ!放せ~!うわあああああああ!!!」

園内は一時騒然となったが

サイ係の職員3人が猛獣用の刺股で何とか蘭を引きずり出した

・・・・・・

「美味しいわね」

一方バイオレンスケーキでは甘い香りが漂っていた

美味しそうなケーキがフリーザ様達の口に運ばれる

「三個食べるにしても味わって食べないといけませんね」

ちびちびとショートケーキを食べるフリーザ様

横では哀とコナン・・・そして占い師がそれぞれケーキを食べている

「博士にもおみやげに買って行こうかしら?」

「いいですね・・・あ!ショートケーキおかわりで!」

「じゃあ俺モンブラン」

「チーズケーキお願い」

「僕はとりあえず紅茶のおかわりを・・・」

・・・・・・

フリーザ様達がおかわりをしているころ
蘭はがっくりうなだれて動物園の入場ゲートをくぐって出てきた

「ダメじゃったようじゃな・・・」

黙ってうなずく蘭
あの後事務室でこってりしぼられノコギリも没収されてしまった

「もうダメなのかな・・・」

「ぎょえええええぇぇぇえええええええええ！」

諦めかけた蘭の隣で占い師は突然雄叫びを上げた
はっとして蘭は占い師を見た

「何やってんだ！？また問題を起こす気か！？」

慌てて動物園の職員が駆け寄って来る

「かあああああああああああああああ！！！」

「うわ！」

しかし占い師はそれを気合で吹き飛ばしてしまった

「見えたぞ・・・サイの角がダメなら最後の手段・・・」

「なんでも良いです！新一を守れるなら・・・」

・・・・・・

「ふぅ・・・美味しかったですね・・・」

「そうね・・・」

ケーキを平らげたフリーザ様達は満足しきっていた

「で・・・これでハッピーになれるのか？」

コナンが紅茶を口にしながら言った

ケーキの美味しさにうっかり忘れるところだった

「美味しいケーキを食べれてハッピーな気分だろ？」

・・・・・それだけ？

「あの・・・もしかして・・・それだけですか？」

「そうだけど・・・」

重苦しい沈黙が四人の間に漂う

「もしかして・・・もっと長年に渡るような壮大なハッピーが良かった？」

「当たり前でしょう！こっちは金払ってるんですよ！」

フリーザ様青筋を立てながら言い放った

しかし占い師は黙っている・・・

「何とか言ったらどうなんですか？消し去りますよ？」

「・・・・・来てます」

突如占い師が例の言葉を口にした

「来た・・・来た！あああああなんでぇ！？マジ！？

ありえねぇ～！ありえねぇ～！ありえねぇ～！！！」

突然ケーキ屋で暴れ狂う占い師

フリーザ様も含めケーキ屋にいた者全員の考えは一致していた・・・

ありえねぇ～のは・・・お前だよ・・・

「・・・・・・っ！！！」

全員が呆れながら見守る中占い師の表情は真剣なものへと変わった

「・・・・・捕らえました」

「分かったから・・・ちょっと静かにしてよ！恥ずかしい」

いつもはクールな哀が赤面しながら占い師に言った

「で？わかったんですか？」

「もちろん！捕らえてますから！」

占い師の表情は自信に満ち溢れていた

「で？どうすりゃいいんだ？」

紅茶を飲み干すとコナンが聞いた

占い師はその手に捕らえた何かに全神経を集中した

「精霊の水・・・それを手に入れればハッピーになれる」

精霊の水・・・コナンはポカンとしていたが

フリーザ様と哀は何処かで聞き覚えのある言葉だと思った

そしてしばらく頭の引き出しを探ると・・・

「ヌケサク！・・・カンガルー帝国！」

黒の組織の泡盛が手に入れようとしていた代物である

またオーストラリアへ向うときが来た・・・そんな事を考えていると

ファンファンファン・・・

「やべぇ！警察だ！」

「あなたが暴れたからよ！」

お店の人が警察を呼んでしまったのである

「はあああああああ！！！」

ボン！

と音がして店の壁に穴が空いた
フリーザ様が破壊したのである

「裏口を作りました・・・さぁ行きますよ！カンガルー帝国へ！」

その日はバイオレンスケーキ始まって以来の大惨事となった
バイオレンスケーキ店主の高崎勉氏は
晩年自らの手記の中でそう綴っていたと言う・・・
・・・・・・

「精霊の水じゃ・・・」

「精霊の水？」

占い師から放たれた言葉はそれだった
自分はいつからファンタジー小説の主人公になったのだろう？
そうは思ったが今は四の五の言っていられない
新一を助けなくては・・・

「どこにあるんですか？」

「げぺえええええぇぇえええぇえええええ！！！」

今日何度目かの雄叫び・・・蘭は黙ってその口が言葉を刻むのを待った

「・・・おーすとれいりあじゃ！」

オーストラリアって言えば良いのに・・・
蘭はオーストラリアへ向う決心をした

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード３「ツンデレラ」

俺の名前は・・・匿名希望だ
コードネームはジン・・・ある組織の幹部だ・・・えっへん
ある日俺は愛車のポルシェ３５６Ａでドライブを楽しんでいた
助手席にいるのがウォッカなのが玉に傷だ・・・ピチピチギャルキボンヌ
途中何か食べようと路肩に車を止めて俺はマックに行った
帰って来るとマイカーの周りの雪が踏み荒らされていた

「きっと通行人が見て行ったんですよ・・・アニキの車珍しいから」

ウォッカの奴がそう言った・・・だよね☆
まぁ分かってるんだけどね・・・可愛い奴だポルシェちゃん
鼻高々にマイカーにパイルダーオンすると俺はその異変に気付いた
盗聴器・・・そして・・・

「赤みがかった茶髪・・・」

間違いない・・・あの組織を裏切った愛しのシンデレラのものだ

待っていろ・・・王子様が血祭にあげちゃうからね・・・キラン

再開は予想より早く訪れた・・・予想外デス
仕事で行ったホテルの酒蔵にもう一つガラスの靴を発見した
そこで俺は屋上に向い煙突から出てくる「灰被り」を待った
しばらくすると何も知らない奴がノコノコと出てきた
おれは愛しのシンデレラに赤いドレスをプレゼントしようと
サイレンサーの付いた銃の引き金をしぼった

「会いたかったぜシェリー」

シンデレラとの再開は感無量だ・・・どう痛めつけてやろうか?
俺はシンデレラの言葉を待った

「あんたなんかに会っても・・・嬉しくもなんとも無いんだから・・・」

「ちょっ!なに言ってるの!?台本とセリフ違うよ志保ちゃん!?」

ガビーン(うすた京介作品のノリで)

僕の知らないところで
彼女は僕の知らない属性を身に付けていた・・・
そんな冬の思い出

67．ランブル・オン・ザ・フォーチュン（Ｒｏｕｎｄ２）（後書き）

やれやれ・・・
相変わらずの絶不調ですが・・・＾＾；
次回は久々のカンガルー帝国
もう二度と出さないと密かに心に誓ったカンガルー帝国
でも出しちゃいました・・・
なんか精霊の水が都合良かったんで・・・
ファンタジーなんかいらねぇよ！と思ってる方
すみません・・・もうこれきりにします（多分）

68．ランブル・オン・ザ・フォーチュン（Ｒｏｕｎｄ３）

前回までのあらすじ
ある日占いの館「無命館」を訪れた蘭
そこで「トンガリを失くしたことで新一が死ぬ」と告げられた彼女
それを阻止すべく動き出した・・・
一方同じころ占いの館「現命館」を訪れていたフリーザ様
自分がハッピーになるために動き出した・・・
それぞれの思惑を胸に
舞台はオーストラリア・・・「カンガルー帝国」へ

第６８話　ランブル・オン・ザ・フォーチュン（ＦｉｎａｌＲｏｕｎｄ）

見渡す限りの草原・・・
日本では見ることのできない地平線を前にして
彼女は青空に想いを寄せる人の顔を見ていた
その顔が爽やかに笑うと蘭は再び決意に拳を握り締めた

「どうですか？」

隣にいる老婆に尋ねる

「けえええぇぇぇぇえええぇえええええええ！！！」

この地にやって来て上げた雄叫びは既に数十回
さすがの占い師も喉が枯れたのか苦しそうに咳き込む

蘭は背中をさすりながらお茶の入ったペットボトルを渡した

「げほっ！・・・近い！この辺りにあるはずじゃ」

「ありがとう」とペットボトルを返しながら占い師は言った
蘭は鋭い眼光を放つ目で草原を見回す

「精霊の水・・・」

つぶやいたと同時に物音に気付いた
ジャリジャリと激しい音を立てている・・・車のようだ
蘭は身を屈めて草の陰から音のする方を伺う
すると一台のジープが真っ直ぐにやって来るところだった

「あれは・・・」

ジープが蘭のそばを通り過ぎる
そのとき蘭の目に飛び込んで来たのは目立つビジュアル系の男
それに良く見ると赤みがかった茶髪の少女とメガネの少年も乗っている

「フリーザ様・・・それに哀ちゃんにコナンくんまで・・・」

ふと蘭はコナンがしていた話を思い出した
フリーザ様達がオーストラリア旅行に行った際
フリーザ様と哀だけ数日行方不明になったと博士が言っていたそうだ
それも見つかった時は草原にいたらしい・・・

「臭うわね・・・後を尾けてみましょう」

「いやいや・・・久しぶりですねカンガルー帝国」

「本当ね・・・またあのふかふかで寝れるかしら？」

「うそだろ・・・カンガルーが・・・ははは」

長いトンネルを抜けて
フリーザ様は再びこの聖域にやって来た
案内役のカンガルーがしばらく待つように言って去っていく

「カンガルーが・・・カンガルーが・・・」

「うるさいわね・・・落ち着きなさいよ」

おろおろしているコナンの背中を哀がバシンと叩いた
それと同時に目の前にカンガルーの集団が現れた
相変わらず目を丸くしているコナンの横で
哀の顔が緩む

「お久しぶりですね・・・フリーザ様」

ケリトバとナメンナである
その仲睦まじい様子からすると晴れて結ばれたようだ

「これはこれはケリトバさん・・・その後帝国はいかがですか？」

「まだ帝王も決まっておりませんが・・・平和そのものです
これもフリーザ様のおかげ・・・さぁどうぞ！我が館へ案内いたします」

一方の蘭は困っていた・・・
フリーザ様を尾けたのだが途中で行き止まりになってしまったのだ

「道は一本だったのに・・・どうして？」

「ふむ・・・どうやらここから先は聖域のようじゃな」

占い師が壁に手をあてる
その言葉の真意を探っている蘭の前で占い師が雄叫びを上げた

「かあああああああああ！！！占いプリズムパワー！メ～イクミラクル！」

意味不明な呪文だったが道さえ開ければ蘭にはどうでも良かった・・・

フリーザ様達の前には美味しそう？で豪華？と思しき料理が並んでいた
ただフリーザ様と哀は二度目なのでおいしそうに食べている
コナンも最初はひきつっていたが
フリーザ様や哀の様子やこれまでの会話から
ケリトバ達が良い人・・・もとい良いカンガルーだとわかり
おっかなびっくり料理を食べていた
その時だった

「申し上げます！」

「どうした？」

ケリトバの下に部下と思しきカンガルーがやって来た

「何者かが聖域の扉を無理矢理こじ開けました」

「何！？・・・わかった・・・戦士達を送って迎撃させろ」

ただならぬ自体を感じ取ったフリーザ様たちの食事の手が止まる

「占い師先生・・・何が起こっているか分かりますか？」

気になってフリーザ様は占い師に尋ねた

占い師は食事の手を止めると余裕の表情でいつもの動作に入った

「カンガルーだらけ！わーい！わーい！

きゃはははははははははは・・・っ！捕らえました・・・」

捕らえたこの男に分からないことは無い

フリーザ様は何が起こっているのか聞いた

占い師は捕らえた何かに全身系を集中する・・・

・・・・・

「どうしたんですか？」

いつもと違い長い事黙っている占い師にフリーザ様がイラついた声

を上げる

「馬鹿な・・・妨害された！？」

良く分からないが失敗したらしい・・・
占い師は冷や汗をかいて困惑の色を露にした

「どうしたんですか？」

覆面をしてはいるが何か様子がおかしいことを感じ
蘭は心配そうに占い師に尋ねた

「何者かが我々の様子を探ろうとしおった！」

「えぇ！？」

「安心せい・・・邪魔してやったわ」

そんな会話をしている二人の前に厳ついカンガルー達が現れた
それぞれが凄まじい殺気をむき出しにしている

「強い・・・」

肌に突き刺さるような闘気・・・
蘭はその力を本能で感じ取り勝利を絶望したが
新一を見殺しにすることもできずに歯を食いしばった

「私は精霊の水が欲しいの！そこをどいて！」

その言葉は自分を奮い立たせるために放ったものだったが
カンガルー達を怒らせるには十分だった

「この小娘！我らが聖域を侵すに止まらず精霊の水をよこせとは・・

・」

「命知らずのたわけ者よ！」

「女とて構わん！切り捨てい！」

「時代劇かよ・・・」

「これ逆に死ぬパターンじゃね？」

カンガルー達から怒りの言葉が浴びせられる
蘭は恐怖に耐えながら構えをとった
その時後から雄叫びが聞こえた

「ふぉおおおおおおおお！！！占いクリスタルパワー！メ～イクミラクル！」

すると不思議なことに
蘭は自分の中に凄まじいパワーがみなぎるのを感じた
目の前にいるカンガルーすら雑魚に見える

「こんな所で時間を潰している暇はなかろう？」

「ありがとうおばあさん！・・・でもこれ占い？」

蘭は占い師にお礼を言いながらカンガルーの群れになだれこんだ
見る見るうちに倒されていくカンガルー達・・・

「やっぱヤラレパターンだ！」

「誰だよ!?『切り捨てい』なんて言った奴は!」

「申し上げます!」

さきほどのカンガルーが血相をかかえて戻ってきた

「何だブチノメ?フリーザ様の御前で・・・何度も何度も騒がしいぞ!」

主に窘(たしな)められながらもブチノメは息も絶え絶え報告した

「侵入者迎撃に向わせたカンガルー３０名・・・ぜ・・・全滅いたしました!」

広間に衝撃が走る・・・

カンガルー達はフリーザ様には到底及ばなかったとはいえ

人間をはるかに凌ぐ戦闘力の持ち主達である

しかも３０名の中にはコラ族のスーパーカンガルーもいたと言うのに・・・

「敵は相当の戦闘力の持ち主ですね・・・私が行きましょうか?」

「いえ・・・フリーザ様のお手を煩わせるわけには・・・」

「しかし敵の正体も知れずに・・・また犠牲がでるかもしれませんよ?」

フリーザ様とケリトバが話し込んでいると横から占い師がやって来た

「相手は占い師でしょう・・・」

全員の視線が占い師に集まる
占い師は一呼吸置いて話を続けた

「さきほど私の占いが妨害されました・・・
あれは私が様子を覗こうとしたのに気付き対抗エネルギーを出されたからです
そしてそれが出来るのは占い師・・・
それも私と同じ『グレート占いパワー』の使い手です」

「・・・もう占い関係ねぇな」

静まり返った広間にコナンのツッコミだけが響いた・・・

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード４「和葉の日記」

３月１２日
今日は平次に寄り付く雌豚を三匹ほどミンチにしてやったわ
最後詫び入れて来るときの顔なんて・・・想い出しただけで笑えるわ
私の平次に手ぇ出すからこうなんのや！

５月１日
明日映画でもと思って平次を誘ったら「事件」とか抜かしよった

まぁ私は平次が推理好きなんも知ってるし・・・推理をしている平次も好きや
とりあえず映画は諦めて平次のキン○マ蹴り上げといた
これで火遊びはできんやろ・・・安心安心！
がんばってな！平次！

６月１９日
今日も雨が鬱陶しい・・・これだから梅雨は嫌やわ
しかもおとんが一緒に風呂入ろうとか抜かしよる・・・
ムカついたから「不潔！」「ウザイ！」「あっち行って！」と言ったった・・・父親には一番応える言葉やろ・・・
ビール片手にシュンとしとんの・・・スカっとしたわ！
私と一緒にお風呂入って良い男は平次だけ・・・
きゃあ～！めっちゃ恥ずかしい！

９月２２日
今日は剣道部の大会やった・・・
休憩時間平次に群がるダニ共と平次のライバルの沖田をまとめてシメておいた
平次の害になるなら何であろうと私ががんばって駆除せな！
決勝で一本とった平次・・・めっちゃカッコええわ・・・

１１月１０日
今日は越水七槻とかいう女の面会に行ってきた
あの女・・・探偵甲子園の時平次に色目使いよったらしいし忠告しに行ったんやけど
喋り方がムカついたんでガラス叩き割って引きずり出してシバいたった
「平次くんと和葉ちゃんはお似合いです」って百回言わせたったわ
当たり前や！

「ちょっ！や～ん！蘭ちゃん！私の日記見んといて！」

「えぇ！良いじゃん～！私もこれくらいやろうかな・・・」

この会話を聞いていたコナンは

哀に解毒剤の研究を頑張り過ぎないように告げたと言う・・・

68．ランブル・オン・ザ・フォーチュン（Ｒｏｕｎｄ３）（後書き）

まぁ本編はいつも通りのノリとして・・・
おまけの方・・・
和葉ファンの皆様・・・大変申し訳ございません
別におっとりは和葉嫌いじゃないです
本編ではきっと可愛らしい和葉が登場します＾＾；

69．ランブル・オン・ザ・フォーチュン（Ｒｏｕｎｄ４）

前回までのあらすじ
蘭とフリーザ様は占いの結果「精霊の水」が欲しくなった
それぞれ占い師を伴ってカンガルー帝国に向った
カンガルー帝国は平和になっていた
でもフリーザ様達の来訪によってまたドタバタ・・・
がんばる二人の占い師は「グレート占いパワー」の使い手だった

第６９話　ランブル・オン・ザ・フォーチュン（Ｒｏｕｎｄ４）

最後のカンガルーを倒した蘭・・・
しかしその眼光は依然鋭さを保っている
なにも蘭はカンガルー虐待に来たわけではない
精霊の水が欲しいだけなのだ

「行きましょう！おばあさん！」

「うむ・・・じゃが急いだほうが良さそうじゃ」

水晶玉を眺めながら占い師は言った

「先ほどどこぞの身の程知らずが我々の様子を伺おうとしおった・・・
まぁわしが妨害して置いたがのぅ・・・」

「どういうことですか？」

「敵に占い師がいると言うことじゃ・・・グレート占いパワーを感じたからの」

蘭はとっさにフリーザ様が絡んでいると感じた
それにいつも頼りにしているコナンもフリーザ側のようだ
蘭は何だか心細くなってしまった

「大丈夫じゃ・・・敵の占いパワーはまだまだ未熟・・・わしが味方についていれば精霊の水はおぬしの物じゃ」

優しい占い師の言葉に勇気付けられたかのように
蘭の瞳に再び勇気の色が戻ってきた

「こうなったら直接対決しかありません・・・」

占い師はフリーザ様を真っ直ぐ見て言った

「グレート占いパワーの前では全ての力は無力・・・対抗できるとすれば同じグレート占いパワーだけです」

「っていうことは占い師さん自らが？」

深くうなずいた占い師の目からは強い意思が感じられる

「仕方無いですね・・・あなたにお任せします・・・
ケリトバさん！我々はさっさと精霊の水とやらを・・・」

「はい・・・それならいまナメンナが取りに・・・っ！！！」

ケリトバの脳裏に嫌な予感が過ぎる
そして次の瞬間後悔の波が押し寄せた・・・
なぜ彼女に行かせた・・・ブチノメあたりに頼めば良かったのに・・・

「フリーザ様にはお世話になったから」
ナメンナの別れ際の言葉が頭に響いた

「ナメンナが危ない・・・!!!」

ケリトバを先頭に弾かれるようにフリーザ様達は館を飛び出した

一方ナメンナは蘭の襲撃を受けていた
一人・・・また一人と護衛がやられていく
ナメンナは精霊の水が入ったビンを必死に抱きかかえて守った

「これだけは・・・渡すわけにはいかない!」

蘭はナメンナに拳を突きいれようと構えた・・・しかし

「攻撃してこないの?」

目の前のカンガルーは必死にビンを守るだけ・・・

「私もケリトバ様に嫁いだ身・・・彼はこれをフリーザ様に渡すと言った
それなら妻として・・・例えこの命にかえてもこれを渡すわけにはいきません!」

恐怖にガタガタと身を震わせながらも強い口調で訴えるナメンナ
そんな彼女を攻撃できるほど蘭は修羅に落ちてはいなかった
その時蘭が出来たことは・・・

「・・・？」

「お願いします！その精霊の水を下さい！」

地にひれ伏し頼み込むことだけだった

「私の大切な人を助けるためにはそれがどうしても必要なんです
お願いします・・・どうかお助け下さい！」

困惑するナメンナに必死で頭を下げた
・・・いったいどれだけの間地面とにらめっこをしただろうか？
蘭は自分の肩に何かが優しく触れるのを感じた

「これ・・・どうぞ」

顔を上げるとビンを差し出し優しく微笑むナメンナがいた

「いいんですか？」

「あなたはいい人みたいだし・・・精霊の水もまた取ってくれば良
いことです」

「旦那さんに怒られませんか？」

「怒られるでしょうね・・・」

「じゃあ・・・！！！」

何かをいいかけた蘭を制止してナメンナはクスクス笑いながら言った

「大切な人のためなのでしょう？」

その言葉を聞いた蘭はビンを抱えて静かに泣いた

「ありがとう・・・」

そこへ血相を抱えたケリトバとフリーザ様達がやって来た
コナンや哀は蘭がいることに驚いているようだったが
ナメンナがことの経緯を説明する形で事なきを得た

「ふぅ・・・やれやれ・・・後は私が精霊の水を手に入れれば済みますね」

ハッピーエンドに向けて皆が笑っている中
占い師の青年だけは眉間にしわを寄せていた・・・

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード５「ピータージン」

ある夜のことです
小さな小さな女の子「蘭」は泣いていました

お父さんとお母さんがケンカして別々に暮らすことになったからです
一杯泣いて蘭は疲れて眠りそうになりました
しかしその時何かの物音がして蘭はぱっと飛び起きました

「お母さん？」

しかしそこにいたのは影でした
真っ黒な影が動き回っていますでも影の主が見当たりません
とりあえず蘭は陰を捕まえました
するとその時後から声がしました

「おい・・・それは俺のもんだ・・・」

そこにいたのは黒ずくめで長髪の目つきの悪い男でした
どうやら影の主のようです
蘭はお母さんに読んでもらった絵本を思い出しました

「分かった！あなたピーター・アーツでしょ！」

「Ｋ－１の見すぎだぜ・・・おれはピーターパンだ」

「そうそうピーターパン・・・はい！影！」

「あぁ・・・おい小娘・・・なんで泣いていたんだ？」

影を受け取りながらピーターパンは聞きました
蘭は今日あったことをそのままピーターパンに話しました
ピーターパンはそれをタバコを吹かしながら聞いています

「なるほどな・・・母親がいなくて寂しいわけか・・・」

コクンと蘭がうなずきます

「ふん・・・ならいっそのことお前もここを出てみたらどうだ?
そうすれば出て行った奴の気持ちも分かるかもしれねぇしな・・・
おい!ティンカーベル!」

そう言うとピーターパンは妖精を招き入れました
黒ずくめでサングラスをかけた柄の悪い妖精です

「なんですかいアニキ?」

「この小娘に例の薬を試してやんな・・・」

するとティンカーベルは怪しげな粉を蘭にふりかけました
すると蘭の体が浮き始めます・・・
驚いた蘭はピーターパンを見ました

「行ってみるか?ネバーランドへよ」

薄ら笑いを浮かべながらピーターパンは言いました
蘭はなんだか行ってみたい気分になってきました

「行く・・・行くよ!」

こうしてピーターパンと蘭の冒険が始まったのです
この続きはまた別のお話で・・・

「イタズラしない?」

「俺はマイケル・ジャ○ソンじゃねぇよ・・・」

69．ランブル・オン・ザ・フォーチュン（Ｒｏｕｎｄ４）（後書き）

今回はつなぎ的な話なのでちょっと短めです
その代わりショート劇場がちょっと長め＾＾；
こんなんじゃだめですね
ってことで
いよいよ次回はＦｉｎａｌＲｏｕｎｄです
５Ｒ制です＾＾；
Ｋ－１とか見てる人には違和感かも
昔はＫ－１も５Ｒ制だったんですけどね（関係無し）

70．ランブル・オン・ザ・フォーチュン（FinalRound）

前回までのあらすじ（本荒）
占ってもらったら「精霊の水」が必要だったフリーザ様と蘭
二人はお供をつれてカンガルー帝国へ
・・・・・・一悶着
先に精霊の水を手に入れた蘭の明日はどっちだ

70．ランブル・オン・ザ・フォーチュン（FinalRound）

ナメンナの手から蘭に精霊の水が手渡されたその時だった・・・
精霊の水は蘭の手に納まる前にその姿を消してしまった

「え!?」

今起こった事が理解できずに皆が目を丸くした
とりあえず周りを探してみるが見当たらない
さては・・・と思いフリーザ様を見るがフリーザ様もキョロキョロしている

「ナメンナ!精霊の水をどうした!?」

「分からない・・・分からないの・・・何が起こったのか」

ナメンナもあたりの草むらを探してみたり自分の腹のポケットを探ったりしたが
どこを探しても影も形も見当たらない・・・忽然と姿を消してしま

ったのだ

「灰原・・・おれよそ見してて見てなかったんだ・・・
お前何か見たり聞いたりしなかったか?結構近くにいたろ?」

コナンはこの謎を解いてやろうと興奮気味に哀に耳打ちした
しかし当の哀は目の前で起こったことが理解できずにいたようだ

「これが・・・ザ・ワールドの能力・・・」

「はぁ?」

相当気が動転しているのだろう・・・
しかしそれは皆同じだった
そのためその場に起こった大きな変化に気付くのに遅れてしまったのだ

「あれ?占い師さん!どこ行ったんですか?」

最初に気付いたのはフリーザ様だった
彼の言った「グレート占いパワー」と言う言葉が頭を駆け巡る

「精霊の水が・・・」

「どうしよう・・・あれが悪用されでもしたら!」

「敵スタンドよ!攻撃を受けているわ!」

「落ち着けよ灰原・・・」

一方そのころ・・・
フリーザ様達がちまちまやっている場所から数ｋｍはなれた場所では

「きへえええあああああああああ！！！・・・はぁはぁ
やった・・・やったぞ・・・遂に精霊の水を手に入れた・・・」

喉を枯らしながらも奇声を上げ終えた老婆がビンを手にしていた
それを高く掲げながらまじまじと見入る・・・
ビンの中では透き通った水が揺れてダイアモンドのような輝きを放っている

「これさえあれば・・・」

「そうはさせませんよ・・・センセージュ」

若く張りのある声に老婆は振り返った

「久しぶりじゃなトロッタ・・・
ここが分かるとは・・・少しは腕を上げたようじゃな」

「あのお嬢さんから昔感じたのと同じ占いパワーを感じました
あのお嬢さんを媒体に精霊の水を瞬間移動させたのでしょう？」

「ふん・・・それを知っていると言うことは奥義を伝授されたか？」

トロッタはその質問には答えずにセンセージュの目を睨んだ

「あなたの野望を見過ごすわけには行きません・・・
この場であなたを無に帰します！」

「奢るな小童が！ちょっと奥義を覚えた程度で継承者気取りか！」

こうして二人の自称占い師の凡そ占いとはまるで関係の無いバトルが始まった

そして彼らがそれに気付かないはずはなかった

「フリーザ様・・・向こうに凄まじいパワーのぶつかり合いを感じます」

「そうですか・・・それでは私をコケにした罰を与えに行くとしますか」

フリーザ様達がその現場に到着した時

二人の戦いは極限を向えていた・・・奥義と奥義がぶつかり合いただ息をしているだけでも体力を奪われていく・・・

「あの・・・泣き虫寝小便たれ小僧がよくぞここまで成長したものよ・・・」

「あなたを倒すために・・・ありとあらゆる奥義を授かりました・・・

もはや奥義を持っているだけでは優位に立てませんよ・・・」

二人の占い師のプライドをかけた戦い・・・

それを目の前にしてフリーザ様達は声が出なかった

「占い関係ねぇ・・・」

誰のものともつかない溜息がもれた

「ぐっ！がは・・・」

しかし均衡状態が続いていた戦いに変化が訪れた・・・

「かっかっかっか・・・抜かったな小僧！
奥義を伝授されただけの者と正当継承者の違いを教えてくれるわぁ！」

「も・・・もうやめて！某テニスマンガみたいになってるからぁ！」

蘭の涙ながらの訴えも届かなかった
センセージュは最後の力を振り絞る・・・

「へぇえぇえぇえぇえええええええ・・・えほっ！えほっ！」

・・・・・

そこには地に伏したトロッタがいた
生きてはいるが今なら猫でも殺せそうなくらい弱っている

「へひひ・・・精霊の水は・・・渡さん・・・」

「どうして？」

疲れた様子のセンセージュに蘭は聞いた

「お前はあんな占いが本当だと思ったか？くひひ・・・可愛いのぅ
本当はわしが精霊の水を手に入れたかったのじゃ・・・お前は利用

されただけじゃ」

「じゃあ・・・新一が死ぬって言うのは？」

「え〜」

「ふふ・・・あなた死ぬらしいわよ」

蘭の潤んだ瞳を見ながらセンセージュは邪悪な笑みを作った

「知っとるか？大抵の乙女は好きな男が死ぬと知ると何にでもすがるようになるんじゃ」

蘭の心を弄びやがって・・・
コナンが目に怒りの炎を燃やしながらボール射出ベルトに手をかけた
しかし当の蘭は・・・

「な〜んだ・・・新一死なないんだ・・・
じゃあお土産だけ買って帰ろう・・・お父さんとお母さんと園子と・・・」

誰にお土産をあげようか考えながら蘭はさっさと帰ってしまった
蘭は新一に気を取られすぎて状況がまるで分かっていなかった

「おい・・・」

しかしこのお方はそうも行かなかった・・・
フリーザ様は精霊の水を手に入れるためわざわざやって来たのだ

「その水は私の物ですよ・・・痛い目に会いたくなかったら渡しな

さい
もっとも・・・渡しても痛い目に会わせますけどね・・・」

そういうとフリーザ様はエネルギー波を放った
思いきり不意打ち・・・帝王の誇りもくそもない・・・

「ちょっと汚くない？」

「うるさいですよハイバラさん・・・このフリーザ様に卑怯という
言葉は・・・！」

しかしセンセージュは全くの無傷だった・・・

「ふん・・・こんなもの占いパワーの前では無効じゃ」

ニヤニヤと嘲笑うセンセージュ・・・
その表情がフリーザ様の怒りを更に煽る

「このババア！」

2発目・・・

「効かんと言って・・・言って・・・痛っ・・・・てぇ？」

余裕をかましていたセンセージュは突如襲ってきた痛みに気付いた
お腹に穴が空いている・・・向こうの景色が綺麗に見える

「・・・ふふ・・・捕らえました」

それまで気を失っていたトロッタがつぶやいた

センセージュの顔色がみるみる変わって行く

「このガキがぁ！今とどめを・・・がはぁ！・・・
しまった・・・叫びすぎて喉が・・・」

何とか叫び声を上げようとしていたセンセージュの前にそれは現れた

「それじゃあ・・・消し去りますよ？」

・・・・・数日後の米花町
フリーザ様のもとをトロッタが尋ねてきた
先日のお礼と事の詳細の説明に訪れたのだ
どうやらセンセージュはグレート占いパワーを利用して
全宇宙を支配しようと企んでいた占い師らしい・・・
でも世間一般ではこういう人を占い師とは呼ばない

「ところでトロッタさん・・・」

「なんですかフリーザ様？」

カンガルー帝国から帰ってからフリーザ様には気になることがあった

「精霊の水はゲットしました・・・で？私はどの辺がハッピーになったんですか？」

「あぁ・・・飲まなかったんですか？」

「飲む？」

「はい・・・とっても美味しくてハッピーな気分になれますよ」

「・・・ただの美味しい水ですか」

「え?・・・そうですけど」

「でもセンセージュさんはそれで全宇宙征服を・・・」

「あぁ・・・彼女の占いパワーは喉が命なんです・・・
でも彼女は長年叫びすぎて喉がやられてしまって・・・
それで精霊の水で喉を潤してフルパワーで宇宙を征服するつもりだったんですよ」

・・・・・・

「フリーザ様は喜んでくださったかな?」

「大丈夫よケリトバ・・・それよりあれが悪用されなくて良かったわ」

「あぁ・・・あんな美味しい水が人間界に出まわったら
人間の飲料水市場が大打撃を受けてしまうよ・・・
サ○トリーとかが怒って苦情を言ってこられたら僕らの平穏も脅かされる」

「人間には南ア○プスの天然水が調度いいのね・・・」

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード6「やっちゃった・・・」

「わ～い！博士にキック力増強シューズもらったぞ！これで一杯犯人を捕まえられるぞ」

「きゃあああ！！！コナン君助けて！」

「あ！歩美ちゃん！どうしたんだい？」

「悪い人が追いかけてくるの！助けてコナン君！」

「うおおおおお！俺は悪い人だぁ！」

「くそ～・・・そうだ！このシューズで・・・食らえ！」

ガン！

その場に倒れ動かなくなる悪い人・・・

「え？・・・嘘だよな・・・冗談きついぜ」

「コナン君・・・その人死んだの？」

「ははは・・・そんなわけ・・・うわ！クビ折れてる！死んでる！」

「えぇ！？」

「ちくしょー！博士がこんなもん作るから！」

その時コナンの蹴った空き缶は壁に当たって跳ね返り
そのままコナンを直撃した・・・
頭から夥しい血を流してピクリとも動かない

「コナン君・・・忘れないよ！」

歩美は涙を流しながら夕日の中を交番に向って走るのだった・・・

今日の四文字熟語「因果応報」

70．ランブル・オン・ザ・フォーチュン（FinalRound）（後書き）

ランブル・オン・ザ・フォーチュン終了です
占いとは関係なかったですね・・・＾＾；
もう一度言っておきます
占いとは何の関係もありません！
登場する人物は占い師を語るだけの変態です
占い関係の苦情は一切受け付けません
・・・だめ？

71．白い悪魔

季節はすっかり冬
冬と言えば空からの白い贈り物
それは地面をすっぽり覆い隠し
白銀に輝いて疲れた人々の心を癒してくれます
しかし・・・
そんな白い天使にも別の一面が・・・

第７１話　白い悪魔

「ただいま～」

発明のための材料の買い出しに行っていた博士が帰って来た
玄関をくぐると同居している二人の住人に声をかける
『おかえりなさい』
いつもは返って来るその言葉が今日に限っては返って来ない
どうしたのだろう？と博士はそそくさとリビングに向った

「・・・こりゃまた・・・なんとも」

寒い外から帰って来た博士は一瞬目眩に襲われた
部屋の中はまるで別世界
ガンガンに効いたヒーターのせいで常夏のリゾートのようだ

「あ・・・おかえりなさい博士」

あくびをかきながら哀が博士に気付いた
茶菓子とファッション誌を広げてソファーの上でごろごろしている
そしてその反対側のソファーではフリーザ様が寝っころがっていた

「博士さん・・・お茶いれなさ～い」

「コレ！二人ともなんとだらしない・・・」

博士はだれた二人に一喝を入れるものの暖簾に腕押し
まったく聞く耳を持たない
ふ～むと考え込んでから博士は思いたったように言った

「そうじゃ・・・哀くん・・・フリーザ様・・・
おつかいを頼まれてくれんか？新一の所まで」

「寒いからやーよ・・・工藤君に来させればいいじゃない」

「お前が行けよ」

ちょっと芽生えた殺意を抑えながら博士は続けた

「まぁまぁ・・・帰りにポアロに寄れば良いじゃろう
実はこの間割引券をもらったんじゃがあと2枚残っとるから二人で使うといい」

博士の手に握られた2枚の券
その券を見たフリーザ様の眉間にしわが寄る

「博士さん・・・あなたそれをもらっていて黙ってたんですか？」

「え・・・いや・・・まぁ・・・」

「帰って来たら罰を与えますからね・・・ハイバラさん！行きますよ！」

博士から券を奪い取るとフリーザ様は哀に言った
しかしポアロの割引券ぐらいで動くほど哀は安い女ではない

「いってらっしゃ～い・・・」

気の無い返事が返って来る
怒ったフリーザ様は素早く哀の後に回り込むと哀の首根っこを掴みそのまま引きずって玄関に向った

「ちょっと！せめてコートぐらい・・・」

「子供は風の子です！そのまま来なさい！」

「さっきまでこっち側だったくせに・・・風邪の子になっちゃうわよ」

わぁわぁ騒ぐ二人を見送り
博士を残したリビングには静寂が訪れた

「なんじゃ・・・二人とも元気じゃないか・・・」

しばらくして・・・
二人はコナンに博士の新しい発明品を届けポアロで一服していた
コーヒーを飲みながら梓やお馴染みのダイガクセイと談笑をする

そんないつも通りの時間がポアロに流れていた

「あら？」

ふと外を見た哀が声をもらした
窓にはいつもの景色・・・それをいくつもの白い粒が横切って行く

「わぁ！雪が降ってきましたね」

「そういえば今日は降るって天気予報で言ってたな」

突然の白い贈り物に四人は話に花を咲かせた
それぞれ雪にまつわるエピソードなどを面白おかしく話す
フリーザ様にはなかったが・・・
そうこうしているうちに大分時間が経ってしまった

「ねぇ・・・そろそろ帰ったほうがいいんじゃない？」

時計を見ながら哀が言った
もう3時間もポアロに居座っている・・・

「おっと・・・もうこんな時間でしたか・・・梓さん！お勘定！」

店の外に出ると路面は白く覆われていた
天気予報では寒波が来ると言っていたから結構積もるのかもしれない

「さっさと帰りましょう」

哀はフリーザ様を促すと歩き始めた・・・

二人が家に向う間も雪はどんどん積もっていった
歩くたびにサクサクと音をたてる程である

「珍しいわね・・・東京でこんなに降るなんて」

「まぁでもなかなか美しいじゃないですか・・・このフリーザ様にぴったりです」

フリーザ様は自分をどんなキャラだと思っているのだろう？
そんな事を考えながら歩いていた哀だったが次の瞬間その思考はストップされた

キキキキッ！！！グワシャン！！！

凄まじい音がしたかと思えば目の前の電柱に車が突っ込んでいる
ボンネットは哀れにもジャイアンに殴られたスネオの顔のようになっている

「うわ・・・台無しですね・・・」

幻想的な風景に見とれていたフリーザ様が溜息をついた

「馬鹿な事言ってる場合じゃないでしょ・・・運転手は無事かしら？」

哀は急いで車の方に駆け寄る・・・が

ドテッ！

急いだのがまずかった・・・
雪に足をとられて転んでしまったのだ

「ぷっ・・・」

思わず吹き出したフリーザ様をキッと睨みつつ哀は運転席を確認した
そこにはエアバックに挟まれてモゴモゴともがいている運転手がいた
どうやら大した怪我は無いようだ・・・

「大丈夫？」

「えぇ・・・なんとか・・・」

フリーザ様も寄って来て運転席から引きずり出してやると
スーツ姿の冴えない男が一人出てきた
男は哀の言葉に答えながら車を見た
スネオ状態の愛車が目に映る・・・

「あぁ・・・何て事だ・・・」

男は頭を抱えてその場にうずくまってしまった
哀が心配そうに顔を覗きこむ

「車ぐらい・・・体が無事だったから良かったじゃない・・・」

「そうじゃないんです！」

哀を見上げた男の目は潤んでいる・・・何か訳ありのようだ
とりあえず警察を呼んで事故の処理を済ませると
哀とフリーザ様は男を家に連れて帰った

「どうぞ・・・」

海老原と言うらしいその男に博士がコーヒーを差し出した
どうもと言って受け取ったその顔は暗い・・・

「で・・・どんな訳があるの？」

哀が切り出すと海老原はコーヒーを一杯口に含んだ後口を開いた

「実はこれから秋田まで行かないといけないんです」

「この雪の中車で秋田まで？危ないわよ・・・事故ったけど・・・」

「電車とかいうやつで行けばいいじゃないですか・・・あれ快適ですよね」

フリーザ様の言葉に首を横に振ると海老原は続けた

「電車も飛行機もこの天気で停まってしまってますよ・・・
でもどうしても秋田まで行かなくてはいけないんですよ・・・」

海老原の話によると・・・
彼には訳あって離れ離れに暮らしている妻が秋田にいて
その妻が妊娠しているらしい・・・
それが今日になって急に具合が悪くなったらしく
身重の体に何かあっては・・・と休みをもらって秋田に向うことにしたらしい

「まだ予定日まで二ヶ月もあるのに・・・何かあったら・・・」

「で・・・心配だからすぐに行ってあげたい・・・というわけじゃな？」

黙って頷く海老原・・・
手の中のコーヒーは既に冷めてしまっている
それをテーブルに置くと海老原はすくっと立ち上がった

「お邪魔しました・・・これからレンタカー屋に行ってみます！」

そう言って立ち去ろうとする海老原
博士と哀は必死で引き止めた

「コレコレ！どうせこの雪じゃ車でも辿り着けん！」

「それにあなたの身に何かあったら奥さんとお腹の子供はどうするの！？」

哀の言葉にはっとした海老原は歩みを止めた
とはいえ秋田では妻とまだ見ぬ我が子が苦しんでいる

「くそ・・・どうすればいいんだ！」

「大丈夫よ・・・きっと向こうのお医者さんとかがうまくやってくれてるわ」

「甘い！！！」

そこで突然フリーザ様が割って入ってきた
この男が関わるとろくなことにならない・・・哀は頭を抱えた

「ハイバラさんにはこの方の苦しみが分からないのですか？
医者に任せて東京でのうのうとしていろと？
まさに渡る世間は鬼ばかりですね！」

「それはドラマのタイトルじゃ・・・」

博士のツッコミを無視してフリーザ様は続けた

「医者の手におえない状態で今夜が山だったらどうするんですか？
そうじゃなかったとしても医者が無能で医療ミスとか・・・
いや！病院に行く途中でさっきの海老原さんみたくドカンと」

ブシュウッ！！！

突然フリーザ様を茶色の霧が襲った
聞くに耐えかねると判断した哀がコーヒーを使って毒霧攻撃をしかけたのだ

「何するんですか？消し去りますよハイバラさん？」

「何不安にさせるようなこと言ってるのよ！」

海老原はそうとう効いたのか顔が青ざめてそわそわしている

「大丈夫じゃよ・・・きっと大丈夫・・・」

そんな博士の言葉も届いていない様子だった
重苦しい空気がリビングを支配し始めていたが・・・

「分かりました！」

再び口を挟んできたフリーザ様・・・哀は睨みつけて制止しようとしたが

ブシュウッ！！！

「きゃあああ！！！」

フリーザ様の逆襲の毒霧攻撃で目をやられてしまいそれは叶わなかった

フリーザ様はタオルで目を拭う哀を尻目に海老原の側に行くと言い放った

「私が運転して連れて行ってあげましょう！感謝しなさ～い！」

果たして海老原は秋田に辿り着けるのか？

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード7「蘭・・・観戦中」

「いよいよ始まったわね・・・」

「うわっ入った！あぁ・・・あ～あ・・・日本人は完全に消えたわね」

「そこだ！行け！負けるな！はぁ・・・やっぱ強いなぁ」

「どっちなの？・・・ふぅ・・・とりあえず引退は持ち越しね・・・」

「結構ガンガン来るわね・・・あぁ！・・・すごい！一発で・・・私もあれやってみたいわ・・・明日の部活で練習してみよう」

「うわぁ・・・やっぱ男の人だとあれはキツイわよね・・・」

「えぇ！！！・・・ってことはリザーバーが上がって来るんだ・・・」

「きゃあああ！！！・・・やっぱ強いなぁ・・・ってことはこれで引退か・・・」

「去年と同じ決勝になるのかしら？って・・・あぁ！効いた！・・・・・すごい！すごい！やっぱ暴君って言われる男ね・・・」

「がんばれ！最後まで諦めないで！・・・あぁ・・・やっぱり強かったわね・・・でもあの向っていくスピリットはさすがね・・・」

「蘭姉ちゃん・・・何見てるの？」

さて・・・蘭は何を見ていたのでしょうか？

71．白い悪魔（後書き）

いやいや・・・
随分遅くなりました
何しろいろいろあったもので・・・
具体的に言うと
Ｋ－１のゲーム買って遊んだり
寝正月したり
Ｋ－１のゲームで遊んだり
昼過ぎまで寝たりしてました＾＾；

72．今週のザ・ベスト

日本を襲った歴史的な降雪
そんなことがあった日に海老原は愛車を運転し
ひとり秋田へ向おうとしていたが途中で事故に
その場に居合わせた二人に助けられた
「あの日は秋田に残した妊娠中の妻の具合が悪くなったと聞いて
すぐにでも秋田へ向いたい心境だったんだ・・・
でもまさか・・・あんな事になるなんて・・・」

第７２話　今週のザ・ベスト

「絶対にだめよ！」

哀が断固として反対する
フリーザ様は一度博士のビートルをボコボコにし
恐ろしく高額な罰金と賠償金を請求された前科があるのだ
そんな男の運転に任せたら海老原は秋田ではなくあの世に到着してしまう

「大丈夫ですよ・・・信用無いですね」

「当たり前よ！前科者のくせして・・・」

「それに免許証も持っとらんじゃろう？」

哀と博士が阻止しようと必死になって食い下がる

しかし当のフリーザ様はまるで聞く耳を持とうとしない

「大丈夫ですよ！実は二人に内緒で特訓してたんですから」

そう言うとフリーザ様はその特訓の成果を見せることにした

・・・・・ブゥゥゥゥン！

凄まじいエンジンの音と共にタイヤが滑らかな軌道を描く

無駄の無い動きはまるでプロのレーサーである

「どうです・・・うまいもんでしょう？」

「はぁ・・・大したもんじゃのぅ」

「そうね・・・」

そのドライビングテクニックを前に哀は溜息をついた

「マリオカートじゃ秋田まで行けないけど・・・」

哀は疲れ果てた表情でゲーム機のコンセントを抜くと

海老原の方をチラリと見やった

「まぁ奥さんなら大丈夫よ・・・雪が収まったら駆けつければいいじゃない」

優しい表情で諭す哀

海老原はがっくりとうなだれ諦めの表情を見せた・・・が

ブシュウッ！！！

「きゃあああああ！何よもう！」

哀を再び毒霧攻撃が襲った

「ちっ・・・腰抜けが！良いですか？ハイバラさん？
良く覚えておくんですね・・・諦めたらそこで試合終了なんですよ
！」

それだけ言うとフリーザ様は携帯を取り出した
誰かに電話をしているのか傲慢な口調で上からものを言っているよ
うだ
２～３分話をすると電話を切った

「ＯＫです！もうすぐ雪道専用車両・運転手付きが来ますよ」

「えぇ！本当ですか！？」

それから半信半疑で待つこと３０分・・・それはやって来た

・・・・・数時間後
フリーザ様と哀・・・そして海老原を乗せたそれは東北の山道を突
き進んでいた
除雪車・・・
並み居る雪を掻き分け憮然と突き進む勇者の名前はそれであった
ちなみに運転手は・・・

「桜塚さん・・・なんでこんなもの持ってるのよ？」

見るからにそっち系の人・・・桜塚やっさんであった

「あぁ？借金返さねぇ野郎の家の前に雪を積んで嫌がらせしたり
この巨大な車体でそのまま家に体当たりしたり・・・まぁ多目的だな」

「反社会的ね・・・」

そんな会話をしつつも除雪車はズンズン進んで行った
このまま順調に秋田まで行けるだろう・・・だれもがそう思うぐらいに
しかししばらくすると皆の表情が曇り始めた

「くそ・・・雪がすごすぎてうまく進めねぇ・・・」

目の前にあるのはもはや壁と呼んだ方が良いような雪
しかも吹雪も激しく視界は最悪・・・
しかもそこは一歩間違えれば谷底へ・・・という山間の道である

「何とかならないの？」

「私が吹っ飛ばして上げますよ」

そう言うとフリーザ様は前方の雪めがけエネルギー波を放った
閃光が止むとそこにはぽっかりと道が開かれている

「よっしゃ！これなら進めるぜ！」

そんな喜びもつかの間だった・・・

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ・・・

地鳴りのような凄まじい音が鳴り響く
音は遠くからどんどん近付いて来るようだ

「まずい！雪崩だァァァ！！！」

「フリーザ様のせいね・・・」

「か・・・佳苗・・・佳苗ぇ！！！」

・・・ん

・・・・・・ラさん

「ハイバラさん！」

哀が目を覚ますと目の前にフリーザ様の顔があった

「寝起きで見るもんじゃないわね・・・」

「殺しますよ？」

悪態をつきながら哀は何が起こったのか思い出すため頭を回転させた
ぼんやりとしていた頭が冴えてくるにつれ
先ほどの惨事がありありと蘇って来る
哀はハッとして辺りを見回す・・・見渡す限りの銀世界

いつの間にか雪が止んだのだろうか青空が広がり東の空に日が見え
はじめている

「え・・・なんで東に太陽が・・・たしか夕方だったはずだけど・・
・」

「夜通し探したんですからね・・・感謝しなさ～い！」

「じゃあ随分長く埋まってたのね・・・私も悪運が強いわね」

実際哀は運が良かった・・・
雪崩により除雪車からはじき出された後
運良く山の斜面にできた窪みにはまったのだ
適度な空気と温度、気絶していたことによる体力の温存により生き
延びたのだ

「で・・・海老原さんは？」

「んっふっふ・・・私に最初に発見してもらえて光栄でしょう・・・
」

「そう・・・手分けして探しましょ！」

日が登り始めているということはあれから１０時間は経っている
急がなければ海老原の命が危ない・・・

「はっきり言って絶望的でした・・・
ハイバラさんは運良く呼吸のための空気と空間があったため助かり
ましたが
海老原さんがそう言う状況にあるとは・・・限らなかったからです」

「何ブツブツ言ってるのよ・・・見つかったの？」

「いえ・・・」

某番組風に喋って盛り上がっていたフリーザ様だったが
目の前に人の手を発見し表情は真剣なものへと変わった
必死で掘り起こしてみると

「・・・ゲホッ！・・・フリーザ様か・・・助かったぜ」

「なんだ・・・桜塚さんですか・・・海老原さん知りません？」

「何ガッカリしてんだよ！・・・ここには俺一人だぜ」

「そうですか・・・じゃああなたに用はないですね」

「ちょ・・・何埋めてんだよ！待て！待って！あぁ待ってくださ・・・」

「何か聞こえたけど・・・見つかったの？」

「何も・・・」

それから数十分後・・・
懸命の捜索も虚しく二人は海老原の影も形も見つけることが出来ずにいた

「海老原さあぁぁぁん！」

叫んで見ても応えてくれるのは山彦だけ・・・
虚しく響き渡る自分の声を聞きながら二人は辺りを慎重に探って行った
すると哀が木の間に何か動く物を見つけた

「海老原さん？」

一瞬期待した哀だったがそこに現れたのはヘルメットにはんてんを着込んだ
凡そ海老原とは似ても似つかぬ中年の男だった

「おめぇたちはひょっとして雪崩に巻き込まれたのか？」

「その通り！何かご用でしょうか？」

「その様子じゃ大丈夫そうだな・・・」

良く見ると同じような格好をした男がそこらにいる
どうやら地元の消防団らしい・・・

「ねぇ・・・スーツ姿の男見なかった？」

哀は消防団の団長を務めるというその男に聞いてみた

「ん？それならこのずっと下で見つけたな
ただ体中打ってたし呼吸もしてなかったからすぐに病院に運んでもらったけど
その後どうなったかはちょっと分かんねぇな・・・知り合いか？」

「発見された海老原さんは長時間雪に埋まっていたことにより呼吸が停止
一刻を争う状態の中救急車で病院に搬送された・・・」

「おめぇ何ブツブツ言ってんだ・・・？」

「無視してちょうだい・・・それで？どこの病院に？」

待機していた救急車に乗り込み
海老原が搬送された秋田市近郊の病院へと向った
病院に着くと二人は看護士や医者の制止を振り切って受付に行き
数時間前に搬送されたらしい海老原の病室へ向った

「あ・・・フリーザ様・・・」

呼吸器を付けているものの予想以上に元気そうな海老原
某番組風に長時間に渡る大手術を予想していたフリーザ様はガッカリだった
そんなフリーザ様を小突きつつ病室にいるもう一人に気付いた哀はその海老原の異様なまでの元気な様子に納得した

「紹介しますよ・・・妻の佳苗です・・・」

お腹の膨らんだ女性がペコリと頭を下げた

「主人の我侭を聞いていただき本当にありがとうございました」

「奥さんもこの病院に運ばれてたのね・・・奥さんは大丈夫なの？」

「えぇ・・・そんな心配するようなことではなかったんですけど・・・」

「結局私が怪我しただけでしたよ・・・ははっ・・・」

何はともあれ久しぶりに会えた夫婦
水をささないためにも退散しようとした哀だったが
帰ろうと促したフリーザ様は哀の思いとは裏腹に口を開いた

「そして数ヵ月後・・・そこには後遺症もなく元気に走り回る海老原さんが」

「え?何の話ですかフリーザ様?」

唖然とする海老原夫妻を前にフリーザ様は声色を変えて続けた

「本当にもうダメだと思いましたよ・・・
病院で再び妻の顔を見た時は本当に最高の気分でした
もう除雪車は・・・こりごりですよ」

「フリーザ様?」

「気にしないで・・・コナンの後にやる某番組を見すぎただけよ・・・」

・・・・・
哀がフリーザ様を病室から引きずり出した2ヵ月後
そこには本当に元気に走り回る海老原の姿があった
そしてその手には新しい命がしっかり抱かれていたと言う

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード８「どっきり名探偵」

続いてのターゲットはこの高校生
彼はこの年で数々の事件を解決した高校生探偵である
今回のどっきりはその高校生探偵に小さくなる薬を飲ませてしまおうというもの
はたしてうまく引っかかるだろうか？

さてまずは黒尽くめの仕掛け人・・・ターゲットに接近すると
「飴でも舐めない？」と薬を手渡す・・・
わざとらしすぎるかと思われたが人の良いターゲットすんなりとそれを口に入れる
無事薬を飲ませることに成功！ターゲットがみるみる小さくなっていく
「なんだよこれ！体が縮んでるじゃないか！」とビビリまくりのターゲット
とりあえず知り合いの阿笠博士に助けを求める
が・・・この博士も仕掛け人
助けを求めるターゲットだがこのじいさん
なぜか靴を取り出す・・・
「コレはキック力増強シューズじゃ」と説明を始める
「そうじゃなくて元の体に戻りたいんだ」ターゲットが必死で説明
が・・・じいさん今度は蝶ネクタイを取り出した

「コレは蝶ネクタイ型変声機じゃ」とまた関係のない道具
イライラしてきたターゲット「そうじゃない」と必死の説明
するとじいさん「分かった分かった」と女の子を連れてきた
どうやら薬の開発者らしいが6才ぐらいにしか見えない・・・
「君と同じ薬を飲んだんだ」と言う説明にしぶしぶ納得するターゲット
しかしもちろんこの女の子も仕掛け人・・・
「解毒剤よ」と言って適当な薬を投与する
「大丈夫なのか?気分が悪くなってきたぞ」と訴えるターゲット
しかし女の子「男の子でしょ?がまんしなさい」とお説教
しぶしぶ言う通りにするターゲット・・・しかし一向に戻る気配が無い
終いには女の子「ん?間違ったかな?」と大混乱
コレにはさすがのターゲットもブチギレ
「ふざけるな!早く何とかしろ」と顔を真っ赤にして怒鳴り散らす
するとじいさん今度はメガネを持ってきた
「追跡メガネじゃ」とまた関係のない発明品
「ついにボケたか?クソじじい!」と言ってはいけないような言葉を連発
さすがに可哀想なのでここでネタばらし
解毒剤をもらうといつものスマイルで
「蘭には内緒にしといてくれ」と苦笑い
普段は見れないターゲットの本性にじいさん腹を抱えて笑い転げる
それにしてもこのじいさん・・・ノリノリである

72．今週のザ・ベスト（後書き）

なんかいろいろシステムが変わったらしいですね
小説の書き方一つで評価点も全然違うとか・・・
作者の皆さんはそれに合うように修正に追われている方もいると思います
さてさて私はどうしましょう？ということなんですが
結論を言いますと修正をするつもりはありません
確かに最低限の文章のルールは大事かもしれません
が・・・私はそのルールによってフリーザ様と灰原さんを縛りたくないのです
できるだけアンチェインでいさせてあげたいんです
ビスケット・オリバーです
なので一マス空けもしませんし句読点もこれからもつけません
たまに句読点つけたくてしょうがなくなりますが＾＾；
この作品の魅力を最大に引き出すためには付けないほうが良いと判断してこうしたので変えることはしないでしょう
それによって点数が下がるとしてもです
ってことで私はこれから誰に何を言われようとこのやり方で行きます
小説の最低限のルールをも破るパンク野郎になります
ハイパーウルトラメガパンクです
評価点を下げられようが酷評バシバシ付けられようが
俺達の自由を奪うことは誰にもできねぇぜ！
そして世界をぶっ壊す！
Ｙｅａｈ！
すみません・・・パンク過ぎました
まぁこれからはパンクノベリストとして頑張りたいと思います

73．がんばれ白鳥警部

キャリア組は全警察官の憧れ
所轄の刑事がいくら足掻こうが
キャリア組のスピード出世の前では蟻も同然
そんな皆のお偉いさんキャリア組
でも皆から妬まれたり
ノンキャリの刑事に好きな女を奪われたり・・・
涙がでちゃう・・・
だって・・・キャリア組だもん！

第７３話　がんばれ白鳥警部

「白鳥君！」

仕事の合間にコーヒーで一服していた白鳥は自分を呼ぶ声を耳にした
声の主を探してキョロキョロしてみる
少し離れたところで松本警視が手を振っていた

「なんでしょう？」

いつものお坊ちゃまスマイルで爽やかに歩み寄る

「知ってるかね？今度米花町にできるレジャー施設のことを・・・」

そのスマイルにおうおう！と応えながらも松本はすぐに話を切り出した

レジャー施設？あぁ・・・「米花平和科学研究所」とか言う
科学体験を通して子供に平和を教える目的で作られたって言うあの・
・・
白鳥は数日前に見たニュースの内容を思い出した
「お天気コーナーの新人アナが美和子さんに似てるんですよね・・・
」
「はぁ？」
どうでもいい独り言に松本は首を傾げた
「おほん！失礼・・・知ってますよ
で・・・そのレジャー施設がどうかしたんですか？」
「うむ・・・実は一仕事頼まれて欲しくてな・・・」
数日後・・・
親子連れを中心に多くの人で賑わうそこに白鳥はいた
彼の今回の仕事はこの「米花平和科学研究所」のオープンイベント
の警備
その全指揮を彼が担当することになったのだ
「白鳥警部！人員の配置は完了しました！」
「・・・あそう」
警部冥利に尽きる仕事のはずがやる気の無い白鳥

報告に来た千葉は白鳥の素っ気無い態度に思わず彼の顔を覗きこんだ

「何？」

ダルそうな顔で千葉の目を見返す白鳥

「いくらダレても佐藤さんは来ませんよ・・・非番なんですから」

「何言ってんだよ・・・分かってるよ・・・」

呆れた顔で去っていく千葉を引きつった笑顔で見送る

あ～あ・・・美和子さんが一緒だったらチョー楽しかったのに・・・

今頃同じく非番の高木君とデートでもして・・・

そしてあんなことやこんなことを！！！

くそ！くそ！くそ！高木め！

ノンキャリのくせしやがって！

「キャリアは関係ないでしょ・・・」

いつの間にか独り言が漏れていたのだろうか・・・

聞き覚えのある声にツッコミを入れられハッと我に返った白鳥

声の主は自分の脚の横にいた

「君は確か阿笠さんとこの・・・」

「灰原哀よ・・・どうでも良いけど真面目に仕事した方が良いんじゃない？」

相変わらず子供らしくないこと言うな・・・

白鳥はそう思いながら呆れた表情の哀を見た

「分かってるよ・・・今日僕は仕事に来たんだ・・・」

そう・・・ただの警備なら問題はない・・・
しかしこの施設の事務所と所長宛てに
オープンイベントで事件を起こす旨の予告状が届いているのだ
内容からしていたずらだとは思うが警戒しなくては
多くの市民の命が脅かされるかもしれないのだ
そして美和子さんの貞操が今高木によって脅かされようとしている・・・
ちくしょう・・・僕としてはそっちの警戒を・・・

「だから仕事に集中しなさいよ・・・ダメな人・・・」

「分かってるよ・・・ところで哀ちゃん・・・
君がいるってことは今日はコナン君も来てたりするのかい？」

「残念ながらあなた達がご贔屓の彼は来てないわよ」

白鳥はほっとした・・・
彼がいると絶対に事件が起こる・・・
予告状も届いているのでその上彼に来られては堪らない
彼のような不謹慎な生物は願わくば家から出ないで欲しいものだ
そんなことを白鳥が考えている時だった

「ちょっと！ちょっと！ハイバラさん！何油売ってんですか？」

聞きなれない声がする・・・
哀を呼んでいるようだが・・・現れた声の主は相当変わっていた
このクールな哀とは全く釣り合わないすごいビジュアル系だ・・・

「うるさいわね・・・今日は彼に連れてこられたの・・・
だから毛利小五郎もメガネ小僧も無しよ・・・」

「ったく・・・部下のくせにちょろちょろしないで下さいよ！」

ひょっとして高木君や美和子さんが噂していた『フリーザ様』だろうか？
実際に見るのは初めてだったので白鳥は少し興味が惹かれた

「何ですかこの青二才は・・・なに人をまじまじと見てるんです？」

「なるほど・・・噂通りだ・・・」

「消し去りますよ？」

ムカついてエネルギー波を放とうとするフリーザ様を哀が制した

「彼は警視庁の警部よ・・・初めてだったかしら？白鳥警部よ」

「何だ・・・高木さん達の知り合いですか？」

「えぇ・・・高木君達の上司ってことになりますね」

袖を直しながらやや胸を張って白鳥は言った

「そうですか・・・と言うことは私の部下になるわけですね」

その言葉に張っていた胸がペコッと折れた
なんで自分がこのビジュアル系の部下にならねばならないのか

「高木さんたちは私の部下・・・その上司ってことは私の部下です」

「え?いや・・・仮に高木君は部下としても僕があなたの上司ってことも・・・」

コケながらもフリーザ様の言葉に口を挟んだ白鳥警部
だがその横で哀は頭を掻いた・・・
やっぱり初対面の人にフリーザ様とのコミュニケーションは難しすぎる

「私より偉い者がいるわけないでしょう!」

掴み所がない・・・噂以上だ・・・

「ちょっと!白鳥さん!」

フリーザ様を前にして唖然とする白鳥を千葉が呼びに来た

「何遊んでんですか?もうすぐオープンイベントだから来てくれって所長がさっきから呼んでるみたいですよ?」

「あ・・・あぁ・・・分かったよ・・・それじゃあね哀ちゃん・・・と」

「フリーザ様!ですよ」

「フリーザさん・・・」

「様だって言ってるでしょ!」

そう言えば様を付けないと怒るって美和子さんが言ってた気がする・・・

美和子さん・・・あぁ美和子さん・・・

「様を付けなさいよ・・・無礼な男ですね」

美和子の笑顔をいっぱいに思い描いているところに
フリーザ様のお怒りフェイスがズンと迫ってきていた

「あぁ！・・・はいはいフリーザ様」

「白鳥さん！早くして下さいよ！」

「分かってるよ・・・うるさいな」

フリーザ様に怒られ・・・千葉刑事に急かされながら彼は走って行った・・・
今日が今までの人生でＢＥＳＴ３に入るぐらい大変な１日になるとも知らずに

「まったく・・・これだから温室育ちのお坊ちゃまは・・・」

「あなたも似たようなもんでしょ・・・」

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード9「ＣＯＮＡＮ”ＴｈｅＭｏｍｏｔａｒｏ”」

むかーしむかし
あるところに・・・
へぼ探偵とその娘が住んでおった・・・
ある日探偵は山へヨーコちゃんライブへ
娘は川へ洗濯にいった・・・
娘が川で洗濯していると川上から大きな桃が流れてきた
「すごい！大きい桃があるものね」
娘はそれを拾い上げると家に持って帰って食べることにした
父親の探偵と一緒に桃を割ると
中からメガネの賢そうな男の子が出てきた
二人は桃から生まれたので桃太郎にしようと思いましたが
「僕の名前は江戸川コナン」
と名乗られてしまったので
二人は泣く泣く江戸川コナンにしました・・・
ある日コナンは鬼退治に行くと言い出しました
鬼には因縁があるのです・・・
コナンがまだ工藤新一だった頃に薬を飲ませ
桃にしてしまったのです
娘はコナンのためにキビダンゴを作ってやり
探偵は自慢のヨーコちゃんビデオをレンタルしてくれました
コナンが歩いていくと茶髪の女の子が歩いてきました
コナンは仲間になってくれると思いキビダンゴを渡しました
「舐めてるの？」
拒否されました・・・
でもその子は桃になる薬を作った張本人だったので
一緒に鬼ヶ島まで行くことにしました
鬼ヶ島につくと・・・二人を待っていたのは大量の炭と灰

鬼ヶ島で大火事でもあったのでしょうか？
「これが彼らのやり方よ」
鬼達は証拠を隠滅して逃げてしまったようです
コナンの戦いはまだまだ続く

73．がんばれ白鳥警部（後書き）

なんか良く考えたら白鳥警部一回も出てなかったですね
可哀想なんでこれから少しの間は白鳥警部シリーズです
もちろんパンクです
ＯｈＹｅａｈ！

７４．マジでがんばれ白鳥警部！

溢れだす熱い思い
こぼれだす愛の溜息
燃え尽きるほどヒートなこの思い
でもそれは君には届かない
君には違う風が吹いているから・・・
もどかしさが苦しくて・・・切なくて・・・
涙がでちゃう
だって・・・キャリア組だもん！

第７４話　マジでがんばれ白鳥警部！

今時カイゼル髭か・・・
白鳥は目の前の老人の口元が気になって仕方なかった
「米花平和科学研究所」の所長・・・綾小路武はおかしな男だった
慎重は１５０ｃｍあるかないか・・・
細身で弱々しい体の天辺にあるのは不毛な頭・・・
メガネの奥にはしょぼしょぼとした小さい目が覗いている
でも髭はカイゼル髭・・・それも相当ご立派なものである

「４０年間こいつの手入れを欠かしたことは無いでな・・・」

「はぁ？」

「髭じゃよ・・・気になっとるんじゃろ？」

ずばり図星をつかれて苦笑いの白鳥だが
今日は別に髭を見に来たわけではないので本題を切り出すことにした

「警備なら万全ですよ・・・ご安心下さい
まぁ脅迫状の内容からしてただのいたずらだと思いますがね」

「ふむ・・・すまんのぅ・・・
わしもいたずらだと思うたがどうにも心配でのぅ・・・」

そう言うと髭だけ立派な所長さんはゴホゴホッと咳をした
白鳥は背中をさすりながら「大丈夫」とだけ返した

「それではわしは準備があるので・・・そうそう
ここも一応科学研究所・・・警備の方も不用意に色々いじらんで下さい
いろいろ危ない機材やなにやらありますからな・・・」

それだけ言うと
綾小路やよろよろと杖をつきながら歩いていった
それを見送る白鳥のもとへ千葉がやって来た

「どう思います?やっぱりいたずらでしょうか?」

「さぁね・・・ただどちらにせよ何も起こらないようにするのが我々の仕事だ」

「なに言ってんですか?これだからお坊ちゃんは・・・」

さっき聞いたばかりの声がしたので振り返る白鳥
そこにはフリーザ様と哀がいた

「僕は何かまずいこといったかな?」

この場を仕切る警部としてそれなりのことを言ったつもりだったがフリーザ様の不満そうな顔が目に映る
白鳥はいったい何がいけないのか考えたが分からなかった

「何か起こらなきゃそれを目当てに来た我々はとんだ無駄足ですよ!」

情報が漏れていたのか・・・
つまるところこの二人は野次馬らしい
何で純粋に施設を楽しめないのかと白鳥が思った時だった

「悪いけど純粋にここを楽しむほどフリーザ様は普通じゃないの・・・諦めてちょうだい・・・」

哀が白鳥の内側をえぐるように言葉を突き刺してくる
ひょっとして自分はサトラレなんじゃないかと一瞬不安になってしまった

「何も起こらないのが一番に決まってるさ・・・」

何はともあれ自分の仕事はそれである
白鳥は自分に言い聞かせるようにそれだけ言うと行ってしまった

「全く・・・こんなに厳重に警戒されたら起こるものも起こりませんよ」

施設の敷地内にあるカフェで一服しながらフリーザ様は不満を漏らした
哀はミックスジュースを飲みながら「はいはい」と適当に聞き流している

「この施設の所長とやらは相当な腰抜けですね！
もう！それ飲んだら帰りますよ！ハイバラさん！」

怒りの矛先が自分に向かないようにさっさとジュースを飲み干すと
哀は席を立って歩き始めた
フリーザ様もプリプリと怒りながら哀の後を追うように席を立つ
その時だった
何者かがフリーザ様にぶつかった

「なんですか？自殺志願者ですか？」

自分の足元で盛大にすっ転んでいる男に
フリーザ様は不快感と怒りの眼差しを向けた

「すみません」

しかし男はそれだけ言うと慌てた様子で走り去って行った

「何ですかあの男は！これだからゆとり教育は・・・」

「ゆとり教育世代はまだ成人してないわよ・・・あら？」

哀はフリーザ様の足元に妙な封筒を発見した
先ほどまでは無かったが・・・さっきの男が落としたのだろうか

哀が拾い上げるとそれはすぐにフリーザ様に没収された

「さっきの男のですね・・・どれどれ・・・」

「何開けてんのよ・・・」

中からは一枚の紙が出てきた

『あれだけ教えて上げたのに・・・
いけないんだ・・・いけないんだ・・・
先生に言ってやろう・・・神様に言ってやろう・・・
いや・・・僕が罰を下してあげよう・・・』

「・・・・・・脅迫状ですね」

「・・・・・・脅迫状ね」

二人は白鳥の所に行くことにした

「確かに・・・事務所に届いたものと似ているな」

フリーザ様が持ってきた紙切れを見ながら白鳥は言った

「で・・・これを落とした人は？」

白鳥が質問したときだった
一人の男が白鳥の所へやってきた

「白鳥警部・・・そろそろオープンイベントですので最終の打ち合

わせを」

「あ！白鳥さん！この男ですよ！捕まえるんですよ！」

え？と白鳥は一瞬驚いた
その男はさっきから何度も顔をあわせている所長の秘書だった
男も突然のことにおろおろとしている

「脅迫状を出したのはあなただったんですか？」

「え・・・なんです？・・・なんのことです？」

おどおどとしながら知らん振りをする男
しかし明らかに挙動不信だった
するとフリーザ様が先程の封筒を取り出した

「往生際が悪いですよ！さっき私にぶつかってこれを落としたでしょう！」

すると男の表情がどんどん青ざめて行く
「どうなんですか？」と白鳥がつめ寄ると男はついに観念した

「所長が・・・所長が悪いんです・・・」

連行しようとしたところで男がつぶやいた
あのよぼよぼカイゼルが悪いとはどういうことだろう？
白鳥は少し気になって話を聞いてみることにした

「この施設は平和目的みたいに宣伝してますけどとんでもない！
裏で新兵器を開発してはテロリストに売りさばいて金儲けをしてい

るんです」

「まさか・・・あの所長さんが？」

白鳥の頭には先程のひ弱そうな綾小路の姿が思い浮かんだ

「平和とか言っておけば補助金もでますからね
だからそれを止めさせるために仕方なく脅迫状を・・・
本当なんです！信じて下さい警部さん！」

そうは言われてもにわかに信じ難い話である
しかし嘘を言っているようにも見えない
どうしたものかと白鳥が考え込んでいるとフリーザ様が口を挟んできた

「白鳥さん・・・所長とやらを捕まえなさ～い！」

「え・・・でも証拠もないし・・・」

「証人がいるでしょ！証拠なんてそいつにどうにかさせれば良いんです」

フリーザ様はそう言うと男を見た
しかし男はうつむいて黙ってしまった

「無理ですよ・・・確かに施設の地下に行けば兵器とかいろいろありますけど
そこに行くには所長の許可が必要ですし・・・所長も最近感づいたらしくて
私はあまり信用されてませんから・・・」

「場所はわかるんですね？」

「え？」

男はフリーザ様の言葉に一瞬戸惑ったが間をおいて「はい」と答えた

「なら案内しなさい！私が取ってきましょう」

「ちょ・・・フリーザさん！」

あまりに急な話なので白鳥はフリーザ様を止めに入った

「様をつけなさい！大丈夫ですよ・・・それに手柄をたてたらどうなります？」

手柄をたてたら・・・

もしここで自分が所長の悪事を暴いたら・・・

「白鳥君！米花平和科学研究所の悪事を暴いたんですって？」

「えぇ・・・僕の正義感が許せなかったので」

「巨大な悪に立ち向かう人って素敵！高木君より好きになっちゃった・・・」

「美和子さん・・・」

・・・・・・

「美和子さん・・・いけません美和子さん・・・あぁ！」

「ダメな人・・・」

一人美和子さんに浸る白鳥を置いて行動は開始された
果たして米花平和科学研究所の・・・綾小路の野望を阻止できるのだろうか？
馬鹿面で妄想に浸る白鳥を見て哀は少し心配になった

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード１０「若き日の思ひ出～ＶＳスケバン～」

それはそれは・・・
まだあの二人が若かった頃のお話・・・

「おい毛利！みろよあの女・・・良い体してるよな」

「高校生だぜ・・・年上の女か・・・
やっぱりどっかのションベン臭いのとは違うよな」

小五郎少年も思春期真っ盛り
女子高生の体に見とれていたところだったが
突如後から物凄い衝撃を受けた

「痛ってぇ・・・」

「だれがションベン臭いよ!スケベ!」

「え・・・英理!なにしやがんだよ!
俺は別にお前だなんて一言も言って無いぜ・・・
自分で認めるのか?ションベン臭いって」

「何よ!スケベのくせして!」

「はいはいまた夫婦喧嘩かよ・・・」

仲良く騒いでいたその時だった
小五郎は別方向から頭を捕まれた・・・
強制的に振り向かされるとそこにはロンタイの姉ちゃんが立っていた
見るからにスケバンの姉ちゃんだ
小五郎の頭を鷲掴みにしてその力を徐々に強める

「おい・・・あたいのダチに色目使ってたガキはあんたかい?」

「は・・・はひ?」

「こ・・・小五郎ちゃん!」

「なんだ・・・女連れのくせして他の女に見惚れてたのかい?
やらしいガキだね・・・女を舐めんじゃないよ!」

女は小五郎を地面に叩き付けると唾を吐いて去って行った
後にこの女性が自分の上司の妻になるのだが
小五郎はそのことをまだ知らない・・・

７４．マジでがんばれ白鳥警部！（後書き）

白鳥警部とも次回でお別れです・・・
あ！別に死ぬわけじゃないですよ
ただ白鳥警部シリーズも次回で遂にラストですってことです
それにしてもこの更新スピードは久しぶりですね
おっとりは非常に落ち着きのない人間なので
あっちに行ったりこっちに行ったりで更新がかなり不定期です
これからもご迷惑おかけしますがよろしくお願いします
そしてパンクです
こんな社会壊れちまえェェェ！
・・・この終わり方が恒例になるのかなぁ＾＾；

75．本当にがんばって下さいよ！白鳥警部！

さあこの道を突き進もう
その先には君がいるから
どんなに二人が愛し合っていても関係無い
そこかしこから嘲笑されても
どいつもこいつも二人を祝福していても
幸福のチャペルが僕の鼓膜を貫いても
絶望と喪失と嫉妬の血反吐に塗れて死のうとも
君を奪いに・・・
だけど涙がでちゃう
だって・・・キャリア組だもん！

第７５話　本当にがんばって下さいよ！白鳥警部！

オープンイベント開始まで後5分足らず
白鳥は平静を装って綾小路と談笑をしていた
広場にはぞくぞくと人が集まってきている
だがその中に目的の人物は見当たらなかった

「どうかしたのかね？警部さん？」

何も知らない綾小路が白鳥に尋ねた
「なんでもない」とだけ返すとまた白鳥は人混みの中を見た
やはりフリーザ様はまだ帰って来ていない
もしあの秘書の言うことが正しければ
自分の横にいる綾小路はとんでもない犯罪者である

捕まえなくてはならない・・・
そして捕まえたら・・・

「白鳥君・・・特別褒賞はワ・タ・シ・・・・」

「いけません・・・美和子さん！心の準備が！」

「ほ・・・本当になんでもないのかね？」

心配そうな綾小路の視線に気付き
我に返った白鳥はゴホンと一つ咳払いをした
すると一人の女性が広場に設置されたステージに上がるのが見えた
どうやらオープンイベントが始まるようだ

「みなさ～ん！今日は米花平和科学研究所へようこそ！」

元気な声が響き渡る
白鳥もそれをただじっと見守った

「それではここで所長の綾小路武よりご挨拶です」

前説が終わったのか女性は綾小路を呼んだ
綾小路は杖をつきながらおぼつかない足取りでステージに上がった

「どうもこんにちは・・・私が所長の綾小路武です」

「そして大犯罪者でもある綾小路武さんですね」

綾小路の言葉を聞くために静まり返っていた会場に
突如予想だにしていなかった言葉が響いた
会場の人々も綾小路も何事かと騒ぎ始めた所にフリーザ様が現れた

「ふっふっふ・・・小悪党！もう逃げられませんよ」

「これこれ・・・何を勘違いしておられるお若いの・・・
なんのつもりか知らんがわしは犯罪など・・・」

「所長！」

そこへフリーザ様の後から秘書が出てきた
心なしか綾小路の顔が曇る
秘書は皆が見つめる目の前で重火器や爆弾と思しきものをばら撒いた

「もうお終いですよ所長！
これらの武器弾薬の密造に密売！全部を認めて謝罪して下さい」

「やはり本当だったんですか」

会場が一斉にざわついた
それと同時に白鳥の心は決まった・・・この人を逮捕しなくては！

「綾小路所長・・・署で詳しい話を・・・」

そう言って綾小路に近付こうとしたときだった
綾小路の肩が小刻みに震えている・・・

「くっくっく・・・バレてしまっては仕方ないのぅ！」

さっきまでの弱々しいそれではない
非常に邪悪で禍々しい笑みを浮かべながら綾小路は言った

「まぁ良い・・・所詮平和科学研究所など・・・
そして武器の密造・密売ですらわしの目的達成のためのステップでしかないのじゃ」

「なんですって?」

白鳥がその言葉の意味を考えているうちに
綾小路が合図を出すと研究員達がそそくさと施設の中に入っていった
すると数秒後・・・
物凄い音を立てて建物が二つに割れ始め
その地下から超高層ビルかと見紛うぐらいの巨大な大砲がせり出してきた

「そう・・・全てはこの米花キャノンのための資金稼ぎでしかない」

「米花キャノン!?町中に何作ってるのよ!?」

突如現れた巨大な大砲にさすがの哀も驚いた
鈍い黒光りを放つその砲身は天に向って一直線に伸びている

「何でまたこんな大砲を・・・」

白鳥は米花キャノンを見つめながらあんぐりと開けた口で聞いた

「ふむ・・・お前ら戦後生まれには分からんじゃろうな」

・・・あれはもう６０年も前の話じゃ
世界はかの大戦の真っ只中・・・わしも陸軍砲兵部隊に所属し
戦火の中必死に大砲を撃つ日々を送っていた
その頃日本はサイパンを奪られ連日Ｂによる爆撃が続いていた

「空襲警報発令！空襲警報発令！」

「綾小路！空襲じゃ！敵のＢが来るぞ！」

「砲兵部隊！配置につけ！お国のためじゃ！一機でも多く撃ち落とせ！」

しかし敵さんは頭が良かった・・・
わしらがいくらＢに向って高射砲を撃っても一機も落ちてこなかった
相手は空のかなた・・・上空１万メートルじゃ
日本軍の高射砲ではそんな高さの敵を落とすことはできなかった・・・
わしは・・・悔しかった！

「そのときの屈辱が今でも忘れられんのじゃ！だから作ったんじゃ！見ろ！この米花キャノンは最新の科学技術を駆使して作った次世代の大砲
上空１万メートルは愚か・・・かの国全土をも射程に収める優れものよ！」

「そんなもの作らなくても・・・今ならミサイルが」

哀がちゃちゃを入れようとしたところで
綾小路が杖で思いきり地面を叩いた

「何がみさいるじゃ！あんな敵国の考えた空飛ぶ筒なんぞ！
まぁ小娘には分かるまい・・・威力で言えば米花キャノンの方が上じゃ」

ただ精度に欠けるという欠点は敢えて口に出さない綾小路であった

「まぁ本当は平和科学研究所の収益と補助金で
核を搭載した砲弾を開発してからお披露目したかったんじゃが・・・
バレてしまったから仕方ないのぅ！
お前ら全員を的にして米花キャノンの威力を見せてやる！発射用意！」

綾小路が合図すると
ガタンガタン！ゴトンゴトン！と
米花キャノンは重量感のある轟音をたて始めた

「戦後生まれの馬鹿者どもが！死ねぃ！」

綾小路はそう言うと発射の合図を出した
その場に戦慄が走る・・・
・・・・・・・・・・・・・
しかしいくら待てども何も起こらない
綾小路はもう一度合図を出して見るが同じだった

「おい！わしだ！何をしておる！早く発射せんか！」

痺れを切らして無線で中の研究員を呼び出してみるが
返って来たのは冷ややかな言葉だった

「お前馬鹿か？こんな近距離に使ったらこっちも死ぬだろうが！」

言われて見ればそうか・・・緊張が解け安堵の溜息がそこかしこで漏れる

「おい・・・じじい」

そして迂闊だったと反省していた綾小路の目の前にフリーザ様は容赦なく現れた

「あんなものであちこち破壊されたら私が壊して楽しむ分が減るじゃないですか
クソの役にもたたない老いぼれですね・・・これはお仕置きです！」

そう言うとフリーザ様は綾小路の立派なカイゼル髭を根こそぎ引っこ抜いてしまった
あまりの激痛と長年大切に手入れして来た髭が無くなったショックでのた打ち回る綾小路

「痛ぅ・・・くそ！若造め・・・ん？」

痛みが怒りに変わり始めた所で綾小路の目に二本の脚が映った
見上げるとそこにはレモンジュースを手にした哀がいた
哀がフリーザ様をチラリと見やるとフリーザ様は右手の親指を下に向けて突き立てた

ブシュウッ！！！

「ぎゃあああ！！！目がぁ！目がぁ！」

フリーザ様の合図と同時に哀が前々回覚えた毒霧攻撃を仕掛けたのだ
目に大量のレモンジュースを浴びせられのたうち回った挙句
最後に綾小路が辿り着いたのは・・・

「ん?これは誰じゃ?わしを助けろ!」

「ふふふ・・・美和子さんは僕の物だ~」

「何が!?ちょ・・・何言ってんの!?」

・・・手柄を目の前にして半分目がイってしまっている危ない白鳥警部だった
綾小路の体になよなよとした・・・それでも老人を倒すには十分な打撃が突き刺さった

「食らえ!キャリアパンチ!」

「うごぁ!くはぅ・・・と・・・年寄り相手に・・・この鬼畜!」

その場に崩れ落ちる綾小路の体を受け止め
その手にしっかりと手錠をかけると白鳥の目から涙が溢れだした

「やった・・・やったよ美和子さん!
やっぱり美和子さんは僕のものだあぁぁぁ!!!」

「あ~あ・・・ハイバラさんがもたもたしてるから手柄を盗られちゃいましたよ」

「悪かったわね・・・」

・・・数日後
警視庁の廊下で新聞を持った千葉刑事が白鳥と話していた

「米花キャノンは解体されたようですね・・・」

「当たり前だよ・・・あんな危険物」

「ちょっと！白鳥君！」

するとそこへ美和子がやってきた
白鳥としてはここ数日待ちに待った瞬間である

「フリーザ様に会ったんですって？どうだった？」

「へ？」

米花キャノンの僕の功績については？
白鳥が逆に聞き返しそうになったところだった

「あぁ・・・完全に飲まれてましたよ
様付けずに怒られたりして・・・ねぇ白鳥さん！」

千葉刑事が勝手に暴露してしまった

「やっぱりフリーザ様の相手は難しいわよね・・・それだけ！じゃあね白鳥君」

それだけ？
今回の手柄で明らかになった僕と高木君の格差についての見解は？

特別褒賞の「ワ・タ・シ」は？
・・・・・フリーザ様め！
綾小路が一生懸命作った米花キャノンも
白鳥警部が一生懸命たてた手柄も
フリーザ様のインパクトには敵わなかったようである

「今夜は・・・飲みにでも行きますか？」

「うるさいよ・・・千葉君」

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード１１「恋人達の憩い」

これは・・・あるカップルのメールのコピーである・・・

『高木君！今日は久々に非番なので家でゴロゴロです
のんびりできるのは嬉しいけど高木君に会えなくて悲しいよ～
早く明日になんないかなぁ』

『佐藤さん・・・僕もすごく寂しいです
でも刑事という仕事柄しょうがないですよねぇ・・・
許されることならずっとずっと側にいたいです』

『きゃあーｖ私もずっと側にいたいよ
ずっと高木君に抱きしめていて欲しいなｘｘｘ』

『なんなら今からそっちに行って上げましょうか？
サボってでも！王子様が今行きますよ～！』

『図に乗るな』

・・・・・・・

『警察の職責なめんな』

・・・・・・・

『すみませんでした・・・』

75．本当にがんばって下さいよ！白鳥警部！（後書き）

これにて白鳥警部の愛の賛歌を終了します
一段落したから更新スピード落ちちゃうかも・・・
あぁうそ！石とかは！
まぁ最近なにかとネタが浮かびやすくなってきたので
それなりの速度で行けるとは思います
それはもうパンクに
人類に夜明けはこねぇ！

76．THE姉妹～姉・瑠美子～

姉妹・・・
この世には多種多様な姉妹がいる
変な犯罪組織に属する運命に置かれてしまったもの
目が合ったものをたちまち石にしてしまうもの
男達の良からぬ妄想に晒されるもの・・・
同じ姉と妹の集合体でもこれだけ違う
１×１でこれだけの多様な答えを生み出す
それが姉妹クオリティ

第７６話　ＴＨＥ姉妹～姉・瑠美子～

毛利探偵事務所には平穏な時間が流れていた
最近トンガリが再生してきた蘭は鼻歌まじりにハタキがけ
コナンはソファーの上で新刊の推理小説を読んでいる
小五郎はこの間復縁したばかりの英理とメールを楽しんでいるようだ

「ごめんください」

それがその平穏を破る呪文になった
三人が振り向くとそこには女性が立っていた
どうやら依頼人のようである
蘭はハタキをかける手を止めて女性にソファーを勧め
お茶を入れるために出て行った

「まぁお座り下さい・・・で？どのようなご依頼で？」

蘭の背中を見送ると小五郎は女性の反対側のソファーに腰を下ろして言った

「はい・・・あ！申し送れました！私は朝宮瑠美子と言う者です
数々の難事件を解決された先生にお願いするのもなんですが・・・
実は行方知れずの妹を探してほしいんです」

ふんふん・・・と頷きながら聞く小五郎
そこへ蘭がお茶を持って来た
お茶を一杯口に含むと瑠美子は事の詳細を語り始めた

妹の名前は朝宮黒子・・・
二人は広島の人間で数年前まで両親と一緒に広島市で暮らしていたらしいのだが
ある日「脚本家になりたい」と言った黒子は皆の反対を押し切って上京
その後はたまに手紙をよこす程度だったらしい

「それで？手紙には住所が書いてあったんでしょう？」

「えぇ・・・ただ話は実はここからで・・・」

ある有名脚本家の下で修行中との事だったのであまり心配はしてなかったが
３年前から突然手紙が届かなくなってしまったと言う
その代わり毎月実家の預金口座に大金が振り込まれるようになり
もしかして危ないことに巻き込まれているのではないか？と心配になり
東京に様子を見に来たのだが・・・その脚本家の下も去っており

3年間何度も東京に探しに来ているのだが見つからず
仕方なく小五郎の所にやってきたと言うことらしい

「お願いです！先生のお力でどうか妹を！」

「大丈夫！大丈夫ですよ・・・」

小五郎は瑠美子の方をポンポンと叩きながら言った

「何はともあれまずその脚本家の所に行ってみましょう・・・場所は？」

「前に尋ねたので分かります」

「よし！じゃあ早速行ってみるか！」

小五郎は英理に仕事に行く旨のメールを送ると
瑠美子といっしょに事務所を後にした

それからしばらくして・・・
四人は脚本家「林多恵子」の家の前にいた
いくつものドラマの脚本を手がけた有名脚本家である

「ったく・・・なんでお前らもついてくんだよ！」

小五郎は蘭とコナンを邪険そうに見た

「良いじゃない・・・ねぇコナンくん？」

「私は構いませんよ毛利先生・・・大勢の方が気が楽ですし」

やれやれと呆れた顔の小五郎
諦めて襟を正すとインターホンを押した

「あのー・・・すみません」

そこまで言ったところだった・・・

「またあんたね！いい加減にしてちょうだい！」

スピーカーからは凄まじい怒鳴り声が返ってきた
思わず耳を押さえる小五郎の横で三人が目を丸くした
どうやら誰かと勘違いしているようだ・・・

「あの・・・そうじゃなくてですね・・・」

「うるさい！！！帰って！早く帰ってちょうだい！！！」

それを最後にスピーカーからは何の返答も返って来ない
それでも手がかりはここしかないので根気良くインターホンを押す
小五郎
すると今度は玄関のドアが勢い良く開いた
そこには怒り狂った表情で包丁を握り締めた林が立っていた

「しつこいのよぉ！！！殺してやる！！！・・・ってあら？」

「あのー・・・私毛利小五郎と言う者でして・・・」

林の目に小五郎が映った

人違いに気付いた林はそそくさと握り締めた包丁を後に隠した

「ごめんなさい・・・最近変な人が毎日うちを尋ねてくるものだから・・・」

「そうでしたか・・・実は今日はお聞きしたい事があって・・・」

家の中に通された小五郎達が事情を説明すると林は困ったような表情をした
実は黒子は3年前のある日突然蒸発してしまったらしい

「とっても才能がある子だったんだけど・・・ごめんなさいお役に立てなくて・・・」

自分の師匠にも家族にも内緒で黒子はいったい何をしているのだろう?
全員がそれを考えているとインターホンが鳴った

ピンポーン!ピンポーン!・・・

すると林の表情が強張った

「あいつだわ!お願い毛利さん!あいつを追い払って!」

どうやら林が言っていた「変な人」が来たらしい
ここに寄ったのも何かの縁・・・
小五郎は快く引き受けると玄関に向って行った

「さあ~!出てきなさ~い!この私を弟子にするんですよ!」

インターホンの所で変な男が叫んでいる
弟子入り志願らしいがすごく高い所からの物言いだ・・・
とても弟子になる人間の態度とは思えない

「おい！いい加減に・・・ん？」

「おや！小五郎さんじゃないですか！奇遇ですね・・・」

そこにいたのはフリーザ様とお付の哀だった

「小五郎さんが上がって良いなら私が上がって良く無い理由なんてありませんね」

そう言うとフリーザ様は小五郎を突き飛ばし
嫌がる林をよそにズンズンと家の中に入って行ってしまった
中にいたコナンや蘭もこの傍若無人さにはたいそう驚いた

「おい！フリーザ様！なにやってんだよ！」

コナンが聞くとフリーザ様は雑誌を取り出した
開かれたページには『若手脚本家おはなしかく蔵の優雅な生活』と見出しがついている

「おはなしかく蔵なんて小市民が優雅な生活を送っているのにこのフリーザ様がみすぼらしい生活を送るなんて許せません！」

「悪かったわね・・・みすぼらしくて」

「なので私も脚本家になって優雅な生活を送ってやろうと思いまし

て」

相変わらずの考え方だ・・・
コナンは呆れたといった顔でフリーザ様を見た
灰原も可哀想に・・・

「同情するならプラダのポーチ・・・」

そんな哀れみの視線に気付いた哀がコナンを睨みつけながら言った
「ふざけんな」とコナンが返した所で小五郎と林が戻ってきた

「ったく・・・俺らの用事が済んだらいっしょに帰るぞ！」

小五郎がフリーザ様に言うと「そういえば」とフリーザ様が口を開いた

「あなた達は何をしに来たんですか？」

「依頼だよ・・・こちらの朝宮瑠美子さんのな」

そう言うと小五郎は本題に戻ることにした
蒸発する直前の黒子の様子について林に尋ねた
林は3年前のことだからとしばらく考え込む・・・
そして頭の中の引き出しをあっちこっちひっくり返すとある事が思い出された

「そう言えば携帯の画面を見て青い顔をしていたことがあったわ・・・」

そのことがあって数日間思いつめた様子だったようにも見えたらしい

3年前によほどの事があったのだろうか？

何はともあれこれ以上林の家にいても迷惑である
小五郎達は一旦帰ることにした
嫌がるフリーザ様をなだめて玄関をくぐると林が行った

「毛利さん！見つけたら黒子ちゃんに伝えて下さい！
『待っているからいつでも帰っておいで』と」

小五郎は力強く頷いた
しかしそれと同時にフリーザ様が二人の間に割って入った

「もし黒子さんをみつけたらこの私を弟子にしてくれますか？」

「え？」

突然の申し出に迷惑そうな顔をする林・・・
まったくこの男は・・・小五郎が呆れて連れ出そうとしたが

「おっと失礼！このフリーザ様の言うことが聞けない馬鹿が脚本家なわけないですね
お任せ下さいな！その黒子さんとかいう人はこのフリーザ様が見つけて上げますよ」

「え・・・ちょっと・・・そんな勝手に・・・」

困惑する林の思いはもはや届かなかった・・・

「ってことはお前らついてくるのか？」

「プラダのポーチを買ってくれるなら説得してあげる」

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード１２「ＧＯ！ＧＯ！ヨーコちゃん」

「ってことでヨーコ風のびのびカップ麺の完成です！沖野ヨーコの４分クッキングでした！」

「・・・・・はい！御疲れ様！今日も良かったよ～」

「おい！ディレクター！」

「え？はい・・・何ですか？」

「てめぇなめてんのか！４分クッキングなのに何で３分で完成のカップ麺持ってくんだよ！」

「す・・・すみません・・・」

「ったく・・・アドリブで『のびのび』にしておいてやったんだから感謝しろよ・・・」

「はい・・・本当にすみませんでした・・・」

「ところで次のメニューは・・・」

「あ！はい・・・次はヨーコ風コンビニ弁当です」

「４分も暖められねぇだろうが！なにも反省してねぇのかこの馬鹿！」

「す・・・すみません・・・じゃあヨーコ風レトルトカレーに・・・」

「それで良いんだよ・・・ったくカスが！」

ディレクターは今日も４分でできる手間のかからない料理を探している・・・

76．THE姉妹～姉・瑠美子～（後書き）

そう言えば前の話で小五郎と英理をくっつけてしまった・・・
英理が仕事に行っていたから良かったものの探偵事務所がごちゃっとしそう・・・
クソ！絶対また別居させてやる！
とそんなことを考えている今日この頃・・・
危惧していた更新スピードは継続できそうです
またいつどうなるかも分かりませんけど＾＾；
まぁそれまでは頑張りたいと思います・・・パンクに
地球なんて割れちまえぇぇぇ！
アラレちゃんが懐かしい・・・

77．THE姉妹～妹・黒子～

あの頃のあなた
誰が何を言おうと聞く耳を持たず
真っ直ぐ前だけを見て
自分の信じる道をただひたすら走っていた
瞳に希望の光を灯しながら・・・
なのにどうして？
どうして変わってしまったの？

A．大人の事情

第７７話　ＴＨＥ姉妹～妹・黒子～

林の家を後にした所でコナンは瑠美子に疑問に思っていたことをぶつけた

「ねぇ・・・3年前に何かあったの？」

瑠美子はう～ん・・・と考え込んでしまった
コナンは朝宮家に重大な何かがあったと踏んでいたのだが・・・
思い当たる節が無いのだろうか？

「・・・そう言えば！お父さんが病気になったわね」

「それってどんな病気？」

コナンが聞くと瑠美子の顔が曇った
それ以上聞いても「ちょっとね・・・」としか答えてくれない
瑠美子は何かを隠しているようだが・・・一体何を?
コナンは考えたがまだ検討はつかない

「ちょっと・・・あれって・・・」

それまで黙っていた哀が何かを指差した
フリーザ様や小五郎達・・・そしてコナンも考えを中断してそちらを見た

「中にいるのは分かってんだよ!そろそろ居留守はよしましょうや鰐口さん!」

民家の玄関先でいかにもそっち系の男が怒鳴っていた
そしてその人物はフリーザ様達の見覚えのある人物だった・・・

「これはこれは桜塚さん!」

「あぁ?うるせえな・・・今取り込み中・・・って!フリーザ様じゃねぇか!」

桜塚は露骨に嫌そうな顔をして見せた

「あなた生きてたのね・・・あの雪崩で死んだと思ってたわ」

「あぁ生きてたよ!ちくしょう!もうてめぇらのお願いは聞かねぇぞ!」

コントを繰り広げる3人を見ながら呆れていたコナンだったが

桜塚の顔を見てふと質問を思いついた

「ねぇ・・・桜塚さんなら一杯お金がもらえる仕事を紹介してくれるよね？」

その質問を聞いた小五郎はハッと閃いた

そう言えば黒子は3年前から高額の仕送りをして来ているのだった・・・

小五郎は桜塚に3年前に高収入の仕事の斡旋をしなかったか聞いてみた

「朝宮黒子？・・・覚えてねぇよ・・・良くあることだし

それに3年も前だろ？名前出されたって思いだせるわけが・・・」

「あ！写真ならあります！」

そう言うと瑠美子は黒子が手紙に添えてよこしたと言う写真を取り出した

「ん？この女か！覚えてるよ・・・めちゃくちゃ勝気な女だったからな」

桜塚によると黒子は今水商売の世界に身を投じ昼夜を問わず働いているとか

水商売・・・それを聞いた瑠美子は卒倒しそうになった

しかし妹の所在が明らかになったのに倒れている場合ではない・・・

とりあえず桜塚の案内で最初に紹介した店に行く事にした

「結局手伝ってくれるのね・・・あなた今の仕事やめたら？」

「うるせぇ！」

・・・・・・1時間後

桜塚の案内でフリーザ様と小五郎達はあるキャバクラの前に来ていた
とりあえず未成年がいるので小五郎だけが入って話を聞くことにした

「ダメだな・・・1年前にやめたらしい・・・」

しばらくすると小五郎が溜息をつきながら出てきた

「何か金がいるようなことを言ってたから・・・
もっと貰いの良いところに移ったんじゃないか？風俗嬢とか・・・」

桜塚がそこまで言うと蘭が困ったような顔で口を挟んで来た

「ねぇお父さん・・・私コナン君や哀ちゃん連れて先に帰ってるね」

確かに・・・
何気なく連れてきたがここは子供の来るような所じゃない
小五郎が「あぁ」というと蘭は哀と嫌がるコナンの手を引いて帰る事にした
しかしその時哀があることに気付いた

「待って・・・フリーザ様がいないわ」

その頃フリーザ様はその手の店を手辺り次第に探していた

「全く・・・いないじゃないですか・・・

小五郎さんより早く見つけないと脚本家先生の所に弟子入りできないというのに・・・
それにしても・・・地球の女性はひどくはしたない格好をするもんですね」

そんなことをぼやきながら歩いているとフリーザ様は何かにぶつかった
見ると女連れの強面の男がサングラスをちょっと下げてフリーザ様を睨んでいた

「おぅコラ！どこ見て歩いてんだ！」

フリーザ様の胸倉を掴みながら凄みを効かせてくる
しかし次の瞬間デコピン一発で１０ｍほど吹っ飛ばされ
その先で男の横にあった郵便ポストがエネルギー波で跡形も無く消し飛んだ

「助けてぇ～！ママぁ～！」

「ふん！このフリーザ様にケンカを売ろうなんて・・・呆れ果てたお馬鹿さんですねぇ」

半泣きで逃げ帰る男の背を見送りながらそんなことを言っていると
今度は別の方向から胸倉を掴まれた・・・さっきの男の連れの女だ

「大口の客だったのに！どうしてくれるのよこのタコ！」

どうやら今の男は客だったらしい・・・すごい剣幕で怒っている

「黒子！」

そこへフリーザ様を探していた哀達と瑠美子がやって来た
瑠美子の言葉を聞いてフリーザ様は再び黒子に目をやった

「あなたが黒子さんだったんですか?」

黒子は黙って顔を伏せている
瑠美子は何も言わずに黒子に歩み寄った
夢を追って広島を飛び出して行ったあの頃とは変わり果てた黒子の下へ・・・

バシッ!

乾いた音が鳴り響いた
瑠美子が黒子を叩いたのだ

「あんた・・・一体なにをしとるん?手紙も遣さんで・・・心配して見に来てみりゃ・・・水商売?脚本家になるんじゃないん?」

涙ながらに瑠美子が怒鳴りつける
しばらく黙っていた黒子だが姉のすすり泣く声を聞いてハッと顔を上げた

「本当に・・・心配したんじゃけぇ・・・」

ずっと黙っていた黒子だったがいたたまれなくなって口を開いた

「私だって・・・脚本家になりたかった・・・
でもしょうがないじゃろ!父ちゃんが寝たきりになってしもうたん

じゃけぇ・・・」

寝たきりになってしまった父と大黒柱を失った一家を思い
泣く泣く脚本家を諦め仕送りのために高収入の水商売を始めたのである

「はぁ？」

しかし黒子の言葉を聞くと瑠美子の表情が変わった
流れていた涙も止まり「何言ってんの？」という感じの顔をしている

「・・・それ誰に聞いたん？」

「友達の素子から・・・『あんたの父ちゃん立たんようになってしもうた』って」

それはおかしい・・・瑠美子は考え込んだ
3日前に広島を出た時は元気バリバリだった・・・
いったいどこから出たデマだろう？そう考えているとコナンが口を挟んできた

「3年前にお父さん病気になったんじゃないの？」

その言葉を聞いた瑠美子はなるほどと納得した
そして申し分けなさそうな表情で黒子を見て言った

「違うんよ・・・お父さんが寝たきりじゃないんよ・・・」

「え？」

「実は・・・お父さんＥＤになってしもうたんよ！」

たまらずに蘭がコナンと哀を連れて帰ろうとしたがもう手遅れだった
黒子も衝撃の事実を耳にして頭が真っ白になっている

「じゃあ・・・たたんようになったって言うのは・・・」

「・・・・・・下の話よ」

「ハイバラさん・・・ＥＤって何ですか？」

「それ・・・セクハラよ・・・」

何はともあれ姉妹の再会は成った・・・
その後黒子は水商売をぱったりとやめ再び林の下で脚本家を目指しているらしい
一方フリーザ様は林の温情で弟子入りできたが３日で飽きて辞めてしまった

「まったく・・・脚本家になるのがあんなに面倒だったなんて！」

「そりゃなんでも楽にはいきませんよ・・・」

後日フリーザ様はポアロで愚痴っていた・・・
いつものことだと笑う梓

「いらっしゃいませ！」

新たに入店した客に愛想良く挨拶をした

入ってきたのは蘭だった・・・ひどく落胆した様子の・・・
梓が心配してどうしたのか尋ねると蘭は姉妹が再開したあの日の話を始めた

・・・・・・

「ちょっと！あなた！」

黒子捜索のため立ち寄った風俗店から出てきた小五郎は誰かに呼びとめられた
振り返るとそこには・・・怒りの表情の英理がいた

「仕事じゃなかったの・・・？へぇ・・・嘘ついてまで風俗？」

「いや・・・違うんだ！これは調査のためで・・・」

「言い訳なんて聞きたくないわ！」

「聞いてくれって！」

「他の女と乳繰り合った手で触らないでちょうだい！また出て行こうかしら・・・」

まったく取り合ってくれない英理に遂に小五郎が切れた

「分かったよ！お前みたいなやつは何処にでも行っちまえよ！」

「なんですって！？」

・・・・・
こうして英理は本当に出て行ってしまったのである
一時は消えたと思われた蘭の苦悩はまだまだ続く・・・

「フリーザ様の馬鹿・・・」

「妙な言いがかりはやめて下さいよ・・・」

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード１３「反逆の狼煙～千葉刑事が彼女を募集中です～」

パトロールが終わり宮本由美は軽く休憩をとっていた
しかし彼女はひとつ気になっていることがある

「どうしたの？千葉君」

隣で青い顔をしている千葉刑事だ

「なんで・・・なんで俺には可愛いパートナーがいないんだ！」

「はぁ？」

「だってそうじゃないですか！工藤君には蘭ちゃん・・・服部君には和葉ちゃん・・・

毛利さんには妃さんがいるし目暮警部にも綺麗な奥さん・・・高木に至っては・・・
ちくしょう！何でおれにはいないんだ！」

「落ち着きなさいよ！白鳥君だっていないわよ」

「あれは執拗に佐藤さんを求めるからですよ！その気になりゃ女の一人や二人・・・
何でなんだ！警部や阿笠さんのような小太りでも可愛いパートナー（候補含）がいるのに！」

「これは言ったらシャレにならないかもしれないけど・・・」

「なんでしょう？」

「オタクだからじゃない？」

「オタク・・・オタクだからか！やっぱりそうなのか！
ちくしょう！こうなったらもうエルメスたんしかいない！
誰かエルメスたん連れて来い！」

「だから落ち着きなさいって！」

千葉刑事のパートナー（可愛い）探しは続く・・・

77．THE姉妹～妹・黒子～（後書き）

なんか下ネタだなぁ＾＾；
ＥＤ分からない人は自分で調べてください・・・
ここに書くのはちょっと・・・
このネタは下入ってたんで書こうかどうか迷ったんですが
パンクノベリストが細かい事をきにするのもあれなんで書きました
なので批判はどしどし募集中です
パンクに募集中です
右の頬を殴られたら相手の頬に１００倍返し！
でも痛すぎて反撃できそうにないおっとりです

78．聖戦はカカオと共に

２月１４日・・・
日本中・・・至る所にひしめく乙女達が
日頃からひっそりと研ぎ澄ましていたその牙をむく日
満たせ満たせ・・・愛すべき下駄箱を・・・
黄昏の中の机を・・・漆黒のカバンを・・・
群がれ群がれ・・・他の乙女を蹴散らして
我先にと・・・死肉に群がるケダモノの如く
愛を盾にチョコを剣に
至高の心を斬り崩せ
ああ楽しきことかな・・・悲しきことかな・・・
ジハード！ジハード！今日こそが審判の日だ
人はこう呼ぶ「バレンタイン・デー」

第７８話　聖戦（ジハード）はカカオと共に

授業中・・・
先生の教科書を読む声を聞き流しながら歩美はそこを見た
誰も座っていない机・・・想いを寄せる彼の机・・・
歩美は先日のことを思い出した

その日歩美は悩んでいた・・・
数日後には聖戦の日・・・バレンタイン・デーが迫っている
もちろん歩美がチョコを渡したい人物は決まっていた
１年Ｂ組きっての切れ者・・・江戸川コナンである

しかしもはやチョコを渡せない間柄でもない・・・
それでも歩美は悩んでいた

「哀ちゃん・・・ちょっと良い？」

悩んでいてもバレンタイン・デーは待ってくれない
歩美は下校途中哀に相談を持ちかけた
一緒にいた元太や光彦・・・そしてコナンがどうしたのか？と寄ってくる
だが歩美の様子から哀は察した

「乙女の間の問題よ・・・あっち行ってて」

「なんだよ！俺達は少年探偵団の仲間だろ！水臭ぇよ！」

「うるさいわね・・・女には男に侵せない領域があるの」

哀はそう言って男どもを追い払うと
聞き耳を立てるデリカシーの無い探偵を警戒してポアロに入って行った

「で？何か相談があるんでしょ？」

すると歩美はここ数日彼女を悩ませている問題について話し始めた

「もうすぐバレンタインでしょ？私コナン君にチョコをあげたいんだけど・・・」

「あげれば良いじゃない・・・躊躇する間柄でもないでしょ？」

「もちろんあげるよ！でも・・・」

歩美はそこで俯いてしまった

「でも何？」と哀が優しく問いかけると歩美は顔を上げた

「私のチョコを一番に喜んで欲しいの！」

歩美は悩んでいた・・・きっとコナンなら誰からのチョコでも受け取ってくれるだろう

でもコナンが一番受け取りたいのは誰のチョコだろう？歩美？おそらく違う・・・

それはきっと蘭の物だ

「それはあり得る話ね・・・」

実際コナンは工藤新一なのだから蘭からのチョコが一番に決まっている・・・

しかしそれを歩美に話すわけにもいかない・・・哀はどうしたものかと考えてしまった

カランカラン・・・

ポアロに人が入ってきた・・・梓の声が響く

「おや！ハイバラさん！来ていたのですか？」

その声を聞いて哀は頭が痛くなった・・・フリーザ様だ・・・しかも

「おい灰原・・・歩美ちゃんは何を悩んでるんだ？」

メガネ小僧のおまけ付き
おそらく世界で一番デリカシーの無い二人組みがこちらに向ってくる・・・
相席希望のようだ
哀はそれぞれ一発ずつ昇竜拳を叩きこむと二人を一番遠い席に追いやった

「良い？私達のところにちょっとでも近付いてみなさい・・・殺す！」

いつになくどす黒いオーラを放ちながら哀は歩美の方へ戻って行った

「つまり江戸川くんを振り向かせるにはどうすればいいのか？ってことよね」

席に戻ると哀は本題を切り出した
コクリと頷く歩美・・・
しかし蘭のチョコを上回るのは並大抵のことではない
哀は惚れ薬でも作ってやろうかと本気で危ないことを考え始めてしまった
しかしそこへ梓がやって来た

「幸福のカカオがあれば良いのにね・・・」

「幸福のカカオ？」

梓によると願いを叶えてくれるカカオの木がどこかにある・・・という噂があるらしい
かなり胡散臭いので哀は聞き流したが歩美はそうはいかなかった

「どこにあるの？」

「さぁ・・・噂だし・・・でもガーナとかあの辺じゃない？カカオだし」

「よ～し！歩美！ガーナに行く！」

そう言ってポアロを飛び出そうとした歩美を哀が引き止める
そんな胡散臭い話のためにガーナがどこかも分かって無い少女を行かせるわけにはいかない

「大体・・・本当にガーナにあるって決まったわけじゃないのよ？」

「じゃああの人に聞けば分かるんじゃないですか？」

突然フリーザ様とコナンが話しに割って入ってきた
どこから聞いていたのだろう？本当にデリカシーの無い二人だ・・・

「近付くなって言ったでしょ！波動拳！」

突如放たれた哀の波動拳・・・フリーザ様はひらりとかわしたがコナンはそうもいかなかった・・・向こうの壁まで吹っ飛ばされてのびてしまった

「ハイバラさんこんなことが出来たんですね・・・」

「だめもとでやってみたら出来たわ・・・」

「いや・・・出来ちゃだめだよ哀ちゃん」

コナンが余計なことをしないようにロープで縛りあげると哀はフリーザ様を見た

「で?誰に聞けば分かるって?」

・・・・・現命館

そう看板に書いてある占いの屋方の前に3人はいた

中に入ると見覚えのある占い師・・・と自分で言っている男が出迎えてくれた

「お久しぶりですねトロッタさん!」

「いらっしゃい!ん?そっちの子は初めてだね・・・」

トロッタは歩美を見た・・・ペコリと緊張した面持ちで頭を下げる

占い師の性なのかまじまじと歩美を見つめるトロッタに哀が事情を説明した

「なるほどね・・・お安い御用だよ!そんなの捕らえてしまえばすぐ分かるよ」

「捕らえるってことはまたあれをやるのね・・・」

呆れ顔の哀を無視してトロッタは集中した

「・・・来い!・・・来いよ!・・・来いって!

何だよ!やんのかよ!やめろ!おい!やめろよ!」

「ねぇ・・・あのお兄さん誰とケンカしてるの?」

「知らないわ・・・あれが彼流の占いらしいから」

歩美が軽く引きながら見守る中トロッタは何かを捕まえるように手を握り締めた

「捕らえました・・・」

「相変わらずね・・・で？幸福のカカオとか言うのは本当にあるの？」

もうこの男の奇行には触れないでおこうと決意を新たにしながら哀が聞くと
トロッタはその手の中に捕まえている得体の知れない何かを慎重に探った

「・・・あるね・・・ここら辺に・・・」

彼の目に地図でも見えているのか？
トロッタは何もない空中を指差して見せた

「どこよ・・・」

イラっとしながら哀が聞くとトロッタは口を開いた

・・・・・2日後
歩美と哀・・・そしてフリーザ様の3人は異国の地を踏みしめていた
ユカタン半島・・・
メキシコ・・・グアテマラ・・・ベリーズに跨り

マヤの古代遺跡がそこかしこに残る神秘の半島である

「ガーナじゃないのにカカオあるの？」

歩美は半信半疑である・・・あの占いを見せられればしかたない

「あら？別におかしくはないわ・・・カカオは熱帯地方ならどこにでもあるし
マヤ文明の人達はカカオを栽培していたって言うから」

目の前にそびえるピラミッド型の遺跡を見ながら哀が言った
すると後からフリーザ様が小突いて来た

「観光は良いから早いとこその幸福のカカオを見つけましょうよ！」

やる気たっぷりなフリーザ様・・・どうせ自分の願いを叶えようとしているに違いない

「言っておくけど・・・吉田さんが最優先よ」

念を押すように釘を刺す哀だったがフリーザ様は適当に聞き流している
いざとなったらジャングルに捨ててこよう・・・
いろいろと考える事が多くて哀は嫌になってきた

「まぁとりあえずガイドでも雇いましょう・・・さすがに私達だけでジャングルは危険よ」

「あの・・・」

そんなことを言っていると3人は後から声をかけられた
「あの」と言うことは日本語だろうか？
振り返るとそこには日本人の女性が立っていた

「そのガイド私がしてもいいかな？もちろんタダでいいわ」

「これはすばらしい！早速ガイドのお出ましとは仕事の早い！」

「お姉さんありがとう」

突如現れて無償でガイドをしてやると言う謎の女性・・・
あからさまに怪しいがフリーザ様と歩美はあっさりお願いしてしまった
こんなことで大丈夫だろうか？
喜ぶ2人を目の前に哀は1人先行きに不安を覚えるのであった

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード14「反逆の狼煙～ろりーたこんぷれっくす～」

「落ち着きなさいよ千葉君！きっとまだ出会ってないだけよ・・・」

「そうかなぁ・・・」

「そうよ！そうだ！探しに行きましょうよ！」

「これからですか？」

こうして二人は千葉刑事の彼女を探しに行く事にした

「ほら！見てあそこ！まだフリーの女の子がいるわ！」

「え？どこ？可愛い？」

「激萌ぇ・・・」

そう言って由美が連れてきたのは

「お名前は・・・？」

「吉田歩美！」

「由美さん・・・・・・子供じゃねぇか！」

「子供ですけど？・・・大丈夫よ！大きくなれば！青いバナナと一緒よ！」

「どこがだよ！それまで待てっていうんすか？」

「１６まであと１０年・・・余裕よ！さぁ告白って！告白って！」

「えぇ！？・・・う～ん・・・じゃあ僕と付き合って下さい」

「やだよ！歩美はコナン君のお嫁さんになるんだから！」

・・・・・・

「ふられたじゃねぇか！」

「ふられたわね」

千葉刑事・・・ひょっとして一生独身なのか！？

続く！

78．聖戦はカカオと共に（後書き）

バレンタインネタは前々から書かなきゃなと
妙な使命感に燃えておりましたが・・・
もう１６日じゃん！
うっかり忘れてました・・・
まぁまだ賞味期限内ですよね＾＾；
ってことで今回は哀に波動拳うたせてすみません・・・
反省してます・・・パンクに反省してます
真面目な生き様なんて・・・大嫌いだぁ！
でも実生活では結構堅実にやってます＾＾；

79．密林のカカオマン

チョコレートの原料カカオ豆
皆の愛する熱帯性樹木の種子である
カカオには覚醒作用や興奮作用があり
人間を非常にハイな状態にしてくれる
こんな逸話がある・・・
ある指揮官が部下を引き連れて遠征に行った際
原住民にある飲み物を勧められた・・・
この飲み物はチョコの原型だったのだが
これを飲んだ部下達は戦いで恐るべき強さを見せた
指揮官はチョコをたいそう気に入ったという・・・

第７９話　密林のカカオマン

突如ガイドを志願して来た女性・・・
彼女の名前は湯野(ゆの)めぐみ・・・日本人である
なんでも行方不明の恋人を探しているらしい

「彼を乗せた飛行機が消息を断ったのはここユカタンのジャングルなの」

「じゃあもう亡くなってるかもしれないですね・・・」

「うん・・・でも亡骸だけでも見つけてあげたくて・・・」

旅は道連れと言う事でたまたま見かけたフリーザ様達に声をかけた

らしい

何はともあれ歩美のカカオ探しは始まった
湯野の運転するジープで４人はジャングルの中の道をつき進む

「それで?そのカカオの木があるのはどの辺りとか分かるの?」

湯野が３人に聞いた
それを聞いたフリーザ様はおもむろに一つの鈴を取り出した
それは旅立つ前にトロッタが手渡してくれた物だった

『この鈴には僕のグレート占いパワーを込めておいたよ
目標物の１０キロ以内に入ると音を立てて知らせてくれるよ』

そう言って・・・

「ふ～ん・・・なら鳴ったら教えて!」

湯野はそう言うとまた前をみてジープのスピードを上げた

・・・・・・
かれこれ5時間は走っただろうか?随分奥地まで来たようで
もう人の姿もあまり見ることが出来ない・・・
それだと言うのに鈴がなる気配もないのである

「ねぇ・・・思いきってジャングルの中に入ってみたら?」

湯野が言った

そもそもそんなすごいカカオが人が使う道から１０キロ以内にあるとは思えない
幸いジープにはキャンプに必要な用具も積んであるのでジャングルを歩いて行こうと言うのだ

「もしかしたら途中で彼を見つける事ができるかも知れないしね」

「そうね・・・吉田さん！覚悟は？」

「良いよ！コナン君のためだもん！歩美がんばる！」

「どの道このフリーザ様が拒否権を与えませんよ」

こうして４人はジャングルの中へ消えて行った・・・

・・・・・あれから何時間経っただろうか？ユカタン半島に朝日が訪れた
ジャングルの中で一夜を過ごした４人・・・持ってきたパンやその辺のフルーツで朝食を済ますと
再び密林の奥を目指して出発した。
随分奥まで来たものだ・・・最初はマヤの古代遺跡などをちらほら見ることが出来たが
今ではそれすらもない・・・人が踏み入るべきで無い野生の空間である
踏みしめた木の枝がバキッと音をたてた時だった

チリン・・・

鈴が鳴った！

タラタラと歩いていたフリーザ様達だったが
その音を聞くと一気に顔を引き締めまだ見えない目標に向って歩く速度を速めた
しかし１０分ほど歩いた頃・・・その歩みは止まることになった

「きゃあああああ！！！」

密林に人の叫び声が響き渡った

「今の人の叫び声よね・・・」

哀が耳を澄ましながら言った・・・良く聞くと何か喋り声も聞こえる

「ほっといて行きましょう！」

「何言ってんのよ・・・私達が見捨てたらこの密林じゃ他に助けは来ないわよ」

そういうと哀と湯野は歩美にフリーザ様といるように言うと声のする方へ行ってみた
するとそこには罠にかかったのか網で吊るし上げられた女性がいた・・・

「何よこれ！どうなってんのよ！」

「日本人のようね・・・」

湯野が縄を切って下ろしてやる・・・フリーザ様と歩美もやって来た

「いったい何なのよもう！」

「落ち着いて・・・何があったか話してみて」
哀が女性を落ち着かせようとしたその時だった
「ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ！」
いやに軽快な笑い声が響き渡る・・・
声の主を探すとそれは少し離れた岩の上にいた
カカオのカラで出来たお面とマンガの原始人のような服を来た男がいる
「アイア～ム！カカオマ～ン！」
「なんか随分とハイテンションね・・・」
名乗るだけ名乗るとカカオマンは密林の奥へ飛ぶように消えて行った
どうやらこの罠はあの得体の知れない男が仕掛けたものらしい
「なんなのよ！ムカツクわね！」
女性は相当腹が立ったのかカンカンに怒っている
哀は何とかなだめて話をしてみることにした
女性の名前は柄那千代子（がらなちょこ）・・・日本のＭ＆Ｓカンパニーで働くＯＬらしい
「ＯＬがなんでこんなジャングルにいるのよ・・・」
「うるさいわね・・・幸福のカカオっていうのを探してるのよ！
それでもって義理チョコを作って会社の男どもを全員私の奴隷にし

てあげるの」

どうやら柄那も幸福のカカオを狙っているようだ
しかしこれが気に入らないのがフリーザ様・・・ただでさえ歩美がいるのに
これ以上取り分を減らされてはかなわない

「まぁ助けてやったんだから幸福のカカオは諦めてとっとと消えることですね
大体人を奴隷にしようなんて・・・何て浅ましい考え方なんでしょう」

「あなた人の事言えないでしょ・・・」

自分のことは棚に上げて責めたてるフリーザ様
柄那の怒りは再沸騰・・・起こりながらその場を去ろうと背を向けて歩き出してしまった

ドサッ！

しかしその音と同時にいなくなってしまった
良く見ると穴が空いている・・・落とし穴のようだ

「ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ！」

再び静寂を切り裂くように笑い声が響いた
いつの間にかカカオマンが戻ってきている
そして笑うだけ笑うとまた姿を消した

「くそっ！あの変態・・・」

湯野と哀が穴の中を覗きこむと柄那がもがいていた
すかさず湯野が持っていたロープを取り出すがその手をフリーザ様が制した

「や～い！や～い！ざま～みろ！しばらくそこで頭でも冷やしていることです
それじゃあ皆さん！幸福のカカオを頂きに行きますよ～！」

そう言うとフリーザ様は湯野と哀の手を強引に引っ張って密林の中へ消えて行った・・・
怒りに震える柄那を残して

・・・・・・
しばらく行くと４人は困ってしまった
目の前にはカカオの木・・・そして向こうにもカカオの木・・・更に向こうにも・・・
この辺りはカカオが群生しているのかカカオだらけである
どれが肝心の幸福のカカオなのかさっぱりわからない・・・

「一本一本にお願いごとでもしてみますか・・・」

「日が暮れるわよ・・・」

そんな事を言っている時だった

「カカオ！カカーオ！」

聞き覚えのある・・・いやさっき聞いたばかりの声がする

一本のカカオの木の上の方にそれはいた・・・カカオマンである
カカオマンは木から飛び降りると手に持った槍の様な武器で襲い掛かってきた

「カカオ！カカオ！」

「なんですかこの人！？鬱陶しいですね！」

そう言って槍を叩き壊すフリーザ様・・・
しかしカカオマンはそれと同時に持っていた泥玉をフリーザ様の顔面に叩きつけた

「ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ！」

笑いながら去っていくカカオマン・・・
文字通り顔に泥を塗られたフリーザ様のお怒りはＭＡＸに達した

「追うんですよハイバラさん！きっと幸福のカカオの場所を知っているはずです」

「はいはい」

仕方なく後を追う哀だったがカカオマンは物凄く速い
もう見失いそうだ・・・哀がスピードを上げようと踏ん張ったその時だった
目の前の景色が反転した

「哀ちゃん！？」

哀はロープのような物に足を絡め取られて木の枝にぶら下がっていた

急いで湯野がロープを切ると哀は下に落ちてきた

「ぎゃ！」

そして出してはいけないような声を出して地面にキスをした・・・
痛そうに顔を抑える哀

「気を付けてちょうだい・・・」

「あ！ごめん！」

「う～ん・・・カカオマン恐るべし・・・」

フリーザ様達がそんな事をやっていたころ
少し離れた所にあるテントの中に柄奈はいた
持ってきたケースからそれを取り出すとマガジンを装填し安全装置を解除・・・
木製のグリップを握り締めるとニヤリと笑った
その邪悪な笑みのまま彼女もまた密林の中へ消えて行った

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード１５「反逆の狼煙～灯台下暗し～」

「そうだよ！なんで気付かなかったんだ！」

「何がよ？」

「由美さん！あなたフリーじゃないですか！」

「え？まぁ・・・そうだけど」

「うん！良く見れば顔も悪くない！よし！おれと付き合ってください！」

「いやに決まってるじゃない」

「だめですよ！今回で反逆の狼煙シリーズ終わりにするんだから！」

「千葉君は一生独身でした（バッドエンド）で良いじゃない！」

「嫌だ！ハッピーエンドにするんだ！さぁ・・・誓いの口付けを」

「コレコレ・・・花婿は高木だよ」

「ホワッツ！？目暮警部今何と？」

「ホワッツ！？じゃないよ千葉君・・・君じゃあ花婿は無理だろ」

「無理って何ですか！？やっぱあれですか？見た目ってことですか！？」

「当たり前だろ！何を言っとるのかね」

「ちくしょう！グレてやる！刑事なんかやめて格闘家になってやる！青木真也みたく！」

「おい！千葉！こら待たんか！」

５２巻式場パニックに続く・・・かも

79．密林のカカオマン（後書き）

歩美がどうしてもって言うからユカタンまで飛ばしたのに・・・
なんか歩美の出番少ないな＾＾；
次回でバレンタイン話はラスト・・・歩美で埋め尽くすぐらいで行かないといけませんね
でもフリーザ様に哀・・・そして訳の分からん人々が出て来ちゃったのでキツイです
がんばれ歩美！
パンクに応援します
てめぇらの血は、緑色だぁ～！！！

８０．ユカタンより愛を込めて

綾子は思う・・・
男はいい気なものだと
女達はこの日のために精魂こめてチョコを作る
男達はその日明暗を分けられると言う・・・
いくつ貰っただとか貰えなかっただとか
乙女の気持ちもステータスの一部になってしまう
大切なのは数じゃない・・・キング・カズでもない・・・
そこにこもった気持ちなのに・・・
バレンタインで一番可哀想なのは貰えなかった男じゃない
自分の気持ちが知らないところで数値の一部にされてる女・・・
だから綾子は思う・・・
来年は友チョコにしよう

第８０話　ユカタンより愛を込めて

あれから1時間が経過した・・・
ユカタンのジャングルの中に泥だらけの4人がいた
あれからカカオの木を一つ一つ調べて歩いているのだが
お目当てのカカオはまったく見つからない・・・
そもそもそれがどんなカカオかすら分からない自分達に気付いた

「どうやって探せって言うのよ・・・」

哀の口からは溜息がもれる・・・
その少し向こうでは歩美とフリーザ様が木に祈りを捧げている

「コナンくんのお嫁さんになれますように・・・」

「このフリーザ様に永遠の命と若さを与えなさ～い！」

・・・・・変化無し

どうやらフリーザ様の願いは不老不死らしい・・・

「なかなかロマンチックじゃない」

哀はクスッと笑いながら祈りを捧げ続ける二人を見た

懸命に祈り続ける二人・・・祈りが届いたのか上からカカオの実が落ちてきた

ゴン！

そして鈍い音をたてて二人の頭を直撃する

「ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ！」

「おのれぇ～！！！」

これで何度目の襲撃だろうか・・・もう全身ボロボロである

ぼけっとしていると哀の頭にもカカオが降ってきた

痛みに頭を押さえながら横を見ると湯野の頭も直撃を受けていた

「カカオ！カカオ！」

ドサドサドサドサ・・・

「きゃあ！何よもう！」

「い・・・痛いよ！助けてコナンくん！」

容赦ないカカオの爆撃・・・
それが止んでから上を見るともうカカオマンはいなくなっていた
本当に逃げ足が速い・・・フリーザ様でさえ振り回されている

「コケにしやがって・・・こうなったらこのジャングルを消す！」

フリーザ様がデスボールを作り始める
頭に血が登っているのか幸福のカカオのことはお忘れのようだ
とりあえず女3人で落ち着かせる

「くそ・・・次来たら消し去ってやりますよ！」

「それより幸福のカカオをさっさと見つけてさっさと帰りましょうよ」

「ここまでコケにされて逃げろと？敗北主義者はついて来なくて結構！」

そういうとフリーザ様は怒りながらまた奥へ進み始めた
しかたなく3人もとぼとぼとついて行く

・・・・・
歩美がもう何本目とも分からないカカオの木に祈りを捧げてみるが・・・これと言って変化はない

「歩美さん・・・もう良いですか?」

イライラが限界に近付いているフリーザ様が動こうとしない歩美を
急かしに近付いた
その時だった・・・

チリン・・・

トロッタから貰った鈴がフリーザ様の懐から落ちて地面で砕けた
何事かと思って眺めていると何かが聞こえてきた

『・・・フリーザ様?聞こえる?』

トロッタの声である

「聞こえますよ!どうしたんですかトロッタさん?」

『僕のグレート占いパワーが反応をしめしたよ・・・
今目の前にあるのが幸福のカカオだよ・・・カカオの木の前にいる
でしょ?』

4人は木を見上げた・・・これといって変わった様子はない・・・
いや少し大きいか?

『おっと・・・効果が切れるようだ・・・それじゃあ後は頑張って
!』

トロッタの声が聞こえなくなるとフリーザ様は疑り深く木を睨んだ
さっき歩美が祈りを捧げたが何も起こらなかった・・・神龍の類が
出てくる様子も無い

ひょっとして叶ったのだろうか？
そんな様子でフリーザ様が考え込んでいる横で歩美はカカオの実を取ろうとしていた

「これでチョコを作ればコナンくんは・・・」

「カカオ！カカオ！カカオ！！！」

そこへまたカカオマンが現れた・・・しかし怒っているようだ
威嚇するように歩美に向って吠えている

「お願い！ちょっとだけで良いの・・・」

「カカオ！！！カカァァオ！！！カカァ・・・げほっ！げほっ！」

「咽てる・・・」

カカオマンが咽ている間に歩美が実をもぐ
すると怒ったカカオマンが飛びかかってきた

ダダダダダ・・・！！！

激しい音が鳴り止んだ・・・
カカオマンの体は歩美の横を通り過ぎると地面に墜落した
ジャングルの土が赤く染まる・・・

「ふふっ・・・！そのカカオは私の物よ！汚い手で触らないでちょうだい！」

声のする方を振り向くと自動小銃を構えた柄那が立っていた

「猪口才なことに私の邪魔をしてくれたその原始人もアサルトライフルの前には無力だったようね・・・
さぁて・・・次は誰が死にたいの？命乞いしても無駄よ？皆まとめて殺してあげちゃうから」

ニヤニヤと笑いながら近付いてくる柄那
しかしせっかく見つけた幸福のカカオを渡すほどフリーザ様は善人ではない

「鬱陶しいですよ！ただでさえこのカカオ野郎のせいで腹がたっているのに・・・
そんなに命を無駄にしたいならジャングルの藻屑にしてあげますよ！」

そういうとエネルギー波を放つ！
威嚇でもなんでもない・・・相当お怒りだったのか？柄那の姿は一瞬にして消えてしまった

「ふん・・・ＯＬ風情が・・・」

しかし良く見ると柄那のいた所に穴ができている・・・
耳を澄ますと柄那のもがく声が聞こえる

「ＨＡＨＡ・・・」

力なく笑うカカオマン・・・どうやら生きていたらしい
湯野が持っていた救急セットで応急処置を施してやる

「助けて～！」

「向こうはどうする？」

湯野がフリーザ様の顔を見た

「ハイバラさん！埋めてしまいなさ～い！」

「アイアイサー・・・」

そう言うといつの間にか穴の横に大量の土を用意していた哀
フリーザ様との付き合いも長くなる・・・考えが似てきたらしい

「身を挺して熱帯雨林の肥料になろうなんて・・・泣かせるじゃない？」

「えぇ！？ちょっと？お嬢ちゃん？」

ドサッ！

その音を最後にジャングルに静寂が訪れた・・・
哀もほっと一息つく・・・

「人を埋めるなんて悪い人ですね・・・」

「人に罪を擦り付ける気？そんなに思いっきり埋めてないからそのうち出てくるわよ」

・・・・・何はともあれ４人と傷だらけのカカオマンはジャングルを後にした

・・・・・数日後
その日は待ちに待ったバレンタイン・デー
歩美は哀に協力して貰って作った幸福のカカオ入りチョコを作り
無事コナンに渡すことが出来たようだ・・・
哀はそのことを帰ってきてからフリーザ様に報告した

「それじゃあ私もチョコを食べて不老不死になるとしますか」

テーブルの上にある哀の作ったチョコを見ながらフリーザ様は満足そうに言った

「言っとくけど義理よ・・・」

「そう言えば手紙が来とったぞ・・・」

フリーザ様と話をしていると博士がやって来た・・・国際郵便のようだ
見ると「ＭＥＧＵＭＩ　ＹＵＮＯ」と記されている・・・湯野からだ

「おやおや・・・ハイバラさん！早く読んでください！」

「はいはい・・・」

『フリーザ様、哀ちゃん、歩美ちゃん、お元気ですか？
先日は映画の主人公にでもなったような大冒険でしたね。
私はあの後カカオマンさんを病院へ連れていきました。そしたらビックリ！
なんとカカオマンさんの正体は行方不明だった私の恋人、木戸張介だったのです。

最初は私の事も分からないくらい意識が混濁していたんだけど、最近では昔の張介に戻りました。
なんでも飛行機が墜落したとき奇跡的に助かり、たまたまあのカカオを食べてああなったそうです。
あのカカオ実は通常の何倍もカフェインを含んでいて、食べると頭がパーになるので気を付けて下さい。
それではまたどこかで会いましょう。
湯野めぐみより』

「ですって・・・」

「そうですか・・・でもこのチョコは食べないほうが良さそうですね」

・・・・・一方その頃探偵事務所は荒れていた

「アイア～ム！カカオマ～ン！」

「コナンくん！しっかりして！」

「おい！蘭！もっとしっかり取り押さえろ！コナン！今救急車呼んでやるからな！」

「ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ！」

「うわ！テンション高！お父さん救急車はまだ？」

コナンが救急車で運ばれたことを哀と歩美は翌日小林の口から知ったどうやら幸福のカカオとは頭がおかしくなって幸せになったように

感じるカカオらしい
なんでも願いが叶うなどとたいそうな宣伝文句だったが
噂や都市伝説などふたを開けてみれば得てしてこんなものである

・・・・・それから数日が経った
授業中・・・
先生の教科書を読む声を聞き流しながら歩美はそこを見た
誰も座っていない机・・・想いを寄せる彼の机・・・

「早く元気にならないかな・・・コナンくん」

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード１６「ウォッカの飲酒運転撲滅キャンペーン」

その日・・・俺はジンのアニキと酒を飲んでいた
でも良く考えたらこの後アニキの車でまた仕事があるんだよな・・・
飲酒運転になるなぁ・・・アニキ・・・
まぁアニキは酒に飲まれないだろうけど・・・
そんな事を考えていた時だった

「ウォッカ・・・」

「なんですかい？」

「『柔術マジシャン！アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ！』って言ってみろ」

「えぇ？」

「早くしろ！」

アニキは銃を突き付けてきた・・・訳が分からないけどしょうがない・・・

「柔術マジシャン！アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ！」

「・・・・・・」

「アニキ？」

「フン！やっぱりＰＲＩＤＥの煽りＶＴＲは立木文彦のナレーションに限る・・・」

ひょっとして結構酒に飲まれてるのか？

俺はなんだかアニキの車に乗るのが恐くなった・・・

無くそう！飲酒運転！

ジンのアニキ・・・

やれんのか？

８０．ユカタンより愛を込めて（後書き）

まぁ本編はおいといて・・・
おまけ・・・
このネタ分かる人はすごいかな・・・
多分分からないだろうなぁ・・・
分かりたくもないだろうなぁ・・・＾＾；
でも駄文は程よく頭から排除していかないと本編に悪影響を及ぼすので出しちゃいます
もし知りたければＹｏｕＴｕｂｅで「ｐｒｉｄｅ　ｂｕｓｈｉｄｏ　１３」で探すと見つかると思います＾＾；
まぁ知らなくても人生困らないってところはパンクに保障します
世界がそれを愛と呼んでも、俺は絶対呼ばねぇ！
・・・・・こんなんで今後大丈夫かなぁ
おっとり・・・やれんのか？

８１．美女とサングラスの悪者

そんなつもりじゃなかったのに・・・
時として事態は自分の思惑とは正反対に動く
どうしてだろうか？
どうしてもである
色んな思惑が絡み合うと一個の人間など無力
あとは川に浮かぶ笹舟の如く
舵も取れずにただただ流されるしかない・・・

第８１話　美女とサングラスの悪者

なんでこんなことに・・・
ウォッカは自分の愛車を運転しながら溜息をついた
隣の席にいるのは長髪で恐い兄貴分ではない・・・
ミステリアスな姉さんでもない・・・
茶髪のショートボブが似合う若い女性

「はぁ・・・・・・」

「その溜息やめてくれない？こっちまで気が滅入るわ」

「・・・溜息も出るぜ」

本当なら今頃アニキの所にこの女を引きずって行ってるころなのに・・・

・・・・・
それは数日前のことだった
米花町の道を黒尽くめの男3人が歩いていた

「それにしても泡盛はどうしたんだろうな？」

「あいつは俺達落ちこぼれの希望の星だったのにな・・・」

組織の下っ端・・・スーパードライとモルツは消息不明の女性幹部の顔を思い浮かべる
ちょっと前まで一緒に仕事をしていた彼女は「精霊の水」とやらを探しに行き
そのまま姿を消してしまったという・・・

「所詮俺達は落ちこぼれなのさ・・・上の人達に従っておくのが分相応ってもんなんだよ」

後を歩いていたジョッキ生が言った
スーパードライとモルツはジョッキ生の顔を覗きこむ
おそらく泡盛が消えて一番がっかりしたのは彼だろう・・・
彼は泡盛の出世を自分の事のように喜び・・・我も続けと組織の仕事に励んでいたのだから

「俺達・・・ずっとこのままなのかな・・・」

溜息が漏れる
自分達の行く末を思いながらぼけっと歩いていたのが悪かったのか
道を歩いていた少女にモルツがぶつかってしまった

「痛！・・・」

少女は尻餅をついている
モルツは軽く謝りながら少女を起こしてあげた
少女は特に気にする様子もなくそのまま去って行った

「なぁ・・・・・・」

その時スーパードライが口を開いた

「今の女の子・・・シェリーに似てなかったか？」

「そういやそうだな・・・あんな感じの髪の毛だったから」

モルツとジョッキ生は他人の空似だと笑ったがスーパードライは気になっていることがあった
少し前に泡盛から貰ったメールの文章だ・・・

『精霊の水は後少しで手に入る・・・それと小さな裏切り者も見つけた』

「ひょっとしたら俺達はすごい手柄を目の前にしているのかもしれんぞ」

・・・・・それから数日後
哀は窓から隣の工藤邸を眺めた
主のいるはずのない館に最近は良く明かりが灯っている

「あれで私のことを監視しているつもりなのかしら？」

呆れたように哀が見つめた先では3人が簡単な食事を取りながら話をしていた

「本当にシェリーだと思うか?」

ジョッキ生とモルツは相変わらず疑っていた
無理も無い・・・相手は6歳くらいにしか見えない少女だ
しかしスーパードライは意見を曲げようとしなかった

「これは俺の推理なんだが・・・泡盛が見つけた小さな裏切り者・・・
これはずばりあいつだったんだよ!きっと組織の追跡を撒くために
精霊の水で小さくなって
それに気付いた泡盛を殺したんだ!」

ビールをあおりながらスーパードライが言った
他の二人も「よ!名推理!」などと煽てながらビールを飲んでいる
かなり酔っているのか大声で騒ぎ始めてしまった

「よっしゃ!シェリーをとっ捕まえて名を上げるぞ!」

「何か隣から嫌な会話が聞こえてくるわね・・・」

潜伏すらちゃんと出来ない馬鹿3人を撒くぐらい簡単だろう・・・
ただその次はちゃんとした組織のメンバーが出てくるに違いない
そうなったら博士もコナンも探偵団も命はないだろう・・・

「そろそろ潮時ね・・・」

哀はその夜一つの決心をした

・・・・・次の朝
モルツは朝食を買うために近くのコンビニに来ていた
パンやサンドイッチを買うとあくびをしながらコンビニを後にする
昨日は飲み過ぎた・・・
頭が痛くて目の前にシェリーが見える・・・

「ん?あぁ!!!」

帽子をかぶり変装してはいるがそれは確かにシェリーだった
モルツはすかさずその女性を捕まえた

「くそ!スーパードライの野郎フカシこきやがって・・・
まぁでも本物さえ捕まえれば結果オーライか」

「何の事?私何も知らないわ!」

「うるせぇ!大人しくしろ!」

これで良い・・・灰原哀と宮野志保が別人と思われれば
周りの皆に危害が及ぶ心配もない・・・ちょっと強引だがこの馬鹿達なら騙されるだろう
哀・・・いや志保は朝日の中そのまま連れて行かれた

「ハイバラさ~ん!」

その頃フリーザ様は朝飯の仕度をしていない哀にお仕置きをしてやろうと家の中を探していた
しかしどこを探しても哀の影も形も無い・・・
どうしたものかとテーブルを見ると薬とフロッピー・・・そして手紙が置いてあった

『博士へ・・・
組織が私の存在に感付き始めたの。だから私は宮野志保に戻ることにします・・・。
これは今朝私が使った最新の試作品、そしてそのデータです。これを頼りに何とか解毒剤の研究を続けて下さい。
今まで本当にありがとう。さようなら。』

「まったく・・・何処へ行くかも書いて無いじゃないですか!役にたたないですね!」

そう言うとフリーザ様は哀の手紙をくしゃくしゃと丸めてゴミ箱に捨ててしまった

「博士さん!朝食の仕度をするんですよ!」

・・・・・哀が辞世のつもりでしたためた手紙が捨てられてから数時間
志保はある建物の一室に監禁されていた・・・隣の部屋では黒いズッコケ三人組が騒いでいる
本当に騒々しいやつらだ・・・よく組織にいられたものだ

「これで俺らも組織の幹部だ!」

幹部になったら・・・と狸の皮算用を始めた3人だが結局結論は一つだった

「とりあえず・・・コードネームどうにかしてもらおう・・・」

「あぁ・・・」

「そうだな・・・」

3人が沈んでいると突然扉が開いた
そこに現れたのはサングラスをかけた組織の幹部ウォッカだった

「よう・・・久しぶりだな」

うんざりするほど聞いた声が聞こえて志保は顔を上げた
目の前にはウォッカがいる・・・いよいよ最期か
志保は覚悟を決めてニッコリ笑った

「お久しぶりね・・・あんたの顔なんか見たくもなかったけど」

「相変わらず可愛げのないやつだ・・・それじゃあ処刑場へ行こうか」

そう言うとウォッカは志保を強引に立たせるとそのまま扉に向って歩き始めた
そして扉のノブに手をかけた時だった・・・

「なぁちょっと待てよ!まさかあんたが連れて行くのか?」

スーパードライが聞いた

「んあ？当たり前だろ・・・こいつは組織が目の色変えて追っかけてた裏切り者
お前らなんかに任せて途中で逃げられたらたまったもんじゃないからな」

「俺らの手柄ってこと忘れないでほしいな・・・」

ジョッキ生が不満そうに口を開くとウォッカはニヤリと笑った

「あぁ・・・俺の心の中に留めておいてやるよ」

さすがに馬鹿3人も気付いた・・・
この男はどうやら自分達の手柄を横取りするつもりらしい
冗談じゃない！せっかく新しいコードネームを考えていたのに・・・
ボジョレヌーボーとか・・・

「この野郎！」

切れた3人がウォッカに向けて発砲した
ウォッカはすかさず物影に身を隠すと銃を取り出した

「へっ！余計なお荷物を処分する良い機会だ・・・」

「どうでも良いけど私を巻き込まないで欲しいわね・・・」

死ぬ覚悟は万端だ・・・でも手柄の取り合いなんて小さいことに巻き込まれて死ぬのは何か嫌だ！
志保はとりあえず銃弾が当たらないように身を屈めた

・・・・・・

「まったく！ハイバラさんはいったいどこでしょう?主人をほったらかしとは良い度胸ですね」

朝から姿が見えない哀に苛立ちながらフリーザ様は歩いていた
その時フリーザ様の前に蘭が現れた

「あ！こんにちはフリーザ様」

「これはこれは蘭さん」

しばらく世間話をしながら歩いているうちに探偵事務所の前にやって来た
すると蘭は何か思い出したように家の中に入って行った
しばらくして再び出てくると蘭は箱を持っていた

「これケーキなんですけど食べきれないんでお裾分けです」

「これはこれは・・・ご丁寧にどうも」

このケーキが後々とんでもない波乱を呼ぶことになる事をまだ誰も知らなかった・・・

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード１７「横溝兄弟の野望」

「おい重悟・・・」

「なんだよ」

その日久しぶりに会った二人
とりとめもない話をしていたが唐突に参悟が切り出した

「俺達は双子だよな・・・」

「あぁ・・・なんだよ今更」

「もっと双子ってところを売りにすれば出番が増えると思うんだ」

双子っぽく・・・

「参悟です！」

「重悟です！」

・・・・・・

「お○ピー風はだめだな・・・」

「よし・・・マ○カナみたくハモってみよう」

「「本当ですか毛利さん！？」」

・・・・・・

「キモイな・・・」

「あぁ・・・それに重悟のキャラが崩れるな」

・・・・・・

「「ちょっと！ちょっとちょっと！」」

・・・二人の試行錯誤は続く

81．美女とサングラスの悪者（後書き）

前回のおまけでウォッカを出したら無性にウォッカを主役にしたくなりました
だってせっかく声が私の大好きな立木文彦さんなのに勿体無いじゃないですか
まぁそんなこんなで2回ほどフリーザ様と宮野さんになります
いやむしろウォッカとシェリーの愛の逃避行かも＾＾；
どんな異色のペアでも強引にあわせる・・・
パンクですから！
熟して熟して腐っちまえ！！！
パンクになってから恐い物知らずな自分が・・・

82．ラヴァーズ・アンラヴァーズ

第一印象・・・最悪
これは良くあることである
でも付き合ってみたらわりと気があったりする
付き合ってみて・・・最悪
これも良くある話である
これはどうしようもないかもしれない・・・
しかしジェットコースター効果というのがある
男女が二人してジェットコースターに乗って
降りてくると恋に落ちているというものである

第８２話　ラヴァーズ・アンラヴァーズ

「おらおら！どうしたウォッカさんよぉ！」

米花町の一角にある建物の中でウォッカとズッコケ三人組は銃撃戦の真っ最中
物影に隠れたウォッカと志保に向けて容赦ない弾丸の雨霰が降りかかる

「ふん・・・今のうちにせいぜい無駄弾使うことだな」

銃声が途切れると同時にウォッカも２・３発撃ち返す
それと同時にまた弾丸の雨霰・・・さっきからこれの繰り返しである

「ねぇ・・・さっさと決めてくれない？どちらにせよ私は死ぬんで

しょ？」

志保が溜息を漏らした

「うるせぇな・・・3人もいる上無茶しやがる・・・
こっちは俺一人なんだ・・・もう少し我慢しやがれ」

・・・・・・
時を同じくして
フリーザ様は道を歩きながら手に持った箱を見た
中には蘭から貰ったケーキ・・・ずしりと重みを感じる

「ふむ・・・こんな素晴しい物をハイバラさんや博士さんにくれて
やるのは惜しいですね」

どうせ二人は滅多に蘭と話さない・・・自分さえ黙っていれば・・・
フリーザ様はケーキを独り占めにする事にした

「さすがに家に帰って食べるのはまずいですね・・・」

フリーザ様はキョロキョロと辺りを見回した
すると少し先に使われていないであろうビルを発見した
見ると施錠もされていない

「しめしめ・・・ここで頂くとしましょう」

フリーザ様は暗いビルの中へと姿を消した

・・・・・・

「ったくスーパードライが調子こいて撃ちまくるから！」

「なんだよ！てめぇだって・・・」

考えもなしにドンパチやったので3人の弾はもう残り少ない
お互いを責め合うが弾が戻ってくるわけでもないのでもう無駄に撃たないことにした

「ははっ！弾切れのようだな！」

ウォッカの声が響くと同時にガタっと音がする
驚いた3人は一斉にその方向めがけて最後の弾を発射する

べしゃ！

ものすごい粘着質な音がした
相当な量の血が出たのだろうか？
3人は恐る恐るそちらの様子を伺った・・・人影が見える・・・仕留めたのか？
しかし影は一向に倒れる様子がない・・・

「やってくれましたね・・・」

声がした・・・生きているようだがウォッカのそれとはちがう
よく見るとその足元にクリームだの苺だのが散乱している

「貴様らぁ・・・っ！！！許さん！！！」

「うわあ！なんだてめぇは！」

怒鳴り声とともに襲い掛かってきた人影に3人はなす術もなくやられてしまった

「なんの騒ぎだ？」

今から殺しに行こうと思ったのに向こうは物凄い騒ぎだ・・・
見ると見知らぬビジュアル系が3人を半殺しにしている

「なんだあいつ・・・まぁ良い・・・ずらかるぞ」

ウォッカはそう言うと志保の体を起こし忍び足で出口に向った

「ふん！良い度胸ですよ・・・」

・・・フリーザ様じゃない・・・なにやってんのよ
薄暗い部屋の片隅で見慣れた同居人がお怒りである
フリーザ様がからむとややこしくなる・・・志保はフリーザ様に見つからないように部屋を出ようとした
しかしウォッカがぐいぐい引っ張るので志保はつまづいてしまった

ガタッ！

「っ！まだいたようですね・・・逃がしませんよ！」

「やべぇ！おい早くしろ！」

ウォッカは急いで外に出ると志保を押し込むように車に乗せ発車した
それを見たフリーザ様は自分で追いかければ良いのに律儀にタクシ

ーを捕まえて追いかけることにした
長い地球での生活が自分の超人的身体能力を忘れさせたようだ・・・

「あの車ですよ！さぁ運転手さん！追いかけなさ～い！」

「え！？あ・・・はぁ・・・」

それからカーチェイスは小1時間続いた・・・
結局タクシーの運転手ではウォッカを追跡し続けることはできず
ウォッカはなんとかフリーザ様を撒くことができたがまたいつ見つかるとも分からない
ウォッカはとりあえず遠くまで逃げて追ってきたところを仕留めることにした

「ジンに応援を頼めばいいじゃない・・・」

「この間もヘマしたから・・・俺が殺されるかもしれない」

こうして話は冒頭へ戻る
辺りの景色はすっかり山・・・
二人は箱根までやって来ていた

「とりあえずこの辺に身を潜めるか・・・」

温泉にでも浸かって落ち着いたらあのビジュアル系を仕留める計画でも立てよう・・・
それが終わったらシェリーを組織に引き渡して・・・
ウォッカはそんなことを考えながら疲れた体を引きずって旅館にチェックインした

「ねぇ・・・男女が同じ部屋に泊まるわけ？」

志保が聞いてきた

「ん？あぁ悪ぃ・・・じゃあ今フロントに頼んで・・・ってダメダメ！お前自分の立場分かってんのか！？」

「ちっ・・・」

この女は本当に疲れる・・・

舌打ちをする志保を引きずってウォッカは部屋に入った・・・

「さてと・・・温泉にでも入るか・・・」

志保が逃げない様にヒモで縛るとウォッカは温泉に行く事にした

なんでも疲労回復の効能があるらしい・・・今の自分にはぴったりだ

・・・・・しばらくして

温泉から上がるとウォッカは自販機でジュースを買う事にした

しかし小銭入れが見当たらない・・・

「はい」

すると横から手が伸びてきてウォッカに小銭入れを渡した

「サンキュー・・・ってどうやって抜け出しやがった！」

良く見ると浴衣姿の志保だった

勝手にウォッカの金を使ったのかジュースを飲んでいる

「仲居さんに頼んで解いて貰ったわ」

「逃げれば良いのに・・・」

「だって・・・温泉に入りたかったんだもの」

とりあえず逃げられてはかなわないので腕を取って引きずってかえるウォッカ
すると部屋から仲居さんが出てきた

「布団・・・敷いておきましたから」

「あ・・・こりゃどうも」

しかし部屋に入ると布団は一組しか出されていなかった・・・しかし枕は二つ・・・
勘違いされてる!!!
志保は慌てて押入れを開けた・・・しかし気の聞く仲居さんはもう一組の布団をどこかにやってしまったらしい

「まぁいいじゃねぇか・・・どうせ死ぬ身だろ?」

「冗談じゃないわ!死ぬ前にあんたなんかと一緒に寝たくないわよ!」

怒りながらフロントに電話をした志保だったが『照れなくていいのよ?』としか言わない仲居さん
結局その夜はウォッカと同じ布団で寝る事にした

「こっち来たら殺すわよ・・・」

「分かったって・・・そうブーブー言うな」

何はともあれ一日の疲れを癒す時が来た・・・ウォッカは静かに寝ようとした

しかしどうにも隣の女が気になる・・・そこにいるのは組織の裏切り者

しかし華奢で麗しいなかなかの美女・・・

ウォッカはその透き通るような綺麗な首筋に触れてみた

滑らかですべすべした感覚が指先を包む・・・と同時に固くてゴリっとした感覚が眉間を襲った

志保が銃を突き付けて来ている

「妙な気を起こしてみなさい・・・脳みそぶちまけて代わりにカニ味噌つめるわよ?」

「す・・・すみません」

「ったく・・・いやらしい男!」

「悪かったって・・・って!銃は返せよ!」

・・・その後三回ほど殺されかけたウォッカだったが

志保が大人しく寝息をたて始めてからは考え事をしていた

自分の横にいる女は殺すには惜しい位の良い女だ・・・

もし志保がこのまま自分と来てくれたら・・・自分は組織を裏切っても良いかもしれない

『どういうつもりだウォッカ・・・？』

・・・・・ジンのアニキからは逃げられねぇな
くそ！こんな気分になるのは小学校の時の美春ちゃん以来だ！

ウォッカは結局一晩中起きていた・・・

・・・翌朝

「あの・・・お客さん」

「何ですか？」

フリーザ様は持ち前の執念でウォッカの居場所を突き止めつつあった
一日中付き合わされたタクシーの運転手はもうへとへとである
しかしこれまでの走行距離から料金は相当なものだ・・・

「あの・・・料金の方なんですが」

「何と！あなたはこのフリーザ様から金を取るつもりですか！？」

「え！？・・・だって・・・タクシーだし・・・」

「なんと浅ましい！消えなさい！」

フリーザ様はそう言うとタクシーを箱根の山めがけて蹴り飛ばした
泣きながら山中を彷徨う運転手が救助されたのは2日後のことである・・・
それはさておきフリーザ様はウォッカを見つけようと朝の温泉街を

彷徨っていた

「おい・・・そこのビジュアル系」

すると黒尽くめの長髪男に呼び止められた

「全身黒尽くめでサングラスをした男を見なかったか？」

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード１８「妹よ～お姉ちゃんは心配です～」

「そういえば最近志保の顔見て無いわね・・・久しぶりに会ってみよう」

・・・翌日

「久しぶりお姉ちゃん・・・」

「久しぶり志保！何？相変わらず訳の分からない薬の研究なんかしてるの？」

「うん・・・オロナミンΩとかね・・・」

「オロナミンΩ！？アポトキシンじゃないの？」

「言い間違えたわ・・・」

「全然合ってないじゃない・・・まぁ良いわ・・・それより最近の調子はどうなの？」

「・・・・・子供が出来たわ」

「えぇ！？うそ！？父親は誰？」

「いない・・・」

「未婚の母になるつもりなの？大丈夫なの？」

「うん・・・頑張って育てる」

「えぇ！？もう産まれてるの！？どんな子？何歳？」

「今ね・・・たまっちかな」

「・・・ってたまごっちじゃない・・・しかも初代・・・懐かしいもの始めたわね」

「うん・・・まめっちに成るようにがんばる！」

「いや・・・あんたのポジション的に薬の研究を頑張った方が・・・」

立派なおやじっちに育ったと言う・・・

82．ラヴァーズ・アンラヴァーズ（後書き）

今回で終わらせるはずが・・・
それにしてもウォ志か・・・我ながらとんでもないカップリング
他にウォ志のカップリングやった人いたら是非一報いただきたいものです
なんて語呂が悪いんでしょうウォ志・・・ウォシュレットみたいなのでこんなカップリングは断固反対！
パンクに抗議します！
二酸化炭素出してんじゃねぇよ！息止めろ！！！
・・・・・・
せいぜい1分ですね＾＾；

83．君のためなら

男はある時自分の人生や命と等価値のものと出会う
臆病で堅実で・・・
普段はちまちまと人生設計しているような男でも
それを得るためなら人生や命を対価にしても良いと思う
それが何なのか？
それは人それぞれ・・・
でも大抵は女性である

第８３話　君のためなら

裏切り者を連れてくるようにウォッカに言ってから半日・・・
ジンは首を長くしてその女の到着を待っていた
しかし女はおろかウォッカさえ連絡がつかなくなってしまった
ＦＢＩが仕掛けた罠だったのだろうか？
それともウォッカがしくじったのか？

「ちっ・・・」

舌打ちをするとジンは愛車に乗り込んだ
ウォッカのことだ・・・そこかしこに足跡を残していることだろう・・・

・・・・・それからさらに半日
ジンは箱根の温泉街で朝日を浴びていた・・・どうもこの辺りにウ

ォッカが潜伏しているらしい
それにしても・・・闇に生きる自分を洗い流そうとしている様で朝日は好きになれない
しかしそんな朝日が自分と同じく全く似合っていない男を見つけた
滑稽なまでのビジュアル系だ・・・
当てがあるわけでも無い・・・とりあえずこの男に聞いて見ることにしよう

「全身黒尽くめでサングラスをした男を見なかったか?」

ジンはいつものように凄みを効かせながら効いた
この圧力の前にはどんな奴も怯えながら知っている事をさながら異物を飲み込んだカエルが胃袋を引っくり返すように吐き出すしかない
ジンは男の返答を待った・・・

「何ですか?このフリーザ様にものを尋ねようってのにその態度は・・・
だいたい何ですか?その趣味の悪い服・・・それとこのチャラチャラした長髪!
ヤンキーだかなんだか知りませんが消し去りますよ?」

しかし返ってきた答えはそれ・・・
服装もそうだが頭の中もそうとうイカレているらしい・・・

「良い度胸だな・・・」

ジンは殺気のこもった目でフリーザ様を睨みつけた
しかしフリーザ様もそんなジンがお気に召さなかったのか怒りの眼差しを向けた

・・・・・・

「ちくしょう・・・結局一睡も出来なかった・・・」

妙に朝日の似合う男ウォッカは早朝の温泉街を散歩していた
まだ店などは閉まっているが同じく旅館に泊まっている観光客等が
散歩をしていてそれなりに賑わっている
中にはウォッカに向って「おはようございます」などと挨拶してくる者もいる
ウォッカは適当に返事を返すと温泉街を更に進んだ

「ん？・・・あれは・・・」

ウォッカの少し先ににらみ合いをする二人の男が見えた
良く見ると一方は昨日のビジュアル系・・・そしてもう一方は・・・

「やべぇ！ジンのアニキだ！」

ウォッカは急いで旅館に引き返すと自分の部屋に向った
すると途中の廊下で志保に出くわした

「おい！アニキだ！ジンのアニキがすぐそこに！」

慌てた口調で言うと志保は一瞬驚いた顔をした
しかしすぐにいつもの冷静な面持ちに戻り静かに微笑を浮かべた

「あら・・・遂にお迎えが来ちゃったのね・・・」

覚悟は出来ていると言った感じで落ち着いている
「最後にもう一度温泉に浸かりたい」などと冗談を言いながら笑っている
まぁそもそも昨日には死ぬ気でいたのだが・・・

「笑ってる場合かよ！お前殺されるんだぞ！？」

「あら？あなたは私を殺す気じゃなかったの？」

殺す気じゃなかったの？
同じ質問をウォッカは自分の心に向ってしてみた
殺す気だった・・・でも・・・
ウォッカの中で昨晩から続いていた葛藤が決着を見ようとしていた

「なぁ・・・俺といっしょに逃げないか？」

「はぁ？」

何を唐突に言い出すのだろう？
可哀想に温泉に浸かりすぎて頭がふやけてしまったのだろうか？
しかしウォッカの目は真剣そのもの・・・
残念なのはサングラスをかけているため全く真剣さが伝わっていないことである

「俺は・・・お前のためなら組織を裏切っても良い！」

「ちょ・・・本気なの？私が言うのも何だけど組織を裏切ったらどうなるか分かってるの？」

「分かってる・・・ジンのアニキやベルモットの姉さんにも命を狙

われるだろうな・・・」

「だったら・・・！！！」

その時突然ウォッカは志保を抱きしめた・・・

「この人痴漢です！」という志保の叫びを無視して抱きしめ続けた

「結婚しよう！パラオ辺りに逃げて二人で静かに暮らそう！」

「無理！あなた私の好みじゃないし・・・離してちょうだい！」

抱きついてくるウォッカのボディにパンチやら膝蹴りやらを入れながら志保は言い放った

しかしウォッカはまるでひるむ様子がない・・・これが愛の力なのだろうか？

「好みの男になってあやるさ・・・どうせ組織から逃げるには顔も変えなきゃいけないだろうしな」

「私・・・理想高いわよ？顔はキアヌ・リーブスで」

いくらでも整形してやるさ

「体はアーノルド・シュワルツェネッガーみたいにマッチョで・・・」

毎日ジム通いしてやる！もちろん主食はプロテイン！

「エメリヤーエンコ・ヒョードル並の強さの・・・」

組織で鍛えた俺の腕で・・・・って

「ひ・・・ヒョードル？」

「ヒョードル」

・・・・・・無理だ

あのミルコやノゲイラですら敵わなかったのに・・・俺なんかじゃっていうかヒョードル並って・・・ヒョードルぐらいじゃねぇのか？

くそ・・・どうにかしたいがどうにも最後のハードルが高い・・・

「最後のハードルだけ下がらないか？」

「何で？私のためならそれぐらい楽勝でしょう？」

思わず志保の体を離したウォッカに今度は志保がじりじりと詰め寄るもっとも志保は「こんなハードルクリアできるわけがないしめしめ」と思って言っているのだが・・・

「分かった・・・今すぐは無理だが必ずヒョードルを倒して見せる！」

「え・・・ちょっと？あんまり無理は・・・」

ウォッカとしては小学校の時の美春ちゃん依頼の良い女・・・

これを取り逃がしたら次はいつとも分からない

サングラス越しで伝わらない真剣さを必死で言葉にするウォッカ

しかし志保としては真剣になられても困る

ウォッカと結婚するぐらいならフリーザ様に八つ裂きにされたほうがましだ・・・

頭の中で消し去られる自分を思い浮かべた時だった・・・

「ぐっ・・・！あぁぁ・・・！」

「ん？どうした？大丈夫か！？志保！？」

死ぬ気だった志保にとって想定外の痛みがやって来た
・・・って言うかいきなり呼び捨てかよ！
馴れ馴れしく恋人を気取るウォッカに非難の視線を送りたいが
体を溶かすような凄まじい熱を帯びた痛みが体を包むのでそれもできない

「救急車か？救急車いるのか？」

「大丈夫・・・ちょっとトイレ行って来て良い？」

「あ・・・あぁ・・・」

志保はとりあえずウォッカの前から姿を隠す事にした
トイレに入ると痛みは最高潮に達し・・・それが治まるとそこには
灰原哀がいた
まぁ哀に戻ったのは良いとして外の馬鹿はどうしてやろう・・・
まだくらくらする頭で哀は考えた

・・・・・・

「志保・・・大丈夫なのか？」

「おい・・・ウォッカ」

トイレの前で心配そうに立ち尽くしていたウォッカの耳を聞き慣れた声が貫いた
驚いて振り向くと・・・なぜか深手を負っているジンが銃を向けていた

「こんな所で何油売ってやがる・・・シェリーはどうした？」

怒りの形相で詰め寄ってくるジン・・・ウォッカは唾を飲み込むと口を開いた

「シェリーは・・・スーパードライ達の勘違いでした・・・
ここには俺一人で来ました・・・ここ最近疲れていたもんで」

「・・・ウォッカ・・・嘘はすぐにバレる・・・お前の部屋に連れて行け！」

そう言うとジンはウォッカに銃を突き付けたまま部屋まで案内させた
中に入ると布団がしきっぱなしになっている・・・
もうダメか・・・ウォッカが覚悟した時だった

「・・・・・・一組だけか」

ジンが布団を調べる・・・そう言えば昨晩は二人で一緒に寝たのだった
幸いなことに二つの枕のうちの一つは志保が片付けてしまったのか見当たらない
ジンは疑り深く布団を調べるがしばらくすると立ち上がった

「まぁ良い・・・今回だけは信用してやる・・・」

「は・・・はぁ・・・」

「帰るぞウォッカ・・・」

こうしてウォッカは志保への想いを噛み殺しながら旅館を後にしたいつかまた会えるその日を信じて・・・

「ところでアニキ・・・なんでボロボロなんですかい?」

「・・・死にたいのか?」

「い・・・いえ・・・」

・・・・・・

その頃哀は慎重にトイレの外の様子を伺った・・・

「あら?いないわね・・・」

廊下にはウォッカの姿はない・・・

いつまでもトイレにこもっていても仕方無いので警戒しつつ廊下に出てみた哀

すると後から首根っこを捕まれた

「こんな所で何やってんですか?」

見るとフリーザ様だ・・・哀はほっとして思わず笑いがこぼれるなんのことか?と思いつつもフリーザ様はぶかぶかの浴衣を着た哀を床に下ろした

「まったく腹立たしい！いきなりケーキをぐちゃぐちゃにされたので犯人を追いかけてきたら
変なヤンキーに絡まれちゃいましたよ！２・３発殴ったら『今日はこのぐらいで勘弁してやる』ですって
ふふん！ベタなコントでしたよ！まぁこのフリーザ様の恐ろしさを知る良い機会になったでしょうがね」

「へぇ・・・」

また可哀想な犠牲者が出たのか・・・哀は顔も知らぬヤンキーとやらを哀れに思った

「ところでここ温泉らしいですね！怒りと疲労を癒してから帰りますよハイバラさん！」

「はいはい・・・それと子供用の浴衣貰ってきてくれない？」

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード１９「蘭姉ちゃんの人生相談室」

「あの・・・蘭さん・・・」

「あら何光彦君？思いつめた顔をして・・・」

今日の相談者は円谷光彦君・・・少年探偵団の頭脳・・・
見た目はそう言うポジションっぽいキャラだが実際はコナンがいる
はっきり言っている意味のないキャラだ・・・

「で・・・相談て？」

「前も映画か何かで相談したと思うんですが・・・
歩美ちゃんと灰原さん・・・二人の女性を好きになるのはいけない
ことなのでしょうか？」

どうやら恋のお悩みらしい・・・
ここは真剣に答えて上げなくては・・・

「正妻と愛人？・・・って感じ？で良いんじゃね？」

「なるほど！さすが蘭さん！僕達凡キャラには無い発想が出来る！
そこに痺れる！憧れるぅ！」

「とっかえひっかえでハッスル！ハッスル！良かったね光彦君！」

今日もナイスなアイデアで一人の少年が救われた
ありがとう蘭姉ちゃん！

83．君のためなら（後書き）

切ねぇ・・・
自分で言ってみました＾＾；
誰も言いそうになかったので・・・
さてさて私の好きなウォッカを活躍させたかったんですが
全然活躍しませんでした
ウォッカは思いのほか使い勝手が悪いキャラです・・・
まぁそれでもフリーザ様と灰原さんは続くのです
ってことでパンクな感じの次回は
歩美、１年Ｂ組を潰せ！
ジン、決死のストライキ！
大滝警部、アナゴさんと呼ばないで！
の三本です
ジャン・ケン・ポン！
・・・ジャンケン付き合ってくれた人は相当なお人好しです

８４．奥様は元スケバン（蜘蛛編）

警視庁捜査一課警部目暮十三
彼には影ながらに支えてくれる優しい奥様がいる
それが目暮みどりである
とっても良く出来た奥様である
ただ彼女が普通の奥様と違うのは
元スケバンということである

第８４話　奥様は元スケバン（蜘蛛編）

その日フリーザ様と少年探偵団は病院にやって来ていた
ある人物を見舞うため・・・目的の病室を発見するとコナンはドアをノックした

「どうぞ」

ドア越しに返って来た声を聞くとコナンはドアを開けた
病室の入り口の札には目暮十三と書かれている
そう・・・捜査一課の目暮警部のお見舞いにやって来たのだ

「やあ！コナン君に少年探偵団じゃないか！・・・それとフリーザ様だったかな？」

病室に入ると元気そうな目暮の声が出迎えてくれた
しかしベッドの上には包帯だらけの痛々しい男の姿がある・・・まるでミイラだ

「いやいや・・・驚きましたよ目暮さん！あなたがこんなことになるなんて・・・このりんご美味しいですね」

フリーザ様は病室に置いてあったりんごをかじりながら言った

「行儀が悪い」とフリーザ様を小突きながら哀は目暮に紙袋を差し出した

「美味しいクッキー買って来たから・・・良かったら食べて下さい」

それだけ言うと哀はベッドの脇に紙袋を置き

病室にあった花瓶の水を取替えるために出て行った

「犯人に心当たりはないの？」

椅子を出してベッドの横に腰掛けるとコナンは聞いた

それは1週間前のことだった

仕事を終え自宅に向って歩いているとき突然後から走って来たバイクがぶつかって来たのだ

ぶつかって来たバイクは逃走・・・目暮は重傷・・・

現場は見通しの良い直線道路だったことから明らかな悪意が感じられる

そしてその犯人はまだ見つかっていないのだ

「さぁな・・・警察官って仕事は恨まれやすい仕事だからな」

検討もつかない・・・と溜息をつく目暮

それでも警察官として正義のために職務を全うして来たつもりである

目暮の遣る瀬無さがひしひしと伝わってきた

「まぁ命があったんだから・・・まずは死ななくて良かったじゃない」

綺麗に花が生け直された花瓶を手に哀が戻ってきた
花瓶を元の位置に置きながらそう言うと目暮は「そうだな」と苦笑した

「何言ってんですか!そうだとしたらとんだ逆恨みですよ
そんな卑劣なアウトローライダーは私が消し去ってやりますよ!」

「病院内ですから静かにして下さい!」

病室のドアを開けて注意してきた看護婦さんを見送るとフリーザ様は探偵団を見た

「皆さん!そいつを見つけ出して正義の鉄槌を下すんですよ!」

「オー!」と元気良く返事をする歩美、光彦、元太の3人
それをコナンが「やめておけ」と制止する

「ゴホン!ゴホン!・・・静かに!」

いつの間にやら戻って来ていた看護婦さんに軽く謝ると目暮は苦笑しながら言った

「ありがとう・・・でもわしの部下達が今必死で探しとるから・・・
皆は危ないことに首を突っ込んだらいかんよ・・・良いかな?」

「はーい！」

子供達に言い聞かせると元気な声が返ってきた
やっぱり子供は元気で可愛い・・・

「うるせぇ！」

早く退院してぇな・・・
三度怒られてシュンとなってしまった探偵団を見ながら目暮は思った・・・

・・・数日後
フリーザ様と哀はショッピングセンターで買い物をしていた
一通り必要な物を買うと買い物袋を持って外に出た
すると先日病院で会った人物に遭遇した・・・目暮の妻みどりだ

「あら！この間はお見舞いをどうも・・・」

向こうもこちらに気付いたらしい・・・
3人は目暮の容態などについて話をした・・・まだ退院は先になるらしい

「ところで不埒な犯人は見つかったんですか？」

「えぇ・・・それが・・・」

しかし犯人の話題になるとみどりは口をつぐんでしまった
どうしたのかと2人が首を傾げているとみどりは口を開いた

「今度は近所に住んでる私の友人が被害に・・・」

「本当なの？」

そうだとすると犯人の目的は目暮ではないようだ
これは捜査一課の面々も困っていることだろう
そんな事を考えていた時だった

「まだ気付いてないのかい？相当丸くなったようだね！」

フリーザ様達の目の前にバイクに跨った一人の女が現れた
口ぶりからすると一連の事件の犯人のようだ

「おやおや・・・自分からわざわざ出向いてくれるとは・・・痛めつけてあげましょう」

「あんたには用はないよ！すっこんでな！」

女はフリーザ様を一喝するとヘルメットを取ってみどりを睨みつけた

「お前は・・・ブラックスパイダー・麻衣！」

「ようやっと思い出したようだね・・・レッドスコーピオン・みどり」

「何？プロレスか何か？」

どうも知り合いらしいが・・・
話が飲み込めない哀とフリーザ様を置き去りにして二人は話を始めた

「惨めだね・・・なんだい?その様は?」

「もう馬鹿をやる年じゃないの・・・麻衣?あんたはいつまでそんな事をしているつもりなの?」

「昔言ったろ?この命が尽きるまでさ!あんたは忘れちまったのかい?あの日のことを!」

ピンっと張り詰めた空気の中でみどりは静かに目を閉じた・・・

「忘れるわけない・・・でもそれとこれとは話が別よ」

「あぁ?専業主婦なんかに落ちて脳みそ蕩けちゃったのかい?やっぱりヤキ入れた方が良さそうだね」

麻衣はバイクから降りるとみどりの方に一歩一歩と近付いたしかし何を思ったか突然体を翻すと再びバイクに跨りヘルメットをかぶった

「邪魔が入りそうだね・・・今日のところは帰るよだけど覚えときなみどり!あんたに平穏な生活は似合わないんだよ!」

それだけ言うと麻衣は物凄い爆音を立ててバイクで去って行ったその数秒後・・・サイレンを鳴らしながら高木と千葉がやって来たどうもフリーザ様が呼んだらしいが一足遅かった

「遅い!逃げられたじゃないですか!あなたたちそれでも刑事なんですか?」

車から降りてきた二人に文句をたれるフリーザ様
いつものことだ・・・と思いつつ適当に謝る高木と千葉・・・
そのやる気のない態度がフリーザ様の怒りを煽った

「どうも刑事としての責任感に欠けますね・・・ハイバラさん！思い知らせておあげなさい！」

「・・・今度取り逃がしたら・・・佐藤刑事を引ん剥いてとんでもない目に遭わせるわよ？」

「わ・・・分かったって！努力はするから！」

「それで良いんですよ」

そんなコントが繰り広げられている横で
みどりはいつの間にか麻衣が残して行ったらしいカードを手にしていた・・・

『1週間くれてやる・・・それまでに昔のあんたに戻っておきな！』

・・・・・・

「ここで仕留めるようなこと言っといて・・・準備良すぎだよ麻衣・・・」

今日はとても良い陽気・・・
風は穏やかで柔らかく日差しも優しく温かい・・・
しかしそれは嵐の前の静けさなのかもしれない
みどりは呆然と麻衣の去って行った方向を見つめながら佇んでいた
仕留められなかった場合を想定して一生懸命カードをしたためる麻

衣の姿を思い浮かべながら・・・

「ぷっ！・・・くくく」

「・・・何笑ってんですか？」

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード２０「名探偵くどーしんいち」

俺の名前は工藤新一・・・

泣く子も黙る・・・いや黙らないかもしれない・・・黙らないよな・・・

泣く子は嫌いだ！・・・そしてそんな俺は高校生探偵だ

今日の事件はホテルの一室で起きた

被害者は天極育造（てんごくいくぞう）さん（３４）

死因は刃物で腹部を数箇所刺された事による失血性ショック死だ

「一見すると犯行当時同じ部屋に泊まっていた渡賀弥太代（わたしがやたよ）さん（２７）だが・・・」

「そうです・・・私がやりました・・・」

「えぇ！？そうなんですか？どうやって？」

「そこにあるナイフでお腹を数回刺しました・・・」

「そのままじゃねえかよ！トリックとか使えよ・・・」

「面倒だったんで・・・」

「えぇ？・・・そっか・・・これじゃあ推理できないなぁ」

「じゃあ私の動機はなんでしょう？」

A．痴情のもつれ　B．ある犯罪の口封じ
C．保険金目当て　D．口論の末カッとなって・・・

「どれでしょう？」

「よ・・・４択かよ・・・普通何もないとこから推理するだろ！？」

「ライフラインもありますよ」

５０：５０　テレフォン　オーディエンス

「ミリ○ネアかよ！・・・５０：５０で・・・」

「ちゃっかり使うんだ・・・コンピュータが答えを二つに絞ります」

A．痴情のもつれ
D．口論の末カッとなって・・・

「どっちでしょう？」

「知るか！」

８４．奥様は元スケバン（蜘蛛編）（後書き）

みどりさん登場
おまけで一回登場させたら気に入っちゃいました
こういう過去があるキャラは適当に過去をいじっておけばネタになるから楽ですね
おまけも駄文として処分してるけど
ほじくり返すと結構使えますね・・・あのままじゃ無理ですけどね^^；
これからもパンクにほじくり返していきます
愛だけじゃ地球はおろか一人の人間も救えないんだぁ！
でも愛は大事ですよね・・・

８５．奥様は元スケバン（蠍編）

あの頃は若かった・・・
昔を思い出すとふと過ちばかり思い出してしまう
過去の汚点を発見してしまい
後悔から真っ青になったり
恥ずかしさから真っ赤になったり
それでも人のベクトルは常に未来に向いている
後悔や恥を風として帆に受け
人生と言う大海原をひたすら尽き進むのである

第８５話　奥様は元スケバン（蠍編）

「どうぞ・・・」

フリーザ様と哀の目の前にお茶が差し出された
二人は今目暮宅にいる・・・
みどりはお茶を置くと二人の反対側に腰掛けた

「彼女とはどういう関係なの？」

お茶をすすりながら哀が聞いた

「スケバンだった頃の仲間よ」

「そうだと思ったわ・・・」

しかしかつての仲間がなんだって今頃こんなことを・・・
哀は腑に落ちないといった顔でまたお茶を口に運んだ
そんな哀の表情を見て溜息をつくとみどりはまた口を開いた

「あれはもう何年前のことだったかしら?私達には仲の良い友達がいてね」

それは私がまだ若かったころ
主人とも出会ってなくて私はスケバン街道まっしぐら
その頃私は麻衣と組んでいて二人でよく暴れ回ったものね
終いには「レッドスコーピオン・みどり」と「ブラックスパイダー・麻衣」と呼ばれ
そこら中で恐れられるようになったわ

「何なの?そのニックネーム・・・」

「私は良く相手を血が出るまで殴って返り血でセーラーを赤く染めてたから・・・
麻衣は更にセーラーを洗濯しなかったから血が乾いて真っ黒に・・・」

「もう良いわ・・・続けて」

そんなある日私達は一人の女に出会ったの
彼女の名前は木村由香子・・・私達の仲間になりたいって来た時は驚いたわ
その頃の私達に近付く勇気のある馬鹿なんてほとんどいなかったから

「馬鹿・・・?ちょっと昔に戻ってるんじゃないですか?」

「あらやだ・・・ほほほ」

由香子は異常なまでにスケバンに憧れを抱いていた
私達は最初追い返したんだけど彼女はその後も諦めずに毎日来たわ
でも毎日顔を合わせているうちに私達はだんだん仲良くなってね
結局彼女を仲間にいれてまた暴れる日々・・・
そんなある日私は彼女に聞いたわ・・・
「そんなにスケバンを愛してあんたはどうするの？」って

「全女学生スケバン化・・・これが私の野望よ」

スケバンらしくない可愛らしい笑顔で彼女はそう言ったわ

「全女学生ですってよハイバラさん」

「やーよ・・・」

「ふふっ・・・今の私も反対するわ・・・でもそんな彼女もあの日・・・」

あれは暑い真夏の日のこと・・・
私と麻衣はいつもの溜まり場にいっしょに行ったわ
到着すると由香子は地べたに横たわっていた・・・寝てると思ったわ

「由香子！そんなところで寝てると・・・由香子！！！」

彼女は口から血を流していた・・・
そして彼女の側には空のプラスチック容器が３つ
それはその前日売店からかっぱらった賞味期限切れのプリンだった

しかも猛暑で大分傷んだそれを由香子は一人で3カップも・・・

「ごめん・・・まだいけそうな気がしたんだけど・・・ゲホッ！・・・
・ダメだった」

「馬鹿！なんて食い意地の張った子なんだい！麻衣！救急車を・・・
」

「あ・・・あいよ！」

「ゲホッ・・・ゲホッ！ゲホッ！・・・全・・・女学生・・・スケ
バン化・・・」

「由香子ぉぉぉ！！！」

・・・・・・

「その後救急車で運ばれたけど・・・彼女は助からなかったわ
そして私と麻衣は彼女の霊前で誓ったの！絶対に全女学生スケバン
化を成し遂げるって・・・
でも結局そんなことが出来るはずもなく・・・私は主人と出会って
結婚したわ」

「なるほど・・・先に結婚されたことを僻んでるんですね！あの売
れ残りは」

「そうじゃないでしょ・・・きっと裏切られたと思ったのね・・・」

3人が黙りこんだ時だった

突如みどりの携帯電話がブルブルと振動した・・・
どうやらメールのようだ・・・みどりは携帯の画面を覗きこんだ

『由香子の好きだったあの場所で決着をつけよう・・・麻衣』

「どうやってメルアドを・・・・」

・・・1週間後
その場所に麻衣はいた・・・
刻一刻と迫る決戦の舞台は3人がよく溜まっていた倉庫
麻衣は時計を確認した・・・約束の時間まであと少し

ガラ・・・

突如倉庫の入り口が開いた
ハッとしてそちらを見た麻衣の目に待望の人物は映らなかった

「ふっふっふ・・・ブラックスパゲッティさん・・・ここで終わりですよ」

「ブラックスパイダーよ・・・イカ墨になっちゃうでしょ」

そこにいたのはフリーザ様と哀・・・そして高木と千葉と佐藤の3人の刑事であった

「今回は佐藤さんも加えたこの布陣・・・逃がしませんよ」

3人の刑事が麻衣を取り囲む

「梨本麻衣さん・・・傷害及び殺人未遂の容疑で逮捕します」

佐藤は令状を見せながら言うと手錠をかけようと麻衣に近寄った
その時それまで大人しかった麻衣の拳が佐藤のボディを捉えた

「佐藤さん！」

後に吹っ飛んで悶えている佐藤に高木が近寄った
しかしその直後後頭部に激しい衝撃を受けた

「高木！・・・この！」

千葉は威嚇しようと拳銃を構えたが時既に遅し・・・
メリケンサックをはめた麻衣の拳が顔面にめり込んだ

「うわらば！」

鼻血を吹いて失神する千葉・・・見事に全滅である

「あ～あ・・・ちょっと・・・なにしてるんですか！こうなったら私自ら」

「最初からそうすれば良いじゃない・・・」

拳を突きいれようと構える麻衣にじりじりと近寄るフリーザ様
しかしその時倉庫の入り口が音を立てて再び開いた

「待ちな！そいつはあたいの獲物だよ！」

見るとそこにはみどりが立っていた・・・それも鋭い殺気を放って

いる
麻衣はニヤリと笑うとフリーザ様の横をすり抜けみどりの前に立った
「お帰りレッドスコーピオン・・・決着の時だね・・・」
「関係無い人間を2人も巻き込みやがって・・・容赦しないよ!」
しばらくにらみ合うと2人は突然ヨーヨーを取り出した
「ハイバラさん!あれ見た事ありますよ!スケバンの定番武器ですよ!」
「本当ね・・・まさか実際にあれで戦う人がいたなんて・・・」
倉庫内の空気が一気に張り詰める
冷や汗でびっしょりになりながら見守るフリーザ様と哀の前でついに決戦は始まった
「行くよ!ループ・ザ・ループ!」
「その程度かい?ブレイン・ツイスター!」
2人は一斉に技を繰り出す・・・見事なヨーヨー捌きである
しかし何かが違う・・・
佐藤はお腹を押さえて悶えている
高木は床に張り付いて気絶している
千葉は鼻血を出してくたばっている
それでもこの2人の周りだけ言い様の無い平和ムードが漂っていた
「あの・・・ちょっと・・・」

「なんだい!?勝負の最中だよ!」

「いや・・・その勝負って・・・ハイパー・ヨーヨーですか?」

「そうだよ!黙ってあたいらの技を見てな!ＵＦＯ!」

「なにを!・・・トウキョウタワー!」

・・・お前らハイパー・ヨーヨー世代じゃないだろ!
それはもはや声にならない心の叫びとなって
いつまでもフリーザ様と哀の間で響き続けるのであった・・・

・・・・・数日後
フリーザ様と哀・・・そして毛利一家は珍しくポアロで一緒に食事をしていた

「やあ毛利くん!・・・それとフリーザ様だったかな?」

そこへ目暮がやって来た・・・無事に退院できたようだ
どうでも良いが何で「フリーザ様」だけ自信なさげに呼ぶのだろう?
そんな事を考えながら哀は一つ気になっていたことを聞いて見た

「奥さんは元気?」

あの後フリーザ様達は馬鹿らしくなって撤収してしまったし
応援の警官が到着したころには2人はもういなくなっていたそうなので
哀達はその後の結末を知らない・・・

一応結果だけは気になったので聞いてみたのだ

「みどりか・・・なんか最近またツッパリ出したんだ」

「えぇ!?警部殿の奥さんまたツッパリ出したんすか?」

「そうなんだよ毛利君・・・家に帰ってもヨーヨーばっかり話しかければ『うるさいよ!飯の仕度なら自分でやんな!』だからな・・・」

スケバンに戻ったみどりがその後どうなったのかは・・・目暮以外分からない

続く

おまけ:ショート劇場

エピソード21「LOVE・LOVE・ヨーコちゃん」

私の名前は木之本剛志(きのもとつよし)
ドラマなんかを手がける脚本家だ・・・
今日は新しく始まるドラマ「彼女と彼女の友達とそのいとこ」の撮影現場に来ている
ヒロインはあのトップアイドル沖野ヨーコだ・・・

「おい!」

彼女が呼んでいる・・・気のせいかな?「おい!」って言わなかっ

たか？

「なんだいヨーコちゃん？・・・ぐっ！！！」

気のせいかな・・・？ちょっと・・・胸倉掴まれてるんですけど？

「てめぇなめてんのか？何だよこの『キスシーン』ってよ！」

「えぇ！？・・・すみません・・・でも恋愛ドラマだし・・・」

「百歩譲ってキスはしても良い・・・何だあれは！」

彼女は親指で相手役の男を指した

最近売れてきたお笑い芸人「轟轟轟太郎（ごうごうとどろきたろう）」だ

「あんな不細工と接吻なんぞできるか！違う奴を連れて来い！葉闇（はやみ）モコえもんとかいるだろ？」

「む・・・無理ですよ～！」

「だったら脚本を書きなおせ！今すぐだ！」

「でもキスシーンが無いと恋愛ドラマとして・・・」

「それを何とかするのがてめぇの仕事だろうが！首をへし折られたくなかったら早く直せ！」

母さん・・・剛志です・・・

脚本家の仕事・・・挫折しそうです・・・

久しぶりに実家に帰って味噌汁が食べたいです・・・

でもその前に首が折れそうです・・・

85．奥様は元スケバン（蠍編）（後書き）

探偵が事件を推理した場合って令状いらないんですかね？
一応刑事訴訟法２１０条の緊急逮捕の要件に当てはまりそうですが・・・
そもそも日本の法体制は探偵による事件解決を前提としてませんから分からないですね・・・
イギリスとかではどうなんでしょう？
パンクに気になります
名探偵なんてクソ食らえぇ！！！
・・・まぁでもリアルに書いたら「名盗聴器ハンターコナン」とか「金田一少年の浮気調査」になっちゃうのでダメですねＡ＾；

86．セック・オブ・モモ（灼熱の雪洞）

3月3日は桃の節句・・・
別名雛祭りと呼ばれるその日の主役は女の子
一家に生まれた可愛い宝
そんな彼女達の健やかな成長と幸せを願って雛人形が飾られる
そう・・・売れ残らないように・・・
しかし男はつまらない・・・せいぜい雛あられを食べる程度
俺達に光を！光を！
男達の怒号が春の空に響き渡る・・・

第86話　セック・オブ・モモ～灼熱の雪洞（ぼんぼり）～

「ハイバラさん～・・・ちょっと良いですか？」

梅のつぼみも膨らみ始めいよいよ春の訪れを予感させる頃合・・・
春になっても変わらないフリーザ様の呼ぶ声が響く

「今忙しいのよ・・・後にしてちょうだい」

しかしその声にこたえる部下の返事はそっけない
あまりの態度にフリーザ様は頭に血が登ってしまった
お仕置きでもしてやろうと声のした方を覗きこむと・・・
本当に忙しそう・・・

「何をしているんですか？」

机を動かしたり何やら箱のような物を持ってきたり・・・
リビングを行ったり来たりでてんてこ舞いの2人にフリーザ様は尋ねた

「ん?明日の準備じゃ・・・明日ここで雛祭りをやるからのぅ」

「ヒナマツリ?何ですかそれは?・・・ヒナンクンレンっていうのなら知ってますけど」

フリーザ様は以前なんとなく参加した町内会の避難訓練を思い出したヒナマツリなる物はきっとそれの祭版だろう・・・そう思って博士に聞くと博士は「はっは!」と笑いそしてヒナマツリなるものの意味を説明してくれた良く分からないが・・・女の子がお嫁にいけるように人形を飾ってどうのこうの・・・
まぁとりあえず祭りらしい

「なるほど・・・ではこのフリーザ様のために存分に祭を盛り上げるのですよ!」

「話聞いてた?雛祭りの主役は女の子よ・・・」

箱から雛人形を取り出しながら哀が言った
その言葉にフリーザ様はピクリと反応した・・・主役が女の子とはどういうことだろう?

「つまり明日来る歩美ちゃん、蘭君、園子君、それと哀君じゃな」

「私は別にいいわよ・・・」

それだけ言葉を交わすと2人はまた作業に取り掛かった
しかし自分が主役でないと分かったフリーザ様は腸が煮えくり返るような気分だった

「何という愚かな行事でしょう！1日たりともこのフリーザ様以外が主役になる日など・・・認めません！」

リビングを後にすると一人「主役奪還作戦」を練るのであった

・・・翌日

「お邪魔します！」

「おぉ！よく来たのぅ・・・まぁ今日は楽しんで行ってくれ」

玄関から元気の良い声が聞こえた
そこには綺麗に着飾った歩美率いる少年探偵団・・・そして蘭と園子がいた
博士と哀は皆に上がって貰うとリビングに案内する
そこには綺麗な七段飾りの雛人形と豪勢なご馳走が並んでいた
皆でご馳走をつつきながらわいわいと楽しく盛り上がる・・・
そんな平和なリビングにあの御方がやって来てしまった

「ほほぅ・・・これが雛人形とやらですか・・・」

「あ！フリーザ様・・・こっち来て一緒にどうですか？」

蘭がフリーザ様に席を勧める・・・しかし当のフリーザ様の視線は雛人形に突き刺さっていた

「こいつさえいなければ・・・今日の主役は僕で安泰のまま・・・」

ニヤニヤと邪悪な笑みを浮かべるながらそんな事を口走る
あからさまに良からぬ事を企んでいるのが見て取れる

「ちょっと・・・何しようとしてんのよ」

思わず哀がフリーザ様に詰め寄った・・・しかしフリーザ様はすでにデスボールを作っていた

「この雛人形を消す！」

「えぇ！やめてフリーザ様！」

「おい！歩美を泣かすと許さねぇぞ！」

突然雛人形を破壊すると言い出したフリーザ様を泣いて止める歩美
そしてそれを援護するようにフリーザ様を攻撃する元太と光彦・・・
しかし地球人の子供の攻撃などフリーザ様にとってはそよ風に等しいまったく効果を発揮せずにフリーザ様が雛人形を破壊してしまうかに見えた・・・

「待ちなさい！」

しかし突如園子が割って入ってきた・・・
フリーザ様の前に仁王立ちするとふっと笑ってから切り出した

「ここはバトル雛遊びで決着を付けましょう」

「バトル雛遊び？」

「・・・何それ？」

突然の提案・・・訳が分からないという皆にその趣旨を説明する園子

園子によると「バトル雛遊び」とは・・・

もともとは平安時代の貴族の子供が雛人形をぶつけ合ったことから

始まった由緒正しい遊びらしい

今ではルールも大分変わり・・・女チームと男チームに分かれて争い

女チームは雛壇の天辺の御内裏様の下に御雛様を嫁がせれば勝ち

男チームはそれを3月3日が終わるまでそれを阻止するか御雛様を

奪い取れば勝ちである

ちなみに攻撃に使用して良いのは雛飾りとして用いられる物のみで

男チームは男の人形・・・

女チームは女の人形と下の方に飾ってある小道具である・・・

「かなり胡散臭いゲームね・・・」

「つまり我々はこの雛壇を防衛すれば良い訳ですね」

「そう言うこと！じゃあ男はそっちに行った行った！よっしゃ！女

の節句を守るわよ！」

「ちょこざいな！このフリーザ様にたてついた事を後悔させてあげ

ますよ」

こうしてフリーザ様率いる男組みは雛壇の周辺に

園子率いる女組みは少しはなれたソファーの影に陣取って簡単なバ

リケードを組んだ

「よし・・・一気に御雛様を嫁がせて勝つわよ!」

蘭が御雛様を手に果敢にソファーを飛び出した・・・が

「お出ましですよ!それ!攻撃開始!」

「きゃあぁぁぁ!!!」

狙い済まされた五人囃子の一斉砲火が蘭に遅いかかかった

空手で鍛えていた蘭ではあったが人形も投げつけられるとなかなか

痛い・・・

敢えなく撃退されてしまった

「あっはっはっはっは!どうです?思い知りましたか?」

大笑いで敗走する蘭の背中を見つめるフリーザ様

しかしその時残念な情報が部下からもたらされた・・・

「フリーザ様!五人囃子を使っちゃったからこっちにはもう武器が

ほとんど残ってないぞ!」

確かに・・・男は防衛に徹していれば良いという利点があるが

如何せん武器が少ない・・・女は三人官女の他豊富な小道具を保有

している

しかし男は御内裏様を動かせないので五人囃子と左大臣・右大臣の

み・・・

そのうち5つを使ってしまったのだ

残り少ない武器で・・・それでも男達は勝利を目指すのであった・・

・

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード２２「灰原動物記２」

私の名前は灰原哀・・・駆け出しの生物学者だ・・・
私は今野生動物の生態を調査するために世界中を飛び回っている
今回やって来たのはオーストラリア・・・
独特の進化を遂げた動物達が面白い聖なる大陸だ

「この辺りにいるはずですよ・・・」

今回は地元で自然保護のボランティア活動をしている円谷君に同行して貰った
なんだかさっきから彼の熱い視線を感じるけど・・・
男は狼・・・気を付けないとね

「いるかしらね・・・あ！見つけたわ！」

私は木の上に目的の動物を見つけた
今回調査するのは「ミーハー・コゴロー」
一日の大半を鳥類「ヨーコ」を眺めて過ごすという霊長類の珍種だ
ちなみに「ヨーコ」は美しい羽をもつ鳥で「アイドル鳥」とも言われる

「いたわ・・・向こうの木にヨーコがたくさん」

「この辺りはヨーコの群生地帯ですからね」

「コゴローにとってはパラダイスね・・・テントを準備して！あのコゴローを観察するわ！」

それから私は何時間もコゴローを観察した・・・
でもかれは木の枝に腰掛けてまったく動こうとしない
ただし頭はヨーコが動くのにあわせてあっちを向いたりこっちを向いたり・・・
本当にヨーコを眺めるくらいしかしていない

「餌の時間はまだかしら・・・」

お姉ちゃん・・・長期戦になりそうです・・・
でもがんばります！
動物達が大好きだから・・・

86．セック・オブ・モモ（灼熱の雪洞）（後書き）

地獄の様なバイト祭に参戦してまいりました
本当に疲れました・・・
ってことでちょっと遅れちゃいましたけど雛ネタです
後編はもうだいたい出来上がってるのですぐに出せると思いますので心配御無用
パンクに約束します
春一番で吹き飛ばされちまえぇ！
でもおっとりは良く約束をやぶります・・・

87．セック・オブ・モモ（怒りの御雛様）

よくある怪談に雛人形の祟りと言うのがある
例えば何年も出すことなく押入れの奥にしまっていた人形
２０年ぶりに出してみよう・・・と思い飾った
その夜・・・
カタカタと音を立てながら・・・
ひとりでに動き出した御雛様が怒りの形相で目の前に
ぎゃあああああああ！！！
という具合である・・・
人形はもともと人間に及ぶ災いを変わりに受けて貰うために作られた
だから感謝して大切にしなくてはならない・・・

第８７話　セック・オブ・モモ～怒りの御雛様～

「ふむ・・・残りは左大臣と右大臣・・・元太さん！光彦さん！五人囃子を回収して来るんですよ！」

開戦直後一気に五人囃子を全て使いきってしまった男軍団
さすがにまずいと思いフリーザ様は元太に命令した・・・
しかしどうしたことだろうか？
もう一人の光彦が見当たらない・・・

「光彦なら右大臣を持って投降したぜ・・・」

コナンが女陣地を指差した・・・右大臣を抱えた光彦が鼻の下を伸ばしている

「女性に暴力なんて許せません！歩美ちゃんと灰原さんは僕が守ります！」

「あら・・・頼もしいわね」

思わぬ朗報にキャピキャピと喜ぶ女軍団の声が聞こえてくる
しかしフリーザ様はまだ冷静だった・・・裏切り者はどこの世界にもいる・・・
そんなことは宇宙の帝王なら常識だ

「・・・と言うことはこちらの戦力は４人と左大臣だけですか？元太さん！五人囃子と右大臣を回収するんですよ！」

「おう！まかせとけ！」

とりあえず今すべき事は分かっていた・・・
奴らはこちらに武器が一つしか無いと分かったら総攻撃を仕掛けてくる・・・
その前に武器を調達しなくては・・・

「ぎゃあああああ！！！」

しかしバリケードの外から聞こえて来たのは元太の悲鳴
何事かと思って覗きこむとそこにはボコボコにされた元太がいた
固くて重量感のある下の方の飾りの小道具をぶつけられたようだ・・・流血沙汰になっている
むごすぎる・・・あまりの凄惨な光景に思わず目を背ける男軍団であった

「なっはっは！どうだ！参ったか！」

「ま・・・参った！」

コナンが救助に飛び出したころには元太は反対側のバリケードの向こうだった

「元太さんが捕縛とは！とんだ事態になってしまいました・・・」

「おい・・・白旗上げた方が良いんじゃないか？」

深刻な戦況を前に暗い顔をするフリーザ様とコナン・・・
しかし一人明るい顔をしている人物がついに口を開いた

「大丈夫じゃ！左大臣を改良して新兵器を開発した！これで形勢逆転じゃ」

最後に残されたその武器を自信たっぷりに掲げる博士・・・
思わぬ朗報にフリーザ様のやる気と気合も戻ってきた

「よろしい！さっそく使うんですよ！」

攻撃指令は下された・・・
開戦から１３分後に突如女陣地に投げ込まれた左大臣から吹き出した煙幕は
女軍団の視界を完全に奪うことに成功した・・・

「げほっ！げほっ！汚いわよ博士！」

「よし！コナンさん！今のうちに五人囃子を回収するんですよ！」

隙を突いてコナンが5人囃子を回収した
そのため開戦から１６分後・・・戦況は完全な膠着状態に入った・・
・
膠着すること４時間２２分・・・
女軍団も何とか攻め入る隙を見つけようと何度となく男陣地に揺さ
ぶりをかけたが
今度は先ほどのように無駄な攻撃がなくうまく事態を打開すること
ができずにいた
一方男軍団では・・・
防衛に固執せず積極的雛人形奪取作戦を開始しようという意見が出
始めていた

「こちらから攻め込みましょう！」

「バーロォ！また五人囃子を無駄に使うつもりかよ！」

しかしフリーザ様は余裕の笑み・・・
膠着状態に入ってから博士に五人囃子を改良し超攻撃的兵器を開発
するＶ作戦を通達・・・
そろそろその新兵器が出来て良い頃だったのだ・・・

「のぅ・・・どうでも良いんじゃが・・・わしなんだか具合が・・・
」

「大丈夫かよ博士」

しかし肝心の博士は青い顔で体調不良を訴えている
ぐったりとしていて熱もあるようだ・・・風邪だろうか？
そんな事を考えながらふと足元を見たフリーザ様・・・そこには三

人官女が一体落ちていた

シュー・・・

何かが漏れ出る音がする・・・どうやらこの三人官女からのようだが

「この三人官女・・・いつの間に！」

「博士！しっかりしろ！博士！」

気付いた頃には遅かった・・・

「園子指令・・・新兵器の効果は上々・・・老兵一人を戦闘不能にしました」

そう・・・あの三人官女の正体は哀の開発した化学兵器
風の症状を引き起こす薬の気体化に成功・・・それを敵陣地でばら撒いたのだ
残念ながら気体化に伴い効果は弱くなったが抵抗力の弱い老人には抜群の効果を発揮する

「ご苦労ドクトレス！良い仕事してるわよ！」

その後・・・
女陣営は毒ガス人形及び嫁入り道具の量産に成功・・・
度重なる攻撃に男軍団は遂に追い詰められてしまった

「くそ・・・目がかすむ・・・」

サッカーで鍛えてきたコナンもついに限界が見えてきた

「しっかりするんですよコナンさん！」

フリーザ様がたくさん見える・・・

完全に目に来ているコナン・・・フリーザ様が必死で励ましなんとか持ちこたえている状態だ

「それ！敵はもうボロボロよ！一気に御雛様を嫁がせるのよ！」

しかし女軍団の総司令官鈴木園子がその隙を見逃すはずがなかった

「アイアイサー！」

園子の合図と同時に小さな影が飛び出した・・・歩美である

手に人形を抱えて雛壇の天辺を目指して突進してくる

「させん！」

「きゃあ！」

すかさずフリーザ様が歩美を捕まえた

弱い者いじめはナメック星で散々やって来たので大得意のフリーザ様すかさず歩美の手の中に目を移す

「ふっ・・・御雛様さえ奪えば・・・っ！」

雛人形を奪って逆転勝利を得ようとした時だった

奪い取ったそれは御雛様ではない・・・三人官女だった

「しまった・・・おとりか！」

ふと横を見ると哀が御雛様を持って雛壇の目の前まで迫っていた

「コナンさん！止めるんですよ！」

もう体調不良だのなんだの言っている場合ではない
この苦境を乗り切るためにコナンにがんばってもらうしかないのだ

「ここは通さねぇぜ！灰原！」

コナンもそのことは分かっていた・・・
頬を叩いて気合を入れるとぼやける焦点を必死で合わせ
哀めがけて五人囃子を蹴った

「甘いわね探偵さん・・・」

しかし五人囃子は少し離れた場所に落下して虚しい音を立てた
哀が消えた！
そう思った瞬間コナンの背中にズシリと重みがかかってきた

「俺を踏み台に！」

哀はコナンの背中を蹴って高くジャンプすると一気に雛壇の天辺まで昇り
そこにいた御内裏様の横に御雛様を据えた・・・

「ちょっとコナンさん！何やってんの！」

「やったー！私達の勝ち～！」

敗北感に打ちひしがれるフリーザ様と大喜びの女達
やはり3月3日は女の子が主役の日である
女達が改めて雛祭りを楽しもうとしたそのときだった
哀の化学兵器によって早期に戦線離脱していた博士が戻ってきた

「な・・・なぁ・・・今思い出したんじゃが・・・」

大分良くなったようだが顔はまだ青い・・・いやさっきよりもっと
青い
しかしそれもそのはずである

「何ですか?」

「これ・・・借り物の雛人形で明日返さんといけんのじゃ・・・」

・・・・・・
全員で辺りを見まわしてみた
髪がほころび衣装もボロボロ・・・所々欠損している無残な人形達・
・・

「どうしよう・・・」

本当にどうしようもなかった

続く

おまけ:ショート劇場

エピソード２３「灰原哀の実験室」

「ふっふっふ・・・」

解毒剤の研究は順調なのか？
それが知りたくて地下の研究室を覗いた俺は見てしまった・・・

「良い具合に色が変わってきたわね・・・」

灰原は何かをかき混ぜている・・・
良い具合に？ひょっとして順調なのか？

「そろそろね・・・これを付けて・・・」

俺は驚愕した・・・こともあろうに灰原はそれを口に運んだ
いくらなんでも自分で人体実験なんて危ない！

「やめろ！灰原！」

「く・・・工藤君！？」

・・・・・・何かが違っていた

「灰原・・・何だそれは？」

「・・・・・・おやつ」

ねっておいしいねるねる◯るね

87．セック・オブ・モモ（怒りの御雛様）（後書き）

雛シリーズ完！ってことで・・・
ねるねる・・・昔良く食べたなぁ
哀はせっかく子供になったんだからこういうの食べてみても良いと思います
彼女は見てると思い詰め過ぎですよね・・・
宮野志保の子供時代には食べられなかっただろうねるねる○るね・・・
哀もたまにそういうのも食べて子供ライフを楽しむぐらい気を抜いても・・・良いんじゃね？
そんな風に思う今日この頃です
哀こそもっとパンクになるべきですね
解毒剤？その辺の草でも煎じて飲め！！！
まぁあんまりパンクだとコナンが困りますけどね・・・

88．4月バガボンド

4月1日・・・
いつの頃からかその日はこう呼ばれるようになった
「エイプリル・フール」
町は虚言で埋め尽くされ
人々は疑心暗鬼の海でもがきながら
さながらデスノートばりの心理戦を繰り広げるのである
合い言葉はただ一つ

騙された奴が悪いんだ・・・

第88話　4月バガボンド

随分と暖かくなってきたある春の日・・・
フリーザ様はリビングでテレビを見ながらくつろいでいた
自分が来てから最初の春だと言うのに学年が変わる様子の無い部下達に不信感と憤りを抱きつつ
フリーザ様はお気に入りのコーヒーを口に運んだ・・・

「そうそう・・・今朝コーヒー豆の袋の中でゴキブリの死骸を見つけたわよ」

後から部下の嫌な言葉が飛んできた・・・
フリーザ様は口にしていたコーヒーを吹き出すと哀をにらみつけた

「それを早く言うんですよ！飲んじゃったじゃないですか！」

しかし哀はクスクスと笑っている
フリーザ様がこめかみをひくつかせているのを見て哀は口を開いた

「うそ・・・」

そう・・・嘘である
フリーザ様はしばらく呆然としていたが騙されたことに気付きさらに怒りのボルテージを上げた

「良い度胸ですね・・・このフリーザ様をコケにしたらどうなるか教えて上げますよ！」

怒りの感情にまかせてフリーザ様は哀に飛びかかった
しかし哀は「待った」と言って掌をフリーザ様の目の前につきだした

「今日は4月1日・・・エイプリル・フールよ」

「えいぷりるふーる？何ですかそれは？」

「今日一日はうそをついても良い日なのよ・・・」

「ほぅ・・・それはそれは・・・」

多分地球人達は普段大っぴらにつけない嘘をこの日につきまくり日頃のストレスを発散して楽しいハッピーライフを送る魂胆なのだろう・・・
そうやってフリーザ様が勝手な予想をしているうちに哀は研究室に向って歩きだした

「そういう訳だから・・・許してね」

手をヒラヒラさせながら謝ると哀は地下室へと消えて行った
そう言うことならしかたないか・・・そう思いなおすとコーヒーを淹れ直してソファーにどっかり腰掛けた
しかし自分が騙されたのには変わり無い・・・腹立たしいものは腹立たしいのだ

「ふむ・・・こうなったら私も一つエイプリル・フールとやらに便乗してみますか」

フリーザ様はどうやって哀を騙してやろうか考え始めた

しばらくして・・・
研究が思うようにいかないので哀は気分転換でもしようとリビングにやって来た
そしてソファーに腰掛けるとそれを見つけた

『おいしいケーキです』

ショートケーキの皿の横にはそう書かれた紙が一枚おいてある・・・
なるほどね・・・と辺りを見回して見るとドアの隙間からこちらを覗いているフリーザ様を見つけた

「あぁ～おいしい！おいしい！ショートケーキはおいしいわ！
ん？いたたた！お腹が痛くなってきたわ！助けて～！」

哀は大声で叫んでみた・・・するとドアが開け放たれフリーザ様が現れた

「は～はっはっは！ひっかかりましたねハイバラさん！下剤入りケーキの味はいかが？
でも残念！エイプリル・フールだからお咎めは無しなのですよ」

しかし嬉しそうに騒ぐフリーザ様の目の前に哀は何かを差し出した
そこには皿にのった無傷のショートケーキがあった

「うそ・・・」

それだけつぶやくと哀はまたクスクスと笑った・・・全て演技だったのだ

「おのれぇ～！！！」

「ふふっ・・・エイプリル・フールだからお咎めは無しなのですよ」

フリーザ様のモノマネをしながら哀はまた地下室に消えて行った

フリーザ様は考えた
どうやらエイプリル・フールはストレス発散の日ではなく
アグレッシブに嘘のつき合いをするバトルの一日らしい・・・
となると百戦錬磨の悪女を出し抜くには相当な嘘をつかなければいけないだろう
フリーザ様は普段使わない頭を必死に回転させた

「そうだ！ひらめいた！」

フリーザ様は怪しい笑みを浮かべるとどこかへ出かけて行った

数十分後・・・そこにはフリーザ様とメガネの小僧がいた
自分では思いつかないので思いつきそうな人間に任せることにしたのである

「さぁ！コナンさん！さっさとハイバラさんを騙して来るんですよ！」

「ったく・・・そんな事のために呼びやがって」

そうは言いつつもやや楽しそうにコナンは地下室に降りて行った

「灰原・・・いるか？入るぞ？」

中からは「どーぞ」と気の無い返事が返って来る
ドアを開けると哀が試験管と格闘しているところだった
背中越しに「何の用？」などと言ってくる・・・相変わらず愛想のない対応だ

「実はこの間巻き込まれた事件がな・・・偶然奴らと関わってな・・・」

「奴らって・・・まさか！？」

「あぁ・・・黒の組織の奴らさ・・・それで・・・見つけたんだ」

コナンはそう言うと封筒を取り出した

「お姉さんからお前への・・・最後の手紙だ・・・」

哀はコナンから封筒を受け取ると中から手紙を取り出して広げて見た

『うそだよー』

一言だけ書かれていた
ちらりとコナンを見やるといつものしたり顔である
コナンはニヤニヤしながら哀がどんな反応を示すか待っていた
しかし哀は怒るでも悔しがるでもなくその場にしゃがんでしまった・・・泣いているようだ

「いくらエイプリル・フールだからって・・・お姉ちゃんをダシに使うなんて」

「は・・・灰原?」

「ひどいわ!最低よ!」

そう言ってまたワンワンと泣き始めてしまった・・・
予想外の事態に困惑してどうして良いか分からずにただ哀に謝り続けた
しかし哀は一向に泣き止む様子がない

「お姉ちゃんを見殺しにしたあなたなんかに・・・私の気持ちは分からないわ」

その言葉に困り果てていたコナンは遂に切れた

「なんだよ!元はと言えばお前の薬のせいで俺がこんなことになったからだろうが!」

怒りのままに怒鳴ってしまった・・・ハッとして哀を見るとキッとこちらを睨んでいる

「そうね・・・私が悪いのよね・・・はいこれ」

哀はカプセル剤をコナンに差し出した

「解毒剤・・・本当はとっくに完成していたの・・・でもあなたを元に戻したくなくて・・・」

「灰原・・・？」

「これでもう私は用無しね・・・気が済んだらとっとと出てってよ！」

そう言って哀はコナンを研究室から叩き出した

解毒剤を手にただ呆然と地下室のドアを見つめるコナンの後からフリーザ様がやって来た

「あ～あ・・・怒らせちゃってどうするんですか？」

「元はと言えばフリーザ様のせいだろ！ったく・・・灰原の奴・・・何なんだよ」

コナンは手の中にある解毒剤を見つめた

「とりあえず・・・解毒剤は貰っとくか・・・」

「うわ！デリカシーの欠片も無い！」

「おめぇに言われたくねぇよ！」

それだけ言うとコナンは工藤邸に向った・・・解毒剤を飲むために・・・

大きくなったときのために服を用意すると深呼吸をして掌を見つめた

「灰原・・・後でお礼と・・・あと謝っておかなきゃな」

そしてコナンはカプセルを飲み込んだ・・・

「ぎゃあああああああああああああ！！！」

工藤邸から聞こえてきた凄まじい叫び声・・・

哀はそれをニヤニヤしながら窓辺で聞いていた

「ふふん・・・効いているようね・・・飲んだが最後無駄に全身が痛くなる薬」

「ひどい事しますね・・・」

「エイプリル・フールだからお咎めは無しなのですよ・・・それより私を騙すんじゃないの？」

哀が聞くとフリーザ様は面倒くさそうに外を見た

どうやらもう嘘をつくのも飽きてしまったようだ・・・

「痛ってぇえええええええ！！！たすけ・・・ぎゃあああああ！！！」

隣からは以前コナンの凄まじい絶叫が聞こえてくる・・・

「素敵なＢＧＭを用意してくれた褒美として許してあげましょう・・・」

「あらそう・・・」

フリーザ様はお気に入りのコーヒーを口にしながらコナンの絶叫をいつまでも聞いていた

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード２４「蘭姉ちゃんの人生相談室リターンズ」

「失礼します！毛利さん！ご相談があって来ました」

「あら・・・珍しい・・・」

今日の相談者は京極さんです
園子の彼氏です

「それで？悩みってなんですか？」

「はい・・・実は園子さんのことなんですが・・・」

「そうだと思ったわ」

「自分はまだまだ未熟・・・世界を回り修行を積まねばならない身ですが園子さんの事が気になって空手に集中できないことがあるのです」

「はぁ・・・そうですか」

「心配で心配で・・・しかし未熟な私が園子さんのお側になど・・・教えて下さい！男として一体どうすれば良いんでしょうか？」

なるほど・・・これは親友の園子にも関わる大事な相談・・・きっちり答えて上げないと・・・

「ダイジョーブ！京極さんが心配しなくても・・・園子ならお前がいない間他の男とヨロシクしてらぁ！」

「そ・・・そんな・・・」

「ま・・・それが嫌ならさっさと一人前になることね・・・でないと園子は他の男とハッスル！ハッスル！ってことに・・・」

「うおおおお！！！毛利さん！私は一刻も早く修行を終わらせられるようがんばります！その間園子さんをよろしくお願いします！」

「うん！任せて！がんばって下さいね！」

こうして今日も迷える子羊が救われたありがとう！蘭姉ちゃん！

88．4月バガボンド（後書き）

大変長らくお待たせしました
おっとりです・・・
今まで何してたか？
・・・いろいろ！
ってことで８８話です
８は縁起が良いので嬉しい限りです
この調子で私もハッスル！ハッスル！したいですね
劇場版も公開されることですし
２１日ですか？それまでパンクに加速して行きたいと思います
天は人の上にいくらでも人を作りやがったんだぁ！
紺碧の棺・・・
やりすぎて棺に入るような事だけは避けたいですね

89．歩美ハザード

クラスで一番・・・
皆の憧れを一身に受ける小さなスターだ
なにせクラスで一人しか成る事ができない・・・
凡人と同じでは話にならないのだ
しかし一人しか成れないと言うことは
当然脱落者が出てくるわけで・・・

第８９話　歩美ハザード

それは昼休みに・・・ある女子児童の一言から始まった悲劇だった

「ねぇねぇ・・・」

「どうしたんですか？」

光彦は一人の女の子に呼び止められた
女の子はまるでコナンのようにあごに手を添えながら悩んでいるような顔であった
そしてしばらく「う～ん・・・」と唸ると切り出した

「歩美ちゃんと灰原さん・・・どっちが１年Ｂ組で一番の女子だと思う」

「え？う～ん・・・」

少し前の休み時間・・・
哀と歩美を除く1年B組の女子はミステリアスなクラスメイト「灰原哀」について話をしていた
しかし・・・話の内容は次第に違ったものへと変化して行き
終いには以上のような「誰が一番か?」などという内容へと変わり果ててしまった
その問いに1年B組は大混乱・・・
昼休みどころの騒ぎではない

「投票しよう」

結局その結論に至った
後にこの投票が悲劇の引き金となるとも知らずに・・・

・・・その日の放課後
当事者には内緒でその投票は行われた
藁半紙を細かく切り分けた紙切れに哀か歩美の名前を書く・・・
シンプルなものだった
クラス委員がそれを回収して開票・・・
黒板に「正」の字をどんどん書いていく
そして最後の一本を書き終えるとクラス委員はチョークを置いた

「6票差で灰原さんか・・・」

思いがけない大差・・・しかし疑問は解決した
帰ろう・・・そう思って光彦が振り返った時だった

「あ・・・歩美ちゃん!」

そこにはリストラされたサラリーマンの様な顔をした歩美が佇んで

いた
どうやら途中から見ていたようだ

「あの・・・これはですね・・・」

「ちくしょー！」

「あ！歩美ちゃん！待って！」

何とかその場を取り繕おうとした光彦の努力も虚しく
歩美は放課後の学校を飛び出して行った

・・・・・・

「あいつらぁ～・・・！！！日頃散々私の可愛さに癒されておきながら
一番が灰原さんて・・・どういうことだ！！！」

学校から少し離れた公園のブランコで歩美はブツクサ言っていた
八つ当たりするようにブランコを乱暴にこぐと怒りの全てを開放するように靴を飛ばした
靴は綺麗な放物線を描いて一人の少女の足元に落下した

「吉田さんじゃない・・・どうしたのこんな所で・・・？」

それは哀だった・・・靴を持って優しい顔で近付いてくる
鬱陶しい！こうやって私の知らない間に皆を騙していたのね！

「プッ！！！」

ピチャ・・・

歩美は憎悪と敵対心をこめて哀の顔に思いっきり唾を吐いた
ドロッと唾液が哀の頬を伝う・・・

「うわ！汚！ちょっと・・・何なのよ？」

唖然とする哀を残して歩美は街へと消えて行った

イライラが収まらない・・・
歩美は目に付く物を蹴飛ばしながら道を歩いた
全ての物が哀に見える・・・気に食わない！

「ちっ・・・フリーザ様の下僕のくせして・・・」

ポアロの看板を見ながら毒を吐いたその時だった
背後から人影が近付いてきた

「私がどうかしたんですか？」

フリーザ様だった・・・
とりあえずポアロに入ると歩美は今日あった事を事細かに・・・
所々寸劇などを交えつつフリーザ様に説明した

「何！？このフリーザ様を差し置いてハイバラさんがＮｏ．１！？」

「そうなのよ！哀ちゃんちょっと最近勘違いしてると思うの！
ねぇフリーザ様・・・こういう場合フリーザ様はどうすべきだと思

う？」

怒りに震えるフリーザ様に歩美が聞いた・・・
するとフリーザ様は邪悪な笑みを浮かべながら口を開いた

「そりゃあ出る杭は打つ・・・ですよ
私もたくさんの下等生物どもを花火のように消し去ってやったものです・・・」

そう言うとフリーザ様は惑星ベジータをはじめとする数々の綺麗な花火に思いを馳せた
その横で歩美はしばらく考え込むと何かを閃いたのかパッと顔を上げた

「花火か・・・分かった！歩美も消し去る！」

「ほぅ！このフリーザ様のために反抗勢力を？素晴しい働きですよ歩美さん
地球に来てからこれだけの有能な部下はあなたが始めてですよ」

「見てて！１年Ｂ組のボンクラどもを蹴散らしちゃうんだから！」

そう言うと歩美はポアロを出て行った

「ほっほっほ・・・楽しみです」

・・・数日後
帝丹小学校１年Ｂ組は算数の時間だった・・・
子供達は皆足し算の書かれたプリントと格闘している

「は～い！皆さ～ん！終わった人は手を上げて下さいね！」

小林が教室を歩き回りながら言った
だが光彦は別の事を考えていた

「歩美ちゃん今日も休みですね・・・」

そう言って誰も座っていない机を見る
やはりあんな投票はデリカシーが無かった・・・
そう思った瞬間チャイムが鳴った

キーンコーンカーンコーン・・・

「はいここまで！次は給食ですよ！」

「やったぜ！」

ガラ！

元太が喜びを体全体で表現したのを合図に教室のドアが開く
そこには火のついた導火線をぶら下げた筒を持つ歩美が立っていた

「給食は無し！このロケット花火を食らえ！！！」

歩美が叫んだ瞬間筒から無数のロケット花火が飛び出してきて
ピューピュー！と甲高い音を立てて教室を荒々しく飛び回った

「うわあああああああああ！！！」

大パニックの教室・・・
泣きながら逃げ回る子供達にとどめを刺すように
ロケット花火は残忍に炸裂を始めた
パン！パン！バパン！
凄まじい轟音と煙・・・
悲鳴と泣き声の交響曲を聞きながら歩美は満足そうに笑った

「見たか！私の怒りを！」

プスッ！

しかしその言葉を最後に歩美は倒れた・・・
少し離れた所でコナンは構えていた麻酔銃を下ろした

・・・歩美の意識が戻ると小林はこの凶行の理由を問いただした
最初は黙っていた歩美だったがしばらくすると泣きながら口を開いた

「だって・・・私悔しくて・・・」

その言葉の一つ一つを黙って聞くと
小林は優しい顔をして穏やかに言った

「ねぇ吉田さん？このクラスのＮｏ．１は吉田さんじゃないわ」

その言葉に歩美はハッと顔を上げた

「じゃあ灰原さん？」

小林はゆっくりと首を横に振った

不思議そうにしている歩美を見てコナンが続けた

「歩美・・・このクラスにＮｏ．１なんていないんだ・・・
確かに勉強が出来る奴・・・スポーツが出来る奴・・・カッコイイ奴・・・
まぁほとんど俺だけどな・・・そう言うのがいるかもしれない・・・
でも誰にでも他人にも真似出来ない一面が一つはあるんだ」

「歩美にも？」

「あぁ！みんながみんな自分にしかない一番を持っているんだ！
Ｎｏ．１なんていない・・・一人一人が大切なオンリー１なんだ！
そういうことでしょ？小林先生？」

「ちげーよ！」

でしゃばって来るなガキが！
そう言いたそうな顔でコナンを睨みつけると
小林はヤレヤレと言った感じに話を進めた

「このクラスのＮｏ．１は担任であるこの私・・・
生徒風情が偉そうにＮｏ．１争いしてんじゃないわよ！」

こんな所にも暴君はいたものだ・・・
それはそれはジャイアニズムにも似た何かだった
それをひしひしと感じている１年Ｂ組の元にあのお方が現れた

「おやおや・・・すごい荒れ様ですね・・・さすが歩美さんです！」

フリーザ様は花火で所々焦げた教室を見回して言った

「やっぱりあなたの差し金だったのね・・・」

そんなフリーザ様を哀は凄まじい形相でにらみつけたが
フリーザ様はそんなことはお構いなしの様子で続けた

「さてと・・・これで私がＮｏ．１ですね」

「ちょっと！Ｎｏ．１は私よ！」

いきなり入って来てなんだ！
小林はフリーザ様を威嚇するように睨みつけながらにじり寄った
いきなりのレジスタンスの出現にフリーザ様も不快感を露にする

「なんですかあなたは？教師風情が偉そうに・・・死にたいようですね」

「保護者は教師に全て任せてりゃ良いのよ！」

臨戦態勢の２人をコナンが止めに入る
しかし自分達の世界に入ってしまった２人にコナンの言葉が届くことは無かった・・・

「いや・・・違・・・オンリー１・・・」

Ｎｏ．１よりオンリー１・・・
しかしそうも言っていられない世の中であった。

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード２５「世紀末名探偵伝説」

１９９Ｘ年・・・
世界は核の炎に包まれ・・・そして無法の荒野と化した
おれは平成のホームズとまで言われた高校生探偵工藤新一
しかし今はただの弱者だ・・・
俺は核戦争後一緒になった蘭に守ってもらいながら
日々野盗に怯える生活を送っている
人々は堂々と人を殺す・・・トリックも何もない・・・探偵の出る幕も・・・
そんなある日だった・・・
一人の野盗が俺の所にやって来た

「名探偵の工藤新一！頼む！助けてくれ！」

相手は野盗・・・
しかし名探偵と呼ばれたのは何年ぶりだろう？
なんだか大切な何かを取り戻した気がする

「俺の仲間が全員奇妙な殺され方をしてるんだ！助けてくれ！」

奇妙な殺され方・・・トリック！

「わかった・・・その謎はかならず俺が解いて見せる！」

こうして俺は荒野に旅立った

To be continue....

89．歩美ハザード（後書き）

以前何の意味も無くした次回予告
そのうちの一つを書いてみました
あと二つ・・・
難しいのが二つ＾＾；
まぁそのうちパンクに書きます
躊躇わずにミサイル発射スイッチをドーン！
それくらい馬鹿になりたい今日この頃・・・

ＰＳ・・・作者ページに執筆状況を書くことにしました

90．キング・オブ・ザ・刑事　（きまぐれ）

大切なものはありますか？
それはどれ位大事ですか？
いくらなら売ってくれますか？
それともそれは命より大事ですか？
でもそれは今奪い取られてしまいそうですよ？
今なら間に合うかも知れませんよ？
さて・・・
どうしますか？

第９０話　キング・オブ・ザ・刑事　（きまぐれ）

その日高木は非番だった
彼はすっかり暖かくなってきた街の中をやや嬉しそうに歩いていた
それもそのはず・・・
今日は同じく非番の美和子とデートをするのだ
刑事という職業柄なかなかデートなどできない二人
しかしそんな境遇がデートの時のウキウキ気分を一層盛り上げてくれるというものだ
高木がそんな事を考えているうちに彼は待ち合わせ場所に到着した

「さてと・・・少し早く着いちゃったかな？」

高木は待ち合わせ場所であるオープンカフェの椅子に腰掛けて辺りを見回した
美和子の姿はまだない・・・

「こうして待ってるのも楽しいんだよなぁ・・・・・・っ！」

姿の見えない美和子に思いを馳せながら空を見上げた時それは起きた
突如背後から伸びてきた手に高木は口を塞がれてしまったのだ
手にはハンカチのような物が握られている

「ぐ・・・ふ・・・！何を・・・！」

薬品の匂い・・・クロロホルムである
抵抗しようとした高木だったが時既に遅く・・・
数人の黒服によって高木は放り込まれるように車に乗せられ連れ去られてしまった

・・・それからしばらくして
高木は妙に広い・・・アリーナか何かのような場所で目を覚ました
少し痛む頭を押さえながら回りを見ると自分以外にもたくさんの男がいる
皆拉致されて来たのだろうか？

「高木君じゃないか・・・！君も拉致されたのか？」

聞き覚えのある声・・・振り返るとそこには白鳥がいた
そう言えば今日は白鳥も非番だと言っていた気がする

「ってことは白鳥さんもですか？」

「そうなんだよ・・・街を歩いていたら突然ね・・・」

2人は考え込んでしまった
いったいここは何処で・・・誰が・・・何の目的で・・・
2人以外の男達もそれを考えているらしく重苦しい空気が部屋の中を漂った
しかしそんな静寂も一人の男によって破られる事となった

「皆さ～ん!ご静粛に!」

アリーナ中に響き渡る声・・・
高木は・・・そして白鳥もこの声には聞き覚えがあった

「彼の仕業か・・・」

頭を抱えながら声のする方をみると・・・やっぱり
そこにはフリーザ様の姿があった

「今日はお忙しい中ようこそ・・・
いえ・・・あなた達のことです・・・どうせ暇だったんでしょう?」

「か・・・彼にだけは言われたくない・・・」

白鳥が唖然としながらツッコミを入れたが
フリーザ様は聞こえなかったのかそれとも無視したのか・・・
そのまま話を続けた

「今日集まった皆さん・・・実はある共通点があるんですがお分かりですか?」

唐突な質問・・・
高木と白鳥は目を見合わせ・・・そして首を傾げた

「僕と高木君に共通点ねぇ・・・」

「仕事が同じってことぐらいしか・・・」

にらめっこをするように共通点を探して見るが良く分からない

「ちなみにおたくらの仕事ってのは？」

そんな2人の間に坊主頭で無愛想な男が口を挟んできた

確かに今のところ共通点は仕事位しか見つかっていないのだからそこは気になる所だ

「刑事です・・・」

坊主頭の男の睨み付けるような視線にたじろぎつつ高木が答えると

男は眉をピクリと動かして口を開いた

「あん？おれも刑事だぜ・・・」

「その通りですよ！あなた達は皆さん刑事さんなのですよ！」

坊主頭の男・・・横溝重悟の言葉を聞くとフリーザ様は再び口を開いた

それにしても刑事を集めて何事かとアリーナはやや混乱気味だったがフリーザ様は気にする事も無く進めた

「じゃ・・・ハイバラさん説明の方を」

「はいはい・・・」

フリーザ様が呼ぶと哀はあくびをしながらかったるそうに出てきた
そしてポケットからメモのような物を取り出すと広げて読み始めた

「あなた達にはこの会場内に隠されているドラゴンボール（おもちゃ）を探してもらうわ
ドラゴンボールは一星球から七星球の計7つ・・・全てを集められたら優勝よ
だから誰かが見つけてしまった龍球はその人から奪い取らないといけないわ
奪い取る手段は基本的には自由よ・・・ただし法律の範囲内で・・・
分かった？」

分かるわけがない・・・
なんで刑事がドラゴンボールの奪い合いをしなくてはいけないのか？
総理に詰め寄る野党議員の如く・・・
納得いく説明をお聞きしたい！というのが皆の思う所であった
そんな空気を察したのか・・・
フリーザ様は「わかったわかった・・・」と手の平をヒラヒラさせると
誰かに合図をするかのように指を鳴らした

「ちなみに優勝した人には豪華賞品を用意してありますよ」

フリーザ様がそう言うとアリーナのスポットライトが一点に集中した

「ちょっと～！どうなってんの！？出しなさいよ！」

そこにはガラスのケースに閉じ込められ
まるで展示された標本のようにアリーナの天井から吊るされた美和

子の姿があった

「どうです?独身の皆さんにとっては喉から手が出るほど欲しいでしょう!?」

「・・・だから独身の男性刑事ばかり拉致して来たのね」

ガラス箱の中で小虫のようにもがいている女性
見ると非常に美人だ・・・
ブーブー言っていた刑事達も次第に乗り気になってきたようだった
もともと集められたのは非番で暇そうな刑事達・・・
その上こんな上玉を見せつけられては男の本性を出すなと言うほうが無理な話である
そんな様子を目の当たりにし高木は焦った

「た・・・大変だ!どうしましょう白鳥さん・・・?」

とにかく職場もいっしょである白鳥に聞いてみたが・・・

「うふふふ・・・美和子さんは僕のものだぁ・・・」

キモッ!
涎をダラダラ垂らしながら美和子を見つめる白鳥に
高木はもはや嫌悪感しか感じなかった

「さあ~!皆さん!力の限り戦って『最強の刑事』の称号を得るのですよ~!」

要はフリーザ様による壮大で迷惑な暇つぶしイベントなのであった
そしてその暇つぶしは様々な思惑を絡め取りながら

今幕を開けたのである・・・

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード２６「推理オタクじゃない」

「でな！その時ホームズは・・・」

「ねぇ新一！そんなことより今度の日曜なんだけど」

「って言うわけよ・・・それでな・・・」

「そうじゃなくて・・・今度の日曜トロピカルランドに・・・」

「それでな・・・それでな・・・」

「ちょっと新一・・・聞いてるの？」

「はぁはぁ・・・ホームズたん萌え～・・・」

バシッ！

「何よ！この大バカ秋葉ノ介！」

「何だよ！そんなに怒らなくても良いだろ毛利氏～」

キモッ！

終劇！！！

９０．キング・オブ・ザ・刑事　（きまぐれ）（後書き）

すみません
大変長らくお待たせしました
ってなわけでいよいよ９０話代に突入
キング・オブ・ザ・刑事シリーズです
今回は少し長めに５話ぐらいで行こうかな・・・と
まぁ長くなったり短くなったりしますけど
あと少し更新間隔を短く出来るようにがんばりたいですね＾＾；
ってことでみなさん
おらにパンクパワーを分けてくれ！
パンク玉は世界を救う！・・・その後滅ぼす！
でも最近ダラダラ更新の私のために
いったいどれだけの人が手を空に向けて上げてくれるでしょう・・・
＾＾；
助けてミスターサタン！
この際サタン鬼塚でも・・・

91．キング・オブ・ザ・刑事　（無法地帯）

前回までのあらすじ

拉致されて　ボール集めを　やらされる

高木・・・心の俳句？

第９１話　キング・オブ・ザ・刑事　（無法地帯）

「ヒャッハ～！とんだタナボタ話だぜ！」

「いつも通り平凡に終わると思ってた非番の日にまさかあんな上玉に会えるなんてな！」

さっきまで不満タラタラだった刑事達が涎を垂らしながら美和子を見上げた

普段でさえ男達の理性を楽々崩す破壊力を持つ美和子が

今日は高木とデートの予定だったためにめかし込んでいる・・・

その威力は凄まじいものがあり

刑事達を野盗化させ・・・アリーナを世紀末の荒野と化すのになんの不自由もしなかった

「何よ・・・そんな目で私を見ないでよ・・・」

血走った男達の視線に晒されさすがに怯えを隠せない美和子

そんな彼女を高木は心配そうに見上げた・・・

「佐藤さん・・・」

ここに居る男達は美和子を見て完全にイカレてしまった・・・
こんな奴らに彼女を渡したら・・・
高木は頭の中で描いた最悪のシナリオをかき消すように頭を振った
何としても自分が優勝せねば・・・
しかしこれだけの刑事達を相手に自分一人で果たしてどれだけの勝ち目があるだろうか？
しばらく悩んだ末高木は横に立っている上司に相談を持ちかけた

「白鳥さん・・・僕達がいがみ合っていては佐藤さんはこの野盗どもの誰かに奪われてしまいます
ここは協力し合ってドラゴンボールを集めませんか？まぁ最後は僕らの戦いになるでしょうけど・・・」

そう・・・白鳥の佐藤に対する思いを高木は知っている・・・
しかしこの状況を打開するには少しでも多くの協力者が居た方が良い・・・
例えそれが恋敵であろうとも・・・
苦渋の決断だった・・・

「い・・・いけません美和子さん・・・協力作業だなんて・・・ああ！！！」

「もう・・・ダメだ・・・この人本当にダメだ・・・」

こいつに頼んだ自分が馬鹿だった・・・大馬鹿野郎だった！
高木は深く反省すると共に再び頭を抱えてしまった
・・・・・どうしよう？

「おい・・・」

不意に声をかけられてビクつきながら振り返るとそこには重悟がいた
重悟は高木の胸倉を掴むとその眼を見据えながら小声で話し始めた

「お前・・・あの女の男なのか？」

「へ？」

「どうなんだよ！？」

「うわっ・・・は・・・はいそうです！」

高木の言葉を聞くと重悟は手の力を緩めて高木を開放した
そして今度は高木の背後に回りそっと耳打ちするように言った

「俺は女に興味はない・・・いや無い事も無いが・・・とにかくこんな手段で手に入れようとは思わん」

「は・・・はぁ」

「協力してやるよ・・・大切な女なんだろ？」

高木は驚いて振り返った
重悟は依然ぶすっとした表情をしている・・・

「頼りにして・・・良いんですか？」

「あぁ・・・まぁ初対面で怪しくはあるだろうが・・・少なくとも

そいつよりはマシなはずだ」

そう言うと重悟は親指を突き立てて高木の横を指した

「ぐへへへへへ・・・美和子たん・・・もぽえぇ～」

奇声を上げながら涎を垂らす白鳥がそこにいた

もう職場でこの人の指示は聞けないなぁ・・・

高木はそう思うと振り返って真っ直ぐに重悟を見た

「よろしくお願いします・・・でも頼り過ぎないように注意します」

「ふん・・・それでこそ協力しがいがあるってもんだ」

そんな2人の同盟結成を知ってか知らずか・・・

フリーザ様は時計をチラリと見ると再び刑事達に向けて言い放った

「さぁ～！お待たせしました皆さん！いよいよ開始まであと30秒を切りましたよ～！」

その言葉を聞き流しながら哀はアリーナの時計に合わせた自分の時計を見た

そして秒針が動くごとにカウントを進めて行った

「良いですか皆さん！ドラゴンボールはこのアリーナと隣接するビルのどこかにあります

この佐藤美和子さんが欲しい者は地べたを這って床を舐め回してでも探し出すことです！

それでは健闘を祈ります・・・」

「3・・・2・・・1・・・開始よ」

マイクに向ってボソッと放たれた哀の言葉を聞くと男達は我先にと散って行った
天井に吊るされている美和子の位置からはそれがまるでゾンビ映画のワンシーンのように見えた
しかし美和子は女に飢えた亡者達の中に一人だけ生ける者の輝きを見た

「高木くん・・・」

その視線を高木は下でしっかり受け止めていた

「佐藤さん・・・絶対に誰にもあなたを渡しません！」

届かないであろう言葉を言い終えると高木は亡者達の波の中へ消えていった

「そう言えば名前を聞いて無かったな・・・」

重悟が思い出したように聞いた

「高木・・・高木渉です・・・」

「俺は横溝重悟だ・・・高木・・・俺はこのアリーナに隣接したビルを調べて来る・・・
お前はまずアリーナ内を念入りに探せ・・・」

高木は声を発せずにただ力強く頷いた

それを見ると重悟はわずかに笑みを浮かべ
「３０分後にアリーナの出口で落ち合おう」とだけ言ってアリーナを後にした

それから・・・
高木はアリーナ内を・・・それこそフリーザ様の言う通りに舐めるように探した
しかし目的のドラゴンボールは一向に見つからない

「くそ・・・何処にあるんだ?」

高木は焦りの色を露にした・・・
周りを見回すと自分と同じ目的の男達がそこかしこをうろついている
早くしなくては・・・
そう思って良く探そうと屈み込んだ時だった

「あぁ!」

一人の刑事が大声を上げた・・・
驚いて声のした方を見ると複数の刑事が声を上げた刑事に群がっている
声を上げた刑事は必死に「何でもない」と言ってはいるが明らかに何か隠している
どうやら先を越されたらしい・・・

「くそ!」

数人の刑事達で既に取り合いが始まっている
高木も遅れまいと駆け出した・・・しかしそこまでは高木の位置から大分距離がある

高木が到着した時にはドラゴンボールは一人の男の手の中に落ち着いていた

「こいつは俺の物だ・・・ひひひ」

ニタニタ笑うその刑事の足元では先ほどまで奪い合いをしていた刑事達が倒れている
良く見ると拳に何かつけている・・・メリケンサックか・・・

「それを渡せ！」

高木は意を決してその刑事に近付いた

「ん？何だてめぇは！？」

「それを渡せと言ってるんだ！そして佐藤さんは諦めろ！」

「なんだと？てめぇこのメリケンが見えねぇのか？
それにあんな上玉をみすみす諦められるかよ！あの女はこの※☆（大人の事情）県警の矢吹晴雄（やぶきはるお）様がいただく！」

そう言うと矢吹は有無を言わさず殴りかかってきた
間一髪かわした高木だったが高木の居た場所にあった椅子はグニャリと無残な姿になってしまった

「元プロボクサーで東洋ランカーだった俺の拳をいつまでかわせるかな？」

そう言って矢吹はジリジリとフットワークで高木を追い詰めながら間合いを詰めてきた

「ま・・・待て！」

しかし高木が何を言おうが矢吹は二つの拳をこれでもかと突き出してくる
その激しい攻撃に高木は全く反撃出来ずにいた・・・

「がんばって下さいよ高木さん！」

「反撃しなさいよ・・・」

突然の応援を受けてビックリしながら声のした方をみるとそこにはフリーザ様と哀がいた
その瞬間高木はある事を閃いた

「あの人反則ですよ！さっき言ってましたよね？法律の範囲内でって・・・ほら暴力は犯罪ですよ！」

「あぁ・・・そんなこと言いましたっけ・・・」

「えぇ・・・言ったわよ確かに」

高木の直訴を受けたフリーザ様は哀に確認を取ると考え込んだ
そして数秒後面倒くさそうに頭をかきながら口を開いた

「つまらないので暴力有りでお願いします」

「殺さない程度ならＯＫよ」

そんな・・・

直訴を却下されて落胆していた高木だったが背後に気配を感じて思わず飛びのいた

ゴン！

鈍い音が響いた・・・コンクリートの壁にヒビが入る・・・

「そういうことだ！諦めな！」

矢吹が詰め寄ってくる・・・いつの間にこんな所に追い詰められたのだろう・・・もう後がない

絶望の中で高木は天井に吊るされている美和子を見た・・・心配そうにこっちを見ている

「これで終わりだ！死ねぇぇ！！！」

「・・・・・殺さない程度って言ってるじゃない」

哀のツッコミも虚しく矢吹が全力の右ストレートを繰り出そうとした時だった

「うおぉぉ！！！」

雄叫びを上げながら高木は宙を舞った・・・きっとジャンプで避けようとしたのだろう

人間追い詰められると普段はしないような馬鹿な行動を取ってしまうものだ・・・

フリーザ様は思わず目を覆った

「あ・・・」

しかし倒れたのは矢吹の方だった
高木は何かにぶつかった感覚の残る膝に手を当てた
どうやらジャンプしようとしたのが良かったらしく見事飛び膝蹴りの形となったらしい

「やるじゃない・・・」

「よ！レミーボンヤスキー！素晴しい戦闘能力ですよ高木さん！」

人事だと思って茶化す哀とフリーザ様・・・
だが高木としては死ぬ一歩手前だったのだ

「ひどいじゃないですか！暴力有りだなんて！」

若干涙目になりながらフリーザ様に詰め寄った

「だって・・・ねぇ？ハイバラさん・・・」

「この大会の一番の目的はあなたを困らせて楽しむことだし・・・」

この2人はきっと人の皮を被った鬼か何かだ・・・
高木はそう思いながらも思い出したように足元に目を向けた
そこには星が三つのドラゴンボールが落ちていた

「まずは一つ目・・・三星球か」

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード２７「名探偵工藤新一・・・略してくどしん」

俺の名前は工藤新一・・・
泣く子も黙る・・・と思ったからこの間泣いている子供を黙らせてみることにした
だが全然黙ってくれなかった上その子の母親に通報されかけた

泣く子・・・やっぱ黙らないよ・・・そして俺は名探偵だ

今日の被害者は志荷増尾（しにますお）さん・・・そして容疑者と目されているのが

「私・・・渡賀弥太代（わたしがやたよ）です」

「またあんたか・・・」

「はい・・・性懲りも無く私です・・・ってことで」

A．自首　　B．自殺
C．逃亡生活　　D．東京ドーム

「どれでしょう？」

「またミリ〇ネアかよ・・・まぁ探偵としてはAであって欲しいけどな」

「A．自首・・・ファイナルアンサー？」

「あぁ・・・ファイナルアンサーだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「溜めなくて良いから早く自首しろよ！」

「残念～！正解は・・・Ｄの東京ドーム！」

「何がだよ！」

「工藤さん・・・問題ちゃんと読まなきゃ・・・」

問題：ビッグエッグの愛称で知られる建造物はどれ？

「ってことで罰として工藤さんには私の借金の連帯保証人になってもらいます」

「ふざけんな！」

91．キング・オブ・ザ・刑事　（無法地帯）（後書き）

ってことでキング・オブ・ザ・刑事
略してＫＯＴＫのエピソード２です
ただ若干フリーザ様と哀の出番が少なめです
もう誰が主人公なんだか・・・
本当に教えて欲しいゴールデンウィークの今日この頃
それでも地球はパンク！
お前もお前も・・・皆愛してるから死んじまえ！！！
・・・ＰＳ
白鳥警部ファンの皆さんごめんなさい
読み進めて行けばきっとカッコイイ白鳥警部が・・・＾＾；

92．キング・オブ・ザ・刑事　（対岸の火事）

あらすじ

拉致されて　殴られそうに　なりました

高木・・・心の俳句？

第９２話　キング・オブ・ザ・刑事　（対岸の火事）

開始から３０分が経とうとしていた・・・
高木は先ほど手に入れた三星球を見つからないように懐にしまい込んでアリーナ出口へ向った
もうそろそろ重悟と落ち合う時間である・・・
頼りになりそうな男だったが自分のように襲われていないかだけが心配である

「佐藤さんという人がありながら他にデートの約束ですか？」

時計をチラチラと見ながら誰かを待つ高木に向ってフリーザ様が言った
その言葉を聞くと高木は慌てながら否定した

「そんなに強く否定するところを見ると余計に怪しく見えるわね・・・」

「ほ・・・本当に違うって！」

それにしてもさっきからフリーザ様達は高木にピッタリくっついている
どうやら高木を困らせて楽しむのが最大の目的というのは本当のようだ・・・
高木は思わず溜息を漏らした

「おいおい！何でそいつらと仲良くしてんだよ・・・」

そこへ重悟がやって来た・・・
実は知り合いだ・・・とだけ高木は説明した

「うわ・・・男と待ち合わせしてたんですか？」

「高木刑事って両方イケるのね・・・」

「ちょっと黙っててくれる・・・？」

2人の口から出てくる雑音を全てシャットアウトして高木は本題を切り出した

「なるほど・・・それで一個は見つけた訳だな？」

「えぇ・・・横溝さんはどうでした？」

「とりあえず1階と2階の半分までは探索したが収穫は無かった・・・誰かに先を越されたのかもな・・・」

高木は三星球を懐に戻すと再び口を開いた

「とりあえず探索を進めましょう・・・」

まだ全部が見つかったとは思えない・・・
それにこちらが一つ持っている以上最終的にはこの三星球が狙われるのだ
考えているより行動した方がずっと良い・・・
2人はとりあえず一緒にアリーナに隣接するビルを調べることにした

1階フロント・・・
アリーナを出て隣のビルに移動した高木はそこであるものを目にした

『スズキ・アリーナ』

どうやらこの建物の名前らしい・・・
スズキ・・・鈴木財閥がオーナーなのだろう

「園子さんに頼んで一日だけ貸しきって貰ったんですよ」

フリーザ様がそう説明した
ふ~ん・・・と聞き流そうとした高木だったが
ふと回りを見回してみた・・・やっぱり
少し離れた所には双眼鏡でこちらを伺う園子・・・そしてその横に見えるトンガリ・・・おそらく蘭だろう

「はぁ・・・そっとしといて欲しいよ・・・」

いったいどれだけの人間が僕の困る姿を楽しみにしているのだろう・・・
心の底から溜息が出た

「まぁあれだけの美人と付き合うとなるとそれなりのリスクが伴うってことだ・・・」

そう言ってポンポンと高木の肩を叩くと
何処からか拝借してきたのだろうか？ホテルの見取り図を取り出して今後の探索計画を話し始めた
このビルは1階と2階はショッピングモールやレストラン街になっていて
3階から上はホテルになっているらしい・・・

「さっきも言ったが1階と2階の半分については良く探した・・・後は2階半分とその上だ・・・」

そこまで重悟が言った時だった・・・

「うわっ・・・あ！あああああああああ！！！」

凄まじい叫び声が聞こえてきた
その場にいた全員が何事かと思って声のした方向を見た

「今のは2階のレストラン街からだ！」

そう言って重悟が走り出した
高木もそれに続いて階段を駆け上りレストラン街に到着した・・・
しかし店がたくさんある・・・どの店なのか分からない

「おい！どうした！どこにいるんだ！？」

重悟が叫んだ・・・
すると今度は半分泣きそうな声が聞こえてきた

「助けてくれ！頼む！」

「落ち着いて！どこにいるのか教えて下さい！」

「中華レストラン『桃白白（たおばいばい）』だ！頼む！早く！死ぬぅ！」

最後の方はほとんど泣き声でぐちゃぐちゃになってしまった声を聞くと
2人はレストランの中に入って行った
物音を頼りに叫び声の主を探すと厨房で発見することができた
見ると全身に縄が絡みついて身動きが取れなくなっている
しかもその内の一本は彼の首を徐々に絞め上げていた

「助けて・・・早・・・く・・・」

2人にそう言いながらもがくと更に首が締まった

「待て！動くんじゃねぇぞ・・・動けば動くほど締まるようになってやがる」

男を落ち着かせながら重悟は絡み付いている縄を見た
下手に切ると余計に絡み付くようになっている・・・かなり巧妙だ
慎重に切るべき場所を見極めて厨房にあった包丁で縄を解いてやると
男は今度は嬉し涙を流しながら重悟に抱きついた

「気持ち悪ぃな！離れろ！」

重悟が男を強引に引き剥がすと高木は何でこんなことになっていたのかを聞いた

男の話によるとドラゴンボールを探していたら突然縄に絡めとられたらしい

「トラップか・・・」

「フリーザ様も過激なことするなぁ・・・」

「失礼な!勝手に私を犯人にしないで下さい!死にたいんですか?」

フリーザ様と哀も後を追ってきたようだ・・・
しかしどうもフリーザ様が罠を仕掛けたわけではないらしい

「ってことは刑事共の中の誰かか」

「その通りだよ・・・」

何処からともなく声がした
どうやらトラップを仕掛けた刑事のようだ
どこから来るとも分からない敵を前に重悟も高木も感覚を研ぎ澄まして緊張した
・・・・・・

「ばあぁ!」

「う・・・うひゃあああああ!!!」

後からの突然の大声に高木は悲鳴を上げながら尻餅をついた
そして慌てて後を振り返ると・・・爆笑するフリーザ様と哀がいた

「くっくっく・・・ハイバラさんたらお茶目ですね」

「お・・・お茶目過ぎるよ・・・やめてよぉ・・・」

「おい！ふざけてる場合じゃねぇだろ！」

重悟の言葉を聞いてハッと我に返った高木は起き上がろうとした
その時ふと上を見ると・・・天井の板が1枚だけ外れている・・・
そして良く見るとそこから2つの瞳がギョロッと覗いていた

「ひやぁあああああああ！！！」

「うるせぇ野郎だな！さっさと立て！」

「情けない男ね・・・」

勝手に驚いている高木にさすがに全員冷ややかな視線を送ったが
高木はその視線より数倍嫌な視線に気付いてしまったので仕方ない

「違・・・上！天井！」

高木が口をパクパクさせながら天井を指差した
ハッとして重悟も上を見たが

「もう・・・遅いよ・・・」

再び男の声がしたかと思った瞬間だった・・・
全員縄やら糸やらに全身を絡めとられてしまった

「くっ・・・しまった！」

慌てて外そうとしたがさっきと同じく余計に締まるだけだった

「俺さぁ・・・昔外国のとある特殊部隊にいたんだよね・・・
だからさぁ・・・こんなトラップぐらいお手のものなんだよね・・・
」

全員の自由を奪った事を確認すると男はゆっくり天井から出てきた
少し痩せていて顔色の悪い蜘蛛の様な男だ・・・

「お前・・・ドラゴンボール出せ・・・」

そう言うとギョロッとした目で高木を見る蜘蛛男
高木は必死に抵抗を試みたが縄が締まるだけだった

「もう良いよ・・・どうせ動けないんだし・・・
ドラゴンボールとあの女は俺が貰うよ・・・」

「ねぇ・・・」

ドラゴンボールを奪おうとした蜘蛛男に哀が声をかけた

「どうでも良いけど主催者まで絡めとらないでくれない？」

「まったくですよ・・・」

そこには見事に絡めとられた哀と・・・それでも涼しげなフリーザ
様がいた

「そうだなぁ・・・お前ら殺せばわざわざドラゴンボール集めなく
て済むかもなぁ・・・」

高木に掛けていた手を離すと蜘蛛男はフリーザ様と哀の方に向って来る
哀にはすぐに分かった
そのギョロッとした目玉に宿っている光は殺気であると・・・
全く助けに入る様子が無いどころかワクワクしながら見ているフリーザ様と
顔を強張らせて息を飲む哀の目の前までやって来ると蜘蛛男はナイフを取り出した

「やめろぉ！」

今にも哀を切り裂こうとする蜘蛛男に向って高木が叫んだ時だった
突如厨房に誰かが入って来た

「あああああああ！！！」

「何・・・！？」

ゴッ！！！

鈍い音が響いたと思った瞬間・・・蜘蛛男の体が宙を舞い壁に叩きつけられた

「ら・・・蘭さん」

「皆大丈夫ですか？」

野次馬に来ていた蘭の一撃によるものだった・・・

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード２８「担任の小林先生！」

「こらお前ら！席につけ！」

突如休み時間の教室に小林がやって来た

「あ！小林先生だ」

「何か・・・いつもと感じが違う」

訳が分からない生徒達を無視して小林は続けた

「元太・・・」

「お・・・おう・・・？」

「お前給食食いすぎなんだよ！」

「はぁ？」

「良いか元太・・・給食ってのはなぁ！本来皆に平等に分けられるべきなんだよ！」

「まぁ言いたいことはわかるけど・・・」

「お前に皆の栄養を搾取する権利があるのか？お上の裁きを受けろ！」

「先生・・・頭でも打ったんですか？」

「どうでも良いけど・・・なんで仲間由紀恵風なんだよ・・・」

「休み時間が終わっちゃうよぉ～・・・」

「お前らは私の生徒だ！」

「聞けよ・・・」

92．キング・オブ・ザ・刑事　（対岸の火事）（後書き）

ふぃ～・・・
徐々に更新スピードが上がって参りました
これも皆さんがくれたパンクパワーのおかげです
・・・まぁ気休め程度ですけど（毒）
まぁそんな感じに毒も吐きつつがんばりたいと思います
吐きすぎて皆さんの致死量に達しないようにしなきゃいけませんが
＾＾；
その辺はパンクに加減します
日本沈没大歓迎！！！
・・・こんなこと言って本当に沈んだらどうしよう
（（（（（；。д。））））アワワワワ

93．キング・オブ・ザ・刑事　（高所恐怖）

あらすじ

拉致されて　縄とか糸で　縛られる

高木・・・心の俳句？

第９３話　キング・オブ・ザ・刑事　（高所恐怖）

「ありがとう！助かったよ」

高木は体に絡み付いた縄から開放されると高木は蘭に言った
蘭が来なければ今頃皆殺されていた・・・
野次馬だと思っていたが・・・どうやら蘭は心配で見に来てくれたようだ

「高木刑事！がんばって佐藤刑事を助けて下さいね！」

渡る世間に鬼はなし・・・昔の人は良い事を言ったものだ
蘭の笑顔を見ながら高木は改めて人の温かみと言うものを噛み絞めたしかしその輝く笑顔の向こう側にブスッとすねた感じの顔を見つけてしまった

「やってくれましたね蘭さん・・・せっかくのピンチだったのにあと一歩と言うところで高木さんの恐怖に歪む顔を見逃してしまったじゃないですか」

「あと一歩と言うところで私は殺されかけたけどね・・・」

まったく助ける様子のなかったフリーザ様に哀から抗議が飛び出したが

フリーザ様はどこ吹く風と言った具合に取り合おう様子もなく蘭に言った

「まぁ今回は黙認しますが・・・一応ゲームですからね?今度邪魔に入ったら罰ゲームですよ?罰ゲーム!」

「ゲームなのに私は殺されかけたけどね・・・」

「うるさいですよハイバラさん!」

そうやってフリーザ様達が騒いでいる中・・・

先ほど罠から助けてやった刑事が高木に近寄ってきた

「あの・・・これ・・・」

そう言って差し出された手の上には星が一つ入った球が乗っていた

一星球である・・・

「助けてもらったお礼です・・・」

突然のことで高木が驚いていると男は高木の手に押し付けるようにそれを渡した・・・

「彼女さん・・・取り戻せると良いですね・・・それじゃあ!」

「え？・・・あの！ありがとう！」

黙って走り去っていく男の背に高木は大声でお礼を言った

「まぁ何はともあれ２つめを手に入れたな・・・ほれ！お前もこいつを片付けるのを手伝え！」

一緒に男の背を見送りながら重悟は蘭の蹴りを食らってのびている蜘蛛男を担ぎ上げた・・・

１階警備室・・・

高木と重悟はとりあえず蜘蛛男をそこに拘束しておくことにした

「こんな危険人物にうろつかれてたら叶わんからな・・・」

そう言いながら重悟は警備室を物色し始めた・・・

ロッカーやら引き出しやらをガサゴソと漁ると目的の物を発見したのか高木の所にやって来た

「トランシーバーだ・・・これからはこいつで連絡を取り合いながら行動するぞ」

「分かりました」

「良し・・・じゃあ二手に別れるか・・・」

残る部分は３階以上のホテルエリア・・・

とりあえず重悟が３階から上へ・・・高木は屋上から下へ降りながら探すことにして２人は別れた

重悟と別れると高木は最上階行きのエレベーターに乗った
他の階に止まる様子もなく一気に上を目指す
もう昼過ぎか・・・高木は窓の外に広がる街並みを眺めながら溜息をついた・・・
本当はこの街の中で佐藤さんとデートするはずだったのに・・・

「良い眺めですね・・・」

「本当ならこの街の中で佐藤刑事とデートするはずだったのにね」

フリーザ様と哀が窓の外を眺めながら言った
この2人・・・とことん着いて来るつもりらしい・・・
高木が再び溜息をつくと同時にエレベーターは最上階に着いた
そこから高木は屋上へ行くため階段を登った

・・・屋上にあった物は空調のための機会と太陽光発電のためのパネル・・・それだけだった
無駄足だったか・・・高木は下の階を探索しようと戻ろうとした時だった
アリーナの屋根が目に入った・・・

「佐藤さん・・・大丈夫かな・・・」

そこに閉じ込められているであろう恋人を想いまた溜息をついた・・・
しかしその時だった・・・アリーナの屋根で何かが光ったような気がした
目を凝らして見ると・・・良く見えないがオレンジ色の何かだ

「そう言えばドラゴンボールの内の一つはこの屋上から適当に投げたんでしたっけ・・・」

高木の横から覗きこみながらフリーザ様が言った
と言うことはあれはドラゴンボールと見て間違いなさそうだ
高木はトランシーバーを取り出した

「ザー・・・横溝だ・・・どうした?・・・ジジ・・・」

ノイズに混ざって重悟の声が聞こえてきた
高木はアリーナの屋根の上にドラゴンボールを見つけたことを説明した

「ってことで今から取りに行ってきます」

「分かった・・・ザザ・・・気をつけろよ・・・」

1階に降り・・・ビルの外に出ると高木はアリーナを見上げた

「どうやって屋根まで行ったら良いのかな?」

屋上から見た時は考えていなかったが・・・アリーナもビルほどではないが相当高い・・・
ロッククライミングする訳にもいかないし・・・どうしたものか?

「普通こういうのって整備用のハシゴとかがあるんじゃない?」

哀の言葉を聞いてアリーナの外壁を見ると・・・一箇所だけハシゴがある・・・

それにしても随分錆びている・・・他のハシゴはないのだろうか？

「他のは昨日特別に撤去して貰いましたよ」

ニヤニヤしながらフリーザ様が言った

「せめてもう少しちゃんとしたハシゴを残しておいてよ・・・」

しかし頼りないがこれしかないのなら仕方が無い・・・
高木は恐る恐る錆びたハシゴを登った
一段上がるごとにミシミシと音を立てて揺れ・・・上から赤茶げた錆びが落ちてきた
本当に大丈夫だろうか？そう思いながら何とか中程まで来た時だった
何やら騒がしいので下の方を見ると・・・

「あぁ！！！」

下にはたくさんの刑事達が集まっていた
ハシゴを上る高木を見つけて屋上にドラゴンボールがあると気付いたのだろう
高木の後を追うようにワラワラとハシゴを上り始めた・・・

高木は慌ててハシゴを登るスピードを速めた
時折振り返るとその度目に映る刑事の姿がどんどん大きくなる
あと5メートル上がれば屋根だ・・・その時だった

「待てぇ・・・！！！」

もうすぐそこまで刑事が迫っていた・・・自分を引きずり落とそうと足に掴みかかってくる

いつから自分はホラー映画の主人公になったのだろうか？
高木が逃げようと足を踏ん張った時だった・・・

バキッ！！！

「うわあああああああああああ！！！」

物凄い音と叫び声がした・・・
高木が振り返ると自分の足から下が無い・・・ハシゴが耐え切れずに落ちたようだ
転落した刑事がもがいている・・・奇跡的に死んではいないようだ・・・
高木はほっと胸を撫で下ろしつつ屋根に登った

屋根に上がるとそこにはフリーザ様と哀がいた

「お疲れ様です高木さん」

「へ？どうやって・・・？」

「私くらいになればこの程度の屋根簡単に登れます」

「私は運んでもらったわ・・・」

なんだか自分の苦労がみすぼらしく見えるからやめて欲しい・・・
そう思いつつ高木はドラゴンボールを見つけるべく屋根の上を歩きだした

「ほっほっほ・・・苦労しているようですね・・・まだ開始3時間

も経っていないと言うのにあの疲れ様」

高木の背中を見ながらフリーザ様が笑った

「でも本気で他の男が優勝しちゃったらどうすんのよ・・・佐藤刑事は・・・」

「その時は・・・ぷぷっ！今その時の高木さんの顔を想像しちゃいましたよ！いやいや実に楽しみ・・・」

この男は・・・

哀が呆れたといった感じの表情を浮かべていると高木がやって来た

「あ・・・あの・・・」

「おや？何ですか？ドラゴンボールは見つけたのですか？」

「えぇ・・・見つけたことには見つけたんですけど・・・」

高木刑事が手を出すとそこには二つに割れたドラゴンボールがあった・・・

それを見た哀は先ほどまでいた屋上を見上げ溜息をつくと言った

「まぁ・・・あんな高さから落としたんだから普通壊れるわよ・・・」

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード２９「呪！コナン」

ある日コナンは休日の街の中を歩いていた
しかしそこで彼はあるものを目にしてしまった・・・

「あ・・・あれは！ジン！」

彼の追う組織の幹部・・・ジンだった
コナンは急いで阿笠博士に電話をした・・・しかしいくら待っても
博士は電話に出ない
痺れをきらしてコナンは走り出した

走ってやって来たコナン・・・
阿笠は笑いながらどうした？と聞いてくる・・・
コナンは街でジンに会ったことを阿笠に伝えた

「ほぅ・・・ジン・・・ジンか」

「そうだよ！だから早くさっきの場所へ！」

「はて・・・ジンと言うと確か・・・」

博士はコナンに背中を向けたかと思うと振り返った

「こんな顔だったかな・・・？」

「う・・・うわあああああああ！！！」

訳が分からない・・・博士の顔が突然ジンの顔に・・・
コナンは地下室の灰原の元へ走った・・・

「何よ工藤くん・・・騒々しいわね・・・」

「大変だ・・・博士の顔が・・・顔が・・・ジンに・・・」

「それって・・・」

そこまで言うと机に向っていた哀はコナンの方に振り返った

「こんな感じ・・・？」

「う・・・あ・・・・ぎゃあああああああああ！！！」

終劇！！！

93．キング・オブ・ザ・刑事　（高所恐怖）（後書き）

さてさて・・・
そんなこんなで93話です
ところで皆さんゴールデンウィークはどう過ごされましたか？
おっとりは軽く旅行に行ってきました
出雲まで行ってきました
何で行ったか？
なんとなくです・・・
知らない街を歩いてみたかったんです
そして無計画な旅行だったので適当にぶらつくだけで終わりました
1泊2日・・・無駄なことしたかな・・・
いや・・・なんかの役に立つよ・・・きっと
出雲は神々しくてパンクの役には立ちそうに無かったですけどね
神様なんて信じねぇぞ！！！
でもネタが出て来ない時は神頼みします＾＾；

９４．キング・オブ・ザ・刑事　（長い物）

あらすじ

拉致されて　錆びたハシゴで　スリルショー

高木・・・心の俳句？

第９４話　キング・オブ・ザ・刑事　（長い物）

「所詮は安物のおもちゃね・・・」

哀が溜息をつきながら高木の手の中を見た
そこには２つに割れたドラゴンボールがあった・・・
割れ目を重ね合わせて見ると中には３つの星がある・・・三星球のようだ

「でもあなたさっき三星球見つけてなかった？」

「あれ？・・・そういえばそうだ！」

ということは・・・あまり考えたくは無いが・・・そう言うことなのだろうか？

「探すんですよ！高木さん！」

「丁寧に扱ってよぉ～！」

割れた拍子に紛失してしまった星を探すために高木はゴキブリのようにアリーナの屋根を這い回った
そんな高木の情けない姿を隣のビルの窓から見ていた男は
大きく溜息をつくと持っていたトランシーバーを取り出した

「ザー・・・おい・・・俺だ・・・ガガー・・・一体何やってんだ？」

高木の持っていたトランシーバーから声がした
驚いてトランシーバーに応答しながら辺りを見回した・・・
少し上の方のビルの窓から重悟が呆れた顔で覗いている

「いや・・・実は・・・」

高木はそれまでの経緯を重悟に説明した
重悟は呆れて「まぁがんばれや」としか言うことができなかった

「ジー・・・ところでお前大丈夫なのか？・・・ザザ」

「え？えぇ・・・怪我はないですよ・・・」

「そうじゃねぇよ！ジジー・・・ハシゴが落ちちまったんだろ？そこからどうやって降りる気だよ」

そう言えばそうだ・・・
他のハシゴはフリーザ様が外したみたいだし・・・どうやってここから降りれば良いのだろう？
高木はフリーザ様を見た・・・

「あの・・・フリーザ様は具体的に言うとどうやって上がって来たんですか?」

その経路を使えば降りられるかもしれない・・・そう思って聞いて見た

「こうやったんですよ」

高木の質問を聞くとフリーザ様はパッと屋根から飛び降りて地面に着地した
それなのに全くの無傷である事だけでも高木は目玉が飛び出すほど驚いたが
次の瞬間本当に映画の「マスク」みたいになるところだった・・・
フリーザ様は軽くジャンプしただけで屋根に跳び乗ってしまった

「分かりましたか?」

分かるわけがない・・・高木は口をパクパクさせながらも何も言うことが出来なかった
そんな高木の肩を哀はポンポンと叩くと言った

「誰でも最初は驚くわ・・・あなたも早くこっち側になれると良いわね・・・」

「何が!?」

「ガガー・・・あぁもう分かった!分かった!」

結局重悟が脱出用の道具を・・・高木は無くなった星を探すということになった

「やれやれ・・・」

重悟はトランシーバーを切ると高木が屋根から脱出するための道具を探しに行く事にした
しかし脱出には何を使ったら良いだろうか？
とりあえず重悟は事務室にでも行ってみることにした・・・

事務室に入ると重悟はあちこちを物色して見た・・・なんだか泥棒みたいで気が引けるが
しかしなかなか良い道具が見当たらない・・・
脚立・・・で届いたら最初から世話は無い
鎖やロープ・・・も短すぎる

「ん？待てよ・・・」

ロープを手にした瞬間何かを思い出したように重悟は事務室を後にした・・・

次に重悟がやって来たのは警備室だった・・・
そこには先ほど捕らえた蜘蛛男がいた・・・どうやら意識が戻ったらしい

「あ！てめぇ！この縄を解け！」

「お前のようなのを自由にできるか・・・それよりお前の持ち物に用がある」

そう言って重悟は男の体を調べた
すると服やズボンの中からロープやら糸やらが大量に出てきた・・・

「まだこんなに隠し持ってやがったのか」

呆れながらも重悟はそれらを集めてみた
先ほど押収したものや事務室から持ってきたものと合わせると十分な長さになった
これなら高木を助けることが出来る・・・重悟は警備室を出ようとした

「この縄も使って良いよ・・・」

そこで後から声をかけられた
振り返ると・・・蜘蛛男のようだ・・・

「この縄も使って良いよ・・・」

目を潤ませながら自分の手足を縛っている縄を重悟に差し出そうとしている・・・
本気でそんな手にひっかかると思っているのだろうか？
重悟は無視して警備室を後にした

「ザ・・・おい聞こえるか？」

必死になって無くなった星を探していた高木のトランシーバーから突然声がした
星探しを中断してトランシーバーを取り応答する・・・

「今からそっちにロープを落とすからそれで脱出しろ」

上を見るとビルの窓から重悟が顔を出していた
そして輪っかのように束ねたロープをこちらに放り投げようとしている
高木はロープが落ちてくるのをじっとまった

「よし！行くぞ！」

そう言って重悟は狭い窓の隙間から輪投げのようにしてロープをアリーナの屋根に投げた
ロープはくるくる回りながら高木の方にやって来た・・・

ボッ！

しかしそれは目の前で消し炭になってしまった
フリーザ様のエネルギー波を放ったのだ

「危ないところでした・・・何者かが上から攻撃して来ましたよ」

「あぁ～！！！」

高木の目の前でブスブスとくすぶっているロープの残骸・・・
とてもじゃないがこれで脱出はできそうにない・・・

「ガー・・・何やってんだよ！！！」

「だってフリーザ様が・・・あ！」

泣きそうになりながらロープの残骸を突付いていた時その下にある物を見つけた
残骸の一部かと思ったがどうも違う・・・星の形をしている

ハッとしてドラゴンボールを取り出して中を見ると同じ物が入っていた

「とりあえず星は見つけました」

「ザザ・・・怪我の功名だな・・・ジー・・・おかげでまたロープを探さにゃいかんがな！」

くそ・・・と言ってトランシーバーをしまう重悟
そこに見覚えのある2人が歩いてきた

「なんだ・・・煙の小五郎の娘か・・・」

「眠りです！・・・どうかしたんですか？」

「あれだよあれ・・・」

重悟が窓から下を指差した・・・蘭と園子が覗くと高木とフリーザ様達がいる
重悟はことの経緯を2人に説明した

「ってことでお前ら・・・ロープとか知らないか？」

う～ん・・・と言って考える2人
しかし別にこのビルに詳しいわけでもないので何も思いつかない・・・

「どこかから借りて来ましょうか？」

「あのフリーザとかいうのが黙ってねぇだろ・・・」

確かに・・・そう言えば次また手を出したら罰ゲームだった
蘭は困った顔で苦笑いをした・・・
そんな蘭の横顔を見ながら考えていた園子がハッと閃いた

「そう言えば蘭・・・消火用のホースでバンジーしたことあったわね」

「何!?お前そんな遊びしてやがるのか!」

「ち・・・違います!あれには事情が・・・」

まぁそれはそれとして・・・消火用のホースは使えそうだ
重悟は近くの消火栓からホースを持ってくるとトランシーバーを手にした

・・・一方高木は別に脱出方法を探していた
しかしどうにも良い方法が浮かばない
困っているとフリーザ様が寄ってきた

「飛び降りれば良いじゃないですか」

無理に決まっている・・・のを分かってて言ってるらしい
ニヤニヤと邪悪な笑みを浮かべている・・・

「できます・・・高木さんならできます!」

「できませんよ!」

「できる・・・できる・・・できる・・・できる・・・」

そう言いながらジリジリと詰め寄ってくるフリーザ様・・・
絶対に落とすつもりだ
何とか抵抗しているとトランシーバーから声がした

「おい・・・ジジ・・・今から消火用ホースをそっちに落とす・・・
ガー・・・燃やすなよ」

分かったと言って上を見ると重悟が窓からホースの金属部分を屋根
に向って投げた
その金属部分に引っ張られるようにホースはシュルシュルと窓から
屋根に向ってのびて来た
破壊されないようにフリーザ様の前に立っていた高木・・・
しかし金属部分が真っ直ぐ向ってくるので当たらないように退こう
とした時だった
フリーザ様に後から羽交い締めにされた

「ちょっと!?あの・・・危ない!」

「ほっほっほ・・・」

「ほっほっほ・・・じゃなくて!うわあああああああ!!!」

目の前まで迫っていたホースの金属部分・・・しかしそれは高木の
横に落ちた
フリーザ様が当たる直前でサッとかわしたようだ

「もう・・・悪ふざけはやめて下さいよ・・・」

「ふふ・・・佐藤刑事が見たらどう思ったでしょうね・・・」

後で哀がクスクス笑っている・・・
佐藤さんには内緒にしといてと哀に手を合わせつつ
高木はホースを使ってなんとか屋根を降りることができた・・・

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード３０「世紀末名探偵伝説２」

野盗について行くとそこにはたくさんの野盗の死体があった・・・
それにしてもすごい死に方だ
全員体の内側から破裂したような感じで死んでいる
こんな死に方は見た事がない・・・まさに世も末だ
護衛のために一緒に来てもらった蘭もマジマジと見ている
もう蘭は死体を見ても悲鳴を上げなくなった・・・
こんな世の中だ・・・仕方ない

「あ！新一！この人まだ生きてる！」

蘭が叫ぶとそこには息も絶え絶えな野盗がいた

「おい！一体どうしたんだ！」

「む・・・胸に七つの傷の・・・男・・・おと・・・おとこ・・・
とこ・・・こべぇ・・・！」

ボンッ！

俺の顔面に脳みそだの血だのが大量に降り注いだ
あまりのことに俺は少ない胃の中身を全部ぶちまけた
蘭が背中をさすってくれる・・・情け無い・・・

でも手がかりは掴めた・・・胸に七つの傷の男・・・
核戦争後始めての依頼・・・俺は絶対に七つの傷の男を見つけてみせる！

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ

９４．キング・オブ・ザ・刑事　（長い物）（後書き）

さてさて・・・
キング・オブ・ザ・刑事シリーズですが
今回で折り返し地点って感じです・・・
もう少しお付き合い下さい＾＾；

それと関係ないのですが
この間街を歩いてたら「轟建設」って会社を見つけました
轟グループ（２５～２７話参照）の系列会社か？
などと下らんことを考えてしまいました・・・＾＾；
パンクに言わせて貰います
フリーザ様と灰原さんはフィクションだ！
実在の企業！団体！人物！
及び地球に蔓延るお前ら汚い人間達とは一切関係ねぇ！
・・・ってことで一切の苦情は受け付けません
ただ青山先生・・・小学館・・・集英社及び鳥山先生からの苦情は・・・
いつでもお待ちしております＾＾；

95．キング・オブ・ザ・刑事　（破廉恥）

あらすじ

拉致されて　屋根から降りれず　一苦労

高木・・・心の俳句？

第９５話　キング・オブ・ザ・刑事　（破廉恥）

「大丈夫だったか？」

「えぇ・・・なんとか・・・」

アリーナの屋根から脱出した高木と重悟は再びフロントホールで合流した

こんな球一つ手に入れるために何でこんなに苦労するのだろうか？

と重悟が溜息をつくと

高木はハッとして思い出した

「これどうしましょう・・・」

そう言って二つに割れたドラゴンボールと屋根の上で見つけた星を取り出した

「これを使え・・・事務室から持ってきた」

『セメダ〇ン』

重悟はそう書かれたチューブを取り出した

「それじゃあ俺は探索に戻る・・・お前も早くくっつけて次を探せ」

そして重悟は探索に向うため階段を登って行ってしまった

高木はさっそくセメダ〇ンでドラゴンボールの修復を始めた

割れ目にしっかりと液を塗るとそれを合わせるようにしてしっかり押さえる

ドン！

しかしその時・・・

高木は突然腕に衝撃を受けた・・・せっかく綺麗に合わせたドラゴンボールが勢い良くずれる

「あぁ～！！！何するんですか！」

「おやおや・・・何ですか？その不格好なドラゴンボールは・・・もうボールとは呼べませんね」

「がさつな性格が出てるわね・・・サイテー」

ニヤニヤしながら好き勝手なことを言う2人に諦めに似た感情を覚えつつ

高木はずれた割れ目を元に戻そうとした・・・

「あ・・・あれ？」

しかしさすがは瞬間接着剤・・・フリーザ様達の相手をしていたほんの一瞬で完全に接着してしまっていた
高木がいくら力を込めようとも元に戻る気配が無い・・・

「もう良いんじゃないですか?それで・・・」

「セメダ○ンの馬鹿・・・」

「メーカーから苦情来るわよ・・・」

泣く泣く歪な形に成り果ててしまったドラゴンボールを懐にしまいつつ
高木は次のドラゴンボールを探すため再び最上階からの探索を再開することにした

エレベーターに乗ると高木は最上階のボタンを押した
先ほどと同じようにエレベーターが動き出すと
先ほどと同じようにフリーザ様と哀が窓の外を見ながら余計なことを言っている・・・
しかしここからが「先ほど」と違った・・・

ガン!

いきなりすごい音がエレベーター内に響き渡った・・・
何かがエレベーターの上部に落下して来たようだ
高木達3人が何事かと天井を見上げていると今度は突然エレベーターが停止した
さっきの落下物により緊急停止装置が作動してしまったのだろう

「やーね・・・閉じ込められたみたいよ」

フリーザ様が無理矢理ドアをこじ開けてみたがそこは壁だった
思わぬ足止めに高木は溜息をついて脱出方法を考えた・・・が思い浮かばない

「仕方ない・・・また横溝さんに助けて貰おう・・・」

「他力本願ね・・・」

「横溝さんもそろそろキレる頃だと思いますよ・・・」

高木の発言に2人が呆れた表情を見せた時だった・・・

ガン!

先ほど程ではないが・・・エレベーター内に再び衝撃音が響いた
一体何が起きているのか?
緊張した面持ちで天井を見ていた高木の前にそれは現れた
突如天井の網目を取り外してエレベーター内に侵入して来たその男は右手に持った鉄パイプでいきなり高木に殴りかかってきた

「ドラゴンボールをよこせ!」

そう言って鉄パイプを左右上下に振り回しながら高木を追い詰める男・・・
フリーザ様と哀はとりあえず巻き添えを食わないように隅の方で小さくなっていることにした
しかし大きめのゆったりサイズと言っても所詮エレベーター
鉄パイプ乱舞から逃げ隠れするには狭すぎる・・・

「あの・・・ちょっと良いですか?」

自分の目の前を鬱陶しく行き来する鉄パイプを掴むとフリーザ様が口を開いた

「鉄パイプは禁止します・・・殺しますよ?」

「え?・・・あぁ・・・すんません・・・」

フリーザ様により鉄パイプが没収されると2人は再び身構えた
高木も鉄パイプを振り回されてどうしようかと思っていたが
没収されたのでようやくまともに相対することができた

「ドラゴンボールを渡せ!」

そう言ってじりじりと間合いを詰めて来る男・・・
高木はギュッと拳を握り締めた

「渡しません!全部集めて僕は佐藤さんを取り戻すんです!」

「女は諦めろ!俺が貰ってやる!」

そう言って互いの手を組み合い力比べのような体勢になった2人
互いに一歩も引かずに力を込めあう

「このボールは一つ一つが佐藤さんの一部みたいな物・・・断固渡しません!」

「・・・一個割れてるけどね」

「余計なことを言わないでよ・・・」

哀の一言に高木が怯んだその一瞬の隙を男は見逃さなかった

「今だ！秘奥義『ニンニク系口臭波』」

はあぁぁぁ・・・と男が口を大きく開けて息を吐く

「ぎゃあああああああ！」

ものすごい悪臭に鼻を摘む高木・・・吐き気と目眩が襲ってくる

一体どんな生活を送ったらこんな口臭が・・・

「焼肉にキムチ・・・そして歯を磨いてない」

ひどい・・・

意識が朦朧としてくる・・・

そんな高木に男が止めを刺そうとしたときだった

「あの・・・ちょっと良いですか？」

黙って見ていたフリーザ様が割って入ってきた

「こんな密室でそんな技出されたら臭すぎてかないません！禁止です！本当に・・・殺しますよ？」

消臭スプレーを辺りに撒きながらフリーザ様が哀に目配せすると

鼻を押さえて座っていた哀が立ち上がって男の所に歩み寄った

「『お口の臭いスッキリガム』よ・・・これでも噛んでなさい」

哀の差し出したガムをクチャクチャと噛む・・・
そして数分が経過して・・・大分臭いが落ち着いてきたところで2人は再び身構えた
先ほどの悪臭で多少足に来ていたが
高木は美和子の顔を思い浮かべて気合を入れると男の攻撃に備えた・・・

「お前ごときにこの技を使うことになろうとはな・・・」

男はフッと笑うと両手を広げて高木に突進して来た

「究極奥義『熱い抱擁そして口付け』」

「死ね!!!」

あまりにも見苦しい・・・
高木と・・・目の前のむさ苦しい光景に耐えかねたフリーザ様と哀のトリプルパンチにより男は敢なく撃沈した

「まったく・・・私はこういう下らない冗談が嫌いなんですよ」

「あ・・・」

やれやれ・・・と倒れた男を見たところで高木は気付いた
男の懐の辺りに妙なふくらみがある・・・
まさかと思い服の中を探ってみると

「あった・・・六星球だ!」

ドラゴンボールが出てきた・・・これで４つめ
あと３つ見つければ美和子を取り戻すことができる・・・
高木がその闘志をさらに燃え上がらせるのに呼応するかのように止まっていたエレベーターも動き出した

「ふぅ・・・やっとこのむさい空間から出れますね」

フリーザ様がそう言い終わると同時にエレベーターは再び停止した
そして扉が開くと・・・

ドシッ！

「うっ・・・！」

開いた瞬間男の拳が飛んできて高木はエレベーターの壁に叩きつけられてしまった
高木の懐からゴロゴロと転がり落ちるドラゴンボール・・・
それを拾うと男はエレベーターに背を向けて去って行った

「悪いが貰って行くぜ・・・」

気絶した高木にそれだけ吐き捨てて・・・

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード３１「ＤＩＥ！ヨーコちゃん！ＤＩＥ！」

俺の名は如月英雄（きさらぎひでお）
女の子の写真を撮らせたら俺の右に出る者はいねぇ・・・
今日はあのスーパーアイドル沖野ヨーコのグラビア撮影
俺はどんな女だろうと美しく撮れる・・・いわんやスーパーアイドルをや・・・
イージーな仕事だ・・・

「おい！おっさん！」

「ん・・・え？・・・俺？」

「そうだ！てめぇだよ！」

「な・・・何？どうしたの？」

「さっきから何ジロジロ見てんだよ・・・このエロ！」

「え・・・でも・・・グラビア撮影だし・・・」

「目ぇつぶって撮れば良いだろうが！空気読めこのエロ！」

そういえば俺以外のスタッフはみんな目をつぶってる・・・ナメてんのか？

「そんないい加減な仕事でき・・・って！痛てててててて！四の字固めはやめてぇ～！」

「目ぇ開けたらぶっ殺す！分かったな！」

「は・・・はい！」

仕方ないので俺は目をつぶって撮影した・・・

「おい！おっさん！」

「はい・・・今度は何でしょうか？」

「ピンボケしてんじゃねぇか！どういう腕してんだよこのサンピンが！ぶっ殺す！」

・・・・・・

俺の名は如月英雄

４２歳にしてグーで殴られた哀れな写真家だ・・・

95．キング・オブ・ザ・刑事　（破廉恥）（後書き）

さてさて・・・
あと2話か3話ほどで終了する予定です
結構長くなったなぁ・・・
カンガルー帝国編より長くなったなぁ・・・
私の人生も長ければ良いんですけど
なんか・・・早死にしそう
パンクですから！
地球から消えて無くなれぇ！！！
・・・・・・
長生きしたいな（本音）
注）評価欄への「早く死ね」等の書き込みはお止め下さい
いつもなら別に平気ですが今日に限っては凹みそうなので先に言っときます＾＾；

96．キング・オブ・ザ・刑事　（勇気りんりん）

あらすじ

拉致されて　パンチもらって　気絶する

高木・・・心の俳句？

第９６話　キング・オブ・ザ・刑事　（勇気りんりん）

良く分からない・・・

自分がどうしてこんな所に横たわっているのか・・・

フリーザ様と哀が心配そうな顔・・・を装った顔で覗き込んでくる

「あぁ！！！」

「きゃあっ！！！」

ハッとして起き上がった高木のおでこと哀のおでこがぶつかった

あまりの衝撃に2人は自分のおでこを押さえて悶絶した

フリーザ様は目の前で起こった「お約束」な光景にゲラゲラと笑った

そんなフリーザ様を尻目に痛みの治まった哀は高木をキッと睨みつけた

「痛いじゃないの・・・傷になったらどうするのよ」

「そ・・・そんなことより今何時？あれからどれぐらい寝てたの？」

「そんなことってねぇ・・・」

ムカついたのでとりあえず平手打ちを一発お見舞いしてから
哀は「1時間ほど寝ていた」と高木に教えてあげた
1時間・・・

「もしかしてあの男がもうドラゴンボールを・・・」

「それはないわ・・・7つ集めた人が出たらダイガクセイからフリーザ様に連絡が来るはずだし」

「そう・・・」

高木はほっと胸をなでおろした・・・
それでもまだ安心は出来ない・・・せっかく集めた4つを奪われてしまった以上
あの男がいつ他の3つを集めてもおかしくない
一刻も早く奪い返すか他のドラゴンボールを見つけなくては・・・

ザザー・・・

その時突然高木のトランシーバーから音がした
きっと音沙汰のない自分を心配して重悟が連絡をよこしたのだろう
そんな予想もトランシーバーから聞こえてきた声によって裏切られることとなった

「ザー・・・助けて!高木刑事!」

「え?・・・へ?誰?」

トランシーバーから聞こえてきた声は明らかに重悟のものではない
女性の声だ・・・しかも助けを求めている

「私よ！・・・ガー・・・園子よ！ザー・・・横溝警部が大変なの
！すぐに助けに来て！」

「落ち着いて！場所を教えてくれるかい？」

「１０階にあるバーよ！ザザ・・・お願い・・・早く・・・」

重悟に何が・・・？
園子の慌てぶりからして急いだ方が良さそうなのは確かだ・・・
高木は再びエレベーターに乗り込むと１０階を目指した

「高木刑事！こっち！こっちよ！」

１０階に到着すると園子が大声で高木を呼んだ
急いでバーの中に入るとそこにはボコボコにやられて重傷を負った
重悟
そして先ほど自分からドラゴンボールを奪って行った男がいた

「蘭とはぐれたから横溝警部にドラゴンボールを探すついでにいっ
しょに探してもらってたの
そしたらその人がいきなりやって来て『ドラゴンボールを渡せ』っ
て言って・・・」

半泣きになりながら園子が説明する・・・
その声を聞いてニヤリと笑うと男は高木の方を見た

「何だ・・・さっきの優男か・・・ドラゴンボールを持っていないやつなんかに用はない」

そういって倒れている重悟を踵で思い切り踏みつけた
まるで手加減していない・・・このままでは重悟が死んでしまう
そう思った高木は男に向けて言った

「待て！横溝さんはドラゴンボールを持っていない！そのくらいにして貰えないか？」

しかし男は力を緩めずにさらに重悟を蹴った

「そんなことはない・・・ある男が教えてくれたんだ
お前とこいつがドラゴンボールを隠し持っているってな！」

それだけ言って男は重悟の首根っこを掴んで持ち上げると首を砕かんばかりに力を込めた

「さぁ・・・どこにドラゴンボールを隠した・・・言え！」

「だ・・・誰が言うか」

「そうか・・・もっとキツイ拷問が必要みたいだな・・・」

そう言って重悟をつき倒すと近くにあった椅子を掴みそれで重悟に殴りかかった

ガシャン！

突然ガラスの割れる音がした・・・
高木刑事の投げた酒瓶が男の拳によって粉砕されたのである

「やめろ！」

高木が今度は近くにあったモップを構えて男に言った
しかし男は拳から流れ出した血をペロリと舐めると重悟に背を向けて高木の方に歩き始めた

「どうやらもう一度痛い目に会いたいようだな・・・」

「ドラゴンボールを返せ！」

高木は全力を込めて男にモップを振り下ろした
しかし男はそのモップを掴んで高木から奪い取るとその場でグニャリと曲げてしまった

「じゃあ今度は俺の番ね・・・」

男はそう言ったかと思うと右腕を乱暴に振り下ろした
高木は咄嗟に横に転がって回避すると自分が立っていた場所を見た
自分のすぐ後ろにあったカウンター席は爆撃でもあったのかと思うほどに破壊されてしまっている
今までの敵とはパワーが桁違いだ

「ぬふふ・・・ぺしゃんこにしてやる」

ひょっとして自分は北斗の拳の世界に迷い込んだのだろうか？
現実と非現実の区別がつかなくなる位の恐怖で体が動かない・・・
男は本当に高木をぺしゃんこにしようと向ってくる

でも高木の体は動かない・・・これが本当の恐怖・・・

「う・・・げぇえ!!!」

今までに感じた事の無い心の底から込み上げて来る恐怖に高木は思わず嘔吐した
そんな様子を見て男はニヤニヤ笑いながら言った

「ゲロを吐くほど恐がらなくても良いじゃないか・・・安心しろ・・・安心しろよ花京院・・・」

変な名前にされてる・・・
だがもうツッコミを入れる気力も残っていない・・・
もうダメだ・・・殺される・・・

「うおおおおおおお!これでも食らえぇ!」

高木が諦めかけたその時だった・・・
突然何者かがバーに入って来て手に持ったナイフで思い切り剛力男の腕を斬りつけた

「ぐあっ!なんだてめぇは!」

「立てよ!彼女を取り戻すんじゃないのかよ!」

その声にハッとして顔を上げると・・・それはさっき蜘蛛男から助けた刑事だった

「立て!立つんだジョー!」

「ふざけやがって！」

腕を傷つけられて怒った剛力男の振るったもう一方の腕によって刑事は吹っ飛ばされた

しかしその顔は清々しく笑っていた・・・高木を元気付けるかの様に・・・

その笑顔を見て・・・高木に再び勇気が戻ってきた

両脚に力を入れて立ち上がると剛力男に突進した

「僕は高木渉です！花京院でもジョーでもありません！」

「うわ！・・・今更つっこむなこの野郎！」

だが敢え無く剛力男に吹っ飛ばされてしまった・・・

しかし剛力男も思わぬ深手を負ってしまい困惑していた・・・腕からはまだ血が出てくる

「ちくしょう！こりゃ縫わなきゃだめだな・・・覚えてろよ！」

それだけ言って剛力男はバーを出て行った

「だ・・・大丈夫ですか？」

高木は重悟と助けに来てくれた刑事に声をかけた

刑事の方は気を失っているらしい・・・

「大丈夫に・・・見えるか・・・？」

高木は改めて重悟を見たが・・・これはひどい・・・

すぐに医者に連れて行った方が良いことは明白だ

「フリーザ様・・・横溝さんを病院に・・・」

さっきから黙って見ていただけのフリーザ様
果たしてこの外道が病院行きを許可してくれるだろうか？
高木は不安になりながらもフリーザ様に聞いた

「大丈夫！腕の良い医者がいましてね・・・ドクターとして来てもらっています」

「あ・・・そう・・・」

とりあえず気を失っている刑事と重傷の重悟を
園子とたまたまやって来た蘭で医者のいる医務室に運ぶことになった
蘭に担がれてバーから出て行くところで重悟は高木に言った・・・

「さっき見つけたドラゴンボール・・・隠しておいた・・・3階の男子トイレのトイレットペーパーの中だ」

重悟を見送ると高木は3階に降りた
そして重悟に言われた通りトイレットペーパーの中を探してみるとトイレットペーパーの束の中に七星球を見つける事が出来た・・・

「ありがとうございます・・・横溝さん」

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード３２「それ行け！名探偵コナン」

「はっはっはっは！はひふへほ～・・・今日も悪い取引をしてやるぜ・・・」

「あ・・・アニキ・・・今日はいつになくテンションが高いですね・・・」

「まぁ今回はかなりの金が動くからな・・・組織にとって重要な取引・・・テンションも上がる」

「そこまでだ！」

「てめぇは！高校生探偵の工藤新一！」

「悪の組織め！成敗してやる！」

「ふっ・・・探偵ゴッコはそこまでだ！この薬でも飲むが良い！」

「うっ・・・！体が縮んで力がでない～・・・」

「はっひふっへほ～！高校生探偵か・・・口ほどにも無い」

「アニキ・・・やっぱりテンションがおかしいですぜ？」

「新一！」

「あ！博士！・・・と灰原」

「工藤君！新しい解毒剤よ！それ～！」

「何だと！」

「元気百倍！高校生探偵！・・・もう許さないぞ！黒尽くめ！」

「こしゃくなガキめ！」

「探偵パーンチ」

ゴン！

「バイバイジーン・・・！」

「あ・・・アニキ～！！！」

終劇！！！

96．キング・オブ・ザ・刑事　（勇気りんりん）（後書き）

感動？のクライマックスまであとちょっと
がんばるぞーなおっとりです
はぁ・・・たまには感動のラストにしちゃおうかなぁ・・・本当に
まぁパンクノベリストなので気分しだいで決めます
それとショート劇場・・・疲れてたのでノリで書きました
反省すべき駄文ですね・・・・＾＾；
それでも載せちゃいます・・・パンクですから！
葬式にチンドン屋を呼んでやる！！！
笑って死にたい・・・
なんか最近「死」について書きすぎ＾＾；
言っときますけど死ぬ予定はありません

97．キング・オブ・ザ・刑事　（マリオネット）

あらすじ

拉致されて　助けたカメに　救われる

高木・・・心の俳句？

第97話　キング・オブ・ザ・刑事　（マリオネット）

それにしても気になるのは先ほどの剛力男の言葉
『ある男が教えてくれた』
ある男・・・誰だろうか？
高木は考えた・・・
考えているうちに高木は警備室へとやって来ていた
ここには先ほどドラゴンボールを奪いに来た人間を拘束している

「ん？今度はあんたか・・・縄いらない？」

蜘蛛男は部屋に入ってきた高木に自分の手を拘束している縄を差し出した
「いりません」と答えてから高木は続けて聞いてみた

「僕らがドラゴンボールを持っていること誰かに話しました？」

「ん？いや・・・誰にも言ってないぜ・・・
むしろ拘束されてから会話したのはお前とお前の連れの刑事の2人

だけだからな」

蜘蛛男ではないようだ・・・
しかし分からない・・・そうだとすると一体「あの男」とは誰だろう？
自分達がドラゴンボールを持っている事を知っていそうな人物と言ったら誰だろう？
高木はあれこれ考えながら警備室を出た

「縄解いて・・・」

「嫌です」

さてさて・・・
それでは一体誰だろう？こういう時いつも頼りにしている名探偵達が居てくれたら・・・
高木はふと後を振り返った・・・フリーザ様と哀がついて来る
そう言えば僕の困る姿を見るため・・・野次馬が来ているんだっけ
何かを期待するように2人を見つめていると哀が突然口を開いた

「探偵どもなら来てないわよ・・・諦めるのね」

「邪魔されたら困りますからね・・・監禁して来ましたから」

「あ・・・そう・・・」

溜息をついてがっくりうな垂れる高木・・・
仕方ないが自分で推理するしかない
いつも探偵達はどうしているだろうか？そう・・・状況整理だ

黒幕は高木がドラゴンボールを持っていることを知っている
黒幕は重悟がドラゴンボールを見つけた事も知っていた
そう言えばエレベーターの鉄パイプ男もピンポイントで高木を狙ってきたし
そのエレベーターが空いた瞬間ドラゴンボールを奪われた・・・と言うことは
黒幕はどこかで高木の行動を把握している可能性が高い
高木は再び後を振り返った

「何ですか?宇宙の帝王になる秘訣なら１００%の才能ですよ?」

フリーザ様・・・
なんで今まで気付かなかったんだろう?
良く考えれば一番怪しいのはこの男だ・・・

「馬鹿ね・・・」

高木が疑念を確信に変えようとした時哀が口を挟んできた

「フリーザ様が黒幕だとして・・・あなたフリーザ様があの馬鹿力と接触してる所を見たの?」

「え!?高木さん私を疑ってたんですか?良い度胸です・・・逆に褒めて上げたいくらいですよ」

確かに・・・
フリーザ様は高木とずっと一緒だった・・・
とても人を使って高木を攻撃させることなど出来ない
フリーザ様でもない・・・では一体?

高木が首を傾げたその時
突然携帯のバイブ音が聞こえてきた・・・

「おっと・・・これは失礼」

どうやらフリーザ様の携帯らしい・・・

「おや・・・ダイガクセイ・・・どうかしたんですか?」

それから「はいはい・・・」と適当な相槌が2・3度聞こえたかと思うと
フリーザ様は電話を切って高木の方を見た

「どうやらドラゴンボールを6つ集めた男がアリーナに現れたそうです・・・」

そしてその男は最後の一つを持つ男と直接対決を望んでいるとのこと・・・
別に格闘技の試合じゃない・・・正面からぶつかって行く必要などない
高木もそれは分かっていたが・・・どうにも美和子の顔が浮かぶ

「行きます・・・そうしないと佐藤さんに顔向け出来ませんから」

「おぉ!高木さん素敵過ぎますよ!」

「早死にするタイプね・・・」

こうして高木は一路アリーナへと向った
しかしもう少しでアリーナの入り口と言うところでそれは起きた

「あの男がドラゴンボールを持っているぞ！」

後からいきなりそう叫ぶ声が聞こえた

ビックリして振り返ると一人の刑事がこっちを見ている・・・

そして次にドドドド・・・と言う地響きが聞こえてきて

高木の目の前に物凄い人数の刑事達が現れた

「ドラゴンボールを奪い取れぇ！！！」

そしてその群れは一気に高木に向って雪崩れ込んでくる

「うわあぁ！」

高木は全力でアリーナの扉に向って走った

しかし刑事達もドラゴンボールをみすみす見逃せない・・・

どんどん高木との差を縮めてくる

「待て！この野郎！」

俊足の刑事が高木の服を掴もうとした時だった

ゴッ！！！

鈍い音が響いて俊足刑事が壁に叩きつけられた

蘭が飛び蹴りをお見舞いしたのだ・・・

「早く中へ！高木刑事！」

「あ・・・ありがとう！！！」

蘭が刑事達との乱闘を繰り広げている間に高木はアリーナの扉に辿り着いた
扉を閉めるとき一瞬だけ振り返ると蘭が親指を上に突き立てて微笑んでいた

「蘭さん・・・また手出ししましたね・・・罰ゲーム決定です！」

「えぇ！そんな～！」

しかし扉が閉まるときには微笑みは泣きっ面に変わっていた・・・

「なんとか辿り着けたようだな・・・」

蘭の泣き顔を申し訳なさそうに見送る高木の背中に向って男は声をかけた
その声に振り返るとそこにはやはりと言うべきか・・・剛力男が立っていた
高木はそのギラギラと鈍い光を放つ両の瞳をにらみつけた

「で・・・もちろんドラゴンボールはあるんだろうな？僕じゃありませんなんてのは無しだぜ？」

「ここにあります・・・横溝さんが守り通した最後の一つです」

高木は懐からドラゴンボールを取り出して見せた
その中に光る7つの星を確認すると剛力男はベロリと舌なめずりをして高木の方に歩みを進めた

「それじゃあそいつを頂いて・・・あの女を俺のペットにしてやるぜ！」

アリーナの天井には依然吊るされたままの美和子がいる
高木が見上げると美和子と目が合った
絶対に助ける！・・・そう心の中で強く唱えると剛力男に向って行った

「この野郎！」

剛力男の拳が何度も何度も高木を薙ぎ払った
しかし何度倒されても高木は立ち上がり・・・そして剛力男に突進した

「くそ・・・！諦めの悪い奴め・・・」

剛力男が突き離そうとしても高木はなかなか離れない
必死に剛力男の体にしがみついている

「おぉ～・・・高木さん根性見せますね・・・」

「何かドラえもんにこういう話あったわよね・・・」

フリーザ様と哀もその様子を固唾を飲んで見守った
しかし剛力男は必死にしがみついて来る高木を力任せに引き剥がすと
今度は両拳で高木に連打を浴びせた

「無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄無駄ァ！！！」

高木の体が宙を舞って・・・綺麗な放物線を描きながら数メートル先に落下した
その光景を見ていた誰もが高木のＫＯ負けを悟った・・・
荒くなっていた息を整えると剛力男はニヤリと笑って高木の元に歩み寄った

「まぁ・・・良くがんばったんじゃないか？お前は男だよ・・・が・・・これは勝負だからな・・・悪いがドラゴンボールは貰っていくぞ」

しかしそう言ってドラゴンボールを奪おうと手を伸ばした時だった
完全に伸びていると思われた高木が突如立ち上がると
両手で挟み込むように握りしめたドラゴンボールを頭の後まで行くぐらい振りかぶった

「そんなに欲しけれりゃくれてやるさ！」

そう言ってドラゴンボールごと両の拳を剛力男の後頭部に振り下ろした
剛力男は高木が立ち上がったことに驚いて屈み込んでいた身を起こそうとしていたため
高木の拳はこれでもかと言うぐらいクリーンヒットしてしまっていたまるで切り倒される巨木のように・・・
高木より一回り大きいその体はぐらぐらと揺れたかと思うと力無く崩れ落ちた

「やった・・・？」

剛力男は完全に伸びている・・・起き上がってくる気配は全く無い
高木はその懐からドラゴンボールを奪い返すと一気に喜びを爆発さ

せた

「やった！僕はやったんだ！」

もう一度ドラゴンボールを見る・・・
一星球・・・二星球・・・四星球・・・五星球・・・六星球・・・
七星球・・・
ついに全部そろった
これで美和子を助けることができる

「・・・・・一個足りないじゃない」

喜んでいたところで哀が口を挟んできた・・・
もう一度見てみる・・・

「あれ？・・・三星球がない」

男の懐にもないようだし・・・いったいどこに行ってしまったのか？
高木が辺りを探していた時だった

パン！パン！パン！パン！・・・

誰かが手を叩く音が聞こえてきた
音のする方を振り返ると・・・そこにはあの男がいた・・・

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード３３「蘭姉ちゃんの人生相談室リローデッド」

「あ・・・あの・・・開いてますか？」

「あ・・・コナン君の担任の・・・」

「はい・・・小林です」

おやおや・・・
今日はとても珍しいお客さんです
コナン君の担任の小林先生です
まぁ彼女の悩みそうなことぐらい大体分かります・・・

「パンが無いならケーキを食べれば良いじゃないですか」

「いえ・・・パンは有りますしケーキもいりません・・・」

「じゃあ何の相談で来られたんですか？」

「えぇ・・・生徒の・・・江戸川君と灰原さんのことで悩んでいて・・・
あの２人は妙に大人っぽいって言うか・・・なんだか手がかからなくて・・・
あの子達にはもっとレベルの高い教育を受けさせた方があの子達のためなんじゃないか？って・・・」

なるほど・・・
確かにあの２人は小学生とは思えません
自分の手に負えるレベルを遥かに超えた生徒を前に無力感に打ちひ

しがれているんですね・・・

「つーかさぁ・・・先生の手に負えないんなら・・・先生が悩まなくて良くね？」

「え？・・・でも・・・」

「そんなのなるようになるでしょ・・・先生はそんなこと考えずに男でも作って遊んでりゃ良いんすよ！」

「そ・・・そうかしら・・・？そうかも・・・そんな気がして来た！」

「よし！じゃあ私が手ごろな男を紹介して上げますよ！ついでにホテルも予約しときますから・・・今夜はハッスル！ハッスル！」

「イエー！！！」

紹介されたのは千葉刑事だったという・・・

ありがとう蘭姉ちゃん！

97．キング・オブ・ザ・刑事　（マリオネット）（後書き）

ふい～長かった・・・
ってことで次回でキング・オブ・ザ・刑事は完結です
そしてもうそろそろ１００話ですね・・・
１００話は何か特別なことやりたいですね
何ていうか節目らしい話にしたいです
ってことで
とりあえずはＫＯＴＫの完結編をがんばって書きたいと思います
そりゃもうパンクに・・・
火に入れてはいけないようなあらゆる物を注いでやるぜ！
・・・１００話
本当はちょうど１００話で終わりにしようと思っていました・・・
そんなカミングアウトもしときます＾＾；

98．キング・オブ・ザ・刑事　（愛戦士）

あらすじ

拉致されて　最終決戦　いざ挑む

高木・・・心の俳句？

第９８話　キング・オブ・ザ・刑事　（愛戦士）

突然響き渡った手を叩く音・・・
高木が振り返ると男は怪しい笑みを浮かべながらアリーナの椅子に腰掛けていた
ポップコーンを傍らに置き・・・まるでショーでも見るかのように・・・

「あなたが黒幕だったんですか・・・」

何と言うことか！
いや・・・それともやっぱりと言うべきか・・・
高木の目に映ったその男は彼の良く知る人物だった

「ブラボー！おお・・・ブラボー！とても素晴しい戦いだったよ高木君」

高木の上司にして美和子を狙う恋敵・・・
白鳥は椅子からすっくと立ち上がると高木達の方に向って静かに歩

き始めた
そして高木の目の前まで来ると懐から三星球を取り出した

「だけど・・・こんな球一つに躍起になってる君の姿は滑稽でもあったよ」

「そのドラゴンボール・・・僕のために取っておいてくれた訳ではないんですよね・・・？」

「もちろん！欲しければ僕を倒すことだね」

満身創痍でボロボロの高木を一瞥するとフッと笑みをこぼし
そして三星球を手の上で転がしながら白鳥は続けた

「君達は結局僕の手の平の上で転がされていたのさ」

高木や重悟と別れた後・・・
白鳥は携帯で自分の家の執事を呼び高木の写真を大量に用意
出会う刑事達全員に配って襲うように促していたのだ
さらに刑事達との緻密なやり取りでドラゴンボールの所在などを完全に把握・・・
最終的にドラゴンボールが集中した2人・・・
高木と剛力男で潰し合いをさせようという彼の目論みは見事に成功した

「君がここまで残ることは予想していたよ・・・
君の美和子さんへの想いの強さ・・・敵ながら天晴れだよ
だけどその愛の力もあの馬鹿力相手に使いきってしまったことだろう」

高木は歯を食いしばった・・・自分に残された全ての力を集めるように
でも足がふらふらする・・・目もかすむ・・・内臓がひっくり返るような吐き気がする・・・
白鳥の言う通りもうボロボロ・・・とっくに病院のベッドに寝ていてもおかしく無い状態だった

「ふふ・・・全ては計画通り!やはり頭を使った人間が最後には笑うもの・・・
君達のような肉体馬鹿を駒として使いこなし・・・勝利する!まさにエリート!」

「いくら白鳥さんでも佐藤さんは・・・渡しません!」

「往生際が悪いなぁ・・・安心したまえ!美和子さんは僕が責任を持って幸せにするから」

そう言うと白鳥は精神を集中し謎の呼吸法・・・謎のポージングなどをしたかと思うと
自らの右拳に全エネルギーを集中させていった
ピピピ・・・フリーザ様の左目にある機械が音を立てた

「ほう!これは驚きました・・・白鳥さんの右手の戦闘力がアップしましたよ!」

「ちょっとなによその機械・・・どこから出したのよ?」

そうこうしているうちに白鳥の右拳は禍々しいオーラを放ち始めた
実際そんなオーラは出ていないが・・・出ていそうな雰囲気を醸し

出していた
しかしそんなニセオーラでも高木を絶望させるには充分だった
高木はふと天井の美和子を見た
佐藤さん・・・僕・・・ダメかもしれません・・・
そんな事を考えながら美和子の潤んだ瞳を数秒見つめているうちに
高木は心が透き通っていくのを感じた・・・何かが吹っ切れた！

「白鳥さん！どこからでも殴ってきて下さい！」

「ふふっ・・・良い覚悟だね・・・では遠慮なく・・・」

そう言うと白鳥は右拳に溜めた全エネルギーを一気に爆発させた・・・っぽい雰囲気を醸し出した

「食らえ！ウルトラ・スーパー・ズビズバ・メチャンコ・キャリアパンチ！！！」

迫り来る一撃を前に高木は捨て身で拳を繰り出した
自分は全力で美和子を愛した・・・そのことを証明したかった・・・
全力を出し・・・そして敗れた・・・
と思われたが

・・・・・・
見ると白鳥が尻餅をついている

「馬鹿な・・・くそ！もう一度・・・ウルトラ・スーパー・ズビズバ・メチャンコ・キャリアパンチ！」

高木は今度は白鳥をしっかり見てみた・・・
なんて・・・弱そうなパンチなんだ・・・

スローすぎて欠伸が出そうなそのパンチに高木は軽くカウンターを合わせてみた
すごい勢いで白鳥は後に吹っ飛んだ

「やれる！」

高木は一気に白鳥に向って行った
白鳥は最強の必殺技をかわされてしまい完全に怯えている

「た・・・高木ぃ！！！僕にこんなことして・・・ただで済むと思うな！！！僕は・・・キャリア組だぞ！！！」

「あぁ～！ズルイですよ！権力使うなんて！」

権力を使った恐るべき圧力の前で高木は思わず躊躇した・・・
しかしそこで突然フリーザ様が口を挟んできた

「大丈夫ですよ高木さん・・・」

「え・・・でも・・・」

「今回は上下関係を忘れて楽しんでもらうために
警視総監と言う人から上司を殴っても職場で不利にならない旨の承諾書を貰ってきましたから」

警視総監・・・あなたって人は何てことを・・・
白鳥の目の前は真っ暗になった

ドス！

それを聞いた高木は容赦なく白鳥に拳を叩き込んだ

「これは横溝さんの分！」

ドス！

「これは僕の分！」

ゴキン！

「これは佐藤さんの分！」

ボキャッ！

「これはクリリンの分！」

グシャッ！

「これもクリリンの分！」

メメタァ！

「クリリンの分！！！」

・・・・・

こうして高木は重悟・・・高木・・・美和子・・・そして１０５人のクリリン達の分

合計１０８発・・・煩悩の数だけ白鳥を思う存分殴ると三星球を手に入れた

ようやく7つ・・・
これで美和子を助けることができる

「フリーザ様・・・佐藤さんを出してください・・・」

ドラゴンボールを手にそう言うと哀が顔をしかめながら口を挟んできた

「王子様が迎えに行かないでどうするのよ・・・」

高木はその言葉に照れながらも美和子が閉じ込められたガラスケースを見た
それは徐々に下の方に降りてきて・・・そして底が地面についた
高木は近くまで行ってケースを開けようとしたが・・・

「あの・・・フリーザ様・・・」

「何ですか？」

「パスワードってのがあるんですけど・・・」

ケースを開けるにはどうやら音声認識型の装置に向ってパスワードを言わないといけないらしい・・・
しかし高木はパスワードなど知らない・・・

「あぁ！これは失礼しました・・・パスワードは神龍を呼び出す呪文（ナメック星版）です・・・」

「すみません・・・分かりません・・・」

本当にどうしようもない男だ・・・
と理不尽に呆れながらフリーザ様がパスワードを教えてやろうとした時だった

「・・・何でしたっけ?」

フリーザ様も忘れてしまっていた・・・
仕方なく哀やダイガクセイを見るが2人とも「知らない」と首を横に振った
あとガラス一枚なのに・・・
高木ががっくりうな垂れてしまった・・・その時だった
どこから入ってきたのか?緑色をした少年が高木の足元にいた・・・

「何?坊や・・・どこの子?」

そう言って高木が緑色の少年の前にしゃがみ込んだ時だった

「タッカラプト・ポッポルンガ・プピリット・パロですよ・・・」

それだけ耳打ちして少年は去って行った
・・・・・誰?

とにもかくにも
パスワードも分かり無事に美和子は開放された
高木は満身創痍でボロボロ・・・美和子は長時間の監禁でクタクタ・・・
そんな2人だったがケースが開かれると弾かれるように歩み寄って抱しめ合った
時間にしてほんの数時間・・・しかし2人にとっては10年ぶりぐ

らいの気分だった
長かった・・・本当に・・・

そんな2人を呆れた顔で見つめながらフリーザ様が口を開いた

「高木さん・・・盛り上がってるところをすみませんが副賞の贈呈があります・・・ハイバラさん！」

フリーザ様が手を叩いて呼ぶと哀は「はいはい」と出てきて高木にカギを渡した

「何これ・・・？」

高木が不思議そうにカギを見つめているとフリーザ様は続けた

「副賞です・・・鈴木財閥様よりアリーナに隣接したホテルのスイートルーム一泊が与えられます」

「ま・・・その勢いでハッスルしてちょうだい・・・がんばってね」

哀のどぎつい言葉に顔を真っ赤にしながらも
高木と美和子はボロボロの体を引きずりながらスイートルームに消えて行った・・・

・・・・・それを遠くで見ていた男が一人

「病院行けよ・・・」

ただ一人ツッコミを入れながら
横溝重悟はクールに去るのであった・・・

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード３４「黒の組織壊滅作戦『ホワイトプラン』」

「・・・と言う作戦で組織を一気に・・・」

「ちょっと！シュウ！聞いてるの？」

「スミマセン・・・聞いてませんでシタ・・・」

「赤井君・・・君この作戦で重要なポジションなんだから頼むよ？」

「大体シュウって何なの？結局のところ何者なの？」

「バイトです」

「予想外だ・・・」

98．キング・オブ・ザ・刑事　（愛戦士）（後書き）

やっと終わりました
長かった・・・本当に・・・
あとフリーザ様と灰原さんなのに2人の出番が少なすぎ・・・
ってことで猛省
それであと2話で１００話
ついに3桁です
3桁になってもがんばりたいですね・・・パンクに！
金なんてケツを拭く紙にもならねぇもんに振り回されてんじゃねぇ！
・・・・・・
でも私はお金に生かされています

99．とんがりは二度死ぬ

一番大事な物・・・
多くの人にとってそれは命であろう
しかしこの世には「命よりも大事もの」というものが確実に存在する
テレビドラマ・・・漫画・・・映画などでは
主人公を奮起させ感動的な奇跡を起こすための鍵だったりする
しかし命より大事と言うことは
「命を失うことへの恐れ」という一種の制御装置（リミッター）が無いということ
である
命を失うことを恐れない・・・それは「勇気」と呼べるかもしれない
しかし時としてそれはこう呼ばれる
「狂気」　と・・・

第９９話　とんがりは二度死ぬ

その日・・・
蘭はフリーザ様の呼び出しを食らっていた
何で呼び出されたのか・・・大体想像がつく
おそらく先日の件だろう・・・

「これはこれは・・・お待ちしてましたよ蘭さん！」

博士の家につくとフリーザ様が明るく出迎えてくれた
しかしその笑顔が逆にこれから始まる地獄を連想させる・・・
蘭は思わず溜息を漏らした

「おや・・・この良き日に溜息とは・・・いけませんねぇ」

「あのフリーザ様・・・今日私が呼ばれた理由って・・・やっぱアレですよね？」

一人で嘆いていても仕方無いので蘭は思い切って聞いてみた

「おや！飲みこみが早いですね・・・そうですよ！罰ゲームを受けて貰うためですよ！」

やっぱり・・・

蘭は先日の事を思い出した

高木刑事と佐藤刑事がピンチだと言うので行ってみたら本当にピンチだったので

ほんのちょっと助太刀したのだ・・・

それが原因でこんなことに・・・

「はぁ・・・」

また溜息が漏れた・・・

コトッ・・・

音がしたので顔を上げると目の前に紅茶が出されている

あまりの落胆振りを気の毒に思った哀が淹れてくれたものだ

蘭はとりあえず落ち着こうと紅茶を口に含んだ

「さて・・・それじゃあ飲み終わったところで罰ゲームを発表しますか」

蘭が紅茶の入っていたカップを置くとフリーザ様が切り出した

「それじゃあハイバラさん!発表の方を・・・」

すると巻き物のような物を持った哀が出てきて
そしてそれを蘭に見せるように広げると言った

「蘭さんに受けてもらう罰ゲームは『さよならとんがり・・・涙の公開断髪式』よ」

そんなこんなで・・・
フリーザ様と哀・・・そして蘭の三人は公開断髪式を行うために米花公園に向った
公園に着くとそこには「毛利蘭」という一個人の断髪式にしてはあまりに多いギャラリーがいて
所々に『さよならとんがり!』『L・O・V・E とんがり』などの意味不明な横断幕や
まるで祭でもやっているかのように屋台が出ていたりした・・・

「何・・・この人だかり・・・」

蘭が隣にいるフリーザ様の顔を見た

「あぁ・・・どうせだから盛大にやろうと思って・・・
新聞屋さんや商店街の人に頼んで広告やポスターなんかで宣伝してみました」

こんなに大勢の前で愛しのとんがりを・・・
蘭の顔からどんどん血の気が引いていき・・・そして

「いやあぁぁぁぁぁぁ！！！」

「あ！フリーザ様！蘭さんが逃げちゃったわよ！」

「何ですと！急いで追いかけますよハイバラさん！」

凄まじい勢いで走り去った蘭を追ってフリーザ様と哀は公園を後にした・・・

数時間後・・・

フリーザ様と哀は家に戻って来ていた

しかし二人は家に入ることなく門の所でジッと中の様子を窺っている

「蘭さ～ん！馬鹿なマネはやめて出てきなさ～い！消し去りますよ～！」

拡声器を使ってフリーザ様が家の中に呼びかけた

その言葉から数秒ほど時間をおいて窓の所から蘭が顔を出した

「こっちには人質がいるのよ！こちらの要求を飲まない限りここから一歩も動きません！」

「ら・・・蘭くん・・・少し落ち着いてじゃな・・・」

「これが落ち着いていられますか！」

蘭は博士を人質に完全に立てこもってしまっている

しかもかなりの興奮状態・・・無理に突入すれば人質の無事は保障

できない

「それで?要求は何ですか?」

フリーザ様が聞くと蘭は窓から紙飛行機を飛ばしてきた
紙飛行機を広げると文字が書いてある

『逃走用の車と金・・・そしてとんがり切断の免除・・・』

「最後の条件だけで良さそうなのに・・・蘭さんノリノリね・・・」

「それで・・・?要求を呑まない場合どうするつもりですか?」

「そんなこと言うなら・・・博士にコレステロール値の高い物を大量に食べさせるわよ!」

「くっ・・・!なんて卑劣なの・・・」

そんなことをされたら博士が・・・
しかしとんがりは切除したい・・・ここはなんとか蘭をなだめて出てきて貰わねば
そうこうしていると・・・
突然コナンがやって来た・・・一人の女性を連れて・・・

「連れてきたぜ」

「ご苦労様・・・さぁ!中の蘭さんを説得して下さい」

蘭は博士を縄で動けない様に縛るとソファーに腰掛けてうな垂れていた

どうしてこんなことに・・・
しかしそうしていると外から聞き覚えのある声が聞こえてきた

「蘭～！聞こえる？私よ・・・・」

「この声は・・・・」

蘭はソファーから体を起こすと外を見た・・・
門のところには英理が立っている

「蘭！お願い！こんなことはやめて出てきて！お母さんもいっしょに罪を償うから！」

フリーザ様・・・お母さんまで引っ張り出してきて・・・
しかし・・・良く見ると英理は泣いている

「蘭・・・覚えてる？蘭は小さい時からよくお手伝いしてくれて『お母さんがゆっくり出来るように蘭ががんばる』ってよく言ってたわよね・・・
あなたは本当は優しい子・・・こんな事をする子じゃないわよね・・・？」

「ハイバラさん！コナンさん！ここで歌うんですよ！」

「母さんが～夜なべ～をして～手ぶく～ろ・・・」

中では蘭の心が揺れ動いていた
自分は今母親を泣かせている・・・あんなに悲しい想いをさせている・・・
きっとこんな娘だから帰ってきてくれないのだろう・・・

こんな親不孝な娘だから・・・と思いかけたが

「って・・・それとこれとは話が別です！」

「ちっ・・・『母親の泣き落とし作戦』失敗ですね・・・こうなったら最終手段ですよハイバラさん！」

２０分後・・・

家の回りは警官隊に取り囲まれようとしていた

窓からこっそりと外を窺っていた蘭の顔がどんどん青白くなっていく

まさか警察沙汰に発展するなんて・・・

自分はこれからどうなるんだろうか？

逮捕されて・・・暗くてタバコの煙だらけの部屋で尋問されて・・・

裁判にかけられて・・・

・・・死刑だ・・・きっと死刑だ！

死刑死刑死刑死刑死刑死刑死刑死刑死刑死刑・・・

蘭は全てに絶望し・・・フッと何かが切れたように笑うと博士を見た

「もう終わりよ・・・でも一人はいや・・・博士・・・」

「ら・・・蘭くん・・・待つんじゃ！早まるんじゃないぞ！」

「ふふっ・・・いっしょに・・・良いよね？キッチン・・・借ります・・・

美味しい物いっぱい食べさせて上げる・・・コレステロール値の高い物・・・」

「ま・・・待て！蘭くん！わしは今ダイエット中で・・・」

「二人で動脈硬化で死のうね・・・博士・・・」

「た・・・助けてくれぇえ～！」

その頃外では警官の配備が完了しようとしていた
やや離れた位置にスナイパーが陣取り家の中の様子をスコープ越しに窺った
蘭がキッチンに向うのが見える

「フリーザ様・・・スナイパーから通信です・・・」

警官の一人がフリーザ様に耳打ちする・・・

「何？蘭さんがキッチンへ？」

「まさか・・・コレステロール値の高い物を・・・」

なんということだ・・・一刻の猶予もない・・・
警官隊は突入の準備を進めた

「こちらスナイパー・・・現在犯人は人質から離れています・・・突入するなら今かと・・・」

スナイパーからの通信を聞きながらその場の全員がフリーザ様を見た
フリーザ様は目をつぶり数秒の沈黙をおいてから口を開いた

「皆さんを突入させなさい・・・」

その言葉を聞いた警官が無線で全員に命令を下した

「突入！！！」

その合図で警官達がドアを破って一気に家の中になだれ込む
そしてリビングで拘束されていた博士を助け出すとキッチンから出て来た蘭に銃を構えた
蘭は逆上して手にしていた包丁で切りかかってくる
しかしその瞬間警官隊の手にしていたマシンガンが火を吹き
蘭は全身から血を噴き出しながらその場に崩れ落ちた

「犯人射殺！犯人射殺！」

現場に戦慄が走った・・・
コナンと英理が警官の制止を振り切って家の中に入る・・・
すると底には変わり果てた姿の蘭が横たわっていた

「あぁ・・・蘭・・・どうして・・・」

英理は蘭の遺体にすがるようにして泣いた
コナンも声を噛み殺して涙を流している
そんな二人を後からフリーザ様と哀が悲しげに見つめていた

「そこまでとんがりを守りたかったんですね・・・」

「こんな結末・・・蘭さん・・・」

・・・・・・

「はい！カット！ＯＫです～！」

いきなり現場に快活な声が響き渡った・・・一気に緊張の糸が解ける
皆満足そうな笑顔を浮かべながら「お疲れ様」などと声をかけあう
血まみれの蘭も起き上がるとコナンからタオルを貰い顔を拭いた

「いやー！素晴しいラストシーンが撮れましたねぇ！いい映画になりますよ！」

「あ～あ・・・血のりでべとべと・・・シャワー浴びてきて良いですか？」

そう・・・ただの映画撮影である・・・
今回の罰ゲームの本当のタイトルは・・・
「蘭がバッドエンドを向える映画撮影」なのであった

「ちなみに完成したら帝丹高校で上映しますので・・・」

「やだ～！恥ずかしいですよ・・・」

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード３５「世紀末名探偵伝説３」

胸に七つの傷を持つ男の手がかりを探すため

俺と蘭・・・そして仲間を殺された一人ぼっちの野盗はオアシスにやって来た
ここなら水を求めて人がたくさん集まっている・・・情報もあるに違いない
俺はさっそく七つの傷の男の情報を求めて聞き込みをしてみた

「・・・・・・・・・」

物々交換をしている老人がいたので聞いてみたのだがさっきからこの調子でずっと黙って俺を睨んでいる・・・どういうことだ？
そんな事を考えていると蘭が横から出てきた

「もう新一・・・あなたが活躍していたあの頃とは時代が変わったのよ・・・」

そう言って蘭は缶詰を３つ老人の前に差し出した

「これで貰えるだけの情報を教えて」

すると老人はさっきとは打って変わって
「七つの傷の男」についての情報をペラペラと話し始めた

「昔と違って今は聞き込みも有料か・・・」

平和な時代を懐かしみながらも
俺はこの荒廃した時代を探偵として生き抜く決心をした・・・

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ

９９．とんがりは二度死ぬ（後書き）

ついに岡村さんと矢部さんです
ってことで次回はついに１００話
ちょっとじっくり考えた話にしたいので
出るまでに少し時間がかかるかもしれません
ってことでしばらくお待ち下さい
がんばってパンクに３桁突入したいと思います
突入！！！されど一人ぼっち・・・人類皆一人ぼっち！！！
・・・・・・
寂しがり屋のおっとりは今日も涙で枕を濡らします

１００．フリーザ様と灰原さん

Ａ　ｄａｙ　ｉｎ　ｔｈｅ　ｌｉｆｅ　・・・

第１００話　フリーザ様と灰原さん

朝・・・
哀が目を覚ますと外からはしとしとと雨音が聞こえてきた
今日は雨か・・・
今日は日曜・・・別に外に行く用事も無いし良いか・・・
そんな事を考えながら天井を眺めた
しとしと・・・ぱらぱら・・・
雨粒が奏でる美しい音が哀を再び眠りに誘おうとした
・・・しかしそれは邪魔されることとなった

「ハイバラさ～ん！ハイバラさぁぁ～ん！」

聞くだけで不快になるこの声・・・
フリーザ様のお呼びだ
哀は寝起きで重い体を引きずりながらフリーザ様の許へ向った

朝食後・・・
フリーザ様と哀はリビングでくつろいでいた
博士は先ほど出かけてしまった
家にいるのは２人だけ・・・
博士はあれで結構おしゃべりだからいないとかなり静かになる

哀は静かな時間が好きなのでただ黙ってコーヒーを飲んでいたしかしフリーザ様はそうはいかなかった
フリーザ様はやかましいのが嫌いだが沈黙はさらに嫌いださっきから黙ってファッション誌のページをペラペラめくる哀に嫌気がさし
リモコンを手にとってテレビを点けたワイドショーがやっている・・・

「ほぅ・・・人気アイドル亀泉忍(かめいずみしのぶ)と俳優の鶴染仁(つるぞめひとし)が電撃結婚ですって」

「あらそ・・・」

・・・・・

「楼膳(ろうぜん)外務大臣が人気漫画『名探偵コニー』で外務省アピール・・・ですって」

「ふ～ん・・・」

・・・・・

ペラっ・・・・・

哀がファッション誌をめくる音だけが部屋に響いた
フリーザ様がいくら話をふっても哀は上の空・・・全く会話が続かない
さっきから一番しゃべっているのはワイドショーの司会者だ

「ハイバラさん・・・ファッション誌好きですね・・・」

「そうね・・・」

いくら話をふっても哀が乗って来ないので・・・
フリーザ様はいつしか考えるのをやめた

昼・・・
先ほどの会話を最後に2人は一切の言葉を交わしていない
果汁１００％ジュースの底に溜まった沈殿物の様に
静かに・・・重く・・・
沈黙がその場を支配した

ぐうぅぅぅ・・・

しかし沈黙はかき回された・・・間抜けな音一つで・・・

「クス・・・・・・」

先ほどから周りの一切に対して興味を払わなかった哀が笑みを漏らした
そしてファッション誌を閉じるとフリーザ様を見た

「お腹空いたの？」

「もうお昼ですからね・・・何笑ってるんですか？」

哀の笑みに眉をひそめつつ・・・フリーザ様は自分のお腹の中心辺りをさすった
胃袋が強欲に食を求めて唸りを上げている

何てわがままで自分勝手な奴だ・・・フリーザ様は自分のことは棚に上げて胃袋を睨みつけた

ぐうぅぅぅ・・・

また胃袋が唸る

・・・しかしフリーザ様のそれとはどうも声色が違うようだ

フリーザ様は哀を見た・・・顔を赤くしてばつが悪そうにしている

「ほっほっほ・・・何ですか?今の下品な音は?どこからしたんですかねぇ・・・ハイバラさん?」

ここぞとばかりに畳み掛けるフリーザ様

「あら・・・フリーザ様のもの程のことはないわよ」

「フフン・・・謙遜しなくても良いんですよ?」

ぐうううぅぅぅぅぅぅ・・・

睨み合いをしているところで2人の胃袋が同時に怒鳴り声を上げた

余計な争いをしたことで余計にお腹が減った様だ

2人は怒り狂う胃袋をなだめると昼食をとることにした

「ところでハイバラさん・・・今日のランチは何ですか?」

フリーザ様が聞いた・・・

そういえばこれと言って昼食を準備している訳では無い

そうするとこれから適当に作ることになるのだろうが

・・・何故だか面倒臭い2人がそこにはいた

「どこかに食べに行きますか・・・」

しかし外を見ると・・・雨
外には出たくない
かと言って家の中で何かをするのも面倒臭い
お昼はいらない・・・と思うも胃袋が黙っていない
2人は溜息をついた・・・

「仕方無い・・・」

そう言って哀が立ち上がった・・・
フリーザ様は「きっと料理をしてくれるのだろう」と思い黙って見送ったが
予想に反して哀はすぐにリビングに戻って来た

「憂堕インゼリーかカロリーメイド・・・どっちか上げるわ」

日曜日のお昼ご飯にしては寂しすぎるメニュー・・・
フリーザ様は仕方なくチラシと電話を手に取った

「もう良いですよ・・・ちょっと高いですけど出前取りましょう」

それからしばらくして・・・
ようやく2人の空腹は満たされた

午後・・・
相変わらず外からは雨音が聞こえてくる
フリーザ様と哀は何をするでもない時間を過ごしていた

昼食を終えて・・・お腹がいっぱいになると2人はほとんど動かなくなった
お腹が空いている時でさえあまり動こうとしなかったのに
その空腹が収まった今動く理由など2人にはなかった

「暇ね・・・」

哀がふと呟いた

「暇ですね・・・」

フリーザ様も呟いた
動く理由はない・・・でもずっとこうしているのもどうかと思う
動く理由が欲しい・・・

「何かやることないかしら・・・？」

「解毒剤の研究とやらをすれば良いじゃないですか・・・」

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・やだ」

しとしと・・・
相変わらず外からは雨音が聞こえてくる
解毒剤の研究・・・しなければ・・・でも・・・気が乗らない・・・

「何かやることないかしら・・・？」

やる気は無い・・・でもやることは欲しい・・・有ってもやらないが・・・
訳の分からない歯車に捕らわれてしまい・・・哀は結局動かない
フリーザ様を見ると・・・同じような状態に置かれているらしい

「ねぇ・・・フリーザ様・・・」

「何ですか？」

「ザーボンさんとドドリアさんってどんな人？」

「また唐突ですね・・・」

とりあえず口だけは動かしておこう・・・
そう思って哀は聞きたくも無かったが聞いてみた

「ザーボンさんとドドリアさんですか・・・あの2人は・・・」

「やっぱりいいわ・・・」

口を動かすのも面倒臭い・・・
フリーザ様も普段なら話を遮られたことに怒り出しそうだが今回はそれも無かった
フリーザ様もまた口を動かすのも面倒臭かったのだろう

「フリーザ様の戦闘力っていくつ？」

それでも哀はリトライしてみた

「この状態での最大戦闘力は５３万です・・・」

「それってすごいの・・・？」

「すごいですよ・・・」

「ふ～ん・・・」

「・・・・・・・・・すごいですよ・・・」

やっぱりダメだ・・・

「息をするのもメンドクセェ」とはこのことだ・・・

２人は会話を諦め再び沈黙の世界に突入した

哀は黙って外から聞こえてくる雑音を聞いていた

しかし・・・何だかさっきまでと聞こえてくる音が変わった気がする

面倒臭いが気になったので窓の外を見ると・・・

「あ・・・晴れてきた」

哀が空を見つめながら言った

雲を突き破る様に光の柱が何本も空から降りてくる

「ほっほっほ・・・やっと晴れましたか」

外が一気に明るさを増す

反射した光が体を照らす

どんどんと体が温まってくる

「さてと・・・私はポアロにでも行きますかね」

まるで冬眠から覚めた生き物の様にフリーザ様は急に元気を取り戻した

どうやら外に出たかったらしい・・・落ち着きの無いことだ

そんなフリーザ様を見ながらフッと微笑を浮かべると哀もまた立ち上がった

「私も行くわ・・・」

「解毒剤は良いんですか？」

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

自分の前にはやるべき事が山積みだ・・・

多分1日2日で終わる様なものではない

そしてそれは自分にとって義務だ・・・でも

「・・・・・・・・・やだ」

今日は良いや・・・

天気も良くなってきたし

日光に当ればきっと気持ち良いだろう

「ハイバラさん！行くなら早く行きましょう！」

玄関でフリーザ様が呼んでいる

哀は「はいはい」と適当に返事をしながら玄関に向う

「・・・っ！太陽が眩しいわね」

「もうすぐ夏ですからね」

奇抜なビジュアル系と赤みがかった茶髪の少女フリーザ様と灰原さんは歩き始めた

続く

１００．フリーザ様と灰原さん（後書き）

どんな豪華な話にしようか・・・
そう試行錯誤しているうちに気付きました
最近フリーザ様と灰原さんの２人の影が薄くなりつつあるなぁ・・・
と
キング・オブ・ザ・刑事に至っては脇役でした
ってことで今回はシンプルに
本当にフリーザ様と灰原さんをつき詰めてみました
そんな２人のふとした日常
改めて原点に立ち戻って三桁突入ってことです
ってことで次は１０１話
ダルメシアンです
１００話目はややしっとり（のつもり）だったので
１０１話からは再びパンクに加速をつけて行きたいですね

ってことで世界を我が手に！

・・・ところでダルメシアンとダルシムって似て非なるものですよ
ね

１０１．哀と謎の忍者軍団（一ノ巻）

平凡な日常
それは考えて見ればとても幸せなことである
食うに困らず・・・着る物があり・・・住む場所もしっかりしている・・・
家族や友達・・・恋人と一緒に時間を過ごし
時には一人で趣味に没頭する
淡々としているが何の不自由も無い・・・幸せがそこにある
しかし人々は悲しいかな淡々としたものが苦手である
それが例え「幸福」であったとしても例外ではない
人間は「飽きる」という罪を進んで犯し
「刺激」と言う神罰を好んで受け入れるドＭの衆であるのかも知れない

第１０１話　哀と謎の忍者軍団（一ノ巻）

それはある日の午前中・・・
フリーザ様と哀はポアロにやって来てくつろいでいた
休日のお昼前と言うこともあり客もほとんどおらず
マスターが溜息をつくほどポアロは暇だった

「マスターには悪いですけどこれぐらい空いていた方がゆっくり出来て良いですね」

「レポートもはかどるしね」

フリーザ様とダイガクセイが笑いながらそう言った
マスターは奥で苦笑いを浮かべながらまた溜息をついた

「でもこうも暇だと何か刺激が欲しくなっちゃいますね」

梓もレジから戻って来て話に加わって来る
遂にポアロにはフリーザ様達しかいなくなった

「あなたね・・・フリーザ様を目の前にしてそれを言う?」

哀が呆れたように言った
しかしそうは言っても梓の気持ちが分かってしまう自分もいた
最初の頃は刺激的だったフリーザ様も慣れてしまえばどうということもない
最近では刺激を求めてフリーザ様を挑発してしまうことすらある

「はぁ・・・刺激欲しいわね・・・」

「さっきと言ってる事が逆だよ・・・」

そしてみんなで溜息をついた

恐い恐いと思っているから見えないものが見える・・・と言うが
刺激もその類なのだろうか?
刺激を求める者達の前にそれは現れた

カランカラン・・・

ポアロに新たな客がやって来た
「いらっしゃいませ!」

しかしそう言おうとした梓の口からは何の言葉も出てこなかった
そこにいたのはコスプレか？・・・それとも時代劇の撮影か？
謎の黒装束を身にまとった団体客・・・
そう・・・まるで

「忍者・・・？」

全員が口をあんぐり開けてドアの方を見つめていた時だった
カッ！と音がして何かが壁に当たった
マスターが自分の横の壁を見ると手裏剣が刺さっていた
それを皮切りに忍者達は一斉に手裏剣を放って来る

「うわあああああ！！！」

刺激・・・こんなに注文してない！
皆物影に避難しながら同じ事を考えた

・・・・・・・

しかし・・・手裏剣の雨は突然止んだ
恐る恐る顔を出してみると忍者達は撃退されていた
そして一人の忍者がフリーザ様にねじ伏せられているのが見える

「見て下さいよ！忍者捕まえましたよ～！ねぇハイバラさんウチで飼いましょうよ」

「飼うわけないでしょ！」

ツッコミを入れつつも哀は忍者に質問してみた

「で・・・何が目的な訳？」

良くもまぁ白昼堂々・・・
しかし哀が聞いても忍者は口を閉ざしてそっぽを向いてしまう
仕方なく哀はポケットからカプセルを取り出した

「別に答えなくても良いけど・・・この『何だか大変なことになる薬』を飲ませるわよ？」

「わ・・・分かった！」

強引にカプセルを口に入れようとすると忍者はやっと口を開いた

「我々の目的は・・・『シェリー』お前だ・・・」

「シェリー」と言う単語に哀はハッとした・・・
しかしフリーザ様をはじめ哀以外は「何のこっちゃ？」と首を傾げるするとその隙に忍者は腕の関節を外してフリーザ様の手から逃れ持っていた小刀で自分の喉を突き刺してしまった

「うひゃあああ！これからお昼時で混むのに～・・・掃除しなきゃ！」

「いや・・・マスター・・・それより警察ですよ」

ドタバタし始めたマスター達・・・
その様子を尻目に哀は強張った表情のままポアロを飛び出し駆け出してしまった

「あ・・・ハイバラさん！どこ行くんですか！？」

これは面白くなりそうだ・・・
そんな事を考えながらフリーザ様も哀の背中を追いかけてポアロを出て行った

「ちょ・・・ちょっと!?お勘定～!」

「マスター!そんなことより警察ですよ!」

それからしばらくして・・・一人の忍者がビルの間を縫って仲間の元へ戻ってきた
息も絶え絶え・・・何か恐ろしい目にでもあったのか顔は引きつっている
仲間に作戦失敗を告げたその忍者はそんな様子だったので気付くことが出来なかった
自分を追跡する者の存在に・・・

「やっと奴らを見つけたぜ・・・それにしても本当に志保を狙ってやがったか」

追跡者ウォッカは数日前の事を思い出した

「闇鍋一族・・・ですかい?」

自分達の組織と敵対する謎の忍者軍団・・・
その名前を突然聞いてウォッカは目の前の男を見た

「あぁ・・・どういう訳かシェリーを狙っているらしい・・・」

志保を・・・？
ウォッカは拳を固く握り締めた

「どうかしたか？」

「え？あ・・・いえ・・・何でも・・・」

急にあたふたするウォッカを不審に思いつつもジンは話を進めた

「お前はとりあえず闇鍋一族を探って来い・・・うまく行けば奴らと裏切り者を一網打尽だ」

そう言ってジンはニヤリと笑うと目の前のグラスに入った酒を一気に飲み干した
その様子を見ながらウォッカは黙って立ち上がった
闇鍋一族はどうなろうと知った事ではないが志保が狙われているとは・・・
どうしたものか・・・

「おいウォッカ・・・」

部屋を出ようとしたところでいきなり呼び止められウォッカはビクッと肩を揺らした
そんなウォッカにジンは更に声を掛けてくる

「お前・・・まさかあの女に惚れてねぇだろうな？」

某国のそれより的確なピンポイント爆撃・・・
ウォッカは冷汗を必死に堪えながらジンの方を向いた

「嫌だなぁアニキ・・・俺は長澤まさみとか・・・もっと清純で明るいのが好きなんですぜ？」

「ふん・・・あんな根暗ネズミはお好みじゃないってか？もう良い・・・行け」

うぅ・・・ごめん志保・・・

ウォッカは泣きながら部屋を後にした

その様子に若干眉をひそめつつもジンは空のグラスに酒を注いだ

「ウォッカめ・・・まさみちゃんは俺の嫁だ・・・」

そんなこんなで・・・ウォッカはここ何日か闇鍋一族のことを探っていたのだ

そして先ほど遂に発見し追跡して来たと言うわけである

「しかし奴ら・・・志保をさらってどうするつもりだ？」

もう少し静観してみるか・・・

話を終え散り散りに飛んで行く忍者の一人をウォッカは再び追跡し始めた

その頃・・・

フリーザ様と哀は米花駅のホームにいた

その手には４桁の金額が書かれた切符が握られている

あの忍者達は哀の正体を知っていた・・・

一刻も早く・・・少しでも遠くへ行かなくては・・・

「ほっほっほ！電車で遠くへ・・・ワクワクしますね！」

呑気にはしゃぐフリーザ様を睨みつけると
ちょうどホームに電車がやって来た
哀は無言でその中に体を滑り込ませると適当な席に座った
プシュー・・・とドアが閉まり電車が動き始める

「ハイバラさん・・・これからどこへ行くんですか？」

「遠くよ・・・どこでも良いから遠くへ・・・」

「いや・・・目的地はハッキリしている・・・我々のアジトだ！」

突然声を掛けられたので哀がハッと顔を上げると
目の前にはサラリーマン風の男がニヤニヤ笑いながら立っていた

「もう逃がさんぞ・・・シェリー！」

男がそう言うとその車両に乗っていた客が全員変装を解き
黒装束の忍者軍団へと早変わりした

「・・・別働隊！」

「おやおや・・・さっきの人達ですね」

全く動じることなく笑っているフリーザ様の横で哀は身構えた
また手裏剣が飛んでくる！
しかし忍者はそんな哀を嘲笑うように言った

「殺しはしないさ・・・言っただろ?目的地は我々のアジトだと・・・着いて来てもらうぞ!」

そう言って哀の腕を掴む忍者
そのまま連れて行かれるかと思った哀だったが次の瞬間もう一方の腕を掴まれた
見るとフリーザ様が掴んでいる

「ちょっとちょっと!ハイバラさんにはお財布預けてるんですから・・・勝手に連れてっちゃ困りますよ!」

「な・・・何だ貴様!邪魔をするな!」

そう言って互いに哀の引っ張り合いを始めた
双方「渡してたまるか!」と両側からぐいぐい引っ張るのだから哀はたまったものじゃない
体の真ん中から引き裂かれるのではないか?と思うほどの激痛が走る

「痛たたたたたたたた!ちょっと本当に・・・痛いからぁあああ!放せ!ぶち殺すぞてめぇら!」

涙目でわめき散らしているとフリーザ様がパッと手を放した
忍者と哀は突然のことでバランスを崩し床に倒れた

「ふ・・・ははは・・・俺の勝ちだな」

そう言って忍者が哀を連れ去ろうとした時だった

「いえ・・・私の勝ちですよ・・・なぜなら痛がっているハイバラ

さんの手を放しましたからね」

「な・・・何だと?」

「しかしあなたはハイバラさんの痛みも考えずに引っ張った・・・つまり!」

大岡裁き・・・そう言うことか!

忍者はしまったと言う風な顔をしてその場に崩れ落ちた

「俺としたことが!何と言う失態だ!」

がっくりうな垂れて己の愚行を恥じる忍者

その隙を哀は見逃さなかった

パッと忍者の腕を振り解くと電車の窓を開けた

「フリーザ様!飛び降りるわよ!」

「おやおや・・・ワイルドですね」

そしてフリーザ様は哀を掴むと線路わきの土手に向って飛び降りた

「し・・・しまったぁ!」

ターゲットを逃し慌てふためく忍者達を乗せた電車は走り去って行く

それを見送ると哀とフリーザ様はその場を離れようと土手を歩き始めた

続く

１０１．哀と謎の忍者軍団（一ノ巻）（後書き）

てなわけで１０１話です
おまけはしばらくお休みです
１０１話からは余計な物を取り去って行こうかなぁ・・・と思いまして
まぁ別に無くすわけじゃ無いですけど
本編にもっと重きを置きたいな・・・と
まぁ私は気まぐれですからまたいつどうなるともわかりませんけど
１００話全部見てきた人は分かると思いますが結構いろいろ好き勝手やってます＾＾；
何て一貫性のない・・・まぁ良いか

地球万歳！

そんなこんなのダルメシアンなのです

１０２．哀と謎の忍者軍団（二ノ巻）

第１０２話　哀と謎の忍者軍団（二ノ巻）

いつまでもここにいるわけには行かない・・・
哀は線路沿いの道をやや急ぎ気味に歩き始めた

ビュッ！

突然風が吹いた
ものすごい向かい風・・・
まるで哀の行く手を阻もうとしているかの様だ
何だか・・・痛い・・・

「痛っ・・・！」

・・・本当に痛い？

ビュッ！

先ほどから何度も哀の体に突風が当たってくる
・・・と言うよりこれは・・・風に殴られている？

「きゃあああ！！！」

耐え切れず・・・遂に哀は吹っ飛ばされた
小さな体は数メートルほど自由を奪われたかと思うと地面に叩きつけられた

「は～はっはっは！ホームランですねぇ」

「・・・・・・～っ！」

痛みに悶えているとフリーザ様の笑い声が聞こえた・・・ムカツク
しかし今はそれ所ではない
あの風からは明らかに何らかの悪意を感じる
そして今哀に悪意を持って接してくる者と言ったら・・・

「いるんでしょ？忍者のお仲間さん！」

哀が叫ぶと・・・どこに隠れていたのか？
目の前に突然二人組の忍者が現れた

「ほぅ・・・二人だけと言うことはアレですか？中ボスですか？」

「中ボスって・・・あなたね・・・」

フリーザ様が呑気なことを言う・・・
その言葉を聞くと片方の忍者がフッと笑った

「中ボスか・・・まぁあながち間違ってはいないな・・・」

そしてそう言うと二人の忍者は覆面を取ってその顔を露にした
まだ１０代くらいと思われる若い男と端正な顔立ちをした白人系の男だ

「俺は闇鍋四天王の一人・・・風太（ふうた）」

「同じくエレキテル・・・カナダから来まシータ！ニポンとっても良い所ネ！」

「シェリーは我々が貰い受ける」

そう言って二人は哀の方に向って走り出した
忍者と言うだけあって恐ろしく速い・・・
哀はとにかく逃げようと全速力で駆け出すが
次の瞬間にはまたあの風によって自由を奪われてしまった

「この俺の風の忍術からは逃れられれん・・・」

そう言って風太が深く息を吸うと
哀の体はズルズルと風太の方に引き寄せられ始めた
まずい・・・このままでは捕まる！
闇鍋一族は組織にいた時から良く聞いていた名前・・・そんな連中に捕まる訳にはいかない

「何してるのよフリーザ様！黙って見てないでよ！」

哀は仕方なくフリーザ様に助けを求めた
しかしフリーザ様はどこから出したのかビデオカメラを構えて笑っている

「・・・・・何してるの？」

「ビックリ映像大賞に投稿しようと思いまして」

「するな！・・・良いからどうにかしてちょうだい・・・ポアロ奢ってあげるから」

するとフリーザ様はやれやれと溜息をつくと
ビデオカメラをしまって風太の方に向って歩きだした

「おいレッサーパンダ・・・ちょっと二本足で立てるからって調子に乗るなよ？」

「な・・・てめぇ今何て言いやがった！」

風太のこめかみに青筋が浮き出る
それを見たエレキテルはふぅ・・・と呆れたように溜息をついてフリーザ様を見た

「Ｏｈ・・・言ってしまいまシータ・・・フータの一番気にしていることを・・・」

にらみ合うフリーザ様と風太・・・
その様子を固唾を飲んで見守っていると哀の体は突然自由になった
風太が術を解いたのだ
怒りで血走った風太の目にはフリーザ様しか映っていなかった

「俺をレッサー呼ばわりした奴は生かしておかん！」

風太は先ほど哀に放ったそれより数十倍は強い風の塊をフリーザ様に叩きつける
しかしフリーザ様は涼しげな顔をしてそのままの場所に立っていた

「涼しい風をどうも・・・これはお礼です」

そう言ったかと思うとフリーザ様は突如姿を消した

どこに行ったのか?と探す風太・・・だが突然背後から恐ろしい殺気を感じて振り返ると
そこには怪しい笑みを浮かべたフリーザ様がいた

「さぁ・・・眠りなさ～い!」

コツン・・・

フリーザ様は人差し指で風太のおでこを軽く小突いた
すると風太の体は糸が切れてしまった操り人形の様に地面に崩れ落ちた

「ホワッツ!?」

突然動かなくなった相棒に駆け寄るエレキテル
風太は完全に失神している・・・

「NO!何と言うことでショー!闇鍋シテンノーがこんな・・・シンジラレナーイ!」

ヒルマン監督風に嘆きつつエレキテルは風太に向って電撃の様なものを放った
すると風太の体は力無く起き上がり・・・何処かへ行ってしまった
風太の意識を他所に勝手に走り始めた

「覚えていろデース!この恨み・・・ハレ晴レユカイでおくべきかデース!」

めちゃくちゃな日本語で捨て台詞を吐くと
大量の煙幕を放ってエレキテルと風太は去って行った・・・

「・・・・・あれどこの芸人ですか？」

「・・・・・・さぁ？」

フリーザ様と哀が唖然としながら二人の刺客を見送っていた頃・・・
米花町の一角でウォッカは追い詰められていた
流石に相手も素人集団と言う訳ではない・・・ウォッカの追跡にいつまでも気付かない訳がなかった

「ふん・・・ネズミが！丸焼きにしてやるわ！」

立派な髭を蓄えた老忍者は不適な笑みを浮かべると手から火の粉を撒き散らした
それがパラパラ落ちたかと思うとウォッカの周りは一瞬で火の海になった

「うおぉっ・・・！」

慌てて火の弱い所を探して逃げる・・・
とんでもない奴に見つかってしまったものだ
逃げながらウォッカは己の不用意さを呪った

「逃がさんぞ・・・若造め」

殺そうと思えばすぐに殺せる・・・
しかし老忍者は敢えてそれをしない
ジワジワと追い詰めてじっくり恐怖を味わわせてから料理する・・・
残酷な表情で・・・老忍者は遂にウォッカを使われていない倉庫に

追い詰めた

「ちくしょう・・・こうなったらジンの兄貴に・・・」

しかし携帯電話のボタンをいくら押しても反応がない・・・
先ほどの火の粉で壊れてしまったらしい
ちっ・・・と舌打ちをすると倉庫の入り口を睨んで銃を構えた
来るなら来い！
気を張り詰めていつでも引き金を引ける様備えた時だった

「そんなに睨んだら扉が可哀想じゃぞ？」

しまった・・・後を取られた！
そう思って恐る恐る振り返ると・・・上の方にある窓の所で老忍者が笑っていた
しかし気付いた時にはもう遅かった
周りを見るとウォッカは完全に炎に囲まれてしまっていた・・・

「王手じゃ・・・」

「くそ・・・！」

銃を構える・・・しかしその銃にはすでにメラメラと炎が灯されていた
まずい！と咄嗟に銃を捨てた先でウォッカの銃はパンパンと音をたてて破裂した・・・

「安心せい・・・直に楽になる」

そう言うと老忍者は野球ボール大の火の球を手の平に出した

その揺らめく炎がウォッカに悟らせた・・・あれを食らったらまずい・・・

「これで終わりじゃ！」

人間追い詰められると頭が冴えてくる・・・
確実にウォッカの命を燃やそうと放たれた火の球は・・・しかしウォッカに届く前に爆発した
ウォッカが咄嗟に投げたライターの燃料に引火したのである
しかもその爆風でウォッカは運良く炎の地獄から弾き出された

「ちぃ！しぶといネズミめ！」

爆炎が収まるとウォッカの姿が無くなっていた・・・
しくじったか？しかしあの炎・・・無事で済むはずがない
まだ近くにいるネズミを逃がさぬよう老忍者は無線を取り出した

「かすみ・・・サングラスの男を探し出して仕留めるのじゃ」

『・・・お任せ下さいおじい様』

・・・・・・

「はぁはぁ・・・くそ・・・」

何とか倉庫から脱出したウォッカだったがもはや満身創痍だった
全身火傷だらけ・・・
老忍者から逃げるためにずっと走っていたのでその疲れも一気に襲って来た

「こんな所で・・・くたばるわけには・・・」

息も絶え絶え通りまで這い出て来たは良いが・・・目がかすむ
脚に力が入らずウォッカはそのまま前のめりに倒れた
こうしている間にも追っ手は迫ってきている・・・
倒れている場合じゃない・・・場合じゃないが・・・
どうにも立てそうにない

ポンポン・・・

不意に肩を叩かれた
追っ手・・・ここまでか・・・
ウォッカの頭を今までの思い出が走馬灯の様に駆け巡った

・・・・・・

うわぁ！絶対地獄行きだ！
もっと良い事しとけばよかったぁ～・・・

「大丈夫ですか？」

・・・それは予期していなかった言葉だった
てっきり追っ手だと思っていたが・・・顔を上げるとそこには二十歳前後の貧相な男が立っていた

「すごい怪我じゃないですか！？び・・・病院！」

男は慌てて救急車を呼ぼうとしている
しかしウォッカは慌ててその手を止めた

「ダメだ！・・・俺は今追われている・・・病院で足止めを食らっている余裕は無い」

訳ありなんだ・・・そう思って男は困り果ててしまった・・・

「と・・・とりあえず・・・行きつけの喫茶店があるのでそこへ」

そう言って男はウォッカを担ぎ上げると歩きだした

ウォッカは嫌がって抵抗しようとしたがそんな元気も残っていなかった・・・

そして数分後・・・二人は「ポアロ」と書かれた喫茶店にやって来たのだった

続く

１０２．哀と謎の忍者軍団（二ノ巻）（後書き）

忍者第二話です
忍者は何人じゃ！
四人じゃ！
・・・・・・
残念ながら他に言うことが思い付きません
ってことで今回はこの位で勘弁してやる

次はぶっ潰す！何を潰すかはヒ・ミ・ツ！

Ａ　ｓｅｃｒｅｔ　ｍａｋｅｓ　ａ　ｗｏｍａｎ　ｗｏｍａｎ．．．
でも・・・女じゃない・・・
そんな感じの１０３話になる予定です

１０３．哀と謎の忍者軍団（三ノ巻）

第１０３話　哀と謎の忍者軍団（三ノ巻）

「うぅ・・・何で・・・・」

警察も帰ってしまいガランとした店内・・・
壊れた備品の整理を終えたマスターは一人嘆いた

「まぁ長くお店やってればこんなこともありますよ・・・
元気出して明日からまたいつものポアロってことで良いじゃないですか」

「忍者が攻めて来る喫茶店なんて聞いた事ないよ・・・」

マスターの大きな溜息が静かな店内に響いた
梓も気まずくなって俯いてしまった

カランカラン・・・

するといつもの鐘の音が鳴った
その音を聞くと梓は申し訳なさそうな顔を扉のほうに向けた

「すみません・・・今日は臨時休業で・・・・ってあれ？」

帰ってもらおうとした梓だったが
扉の所に立っている人物を見て素っ頓狂な声を上げた

「すみません・・・休業は分かってるんだけどちょっと緊急で・・・」

それはいつもポアロに来てくれる常連さん
レポート魔ことダイガクセイであった
しかも火傷だらけの柄の悪い男を連れている・・・明らかにただ事ではない

「とにかく中へ・・・その人の手当てしなきゃ！」

梓はウォッカとダイガクセイを店の奥にあるテーブル席に連れて行きそして店に備えてあった非常時用の救急セットで手当てした

「これで・・・良し！出来ましたよ」

「ありがとよ」

ウォッカは自分の体にしっかり巻かれた包帯を確認するとそそくさと上着を来た
まだあちこち痛むし頭もフラフラするがそんな事を気にしている時ではない

「だが悪ぃな・・・じっくり礼をしてる暇はないんだ」

ウォッカはそういうと立ち上がった
しかし2本の脚は彼の体重を支えきることが出来なかった
崩れそうになるウォッカの体を梓は何とか受け止め再び椅子に座らせた

「ダメですよ・・・でも何をそんなに急いでいるんです？」

「追われてるらしいよ」

「そうなんですか!?すごーい!ドラマみた~い!」

梓がキャピキャピと騒いでいる
時折梓はこういう場違いな反応を示す・・・
マスターは咳払いをして梓を黙らせると溜息と一緒に口を開いた

「最近物騒だね・・・店に忍者は攻めて来るし・・・」

「何?お前らも忍者に襲われたのか?」

ウォッカがハッとした様にマスターの顔を見た
とすると・・・この店は志保と何か関わりがあるのだろうか?
ウォッカはマスターの瞳の奥にガラスのように繊細で儚く美しい彼女の姿を見た

「・・・何ですか?や・・・やりませんよ?」

そのウォッカの視線に何を勘違いしたのかマスターは顔を赤くして照れた

カランカラン・・・

再びポアロのドアが開く
今度こそ丁重にお断りしようと梓は来客の方に向った
ウォッカ達も扉の方を見ると着物姿が良く似合う和服美人が立っている

「すみません・・・今日は臨時休業なんです」

梓が軽く頭を下げながら言った
しかし女は帰る様子もなく・・・それどころか店の奥を見て妖艶な笑みを浮かべた

「知ってますわ・・・でも私はそちらのサングラスの方に用事がありますの」

次の瞬間ウォッカは地べたに伏せていた
ウォッカが座っていた場所では鋭く長い針が鈍い光を放っている

「あら・・・良くかわせましたね・・・」

「へっ・・・今俺に用事があるなんて・・・そういうことだろ?」

今日は一体なんなのだろう?
忍者が来る喫茶ポアロってことで宣伝した方が良いのだろうか?
いっそ名前も「喫茶ハットリくん」に変えて・・・

「梓ちゃん・・・しっかりして!」

思考が物凄い方向へ行ってしまった梓をダイガクセイが何とか連れ戻す

「ふふ・・・覚悟はよろしいですこと?」

そう言って女は着物から蒸気のようなものを大量に噴射した
すると3秒もしないうちにポアロの店内は霧が掛かったようにぼんやりと曇ってしまった

「野郎！」

立ち上がろうとしたウォッカだったが脚が言う事を聞かない
そんな様子を見かねた梓はダイガクセイに小声で話かけた

「ダイガクセイさん・・・私とマスターがあの女の人を引きつけます・・・
その隙に裏口からサングラスさんを連れて逃げて下さい」

「いや・・・でも・・・」

「フリーザ様にこの事を知らせて下さい」

そう言うと梓は女と対峙した・・・
見るとマスターもフライパンを握り締めて刀の様に構えている
ダイガクセイは後ろ髪を引かれる思いがしたが自分がいてもどうにもならないと意を決した

「大人しくしていればいいものを・・・残念ですわ」

「アチャッーッ！何を気どっているねーッ！
ポアロの仇！このフライパンをくらってあの世まで飛んでいくねーッ！」

そう叫ぶとマスターはフライパンを振りかぶって女に突進し
そしてその頭目掛けて思いっきりフライパンを振り下ろした
しかしフライパンは女をすり抜けて空を切ってしまう

「ふふふ・・・こっちよ」

いつの間にか女は背後に移動している・・・
マスターはまたフライパンを振り回すが再び女の体を通り抜けてしまう

「アイアムブアカーオ！」

梓もムエタイの様な構えで加勢する
ミドル・・・ミドル・・・と蹴りを女の腹部に叩き込む
すると女は打って変わって苦しそうな声を上げた

「待って・・・！違う・・・」

女は何かを訴えるように梓を見たが梓は全くお構いなし
トドメにと強烈な前蹴りを顔面に突き刺した
意識を失ったのか女の体は前のめりに崩れ落ちた

「やったー！」

しかし良く見ると梓の前に転がっていたのは女ではなかった
そこにいたのは完全に伸びて曙ダウンをしているマスターだった

「きゃー！マスター！どどど・・・どういうこと？」

「ふふ・・・おやすみなさい」

後から女の声・・・
振り返ろうとした次の瞬間梓の首筋を手刀が捕らえた
すると梓もマスターの上に重なるように気絶してしまった

「さて・・・」

こんな雑魚はどうでも良い・・・と女は店内を見回す
先ほどまではもう二人男がいたと思ったが・・・
物影を探して見るが見当たらない
裏口から逃げてしまった様だ・・・

「まぁ良いですわ・・・」

女はウォッカ達を追いかけようとはしなかった
その代わり懐から笛を取り出すとそれを吹いた
するとどこからともなく部下と思われる忍者が数人現れた

「ふふ・・・シェリーさんに素敵な手土産が出来ましたわ」

・・・それから数時間後
何も知らない哀とフリーザ様はタクシーに乗っていた
もうそろそろ東京を出ようかと言う所である

「ハイバラさん・・・お腹空きましたよ」

そう言えば何も食べていない・・・
でも今は食べている場合では無いのだ

「まったくこのフリーザ様に空腹を味わわせるとは・・・」

むしろ食欲がわかない・・・
いろいろあり過ぎて頭がごっちゃになる

「あ！運転手さん！そこのドライブスルーに入るんですよ！」

「入ったら殺すわよ？運転手さん」

その上フリーザ様のお守と来たものだ・・・
シートベルトで運転手の首を絞めながら哀は溜息をついた
シートに座りなおして窓の外を見ると・・・もやもやと霧が掛かって来ている
嫌な感じだ・・・

パン！

突然大きな音がした
タクシーがどんどん減速して路肩に停車する
運転手は困ったような顔をして車の外に出て行った
パンクだろうか？・・・哀はまた溜息をつく
仕方無いので外の空気でも吸おうと哀は車を降りた
しかしそこにはうんざりしたくなる光景が広がっていた

「おや・・・梓さんにマスターさんですね」

続けて降りてきたフリーザ様が呟く
二人の目の前には着物姿の女と忍者達・・・そして拘束された梓とマスターがいた

「シェリーさん・・・私達と来てもらいますわよ」

梓の首に小刀を当てながら女が言った・・・
人質という訳か・・・卑怯な話だ
哀はやれやれと言った表情でフリーザ様を見た

「・・・お腹が空きました」

「分かったわよ・・・後でファミレスにでも寄るから何とかしてちょうだい」

哀がそう言うとフリーザ様はいつもの怪しい笑顔で女の方を向いた
そして風太にやった様に目にも止まらぬスピードで女の背後に回ると
軽くその頭を殴りつけた・・・と思われたがフリーザ様の腕は虚しく空振っていた

「なんだと!?」

珍しくフリーザ様が動揺している・・・

「ふふふ・・・それは幻ですわ」

女の声が響いたかと思うと至る所に梓とそれに小刀を突き付ける女の姿が現れた
さすがに哀もフリーザ様も声が出ずに口をパクパクさせた

「次攻撃したら本当にこの女を殺しますわよ?それとも無数の幻影の中から一発で本物(わたくし)を見つけます?」

フリーザ様は凄まじい戦闘力を持ってはいるがこう言った幻術の類は苦手である
しかも普段ならまとめて吹っ飛ばしてしまうのだが今は梓を人質に捕られているのでそうも行かない
だからと言って一発で当てる自信もない・・・どうしたものか?

「当ててみろよ・・・」

「き・・・貴様は！」

この男は本当にいつもどこから現れるのだろうか？
テツは鼻で笑いながらフリーザ様を挑発した

「あ・・・当ててやるさ！」

完全に頭に血が上ったフリーザ様・・・エネルギー波を放とうと人差し指を立てた
しかしその手を哀が制止する

「もう良いわ・・・私が行けば済む話なのよ・・・」

「何言ってるんですか？ハイバラさん！？」

フリーザ様は哀を見た・・・どうも本気らしい・・・

「賢明なご判断ですわ・・・何も捕って食おうって訳じゃないんですから」

近くまで来た哀をすかさず忍者達が拘束する
それを確認すると女はさらに蒸気を撒き散らし辺りの霧を濃くした

「それではごきげんよう・・・」

そう言って妖しく笑うと女と忍者軍団は真っ白な霧の中へ姿を消した
フリーザ様は怒りに任せて追いかけたが霧が晴れるとそこにはもう何も残されていなかった

「くそ・・・！ハイバラさんからお財布抜き取るの忘れました・・・！」

「星は壊せても・・・たった一つの財布は抜き取れない様だな」

続く

１０３．哀と謎の忍者軍団（三ノ巻）（後書き）

哀がさらわれました
良いですね・・・羨ましい！
さらう価値があるってことですからね
私もさらわれる人間になりたいです
・・・・・・
今「無理」って言った人
呪マース！
藁人形で呪マース！
・・・藁人形作るのめんどくせぇな
ってことで呪いません＾＾；
・・・呪いは面倒臭いので貞子たんに全て任せます
放任です

さらば人類！

ってことで１０４話に続く？みたいな？感じ？
ああっ・・・やめて・・・藁人形作らないで・・・

１０４．哀と謎の忍者軍団（四ノ巻）

第１０４話　哀と謎の忍者軍団

「待っていましたぞシェリー殿・・・私は闇鍋一族の長を務める闇鍋下呂丸（やみなべげろまる）です」

あれから数時間後・・・
哀は和風の内装がいやに落ち着く妙な施設に連れて来られていた
どうも闇鍋一族のアジトらしい
四方を忍者に取り囲まれながら一番奥の部屋に通されると
そこには袴姿の凛々しい男が待っていた

「素敵なお誘いをどうも・・・でもこんなんじゃあ女の子にモテないわよ？」

哀がいつものポーカーフェイスで言うと
男は「一本取られた」といった表情でフッと笑った

「我々はどうしても貴殿の力が必要だったので・・・
悪いとは思いましたがが実力行使をさせてもらいました」

「私も人気ものね・・・」

哀は肩をすくめて溜息をついた

「まあまあ・・・とりあえず話を聞いて下さい」

紳士的な笑顔を作ると下呂丸は「こちらへ・・・」と言って哀を部屋から連れ出した

長い廊下を抜け・・・エレベーターと思しき木製のカラクリ機械に乗ると

そこは忍者屋敷には似つかわぬコンクリート壁の研究施設であった

哀はとりあえずその施設内を見て回る

決して広くはないが驚くほど立派な最新の設備が揃えられている

「どうです？お気に召されましたか？」

「そうね・・・すばらしい施設の様だけど・・・忍者が何に使うのよ？」

哀が聞くと下呂丸は相変わらずの笑顔で一呼吸置き・・・そして話し始めた

「まずは我々の目的からお話しましょう・・・」

話は今から４００年ほど前に遡る

当時日本は徳川家康が征夷大将軍に就き今で言う江戸時代が幕を開けていた

豊臣家をも滅ぼし・・・名実共に日本の支配者となった家康

しかし彼はそれだけでは飽き足らなかった

彼は日本をその手に治めたことで気づいてしまったのである・・・

日本の狭さに

世界の中の小さな島国の支配者・・・そんな地位を彼の野心は許さなかった

世界統一・・・家康の更なる野望が始まった

そこで家康は極秘に準備を始めた
家康は本当に信頼できる部下のみを集め超非公式「征海征陸所（せいかいせいりくどころ）」を設け
世界統一のための作戦・戦術考案・・・武器製造・・・人材育成・・・物資確保に当たらせた
家康の死後も歴代将軍達のもと計画は進行され
ついに最強の戦闘術「天神如術（てんしんにょじゅつ）」を完成させるに至った
しかし天神如術の習得には命の危険すら伴うためなかなか使い手が増えず
そうこうしているうちに１８５３年　黒船来航・・・
外国の力を見せつけられ恐怖した幕府の方針転換に伴い世界統一計画は頓挫
天神如術も使い手諸共闇に葬られた・・・

「ほとんどの使い手達が自害するか処刑される中・・・天神如術を極めた少数の者達は生き残りました
我々の祖先達です・・・彼らは闇鍋一族を名乗り歴史の裏で今に至るまで計画を進行し続けてきたのです」

「教科書には乗ってないビックリ情報ね・・・それで？何で私がそれに関わらなくちゃいけないのよ？」

「天神如術を使用するには『ある秘薬』が必要となります・・・
そして計画が表の世界に知れぬよう秘薬の薬師は一子相伝を保ってまいりました
しかし先代の薬師は秘薬の製法を伝承する前に急逝してしまい・・・
秘薬を作れる者がいなくなってしまったのです」

つまりこの忍者軍団は「秘薬」が無いとただの忍者軍団らしい・・・
そしておそらくその薬を哀に作れと言いたいのだろう

哀があれこれ考えていると下呂丸は一人の女性を連れて来た

「この者は秘薬の薬師となるはずだった者です・・・
9割は製法を伝承されているのですが残り1割がどうにも・・・彼女とこの施設を使って一つお願いします」

「嫌よ・・・なんで私が世界征服の片棒を担がなきゃいけないのよ？」

「・・・・・・ご協力頂けないのですか？」

当然である
もう自分の作った薬で人が死ぬのを見るのはごめんだ
哀は下呂丸を押しのけて出て行こうとした

「仕方ないですな・・・そんなに嫌なら無理強いは出来ませんし」

妙に諦めが良い・・・そう思ったのが間違いだった
下呂丸が合図すると哀の目の前に梓とマスターが連れて来られ
そして忍者達は刀を抜いてその切先を一斉に二人に向けた

「あぁ・・・本当に残念・・・残念すぎてこの者達を八つ裂きにしてしまうかも知れませんなぁ」

「やめて！」

哀が叫ぶと下呂丸は先ほどの紳士的なものとは打って変わって邪悪な笑みを浮かべた

「おや？どうされたのですかシェリー殿？我々は強制を好まない・・

・帰ってもよろしいのですよ？」

「分かったわ・・・協力するから二人を助けて・・・」

哀は下唇を噛みながら下呂丸の要求を呑んだ・・・

・・・・・・

その頃ダイガクセイとウォッカは必死に歩いていた

ダイガクセイは時折崩れそうになるウォッカの体を支えつつ

奇抜な格好のポアロ仲間の姿を探した・・・

「あぁ～もう！・・・フリーザ様どこへ行っちゃったんだろ」

阿笠邸は留守だったし・・・フリーザ様の暇つぶしスポットは全て当たった

しかしフリーザ様を見つけることは出来なかった

「うっ・・・」

ウォッカがまたよろめいた

ダイガクセイは今度はその体を支えきることが出来ず・・・二人して地面に倒れた

「おい・・・ダイガクセイ・・・俺を置いて・・・お前だけで逃げろ」

「ダメですよ・・・ここであなたを置いて行ったらマスターや梓ちゃんは何のために・・・」

そう言ってダイガクセイはウォッカを再び担ぎ上げるとフリーザ様を探して歩き始めた
本当にフリーザ様はどこへ行ってしまったのか？
ダイガクセイは必死にフリーザ様の行きそうな所を考えた

「ヒューヒュー！肩を組んでお散歩たぁ仲睦まじいなコラ！」

「ヤマジュンってか？俺達も混ぜろよこのバカップルが！」

いきなり二人組の不良が絡んできた
普段のダイガクセイならこんな二人・・・問題なく黙らせることが出来る
しかし皮肉なことに二人が揃った今は何も出来そうにない
だが今は不良にボコボコにされてやる余裕はない
ウォッカが怪我を負っている今戦えるのは自分だけ・・・
ダイガクセイは意を決して不良達の方へ歩み出した

「何だぁこの兄ちゃん？拳を握り締めてこっちに向って来やがった・・・」

「ひゃっは～！地獄に送ってやるぜ～！」

「う・・・うわっ！」

二人の不良が拳を繰り出す・・・
ダイガクセイは思わず身を屈めた

「あべし！」

「いってれぼ！」

しかし地面に這いつくばったのは不良達だった
何が起こったのか分からず大学生は顔を上げると回りをキョロキョロと見回した

「大丈夫ですかダイガクセイ？」

そこには見慣れたビジュアル系が立っていた

「フリーザ様・・・！どこ行っていたんですか～！」

ダイガクセイは半泣きでフリーザ様に纏わり付きながらこれまでの経緯を説明し
フリーザ様も梓とマスターが人質に捕られ哀も連れさらわれてしまった事を話した
とんでもないことになってしまったと嘆くダイガクセイ
しかし嘆いていても始まらない

「まぁとにかくマックにでも行きましょう・・・お腹が空いてしまいましたよ」

「フリーザ様・・・緊張感なさ過ぎだよ・・・」

「すまん・・・俺も腹が減った・・・」

三人はマックへ向った・・・

・・・・・・３０分後

フリーザ様達は占いの館「現命館」の前にいた
フリーザ様がダイガクセイとウォッカを連れて来たのである

「ここの占い師先生ならやつらのアジトを知っているはずです」

しかしダイガクセイとウォッカは顔をしかめた
そんな非現実的な方法でアジトを探しても見つかるわけがない・・・

「フリーザ様・・・真面目にして下さいよ・・・あとマック代払って下さい」

「まったくだぜ!こうしている間にも志保が・・・あとマック代払ってないのお前だけだぞ!」

「うるさいですよ二人とも!ここの占い師先生は私の御用達・・・舐めてもらっては困ります
あとマック代は・・・ハイバラさんがお財布持ってっちゃったんで後で請求して下さい」

「じゃあメガマックセットなんて頼まないでよ~!」

そうやって3人が館の前で騒いでいると・・・館の扉が開いてあの男が出て来た

「声がしたと思ったら・・・やっぱりフリーザ様か」

その顔を確認するとトロッタは黙って3人を中に招き入れた

「あれ?・・・今日はあの・・・赤みがかった茶髪の彼女は?」

「ハイバラさんなら拉致されましたよ」

それは難儀なことだ・・・
占いのための準備体操をしながらトロッタはフリーザ様達を見た
過去二回は茶髪の子ともう一人子供を連れて来ていた
しかし今日は・・・何だかパッとしない男に・・・それとモアイ像・・・

「占い師さんよぉ・・・何か今俺に対して失礼なこと考えなかったか？」

「・・・いえ全然」

ウォッカは占い師を睨みつつも考えていた
今この男が言ったこと・・・「赤みがかった茶髪の彼女」と言う言葉
そして自分と同じく忍者に襲われたポアロとフリーザ様・・・
どうやら連れ去られた「ハイバラさん」というのが志保と見て間違い無いだろう

「くそ・・・！今助けてやるからな志保・・・」

ウォッカが決意を新たにした所でトロッタの準備が終わった

「それじゃあハイバラさんの居所を突き止めるんですよ！」

フリーザ様がそう言うとトロッタは息を深く吸い混み精神を統一したそしていつものように暴れだした・・・

「・・・・・赤みがかっとるのぉ～・・・茶髪？いやそりゃ赤髪じゃ・・・

何じゃ・・・何否定しとんのじゃ！赤じゃ！赤・・・お前ボクシングなめとんのか！」

ニコニコしながら見守るフリーザ様の横でダイガクセイとウォッカは唖然としてしまった

・・・・・目の前に変質者がいるのだ

「フリーザ様・・・この人なんでガチン○ファイトクラブの竹○風なんですか？」

ダイガクセイがフリーザ様に疑問を投げかけたその時

トロッタは急に黙り込み・・・何かを掴むように手を握り締めた

「捕らえました・・・」

「よろしい・・・それではトロッタさ～ん！ハイバラさんの居場所を教えるんですよ！」

フリーザ様が聞くと・・・

トロッタは「手に取るように分かる」と言わんばかりに・・・実際手に取っている何かを探りながら口を開いた

続く

１０４．哀と謎の忍者軍団（四ノ巻）（後書き）

後2回くらいで終わります・・・
とりあえず今回は
「家康様・・・本当にごめんなさい」
祟られないように今度日光東照宮にでもお参りに行きたいと思います
でもなんだかんだで面倒臭がって行かなそう・・・
・・・・・きっといつか＾＾；
鳴きますから　鳴くまで待ってください！

Ｂｙホトトギス！

ってことで今日のバードはホトトギスです
次回をお楽しみにね！

・・・こんな締め方で良いんでしょうか？

１０５．哀と謎の忍者軍団（五ノ巻）

第１０５話　哀と謎の忍者軍団（五ノ巻）

「この辺りのはずですけどね・・・」

フリーザ様達は山奥に来ていた
トロッタが占いで指し示した場所は地図で言うとちょうどこの辺り・・・
しかし忍者のアジトらしきものは見当たらない

「ま・・・忍者だしな」

流石は「忍ぶ者」・・・一般人に見つける事など無理である
２名ほど一般人ではないが・・・

「仕方無いですね・・・ダイガクセイ!アレを・・・」

フリーザ様が手をパンパンと叩きながら言うと
ただ一人の「一般人」ダイガクセイは背負っていたリュックからその「アレ」なる物を取り出した

「パパラパッパパ～・・・！『グレート占いベアー』」

ダイガクセイが取り出したのは可愛らしいクマのヌイグルミであった
しかし名前が示している通りただのヌイグルミではなく
トロッタによりグレート占いパワーが込められたミラクルなヌイグルミなのである

「で・・・どうやって使うんだ？」

トロッタは「目的地に近付けば分かる」と行っていたが
パッと見はただのヌイグルミ・・・ウォッカは疑わしそうな視線を
グレート占いベアーに向けた

「以前にも占い師先生からアイテムを貰ったことがありましたが
その時のアイテムは目的のものに近付いたら砕け散りましたよ」

「じゃあ・・・このヌイグルミも・・・？」

「どこのホラー映画だよ・・・」

顔を青くしながら歩いていたそんな矢先・・・
グレート占いベアーはダイガクセイの腕をすり抜け地面に落下した
3人は砕け散るものと思い咄嗟に目を覆ったが
その予想は幸いにも裏切られる形となりグレート占いベアーは・・・
・・・・・二足歩行を始めた

「コッチダヨ！」

ヒョコヒョコと愛らしく歩みながら3人を誘導するベアー
トロッタもなかなかお茶目な事をしてくれるものだ・・・

「ハヤクハヤク！」

「ほら急ぎますよ！ヌイグルミさんが『おいでおいで』しています」

「どこのホラー映画だよ・・・」

・・・・・・

一方アジト内にある研究室では哀によって何度目かの実験が行われていた

こんなイカれた研究はまっぴらごめんだったが

実際に研究してみると・・・なるほど

確かに「世界統一」などと言うだけあってかなり興味深い薬であるようだ

そんな研究者としての好奇心も手伝い「秘薬」はもう間もなく完成しようとしていた

「どうですかシェリー殿・・・順調ですか？」

様子を見に下呂丸がやって来た

「えぇ順調よ・・・完成まであと一時間ってところかしら？

それより・・・完成させたら本当にあの二人を助けてくれるんでしょうね？」

「もちろんですとも！秘薬の秘密を知ってしまったあなたはともかくね・・・」

「そう言っておいて『やっぱり殺す』なんて無しよ？一応あなた達と接触しているわけだし・・・」

「疑り深いな～・・・大丈夫ですよ・・・秘薬さえ完成すればあとは一気に世界統一

我々の素性などすぐに全人類が知るところとなるのですから」

それを聞くと哀は数秒ほどジッと下呂丸を睨んでからクルッと振り返って再び試験管を見た

「まぁ今は信用するしかないわね・・・どの道研究を放棄すれば私達を殺す気でしょうから」

「そう言うことです」

下呂丸は妖しい笑みを浮かべると研究室を後にした

もうすぐ・・・もうすぐ秘薬が完成する

４００年もの長きに渡り進められて来た覇業・・・それがついに成就する時が来た

笑いが止まらない！

征服・・・征服・・・！自分はこの世代に生まれて本当に良かった

父も祖父も曽祖父も高祖父も・・・どいつもこいつも孫に孫にと譲ってきた至極の椅子

世界の中心の玉座にどっかりと腰を下ろすのは誰でもなく自分だ！

「報告します！」

部屋で一人そんなことを考えていると突然襖が開いた

一人の忍者が血相を変えて・・・何やら報告に来たようである

「どうした？」

「ハッ！何者かが館内に侵入した模様・・・現在交戦中です！」

もうすぐ秘薬が完成するという時に・・・

下呂丸は舌打ちをすると報告に来た忍者を見た

「四天王を迎撃に向わせろ・・・手加減するなと伝えておけ」

「ハッ！」

下呂丸は忍者を見送ると目をつぶって瞑想を始めた

・・・・・・

「ぐあぁっ！」

忍者達の体が宙を舞う
フリーザ様のデコピン攻撃によって額が割れてそこら中血まみれである

「ふむ・・・所詮この程度のものですか」

「おぉ・・・！すごいよフリーザ様！」

まったく息を切らすことなくフリーザ様は余裕の笑みを浮かべた

「こ・・・こいつ人間じゃねぇ・・・」

数に勝る忍者軍団ですら烏合の衆に過ぎない・・・
フリーザ様は忍者の言うとおり「人間じゃねぇ」ので仕方ないが・・・
次々と蹴散らされる仲間達を見て忍者達が怯えの色を見せ始めた

ビュウッ！

しかしその時だった
室内だと言うのにいきなり風が吹いたかと思うとその風に煽られる様に忍者達が突っ込んで来た
フリーザ様はそれを全て気合一つで弾き飛ばすと力無く地面に落下した忍者達を見た

「何ですか?いきなり元気になったりして・・・」

「敵わぬと見て特攻か・・・?」

不思議そうに見ていると再び突風が吹いた
しかし今度はただの突風ではない・・・服がスパスパと切り刻まれていく
ウォッカとダイガクセイに至っては皮膚を裂かれ血が噴き出している

「何事ですか?」

「俺だよ・・・」

言葉と同時に一人の忍者が小刀で斬りかかって来た
フリーザ様は親指と人差し指でそれを摘んで攻撃を阻止するとその忍者を見た
忍者は後方回転しながら体勢を整えると別の小刀を抜いて素早く構えた

「・・・何だ・・・レッサーパンダさんじゃないですか」

そこにいたのは額に大きめの絆創膏を貼った風太だった
しかし今度はフリーザ様の「レッサー」発言にも冷静な顔をしている

「何とでも言うが良いさ・・・俺は気付いたんだ
『レッサー呼ばわり』を怒るのではなく『レッサー呼ばわり』させないことが大事だと
そして今・・・俺は確実に『良い事』を言っている自信がある」

「野郎！」

澄ました感じで笑顔を作る風太に腹を立てたウォッカは懐から銃を取り出した
しかしウォッカが引き金を引いた瞬間　銃の先端はあらぬ方を向いてしまっていた
風によって手が動いてしまったのである
そしてそれと同時にウォッカの体は再び切り裂かれる

「ふん・・・どうだ？必殺のカマイタチは？」

そう言って風太はさらに風を強くした・・・
一つ・・・また一つとウォッカとダイガクセイの傷が増えていく
一つ一つは浅い傷だが・・・こう幾つもつけられると厄介だ

「くそ・・・！一旦退くか」

ウォッカがそう言うとダイガクセイと2人して一気に出口を目指した
しかし2人の目の前に突然炎の壁が立ち塞がった

「乗りこんでおいて退いてはいかんな・・・」

声がしたかと思うと炎の中から老忍者が現れた
その姿を見てウォッカの顔が一気に強張る

「てめぇは・・・！」

「くっくっく・・・闇鍋四天王が一人・・・紅蓮（ぐれん）
このわしの炎が貴様らを逃がしはせんぞ？
それにわしだけではない・・・かすみ！」

紅蓮が名前を呼ぶと・・・「ふふふ・・・」という女の笑い声と共に「霧」が広がり始めた
どうやら梓や哀をさらって行ったあの女もどこかに潜んでいるらしい・・・

「これで貴様らは逃げられん・・・ここが貴様らの墓場となるのじゃ」

体を切り刻むカマイタチ・・・退路を塞ぐ炎・・・視界を奪う霧・・・
直接ダメージは無いがやはり鬱陶しい・・・
フリーザ様は徐々に頭に血が上り始めた

「小癪な・・・このフリーザ様を舐めるなよ！」

怒りに任せてフリーザ様はエネルギー波を放った
・・・しかし手応えは感じられない
それどころか・・・

「うおっ！！！」

「あ・・・危ないよフリーザ様！もう少しで当たりそうだったよ・・・」

このままでは同士討ちもある・・・
打つ手打つ手を塞がれてフリーザ様のイライラは遂にＭＡＸに達した

「あぁ～もう！誰でも良いから何とかするんですよ！」

「イイヨ！ボクニマカセテ」

誰かの声がした・・・ダイガクセイでもウォッカでも忍者達のものでもない・・・
「誰のものか？」とキョロキョロしているとたちまち霧が消え視界がどんどんとハッキリして来た
そして霧が完全に晴れると・・・
そこには今にも襲い掛かろうとしている風太と紅蓮・・・そして謎の輝きを放つヌイグルミがその姿を現した

「グレートウラナイパワー！」

「何じゃ！？あのヌイグルミは・・・かすみ！何をしておる！早く霧を！」

紅蓮は焦りながらかすみに言った
・・・しかしいくら待てども霧は出て来ない

「ダメですおじい様・・・出ませんわ」

戸惑いの色を帯びたかすみの声を聞くと
グレート占いベアーは途切れ途切れに喋り始めた

「グレートウラナイパワー・・・キリ・・・フウジタ・・・パワーザンリョウゼロ・・・アトガンバ・・・」

そう言ってグレート占いベアーはパタリと倒れて動かなくなった
さっきまで抱いていたダイガクセイが駆け寄ってみるが反応はない・・・

「クマちゃん・・・何で・・・僕なんかのために・・・うぅ・・・
クマちゃあぁぁぁん！」

クマちゃんの死？に涙を流す大学生・・・
しかしその背後には既に紅蓮の姿があった・・・
それも怒り狂った表情で炎の球を手にしている

「猪口才な小童どもが！焼き殺してくれる！」

そう言って紅蓮は脚をほぼ真上に振り上げるような体勢で炎の球を振りかぶった
それに気付いたダイガクセイはクマちゃんを庇う様に抱きしめるとその場にうずくまった

「食らえ！超必殺『大リーグ煉獄球』」

・・・・・・
しかしそれが放たれることは無かった
大リーグ煉獄球を放つその前にフリーザ様のエネルギー波が紅蓮の心臓を捉えていたのだ

「ば・・・馬鹿な・・・」

力無く衝撃で吹き飛ばされる紅蓮・・・
そして投げ損ねられたその球は崩れ落ちた初老の忍者の骸の上に落

下し
全てを焼き尽くさんと物凄い業火を噴き上げた

「お・・・おじい様ぁあ!!!」

パチパチと言う炎の燃える音を打ち消すように響き渡ったかすみの悲鳴・・・
それを心地良さ気に聞きながらフリーザ様は楽しそうに笑った

「フフン!さっきのセリフ・・・そのままお返ししましょう!
ここがあなた方の墓場となるのですよ!あ~はっはっはっはっは!」

「うわぁ・・・フリーザ様極悪だなぁ・・・」

「所詮　俺達は正義のヒーローにはなれねぇってことだな・・・見た目からして」

続く

１０５．哀と謎の忍者軍団（五ノ巻）（後書き）

お待たせしました
１０５話です・・・
最近微妙に良い人になりかけてたフリーザ様
久々に極悪フリーザ様を書けて良かったです
やっぱフリーザ様は極悪ですよね
悪ＶＳ悪・・・十一般人
ってことで話はいよいよ佳境に突入です
クライマックスへ向けてＧＯ！ＧＯ！です

・・・ところで
クライマックスって・・・ＣｒｙＭＡＸ（泣きＭＡＸ）に聞こえません？
やっぱ一番泣けるシーンだから？
でも泣けないシーンもありますよね・・・
その辺どうなのよ・・・なあ～？英語の先生よォォォォォ
※クライマックスの正しいスペルは　ｃｌｉｍａｘ　です
ｃｒｙｍａｘ　とテスト・試験等で間違えても責任は負いかねます

１０６．哀と謎の忍者軍団（六ノ巻）

第１０６話　哀と謎の忍者軍団（六ノ巻）

グレート占いベアーの活躍により　一気に形成は逆転した
こうなってしまっては　もう誰も宇宙の帝王を止めることはできない
刻一刻と・・・四天王に最期の時が近づいていた

「よくもおじい様を・・・」

かすみは憤っていた
自分の忍術の師であり　実の祖父である紅蓮の死を目の当たりにし
目を血走らせ　息を荒くし　綺麗に整えられていた髪を振り乱し・・・
もはや自分に碌な対抗手段がないことも忘れて

「こうなったら　おじい様の黄泉の従者として貴方には道連れに逝ってもらいますわよ」

そう言って物陰から出てくると　かすみは刀を構えた

「ふふ・・・それなら孫であるあなたが逝ってあげれば良いじゃないですか」

薄ら笑いを浮かべながら茶化すように言い放つ
復讐の念に燃える女はそのフリーザ様の態度に完全に修羅に堕ちた

「死ねぇえええええええええ！！！」

もはや清楚で可憐なくノ一の姿はどこにも無かった
乱れた長い髪を顔に絡みつかせ　口から唾液を撒き散らし　刀を振りかぶって襲い掛かってくる
せっかくの大和撫子も台無しである

「どこのホラー映画だよ・・・」

ウォッカがつぶやくと同時に・・・
哀れなくノ一の体は地に伏した

「さてと・・・あらかた片付いたようですね」

手をパンパンと叩(はた)きながらフリーザ様は辺りを見まわした
倒した忍者達の骸が転がっている・・・さながら戦争でもあったかの様な有様だ

ビィィィ！

楽しげにそれを見つめていたフリーザ様だったが
その視界は突如　鉄を引き裂くような轟音と同時に青白い光に包まれてしまった

「ヒャハ～ッハハハハハハハ！」

光が収まったかと思うと　今度は馬鹿笑いが聞こえてきた
やれやれ・・・と　そこかしこを探してみると天井にそれを発見することができた

「そういえば彼を忘れていましたね」

「イエ～ス！闇鍋シテンノー最後の一人・・・エレキテルデース！」

「鬱陶しいですね・・・ファニエスト外語学院にでも行ってくださいよ」

「ノ～・・・アレはもう終わってしまいまシータ」

まったく・・・どう仕留めてやろうか？
フリーザ様があれこれ処刑方を考えている時だった

「ふ・・・フリーザ様・・・！」

「何ですかダイガクセイ？　良い処刑方が思いつきましたか？」

「そうじゃなくて・・・何か・・・」

妙にうろたえているダイガクセイにイラっとして　フリーザ様は思考を中断して顔を上げた
するとそこには異様な光景が広がっていた
先ほど倒したはずの忍者たちが次々と起き上がって来るのだ

「これは驚いた！　まだ生きているとは・・・ベジータ並みの渋とさですね」

「訳の分からねぇこと言ってる場合か！　襲って来るぞ！」

ウォッカは銃に弾を込め直すと向かってくる忍者の心臓に狙いを定めて引き金を引いた

バンッ！

放たれた銃弾はまっすぐに忍者の心臓を射抜いた
後ろに吹っ飛んで転がる忍者・・・しかし次の瞬間　忍者の体は起き上がり　再び襲い掛かって来た

バンッ！

今度は頭・・・激しく血が飛び散る
しかし忍者は前進を止めない・・・おかしい！　もう脳が完全に破壊されているはずなのに

「どこのホラー映画だよ・・・」

フリーザ様達はドッと押し寄せてきた亡者の波に飲まれてしまったその様子をエレキテルは天井に張り付いたまま　笑いながら見つめていた

「ハハッ！　人間のカラダはブレインからの電気信号で動いていマース
だから僕の電気の忍術を使えば　バディを操ることぐらいゾウさんもキリンさんも無いことデース」

「ほっほっほ・・・だから何だと言うのですか?」

フリーザ様の笑い声が響くと同時に　凄まじい気の波で亡者の波は吹き飛ばされてしまった
忍者達の骸が描く円の中心でフリーザ様はニタニタと笑いながらエレキテルを見ていた

「シット！　でももう一度電撃を浴びせれば済む話デース」

そう言って再び電撃を放とうとしたエレキテル
しかし電撃は骸に届くことなく　フリーザ様のサイコキネシスにより爆発を起こした
その衝撃で天井が崩れ　エレキテルはフリーザ様の目の前に墜落した

「もうあの技は使わせませんよ・・・暑苦しくて堪りませんからね」

そう言ってフリーザ様は凄まじい殺気をチラつかせながらエレキテルに歩み寄った

「ぼ・・・僕を攻撃したらどうなるか分かってるノカ？　大使館に言って外交問題にスルゾ！」

「大丈夫・・・あなたはここで死にますから」

「禁断の・・・最終奥義を使っちゃうゾ！　皆・・・皆ブッコワシちゃうゾ！」

「すばらしい！　ぜひ使ってください・・・」

「お願い！　助けてヨ！　パスポートあるよ！　ビザが無いダケ！」

「不法滞在じゃないですか・・・」

「お願いします！　命だけは・・・！　お慈悲を・・・お慈悲を・・・」

「日本語上手じゃないですか・・・」

フリーザ様の手が　もうエレキテルに届くところまでやって来ていた

・・・・・その頃
アジトの外には下呂丸と哀・・・そして梓とマスターの姿があった
下呂丸は梓とマスターの縄を解くと紳士的な笑顔を作った

「さあ・・・これで皆さんは自由です！　何処へなりとお好きなようにに・・・」

「良いの？　そんなこと言って・・・警察に駆け込むわよ？」

哀が言うと下呂丸はフッと笑ってから言った

「この通り秘薬とその製法は確かに頂戴いたしましたし・・・
これさえ有れば　もはや警察など何千・・・何万・・・何億やって来ようが物の数ではありません
あなた達に出来ることなど　後はただ私達に支配されることだけですよ」

「ふふ・・・『私達』って・・・あなたのご自慢の部下は皆フリーザ様にやられたみたいじゃない」

哀がアジトの方を見ながら嘲笑うように言った
しかし下呂丸の表情はまったく崩れない・・・
それどころか　ものすごい自信に満ちた表情をしている

「ぷっ・・・くく・・・くっはははははは！」

遂には堪えきれずに笑い出した
その様子に　哀は怪訝そうな顔で下呂丸を睨みつけた

「シェリー殿・・・貴方は何も分かっておらぬのですよ」

するとどこからともなく妙な集団が下呂丸の周りに集結し始めた
今度は忍者ではない・・・和風な感じを残しつつも近未来的な武装をした集団・・・
ＳＦ映画に出てきそうな軍隊といった感じである
ざっと見ただけでも千人はいる

「闇鍋一族などただのカムフラージュ・・・本当の私の部下はこの者達
天神如術を極め　四百年の時をかけて生み出した武器・防具に身を包んだ無敵の猛者達ですよ」

哀達はもう言葉も出なかった
どうやら学校の教科書は大幅な改訂が必要らしい・・・

「それではシェリー殿・・・ビジュアル系の彼にもよろしくお伝え下さい
残念ながら　私はこれから東京を壊滅させに行かなければならないのでね・・・」

「えぇ！　じゃあポアロも壊す気だな・・・許さん！　このマスター容赦せん！」

ポアロに手出しはさせん！
っと飛び掛ったマスターだったが下呂丸に触れる前に謎の力で吹き飛ばされてしまった

「喫茶店は諦めるんだな・・・
皆の者！　遂に我等の力を天下に知らしめる時が来た！
目標は東京・・・政府主要機関　大企業本社　東京タワーも六本木ヒルズも全て破壊せよ！
我等の強さを・・・この世界の王が誰であるかを教えてやるのだ！」

「六本木ヒルズはやめてぇ！」

梓も下呂丸に飛び掛ったがマスターと同じ結果に終わった

「出陣！」

下呂丸の声と同時に軍団は背中にあるジェットエンジンの様な装置で空に飛びたって行った・・・

・・・・・・

「二人とも！　起きなさ～い！　まったく・・・何で伸びてるんですか？」

フリーザ様が揺すってもウォッカとダイガクセイは目を覚まさない
亡者達を吹き飛ばした際に　見事に巻添えになってしまったのである

「フリーザ様」

すると後ろから声をかけられた
振り返るとそこには哀と捕まえられていたはずの梓とマスターがいた

「何してるのよ？」

「いや・・・二人が気絶しちゃったんですよ」

見ると・・・ダイガクセイ・・・また巻き込まれていた様だ・・・

そしてもう一人・・・げっ！　ウォッカ！

「とりあえず二人を運び出しましょう」

梓がマスターと一緒にダイガクセイを担いだ

フリーザ様もウォッカを担ぎ上げようとしたが　その手を哀が止めた

「こっちは良いのよ・・・」

「はい？　でも連れて行かないと・・・」

「良いのよッ・・・！」

ただならぬ怒気にフリーザ様はウォッカを地面に下ろした

梓やマスターも圧倒されて何も言えないでいる

しかし哀としては組織の一員であるウォッカと遭遇することは絶対に避けたい

幸い気を失っているので　このまま放置することにした

・・・・・そうだ

ついでに蹴りでも一発入れていこう

ドスッ！！！

「ちょ・・・！　何してるんですかハイバラさん！？」

続く

１０６．哀と謎の忍者軍団（六ノ巻）（後書き）

お久しぶりですね
何してたの？って？
バイトです＾＾；
今日からやっとお休みなのだーッ！
フリィィダムッ！！！
誰かカップヌードル持ってこんかい！
お湯を入れて３分って書いてあっても
１分しか待ってやらねぇからな！
分かったか！

ってことで久々の更新なので熱くなってみました
フィーバーです
季節はまさに夏！
今年はどんな夏になるのでしょうか？
う～ん・・・わがんね

とりあえずカキ氷持ってこんかい！

１０７．哀と謎の忍者軍団（七ノ巻）

第１０７話　哀と謎の忍者軍団（七ノ巻）

「何ですって！？」

フリーザ様は驚きの声を上げた
哀達から告げられた下呂丸の恐るべき計画・・・
東京が破壊されること　すなわちフリーザ様の生活圏の侵害に他ならない
フリーザ様はこめかみをピクピクさせながらその話を聞いていた

「このままじゃポアロがやられちゃうよ！　フリーザ様　どうにかして！」

「それだけじゃないわ・・・何も知らない博士達も危険にさらされるわ」

哀やマスター達がフリーザ様に詰め寄る
フリーザ様は静かに目を閉じてこめかみのひくつきを抑えると
しかし　殺気にも近い力のこもった眼を再び見開いた

「本当にいい度胸ですね・・・ここまでこのフリーザ様を引っかき回してくれるとは
どうやらお仕置きが必要みたいですね！　東京に戻りますよ皆さん！」

フリーザ様が言い放つと　哀達は東京破壊阻止に向けて一致団結した

「Ｔｏｄａｙ！　Ｗｅ　ｃｅｌｅｂｒａｔｅ　ｏｕｒ　Ｉｎｄｅｐｅｎｄｅｎｃｅ　Ｄａｙ！」

「おぉ～！！！」

「独立記念日は関係ないわよ・・・・」

こうしてフリーザ様達は　一路東京へ向かうのであった

・・・・・・

夜明け前の東京近郊・・・

遠くにビル街の見えるその森の中に下呂丸率いる世界統一軍団はいた

「下呂丸様・・・突撃しましょう！」

兵の一人が「待ちきれない」と言わんばかりに言葉を漏らした

「まぁ焦るな・・・攻撃開始は日の出と同時だ

何せ　もう我々は何者からも忍ぶ必要が無いのだからな・・・

我々は記念すべき夜明けに　堂々と繰り出そうではないか」

下呂丸がそう言うと　兵達は再び黙ってじっとその時を待ち始めた

普段なら完璧に息を殺して気配を消すことができる彼らも　この時ばかりは若干息が荒くなっていた

おそらく人が近くに来たら誰かいることが丸分かりだろう・・・

しかしそれも仕方ない・・・もう間もなく歴史的な計画が実行に移されるのだから

下呂丸はフッと笑うと　再びその視線をビル街に向けた

・・・・・・
その視線の先には何も知らない人々が寝息を立てていた
点けっ放しにされたテレビでは早朝のニュースが始まっている
テンションの低いアナウンサーの声を夢の中で聞きながら　男は寝返りをうった

バン！

大きな音がした・・・
うるさいなぁ・・・
しかし次の瞬間　男の耳には更に大きな騒音が侵入して来た

「トロッタさん！　トロッタさん！」

朝っぱらから迷惑な大声に　占い師トロッタは眉間に皺を寄せながら体を起こした

「まだ店は開いてないよ・・・ふぁあ～あ・・・おやすみ・・・・・・」

「寝ぼけてる場合じゃないですよ！　起きてください！」

激しく体を揺するフリーザ様に抗議しようと再び体を起こしたトロッタ
しかしそこで彼の目は完全に覚めた
ただならぬ負のエネルギーを感じる・・・とてつもなく嫌な感じだ

「・・・確かに寝ぼけてる場合じゃなさそうだね

フリーザ様・・・ここから北西に３０キロ・・・そこに彼らはいるよ」

「聞きましたか皆さん？　急いでそこへ向かいますよ！
・・・あ！　そうだ！　ダイガクセイの面倒をお願いしますよトロッタさん！」

ダイガクセイをトロッタに預けると
フリーザ様は哀達三人を抱えたまま　物凄い勢いで北西の空に飛んで行った

「気をつけてフリーザ様・・・彼らは手強いよ」

トロッタはフリーザ様を見送るとダイガクセイに毛布をかけて　再びベッドに戻った

・・・・・
そして遂にその時はやって来た
東の空がどんどん明るくなっていく
薄いオレンジ色に染まる空の端・・・
そこから遂に　下呂丸達の待ちに待った黄金色の光が射し込んだ

「皆の者！　遂に時はやって来た！　これより東京への攻撃を開始する！」

「おおぉぉぉ～！！！」

「一切の手加減は無用！　我等の世界統一の序曲として　派手に破壊しようぞ！」

「おおぉぉぉ～！！！」

「させませぇ～ん！！！」

一気に指揮を高めていた所にフリーザ様達が到着した
兵達は一斉にフリーザ様の方を睨み付ける

「愚かな・・・出てこなければ死なずに済んだものを・・・」

下呂丸は邪悪な笑みを浮かべながらフリーザ様達を一瞥した
その視線がフリーザ様の怒りの炎を更に煽る

「愚かなのはそちらですよ！　このフリーザ様のお膝元である東京を破壊しようなど不届き千万！　死んでもらいます！」

そう言うと　フリーザ様は下呂丸達に向けてエネルギー弾を一発放った
エネルギー弾は着弾すると物凄い爆発を起こし　下呂丸達のいた辺りが激しい光に包まれる

「相変わらず手加減しないわね・・・」

哀が呆れながら爆煙を眺めた
さすがにフリーザ様が相手ではどうにもならない・・・
生存者はまずいないだろう
そう思った哀は　爆煙が晴れて広がった光景に驚愕した

「はっはっは・・・そんな攻撃は通用しない！」

あれだけの爆発にも関わらず　下呂丸達はまったくの無傷だったのだ
フリーザ様も完全に仕留めたと思っていただけに驚きを隠せないでいた

「天神如術は無敵だ・・・」

「ほざけぇ！！！」

完全に頭に血が上ったフリーザ様
今度は下呂丸目掛けて何発もエネルギー波を放つ
しかしそれは全て下呂丸に当たる前にかき消され　一発も命中しなかった

「くっ・・・ＡＴフィールドですか・・・アヤナミさん！　エ○ァ出動！」

「誰が『アヤナミ』よ・・・」

焦るフリーザ様を嘲笑うかのように下呂丸達は一斉に攻撃を始めた
とても地球人のものとは思えない・・・
一発一発が恐るべき破壊力を持っており　さすがのフリーザ様も大ダメージを受けた
思わぬ苦戦にフリーザ様の怒りは遂に頂点に達した

「今のは痛かった・・・痛かったぞぉぉぉ！！！」

フリーザ様の体が激しい光に包まれる
次の瞬間そこにいたのは見慣れない生物だった・・・
白い体に　所々紫色の部分を覗かせるその生物はその溢れるエネルギーで大地を揺らしながら口を開いた

「僕をこの姿にさせたことを後悔すると良いよ・・・」

「えぇ！　フリーザ様！？」

哀達は驚いた・・・今までも十分非常識だったが・・・まさか変身できるとは・・・

「き・・・きっとトリックだよ！」

マスターの一言に無理やり納得する哀達・・・
そんな三人を尻目にフリーザ様は凄まじい勢いで下呂丸達に襲い掛かった
雷でも落ちたかの様な激しい打撃音が早朝の森林にこだまする
そして数分後・・・
森林は再びいつもの静寂を取り戻した

「ば・・・馬鹿な・・・宇宙の帝王であるこの僕が・・・」

フリーザ様は完全に伸されていた
１００％の力を出したにも関わらず一人も撃退することができないあのサイヤ人にやられたとき以上の屈辱である

「ふふん・・・宇宙の帝王か・・・」

下呂丸が嘲笑うようにフリーザ様を踏みつける
そんな様子を見ていた梓は遂に我慢出来なくなった

「アイアムブアカーオ！」

「ちょっと！　ダメだよ梓ちゃん！　フリーザ様も敵わなかったのに」

「でも・・・このままじゃフリーザ様が殺されちゃう・・・
そうだ！　アヤナミちゃん！　こうなったらＮ２爆弾持って突っ込むしかないわ！」

「やーよ・・・それと　誰が『アヤナミ』よ」

為す術無し・・・
哀達の中でもどかしさだけが膨らんでいく
そして哀達が手をこまねいているうちに　下呂丸はフリーザ様にトドメを刺しにかかっていた

「それでは諸君！　我々にたった一人で立ち向かった勇気を讃え最終奥義でフリーザ君を葬ろうではないか！」

「おおぉぉぉ～！！！」

下呂丸達は一斉に手を空に向かって突き上げ　お経の様なものを唱え始めた
すると下呂丸の上に巨大なエネルギー球が出来上がった

「天神如術最終奥義『幻鬼玉（げんきだま）』
さらばだ宇宙の帝王・・・王位はこの私が継承するから安心して死ぬが良い！」

「ちくしょう・・・あのサル野郎みたいな技を・・・」

フリーザ様万事休す・・・

下呂丸は幻鬼玉を放とうと腕を振り下ろした

グシャッ！

何かが弾けて潰れる音がする・・・

しかし　まだフリーザ様は無事であるし　幻鬼玉も放たれていない・・・

何かと思い辺りを見回すと・・・

「これは・・・！」

自分の腕がぐちゃぐちゃに潰れている

どういうことだ！？

不思議そうにしていると兵達から悲鳴が上がった

ボンッ！グシャッ！バキッ！・・・

兵達の体がすごいことになっていく

さては　とフリーザ様達を見るが・・・キョトンとしている

「ま・・・まさか！？」

梓は辺りを見回してみた・・・

・・・・・・

「ケンシロウなら来てないわよ・・・・」

「なんだ・・・ガッカリ・・・」

梓がガッカリしている間も下呂丸達の体の崩壊は止まらない
いったい何が？
必死に考えた末に下呂丸は頭上の幻鬼玉を見た

「幻鬼玉のパワーに肉体が耐えられていないというのか？」

しかし幻鬼玉は完成された奥義・・・
それを体現するために激しい修行は積んで来た
すると問題があるとすれば・・・
下呂丸は哀を見た

「何？　私の作った薬にいちゃもんつける気？　悪いけど完璧な物を作らせてもらったわよ・・・」

哀は秘薬の成分表をペラペラとめくりながら言った
しかし　そうやってめくっていると一枚だけ違和感を覚えた
紙をめくる手を止めて　良く内容を見てみる

「ん？　間違ったかな？」

それは下呂丸達が聞きたくもない一言だった
ダムが決壊したように　一気にボロボロに崩れていく肉体を必死に支えながら
絶望の中で彼らが目にしたものは　怒りと喜びが入り混じったような眼で笑っているフリーザ様だった

「はあぁぁぁぁ！！！」

「今までのお返し」とばかりに　フリーザ様は幻鬼玉に向けてエネルギー波を放った

下呂丸達の支えを失った幻鬼玉は　その膨大なエネルギーを維持することが出来ず
ぐにょぐにょと波打つとこぼれ落ちる水の様に崩壊した

「ちくしょおぉぉぉ～！　この茶髪のペテン女あぁぁぁ！」

一気に降り注ぐ凄まじいエネルギーの雨に　下呂丸達の肉体は朽ちた枯れ枝のように崩れ落ちていった
・・・・・・

「ふぅ・・・手こずらせてくれましたね・・・」

「でも東京は無事ですよ！」

「ポアロもね！」

ボロボロのフリーザ様に駆け寄ってくる梓とマスター
ひどい怪我である・・・
マスターはフリーザ様に肩を貸した

「それにしてもお手柄ですよハイバラさん・・・まさか秘薬の開発に失敗していようとは」

「本当に・・・ラッキーでしたよね」

「いよっ！　茶髪のペテン女！」

「ペテン女万歳～！」

「その呼び方はやめてちょうだい・・・」

こうして・・・
宇宙の帝王と一人のマッドサイエンティストの手によって
東京は・・・否
世界は救われた

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード３６「名探偵コナン最終回」

長年に渡る推理の疲れから新一は遂に倒れてしまった
そんな中　黒の組織は人類に全面降伏を要求
更にはアポトキシンミサイルにより
世界の主要都市を縮めて　村にしてしまうという恐るべき計画を実行に移した
人類滅亡の危機の中・・・
体を調べられたら自分がコナンであることがバレてしまう新一はこっそり病院を抜け出した
新一がいないことに気づいた蘭は新一を捜索
やっとの思いで新一を発見した

「ねぇ　何で逃げ出したりなんかしたの？　ねぇ答えて」

「・・・・・・」

「新一？」

「蘭・・・俺は！　俺はな・・・人間じゃないんだ！
バーロー７８星雲からやって来た・・・江戸川コナンなんだよ！」

「えぇ！？」

「・・・・・びっくりしただろう？」

新一は自分の星へ帰らなくてはいけないこと
これが最後の戦いとなることを蘭に告げた

「さよなら蘭！」

「待って新一！　行かないで！」

「元太がピンチ何だよ！」

『ジュワッ！！！』

蘭を押しのけると　新一は「エドガワアイ（めがね）」を装着しコナンに変身した
わざわざ小学生に変身したため　黒の組織との戦いは熾烈を極めた
何度も倒されるコナン・・・

「江戸川コナンの正体は　私達の新一だったのよ！」

蘭が思わず漏らす
それを聞いた目暮警部は駆け出した

「行こう!地球の平和は　自らの手で守らなければならない!」

警部達やＦＢＩ・・・そして仲間達の援護を受け
コナンは何とか黒の組織を壊滅させた
しかしそれは同時に別れの時がやって来たことを意味していた

『明けの明星が輝くとき　一つの光が宇宙に飛んでいく
・・・・・・それが俺なんだよ』

コナンは・・・新一は・・・
仲間達との別れを惜しみつつ　夜明けの空へと飛び去って行った

１０７．哀と謎の忍者軍団（七ノ巻）（後書き）

やっと終わった～
ってことで私も自分の星に帰らなくてはいけなくなりました

「待っておっとり！　行かないで！」

「お盆休み何だよ！」

『ジュワッ！』

ってことで実家に帰ります
更新はたぶんします

１０８．ＳＵＩＫＡ！

緑と黒が奏でる縞々
その中に隠された淡い赤色
瑞々(みずみず)しいその喉越し
あぃなんとも素敵な夏の風物詩
うぉ～た～めろん？
黙れ英語教師！
敬意を込めてこう呼びたもれ

第１０８話　ＳＵＩＫＡ！

「プッ！！！」

頬っぺたに何発目かのそれが着弾した
哀は鬱陶しそうにそれを払いのける

「ププッ！！！」

今度は二発・・・
こめかみをヒクつかせながら隣の男を睨みつけると
哀は志村ケン並みのスピードで手に持ったそれを口の中に詰め込んだ

「プププププププププププ・・・・・・ッ！」

哀の放ったマシンガンの弾は見事にフリーザ様の顔に命中
フリーザ様の顔は黒い粒だらけになってしまった

「何をするんですかハイバラさん・・・消し去りますよ？」

「ふふ・・・お返しよ」

二人は今　西瓜（すいか）を食べている
博士の知り合いがダンボールいっぱいに送ってくれたのだ
三人はそれをおいしく頂くと　送ってくれた知り合いに写真入りで
お礼のはがきを出した
しかしそれがいけなかった・・・
何を勘違いしたのか　その知り合いは　今度はダンボール箱三つ分
も西瓜を送ってくれたのだ
気持ちは分かるが・・・送りすぎ！
仕方なく哀達は暇を見つけては西瓜の処分に当たるのであった

「食べても食べても・・・無くなりませんねぇ　西瓜」

「何時ぞやの『たらこ地獄』を思い出すわね・・・」

ムシャムシャ・・・
二人が西瓜を食べる音が静かな部屋の中に虚しく響く

「あぁ～もう！　他に食べる物無いんですか？」

「・・・・・無いわよ」

哀はそっけない返事を返すとファッション誌のページをめくった
まったく役に立たない・・・
無能な部下に代わって　フリーザ様は仕方なく頭をひねることにした

ポクポクポク・・・

両手の人差し指を頭に当てて必死に考える

チーン

「そうだ！　お裾分けすれば良いんじゃないですか！」

「一般人が真っ先に思いつきそうなアイデアを出すなんて　大した一休さんね」

「お黙りなさい！　そういうハイバラさんだって思い付かなかったじゃないですか」

「あら・・・私は西瓜好きだもの・・・お裾分けなんてしようと思わなかっただけよ」

いやしんぼめ・・・

とにかく　フリーザ様はいくつか西瓜をダンボール箱に入れて家の外に繰り出した

どれどれ・・・日頃世話になっている部下達に西瓜を与えてやろうまずは先日の一件で多大なる迷惑をかけたポアロの人達・・・

フリーザ様はポアロへ向かった

「いらっしゃいませ～！　あ・・・フリーザ様」

「こんにちは・・・おや？　いつものメンバーしかいないじゃないですか」

そこにはマスターと梓・・・そしてダイガクセイの3人のみ

いつからだろう？　ポアロがこんなに暇になったのは・・・

「ははっ・・・この間の忍者騒ぎの上に　ここ最近の猛暑のせいで
この有様ですよ」

梓は「まいった　まいった」と言いながら頭を掻いた
しかし　ふとフリーザ様の手元が目に付いた
立派な西瓜を持っている・・・

「実は今日はこれをお裾分けに来たんですよ」

「感謝しなさ～い」とフリーザ様が西瓜を差し出した
しかし梓の反応は鈍い
気まずそうに苦笑いをすると　チラチラとマスターの方を見た
するとマスターは店の奥からダンボール箱を持って来た

「・・・？　何ですかそれは？」

フリーザ様が聞くとマスターはダンボールを開けた
そこには大きく艶やかな西瓜がたくさん詰まっていた

「実は『夏のスイカフェスティバル』と題して西瓜メニューを用意
してたんだけどね・・・」

「お店が見ての有様で在庫が大量に・・・」

無計画に発注するからだ・・・
呆れつつもフリーザ様はポアロの保有する大量の西瓜を見た
この中にさらに西瓜を追加するなど・・・
宇宙一冷酷なフリーザ様でもそんな残酷なマネをできるはずがなか

った

「そう言うことなら仕方無いですね・・・ダイガクセイ！」

ならば　とダイガクセイにふってみたが・・・

「ごめんフリーザ様！　実は俺んとこにも田舎から西瓜がたくさん届いてて・・・」

「どいつもこいつも西瓜作り過ぎじゃないですか？」

仕方無いのでフリーザ様はポアロを後にし　上にある毛利探偵事務所を訪れた
ノックもせず　半ば蹴るようにドアを開けると　そこにはちょうど一家三人が揃っていた

「このフリーザ様から西瓜のお裾分けですよ！　感謝して味わいなさ～い！」

突然やって来ておいて　この「上から目線」
いつもながら呆れる三人の目の前でフリーザ様は西瓜を高らかと掲げて見せた

「わ～・・・美味しそうな西瓜ですね！」

「これどうしたんだよフリーザ様」

するとフリーザ様の傍若無人さに対する呆れはどこへやら・・・
三人は艶やかなその球体の虜になってしまった

「それじゃあ　ありがたく頂きます」

満面の笑みを浮かべながら　蘭が西瓜に手を伸ばしたその時だった

ガチャ・・・

再び探偵事務所の扉が開いた

依頼人かと思ってそちらに視線をやると　そこには英理が立っていた

しかもその手には西瓜の入ったダンボール箱が抱えられている

「これ・・・前に弁護してあげた人が送ってくれたんだけど・・・

良かったら・・・」

そう言って英理は小五郎達の目の前にダンボール箱を下ろした

「こりゃ～随分高そうな西瓜だな・・・こんなに良いのか？」

「蘭が・・・西瓜好きでしょ？　べ・・・別にあなたのためじゃ無いんだから・・・」

なんというツンデレ・・・

しかし　小五郎の反応は　フリーザ様の西瓜より英理の西瓜に対するそれの方が良い・・・

蘭も両親の仲睦まじい様子が嬉しいのか目を輝かせている

フリーザ様西瓜はツンデレ西瓜に完敗したのである

「そうですか！　そんなにツンデレが良いなら勝手になさいな！」

「え！？　フリーザ様？　・・・行っちゃった」

「はは・・・何しに来たんだか」

フリーザ様は探偵事務所を後にした

・・・・・・

その後フリーザ様は片っ端から部下の家を歩いて回った

しかし結果は惨たんたるものだった

『帰省しますのでしばらく留守にします・・・吉田』

いないんじゃ仕方無いですね・・・

『ヨーロッパ一周の旅に行ってきます』

部下の分際で・・・光彦さん処刑決定!

「ありがてぇけどよ・・・昨日も西瓜食い過ぎて腹壊しちまったんだ」

肝心な時に使えないデブですね

・・・以上のような有様である

フリーザ様は　結局一つも西瓜を減らすことが出来ないまま家に帰ることとなった

・・・・・・

「ふぅ・・・大分食べたわね」

哀の目の前には西瓜の皮が山のように積まれている
家にあった西瓜はほとんど平らげてしまったのだ
正直　自分の胃袋に恐怖すら覚えてしまう

「でもさすがに食べ過ぎたわね・・・ウェスト大丈夫かしら？」

西瓜で満たされてやや出っ張ったお腹を目にしながらウェストの心配をしていた時
玄関の扉が開いてフリーザ様が入って来た

「あらおかえりなさい・・・・・・で？　何しに出かけたんだったかしら？」

「仕方無いでしょう！　まったく　どいつもこいつも役に立たない」

一つも減っていない西瓜を見て笑う哀に
フリーザ様は事の顛末（てんまつ）を話しながらリビングのソファーにどっかり腰かけた

「まぁいいわ・・・家にあった西瓜は全部食べちゃったから
後はあなたが持ってる分だけ・・・がんばって食べちゃいましょ」

「くぅ・・・なぜこのフリーザ様がこんな思いを・・・」

「グダグダ言わないでちょうだい・・・ほら！　さっさと食べる」

「まったく！　ハイバラさんの大食らい女・・・西瓜デブ・・・」

「・・・ムカツク」

そんなこんなで
嫌々ながらも二人は西瓜を無心に食べ続けた

ムシャムシャムシャ・・・

西瓜を貪る音が部屋に響く
そして日も暮れた頃　二人は遂に残り一つの西瓜を食べ始めた

「長かったけど遂に最後の一つね・・・」

「やっとですか・・・もう今年は西瓜いりませんね」

目の前に迫ってきたゴールに向って二人がラストスパートをかける
すると玄関の扉が開いて「ただいま」という声がした
博士が帰って来た様だ

「おかえりなさい・・・って　何それ？」

二人は硬直した・・・
博士が嬉しそうに手にしているそれは　瑞々しい緑にしっかりした
黒の縞模様が入っている
それも恐ろしくデカイ

「驚いたじゃろ？　なんと通常の西瓜の四倍の大きさの『おばけ西瓜』じゃ
いや～スーパーで見かけたもんでな・・・つい買って来てしまったわい」

ムシャムシャムシャムシャ・・・・・・！

にこにこと笑っている博士の目の前で
二人は志村ケン並のスピードで西瓜を口の中に詰め込んだ

「プププププププププププププ・・・！」

「ププププププププププププププププ・・・！」

「わ！　な・・・何をするんじゃ二人とも！」

二人の一斉掃射を食らい　博士はものの数秒で蜂の巣（全身種まみれ）になってしまった

「空気読め　このハゲ！」

「ひ・・・ひどい！」

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード３７　「黒の組織の黒い衣装」

「アニキ・・・」

「何だウォッカ？」

「どうして俺ら黒尽くめなんですかい？」

「・・・・・・・」

「俺・・・ぶっちゃけピンクの方が好きなんですけど」

「・・・・・・・」

「アニキ？」

「黒は女を美しく見せる・・・どこかのパン屋さんが言ってた」

「・・・・・・俺達　男じゃないですかい」

「・・・・・・・」

「・・・・・・・」

「コロスゾ・・・」

「す・・・すいやせん！」

１０８．ＳＵＩＫＡ！（後書き）

あ・・・今年西瓜食べて無い！
西瓜食いてぇ！
ってことで１０８話でした
今からスーパーに行って西瓜買ってこようかな・・・
でも暑いから外出たくない・・・

おい！誰か西瓜買って来いよ！

・・・一人暮らしなので誰も返事する訳ありませんね＾＾；
もし返事があったとしたら・・・
それはもう一つの夏の風物詩（（（（；゜Д゜））））ガクガクガクブルブルブル

・・・だんだん恐くなってきました
家は恐いので西瓜を買いに行って来ます＾＾；

１０９．クリソツな彼女

「おい！　ステフ！」

「どうしたのマイケル？」

「ひどいじゃないか・・・僕以外の男とデートするなんて！」

「え？　知らないわ・・・何のこと？」

「とぼけないでくれよ！　僕は昨日　君が見知らぬ男と腕を組んで歩いているのを見たんだ」

「本当に知らないのよ・・・ねぇチャック！　マイケルに何とか言って！」

「ＯＫ！　マイケル・・・それはきっと他人の空似さ！」

「そうか？　瓜二つだったぞ」

「良くある話さ・・・これからする日本の米花町で起きた話もその一例さ
それにステフなら　昨日はずっと僕の家のベッドにいたんだからね」

第１０９話　クリソツな彼女

ある日のポアロ・・・

店内の隅にあるテーブル席に蘭はいた
「蘭姉ちゃんの人生相談室」のためである

「それで・・・相談って何ですか先輩？」

今日相談に来ているのは蘭の高校のＯＢで元帝丹高校生徒会副会長
の馬明伴人（まあくともひと）である

「実は好きな人が出来たんだ・・・」

「ごめんなさい・・・」

「いや　君じゃないよ！」

伴人は蘭に話した
最近行きつけのパン屋で一人の女性を好きになってしてしまったこ
とを・・・
そのまま思いを伝えて良いものか迷っていることを・・・

「良いじゃないですか！　好きなら好きって言っちゃいましょうよ
先輩！」

「うん・・・まぁ・・・そうなんだけど・・・」

伴人は窓の外を眺めると目の前に置かれたアイスコーヒーを口にした
そして「ふぅ」と溜息をつくと再び蘭の方を向いた

「話は変わるけど・・・僕が高校時代付き合っていた女性を知って
るかい？」

それは唐突な質問だった・・・
蘭は自分がまだ高校に入学して間も無い頃の事を思い出した

「えぇ・・・確か同じ学年の佐茂藍子(さもあいこ)先輩ですよね？」

「そう・・・そして彼女はあの日・・・あの暑い夏の日・・・遠い世界へ旅だってしまった」

伴人は目に浮かんだ涙を手の甲で拭うと黙り込んでしまった
蘭は俯いた伴人の顔を窺うように話しかけた

「佐茂先輩に遠慮して・・・告白できないんですか？」

恐る恐る蘭が聞くと伴人は顔を上げて口を開いた

「それだけなら・・・きっと僕は告白した・・・」

「じゃあ何でですか？」

歯切れの悪い伴人・・・
よほどの事があるのだろうか？

「それで？・・・早く続きを言いなさい」

なかなか話を切り出さない伴人にイラついてフリーザ様が割って入ってきた
どこからか聞き耳を立てていたらしい・・・
あまりのデリカシーの無さに呆れつつ　蘭はフリーザ様を追い払った

「それで・・・どうしたんですか？」

オホンと咳払いをして蘭は伴人の言葉を待った
しばしの沈黙を置いて・・・
伴人はようやっと言葉を発し始めた

「その彼女なんだけどね・・・」

「はい」

「実は男なんですね？」

「えげつないラブストーリーね・・・」

またフリーザ様・・・そして哀が乱入してきた
話の腰を折りやがって・・・
蘭は眉間をひくつかせながら二人を追い払った

「で？　彼女が？　何？」

若干乱暴な口調で蘭が聞くと　ビクつきながらも伴人は話を続けた

「彼女が・・・死んだ藍子に瓜二つなんだ！」

なるほど・・・確かに気持ちは分かる・・・

「でもそっくりだからって・・・」

「そっくり？　そっくり程度なら良いさ・・・でもホクロの位置まで同じなんだよ？
まるで生き写し・・・死んだ藍子が帰って来たんじゃないかって思

うくらい・・・
何だか話しかけたら・・・彼女が消えてしまう様な気がして・・・」

ホクロの位置まで同じだと　確かに気持ち悪い・・・
しかしだからと言って　死んだ人間が生き返るはずもない

「双子とかじゃないんですか？」

フリーザ様が聞くと伴人は首を横に振った

「彼女は一人っ子だよ」

「じゃあ他人の空似ですよ！　そんなに気にすることないですよ先輩！」

「そうそう・・・宇宙の帝王の私から言わせてもらえば『顔が全く一緒』なんて良くあることです
ある星では全員が寸分違わず同じ顔でしたよ・・・気持ち悪いから消し去りましたけどね」

そんな宇宙規模の話をされても・・・
伴人は溜息をついてフリーザ様を見た
しかし当のフリーザ様は「何か？」と言った感じでとぼけた表情をしている
宇宙の帝王が「彼女がどうの・・・」と言われたところで知った事ではない
宇宙の帝王からすればそれが当たり前の反応なのだ
しかし　そんなフリーザ様を見ているうちに
伴人はなんだか　自分がひどくちっぽけなことで悩んでいる気がして来た

「確かに・・・言われてみれば・・・」

何故だろうか？
思いっ切り振ったコーラの栓を開けたみたいに　抑えていた感情が溢れだしてくる

「良し！　僕　今から告白しに行って来ます！」

そう言うと伴人は放たれた弾丸の様にポアロを出て行った

「これは面白そうなことになって来ましたね・・・追いますよハイバラさん！」

「放っといてあげなさいよ・・・」

嫌がる哀の首根っこを掴んでフリーザ様も伴人の後を追ってポアロを出る
元のテーブル席には蘭だけが取り残された

「行っちゃった・・・」

そう呟いてアイスコーヒーを飲み干すと　何気なくテーブルの隅を見た
伝票が二枚ある・・・
自分と・・・伴人とフリーザ様と哀・・・四人分の伝票・・・

「あ・・・蘭ちゃんが残ってたんだ！　良かった～　三人ともお金払わずに行っちゃったから・・・」

梓がやって来た
何を言っているのか良く分からない
落ち着いて・・・梓が何を言いたいのか・・・考える・・・そして
理解した

「死ねえぇぇぇ！！！」

それは蘭の魂の叫びであった

・・・・・・
そして三人は伴人の行きつけのパン屋の前にやって来た
「彼女」に告白するために・・・

「どの人です？」

フリーザ様と哀はパン屋の様子を窺った

「う～ん・・・来てないな」

「じゃあ意味無いわね・・・私帰る」

立ち去ろうとする哀の首を締め上げる様にして引き止めると
フリーザ様は伴人に「もう少し粘ってみるべきだ」と勧めた
伴人はそれに頷くと再びパン屋の方に視線を移した

・・・それから数十分
彼女は現れない
哀がもう何度目とも分からない欠伸をかいた

「もう今日は来ないんじゃない？」

「そうかも・・・あっ！」

その時だった

伴人の目がパン屋の入り口に釘付けになった

「彼女」が現れたのである

「さぁ～！　告白するのです！　玉砕あるのみです！」

「えぇ！？　玉砕前提ですか！？」

「良いからさっさと行きなさいよ・・・男は散ってこそ美しいのよ」

フリーザ様と哀はもう何十分も待ったのだ

ここまで待ったのだからフラれてくれなければ面白くない

「うぅ・・・まぁでも告白しなきゃね・・・」

二人を恨めしそうに見つめつつも伴人はパン屋の方へ向おうとした

しかし　本人を前にして足が動かなくなってしまった

ここ一番で踏ん切りが付かない

「何やってんのよ？　さっきの威勢はどこへ行ったのよ？」

「ＧＯ！　さっさと行くんですよ！　彼女帰っちゃいますよ！？」

分かっている

分かっているが・・・足が出ない・・・

そうこうしているうちに　パンを買ったのか「彼女」が店から出て

来た

「ダメだ・・・今日はやめとこ・・・」

そう言って伴人は踝を返した
何と言う根性無しのチキン野郎か・・・
フリーザ様と哀はブチギレである
家に向ってとぼとぼ歩く伴人に殴りかかった

「ぶっ！　ちょっ！　何ですか・・・！」

「散々待たせておいて何ですかそのオチは！　そんなんでこのフリーザ様が満足するかぁ！」

「よくも！　このクソ野郎が！　わたしに大切な時間を無駄に過ごさせたなァあああっーッ！」

二人掛りで伴人を袋叩きにするフリーザ様と哀
声にならない悲鳴を上げながらみるみるボロ雑巾の様になっていく
伴人・・・

「このフリーザ様を怒らせてこの程度で終わると思うなよ！　本番はこれからだ！」

「思い知れッ！　どうだッ！　思い知れッ！　どうだッ！　どうだッ！　・・・・・・」

そろそろ意識が・・・
伴人の視界がぼんやりして来たその時だった

「あの・・・」

不意に声を掛けられフリーザ様が振り返ると　そこには「彼女」がいた

「その人・・・何をしたのかは知りませんけど・・・あの・・・その辺で勘弁してあげてくれませんか？」

「彼女」はそう言って近寄ってくる

フリーザ様は伴人を殴る手を止めてその様子をジッと窺った

これはもしや・・・

ドラマ的出会い！　そして二人は恋へ・・・の王道パターンではないか！

フリーザ様は成り行きを静かに見守る事にした

「どうだ！　どうだッ！　どうだァァァァーッ」

「いつまで殴ってんですかハイバラさん！」

フリーザ様が哀を止めると

「彼女」はそっと伴人に近付いてハンカチを取り出した

所々から流れ出た血をそれで拭ってやる

「あの・・・ありがとう・・・」

「いえいえ・・・同じパン屋を利用してるよしみですから」

知っていたのか・・・

伴人は「今しかない」と思い　自分の血を拭う「彼女」の手を取った

「よしみなら・・・もう一つありますよ」

「何です？」

「僕はあなたと瓜二つの女性と付き合っていた・・・」

「彼女」は驚いた様な顔をした
言葉に詰まったのか　とりあえずニッコリ笑っている
そんな彼女の目を真っ直ぐ見て　伴人は最後の一言を絞り出した

「・・・好きです」

・・・・・・
その言葉を聞くとフリーザ様は哀を連れてそっと立ち去った

「告白の答え・・・聞かなくて良かったの？」

「はい・・・もう満足です」

「そう・・・」

二人のこれからの幸せを願いつつ・・・
フリーザ様は夕日が輝く空を見上げた

「花京院！　イギー！　アブドゥル！　終わったよ・・・」

「・・・誰それ？」

続く

おまけ：マイケルとステファニーとチャック

「どうだい？　そっくりさんなんて意外と身近にいるものなのさ
それこそ　トモヒトの様にその両方と付き合う機会だって巡って来ることもある
これで安心だろマイケル？」

「だから！　君はチャックと浮気してるんだろ？」

「違うわ・・・私達は・・・トラップ遊びをしてただけよ！」

「トランプ遊び？　ベッドの中で？　傑作だ！　ストレートフラッシュは出たかい？」

「お願いだから話を聞いて！」

「嫌だね！　ちくしょう！　僕を馬鹿にしているのか！？」

「マイケル！」

「・・・・・ＯＫ！　僕の話なんて聞いてなかったようだね」

１０９．クリソツな彼女（後書き）

今回の反省

更新サボってごめんなさい
哀のキャラ壊してごめんなさい
ジョジョ過ぎてごめんなさい
アメリカンホームコメディみたいでごめんなさい

何て言うかあれです
今年の夏は本当に暑かったですから・・・
可哀想な人だな・・・と思って下さい

ってことで
まったく反省していないおっとりが
次回は１１０話をお送りするのです

バイバイキーン（猛暑のせいです）

１１０．非行少女Ｓ（前編）

男は結婚して夫になった
そのうち女の子が誕生・・・
男はパパになった
目に入れても痛くない（実際やると激痛）
宝物の様に・・・否　それ以上にその子を大切にする
その子はどんどん大きくなって行く
そのうち一緒にお風呂に入ってくれなくなり
部屋のドアをノックしないと怒る様になり
洗濯物が分けられる様になり・・・
そうやってどんどんその子は　男の手の届かない所へ行ってしまう
パパのいない所で・・・どうしているの？
男は苦悩する・・・

第１１０話　非行少女Ｓ（前編）

コンコン・・・

「入りますよ～」

その日　フリーザ様は毛利探偵事務所を訪れていた
ポアロに行こうと家を出る際　博士からおつかいを頼まれたためである
充電の完了した追跡メガネを手に　フリーザ様は事務所の扉を開けた

「おや・・・誰もいない」

しかし事務所はもぬけの殻・・・コナンはおろか小五郎すらいない

「仕方無い・・・しばらく待たせてもらうことにしましょう」

フリーザ様は溜息を一つして　目の前のソファーに腰掛けた
それにしても・・・
探偵事務所でこうして一人になるのは初めてである
フリーザ様は探偵事務所の人間ではないのだから当然ではあるが・・・

しかし　一人になってみると　いろいろやってみたくなるのが人と言うものである
フリーザ様はソファーから立ち上がると事務所内をうろちょろし始めた

「ヨーコちゃんビデオ・・・小五郎さんは相変わらずですね・・・」

とりあえず上から教育テレビの「将棋講座」でも録画しておこう・・・

フリーザ様は「ヨーコちゃんビデオ」をデッキに挿入すると　チャンネルを「教育」に合わせて録画ボタンを押した

「さて　他にやることは・・・ん?」

次に目に付いたのは小五郎がいつも座っている椅子
コナンの傀儡(かいらい)のヘッポコ探偵の分際で随分と良い椅子に座っているではないか

「どれどれ・・・」

座ってみる・・・なかなかの座り心地
こっそり持ち帰ってやろうか？
フリーザ様がそんなことを考えていた時だった

コンコン・・・

扉をノックする音・・・
コナンだろうか？

「開いてますよ」

フリーザ様がそう言うと扉が開いた

「失礼します・・・おや？」

入って来たのはフリーザ様がまったく見覚えのない男
ひょっとしたら依頼人だろうか？

「あの・・・毛利探偵は？」

「先生は今出かけております・・・宜しかったら助手の私がお話を伺いますが？」

これは面白い・・・
ここは一つ　この男の依頼を果たして自分が報酬を頂いてやろう
そんな企みを抱きつつ　フリーザ様は目の前の男をソファーに座らせた

「最近・・・とみに娘の帰りが遅くなって・・・
その・・・娘には悪いのですが・・・心配で・・・」

男の名前は鈴木史郎・・・良く分からないがいくつも企業を経営しているらしい
依頼内容は・・・どうやら娘の素行調査らしい
殺人事件などの大事件を期待していただけにちょっとがっかりしたが
次の瞬間　「報酬」の二文字が頭を過ぎったので　フリーザ様は黙って男の話を聞いた

「で？　娘さんの写真とかあるんですか？」

とりあえず顔も分からなくては調査のしようがない・・・
フリーザ様がそう言うと鈴木は懐から写真を取り出した

「おや・・・これは園子さんじゃないですか」

「ご存知でしたか・・・まぁ私もこちらの娘さんが私の娘の友人と言う事で
そう言うこともあって毛利探偵にお願いしようと思ったのですが・・・」

そう言うと男は自分の腕時計に目をやった

「おっと・・・こんな時間だ！
すみません・・・それでは毛利探偵によろしくお伝え下さい」

そう言って鈴木は探偵事務所を後にした
それにしても・・・
自分の部下である園子が非行に走っているとはいただけない
フリーザ様は園子の素行調査のため探偵事務所を後にした・・・

・・・・・・

午後の米花公園・・・そこに少年探偵団は集合していた
自販機で買ったジュースを片手に芝生の上に腰を下ろすと
さっそく探偵団会議が開かれた

「今日の議題はもちろん　ここ最近起きている美術館泥棒についてです」

議長の光彦が拳を握り締めながら言った

「先週もすごい高い宝石とかが盗まれたってニュースでやってたよ」

「それで・・・？　まさかお前ら・・・！」

コナンが見ると元太や光彦・・・そして歩美がニヤニヤしている

「もちろん！　俺達でその美術館泥棒を捕まえるんだよ！」

そう来るだろうと思った・・・
しかし　呆れつつも反対しない自分がいた
実のところ　コナンもこの事件については興味があったのだ

「まぁ・・・何にせよ危なくない程度にしろよ」

「は～い！」

元気良く返事をする三人・・・絶対分かってないな
諦めて溜息をつくコナンの肩を　哀がポンポンと叩いた

「あら？」

その時　哀があるものに気が付いた
一際目立つビジュアル系・・・
向こうも気が付いたのか　こちらに向って歩いてくる

「これはこれは皆さんお揃いで・・・」

まずいのに絡まれてしまった・・・
探偵団は厄介なことにならない様に　なるべく目を合わせない様にした

「ところで・・・園子さん見ませんでしたか？」

「え？　園子？」

てっきり「何をしているんですか？　私も混ぜなさ～い！」などと言ってくるものと思っていたので
探偵団は拍子抜けした様な顔でフリーザ様を見た

「園子なら・・・そろそろ学校が終わる頃だから　帝丹高校に行けば会えると思うぜ」

「そうですか・・・それじゃ！」

コナンの言葉を聞くと　フリーザ様は礼も言わずに去って行った

「何だあれ・・・？」

やや不審さを覚えつつも　とりあえずは面倒事に巻き込まれずに済

んだので
探偵団はそのまま会議を続行することにした

・・・・・・

「どうしたの蘭？」

不意に声を掛けられて　蘭は一瞬ビクッと肩を震わせつつ振り返った
そこにはクラスメイトの顔がある

「うん・・・園子はどこかな～って」

「園子？　園子ならさっき帰ったわよ？」

「え？」

今日もか・・・
そう思いながら窓の外を見ると　校門の辺りに園子を見つけた
やや走り気味に去って行く・・・

「どうしたんだろう園子？　何だか最近付き合い悪いなぁ・・・」

「言われて見ればそうね・・・」

若干気にはなるが・・・今無理に追うこともない
明日にでも聞けば　きっと訳を話してくれるだろう
蘭はそう思い直して　荷物をまとめると教室を後にした
・・・しかし「明日」とも言っていられない人物が一人いた
フリーザ様である

走り去る様に校門から出て来た園子を見るとバレない様にこっそりと追跡を始めた

「ほっほっほ・・・逃がしはしませんよ!」

そんなフリーザ様に気付かずに・・・園子はひたすらどこかに向って走っていく
フリーザ様はその後を物影に隠れたりしながら慎重に付けて行った
園子にはバレていないが・・・周りから見ればかなり挙動不審だ

「何ジロジロ見てんですか?　消し去りますよ?」

あまりの不審さに眉をひそめる人々に殺気のこもった視線を突き刺しつつ追跡を続ける
しかし　園子はどこまで行くのか・・・?
電車に乗って・・・乗り換えて・・・乗り換えて・・・
これでは帰りが遅くなるのも頷ける

「くそ・・・博士さんの財布からもっと多めに税金を取っておくんでした」

それは財布の心配をし始めた頃だった
園子は電車を降りると　今度は乗り換えることなく改札をくぐった
フリーザ様もそれに続く
それにしてもすごい田舎だ・・・
放課後　こんな田舎までやって来て　園子はいったい何をしているのだろう?
日が沈み・・・だんだんと暗くなっていく田舎道を園子は振り返りもせずに進む
そして・・・

遂に完全に辺りが暗くなった頃　園子はまったく人気のない古びた神社に入って行った

「神社・・・しかもこんなボロイ所で園子さんは一体何を・・・？」

物音を立てない様に鳥居をくぐると　フリーザ様は木の陰に身を隠してそっと園子の様子を覗った
境内の隅の方で何かしている・・・
暗くて良く分からないが・・・小さなお堂だろうか？
そのお堂の前に小石を積み上げている

「何かのおまじないでしょうか？」

意図は分からないが・・・
とにかく園子は　ここ最近毎日ここに来ては小石を集め　そして積み上げているらしい
神社の中は　元々砂利が綺麗に敷かれていたのだろうが
園子がこんな事をしているせいだろう・・・斑模様の様に所々土が露出している

「それにしても・・・いつまでこんな事を続ける気でしょうね・・・」

お腹も空いてきたし・・・いい加減帰りたい
どうやら他に特別何かをしていると言う訳でもなさそうだ・・・
これ以上見ていても意味がない・・・フリーザ様は思い切って声を掛けてみることにした

「何をしているんです？」

後から急に声を掛けられ　園子は驚いてバッと後を振り返った
そのあまりの驚き様に　逆にフリーザ様が驚いてしまったぐらいである

「見ぃい～たあぁ～なぁあ～・・・」

ものすごい形相でフリーザ様を睨み付けると「フゥー・・・」とネコが怒ったような声を出す園子
フリーザ様が呆気にとられていると　今度は鬼婆の様に髪を振り乱しながら襲い掛かって来た

「キシェァアアアアアアアア！！！」

何だかやばい！
そう思って身構えたフリーザ様だったが・・・何も起こらない
恐る恐る顔をあげて見ると　そこに園子の姿は無かった
耳を澄ますと　誰かが走り去って行く足音が聞こえる・・・
だがフリーザ様はただ呆然と立ち尽くすだけで追うことが出来なかった
一体今のは何だったのか？
頭の中で必死に整理する・・・

「ハッ！　・・・キツネですか！？　キツネに憑かれたんですか！？」

父親は探偵より陰陽師に相談すべきだ・・・
フリーザ様はそんな事を思いながら　帰りの電車賃が無い財布をぼーっと見つめた

続く

１１０．非行少女Ｓ（前編）（後書き）

後編に続きます
お年頃の女の子は難しいですね
良く分からないです　本当に・・・
園子みたいにお堂の前に小石を積み上げても不思議はありません

・・・無理がある？
そうですか？
う～ん・・・

キシェァアアアアアアアアアアアアアア！！！

さぁ皆さんもご一緒に！
大声で叫ぶと健康に良いですよ

キシェァアアアアアアアアアアアアアア！！！

１１１．非行少女Ｓ（後編）

第１１１話　非行少女Ｓ（後編）

迎えに遣させたビートルの中で　フリーザ様は考えていた
一体園子は何故あんな事をしていたのか？
園子のことだから　きっと何かお得な事があるに違いない
ひょっとしたら・・・！
お堂の前に石を積むことによって　ドラゴンボールの様に願いが叶うのでは？

「何よ？　にやにやして・・・」

隣に座っている哀がフリーザ様の顔を覗き込んで来る

「ハイバラさん！　明日　私と一緒に来てもらいますよ！」

「どこに・・・？」

そんな素晴しいものを園子に独占させる訳にはいかない
フリーザ様の野望を乗せて・・・ビートルは米花町の我が家を目指した

・・・次の日
帝丹高校・・・昼休みの教室で蘭は園子と昼食を取っていた
その時　蘭は昨日の事を思い出した

「ねぇ園子・・・最近帰りが早い様だけど　どうして？」

「へ・・・？」

蘭が質問すると　園子は弁当箱を突付いていた箸を止めて蘭を見た
しかし　蘭の質問の内容を理解すると　その視線を蘭から逸らした

「ん～・・・別に！　気分かな？　気分！」

「気分って・・・園子」

「ねぇねぇ！　そんな事より聞いた？　C組の小柴君がさぁ・・・」

明らかに話をはぐらかそうとしている・・・
しかし　何か話したくない様な事情でもあるのだろうか？
その時は深く追求せずにいたが　蘭はだんだんと心配になり
そして・・・放課後　園子を付ける決心をした

・・・そして放課後
蘭は夕暮れの田舎道を歩いていた
園子が昨日と同じ様に　電車を乗り継いで神社に向っているからだ
昨日フリーザ様に見つかったため　園子はかなり警戒していたが
蘭は何とかバレずに神社まで到達した

「園子・・・こんな所で何を・・・？」

心配そうに見守る蘭の目の前で　園子は昨日と同じく小石を集め・・
・そしてお堂の前に積み始めた
異様な光景・・・

何かに取り憑かれた様に　ひたすら小石を積み続ける園子
淡々とした作業・・・だんだん見ていられなくなる・・・
そして　それは遂に蘭の我慢の限界を超えた

「園子！」

蘭は園子の手を掴んで止めに入った

「キシェァアアアアアアアアアアア！！！」

驚いた園子はその手を振り解いて逃げようとする
しかし蘭はその手を放さない

「お願い園子！　私は心配なの！　何でこんな事をしているの？
訳を話して！」

蘭が叫ぶ様に言うと　園子はフッと大人しくなった
そして膝から崩れ落ちる様に地面にへたれ込むと　涙声で語り始めた

「今度ね・・・真さんの試合があるの！」

「はぁ？」

「訳が分からない・・・」と言った表情を作る蘭
しかし園子は構わずに話を続けた

「今回の大会は強敵揃いだって　真さんがメールでそう言うから・・
・だから私　必勝祈願をしようと思って・・・
そしたらこの間　道を歩いてた時に占い師の人に呼びとめられて・・
・良いおまじないを教えて上げるって・・・

でも・・・誰にも話しちゃだめだよって・・・」

涙ながらに話す園子・・・蘭は優しくその肩を抱いた

「おまじない・・・邪魔しちゃってごめんね・・・
でも京極さんなら大丈夫！　きっと今回も勝つわよ！」

「蘭・・・」

「だから園子は体を壊さない様に・・・こんな所に遅くまでいたら
風邪ひいちゃうよ」

蘭はそう言って　園子に「帰ろう」と促した
しかし　その時であった・・・
蘭は園子が手にしていた小石が目に付いた

「園子・・・それ・・・？」

「ん？　ここに積み上げようと思ってそこから持って来たやつだけど」

園子が手にしていたそれは神社の砂利と言うにはあまりに綺麗だった
曇り無く真っ白なその石は　月の光を反射して妖しく輝いてる
蘭と園子は思わず見とれてしまった

「何だ・・・見つけてくれたのか」

その時　静かな神社に突然男の声が響いた
蘭と園子が声のした方を見ると　数人の男がニヤニヤしながら二人を・・・二人の持つ石を見ていた

そして園子はその男達のうちの一人に見覚えがあった・・・
殴られたのか・・・顔はボコボコに腫上がっているが　間違いない！

「あなたは・・・この間の占い師！　どういうこと！？」

「へっ！　お嬢ちゃん・・・おめぇさんはこの男に利用されてたのさ！
この男は俺達　盗賊団『トビウオ』のメンバーなんだが・・・この間　盗品の一つを持ち出しやがってな」

メンバーにバレ慌てた挙句　とりあえずこの神社の砂利の中に隠したのだが
間抜けなことに自分でも場所が分からなくなってしまい・・・

「私を騙して砂利の中からこの石を探させたのね！」

「そう言うことだ・・・だがその石は我々『トビウオ』が苦労して美術館から盗み出した物
大人しくそいつを渡して貰おうか？　そうすれば命は助けてやるぜ・・・」

そう言ってジリジリ近寄ってくるトビウオのボス
園子は恐怖で震え上がりながら　手の中の石を見た

「ダメよ園子！　渡しても　どうせ殺されるわ」

そう言って蘭は身構える
それを見るとボスは口の端を吊り上げた

「勇敢だな娘だ・・・だが愚かだ！」

そう言って懐から大きなナイフを取り出し　ボスは蘭に襲い掛かろうとした
盗賊団のボスと言うだけあってすごい身のこなし・・・
蘭の体が一気に強張った

「そこまでですよ！」

「誰だ！？」

突如響き渡った声・・・
それは蘭と園子の聞きなれた声だった
フリーザ様と哀が神社にやって来たのである

「ふ・・・フリーザ様！」

「ボス！　あいつを知ってるんですか？」

「前・・・『仮面戦士アルトゥール』に出てた宇宙の帝王だ・・・」

「誰っすか・・・それ・・・？」

特撮俳優が何故ここに・・・
動揺するトビウオを他所に　フリーザ様は園子がお堂の前に積み上げた石を見た

「あの小石・・・どんな効力があるのか楽しみにしていたのに・・・
人を散々期待させておいてこんなオチとは・・・潔く腹を斬りなさ～い！」

「・・・何でよ」

ツッコミを入れる哀とは対照的に　ボスは困惑していた
お宝を回収して終わり・・・楽な仕事・・・そう思ってこのボロ神社にやって来たのに
まさかフリーザ様がいるとは・・・

「くそ！　出あえ～！　出あえ～！」

ボスの掛け声と共に　物影に隠れていたトビウオのメンバーが武器を持って飛び出して来た

「こやつはフリーザ様の名を語る痴れ者（しれもの）ぞ！　斬り捨てえい！」

「・・・時代劇？」

フリーザ様を取り囲み　次々となだれ込んでくる「トビウオ」のメンバー
静寂だった神社が怒号に包まれる
デコピン一発で額を割れば　もう一方で胸倉を掴んで放り投げる
両者入り乱れての大立ち回りと言ったところであろうか？
濁流のように襲い掛かって来る悪党共をあれよあれよとなぎ倒すフリーザ様・・・
その様子に　蘭も血が騒いだのか加勢する
二人の怒涛の攻撃に　あれだけいた悪党共も残すところ後七人
怯えに怯えた表情でフリーザ様を見ている

「な・・・何をしている！　掛かれ！　掛かれ！」

ボスがけしかけてみるが　しかし子分達は足が竦んで動けない

先ほどとは打って変わって　風の無い日の湖面の様に静かになって
しまった悪党共
それを見て「今度はこちらの番だ」と言わんばかりにフリーザ様と
蘭が襲い掛かる
一人二人・・・三人四人・・・五人六人・・・
紙くずの様に宙を舞う子分達
そして遂に　子分達の守りを失った悪党の親玉が一人取り残された

「ま・・・待て！　待ってくれ！」

「待ちませ～ん！　蘭さん・・・成敗！！！」

逃げようとしたボスの後頭部を蘭の鋭い蹴りが直撃する
前のめりに倒れると　ボスはピクリとも動かなくなった・・・

・・・・・・
こうして　盗賊団「トビウオ」は駆けつけた警察に連行されて行った
一連の美術館荒らしの犯人は彼らだったらしく
したがって彼らを捕まえて手柄を立てようとしていた探偵団をひど
く落胆させたが
事件は・・・そして園子の非行騒動は一先ずの決着を見た

そして数日後・・・
フリーザ様はいつもの様にポアロにやって来ていた

「・・・・・平和ですねぇ～」

コーヒーを口にしながらボーっとしていたその時だった

「よぉ・・・」

珍しい事もあるものだ・・・小五郎が話しかけて来た

「何ですか？」

「お前・・・いつから内の事務所の助手になったんだよ？」

そう言えばそうだった・・・

鈴木から素行調査の報酬をまだ受け取っていない

そんな事を考えているフリーザ様の目の前で小五郎は怒りの形相をしている

「何をそんなに怒っているのですか？」

「ヨーコちゃん・・・ビデオ・・・将棋・・・！」

すっかり・・・忘れていた・・・

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード３８　「世紀末名探偵伝説４」

新一と蘭・・・そして野盗のジムは砂漠を歩いていた

照りつける太陽が恨めしい・・・

「オアシスでもねぇかな・・・」

「この辺りは枯れた土地だからね・・・もう少し辛抱してよ新一」

オアシスさえあれば・・・水も飲めるし情報も手に入る・・・
オアシス・・・無いかな・・・
そんなことを考えている時だった
砂漠のど真ん中にボケーっと立っている二人の男が見えた

「あなた達・・・こんな所にいたら干からびるわよ?」

「見たところ野盗みたいだが・・・お前らどこのメンバーだ?」

蘭とジムが質問するが・・・二人はボケーっとしているだけで何も言わない
何がどうなっていると言うのだ?

「ん?」

その時・・・
新一はその二人の後に続く足跡を発見した
足跡は一・・・ニ・・・三人分
もう一人の足跡は二人の所で折り返して元来た道を戻っている様だった

「行ってみるか・・・」

ひょっとしたら七つの傷の男に関係しているのかもしれない
新一は足跡を追い始めた

To be continue

１１１．非行少女Ｓ（後編）（後書き）

ってことで非行少女Ｓはこれにて終了
・・・にしても暴れん坊将軍の見すぎ？　なんでしょうか・・・？
もう・・・何て言うんですか？
マツケン　サ～ン～バ～

成敗！

みたいな感じで・・・＾＾；

そしておまけは一変して世紀末・・・
もうこのシリーズおまけじゃなくて別の小説として独立させた方が・・・
そう思い始めた今日この頃です

何はともあれ・・・１１２へ

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ　・・・

１１２．隠された女達

１８年前の話である
教会を切り盛りしつつ　併設された孤児院で子供達の面倒を見る
心優しい神父がいた
ある日神父が出先から帰って来ると　門の所に見慣れぬダンボール
を発見した
教会を出る時には見かけなかったが・・・？
不審に思った神父は恐る恐るダンボールに手を伸ばした
すると　中から何やら声がするではないか・・・
まさか！　そう思い神父がダンボールを開けると
そこにはまだ赤ん坊の女の子が二人入っていた・・・いっしょに手
紙も入っている
しかし　神父は手紙を開かなかった
孤児院をやっているのだ・・・書いてある事など読まなくとも分かる
神父は二人の女の子を抱き上げると教会に入って行った

「行くあてが無いのなら・・・ここにいると良い」

その日・・・孤児院に新たな仲間が加わった

第１１２話　隠された女達

「まったく・・・退屈な事務所ですね」

フリーザ様はそう言って溜息をついた・・・

・・・フリーザ様は今　毛利探偵事務所で働いている
主な仕事内容は事務所の掃除・・・そしてヨーコちゃんグッズの整理である
給料は・・・無い
これは「ヨーコちゃんビデオ」を一つダメにしてしまった罰なのだから

「ほらほら・・・文句言ってないで仕事仕事！」

哀が　からかう様に言った
・・・と言っても　ろくな仕事などありはしない
名探偵の事務所がこんな事で良いのだろうか・・・？
フリーザ様はまた大きな溜息をついた

「ところで・・・お前は何してんだよ灰原？」

さり気なくいたので気が付かなかったが・・・哀がいる意味が良く分からない
コナンは自分の向かいのソファーに腰掛けた哀に聞いてみた

「普段偉そうにしているフリーザ様がこき使われているのよ？
こんなに面白いショーは滅多に見られるものじゃないわ・・・」

フリーザ様が哀を睨み付ける
しかし哀はそれを嘲笑うかの様に「仕事仕事！」と檄(げき)を飛ばす

「くっ・・・！　覚えていなさいよハイバラさん・・・」

それにしても・・・
大人しく罰を受け入れるとは・・・フリーザ様も随分丸くなったも

のだ
「朱に交われば赤くなる」と言うが・・・言葉通りにいけば　フリーザ様はもう真っ赤であろうか？
哀はフリーザ様が現れた頃を思い出した

コンコン・・・

その時・・・
事務所の扉がノックされた

「おいフリーザ！　客だぞ」

「・・・はいはい」

小五郎が言うとフリーザ様は掃除をしていた手を止め　客人を迎え入れた
どうやら依頼人らしい・・・

・・・依頼人の名前は小瀬安二郎（おせあんじろう）
依頼内容は「ある女性を探して欲しい」と言うものだった

「フリーザ！　お茶まだか！？」

「は～い！　ただいま～・・・チッ！」

フリーザ様の舌打ちをしっかりと聞き取りつつ　小五郎は話を進めた

「それで？　その女性と言うのは？」

「えぇ・・・話はちょっと長くなるんですが・・・」

小瀬は話始めた・・・
なんでも　小瀬の父親はたいそうな資産家で　金を稼ぐのが生きがいの様な男だったのだが
2年前　莫大な遺産と遺言を残して亡くなってしまったらしい
しかも　彼の父親は遺言の中でとんでもない事を書き残して逝ったらしいのだ

「その内容って言うのは？　・・・おい！　お茶はまだかフリーザ！」

「うるさいですよ！　今　茶柱を立てているんですよ！」

「あ・・・あの・・・茶柱は結構ですから・・・」

給湯室のフリーザに向ってそれだけ言うと　小瀬は懐から紙を取り出した
どうやら遺言の現物らしい

『　遺言・・・

私の様な金の亡者が、良くも今の今まで長生き出来たものだ。
だが、それもこれまでだ。私の命はもう長くない。自分の体のことは、自分が一番分かっている。
さて、私が死ぬとなると、お前達残される者達の興味は私の遺産だろう。
いや、悪いことではない。
私は今まで金を稼ぐことばかりを考え、お前達に何もしてやれなかった。

せめて、私が稼いだ金で贅沢をさせてやるくらいしか出来ないのなら、私は喜んで財産をお前達に残そう。
私のせめてもの償いだと思って、盛大に使ってくれ。

しかし、私にはお前達の他に、償いをしなくてはならない人達がいる。
お前達には黙っていたが、私には昔　愛人がいたのだ。
そして、その愛人との間に子供まで生(な)してしまった。
しかし私は愚か者だった。
金のことしか頭に無く、愛人も遊び程度にしか考えていなかった私は、彼女と子供を切り捨てた。
それ以来、連絡を取っていないが、きっとどこかで苦労していることだろう。
探し出して遺産を分けてやって欲しい。
愛人と、そして私との子である双子の姉妹。その三人だ。

遺産の取り分は、お前達とその三人で均等に分けなさい。
あくまで平等にだ。分け隔ては許さない。後のことは全てお前達に任せる。
そして最後に、すまなかった。
達者で暮らせ。

平成〇×年☆月△日　　小瀬(おせ)慎之介(しんのすけ)　』

・・・・・・

「なるほど・・・と言うことは　探して欲しい女性と言うのはその愛人と双子の姉妹って訳ですな?」

「あっ！　いえ・・・三人と言うか・・・」

「おまたせしました！　お茶ですよ～！　やっと茶柱が立ちましたよ」

「・・・立てたの私だけどね」

小瀬が何か言いかけたところでフリーザ様と　見かねて手伝いに行った哀がお茶を持って来た
あまりの遅さに呆れつつも小五郎はお茶を受け取り　口に運んだ

「何だこりゃ・・・すっかり冷めてるじゃねぇか！　入れ直して来い！」

あれだけ時間が掛かったのだから当然である
小五郎はお茶を突き返した
しかしその茶碗はフリーザ様の手に鷲掴みにされたかと思うと
小五郎の頭の上にひっくり返された

「何しやがる！」

お茶でずぶ濡れにされた小五郎が声を荒げる
しかしフリーザ様もこめかみをヒクつかせながら小五郎を睨みつけた

「そんなに文句を言うなら自分で入れれば良いでしょう！」

「あ・・・あの・・・冷めたお茶で結構ですから・・・」

小瀬は二人をなだめると話を続けた・・・

・・・実はその遺言が見つかってすぐ後に　彼は愛人と双子の姉妹を探したらしいのだが
愛人は父親と別れてすぐ　自ら命を絶っていたこと・・・
そして双子の姉妹は孤児院に預けられたことが分かった
そこで今度は姉妹が預けられた孤児院を訪れたのだが　姉妹は別々の家庭に引き取られてしまったらしい

「でも誰に引き取られたかぐらい孤児院の資料とかで・・・」

「はい・・・一人は分かったのですが・・・」

実は8年前に孤児院で火事があり　資料の一部が焼失
もう一人の行方が分からなくなってしまったのだと言う

「孤児院の方の話で分かったのは　名前が『萌(もえ)』であることと
『東京のどこかにいる』ということだけで・・・」

「その萌さんを探して欲しいと・・・」

「はい・・・父の遺言通りにしてあげたいので」

しかし・・・どうしたものか?
小五郎はあごに手を当てて考え込んだ
「萌」と言う名前の女性が東京に何人いるだろうか?
せめて顔が分かればまだ探しようがあるのだが・・・

「彼女の写真とかなんて・・・」

「残念ながら・・・」

「ですよねぇ～・・・」

小五郎は溜息をついた
しかしその時　小五郎のソファーの後で黙って話を聞いていたコナンが顔を出した

「ねぇ！　もう一人の人はどこにいるのか分かったんだよね？」

「え？　うん・・・彼女にはもう遺産の話もしてあるよ」

「その女の人達って双子さんなんだよね・・・僕の学校にも双子の子がいるけどソックリで見分け付かないよ！」

そうか・・・！
小五郎はハッとした表情で小瀬を見た

「その双子って一卵性ですか？」

「え？　・・・えぇ多分・・・そっくりだったと孤児院の方が言ってましたから」

「なら　もう一人の顔を確認すれば　とりあえずその『萌さん』の顔は分かるって訳だな」

早速そのもう一人の家に行ってみよう！
小五郎はソファーを立ち上がろうとした・・・

「あの・・・毛利先生？」

その時　小瀬は小五郎を見て困った様な顔をした

「ひょっとしてお時間無いですか？　でしたら私だけで行って来ますので場所を・・・」

「いえ・・・時間はあるのですが・・・」

小瀬は何か言いにくそうに・・・
小五郎を頭からつま先まで見てからフッと笑った

「先生　ずぶ濡れじゃないですか・・・」

そういえば・・・
さっきフリーザ様にお茶をかけられたままだった
小五郎はばつが悪そうに咳払いをするとフリーザ様を睨み付けた

「おいフリーザ！　上から俺の新しいスーツを持って来い！」

「また命令ですか・・・チッ！　はいはい・・・取って来ますよ」

そしてしばらくすると　フリーザ様はスーツを持って来た
しかし・・・小五郎はそのスーツを見ると顔をしかめた
それは英理との初デートの時のスーツだったからである

「これは・・・ダメだ・・・」

「何でですか？」

「ダメなもんはダメだ！　もう良い！　自分で着替えてくる！」

「だったら最初からそうすれば良いのに・・・死ねよチョビヒゲ」

「あんだと!?」

「まあまあ・・・二人とも・・・」

前途多難だ・・・

小瀬は思い切り不安になってしまった

続く

１１２．隠された女達（後書き）

ってことで続きます
賢い人には私がやろうとしていることがバレるかも・・・
そんな風にビビっております
そんな１１２話なのです
まぁ良いですけどね・・・
バレてもやりますから

ところで「遺言」という言葉が出てきましたが　皆さんはどう読みますか？
私は「ゆいごん」と読みます
でも私の友人は「いごん」と読みました
で・・・お互いに
お前なんじゃその読み方は？
やんのかコラ！？　あぁ！？
と言う話になりまして・・・
二人で別の友人に聞いたらどっちも正しいそうです
一般的な読み方が「ゆいごん」
法的な読み方が「いごん」
だそうです・・・ふ～ん

・・・知るか

113．らせん状の絆

第１１３話　らせん状の絆

「これが一番最近のアルバムです」

小五郎は差し出されたアルバムを開いた

蘭とそう変わらない娘がにっこりと微笑んでいる

「娘さん帝丹高校だったんですね・・・うちの娘も今通っているんですよ」

「そうなんですか」

そんな会話をしながら　小五郎はたくさんある写真の中から一枚を選んだ

「お借りしても・・・？」

「えぇ・・・娘もそれを望んでいるでしょう」

小五郎のお願いに　その夫婦は快く承諾してくれた

小五郎は丁寧にお礼を言うと　写真を持って玄関を出た

「どうでしたか？」

外では依頼人の小瀬とフリーザ様・・・そしてコナンと哀が待っていた

小五郎は四人に写真をピラピラと振って見せた

「これでとりあえず顔は分かったな・・・」

小五郎達は今　双子のうちの一人が引き取られた佐茂家に来ていた・・・

引き取られた娘の顔を確認するためである

残念ながら娘自身は一年前に亡くなってしまっていたが　小五郎は娘の写真を借りることが出来た

「どれどれ・・・どんな顔してるんですか？」

フリーザ様は小五郎から写真を奪うと　そこに写り込んだ少女の顔を見た

「んん～？」

フリーザ様が珍妙な声を上げる

何が写っていたのはどこかで見た事のある顔・・・

気になって　哀も背伸びをして写真を覗き込んだ

「あら？」

そこに写っていたのはどこかで見た事のある顔・・・

そう・・・つい先日見たばかりだ

「ハイバラさん・・・この人・・・」

「そうね・・・それに佐茂って苗字も確か・・・」

「お前ら知ってるのか？」

小五郎が尋ねると　フリーザ様と哀はある場所に向って歩き始めた・・・

・・・・・・

フリーザ様と哀の案内で　小五郎達はとあるパン屋の前にやって来ていた

そこは　先日「蘭姉ちゃんの人生相談室」にやって来た馬明伴人が「彼女」に告白した場所だった

そして　その「彼女」の顔が写真の少女とそっくりなのである

「そしてその女性の行きつけのパン屋があそこなのです」

「なるほどな・・・」

「行きつけ」と言うことはこの辺りに住んでいると見て間違い無いだろう

あごに手を当てながら考えると　小五郎は写真を持って歩き始めた

「この辺で聞き込みしてくる・・・」

「あ！　私も行きます！」

そう言って　小五郎と小瀬は街に消えて行った

残されたフリーザ様・・・どうやら小五郎は「もう帰っていいぞ」と言いたいらしい

しかし　こんな気になるところで「帰れ」と言うほうが無理だった

「さて・・・私達も聞き込みをしますか」

フリーザ様がそう言うと哀は「ふぅ」と溜息をついた

「でも写真はあの迷探偵が持って行っちゃったわよ」

「しまった！　・・・どうしましょう？」

「ったく！　肝心なところが抜けてんだからな・・・」

そう言うとコナンは携帯を取り出した
ディスプレイには先ほどの写真の少女が映し出されている
いつの間に携帯のカメラで撮影していた様だ

「コナンさんは逆に抜け目が無いですね・・・良い泥棒か詐欺師になれますよ」

「探偵って言えよ！」

そんなこんなで　フリーザ様達も聞き込みを開始した
しかし　思いのほか良い情報が手に入らない
この近所にいることは確からしく　皆「見た事がある」「あぁ！この人ね」などとは言うが
「ここに住んでいる」「○○さんだ」と言う言葉が聞かれることは無かった

「なんて役に立たない住民共でしょう！」

「仕方ねぇよ・・・」

「そうね・・・普段から他人のことを気にかけてる人間なんてそういないわ」

青筋が浮き出てきたフリーザ様を何とかなだめる二人・・・
しかしその時　三人は後から声をかけられた

「何やってんだ？　こんな所で」

三人が振り返ると　そこには桜塚がいた・・・
どうせまた取り立てか何かだろう

「人を探しているんですよ・・・桜塚さん知りませんか？」

あまり期待せずに聞くフリーザ様・・・
コナンも携帯の画面を桜塚に見せる

「俺もこの辺は詳しくねぇからな・・・ん？　こいつは・・・」

「知ってるんですか？」

フリーザ様が聞くと桜塚は深く頷いてから　数日前のことを思い出した

・・・数日前
桜塚は知り合いの店にやって来ていた
表向きはただの雑貨屋であるその店・・・しかし桜塚の知り合いというだけのことはある
そこは裏で密輸した銃火器を売買する「そっち系」の店だった

「繁盛してるか？」

「桜塚か・・・雑貨屋なんて儲からない仕事さ・・・雑貨屋はな・・・」

そう言って店主はニヤリと笑みを浮かべた
どうやら繁盛しているらしい

「おっと・・・雑貨屋にもお客だ」

すると一人の若い女性が入店して来た
店主は一瞬で「表」の顔に切り替わると　女性にあいさつしながら
桜塚に向って「シッシッ」と手を振った
当たり前である・・・こんな柄の悪い男がいたら客が逃げてしまう
しかし　女の口からは思いもしない言葉が飛び出してきた

「このお店で　危なっかしいモノが手に入るって聞いてきたんだけど・・・」

すると店主の顔から笑顔がパッと消えた
数秒間の沈黙を置いて・・・店主は女性の方に向うと小声で話し始めた

「この店に『危なっかしいモノ』なんて置いてませんよ・・・裏へどうぞ」

そう言って店の奥の自宅スペースへ連れて行く店主・・・
部屋の奥の隠し扉をくぐると・・・そこには大小様々な銃火器が陳列されていた

「選ばせて貰うわよ」

「ごゆっくりどうぞ・・・」

すると女性は店内をぐるぐる回りながら品定めを始めた
そんな様子を見ながら桜塚は店主に耳打ちをした

「大丈夫なのか？　どう見てもまだガキだ・・・下手な客に売れば
この店の存在が・・・」

「・・・・・目だ」

「あん？」

「アレは『殺す者』の目だ・・・例え捕まっても吐きゃしねぇよ」

長年の商売で培った勘・・・そう店主が桜塚に言ったところで
欲しい銃が決まったのか女性がカウンターにやって来た

「お決まりで？」

「ＳＰＡＳ１２・・・」

「イタリア製・・・手動でも使えます」

「レーザーサイト付き　ＡＭＴハードボーラー・・・」

「赤いレーザーが出ます・・・そいつを目標に当てて撃てば百発百
中・・・他は？」

「射程４００　フェーズド・プラズマ・ライフル・・・」

「残念ですが入荷してませんよ」

「・・・ＵＺＩ９ｍｍ」

女の指定する銃を手際よくケースから出し並べて行く店主

「詳しいですね・・・で？　どれにします？」

カウンターに並べられたそれらを見て店主が聞いた

「・・・全部」

「おいおい！　お勘定の方は大丈夫・・・ッ！」

すると女は　今店主が出してきたばかりの銃に弾を込めて突き付けて来た
やられる！　・・・店主と桜塚は身構えた
しかし女は　引き金を引かずに小切手を一枚だけカウンターに叩きつけると
銃を持ってきたカバンに詰めて店を出て行った

「釣りはいらないわ・・・口止め料よ」

・・・・・・

「何ですかそのターミネーターは・・・私達が探している人とは随

分感じが違いますよ」

「そうね・・・タコ殴りにされてる男を恐る恐る助けるような人だったわ」

「でも見間違うはずねぇだろ？　強烈な印象だったんだ」

俄かに信じ難い話だが・・・
しかし桜塚の話が本当だとすると　彼女は何かとてつもない事に巻き込まれている可能性がある
いや・・・もしかしたら　彼女自身が進んでとてつもない事を巻き起こそうとしているのかもしれない

「どちらにしても　今はこれしか情報がありませんね・・・
それで？　彼女の住所とか分かりませんか？」

「今話した銃砲店の顧客名簿を見せてもらえば分かるとは思うが・・・」

そこでフリーザ様達は桜塚の案内で裏銃砲店に向った・・・

・・・・・・

「頼むよ・・・　ちょっとだけ！」

「いくらお前の頼みでも無理だよ桜塚・・・こう言う商売は信用が大事なんだぜ？」

例の雑貨屋にやって来たフリーザ様達

桜塚が顧客名簿を見せてくれる様に頼んでみたが　店主は断固として拒否した

「それにあの客からは口止め料まで頂いてるんだ！　絶対に教えられないね」

「分かったら帰れ」と店主は桜塚の肩を掴んで突き飛ばす
しかし　そこで今度はフリーザ様が店主に詰め寄った

「いい気になるなよ？　お前なんかどうにでも出来るんだよ？」

フリーザ様が凄みを利かせる
しかし　店主は「フフン」と鼻で笑うと　懐に隠し持っていた拳銃を取り出してフリーザ様の胸に押し当てた

「そんな脅しが効く様なら　この商売やっていけねぇんだよ・・・
最近入荷したばかりのこのS&Wで心臓ブチ抜かれたくなかったらとっとと消えな！」

店主がそう言った瞬間だった
突然　店主の体は空中にプカプカと浮き始めた
何が何だか分からない・・・しかし　フリーザ様がニヤニヤしているのが見えた

「な・・・何なんだ!?　お前か？　お前の仕業なのか!?」

体が言う事を聞かない・・・引き金を引きたいが引けない・・・
自分の体はどうなってしまったのか？　店主は大パニックである

「さて・・・どうしましょうか？　粉々に爆破してやりましょうか

？」

「わ・・・分かった！　見せる！　顧客名簿見せるから！」

店主が叫ぶとその体は再び重力に捕らわれ　地面に落下した

続く

１１３．らせん状の絆（後書き）

遅れました・・・
何と言うか・・・涼しくなってきまして
気候のせいでしょうか？
なんだかダル～い気分です
そのせいで遅れた様な気もします＾＾；

息をするのもメンドクセェ・・・

そんな感じです・・・
これ長引くかもしれません
しばらく更新スピード落ちるかも・・・
スイませェん・・・

メンドクセェ・・・

燃え尽きたおっとりが次回は１１４話をお送りします
不死鳥は灰の中から蘇る！

・・・・・・

蘇るのもメンドク・・・（略）

１１４．復讐の鬼

第１１４話　復讐の鬼

フリーザ様達は米花町の一角にあるアパートにやって来ていた
「メゾン・ジャミラ　３０４号室」
それが銃砲店の顧客名簿に記されていた「彼女」・・・米庭萌（まいにわもえ）の住所であった

「３０４・・・ここみたいね」

哀が「米庭」の表札が掛かった部屋を発見した
その言葉を聞くとフリーザ様はずいと前に乗り出した

「開けなさ～い！」

そう言い放ちながら扉を叩くフリーザ様
まったく何をしているのか・・・
呆れながらコナンがインターホンを押す

「ったく・・・普通にやれよ」

「だって・・・相手は銃で武装したテロリストですよ？」

それにしても・・・出て来ない・・・
留守なのだろうか？
コナンがもう一度インターホンを押す

ガチャ・・・

扉が開いた
出て来てくれたのだろうか？
そう思って横を見ると　哀がドアノブを回していた

「開いてるわ・・・」

「ナイスです！　入っちゃいましょう！」

「お・・・おい！」

遠慮なくお邪魔するフリーザ様と哀の後を　コナンも仕方なく付いて行く
しかし　残念ながら部屋はもぬけの殻・・・
萌の姿は無かった

「ん？」

その時　コナンはテーブルの上に紙が置いてあることに気付いた
何か書いてある・・・置手紙の様だ

「何ですか？　何て書いてあるんですか？」

フリーザ様と哀もその紙を覗き込んだ

『お姉ちゃん・・・仇を討ちに行って来ます』

急いだ方が良いのかもしれない・・・
突然部屋を飛び出したコナンの後を　フリーザ様と哀が追いかけて

行った

・・・その頃
伴人と萌は杯戸港にやって来ていた・・・
萌が「どうしても海が見たい」と言うので二人でデートにやって来ているのだ
仲良く手を繋ぎながら港を歩く・・・

「潮風が気持ち良いね」

そう言って微笑みかける伴人・・・しかし　その時あることに気付いた

「それにしてもすごい荷物だね・・・何持って来たの？」

萌が肩から提げている大きなバッグを見ながら伴人が尋ねる
しかし　萌はフッと微笑むだけでそれには答えなかった

「それより・・・ちょっと来て欲しい所があるんだけど」

そう言うと萌は伴人の腕をぐいぐい引っ張りながら走り出した
伴人は「おいおい」と苦笑いを浮かべながらも萌に付いて行く・・・

・・・連れて来られたのは古びた倉庫だった
使われていないのか　人気も無い
こんな所で・・・つまりは・・・そういうことなのだろうか？
伴人はそっと萌を抱きしめた
しかし萌はその腕を振り解くとバッグを床に下ろし　中から何かを

取り出し始めた

「ねぇ・・・ここに何かあるの？」

てっきり「そういうこと」なのかと思っていた伴人は不思議そうに尋ねた

しかし萌はバッグの中から取り出した何かを組み立てるだけで答えてくれない

何をしているのだろう？　伴人が萌に近付こうとしたその時だった

「こういうことよ！」

振り返った萌の手には銃が握られている

その意図は良く分からなかったが・・・咄嗟に物陰に隠れて正解だった

彼女の手に握られたそれは物凄い音を立てながら火を吹いていた

所謂サブマシンガンと言う奴だろうか？

あのままだったら確実に蜂の巣にされていた・・・

「逃がさない・・・」

萌はマガジンを交換すると伴人の方に向って歩きだした

どうやら本気で殺す気らしい・・・

伴人は事の重大さに気付き・・・とにかく身を隠すために倉庫の奥に逃げて行った

「くたばりやがれぇ！」

足音のする方に向って萌が銃を乱射する

自分のすぐ後ろで弾丸が甲高い音を立てた

逃げないと・・・
直ぐそこまで死が近付いて来ている

「ひぇえあああ～！」

「お姉ちゃんの仇め！　逃げろ！　泣き叫べ！　そして死ねぇ！」

殺気を振り撒きながら　徐々に倉庫の奥へと足を進める
しかし伴人の姿は見当たらない・・・
倉庫を出るには自分の目の前を通らなければならない
・・・と言うことは　どこか物影に隠れていると言う事だろう

コツ・・・コツ・・・

靴音が倉庫内に響く
放置されたダンボールの影で伴人はそれを聞いていた
自分のいる辺りを行ったり来たりしているのが分かる
向こうへ行け！　向こうへ行け！　向こうへ行け！　・・・
伴人は心の中で必死に念じた

コツ・・・コツ・・・

思いが届いたのか靴音は遠ざかって行く
伴人は安堵の溜息をついた・・・

ボン！

しかし次の瞬間　物凄い轟音が響いた

ガシャッ！

そして独特の音・・・
どうやら萌がショットガンを持ち出したらしい

ボン！！

また銃声
しかもさっきより近い

ボン！！！

どんどん近付いて来る
しかも銃声とポンプ音・・・それらに混じってダンボールが砕ける音がする
物陰に潜んでいると見て　手当たり次第・・・と言うことである

カシャッ！　・・・キンッ！

伴人の目の前に薬莢が転がって来た・・・
もうそこにいる！　撃たれる！

「うわあああああああああ！」

堪らずに伴人は飛び出した

「死ね・・・」

萌は銃口を伴人に向けて引き金を引いた
もうダメだ！
伴人の体は岩の様に硬直してしまった

「・・・・・チッ！」

しかし予想に反して伴人は無傷だった
振り返ると萌がショットガンを見て渋い顔をしているのが見えた
弾切れらしい・・・
この期を逃してはいけない
ショットガンはリロードに時間が掛かる
その間に倉庫を出て逃げなくては・・・
そう思い伴人は全ての力を両脚に込めて走り出した
出口を出て・・・助けを求める・・・
しかし・・・その出口がとても遠い・・・
ほんの2・3メートル先なのだが　今の自分には難儀だ

「逃がさないわよ」

まだ銃を持っていたらしい
血が溢れだして来る太股の傷を抑えながら伴人は萌を見た
大型の拳銃を構えている
そして　その上部に取り付けられた筒状の物から発せられた赤い光線が伴人の肩を捉えた

バン！

「うぐあぁ・・・！」

衝撃で体が床に崩れ落ちる
肩から流れ出た鮮血がこれからやって来るであろう死を予感させた

「楽に死ねると思うわないことね・・・」

「待って・・・待ってください！　話せば分かる！」

バン！

「ひぃッ！」

萌に向けた手の平が無残に変形する
伴人は手を押さえてうずくまった
痛くはない・・・しかし痛くないのが恐ろしい・・・

「問答無用でお姉ちゃんを殺したくせに何を言っているの？　あなたが生きていて良いはず無いわ・・・」

そう言って　萌はレーザーで伴人の胸の辺りを照らした

「もう良いわ・・・苦痛の内に死ね」

「お待ちなさ～い！」

今まさに引き金を引こうとしたところで　倉庫に声が響いた
フリーザ様がやって来たのだ
そして　それと同時にコナンがサッカーボールで萌の拳銃を吹き飛ばした

「そこまでですよ！　お縄につきなさいな」

「うるさい！　お姉ちゃんの仇を討つのよ！」

萌は吹き飛ばされた銃を拾いに走った

しかし目の前にコナンが立ち塞がる

「『お姉ちゃんの仇』ってことは・・・佐茂藍子さんが亡くなったのは・・・」

「そうよ・・・この男が殺したのよ！」

・・・1年前

藍子は激怒しながら伴人の所にやって来た

「どう言う事！？　学校中で噂になってるじゃない！」

いつも通り登校しただけなのに・・・

自分に突き刺さる好奇の視線と冷やかしの言葉

「生徒会副会長の『馬明伴人』と帝丹高校のマドンナ『佐茂藍子』は出来ている」

そんなスクープが学校中で話題になっていたからだ

「そうだよ・・・これで僕らは皆の公認のカップルだよ」

「言ったでしょ？　あなたとは付き合えないって！」

そう・・・

その数日前　藍子は伴人に告白されたがそれを断ったのだ

なのに今日になってこの騒ぎでは納得いかない

「そんなこと許すもんか・・・君の隣には僕が最も・・・最も最も最も・・・最も！　相応しいィ～んだよぉ～・・・」

「近寄らないで！」

乾いた音が響いた・・・

「最低よ！　あんたなんか大ッ嫌い！」

それだけ言い残して藍子は去って行った

伴人は赤く染まった頬を撫でながらその背中を見ていた

「許さないよ・・・君が僕の物にならないなんて・・・絶対に許さない」

・・・・・・

「そしてその数日後・・・お姉ちゃんは死んだわ・・・」

「離れて暮らしてたのに詳しいですね」

「幼い頃に引き離されたから・・・周りの大人は私達が混乱しないように会わせない様にしてたみたい・・・
でもある日偶然会ってね・・・それから私達はこっそり連絡を取り合っていたのよ」

そしてある日・・・伴人のことを相談されたのである

「違う！　僕じゃない！　確かに僕は彼女に嫌われていたが・・・
彼女は事故で死んだんだ！」

必死の形相で伴人が訴える

それを聞くと萌は深く溜息をついた

「『バナナの皮で滑って階段から落ちた』って何よ！？　いつの時代のコントよ！？
調べたんだから！　その証言をしたのがあんただって事！　本当はあんたが階段から突き落としたくせに！」

「バナナ・・・確かにうそ臭いですね」

「本当だ！　ありのまま目の前で起こった事を話しただけなんだ！」

そう言われても・・・
バナナで滑って転んで死ぬなんて　信じろと言う方がどうかしている
フリーザ様とコナンは顔を見合わせた
しかしその時　それまで黙っていた哀が口を開いた

「まぁどちらにせよ・・・こんな事をしてもお姉さんは喜ばないわ」

哀は諭す様に語り始めた・・・
今やめれば殺人犯にはならない
萌の言う事が正しければ情状を汲み取ってもらえて執行猶予が付くかもしれない
こんな馬鹿げた復讐はやめるべきなのだ

「こんな事より・・・あなたがお姉さんの分も幸せになることが天国のお姉さんのためよ」

「ほっほっほ・・・手違いで地獄にいるかもしれませんよ」

「江戸川くん！　その男を黙らせて！」

空気の読めない発言に　哀は呆れながら言った

「何するんですかコナンさん？　邪魔をしないで下さい！」

「痛てててててて・・・鼻を引っ張るな！」

しめしめ・・・
フリーザ様がコナンに気を取られている隙に　哀は説得を続けた

「私のお姉ちゃんも死んだわ・・・何度も死のうと思った・・・
でも今はお姉ちゃんのためにも逃げないって決めたから」

萌は黙ってそれを聞いていた
そして　しばらくの沈黙を置いた後・・・突然踝を返して倉庫の出口へ向った

「自首するわ・・・でもその男は許さない」

そう言って倉庫を後にしようとした萌
しかしその体は倉庫を出ることなく・・・地面に倒れ込んだ

続く

１１４．復讐の鬼（後書き）

何だか急に冷え込んで来ましたね
随分秋らしくなって来たものです
こう言う季節の変わり目には風邪をひかない様に注意が必要です
なのに私は夜更かししながらキーボードを叩いています
不健康です

そんなこんなで秋です
小さい秋～小さい秋～小さい秋～み～つけた～♪
でも私が見つけたのは「いわし雲」です
全然小さくありません
とんだ嘘つきソングです
憤りを隠せません

そんなプリプリモードのおっとりですが
次回でこの双子編も完結です
ちょいちょい小話を挟むと言った気がしますが・・・
またデカイ話になってしまいました

スマン

私はとんだ嘘つき野郎です・・・

１１５．欲望の鬼

第１１５話　欲望の鬼

地面に崩れ落ちた萌・・・
何が起こったのか？
まるで時間が停止してしまったかの様に　フリーザ様達は硬直した

「米庭さん？」

コナンが恐る恐る近付いてみる・・・

「う・・・うぅ・・・」

腹部を押さえながらうめき声を上げている
そしてその口からは真っ赤な血が一筋流れ出ていた
一体何が？
コナンが周りを見回すと　ある物が目に付いた

「亀の・・・甲羅？」

萌の側に　綺麗な緑色をした甲羅が落ちていた
さっきまでこんな物は無かった・・・
しかしまさか・・・こんな物で？

「うあ・・・あぁ・・・」

コナンが手にした甲羅を掴みながら何かを言おうとする萌

どうやら本当にこの甲羅にやられたらしい・・・

「コナンさん危ない！」

突然フリーザ様が叫んだ
それと同時に　コナンのすぐ横まで迫ってきていた何かがエネルギー波で破壊された
良く見ると亀の甲羅の様だ・・・

「みんな！　外から何者かが攻撃して来ているぞ！」

そう言いながらコナンは萌を引きずって倉庫の奥まで戻って来た
萌は気絶してしまったのかぐったりしている

「何者ですか？」

「さぁな・・・でも米庭さんを狙っていることは間違いない」

迂闊に近付くより萌を隠して誘い出すのが良策・・・
コナンは犯人がやって来るであろう扉に目を向けながらキック力増強シューズに手を掛けた

コツコツコツ・・・

徐々に足音が近付いてくる
フリーザ様もエネルギー波で仕留めようと備えた
しかし・・・
扉の所に現れた人物を見て　フリーザ様もコナンも攻撃出来なかった

「小瀬さん・・・！」

そこにいたのは小五郎の所に依頼にやって来た小瀬安二郎だった
手には亀の甲羅を数個持っている・・・

「ふふっ・・・好都合だよ！　こんな人気の無い倉庫に集合してくれているなんてね」

「小瀬さん・・・どういうつもりですか？」

フリーザ様が聞くと小瀬は笑いながら切り出した

「邪魔なんだよ！　親父の隠し子なんて・・・そんなモノがいたら私の遺産の取り分が減るだろう？」

だから消してやろうと2年前から付け狙っていた・・・
他の誰かに見つかる前に・・・自身の手で・・・秘密裏に・・・

「じゃあまさか！　一年前のアレも・・・」

「あぁそうさ！　アイツが階段を登ってくるのが見えたからな・・・
バナナの皮を仕掛けてやったのさ
バナナの皮で滑らせて殺したなんて誰も思わないだろうし・・・もしバレても犯人はストーカーのお前って寸法よ！」

そう言って笑いながら小瀬は甲羅を投げつけて来た
コナンは近くにあったペンキの缶を蹴ってそれを迎撃しようとする

ドス！

しかし甲羅はコナンを直撃した

ペンキの缶は命中したが　甲羅は缶を突き破ってそのままコナンの方へ飛んで来たのだ

「無駄だ・・・我家に伝わる暗殺術『魔李雄華亞斗（まりおかあと）』の前ではそんなもの・・・
お前らをここで始末し・・・毛利小五郎も消せば俺とその女の繋がりは完全に消える
何かしらの理由でその女が　お前らとそのストーカー小僧を始末したと言う事になる
後は邪魔な親族を何人か消せば　俺は莫大な遺産を手に入れられる」

再び飛んでくる甲羅・・・
しかし今度はフリーザ様が全て撃ち落とす

「何・・・!?」

「くだらない技ですね・・・こんなんでこのフリーザ様を倒せると思っているとは」

フリーザ様が小馬鹿にした様に言い放つ
しかし一瞬驚いた表情を見せたものの　小瀬は再び怪しい笑みを浮かべた

「『くだる』か『くだらない』かは俺の顔面に一発叩きこんでから決めるんだな」

そう言って自分の頬を指差して挑発する小瀬
自分の力を見せつけてもなおこの余裕・・・フリーザ様は頭に来て小瀬に突進した

「首をもぎ取ってやりますよ！」

しかし小瀬の首はもげなかった
フリーザ様が盛大にすっ転んだからである
見るといつの間にかバナナの皮が仕掛けられていた

「魔李雄華亞斗は無敵だ・・・」

「舐めるなぁ！」

起き上がって再び殴りかかるフリーザ様
しかし再びその体は地面に倒れた

「魔李雄華亞斗の極意は相手の動きを先読みすることにある」

フリーザ様がどう立ち上がり　どんな攻撃を仕掛けてくるか・・・
全てが分かる小瀬はバナナでフリーザ様を転がし　甲羅を叩き込み
続けた

「くそ・・・フリーザ様の攻撃さえ当たれば・・・あんな奴」

コナンが痛む体を抑えながら悔しそうに言った

「まぁでもフリーザ様があんなに盛大にすっ転んでる姿はそうお目
にかかれないわよ」

哀は楽しそうに携帯でそれを撮影していた
しかしそんな二人の体はいきなり後に吹き飛ばされた
何が起こったのか？
視界がめまぐるしく回転する

「痛たた・・・何よもぅ・・・」

そして気が付くと瓦礫の中に埋もれていた
それを退かして周りを見ると・・・空が見える
倉庫は・・・跡形も無くなっていた

「ふぅー・・・良く考えたら肉弾戦をする必要なんてありませんね」

どうやらフリーザ様が気合で吹き飛ばしてしまったらしい
あまりの出来事に余裕の笑顔だった小瀬の表情も一気に驚きと恐怖の色に染まってしまった

「私としたことが・・・すっかり冷静さを失っていました
戦うときは冷静でないとダメですね・・・気分は内藤〇助って所ですかね」

フリーザ様は今度は近付かずに遠くからエネルギー波で攻撃し始めた
小瀬は甲羅でそれを迎撃するが止めることが出来ず・・・エネルギー波は嘲笑うように小瀬の体をカスって行った

「あっはっはっはっは！　ほらほら！　もっと一生懸命逃げないと！」

フリーザ様の一方的な攻撃が続く・・・
よほど先ほどの攻撃で腹が立ったのか　フリーザ様は致命傷を与えようとしない

「すげぇ・・・生殺しだ」

「ずっとフリーザ様のターンね・・・それより米庭さんと馬明さんを掘り起こすの手伝いなさいよ」

二人の救助活動を尻目に　フリーザ様はエネルギー波を打ち続けた
小瀬はあちこち傷だらけだが　フリーザ様が嫌な加減をするのでまだまだ楽になれそうにない
フリーザ様はそんな小瀬を見ながら邪悪な笑みを浮かべた
先ほどまで晴れていた空に雨雲が懸かり始め・・・フリーザ様の血祭ショーをより残酷に演出する

「さて・・・あと一時間は血のダンスを踊ってもらいましょうか・・・」

そう言ってフリーザ様が再びエネルギー波を放とうとした時だった
遂に雨が降り出して来た・・・それもどしゃ降りである

「何ですか？　良い所だと言うのに・・・」

フリーザ様が天空を見つめたその一瞬の隙を小瀬は見逃さなかった
隠し持っていた赤い甲羅をフリーザ様めがけ全力で投げつけるとその場に背を向けて走り出した
しかしフリーザ様はそれに気付くと目にも止まらぬスピードで赤甲羅をかわし　小瀬の前に立ち塞がった

「逃げられると思っているんですか？　私の動き・・・読めるんでしょう？」

フリーザ様が鼻で笑う
しかしそれを見た小瀬はニヤリと笑った

「あぁ・・・読めていたよ！　お前がここで通せんぼをするために立ち塞がることもな！」

そう言い終わると同時に　フリーザ様を赤甲羅が直撃した

「見たか赤甲羅の追尾機能！　勝った！　『フリーザ様と灰原さん』完！」

しかし　勝利を確信し高笑いをする小瀬の顔面をフリーザ様のデコピンが襲った
赤甲羅は命中したはずなのに・・・フリーザ様は余裕の表情だ

「お馬鹿さんですね・・・あなたの攻撃は腹立たしいだけでそもそも効いていませんよ」

お仕置きの時間だ・・・
フリーザ様がトドメを刺そうと歩み寄ってくる

「うひゃあああああああああ！！！」

あまりの殺気に耐え切れず　小瀬は逃げ出した
しかし　フリーザ様はあくまで残酷に・・・
怯えた背中にエネルギー波を突き刺そうと　指先で狙いを定める

「んん？」

しかし　今まさにエネルギー波を放とうとした瞬間
フリーザ様の視界は物凄い閃光に包まれ　それと同時に轟音が耳をつんざいた

「おや・・・雷ですか？　すごい近くに落ちましたね」

どこに落ちたんだろう？
キョロキョロと辺りを見回すと何か黒いものが目に付いた
どうも人の形をしている様だが・・・

「・・・・・ほっほっほ！　私が手を下すまでも無かったですね！」

奇跡的に死んではいない様だが・・・
小瀬は完全に再起不能である
先ほどまでの堂々とした姿が嘘の様に小さく見える

「一件落着・・・」

「・・・・・だな」

何とか伴人と萌を掘り起こしたコナンと哀は顔を見合わせて笑った

・・・その後
駆けつけた警察により萌は逮捕された・・・
小瀬の方は救急車で運ばれて行ったが　回復し次第殺人と殺人未遂の容疑で逮捕される予定である
そして数日後・・・
フリーザ様はポアロにいた

「じゃあ探偵助手の仕事から開放されたんですね」

「えぇ・・・まったく！　あのチョビヒゲは退職の日にボコボコに

してやりましたよ！」

どおりで最近小五郎が顔を見せないと思ったら・・・
梓は苦笑いを浮かべながらフリーザ様にコーヒーを出した

カランカラン・・・

そしてポアロの扉が開く
梓が挨拶するとそこからは二人の男女が入ってきた

「おや？　蘭さんと馬明さんじゃないですか？」

「あ！　フリーザ様・・・先日はどうも」

どうやらまた「蘭姉ちゃんの人生相談室」にやって来たらしい

「それで先輩・・・今度は何ですか？」

蘭が聞くと伴人は少し言い難そうにしながらも口を開いた

「実はね・・・好きな人が出来ちゃって」

「はぁ？」

この男は・・・本当に懲りない奴だ
フリーザ様も蘭も呆れてしまった

「ほら！　前の彼女は今塀の中だし・・・」

「残念ね・・・私ならここよ」

聞き覚えのある声・・・
振り返るとそこには銃を突き付けてくる萌がいた

「良く考えたけど　やっぱりあなたは死ぬべきよ・・・」

「う・・・うわぁ！　脱獄囚だ！」

「死になさい！」

萌は銃を乱射すると　逃げる伴人を追ってポアロを出て行った
その後・・・二人がどうなったか知る者はいない
分かっていることは　ポアロが萌の乱射した銃により大損害を受けたと言うことだけである

「何でいつもポアロでやるの・・・」

マスターは一人嘆いた

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード３９「英祐ファイト！」

天国の母さん・・・お元気ですか？
・・・元気じゃないよね・・・死んでるし
僕の方は元気です

でも「フリーザ様と灰原さん」に出して貰えません・・・
僕があまりに原作の本質部分に絡みすぎているので　おっとりの奴がビビって出せないのでしょう
それはさて置き・・・僕は相変わらずドジです

「萌キャラね」

と話すのは僕のクラスメイトの鈴木園子さんです・・・白い人ではありません
その園子さんのことで僕は最近困っています

「ちょっとドジっ子！　私と来なさい！　ＷＤＣに出るわよ！」

「ＷＤＣ・・・？　何ですかそれ？」

「『ワールド・ドジっ子・チャンピオンシップ』　世界最強のドジを決める大会よ」

「はぁ・・・最強なのにドジなんですか？」

「優勝賞金１００万ドル！　あんたなら優勝間違い無しよ！」

「遠慮しておきます・・・僕にはやることがあるので」

「優勝賞金なら全部あげるから！　ぶっちゃけアンタがどこまでドジなのか見てみたいのよ」

「いや・・・でも・・・痛ッ！」

なんでこんなにタイミング良くモップが倒れて来るんでしょう？

「ほら見なさい！　やっぱりアンタは出るべきよ！　嫌とは言わせないわよ・・・ムフフ」

母さん・・・面倒なことになってしまいました

この話　続きます・・・

１１５．欲望の鬼（後書き）

ってことで双子編終了です
めでたしめでたし・・・
でも私としてはどうもめでたくありません
最近パンクパワーが弱まってきている気がします
ネタとかも思い付くんですが・・・
何と言うかお上品なんですよね・・・
なのでパンクパワーが溜まるまでフリーザ様はお休みしようと思います
書かないと書きたくなる・・・
悲しい人間の性を逆利用です

ってことで御愛顧頂いている皆様には申し訳ありませんがしばらくお休みです
そんな訳で・・・

内藤選手！　タイトル初防衛おめでとうございます！

１１６．ジャスティス～孤高の稲妻～

正しいことを主張することは　時として煙たがられる
お前が正しいことは分かるよ・・・
でも皆正しいことなんかしてないのに・・・敢えて言うなよ
このＫＹ！
「空気読め！」
こんな具合である・・・
そんな社会だから　人々は正しい心を押し殺して生きている
そして目の前の「悪」から目を逸らす・・・
それが「空気を読む」ということなら「空気」なんて読みたくない！
スポーツ新聞が読みたい！　エッチな記事の所！
そんな熱血野郎の話・・・

第１１６話　ジャスティス～孤高の稲妻～

「ちくしょう！　舐めやがって・・・何もかもぶち壊してやる！！！」

フリーザ様がキレた
それも唐突に・・・
ポアロの店内が騒然とする

「フリーザ様・・・どうしたんですか？」

「いつものフリーザ様じゃないよ・・・」

梓とダイガクセイが心配そうに声をかける
するとフリーザ様は怒りに打ち震えながら口を開いた

「いつもの私？　あんなものは私じゃありません！　私は・・・私は宇宙の帝王なんです！」

フリーザ様は気付いたのだ
本来の自分のあるべき姿に・・・それに比べ　あまりにも劣位にある今の自分に・・・

「こうなったら・・・世間をアッと言わせてやる！」

目を血走らせながらフリーザ様はポアロを出て行った
まるで凶悪犯罪者だ・・・早くフリーザ様を止めないと　明日の新聞の一面が決まってしまう
なんとかフリーザ様をなだめるべく　梓とダイガクセイもその後を追った

・・・そしてフリーザ様は帝丹小学校にやって来た
警備員を薙ぎ払い　ずんずんと校舎の中を進んで行く
そして「1年B組」のプレートが掛かった教室に辿り着いた

ガシャン！

物凄い音を立てて激しく蹴破られる扉
教室で授業をしていた小林と子供達は驚いてそちらを見た

「フリーザ様・・・何やってんのよ！」

教室に入って来た同居人を見て　哀は抗議の視線を突き刺した
しかしフリーザ様は悪びれる様子もなく　逆にその哀の態度に眉をひそめた

「部下の分際で・・・どいつもこいつも調子に乗りやがってぇ・・・！」

呟くと同時にフリーザ様は激しい気を発する
そのあまりの強大さに　教室どころか辺り一帯が激しく揺れた

「見るが良い！　このフリーザ様のパワーを！」

「うわぁ・・・大変だ！　早く止めないと」

ダイガクセイは説得を試みようとフリーザ様に駆け寄った
しかし気合一発で弾き飛ばされてしまう

「邪魔は許しませんよダイガクセイ！　さあ～泣き喚きなさい！
そしてひれ伏すのです！　このフリーザ様の前に！」

教室に悲鳴がこだまする
しかし逃げたくとも逃げられない・・・絶対的恐怖がそこにはあった
これがフリーザ様・・・宇宙の帝王・・・
しかし　子供達の心にトラウマが刻まれようとしたその時だった

「そこまでだ！」

「んん～？　誰ですか！？」

声がしたかと思うと　窓ガラスをぶち割って一人の男が教室に舞い

降りた
男は手足を素早く動かして予備動作をすると　キメポーズをとった

「弱き者の泣き声が・・・空を翔け抜け届く時・・・怒りの雄叫び轟かせ・・・光の速さでやって来る！
イナズマ戦士ブリッツ・ガイ！　ただ今参上！」

「え！？　誰！？」

格好からすると正義の味方らしいが・・・

「子供達！　私が来たからにはもう安心だ！　さあ！　危ないから少し下がっているんだ！」

「危ないのはあなたの格好よ・・・」

ブリッツ・ガイは哀のツッコミを無視するとフリーザ様の方に向き直り
そして　また手足を素早くキレのある動きで振り回してキメポーズをとった

「そこの怪人！」

「・・・なんですか？」

「いたいけな子供達に恐怖を与える悪魔め！　このブリッツ・ガイが叩きのめしてくれる！」

そう叫ぶと　ブリッツ・ガイはフリーザ様に向って飛びかかり　雨あられの如く連打を仕掛けた

唸るパンチを様々な角度から叩き込み　そして時折キックなどを織り交ぜる
それは人間技とは思えないスピードのラッシュ・・・
フリーザ様はそれを黙って見つめていた
そんな連打を休みもせずあびせ続け　最後に右のハイキックを綺麗に叩き込むと
ブリッツ・ガイはバック転で距離を取り　そして拳を天に向って突き上げた

「ブリッツ・チャージ！」

ブリッツ・ガイが叫ぶと拳から激しく火花が飛び散った
それを確認すると　ブリッツ・ガイはその拳をグッと後の方へ引き
深く腰を落として構えをとった

「トドメだ！　シャイニング・ブリッツ・ブロー！」

地面を蹴って一気に間合いを詰めると　ブリッツ・ガイはその拳をフリーザ様に突き入れた
それと同時に強烈な電撃がフリーザ様の体を襲い　青い光が教室中を照らした
そしてブリッツ・ガイはステップして再びフリーザ様から離れると
「ふぅー」と息を吐いて拳を下ろした

「さあみんな！　もう安心だよ！　あの悪魔はこのブリッツ・ガイが成敗してやったぜ！」

「成敗できてないわよ」

哀の指差すほうを見ると・・・元気なフリーザ様の姿があった

「ば・・・馬鹿な」

「いきなり何をするんですか・・・服がちょっと焦げたじゃないですか」

ノーダメージも良い所・・・
あれだけの攻撃を浴びせたにも関わらずピンピンしているフリーザ様を見て
ブリッツ・ガイは「馬鹿な・・・馬鹿な・・・」と呟きながら後退った

「ふふっ・・・それではどうしてくれましょうか?」

ボコボコのタコ殴りにしてやろうか・・・それともエネルギー波か・・・
あれこれ考えながら近付いて行くフリーザ様
可哀想に・・・
哀はブリッツ・ガイに同情の視線を送った
しかし　その視線の先には再びキメポーズをとるブリッツ・ガイがいた

「む・・・まだやる気ですか?」

「当たり前だ!　正義の味方はネバー・ギブ・アップ!」

今度は高く跳ぶブリッツ・ガイ
フリーザ様は「やれやれ」と溜息をつきながら　繰り出される技を待った

「食らえ！　ローリング・ブリッツ・ボンぶへぇあッ！」

ボンぶへぇあッ・・・？

フリーザ様の目の前で　ブリッツ・ガイは頭を抑えて屈み込んでいた

ここが教室であることを忘れていたのだろう

「ローリング・ブリッツ・ボンバー」を繰り出そうと高く跳んだため　天井に頭をぶつけたのだ

「大丈夫・・・？」

あまりに痛そうなので哀が声をかけた

ブリッツ・ガイは変な汗をかきながらも笑顔を作ってそれに答える

「無問題（モウマンタイ）！　正義の味方はこれしきでは負けないのさ！」

すくっと立ち上がると　ブリッツ・ガイは再びフリーザ様に向って走り出した

「勝負だ！」

「しつこい奴ですね・・・」

いい加減鬱陶しい・・・

フリーザ様は突進して来たブリッツ・ガイの額めがけてデコピンを放った

頭のヘルメットは砕け　真っ赤な鮮血を飛び散らせながらブリッツ・ガイは派手に吹っ飛ぶ

フリーザ様はそれを見て勝利を確信すると　「フフン」と鼻で笑った

「これしきの・・・これしきのことぉ！」

しかしフリーザ様の予想に反してブリッツ・ガイは起き上がった
頭からは大量の出血・・・そして脳へのダメージからか　足がフラフラともつれている
しかし　彼は自分の太股と頬をバチンと叩くと　再びキメポーズをとった

「正義の味方はネバー・ギブ・アップ！」

「あの・・・いい加減諦めた方が・・・」

梓とダイガクセイが保健の先生を連れてきてブリッツ・ガイを止める
しかしブリッツ・ガイはそんな声を笑って一蹴すると　またまたキメポーズをとりながら言った

「心配はいらないぞ！　あの悪魔を倒して　すぐに君達を暗黒の支配から開放してあげよう！」

「いや・・・って言うか・・・うちの常連さんですから」

「聞いてない・・・」

もはやブリッツ・ガイにはフリーザ様しか見えていないのか
もう戦えない・・・無理だ・・・
周りの諦めの声を振り払いながら　彼は遂に最後の攻撃に出た

「食らえ！　マキシマム・ブリッツ・ターミネーション！」

両の拳を突き出して叫ぶと　そこから何かが放たれた
それは真っ直ぐに飛んで行くと　フリーザ様の体に着弾した

・・・尖った金属片の様だ

「はっはっは！　掛かったな怪人め！　いよいよ年貢の納め時だ！」

すると今度はブリッツ・ガイの拳から電撃が発せられた
それはフリーザ様に着弾した金属片に向って飛来し　フリーザ様の体を激しく光らせた
バチバチと弾ける様な音がその攻撃の凄まじさを物語っている

「服が焦げるから止めなさいって言ってるでしょう！」

鬱陶しい電撃攻撃に　フリーザ様は平手でブリッツ・ガイの頭を殴りつけた
激しくもんどりうって地面を転がるブリッツ・ガイ・・・
結局フリーザ様にダメージを与えることは出来なかった

「何の・・・これしきぃぃぃ！」

ウザイ・・・
弱いが・・・恐ろしくタフだ

「もう・・・殺すしかない！」

フリーザ様の目が本気になった
人差し指を突き立てエネルギー波を放つ体勢に入る
しかし流石に長い付き合い
哀をはじめ　梓やダイガクセイにはフリーザ様の考えが正確に伝わった
殺人犯にする訳にもいかない・・・三人はすぐさま攻撃を中止させた

「あなたが強いのはわかったわ！　これからは態度にも気をつける！　だから・・・だから大人しく帰って！　ね？」

「さあさあフリーザ様！　ポアロでコーヒーでも！　ケーキもサービスしますよ！」

「あんな人相手にしないで！　それより僕の仕入れた面白い話を聞かない？」

そんな三人の必死の説得にフリーザ様は何とか怒りを鎮めそしてブリッツ・ガイを睨み付けた

「ここまで私をコケにした代償は絶対に払わせますからね！　覚えておきなさいよ！」

吐き捨てるように言うと　フリーザ様は梓とダイガクセイを伴い去って行った

「灰原・・・お疲れ」

「まったくよ・・・何もしない部下2号さんのおかげでね！」

疲れから来たイライラをぶつけるように　哀は目の前にあったコナンの顔面を殴りつけた

聞いたことのないような声を上げて悶えるコナンを尻目に　哀はやっと一息つく

まったくもって疲れた・・・

「ちっ！　逃がしたか・・・しかし子供達！　正義は勝ったのだよ！　わっはっはっはっは！」

偉そうに叫ぶとブリッツ・ガイは走り去って行った

「さらばだ！」

ウザイ・・・

心の中で呟きながら　哀は涙目で睨みつけてくるコナンの顔面にまた拳をめり込ませた

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード４０　「僕の花嫁」

「あなた・・・起きて・・・あなた・・・」

声がする・・・僕は眠い目をこすりながら声の主を見た

そこには僕の愛する妻・・・哀がいる

「朝ご飯できてるわよ」

僕はベッドから体を起こし　そして顔を洗うと彼女の作ってくれた朝食を食べた

「もう・・・ご飯粒ついてるわよ」

彼女は優しく微笑むと僕のほっぺたからそれを取り去り

そしてそのまま自分の口に運んだ
そしてまたクスッと笑う

・・・そんな彼女ともしばしの別れ
会社に行かなくては・・・

「あなた　忘れ物よ！」

忘れ物？　何も忘れていないと思うが・・・

「何言ってるの？　ほら・・・『いってきます』のキスはしてくれないの？」

・・・・・・

「ぬへへへへ・・・灰原すわぁ～ん・・・ふひひ・・・ぐへへへへへへ」

「み・・・みっちゃん？」

そんなことある訳ない・・・
全ては光彦の妄想だ

１１６．ジャスティス～孤高の稲妻～（後書き）

久しぶりの更新です
お元気でしたか？
・・・・・・
そうですか・・・残念です・・・

私は気晴らしに新連載を始めたり
ゴロゴロしたり
新連載を更新したり
ゴロゴロしたり
・・・優雅に生活していました

ところで一部読者の方からこの小説に関する投票をしたいと言う声があるのですが
私一人ではどうとも・・・
と言うわけで皆様の意見を募集中です
メッセージでも評価欄でも良いですから「ご意見頂けたらな～」と思っております

「やれ！　やらないと殺すぞ！」

「やるな！　やったら殺すぞ！」

「とりあえず　おっとりは殺す！」

「明確な意思を持って　おっとりを殺す！」

「無我の境地に至り・・・そしておっとりを殺す！」

「オットリ　コロス・・・」

など・・・ご意見お待ちしております

と言っても　私自身がやるか分かりませんけど＾＾；

だって面倒く・・・ゴホッゴホッ・・・風邪かな?

皆さんは風邪ひいちゃダメですよ～

１１７．山吹色のやくそく

「ねぇチャック見て！　もう秋だから葉っぱが色づいて綺麗ね」

「そうだねアシュリー」

「そうだチャック！　また何か素適なストーリーを聞かせてよ」

「ＯＫ・・・それじゃあ紅葉（こうよう）にまつわる　日本で起きた話をしてあげよう
ある夫婦がいたんだ・・・その夫婦はある日　山で美しい紅葉（もみじ）の木を見つけた
そしてそこで永遠の愛を誓ったのさ」

「素適ね・・・それで？　その夫婦はその後どうなったの？」

「それから幾年も過ぎて・・・奥さんは残念ながら亡くなってしまったんだ」

「オー・・・それで？　旦那さんは？」

第１１７話　山吹色のやくそく

少し前まで元気な緑色に溢れていた山々だが
今はその姿を大きく変えて　赤や黄色に染まっている
「有終の美」といったところか・・・
最後の輝きを放ちながら　また一枚の葉が枝から落ちた

「キャッチ！」

真っ赤にそまった紅葉（もみじ）の葉をフリーザ様は嬉しそうに掴んだ

「実に美しいですね・・・やはりどんなものも散り際が一番美しい」

「あなたが言うと　そこはかとなく危ない香がするからやめてちょうだい」

フリーザ様と哀は紅葉狩りに来ていた
リュックサックを背負い　美しく色づいた山の中をどんどん進んでいく
哀も何だかんだ言って楽しそうにしていた
リスやたぬきなど　色んな動物に出会うことができるし
何より冬を目前に控えた秋山の姿は憂いを帯びていて　なんだか自分と重なるからである

「ちょっとハイバラさん！　せっかくの紅葉狩りなのにそんなシケた顔しないで下さいよ！　殺しますよ！」

「良いじゃない・・・ちょっと哀愁に浸らせなさいよ」

「こっちまで暗くなるでしょう！　こういう行楽の時は基本スマイルでしょう」

確かに・・・自分がこんなだから周りにいらぬ心配をかけてしまっているのも事実・・・
哀はフリーザ様の言う通り笑ってみた

「キモチワルイ・・・」

「殺すわよ」

互いに「殺す！　殺す！」と毒を吐きながらフリーザ様達は山道を歩いた

「はっはっは・・・これこれ！　『ぶっ殺す』と心の中で思ったなら　その時すでに行動は終わっているものじゃよ？」

二人は突然声をかけられた
声の主を探すと　少し離れた所にある紅葉の木の下に老人が立っていた

「誰ですかあなたは？」

「これは失礼・・・わしは内村貫介（うちむらかんすけ）と言う者じゃ」

貫介は自己紹介をすると　笑いながら二人の方へ近付いて来た
風体からすると二人と同じく紅葉狩りに来た観光客だろうか？

「おじいさん一人で来たの？」

「いや・・・もう一人一緒じゃ」

貫介は胸に提げたガラス製のペンダントを見せる
中には白い粉の様なモノが入っていた

「妻の冴（さえ）じゃ・・・毎年こうして一緒に紅葉狩りに来るのじゃ」

遺骨か・・・正直ダーク過ぎて全然笑えない・・・
二人は適当に話をはぐらかしてその場を去ろうとした
すると貫介は　今度は急にシュンとしてしまい　近くの岩に腰掛けてうな垂れてしまった

「実は妻が死ぬ直前に言ったんじゃ・・・『私の骨を思い出の紅葉の下に埋めて』と・・・」

「そうですか・・・埋めてあげて下さいよ！　行きますよハイバラさん」

「その紅葉なんじゃが・・・場所を忘れてしまってのぅ・・・」

「見つかると良いわね・・・それじゃ！」

「若い人が一緒に探してくれたら見つかるかもしれないのになぁ～」

・・・・・
結局二人は「思い出の紅葉」探しを手伝わされることになった
と言ってもこの山は紅葉の名所・・・紅葉などたくさんある
そのたくさんの紅葉からその紅葉を探すとなると大変な話だ

「トロッタさんさえ居れば楽なんですけどね」

「ねぇおじいさん・・・何か目印とか無いの？」

「ふむ・・・行き方を書いた紙ならあるぞ」

そう言うと貫介は胸ポケットから古いメモ帳を取り出した

ページをペラペラとめくっていき　問題のページを見つけた

『疲れたら一休みして楽しくおしゃべり
川のせせらぎに耳を傾けてから山を見る
リスの手招きに導かれ　仲の良い夫婦に出会う
奥さんの方へ歩けばそこに綺麗な紅葉あり』

「調子に乗って暗号化したから全然分からんのじゃ・・・」

「分かりやすく書いときなさいよ・・・」

そうすると暗号を解くしかない・・・
しかし最初の一行からして意味不明だ
何とか分かるのは2行目・・・川の側に行けば良いということだろう
三人はとりあえず近くの川へ向った

「とはいっても・・・漠然としすぎですね」

「他に何か覚えてないの？」

「ふむ・・・最近とみに昔のことを思い出せんようになってしまってのぅ」

貫介がこの調子なので　とりあえず川辺を歩きながら暗号のヒントを探す
しかし・・・リス・・・仲の良い夫婦・・・意味不明だ
フリーザ様も哀もすっかり参ってしまった

ぐー・・・

お腹も悲鳴をあげる
そう言えば　まだ昼食をとっていなかった
三人は近くにあった休憩スペースでお弁当を食べることにした

「・・・にしても分からないわね」

「もう諦めましょうよ」

フリーザ様の一言に　貫介は目を潤ませながら睨みつけてきた
しかしフリーザ様は気だるそうに貫介を一瞥すると言った

「おいじじい・・・良い占い師紹介してやるから諦めろ」

「そうね・・・今無理に疲れなくてもトロッタさんに聞けば一発よね」

「なんじゃい！　この根性無し！　これだから最近の若いモンは・・・」

そこまで言うと貫介はピタリと止まった
まさか血圧が上がって・・・
哀は心配になって貫介の体を揺すった

「そうじゃ・・・昔　わしもここで『根性無し』と妻に笑われた」

『フフフ・・・疲れたの？　貫介さんの根性無し』

それを聞いて哀はピンと来た・・・
「疲れたから休憩して楽しくおしゃべり」
これはこの休憩スペースのことを言っているのではないか？

とすると・・・「川のせせらぎに耳を傾けてから山を見る」と言うのは・・・

「山・・・何か目印は無いのかしら?」

「次の『リスの手招き』ってのがそうなんじゃないですか?」

「ここでリスが来るまで待てって言うつもりじゃないでしょうね・・・」

そんなことしてたら日が暮れる・・・やはりトロッタに頼むべきか?
しかしその時　貫介が再び口を開いた

「そう言えばあの時・・・妻がリスを見つけてその後を追いかけて行ったんじゃった!」

「それってどの辺?」

「確かここから見て・・・あっちじゃ!」

お弁当をしまい　三人は貫介の指差した方へ歩き始めた
道無き道をひたすら進む・・・次のヒント「仲の良い夫婦」を求めて・・・

「これはどう言う意味?」

「ふむ　これは・・・アレじゃ!」

貫介が何かを指差した
そこにあったのは二つ岩

大きい岩と小さい岩が寄り添うようにして並んでいる

『まるで貫介さんと私みたいね』

なるほど・・・夫婦岩（めおといわ）と言ったところか

とすると最後の一行はもう簡単だ

奥さんの方・・・岩の並ぶ直線上を小さい岩のある方向へ進むのみ

・・・・・・

「そんなに特別綺麗な紅葉なんて無いわね・・・」

あれから随分歩いたが・・・無い

とすると何か間違えたのだろうか？

「じじい・・・本当にこっちなんだろうな？」

フリーザ様が聞くと貫介はあごに手を当てて「ふ～む」と考え込んだ

そして数秒の後　何かを思い出したのか口を開いた

「すまん！　妻はわしより大きかったんじゃ」

とすると・・・大きい岩の方へ進むべきだったのか

「それを早く言いなさいよ・・・」

三人は来た道を戻り　そして夫婦岩を通り過ぎて反対側を突き進んだ

すると突然目の前が広くなり　拓けた場所に出た

それっぽい・・・哀が貫介を見ると　貫介は「見覚えがある」といった表情でキョロキョロしていた

「おぉ・・・！」

貫介の目が見開かれる
フリーザ様と哀もそちらを見ると・・・見事な紅葉の木があった
その幹は太く　樹齢の長さを感じさせる
そしてその枝に繁る葉は他の紅葉とは違い　色はやや薄めのオレンジ・・・
太陽の光を浴びて黄金のように美しく輝いている
そのあまりの美しさに　三人はただただ黙ってその木を見つめた

「さぁ・・・奥さんの最期の望みを叶えてあげましょう」

哀が促すと貫介はうなずき　そして妻の入った胸のペンダントを外すと紅葉の木の下に歩み寄った

「冴・・・やっと・・・」

『私はこの紅葉に誓うわ・・・ずっと貫介さんの奥さんでいるって』

「わしも・・・これからも　いつまでも君の夫であり続ける」

ぼごっ！

昔を思い出しながら　貫介が誓いを立てたその時だった
目の前にあったはずの紅葉が無い・・・
あるのは何かが掘り起こされた様な巨大な穴だけだ

「良し！　持って帰って庭に植えることにしましょう」

見ると紅葉はフリーザ様の横でフワフワと浮いていた
サイコキネシスで持ち上げたのだ

「戻しなさいよ！　自然破壊よ！」

「何言ってんですか！　せっかく紅葉狩りに来たんだから狩らないと」

「でもおじいさんの大切な紅葉を何の断りも無く・・・」

「『紅葉狩り（ぶっころす）』と心の中で思ったなら　その時すでに行動は終わっているんですよ！」

フリーザ様は哀の言うことを一蹴し　紅葉をそのまま持ち去ろうとした
しかし貫介も黙っている訳にはいかない・・・
その紅葉は大切な冴との思い出なのだ

「か・・・返してくれ！」

しかし貫介の体は後に弾き飛ばされる
フリーザ様が気合で弾き飛ばしたのだ

「こらじじい！　勝手に触るんじゃありません！」

「フリーザ様！　ちょっと・・・待ちなさいよ！」

悔し涙を流す貫介を尻目にフリーザ様は紅葉を携え　去って行った

・・・数日後
博士の家の庭にスペースが無かったため　紅葉は隣の工藤邸の庭に強制的に植えられた
フリーザ様はその紅葉がたいそうお気に召したのか　毎日のように工藤邸に足を運んで紅葉を眺めた
しかし・・・

「ふむ・・・やっぱりこの紅葉は見事じゃな」

「じじい・・・毎日のように通いやがって・・・」

「別に良かろう・・・わしの妻がここに眠っておるんじゃからにしても　やっぱり近場にあると便利だわな・・・運び出して正解じゃった」

「人の家の敷地に勝手に骨を埋めるんじゃありません！　消し去りますよ！」

「元はと言えばあなたのせいでしょ・・・それとここは工藤君の家よ」

続く

おまけ：チャックとアシュリー

「そんな訳で　カンスケは毎日のように奥さんと紅葉に会いに行けるようになったのさ」

「ワォ！　フリーザサマはとってもナイスガイね」

「ＨＡＨＡＨＡ・・・僕とどっちがナイスガイだい？」

「それはもちろんチャックよ！」

「ＯＫ・・・今日のランチは僕の奢りだ」

「サンキュー！　それじゃあ何を奢って貰おうかしら～・・・」

「おいおい・・・僕の財布の中身を考慮に入れてくれよ？」

１１７．山吹色のやくそく（後書き）

と言うわけで皆さん・・・秋です

卒業生一同「あきです」

紅葉狩りには行きましたか？
私は行ってません
行きたいですけどね・・・
でも紅葉よりも何か美味しい物が食べたいですね
紅葉は食えません・・・ん？　食える？

ノーサンキュー

何だかんだでやっぱり食欲の秋ですよね
松茸が食べたいです・・・（でもお財布の中身が）
ってことでシメジで我慢します
いやいや・・・シメジも美味しいですよ！
ってことでシメジで「あいうえお作文」

シ・・・シメジと間違えて毒キノコを
メ・・・めしのおかずに食べて
ジ・・・ジ・エンド（人生が）

・・・・・・

ノーサンキュー

１１８．毛利蘭は心の天使

綾子は思う
好きとか嫌いとか・・・最初に言い出したのは誰なのかしら？
分からない・・・
綾子はおじいちゃんに聞いてみた

「そんなこと考えてる間に勉強しろ」

・・・・・・分からない

第１１８話　毛利蘭は心の天使

空が晴れ渡り　風も柔らかな休日の米花町
フリーザ様は哀を連れて　いつものようにポアロへ繰り出した
どうせまたいつものメンバー・・・
梓にダイガクセイが待っているのだろう
そんなことを考えながらポアロの扉を開けると　予想通り二人がフリーザ様を出迎えた
適当に挨拶を交わしながらカウンター席に腰掛け　そして店内を見回す
混んでいるわけでもなく・・・空いているわけでもなく・・・

「おや？　あれは・・・」

しかし　その客達の中にフリーザ様は見覚えのある人物を見つけた

「ライアンさんじゃないですか！　お久しぶりですね」

「ん？　オー！　フリーザサマー！」

窓際の席で外を眺めながらコーヒーを飲んでいたのは
以前「仮面戦士アルトゥール」でフリーザ様と競演した「アルトゥール」役のライアンだった

「こんな所でお会いできるとは・・・あなた米花町に住んでいたんですか？」

「ノー・・・でも最近このポアロには良く来るヨー！　哀チンも久しぶりネ」

フリーザ様と哀はテーブルを挟んでライアンの反対側に座ると話を始めた
「仮面戦士アルトゥール」が終わってからは連絡を取っていなかったが
ライアンのことはテレビでたまに見かけていたので　さほど心配はしていなかった
しかし　やはり久しぶりに会うと色々と話したいことが湧いて来る

「あっ・・・！」

しかし　会話が弾んできたところで急にライアンがそわそわし始めた
窓の外の何かを気にしている様だが・・・

「あら？　蘭さんじゃない」

「おやおや本当だ・・・おーい！　フリーザ様ですよ～！」

二人が窓を叩いて手を振ると蘭は笑顔でそれに応え　そして一緒に居た園子とどこかへ行ってしまった

「フリーザサマー・・・あの子とフレンドなの？」

「えぇ・・・まぁ・・・」

ライアンは大きな溜息をついてフリーザ様を見た
蘭がどうかしたのだろうか？
気になったのでフリーザ様と哀は聞いてみた

「実はボク・・・あの子のこと好きになっちゃんたんダヨー・・・」

「えぇ！？」

「ほっほっほ・・・それはそれは・・・」

ライアンが言うには・・・それは一ヶ月前のことだった
電車に乗っていた彼がふと隣を見ると　女子校生が男に体を触られているのが見えた
痴漢だ・・・女子校生はとても怯えた顔をしている
ライアンは意を決して男の手を掴もうとした

「ちょっとあんた！」

しかし　その時突然別の手が伸びて来てライアンは腕を掴まれた
それと同時に電車の扉が開き　彼の体はグイグイと引っ張られて車外に連れ出された

「痴漢なんて絶対に許せない！　あああああああ！！！」

どうやら痴漢にあっていた子の友達らしい・・・
そして彼女はライアンを痴漢と勘違いしているらしく　突然ハイキックを繰り出してきた
キックボクサーだった頃の癖で咄嗟にガードしたが大きく体がよろめく
日本の女の子は強いな・・・
そんなことを思っていると　さっき痴漢にあっていた友達が寄って来た

「違うわ蘭！　その人は痴漢から私を助けようとしてくれてただけよ！」

「へ？」

どうやら誤解が解けたらしい・・・
ライアンはホッと胸を撫で下ろした
長く綺麗な黒髪のハイキック娘は顔を真っ赤にして頭を下げてくる
さっきまでの強気な彼女はどこへやら・・・その姿はとても・・・
可愛らしかった

・・・・・・

「それで好きになっちゃったんですか？」

「イエス・・・一目惚れダヨー」

「なるほど・・・それでポアロにいたって訳ね」

そう・・・ライアンは最近　蘭に想いを伝えるために足繁くここに通っているのだが
窓越しに蘭を見かける度にさっきのように尻込みしてしまい
結局声すら掛けることができず　ポアロの売上げに貢献するというパターンを繰り返しているのだ

「意気地が無いですね・・・良し！　それでは今から告白しに行くとしましょう」

「ホワッツ!?」

「『ホワッツ』じゃありません！　悩み事を溜め込むと精神衛生上よろしくないですよ」

そう言ってフリーザ様はライアンの手を取って席を立った

・・・一時間後
フリーザ様達は蘭を発見した
蘭はクレープを食べながら園子と楽しくおしゃべりしている

「で・・・何で俺まで?」

コナンがちょっとした疑問を投げかけた
フリーザ様は溜息をつくと「やれやれ」といった感じに首を振ってコナンの耳を引っ張った

「このフリーザ様に協力したくないって言うんですか?　下僕は黙

って命令に従ってれば良いんですよ！」

「くだらない質問は控えろ！」とコナンを突き飛ばして　フリーザ様はもう一度蘭を見た
トイレだろうか？　園子は蘭に食べかけのクレープを渡すと　どこかへ行ってしまった
蘭は一人で空を眺めながら親友の帰りを待っている

「今がチャンスですね・・・さぁ！　ライアンさん！」

今こそ　その胸の想いを伝える時
しかしライアンは親指を噛みながら苦い顔をしている

「何してんですか？」

「やっぱり無理ダヨー・・・見てヨ」

ライアンは蘭を指差した
蘭は依然　空を眺めながらクレープを食べている

「あんなにカワイイんダヨ？　きっと素適なボーイフレンドがいるヨー・・・」

「何言ってんですか・・・そんな奴　居たとしても奪い取ってやれば良いんですよ！」

「おい！　何の話をしてんだよお前ら！？」

掴みかかって来たコナンをフリーザ様はデコピンで弾き飛ばす

「コナンさんは黙っておいでなさい！」

そんなやり取りをしていると　哀が「クスッ」と笑いながら歩み寄って来た

哀はポケットからカプセル剤を一つ取り出すと　怪しい笑みを浮かべて言った

「『Ｃ－ＫＡＮ－８９』　これを飲むと　人は一時的に昏睡状態に陥るわ

そして次に目が覚めた時　最初に見た人間を愛してしまうようになる惚れ薬・・・試してみる？」

「おぉ～！　素晴しいですよハイバラさん！　さっそく私が飲ませて来ましょう！」

哀からカプセルを受け取ると　フリーザ様は蘭の方へ向おうとしたしかし　その腕にコナンが絡み付いてくる

当たり前だ・・・愛しの蘭が得体の知れない薬を飲まされようとしているのだから

そんなコナンを　フリーザ様は腕から引き剥がすと再びデコピンで吹っ飛ばした

しかしコナンは諦めない・・・

何度吹き飛ばされようとも立ち上がり　そしてフリーザ様の腕に絡み付く

「何ですか！？　鬱陶しいですよコナンさん！」

「絶対に・・・その薬は使わせない・・・！」

そしてコナンはフリーザ様の一瞬の隙を突いてカプセルを奪うと

フリーザ様に奪い返されないように自分の口の中に放り込んだ

「あぁぁッ！！！」

「へへっ・・・ざまぁ・・・み・・・ろ・・・」

さっそく薬が効いたのかコナンは倒れてしまった
それにしても・・・蘭に薬を飲ませたくないあまり　自分で飲んでしまうとは・・・コナンの蘭への想いも相当である
そんなコナンの想いを目の当たりにして　ライアンは急に「告白しなくてはいけない」気がしてきた

「言って来マース・・・」

「ん？　決心付いたんですか？」

「イエス・・・フラれても良いヨ・・・彼女には素適なキッドが付いている様だし・・・
でも・・・それでもやっぱりボク自身の思いはちゃんと伝えないとネ！　精神衛生上ダヨー！」

「がんばって・・・ライアンさん」

フリーザ様と哀の後押しを受けながら　ライアンは蘭の元に歩み寄った
蘭も気付いたのかライアンに挨拶をする・・・
その様子をフリーザ様と哀は固唾を飲んで見守った
・・・・・そしてしばらくすると　ライアンが戻って来た

「どうでした？」

「ダメだったヨ・・・好きな男の子が居るんだって・・・でもスッキリしたヨ！」

「そうですか・・・ではポアロに戻りましょう！
今日は特別にこのフリーザ様が奢って差し上げます・・・お財布は博士さんの物ですがね」

秋空の下・・・フリーザ様達は笑いながら去って行った

・・・一方コナンは

「コナンくん！　コナンくん！」

誰かが自分の体を揺すりながら名前を呼んでいる・・・
一体誰だ・・・？
コナンは痛む頭を抑えながら目を開けた

「こんな所でどうしたんだい？」

そこには高木の姿があった
仕事で近くを通りかかったのだろうか？　スーツでビシッと決めていてカッコイイ・・・
それにその優しそうな顔立ちに澄んだ瞳・・・
全てがコナンを魅了した

「高木刑事ッ！！！」

「うわっ！」

コナンは高木刑事に抱きついた

「愛してるよ高木刑事！　アイラーヴュー！　ジュテーム！」

「ちょっ！　コナンくん・・・ひぃえええ！」

それはそれは・・・

驚くほどの「Ｃ－ＫＡＮ－８９」の効果であった

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード４１　「ニセコナン」

「やべぇ・・・まさか組織に正体がバレるなんて・・・」

「とにかく・・・工藤君はしばらくここに隠れてた方が良さそうね」

「でも俺が居なくなったら皆が先に組織のターゲットになるだろ？」

「それなら大丈夫じゃ！」

博士は一人の少年を伴って部屋に入って来た

「その子は？」

「名づけて『ニセコナン』じゃ！　彼が君の代わりにコナンとして生活する」

「バーロォ！　んなことしたらその子が代わりに・・・」

「問題ない！　君の特技を見せてやるんじゃニセコナン！」

「ＯＫ博士・・・八裂き光輪！！！　シャアアアアアアア！！！」

ニセコナンの放った八裂き光輪によって隣の工藤邸はチーズの様にスライスされてしまった

「俺の家が・・・」

「フフッ・・・君は大人しくここに隠れてな！　組織のうじ虫共も俺が八裂きにしてやんぜ！」

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅ　・・・

１１８．毛利蘭は心の天使（後書き）

ってことで１１８話です
・・・最近告白もの良く書くなぁ
ラブコメとかそんなに好きじゃないんですけど＾＾；
あぁ・・・死ね死ね団がパンダカーでやって来る・・・

酢ダコー！（分かる人には分かる）

ってことで次回はラブコメじゃない話を書きたいな～
こんなこと言ってまたラブコメだったらどうしよう＾＾；

１１９．暗殺作戦１０１号（前編）

人は死ねば無に返る
天国とか地獄とか言うが・・・知ったことではない
人にとって　現世を生きることこそが重要なのである
しかし・・・
時として人は　不本意ながらも「現世」からの立ち退きを余儀なくされることがある
殺される時である・・・
理由は様々
恨み・・・憎しみ・・・欲望・・・色々であるが
中には殺された者が浮かばれないような理由も存在する・・・

第１１９話　暗殺作戦１０１号　（前編）

昔の貴族が住んでいそうな立派な館・・・例えるなら　そこはそんな場所だった
広大な緑の敷地の中に　ぽつんとたたずむその館
普段は静かだが　定期的にたくさんの来客がやって来る
今日がその日だ・・・
次々とやって来る高級車を見ながら館の主人マーティン・ローズヤードは嬉しそうに笑った

「旦那様・・・皆様お揃いでございます」

優しそうな笑顔が印象的な執事が呼びに来た
マーティンは鏡に向って化粧の最終チェックをすると　客人達のい

る広間に向った
そこはさながらパーティ会場・・・
テーブルには簡単な料理やお菓子が並べられ　客人達はシャンパン片手に談笑している
そんな中　マーティンも広間にやって来た

「あ～らマナミちゃん！　お久しぶり～！」

「ブタ○リラ攻めでキテ○ツが受け・・・」

「も～！　マナミちゃんたら相変わらず『腐』なんだから～」

メガネが良く似合う日系美人と挨拶を交わす
もっとも　会話になっていないが・・・
いつもの事なのであまり気に止めず　マーティンは他の客人達とも挨拶を交わしていった
そして一通り挨拶を終えた頃　執事がやって来た

「旦那様・・・お時間でございます」

「あらそう・・・皆さ～ん！　楽しいおしゃべりはここまで！　メインイベントを始めますわよ～！」

マーティンは女みたいな仕草で言うと　客人達と一緒に広間を出て会議室に移動した

・・・・・・

「さて・・・始めましょうか」

マーティンが言うと　シャンデリアの明かりが消された
そして部屋の前方にスクリーンが下ろされると　そこに映像が映し出される
先日　世界中を震撼させた　プルプル大統領暗殺の瞬間を捉えたものだ

「我々『インビジブル・カンパニー』はこれまで９９の暗殺作戦を立て　その全て成功させて来たわ
最初はその辺の一般市民だったのに・・・先日はご覧の通り　国家元首を暗殺するに至った・・・
そして本日の議題はいよいよ『暗殺作戦１００号』について・・・記念すべき回よね」

するとスクリーンの映像が切り替わった・・・今度はある人物の写真である
上から下まで真っ白なタキシード姿のその男が映し出されると　会議室はざわめいた

「その記念すべきターゲットに私が選んだのはこの男・・・『怪盗キッド』こと怪盗１４１２号
世界的に有名なこの大泥棒を華麗に暗殺できたとしたら・・・イヤーン！　燃えちゃう！」

マーティンが一人盛り上がる中
執事はスクリーンをしまい　再びシャンデリアの明かりを灯した

「そんな訳で皆さん・・・今回のターゲットは『怪盗キッド』でよろしくて？」

会議室は拍手の音に包まれた
マーティンは満足気な顔でそれを聞くと隣の席を見た・・・
マナミが仏頂面で座っている

「マナミちゃんも異論無いわよねー？」

「キッド総受け・・・」

「ＯＫ・・・それじゃあ作戦会議に移りましょう」

・・・数日後
都内にある某美術館・・・そこには黒山の人だかりが出来ていた
中にはプラカードを持っている者もおり　『キッド様万歳』　『Ｌ・Ｏ・Ｖ・Ｅ　ＫＩＤ』などの言葉が並んでいる
そんな様子を遠くから双眼鏡で確認すると　キッドはニヤリと笑った

「さてと・・・それじゃあショータイムと行きますか」

警備の目を掻い潜り・・・
あらかじめ用意しておいた侵入口から　いとも容易く館内に入り込むことに成功
目指すは美術館の中心・・・そこに展示されたビックジュエルだ

「今日はあの名探偵も来てないみたいだな・・・ちょろいもんだぜ」

全ては順調・・・
遠くに中森警部の怒鳴り声を聞きながら目的の物を手にすると
今回の警備の最大の穴と言える天井裏のルートへと向った
本当に順調だ・・・

しかし彼は気付いていなかった
順調すぎるルートの先に　思わぬ魔の手が潜んでいることに・・・

・・・・・・

「むふふふ・・・そろそろキッドちゃんが出て来ても良い頃よね・・・」

スクリーンには衛星中継による美術館の様子・・・
それを見ながらマーティンと　世紀のショーを見に集ったメンバー達は怪しく笑った

「ヴィンセント！　皆さんにグラスとワインをお持ちして！　キッドちゃんが死ぬのと同時に乾杯しましょう」

「かしこまりました」

執事とメイド達がグラスを客人達に配る
そのグラスが赤いワインで満たされていくにつれ　彼らの興奮度は上がっていった
いよいよ・・・「暗殺作戦１００号」が実行に移される時である

『Ｌａｄｉｅｓ　ａｎｄ　Ｇｅｎｔｌｅｍｅｎ！』

スクリーン越しに男の声が聞こえて来た
キッドが美術館の屋根に現れたのだ

「キャー！　キッドちゃんよー！　いよいよね　マナミちゃーん！」

「中森警部はへたれ攻め・・・反論は認めない・・・」

全ては計画通り・・・
裏ルートで警官隊の配備図を手に入れた彼らは　キッドの逃走経路を予想
今まさにキッドがそうしている様に　屋根の上でパフォーマンスをすることもお見通しだった
そして・・・キッドが宝石を掲げたらそれが合図
今回の作戦を実行させるために雇ったプロの殺し屋が
群衆の目の前でターゲットを屍に変えるという算段である

「この通り『天使のタマタマ』は確かに頂戴いたしました！」

見せつけるように・・・キッドがゆっくりと盗み出した宝石を掲げていく
暗殺者はそれを確認すると　あらかじめ屋根に張りめぐらしておいた鋼線（こうせん）の端を引っ張った

「何ッ・・・！！！」

キッドの目にも自分を取り囲む無数の鋼線が映った
順調過ぎたからだろうか？　慢心は一番の敵だと分かっていたのに・・・
まるで　蜘蛛の巣があるとも知らず調子に乗って飛び回った蝶の様な気分だ
自分を捕らえようと向ってくる鋼鉄の糸を見つめながら　キッドは後悔した

「さぁ皆さん！　乾杯よ～！」

鋼線がキッドの全身に絡み付く・・・
それと同時にマーティンは勢い良くグラスを掲げた
しかしその時
一筋の光が群集の中から飛び出し　キッドのすぐ横を通り過ぎていった

「あぁ～！　何をするんですかハイバラさん！　外れちゃったじゃないですか！」

「『外れちゃった』って・・・どういうつもりよ！」

「うるさいですよ！　あの偉そうなコソ泥を消し炭にしてやるんです！」

嫉妬の篭ったエネルギー波・・・
しかし　それはキッドに直撃することなくギリギリの所をすり抜けていく
哀が必死に腕にまとわり付いて妨害しているからである
地獄のようなエネルギー波の雨・・・しかしキッドにとっては恵みの雨となった
彼を捕らえていた鋼線はエネルギー波によって焼き切られてしまい
結果として　彼は再び自由を取り戻すことができた

「・・・・・ッ！」

逃がすまいと再び鋼線を放った暗殺者だったが時既に遅し・・・
キッドは既に翼を広げて飛び発ってしまっていた

「あ～あ・・・逃げちゃったじゃないですか！」

「結構なことね・・・帰るわよ」

・・・・・・

「何あれ？　どういうこと？」

乾杯をしようと思っていたのに・・・
キッドが死んだら乾杯をしようと思っていたのに・・・
一体これはどういうことか？
マーティンは執事とマナミを交互に見た

「さぁ・・・私には何とも・・・」

「キッドが攻め・・・？」

聞いた自分が馬鹿だった・・・
とにかく　記念すべき「暗殺作戦１００号」が失敗に終わったことは確からしい
今まで一度も失敗したことのない自分達の完璧な計画が・・・

「クソッ！　・・・ヴィンセント！」

「何でございましょう？」

「あのビームを放ったクソ野郎を探し出して徹底的に調べろ！
インビジブル・カンパニーの邪魔をした奴はただでは済まさない！」

「かしこまりました」

・・・一夜開けて
フリーザ様と哀はいつものようにポアロにやって来ていた

「でも　仕留めていたらヒーローでしたね」

「ただの人殺しよ・・・」

間の抜けた梓の言葉に突っ込みながら哀はカップを口に運んだ

「まったくですよ・・・ハイバラさんがあの時邪魔しなければ・・・
本当なら今日の新聞の一面はこのフリーザ様が独占していたはず！」

「殺人鬼としてね・・・」

「うるさいですよ！　本当に使えませんねハイバラさんは・・・」

「悪かったわね」

ねちねちと嫌味を言いつつ　フリーザ様もコーヒーを口にする
すると　フリーザ様はあることに気付いた

「今日のコーヒーは美味しいですね・・・『いつもの』とは違うんですか？」

「え？　いつもと同じはずですけど・・・・・・あーそっか！」

何かを思い出したように梓はフリーザ様に背を向けると
奥の方で食器を洗っていたウェイトレスを連れて来た

「ジャジャジャジャ～ン！　今日から働いてもらうことになった『やよいちゃん』でーす！」

そう言えば・・・
いろいろあって客足が遠のいていたポアロも　ここ最近はかつての賑わいを取り戻し
今ではマスターと梓では対応しきれない程の忙しさである
しかし　一時の経営難によりバイトもリストラしてしまっていたために人員がおらず
そこで梓の知り合いである彼女に働いてもらうことになったのである

「大蛇条(おろちじょう)やよいです・・・よろしくお願いします」

やよいはフリーザ様に向ってペコリと頭を下げた

「きっとやよいちゃんの淹れ方が良いから美味しかったんですよ」

「ほっほっほ・・・ハイバラさんと違って使える人材ですね」

一言多いフリーザ様を睨みつつ　哀もやよいを見た
小柄で可愛らしい人だ・・・

「フリーザ様は良く来るけど　曲者だから気をつけてね」

「殺しますよハイバラさん？」

「まぁまぁ・・・」

冗談はさておき・・・自分も気をつけなくてはいけないかもしれない・・・

哀は少し離れたテーブル席の客を見た
ただの食事中のサラリーマンにも見えるが・・・間違いない
さっきから自分達の様子を覗っている
何か悪いことに巻き込まれなければ良いが・・・
哀はそんな不安を胸にやよいの淹れたコーヒーを飲んだ

続く

１１９．暗殺作戦１０１号（前編）（後書き）

久しぶりの更新です
でもサボってた訳じゃないですよ？
今回の話は３話構成です
中編・後編と続きます
しかも　話の大筋は完成しているので後は推敲するだけです
明日に中編
明後日に後編をアップする予定です

・・・・・・ん？

「明日に中編、明後日に後編。」

ん～・・・名言だなこりゃ

１２０．暗殺作戦１０１号（中編）

哀はもう一度後を振り返ってみた
いない・・・
昨日まで　執拗に視線を送ってくる連中がいたのに　今日は一人も見かけない

「何ですかハイバラさん？　キョロキョロして・・・」

「何でもないわ・・・」

組織にいた哀だから気付くことが出来たが
あの尾行の仕方・・・素人のものではありえなかった
哀は再度振り返った
やはりその姿は見えない・・・
いないならそれで良いのだが　なぜ彼らは急に姿を消したのか？
どうにも引っかかる・・・

「・・・気味が悪いわね」

「そんなにキョロキョロしているハイバラさんの方が気味が悪いですよ」

哀は言い様のない不安を覚えたが・・・今考えてもどうしようもないと思い直し
フリーザ様の後に付いてポアロの扉をくぐった

・・・・・・

「ふぅ・・・それじゃあ　大体案もまとまったことだし　一旦休憩にしましょう」

マーティンはそう言って　目の前のティーカップに手を伸ばした
本当に疲れた・・・
良くここまでまとめることが出来たものだと　自分を褒めたくなるくらいに・・・

「ヴィンセント・・・もう一杯・・・」

疲れた主人を労うように　執事は笑顔で紅茶を注いだ

「にしても・・・世の中には変な奴がいるものね・・・ねぇマナミちゃん？」

「ジャ○アンが攻めな訳ない・・・ありえない・・・」

会話を成立させる気のない友人の言葉に溜息をつきながら　マーティンは目の前の資料を見た
フリーザ・・・
一見するとただのおかしなビジュアル系だが
そのデータは人間離れどころの騒ぎではない・・・と言うより　確実に人間ではない
あらゆる攻撃が通用しないであろうその肉体・・・
どうやって暗殺すべきか本当に悩んだ

「でも　これで目途が立ったわね・・・『暗殺作戦１０１号』
フリーザちゃん・・・早く死ぬところが見たいわ・・・ンフフ！
もう一杯・・・」

主人の成功を祈りつつ　執事は笑顔で紅茶を注いだ

・・・・・・

「もう一杯ください」

「フリーザ様ったら　相当やよいちゃんのコーヒーがお気に召したようですね
やよいちゃ～ん！　コーヒーのおかわり！」

梓が言うと　やよいはコーヒーをフリーザ様の元に持ってきた
目の前に置かれたカップを手に取ると　その香を堪能し・・・そして口に運ぶ

「まったく素晴しいですよ　やよいさん！」

フリーザ様は以前にも増して　足繁くポアロに通うようになった
それもこれも　やよいの淹れるコーヒーのことが甚く気に入ったからである

「こんなに美味しいコーヒーを淹れられる部下が出来てとても幸せです
そうだ・・・何かご褒美をあげましょう・・・何が良いでしょうか？」

ふーむ・・・と考え込むフリーザ様
しかしその時　やよいの方が先に口を開いた

「それじゃあ・・・お願いを聞いてもらっても良いですか？」

「お願いですか？　何でしょう？」

「明日・・・一緒にトロピカルランドに行って下さい」

やよいが何かを差し出す

『トロピカルランド一日無料招待券』

小さな紙の上には可愛いイラストと一緒に　そうプリントされている

「あら良いじゃない・・・行ってきなさいよフリーザ様」

クスッと笑って　哀はフリーザ様に勧めた

しかし　それを奥で聞いていたマスターが渋い顔で口を挟んできた

「でもねぇ・・・やよいちゃんは明日も仕事が・・・」

ゴン！

鈍い音が響いた

その顔面に強烈な前蹴りを叩き込んでマスターを黙らせると

梓はやよいの横に立ってフリーザ様に頭を下げた

「ポアロは大丈夫ですから・・・やよいちゃんのことをよろしくお願いします」

「お願いします・・・」

やよいも一緒に頭を下げる

フリーザ様はチケットを手に取るとやよいを見た

「良いでしょう・・・
確かトロピカルランドには　まだ乗っていないアトラクションがありましたからね
これを期にコンプリートしておきましょう・・・
あなたにも手伝ってもらいますよ　やよいさん」

「ふふっ・・・デートに誘われたことを素直に喜べば良いのに」

「何か言いましたかハイバラさん？」

「別に・・・」

こうしてフリーザ様とやよいは　トロピカルランドでデートをすることになった

「それにしても・・・どういう男の趣味なのかしら？」

「何か言いましたかハイバラさん？」

「別に・・・」

・・・次の日
フリーザ様とやよいの二人を見送ると　哀は地下室でパソコンに向った
久しぶりにフリーザ様から開放された気がする・・・
哀はこの期を逃すまいと　解毒剤の研究に打ち込むことにした

ピンポーン！

しかし　その時インターホンが鳴った・・・
どうせ博士が出るだろうと思い　哀はそれを無視する

ピンポーン！

そういえば博士も出かけると言っていた気がする・・・
それなら・・・居留守だ

ピンポーン！　ピンポーン！　ピンポーン！

しつこい・・・
腹立たしいが出るしかないようだ
哀は額に青筋を浮かせながら玄関に向った

「どちら様？」

扉を半分ほど開けて来客を見た
するとそこには　見たくもない姿があった
全身黒尽くめ・・・
モアイ像がサングラスをかけた様なその顔・・・
ウォッカだ

「間に合ってます・・・」

「えぇ！？　って・・・ちょ　待てよ！」

キム○ク風に叫ぶと　ウォッカは扉の隙間に腕を滑り込ませた

「助けてー！　殺されるー！」

「やめてくれよ！　近所の人に誤解されるだろ！」
仕方なくウォッカは　扉に腕を挟まれたまま事情を説明し始めた

・・・一方トロピカルランドでは
とりあえず　乗りたいアトラクションを3つほど制覇したフリーザ様がくつろいでいた
今はやよいに買いに行かせたハンバーガーとジュースを待っている

「さ～て　次はどのアトラクションを制覇してやりましょうか・・・ふっふっふ」

パンフレットを広げる
今日は割りと空いているし　この分なら乗ったことのないアトラクションを全て周れるだろう・・・
そう思いながらフリーザ様はほくそ笑んだ
しかしその時だった

「きゃあああー！」

「うるさいですね・・・何事ですか？」

突然聞こえてきた女性の悲鳴・・・
フリーザ様は鬱陶しそうに辺りを見まわした
少し離れた所には　ハンバーガー2つとジュースが散乱している
そして　その向こう側を見ると・・・

「フリーザ様！」

やよいが妙な男に連れて行かれるのが見えた

「おやおや・・・ハンバーガーが台無しですね・・・これじゃあ食べれたもんじゃありません
それもこれもあの男のせいですね・・・お仕置きして差し上げましょう」

フリーザ様はやよいを連れ去った男を追いかけ始めた
しかし　人が多いトロピカルランド・・・一体二人はどこへ行ってしまったというのか？
フリーザ様は感覚を研ぎ澄ました

「フリーザ様ー・・・」

かすかだが聞こえた！　やよいの声だ
フリーザ様は声のした方へ向う
すると鈍い光沢を放つ鋼線が伸びて来て　フリーザ様の腕に絡み付いた
そしてフリーザ様の自由を奪おうとグイグイと締め付けてくる
鬱陶しく思いつつも　フリーザ様はその鋼線を目で追った

「ふむ・・・あの中に居るようですね」

鋼線はアトラクション用の洞窟の様な所から伸びて来ていた
フリーザ様は手刀でそれを切断すると　洞窟の中に入って行った
中はほんのり肌寒い・・・
氷の世界をイメージしたアトラクションらしい
フリーザ様は若干震えを覚えつつも先に進んだ

「やよいさ～ん！　どこですか～？」

・・・返答は無い

犯人に口を塞がれているのか？　或いは・・・

「せっかく美味しいコーヒーを淹れてくれる部下が見つかったというのに・・・

犯人さん！　覚悟はよろしいんでしょうね！？」

だんだん腹が立ってきたフリーザ様・・・

犯人に問いかけるが・・・返事の代わりに返って来たのは無数の鋼線だった

「猪口才な！」

蜘蛛の糸の様に全身にからみ付くそれを　今度は気合で焼き払う

「どうしても死にたいようですね・・・よろしい！　最凶の苦痛の中で屠(ほふ)って差し上げましょう」

・・・・・・

「インビジブル・カンパニー！？」

トロピカルランドに向う車の中で　哀は驚きの声を上げた

聞いた事がある・・・

その目的はずばり「人を殺すこと」

何かの目的のために殺すのではない・・・「殺す」こと自体が目的なのだ

「暗殺」をこよなく愛する異常者達の秘密の同好会・・・それが「インビジブル・カンパニー」だ
哀が確認するように見ると　ウォッカは静かに頷いた

『ウォッカ・・・あなたが最近ご贔屓のビジュアル系の彼・・・狙われてるわよ？
助けに行かなくて良くって？　彼は無敵だから大丈夫？　フフフ・・・』

ベルモットの言葉が頭を過ぎる
しかし　フリーザ様とのことがバレているとすると当然　志保のこともバレているだろうなぁ・・・
ウォッカは溜息をついた

「ちょっと・・・聞いてるの？」

「ん？　あぁ・・・！　フリーザ様は今　奴らの標的にされてる
『暗殺は芸術だ』とか抜かす　あのゲス共にな・・・」

「それ・・・あんたが言えることなの？」

フリーザ様なら大丈夫だろうが・・・
しかし　連中は寝る間も惜しんで人を殺すことを考えているような奴らだ
どんな手を使ってフリーザ様を狙ってくるか分からない
急がなくては・・・
ウォッカはアクセルを踏みしめた

「コラー！　そこの車！　スピード違反よ！　すぐに止まりなさい！」

「げぇー！」

「何やってんのよ・・・」

・・・・・・

再び鋼線が襲いかかってくる

フリーザ様は「もう　うんざりだ」と溜息をつきながらそれを叩き落とした

「いい加減になさい！　そんな攻撃ではこのフリーザ様を倒せないということが分からないんですか？」

しかし　鋼線はそれでも襲いかかってくる・・・学習能力が無いのだろうか？

フリーザ様は今度はそれを避けなかった

全身に絡み付いた鋼線・・・それが伸びて来る場所を良く見極める

「かくれんぼは終わりですよ！」

フリーザ様のエネルギー波によって氷のオブジェが崩れ落ちた

そこには人影・・・やはりそこに潜んでいたようだ

「遂に姿を現しましたね・・・ほっほっほ」

散々人を駆けずり回らせた罰として　与えうる最大のお仕置きをしてやろう・・・

フリーザ様は殺気を撒き散らしながら暗殺者に歩み寄っていった

「・・・何ですって!?」

予想外だった・・・
てっきり暗殺者は恐怖に震えているのかと思っていたが・・・
その暗殺者は冷静に立ち上がると　フリーザ様の眼を真っ直ぐに見返してきたのだ
しかし・・・そんなことはどうでも良い
そんなことではないのだ
それ以上にフリーザ様が驚いたのは・・・

続く

１２０．暗殺作戦１０１号（中編）（後書き）

ってことで中編です
何かすっかり寒くなって来ちゃいましたね
私は寒いの苦手なんで勘弁して欲しいです
とくにパソコンに向ってる時なんて・・・

「暖か」プリーズ！

ってことで何か良いホカグッズが欲しい今日この頃です
ストーブとかは燃料費がかさむんですよね・・・
ただで暖かくなりたいです＾＾；

こうなったら地球を温暖化させるしか・・・

おっと・・・危険なことを考えてしまいました
こんなこと言ってるとシロクマさんに怒られますね
ってことでちょっとぐらいは我慢！
おいらは風の子だい！

ってことで風邪をひいたおっとりが次回は１２１話をお送りします

１２１．暗殺作戦１０１号（後編）

・・・やよいは先日のことを思い出していた

ポアロでの仕事を終えるとバスに乗り
郊外のバス停で降りて自宅を目指した・・・
「大蛇条」の表札が掛かった立派な門をくぐると　まだ自分の腰ほどしかない弟が駆け寄って来た

「おねーちゃん！」

「ただいま・・・今ご飯作るから待っててね」

荷物を置いて台所に向うと　妹がすでに夕飯の仕度を始めていた
やよいは「ただいま」と声をかけると　割ぽう着を着て妹を手伝い始めた
ブクブクと煮立つ鍋から起ち込める美味しそうな匂いが　腹を空かせた弟達を居間に集合させる
やよいはクスッと笑うとお盆におかずや食器を乗せて居間に向った

「いただきまーす！」

皆そろってちゃぶ台を囲む
やよいと・・・そして妹一人に弟が三人・・・それが大蛇条家だ
両親は末っ子の俊悟が産まれてすぐに事故で他界してしまった
だから　やよいは長女だが親代わりでもあるのだ

「うあああ～ん！」

兄とのおかずの取り合いに負けて俊悟が泣き出した
やよいは取り皿にいくらかおかずをよそってやると俊悟の前に置いた
こうやっておかずの取り合いが出来る内は良い・・・
取り合うおかずが無くならないように・・・
そうすることが自分の使命であるとやよいは常々思っていた

「ごちそうさまでした・・・」

やよいは食器を流しに片付けると自分の部屋に向い　パソコンの電源を入れた
メールが一件・・・

『引き続き仕事を引き受けて貰いたい
詳しいことはそちらに派遣する者に聞け』

また彼らからの依頼・・・
この前は思いも寄らぬ邪魔が入って報酬を得る事が出来なかった
「取り合えるだけの」おかずのために・・・
兄弟達のために・・・失敗は許されない

・・・・・・

「残念ですよ　やよいさん！　せっかく良い部下が出来たと思っていたのに・・・」

「私もです・・・でも『ごめんなさい』は言いませんよ？」

そう言うとやよいは　今度は天井に向けて鋼線を放った
グラグラッと低い音が響き渡ったかと思うと　天井から巨大なタン

クが落ちてきた

「馬鹿な・・・無駄だと言うことがまだ分からないのですか？」

フリーザ様はそれをエネルギー波で破壊する
しかし　真っ二つに吹き飛んだタンクの中から大量の液体が飛び出してきた
それはフリーザ様に降りかかると　白い蒸気を上げながら周りの熱を奪っていった

「知ってました？　このアトラクションの売りはこの綺麗な氷のオブジェ達・・・
でも　万一施設の冷却設備に異常が発生した時のために
氷像の欠落を防ぐための臨時冷却手段として液体窒素を常備しているんです」

「ぬうう～・・・こ・・・の・・・」

次第にフリーザ様の動きが鈍り・・・そして完全に停止した

・・・・・・

「お～ほっほっほ！　フリーザちゃん氷漬けよ！」

スクリーンに映し出される隠しカメラからの映像・・・
それを見てマーティンは手を叩いて喜びの声を上げた

「さぁ～ミス・オロチジョウ！　フリーザちゃんをバラバラにするのよ！

そして頭部だけクール便で送らせて・・・部屋に飾って毎日キスしてあげるの！
きゃー！　もうやっだ～！　どうなのよマナミちゃん？」

「オロチジョウは実は男で・・・ツンデレのフリーザを・・・」

好き勝手にものを言うマーティンとマナミ・・・
そんなことを知ってか知らずか・・・やよいは事前に言い渡された作戦通り
凍結したフリーザ様を粉砕するため鋼線を放った

「さようなら・・・フリーザ様・・・」

綺麗に固まったフリーザ様の氷像に鋼線を絡み付かせ
腕に力を込めて一気にそれを引き絞る

「・・・・・・！？」

しかし・・・手応えが無い
やよいはフリーザ様を見た
すると・・・その体は若干だが輝いている・・・？

「うそ・・・あれだけ液体窒素を浴びたのに・・・」

「はあああああああ！！！」

雄叫びがこだまし・・・そしてフリーザ様の解凍が完了した

「残念ながら　あなた方とは体の作りが違うんですよ」

フフンと得意げに笑うとフリーザ様はやよいに歩み寄った
やよいは敗北を悟ったのか体の力を抜いてうな垂れた

「参りました・・・手詰まりです・・・」

「ほっほっほ・・・降参ですか？　本来なら　これから地獄の様な恐怖を味わって貰うのですが・・・」

フリーザ様は目を閉じて・・・そして思い出した
ポアロで飲んだやよいのコーヒーの味を・・・
殺すには・・・あまりに惜しい

「殺してください・・・」

「何ですって!?　私がこれだけ寛大になるのは非常に特別なことなんですよ!?」

フリーザ様の言葉に　やよいは首を横に振ると自分の首にあるリングを指差した

「これ・・・アクセサリーじゃないんです・・・分かります？　爆弾です」

インビジブル・カンパニーが付けた物だった・・・
暗殺を芸術として扱う彼らはあくまで「完璧」に拘る
暗殺者の中には自分達の立てた作戦に従わない者もいるだろう・・・
だから　暗殺者を作戦に従わせるため　爆弾を取り付けるのだ

「どうせ死ぬなら・・・フリーザ様に・・・」

「ほっほっほ・・・そんな物　私のサイコキネシスで・・・」

「無理です・・・あなたの能力は全て資料として彼らの手元にあります
それに・・・今のこの状況も全て監視されているんです・・・下手な事をすればその時・・・」

やよいは隠しカメラと　物影からこちらを覗う男の方を見ながら言った
そして　もう一度フリーザ様の方を見てニッコリ微笑んだ

「・・・良いでしょう」

フリーザ様は神妙な面持ちになると　エネルギー波を放つため人差し指を立てた
なるべく苦しまないように・・・指先を心臓に向ける

「非常に・・・残念です・・・」

次の瞬間　赤い光がやよいの体を貫いた
やよいの体から全ての力が抜けていく・・・

「ありがとうございます・・・コーヒー・・・褒めてくれて・・・嬉しかったです・・・・・」

やよいはそれだけ言うと静かに目を閉じた
ただ　安らかに・・・まるで眠っているかの様に・・・

・・・・・

「フリーザ様！」

「おぉ！　無事だったか！」

トロピカルランドの入り口で　フリーザ様は哀とウォッカに出くわした
二人はフリーザ様の無事を確認すると　一先ず胸を撫で下ろした

「ところで・・・やよいさんは？」

「帰りましょう」

「ちょっと聞いてるの？　やよいさんは？」

「帰りましょう・・・」

フリーザ様は　後は固く口を閉ざしたままだった
哀は全てを悟ると　それ以上追求することなく一緒にウォッカの車に乗り込んだ
完全に沈黙する二人・・・
流石に気まずかったのか？　帰りの車の中で　ウォッカはひたすら喋り続けた
しかし　二人とも聞いていなかった・・・別のことを考えていた・・・

「・・・着いたぜ」

車が止まった
二人は車を降りるとウィンドウ越しにウォッカを見た

「私のこと・・・組織に」

「喋らねぇよ・・・じゃあな」

「・・・ウォッカさん」

突然フリーザ様が口を開いた
ウォッカは閉めようとしていたウィンドウをもう一度開ける

「連れて行って欲しい所があるんですが・・・」

・・・それから数週間後
マーティンの館の会議室には再び客人達が集っていた

「ふぅ・・・『暗殺作戦１０２号』　・・・今度こそフリーザちゃんの死体が見れそうね」

薄ら笑いを浮かべると　マーティンはティーカップの中身を飲み干した

「ヴィンセント・・・もう一杯・・・」

しかし執事はそれに応じない・・・それどころかスクリーンの準備を始めた
「何事か?」と見ていると　執事はマーティンの元へやって来た

「旦那様・・・映像による通信が入っております」

「へ？　私宛て？」

執事がスイッチを入れるとスクリーンには映像が映し出される
そこには奇抜なビジュアル系の男が映っていた

「ごきげんよう！　インビジブル・カンパニーの皆さん・・・」

「ふ・・・フリーザちゃん!?」

「ほっほっほ！　その通り・・・この間は素適な『暗殺作戦』をどうも・・・
ところで・・・今　私がどこにいるかお分かりですか？」

そう言えば・・・フリーザ様の背景にはどこかで見たことがある緑色の広大な敷地が・・・

「まさか!?」

「そうですよ！　近くまで来たものですから・・・ついでに皆さんに美しく散っていただこうと思いましてね」

そう言うとフリーザ様は指先にエネルギー球を作り始めた
マーティンは慌ててフリーザ様の資料をめくる・・・
あのエネルギー球・・・ここを消し飛ばすつもりだ！

「それでは皆さんさようなら・・・あ～はっはっはっはっは！」

「な・・・！　おい！　ちょ　待てよ！」

キム○ク風マーティンを無視して映像が途切れる

そしてそれと同時に大地が揺れ始めた・・・資料通り・・・非常にまずい！
会議室は大パニックに陥った

「ヴィンセント！　マナミ！」

二人を見るが・・・

「ふ～む・・・ジャパン風に言うと『死亡フラグ』でございますなぁ・・・はっはっは」

「フリーザ様攻めのマーティン受け・・・」

全く頼りにならなかった・・・
そして遂に　マーティンの館は光に飲み込まれた

「このマーティン・ローズヤード死すとも・・・オカマは不滅よぉ！！！」

・・・翌日
姉を失った悲しみが癒えぬ大蛇条家の敷居を一人の若い男が跨いだ
玄関先にそのクシャクシャ頭の男を見つけると　長男の新介が応対しに出た

「君のお姉さんから渡すように頼まれたものだよ」

そう言って男はアタッシュケースを差し出す
新介がそれを開けると・・・中には物凄い大金が入っていた

「こんな大金・・・！」

「お姉さんのものだ・・・だから・・・君らのものさ」

男はそれだけ言うと新介に背を向けて歩きだした

「現金ってのは俺の主義じゃねぇんだけどな・・・
でもフリーザ様・・・あん時助けられた『借り』は確かに返したぜ・・・」

空に向って呟くと・・・
男はくしゃみをしながら大蛇条家を後にした

その日の新聞には
イギリスで謎の大爆発があったと言う記事と一緒に・・・こんな記事が載った

『大富豪　オクマン・チョージャー氏の自宅金庫から現金５００万ドルが盗まれる事件が発生
警察はその手口から　かなり優れた『盗み』の技術を持つプロの犯行と見て　現在調査中・・・』

しかし・・・
この事件と大蛇条家に届けられた大金との関連性は謎のままである

続く

１２１．暗殺作戦１０１号（後編）（後書き）

「おまけ」は空気を読みました・・・

ってことで「暗殺作戦１０１号」はこれにて完結なんですが・・・
やよいちゃ～ん・。・（つД､）・。・
彼女は殺そうかどうか本当に悩みました
悩んだ末・・・

ＳＡＴＳＵＧＡＩ

その方が盛り上がると思ったんです・・・
でも殺した瞬間やよいちゃんを使ったネタが湧き水の如く・・・
やよいちゃ～ん！　カムバ～ック！
うぅ・・・こんな事言っても死んだ人間は帰って来ません

ってことでそのうち彼女を主人公にしたオリジナルでもやろうと思います

ところで彼女の苗字
大蛇条（おろちじょう）ですが
最初は「大蛇」と言う字を使いたかっただけなのでそのまま「大蛇やよい」にしました
でも・・・なんか・・・
オロチだと空手やってそう・・・あと地下闘技場にいそう・・・
ってことで何かくっ付けよう・・・と思い
色んな字を当てはめた挙句・・・大蛇条に決定しました

その他の候補としては・・・

大蛇寺（おろちじ）　大蛇山（おろちやま）　大蛇国原（おろちこくばる）
などがありました・・・＾＾；

はぁ・・・それにしても疲れた

って訳で次回は１２２話です

１２２．走れ！へなちょこホームズ

ある日・・・
男は夢を見た
真っ白に光る妖精が自分の方へ飛んで来る
妖精は目の前までやって来ると男に言った

「あなたはシャーロック・ホームズの生まれ変わりです」

男はそれを真に受けた

第１２２話　走れ！へなちょこホームズ

霧の都　ロンドン・・・
その街の中を一人の男が駆けていく

『ロンドンに爆弾が仕掛けられようとしているんだ！』

三日前　彼の近所に住む少年がそう言った
サッカーボールを取りに入った林の中で　男達がそう話しているのを聞いたのだと言う・・・
男は警察に通報し
そして今日になって　爆弾を持った男達が次々と逮捕された
犯人はロンドンの不良グループ「ヘルイズム」
動機は「世間をアッと言わせたかった」という幼稚なものだった
男は連行される不良達を見ながらホッと胸を撫で下ろした
しかしそんな中　一人の不良がわめき出した

「ちくしょう！　てめぇらこれで終わったと思うなよ？
まだ残ってるぜ？　この祭のフィナーレに相応しい特大の一発がな
！」

「我々警察が十分警戒しているんだ・・・そんな爆弾仕掛けさせる
ものか！」

「バーカ！　もう仕掛けてあんだよ」

何ということだ・・・
男はそれを聞くと　街の中へ走り出した

・・・・・・

「さて・・・どこから見て回りましょうか？」

インビジブル・カンパニーを消し去るためにイギリスまで来たフリ
ーザ様達・・・
せっかくなのでロンドンを観光して行くことになった

「見所は色々あるが・・・まずは飯だな」

ウォッカが言うと　フリーザ様と哀もお腹に手を当てた
そう言う訳で　三人はレストランを探して歩き出した・・・

ドン！

その時　前から走ってきた男がフリーザ様にぶつかった

何も言わずに走り去ろうとする男をフリーザ様は捕まえる

「このフリーザ様にぶつかっておいて一言も無しですか？　殺しますよ？」

「やかましい！　捜査の邪魔をするな！」

無礼な男だ・・・

フリーザ様は死なない程度に2・3発小突いてやった

「すみませんでした・・・勘弁して下さい」

「最初からそう言えば良いんですよ」

「ところで・・・『捜査中』って言ってたけど　あなたは刑事か何か？」

哀が聞くと男は懐から名刺を取り出した

それを受け取って見ると・・・哀の顔が引きつる

何が書いてあるのか？

気になってフリーザ様とウォッカも名刺を覗き込んだ

『私立探偵　シャーロック・ホームズ』

名刺にはそう書かれている

「ほっほっほ・・・英国流のジョークですね」

「何を言うか！　私こそあの『シャーロック・ホームズ』の生まれ変わりなのだ」

「小説の主人公の生まれ変わりって何よ・・・」

どうも真面目に言っているらしい
馬鹿馬鹿しくて　フリーザ様とウォッカは笑い出した

「アッハッハッハッハッ！　おっさん・・・良いコメディアンになれるよ！」

「まったくです・・・完全にイカレてますね」

「笑っている場合ではない！　このロンドンに爆弾が仕掛けられているんだぞ！？」

一瞬で氷りつく三人・・・
ホームズはこれまでの経緯を説明した
確かに笑い事ではない・・・
どこで爆弾が爆発するとも分からないのに観光などできる訳がない

「そう言う訳だ！　爆弾を探しに行くぞ　ワトスン君一号！　二号！　三号！」

「この場合　当然私が一号ですよね？」

「じゃあ　私ニ号で良いわ・・・」

「俺が三号・・・って！　何でこのおっさんの助手になってんだよ！？」

フリーザ様達も手伝うことになった・・・

・・・・・・
そうは言っても・・・何の手がかりも無しに当てずっぽうに探しても仕方がない
哀の提案で　四人は犯人グループの会話を聞いた少年ダニーの家にやって来た
覚えていることを教えて欲しい・・・
そうお願いすると　ダニーは一生懸命に記憶の糸を手繰った

「そう言えば・・・『一番大きいのはホールに仕掛ける』って言ってた気がする」

「ホールだな!?　ワトスン君一号!　二号!　三号!　ロンドン中のホールを調べるんだ」

「ねぇちょっと!　・・・行っちゃった」

まったく落ち着きの無い・・・
ホームズが聞いて呆れる
そんなことを思いつつ　一人残った哀は　もう少し話を聞こうとダニーを見た

「あの男と関わっちゃいかんといつも言ってるだろう?」

しかし　ダニーは家から出て来た父親に連れて行かれるところだった
どうやらホームズは嫌われているらしい・・・
哀は気になって話を聞いてみた

「あの男は『ビリー』って言ってな・・・以前は普通のサラリーマ

ンだった
だがある日を境に『ホームズの生まれ変わり』を名乗り始めて・・・
今じゃ嫁さんと子供にも逃げられた・・・まぁ『お気の毒な人』だな」

そう言って父親は　嫌がる息子を連れて家の中に入ってしまった
結局分かったのは「ホール」という言葉と「ホームズはお気の毒な人」ということだけだった・・・

・・・そうこうしているうちに　タイムリミットまであと一時間
しかし　誰からも爆弾発見の報告は無い
警察も総動員で全てのホールを探したのに・・・
ひょっとしたら　「ホール」というのは何かの隠語かも知れない
そんなことを考えながらテムズ河沿いを歩いていると　哀はがっくりうな垂れたホームズを見つけた

「一体どこにあるんだ・・・？」

「さぁ・・・でもとっておきの一発みたいだし　きっと目立つ所よ」

溜息ばかりのホームズの隣で哀は必死に頭を働かせる
しかし無情にも時間は過ぎていく
ビッグ・ベンの鐘の音・・・タイムリミットまで残りわずかであることを告げている
しかし　その鐘の音が哀にヒントを与えた

「ビッグ・ベン！　爆弾はビッグ・ベンよ！」

「ビッグ・ベン・・・？」

哀の確信に満ちた瞳・・・
意味は分からなかったが　ホームズは哀を信じて走り出した
夕暮れの街を通り抜け・・・そしてビッグ・ベンの頂上まで一気に駆け登る
世間をアッ言わせるなら・・・一番目立つ場所のはず・・・
ホームズが探すと　それは鐘の下にあった

「しめた！　爆弾自体はそんなに複雑じゃないぞ」

ホームズは急いで爆弾についたタイマーのスイッチを押した
デジタル時計の表示が消える・・・爆発もしない・・・
ホームズは大きく溜息をついて腰を下ろした

「間に合った様ね・・・」

哀が遅れてやって来た
それを見て　ホームズは気になっていたことを尋ねた

「どうしてここにあるって分かったんだい？」

「ビッグ・ベンの名前の由来を知ってる？
工事責任者の名前『ベンジャミン・ホール』からとって付けたのよ
『ホール』って言うのは犯人達の洒落の利いた隠語だったって訳・・・」

「その通りだ・・・だが　それに気付いたのがお前らの運の尽きだな」

突然の声に振り返ると・・・そこには「いかにも」な不良が立って

いた

「爆発しねぇから見に来てみりゃあコレだ・・・
俺達のフェスティバルを邪魔してタダで済むと思うなよ?」

「何がフェスティバルだ　この悪ガキ!」

掴みかかるホームズだったが・・・
一瞬のうちにボコボコにされてしまった

「ヘッ!　この俺をジンジャー・ボリスと知って喧嘩売ってんのか?」

ジンジャーは持っていた縄でホームズと哀を縛ると
爆弾のタイマーを10分にセットして再始動させた

「ハッハッハッ!　てめぇらにはビッグ・ベンと運命を共にしてもらうぜ」

「こんなことをしても逃げられんぞ!」

立ち去ろうとするジンジャーの背中に向ってホームズは叫んだ
しかし　振り返ったジンジャーは薄ら笑いを浮かべて二人を見下していた

「馬鹿が・・・俺の親父を知らねぇのか?
上院議員ギルバート・ボリス・・・どんな悪さも親父が揉み消してくれるぜ!」

「ありがちな話ね・・・」

高笑いを上げながらその場を後にするジンジャー・・・
しかし次の瞬間　吹っ飛びながら帰って来た

「こんな所にいたんですか・・・探しましたよハイバラさん」

フリーザ様がやって来たのである
鼻血を噴き出しながらも　体勢を立て直したジンジャーは
ナイフを取り出し　その切先をフリーザ様に向けた

「何だてめぇは!?　一体よぉ・・・何者だ!?」

「ほっほっほ・・・ワトスン一号ですよ」

フリーザ様はナイフをグニャグニャに捻じ曲げると　ジンジャーの
こめかみを指で突付いた
するとジンジャーは力無く崩れ落ち　そのまま気絶してしまった

・・・その後
ワトスン三号の連れて来た警察により爆弾は処理され
そしてジンジャーも警察に連れていかれた
その際　隣の議事堂にいた父親のギルバート議員もその場に駆けつけたが
さすがに自分の職場に爆弾を仕掛けた息子に愛想が尽きたらしい・・・
・
ジンジャーの罪が揉み消されることは無いだろう

そんなこんなで・・・四人はホームズの家の前までやって来た

「それじゃあ・・・ここで」

「えぇ・・・ホームズさんもお元気で」

別れの挨拶をするフリーザ様・・・
しかしホームズは俯いた

「私は・・・ホームズではなかった
爆弾を見つけたのはアイ君だったし　フリーザ様が来なければ死んでいた
私は・・・ホームズではなかった・・・ただのビリー・オーランドだった」

「やっと気付いたの？」

その時　小さな男の子を連れた女性が声をかけて来た
ビリーは二人を見ると目を丸くした

「メイ・・・マークも・・・どうしてここに？」

「あなたがちゃんとやってるか心配でね・・・内緒で毎日来てたわよ」

哀はダニーの父親の話を思い出した
どうやらビリーの奥さんと子供らしい・・・

「すまなかった・・・」

「馬鹿ね・・・」

「私は・・・ビリーだった・・・ただのちっぽけな・・・」

ビリーの目から涙がこぼれる
それを息子のマークは不思議そうに見つめた

「パパ・・・どうして泣いてるの？」

「ん？　うん・・・悪い夢を見ていたからだよ」

そう言ってマークの頭を撫でてやると　ビリーはメイを見た

「戻って来てくれないか？」

「私はアイリーン・アドラーじゃないけど・・・それでも？」

「あぁ・・・こんなビリー・オーランドで良ければ・・・」

それだけ言葉を交わすと
二人は黙ってマークの手を取り　家の中に入って行った

「一件落着ですかね・・・」

「そうね・・・」

「さて！　今夜の宿でも探そうぜ」

久々に響いた家族の明るい笑い声を聞きながら
フリーザ様達はオーランド家を後にした

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード４２　「英祐ファイト２」

天国のお母さん・・・あ！　それとも地獄ですか？
まぁ良いや・・・そちらではいかがお過ごしですか？
僕は鈴木さんにＷＤＣ・・・ワールド・ドジっ子・チャンピオンシップに出場させられました
世界中から集まった強豪相手に・・・僕はがんばって戦いました
そして遂に・・・僕はその頂点に辿り着いたのです・・・
でもちょっと複雑な気持ちです

「と言うわけで！　第一回ＷＤＣ王者は日本から来た本堂英祐だぁ～！
と言いたいところだが・・・実は君はもう一人戦わなくてはならない男がいる・・・」

「え・・・何ですか？　このポケモンみたいな展開は・・・」

「その男の名は・・・ＮＯＢＩＴＡだ！」

リングアナウンサーがその名を呼ぶと　会場中がざわめいた

「おい・・・ＮＯＢＩＴＡだってよ・・・」

「あの伝説の・・・」

「地上最ドジ生命体・・・」

「ＮＯＢＩＴＡ・・・」

「この世の終わりだ・・・」

母さん・・・ＮＯＢＩＴＡです・・・

僕はどうなってしまうんでしょうか？

１２２．走れ！へなちょこホームズ（後書き）

ってことでロンドンです
せっかくのロンドンなので突っ込み所も二倍です
例えば・・・ビッグベンって一般人が登って良いの？
とか・・・

考えるな！　感じろ！
「袖の下」渡したんだよ警備の人に！

そんなこんなで私も「袖の下」が欲しいです！

もちろん犯罪です
逮捕？　逮捕は困るな・・・

ってことで「袖の下」はいりません！

でも金欲しいな・・・
そんな飢えた状態です
飢えてますが・・・次回は１２３話です
ん？　なんか良いな・・・やっときますか？　例のやつ・・・

１・２・３・・・ダァー！

１２３．七人のスカイ・ハイ

「ステフ！　今度のヨーロッパ旅行のチケットは取れたかい？」

「まだよ・・・　でもこの会社のにしようと思うの」

「どれどれ・・・　えらく安いな！　なんでこんなに安いんだい？」

「分からないわ・・・　でも安いに超したことはないわよ」

「おいおいステフ！　そう言うのには大抵裏があるんだよ？」

「そうかしら？」

「あぁそうさ！　・・・ＯＫ！
安いことが良いことでないというストーリーを教えてあげよう」

第１２３話　七人のスカイ・ハイ

空港のエントランス・・・
フリーザ様は窓の外を見た
行き交うたくさんのジェット機・・・いよいよ日本に帰る時が来たのである

「フリーザ様！」

乗る便が決まったのか　哀とウォッカが呼びに来た

フリーザ様は荷物をまとめると二人の後に付いて歩きだした

・・・・・・

「で？　私の乗る飛行機はどこですか？」

「どこって・・・目の前にあるじゃない？」

先程いた空港の建物が小さく見える・・・
そんな小さな滑走路の上にフリーザ様はいた
辺りをキョロキョロして見るが・・・飛行機は見当たらない

「無いじゃないですか」

「・・・・・どうやら現実が見えてない様ね」

哀はそう言って数メートルほど歩くと「ソレ」を拳でコツコツと叩いてみせた

「コレよ！　コレ！」

そこにあったのは見るからに墜落しそうなプロペラ機
こんなもので日本まで帰ろうなど・・・正気の沙汰とは思えない
フリーザ様は哀に抗議の視線を向けたが　哀はそれを真っ向から睨み返してきた

「元はと言えばあなたのせいでしょ」

哀が言うのも無理は無かった

哀だって本当は立派なジャンボジェットで帰りたかった・・・
しかし　金が無いのである
昨晩　フリーザ様のわがままでホテルのスイートに泊まったからである
しかも悪いことに・・・
二人の財布であるウォッカはイギリスで使えるキャッシュやクレジットを持っていなかったのだ

「そう言う訳だから・・・この格安便で我慢しなさい」

「くっ・・・　仕方ないですね」

フリーザ様は渋々プロペラ機に乗り込んだ

・・・・・・
そこには意外な光景が広がっていた
格安便と言うくらいだから・・・もっとこう・・・寒々しくて狭苦しいイメージがあったのだが
客室はしっかりとした作りで　しかもゆったりとした広さがある

「なんだ・・・意外と良いじゃないですか」

フリーザ様はすっかり機嫌を直して席に座った

「この様子なら無事に日本に帰れそうね・・・」

「あぁ・・・値段が値段なだけに不安だったがな・・・」

哀とウォッカも席に座ると　ひとまず安堵の溜息をついた

「アイヤー！　広いネー！」

「何だぁ？　割とちゃんとしてるじゃねぇか」

中国系の初老の男
そしてガムをクチャクチャと噛みながら白人系の若者が入って来た
どうやら乗客はこれで最後らしい
まぁ　こんな格安便怪しくて普通利用しないだろうが・・・
哀がそんなことを考えているとキャビンと思われる女性がやって来た

「皆様ー！　今日はＡＴＨをご利用頂きありがとうございまーす！」

元気なキャビンである
彼女は備え付けのマイクを取って　満面の笑みで説明を始めた

「当機はパキスタン　スリランカ　インドネシア　台湾辺りを経由
した上で日本に向います
プロペラ機なのでご了承下さいね！　キャビンは私『キミー・ヴァ
レンタイン』が務めさせて頂きます
何かご質問のある方いらっしゃいますか？」

すると中国系の男が手を上げた

「おネーちゃんのスリーサイズを教えて欲しいアルネ！」

「いきなりセクハラ・・・」

「上から８５・５４・８７です！」

「こ・・・答えた」

呆れつつも・・・
哀は気になったことがあり　質問することにした

「ねぇ・・・ＡＴＨって・・・何の略？」

「はい！　『Ａｉｒｌｉｎｅ　Ｔｏ　Ｈｅｌｌ』の略でございます！」

一瞬にして場が凍りついた
Ａｉｒｌｉｎｅ　Ｔｏ　Ｈｅｌｌ
「地獄行き航空」と言ったところだろうか？
哀がその社名の意味を考えていると　今度はフリーザ様が質問した

「この航空会社が他の会社より勝っていると思うものは何ですか？」

「はい！　当社の航空便のトラブル発生率は８７パーセントと非常に高く
特に墜落可能性は１９パーセントと非常に高くなっております！
でもご安心ください！　当社はそれら全てを１００パーセント隠蔽しております！」

「ほっほっほ・・・それは素晴しい！」

「素晴しくないわよ！」

やばい香がプンプンする・・・
哀は正直降りたくなったが・・・他に日本に帰る手段は無い
１９パーセントに入らないよう祈るしかない

哀は胸の前で手を組んで目を閉じた
そうしていると　今度は無精ひげを生やした中年親父がやって来た

「機長のオリヴァー・ジルスキーだ・・・お前達を悪夢のような空の旅に案内する
この道２０年のベテラン無免許パイロットだ！　だが文句は言わせない
格安便なんだ・・・　ちょっとのことは我慢しろ！　あと生命保険に入っておけ・・・以上だ！」

「それでは皆様ー！　間も無く離陸となりますのでシートベルトをお締め下さい！」

不安で一杯の哀を乗せて・・・
プロペラ機は大空へと飛び発って行った

・・・・・

「お互いクレイジーな便に乗っちまったよな・・・
ファック！　俺は日本に居る彼女の所に遊びに行こうとしただけなのによ・・・」

白人系の男が唾を吐きながら言った

「俺はジェレミー・バーナード・・・一緒にくたばるかも知れねぇ男の名だ」

正直この男と棺桶を共にするのは嫌だが・・・
哀達も一応自己紹介をした

「おいチャイナじじい！　てめぇは何て名前なんだ?」
「のっほっほ〜！　張明泰(ジャンミンタイ)ネ！　酔拳の達人アルヨ！」
そう言って張は持っていた中国酒をぐびぐびと飲み始めた
ジェレミーは溜息をつくと再び哀達の方を見た
「まぁ　この機にいる間は家族ってことでよろしく頼むぜ
さしずめお前は俺の妹ってとこだな・・・ヒャッヒャッヒャッ！」
哀の鼻をクリクリと弄びながら笑うジェレミー
この男の妹は嫌だな・・・
そう思った時　キミーがランチボックスを持ってやって来た
「機内食でーす！　朝早く起きてがんばって作ったんでどうぞ！」
キミーからランチボックスを受け取って中に入っていたサンドイッチを食べる
サービスは良い・・・良いのだが・・・
「ありがとう・・・とっても美味しいわ」
「いいえ！　せめてもの罪滅ぼしです！」
元気で明るいキミーの笑顔が痛い・・・
哀は溜息をついた
「アチョーッ！　これ酔拳の奥義アルネーッ！」

張が酔っ払ってキミーの胸を鷲掴みにした

「セクハラで訴えたら？」

「いいえ！　せめてもの罪滅ぼしです！」

笑顔が・・・痛過ぎる・・・

哀はまた大きな溜息をついた・・・まさにその時だった

グラグラッ！

いきなり機体が大きく揺れた

立っていたキミーと張は床に倒れ　ウォッカとジェレミーは悲鳴を上げた

「ぎゃあああー！　死ぬぅー！」

「落ち着きなさいよ・・・男でしょ？」

「アチョーッ！」

「いつまで胸揉んでるの！　大人しくしてなさい！」

哀は役に立たない男達に突っ込みを入れつつ操縦席に向ったそこにはオリヴァーが難しい顔で座っていた

「どうしたの？」

「あまりよろしくねぇな・・・」

そう言って　オリヴァーは親指で窓の外を指した
見ると　右の翼にあるプロペラが火を吹いていた

「クソッ！　キミー！　客共に何かに掴まるように言え！　不時着すんぞ！」

「はーい！」

哀も席に戻ってシートベルトを締め　前の座席に付いた取っ手を掴んだ
窓の外の景色がどんどん変わっていく・・・高度が下がっているのだ

「ファック！　俺が何をした？　神様よぉ～・・・　彼女に会いに行くことは罪なのか？
ファック！　ファッキン・ゴッド！　ふざけやがって！　クソ食らえ！　ファック！」

ジェレミーがヒステリックに騒ぎ出した

「『ファック　ファック』うるさいわね　このファッキンお兄ちゃん！　ヒステリーは嫌いよ」

「志保・・・　そんなにFで始まる言葉を使うなよ・・・」

ドン！

そんなやり取りをしていると　突然物凄い爆発音がした・・・と思ったら
次の瞬間　哀は物凄い圧迫感を覚えた
機体がクルクルと回りながら落下しているのだ

「ぎゃあああーッ！　助けてアニキーッ！　さよならーッ！　ベルモットの姉さーんッ！」

「皆様ー！　当機は墜落いたしまーす！」

「お姉ちゃんが手招きしてる・・・」

「まったく騒々しいですね！　一体何事ですか？」

その時　居眠りをしていた一人の男が目覚めた
あまりに静かだったので　哀はその存在をすっかり忘れていたが・・・

「フリーザ様！　墜落するわ！」

「ほっほっほ・・・それはそれは」

フリーザ様である・・・
もうこの男に頼るしかない！

「『ほっほっほ』じゃなくて・・・何とかしてちょうだい！」

哀が叫んだ
・・・・・・
すると体を圧迫するような感覚が消えた
窓の外を見ると・・・下の方に地面が見える
フリーザ様が超能力で機体を水平に戻したのだ
オリヴァーはこの期を逃すまいと操縦桿を握り締め　目の前に現れた砂漠に機体を滑り込ませた

「た・・・助かった・・・」

地面が直ぐそこに・・・やっぱり人は土から離れては生きられない
哀はシータの言っていたことを実感した

「日本に着いたんですか？」

「砂漠が見えないの？　鳥取砂丘じゃなさそうだし・・・」

とりあえずはホッと胸を撫で下ろしながら　七人は飛行機の外へ出
てみた・・・
するとそこにあったのは

「ピラミッド・・・？」

続く

おまけ：チャックとステファニー

「分かったろ？　安ければ良いってもんじゃないのさ」

「ＯＨ～・・・　ごめんなさいチャック・・・　私ったら値段ばか
り気にしちゃって」

「良いんだよ・・・　でもお金の心配はいらないよ？　僕がちゃん
と出すから」

「もう・・・　愛してるわチャック！」

「現金だなぁ・・・　僕も愛してるよステフ」

１２３．七人のスカイ・ハイ（後書き）

お久しぶりです
おっとりです
ついに１２月になりましたね
師走です
師匠も走り出します
そんな訳でフリーザ様と灰原さんも走り出しました
何だかんだでもう年末ですね
フリハイが始まって二度目の年末です

年末と言えば色々ありますよね
クリスマスが最初でしょうか？
街に溢れる恋人達
プレゼントを買って貰って喜ぶ子供達の笑顔
街は幸せで一杯ですね

でも・・・
私は・・・フリハイの更新・・・

でもそんなの関係ねぇー！

・・・って言い切りたいなぁ～
助けてー！

ＳＯＳ

Ｓ・・・そんなに・・・
Ｏ・・・落ち込んでないで・・・

S・・・・死ねよ

・・・・・・厳しいなぁ世の中って（'A`）

１２４．狙われた天才少年

天才と呼ばれる人種がいる
彼らは凡人達に様々な恩恵を与える
だから人は天才を崇める・・・
しかし　それは天才である「人」を崇めているのではない
天才である「人」が生み出す「恩恵」を崇めているのである
だから　眠っている天才を褒める人は居ないだろう
きっと叩き起こして働かせるはずである
「恩恵」を要求するはずである
古今東西・・・
それは変わらない

第１２４話　狙われた天才少年

エジプトの街中を　周りの人間とは感じの違う三人が歩いていた
ビジュアル系の男と　茶髪のショートボブが似合う少女
そして酒を持った初老の男・・・
フリーザ様と哀と張（ジャン）の三人である

「アイヤー！　エジプトの酒も美味いネー！」

「この人　飲んでばっかで全然役に立たないわね・・・」

飛行機は無事に不時着できたが　残念ながらフライトは中断せざるを得なくなった一行・・・
しばらくのエジプト滞在を余儀なくされたので　三人が食料などの

買出し係に任命されたのである

「お！　ハイバラさん！　向こうでも面白そうなことやってますよ！」

「・・・フリーザ様は道草ばっかりだし」

本当に役に立たない男達だ・・・

哀は深く溜息をついた

それと同時に・・・

哀はすごい衝撃を受けて後に吹っ飛ばされた

誰かが哀にぶつかってきたのである

散らばった荷物を拾いながら見ると　それは１２歳くらいの少年だった

「すみません！　急いでいたもので」

そう言って立ち去ろうとする少年

しかし彼の目の前に数人の男達が立ち塞がった

「おっと！　追いかけっこはお終いだぜ」

「くっ・・・！」

うわ・・・またトラブルかよ・・・

哀はここ数日のことを思い出した

いったい自分はいくつのトラブルに巻き込まれただろう？

本当に・・・嫌になる・・・

「おやおや・・・何を面白そうなことをしているんですか？」

フリーザ様がやって来た

「あの男の子が悪者に絡まれてるのよ・・・
助けて上げたら？　何かくれるかもしれないわよ？　私はもう面倒臭くて・・・」

「ふむ・・・　物が貰えるなら助けて差し上げましょう」

フリーザ様は男達の方へ歩み寄ると
一瞬のうちにそれらを蹴散らした

「覚えてやがれ～！」

「フン！　口程にも無い・・・」

「つ・・・　強い・・・」

走り去っていく男達と　唖然としながらフリーザ様を見つめる少年
どうやら事態は収拾したらしい・・・　めでたしめでたし
哀はふぅ・・・と溜息をつくと　謝礼を要求するフリーザ様に「戻ろう」と促した

「待ってください！」

何だよ・・・？
イラッとしながら哀が振り返ると　先程の少年がいた

「お願いです！　僕を助けて下さい！」

どうやらまだ解決していないらしい・・・
トラブルはごめんだが　諦めるしかないようだ
哀とフリーザ様は少年の話を聞くことにした

「申し遅れました・・・　僕はハーラ・ミルダブディと言います
自分で言うのも何ですが　ＩＱ２５０の天才です」

「ムカツク小僧ですね・・・　殺しても良いですか？」

「ダメに決まってるでしょ・・・　それで？」

「はい・・・　僕は好き好んで天才に生まれた訳ではないのに
どういう訳か　最近この人知を超えた天才である僕を狙う凶悪な奴らが現れたのです」

本当にムカツク・・・　それでもハーラの話は続いた

ハーラが言うには
２ヶ月程前に　彼は未知のエネルギーを発見したらしい
そのエネルギーは人体に内在する「萌え」を自在に操ることが出来るというもので
ハーラはそれに「エモーエナジー」と名前をつけた

「しかし　偉大な発明は必ず悪用されるもの・・・
どこから聞きつけたのか　僕の発明を悪用しようとする輩が現れて・・・」

「さっきの奴らね？」

「はい・・・　お願いです！　僕を守って下さい！　お礼ならいく

らでも・・・！」

警察に行けよ・・・
そう思った哀だったが・・・　ハーラが「お礼」と言う言葉を口にした時点でそれは決まっていた

「良いでしょう！　このフリーザ様にお任せなさい！」

「馬鹿・・・」

何はともあれ
3人は酒場にいた張と合流し　一旦飛行機に戻ることにした

・・・・・
街から少し離れた砂漠の上を　不時着した飛行機がある所に向って歩く三人・・・

「あら・・・？」

哀は気付いた・・・　三人であることに・・・
ハーラはいるし　張もいる
ということは　いないのはフリーザ様である

「まったく！　また道草くってるのね・・・」

「僕を守ってくれるはずでは・・・？」

「フリーザ様は適当なのよ・・・　諦めて先に戻ってましょう」

飛行機で待っていればそのうち帰ってくるだろう
そう思って哀達は再び歩きだした
その時・・・
哀は目の前の砂がモゴモゴと動いていることに気が付いた
何かいる・・・　何だろうか？
そう思った時それは現れた

「ハハハー！　待っていたぞ！」

三人を取り囲むように　砂の中から二十人あまりの武装集団が飛び出してきた
そして手に持った小銃を哀達に突き付けてくる・・・
逆らいようがないことを悟り　哀は静かに両手を上げた

「ん？　一人足りねえな？　まぁ良いか・・・　連れて行け！」

三人は縄で拘束されると　少し離れた所に隠してあったトラックに乗せられ
そのまま連れていかれてしまった

・・・それから数分後
遅れてフリーザ様がやって来た

「まったく・・・　部下のくせに　このフリーザ様を待てないとは・・・」

さっさと行ってしまった哀に腹を立てながら歩いていると
目の前に数名の男達が現れた
見ると　そのうちの何人かは先程蹴散らした男達である

「俺達の仲間が世話になったらしいな・・・」

「何ですかあなた達は？　さては・・・　ハーラさんが言っていた悪党共ですね？」

「あぁそうよ！　そしてお前の仲間は俺達が貰ったぜ」

連れさらわれてしまったのか・・・　まったく　役に立たない部下だ・・・

理不尽にも哀に対して憤りを感じながら　フリーザ様は目の前の男を見た

「お前は今この場でぶち殺してやるぜ！」

突き付けられたナイフ・・・

しかしフリーザ様はそれを指で摘んでへし折ると　拳で男を殴りつけた

３００メートルは飛んだであろうか？

砂の海に消えていった仲間を見送ると　男達は尻尾を巻いて逃げ出した

しかしフリーザ様は逃がさない

逃げようとする男達を超スピードで追いかけると　一人一人叩きのめしていった

「い・・・命だけはぁ！」

残るは一人・・・

完全に腰を抜かして股間を湿らせているその男を見下ろすと

フリーザ様はニヤリと笑って尋問を始めた

「あなた達は何者です？　ハイバラさん達をどこへやったんですか？」

「いえ・・・あの・・・ただの小悪党です・・・」

「死にたいようですね・・・」

「言います！　言わせて下さい！　ぜひ！」

男は洗いざらい喋り始めた・・・

・・・・・・

紅海に面する海岸線の一角・・・

その地下深くに彼らの基地の一つが存在する

『はぐれソルジャー純情派』

それは血に飢えた戦闘狂や国を追われた凶悪犯罪者

はたまた「自分探し」をする現代っ子によって結成された組織・・・

自らの欲望を満たすためだけに活動する無国籍軍隊である

そして　その全てを統制する男が　ここ紅海基地の廊下を歩いていた

「ここか？」

「ハッ！　その通りでありますカーター将軍！」

カーターが部屋に入ると　そこには捕らわれた少女と初老のアジア人・・・

そして探していた少年の顔を確認することが出来た

少年はカーターの目を真っ直ぐに睨んでいる

「はじめましてハーラ君・・・　おっと失礼・・・　ミルダブディ博士と呼んだ方が良いかな？」

「あぁ！　『超天才のミルダブディ博士』と呼んだ方が良い！」

「そうじゃないでしょ・・・」

カーターはフッと笑うと話を続けた

「分かっていると思うが・・・　君を呼んだのは他でもない
君の研究を我々のために役立てて欲しいのだ・・・　そのＩＱ２１２の頭脳をフル活用してね」

「・・・さっき２５０って言ってなかった？」

「・・・ちょっとだけさば読んだかな」

ちょっとじゃない・・・
哀がそう突っ込もうとした時　突然兵士数名が部屋に入ってきた
そして兵士達は拳銃を取り出すと　哀と張の頭にその冷たい銃口を押し当てた

「もちろんのことだが拒否権は無い！　拒否すれば死体が二つ出来上がることになる・・・」

「その人達は僕とは何の関係もない！　だから殺しても良いよ！」

「ひどいわね・・・」

「別にこいつらは殺してもいいが・・・　その次は貴様の家族や友人が同じ目に会うぞ？」

「くっ・・・！　家族か・・・！　友人までなら見捨てられるのに・・・！」

「それは本当に友人なの・・・？」

観念したハーラ・・・
それを確認すると　カーターは兵士達に目配せをした
すると兵士達は拳銃をしまい　ハーラの両脇をがっちりと固めた

「それではミルダブディ博士を開発ドックへお連れしろ
それとそこの二人は・・・　適当に牢にでもぶち込んでおけ」

こうしてハーラは兵器開発ドックへ・・・　哀と張は牢屋へ連れていかれた・・・

続く

１２４．狙われた天才少年（後書き）

天才か・・・
私も天才に生まれたかったですね

あ！　今思い付きました
「天才と凡人の違いとは？」

凡人は「特別になりたい」と願う・・・

こんなんでどうでしょう？
それとも天才も「特別になりたい」と思っているのでしょうか？
う～ん・・・
天才じゃないからわがんね
あれ？　でも天才との区別がつかないなら私も天才かもしれない訳で・・・
でも天才じゃなくて・・・

あれ？

頭がおかしくなりますね＾＾；
とりあえず結論

私は天才じゃない！

ってことで・・・
凡人が次回は１２５話をお届けです

１２５．紅海は萌える

「ここで大人しくしているんだな」

その言葉と一緒に哀は牢に放り込まれた
窓一つない暗い部屋・・・
ひんやりとした空気が哀の肌を撫でた

「もう飲めないアルヨ～・・・」

一緒に入れられた男から立ち込める酒の臭いに邪魔されながら
哀は静かに頭を働かせ始めた

第１２５話　紅海は萌える

・・・それから1日が経とうとしていた
哀はずっと脱出手段を考えているが　組織から逃げた時の様にはいかない
ここは完全な密室・・・
唯一の出入り口は一つある扉だが
そこにはカギがかけられており　見張りも二人いる
哀は扉についた小さな窓から外を見た

「ダメー！　逃げられないよーだ！　ヒャヒャヒャヒャヒャヒャ！」

ベロを出しながら兵士が笑う
・・・逃げられそうにない

どうしたものか・・・
困り果てていると外から会話が聞こえてきた

「やべぇ・・・　腹痛てぇよ・・・　ちょっと便所行ってくる」

「おいおい・・・　見張りは二人って命令だったろ?」

「ちょっとぐらい大丈夫だって・・・　うっ！　ダメだ漏れる！」

「ったく！　しょうがねえなぁ・・・　早くしろよ?」

見張りは一人・・・
だが状況が良くなった訳ではない
扉にはカギがかかっているのだから・・・

ガチャ・・・

哀がそう思った時　突然扉が開いた
外から見張りの兵士が開けたのだ
なぜ・・・?
不審に思いつつも恐る恐る外に出てみると　兵士はぐっすり眠っていた
何が起こったのか?
哀が不思議そうに首を傾げていると　張(ジャン)が笑いながら外に出てきた

「のっほっほ～！　これ中国の気功アルネ！　さぁ！　ハーラの所に行くアルヨ！」

まさかこの酔っ払いがここまでやるとは・・・
哀は意外に思いつつも　張の言葉に深く頷き

そして兵器開発ドックに向って走り出した

・・・・・・
カーターは一年前のことを思い出していた
それは　たまたま日本に立ち寄った時のこと
秋葉原をぶらついていた時・・・　彼は喉の渇きを覚え　喫茶店に入ることにした

『おかえりなさいませ！　ご主人様！』

出迎えてくれたのは可愛らしいメイド達・・・
パラダイスだ！
カーターは至福の時を過ごした

・・・それからというもの
カーターはいつも考えていた

『あ～あ・・・　世界が全部メイドだったら萌え萌えなのになぁ・・・』

そんなある日のことだった
エモーエナジーの話を耳にしたのは・・・

・・・・・・

「カーター将軍！」

「なんだ・・・」

部下がやって来た・・・　カーターはそちらに視線を向ける

「やりました！　遂に完成です！」

部下のその言葉を聞くと
カーターは自分の部屋を飛び出して兵器開発ドックへ向った
扉を開く・・・　するとそこにはそれらしい機械がそびえ立っていた

「おぉ～・・・！」

「これが人類メイド化兵器『アポカリプス』です」

「くっ・・・！　超天才の僕は悪魔の兵器を作ってしまった・・・」

歓喜のあまり声が出ないカーターと　落胆と罪悪感のあまり声が出ないハーラ・・・
しかしその時だった

「その兵器は使わせないわよ　カーター将軍！」

沈黙を破って兵器開発ドックに二つの影が飛び込んだ
哀と張である

「貴様ら！　どうやって抜け出した？　まぁ良い・・・　始末しろ！」

基地内に警報が鳴り響く
すると武器を手にした兵士達が集まって来た

「お嬢ちゃん！　ここは私に任せるアルネ！　ハーラのことを頼むネ！」

「分かったわ・・・　気を付けて！」

哀がハーラの方へ向ったのを確認すると　張はかっぱらって来た酒を飲み始めた
ずっと飲んでいた分もあり・・・　その足元はおぼつかない

「酔っ払いじじいが！　ぶち殺せ！」

斧やナイフで襲いかかる兵士達
しかし張がフラフラとよろめくせいでその攻撃は全て空振りに終わってしまう
それどころか　逆に張の拳が男達に突き刺さった

「アチョーッ！　これが酔拳アルネーッ！」

兵士達はそれでも果敢に襲いかかるが　変則的な張の動きに全く付いていけず
あれよあれよと言う間に薙ぎ倒されていった

「ワチャーッ！　飲めば飲むほど強くなるネーッ！」

「くそ！　マシンガンを寄こせ！　俺が仕留めてやる！」

「馬鹿！　迂闊に発砲して新兵器を傷つけたりしたら　それこそ将軍に殺されるぞ！」

「のほほほほ～！　お前達の攻撃は当たらないアルネ！」

張がそう言って笑いながら酒をぐいっと喉に流し込んだ
しかし　張の喉がゴクリと音を立てたその瞬間　謎の怪光線が張を襲った

「のわっ！　これは何アルネ！？」

一瞬真っ白になる目の前・・・
そして気が付くと　張はなぜかフリフリのスカートとエプロンを着ていた
それに肌がピチピチに若返っている
近くにあった鏡で自分を見てみると・・・　そこには可愛らしいメイドがいた

「アイヤー！　これはどういうことアルネー！？」

「くっ・・・　やられたわ」

「この天才である僕もだよ・・・」

見ると・・・メイド姿の哀と　同じくメイドの格好をしたハーラと思しき少女がいた

「はっはっはっ！　なかなか萌えるぞ！」

上の方でカーターが笑っていた
アポカリプスが起動されてしまったのである

「ぬぅ～・・・　メイドになっても同じアルネ！　アチョーッ！」

構わずに酔拳を使おうとした張だったが・・・

「コラ！　騒ぎを起すんじゃない！」

「はぅ！　お許し下さいご主人様ぁ～！　・・・アイヤー！？」

「くっくっく・・・　そう言うことだ！　貴様らは私に逆らうことが出来ないのだ
このまま奴隷として囲ってやっても良いが・・・　ここまでがんばったのだ
敬意を表してきっちり処刑してやる！　ひざまずけ！」

カーターが叫ぶと　三人のメイドは地面にひざまずいた
体が言うことを聞かない・・・
哀は「動け」と何度も念じたが　それは叶わなかった

「フッハッハッハッハッ！　メイド姿で冥土へ行けぃ！」

ドシュッ！

カーターが死刑執行を宣言しようとしたまさにその時
奇妙な音が兵器開発ドック内に響いた
何かと思い　カーターが辺りを見回すとアポカリプスに風穴が空いていた

「何だと！？」

「くっくっくっ・・・　冥土に行くのはあなたですよ」

そこに現れたのはフリーザ様だった

その登場と同時に哀達の姿は元通りに戻り　体も自由になった

「おのれ～・・・！　もう構わん！　こいつら全員射殺しろ！」

カーターが命令すると　兵士達は「待ってました」と言わんばかりに銃を取り出した
しかし　それでもフリーザ様の余裕の表情は崩れない・・・
逆にサイコキネシスを使い　全員の銃を瞬時に解体してしまった

「言ったでしょう？　冥土に行くのはあなたですよ」

フリーザ様が怪しく笑いながら言うと張が飛び出した

「アチョーッ！　アチャーッ！」

先程にも勝る勢いで兵士達を薙ぎ倒して行く

「おやおや・・・張さんに獲物を盗られてしまいそうですね」

フリーザ様もそれに加勢する
そうなっては兵士達に勝ち目はなかった
１００人・・・　８０人・・・　５０人・・・
兵士の数はあっという間に減っていく

「まずい・・・　こうなったら一旦離脱して・・・」

「この超天才の僕がそれを阻む！」

逃げようとしたカーターの目の前にハーラが立ち塞がった
そしてポケットから小さな装置を取り出す

「僕が作ったこの『エモーエナジー発生装置』だって・・・　一人ぐらいメイドにできるんだよ？」

そういってハーラが機械を起動させると　カーターは可愛らしいメイドになってしまった

「このガキがぁ！」

「ガキとは何だ！　掃除は終わったのか？」

「はぅ！　申し訳ございませんご主人様ぁ！　すぐ終わらせてまいりますぅ！」

カーターは基地の掃除に行ってしまい・・・
フリーザ様と張によって兵士達も全滅させられ・・・
はぐれソルジャー純情派も崩壊の時を向えた

「終わったわね・・・」

哀がホッと溜息をついた
一応世界を救ったということになるのだろうか？
そんなことを考えながら・・・

ドーン！

しかし響き渡る轟音・・・　基地全体が激しく揺れた

「今度は何よ・・・？」

『自爆装置が作動しました・・・　繰り返します・・・　自爆装置が作動しました
この基地は5分後に爆破されます・・・　解除は出来ません・・・
基地内の人員は脱出用エレベーターから離脱して下さい・・・』

感情のこもっていない警告アナウンス・・・　急な話だ
何で突然自爆なのか・・・　哀は面倒臭そうに溜息をついた
するとそこに　物凄い勢いでメイドがやって来た

「ふぇ～ん！　ご主人様～！　掃除してたら間違って自爆ボタン押しちゃいました～！」

「ドジっ娘属性があったようね・・・」

「何でも良いですよ・・・　皆さ～ん！　脱出しますよ～！」

フリーザ様達は急いでエレベーターに向うと基地を後にした

・・・・・
紅海の沿岸・・・
波の音を聞きながら　フリーザ様達は基地の爆発を見届けた

「ありがとうフリーザ様・・・　この天才を助けてくれて」

「約束でしたからね・・・　もちろん覚えてますよね？　約束・・・」

「あぁ・・・お礼ね！　これで良いかな？　僕が発明した『エモーエナジー発生装置』

これさえあれば　もれなく奴隷が一匹付いて来るけど？」

「はい！　このカーター・フィーンテッドはどこまでもご主人様に付いて行きますぅ！」

フリーザ様は頷くと　ハーラから装置を受け取った

「本当にありがとう・・・」

「良いんですよ・・・　さて！　戻りますか！」

オンボロ飛行機と仲間達の顔を思い浮かべながら
フリーザ様達は砂漠に向って歩きだした

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード４３　「キャリアの部屋」

「こんにちは・・・　『皆のキャリア組』こと白鳥任三郎ですさっそくですが　今日のゲストは僕の愛するこの方です」

「オス！　オラ悟空！」

「え・・・？　この人・・・誰？」

「オラ孫悟空だ！」

「あれ？　美和子さんが来るはずでは・・・？
え？　来れなくなった？　高木とデート？　・・・そんなぁ～」

「おめぇ　何をそんなに落ち込んでんだ？」

「いえ別に・・・　あの・・・悟空さんでしたっけ？
突然ですけど・・・　僕はどうしたら美和子さんとラブラブになれると思いますか？」

「う～ん・・・　オラ良く分かんねぇよ・・・　そうだな～・・・
うん！　きっといっぺぇ飯食って　そんでもって強ぇ奴とたくさん戦えば良いと思うぜ！」

「な・・・なるほど・・・　確かに僕は食が細いし弱々しい・・・
たっぷり食べて体力を付けて　頼りがいのある男になるべきなんですね！？」

「なんならオラが修行つけてやっぞ？」

「それはありがたい！」

「よし！　いっちょやってみっか！」

白鳥は悟空の背中に乗ると　大空の彼方へと消えていった・・・

１２５．紅海は萌える（後書き）

ひとまず終了です
あ～あ・・・
いつになったら日本に戻れるんだろう＾＾；

変なメイドも付いてきちゃったし・・・

最初は「カーター将軍は基地と運命を共にした」になる予定だったのですが
何か書き終わったら・・・　こんなことに・・・・＾＾；

がんばれカーター将軍！

でも一番がんばらなきゃいけないのは・・・
私ですからー！

残念ー！

は～い！
それじゃあツッコミの練習をしてみましょ～！
せ～の・・・

「Ｔｏｏ　ｏｌｄ！（古い！）」

・・・ってことで次回もまた読んでネ
はぁ・・・　後書きグダグダだな・・・

１２６．ファラオの愛は時を越えて

ファラオの呪い・・・
ピラミッドの奥深く　闇の中で静かに眠る王
その眠りを妨げる者にそれは降りかかる

第１２６話　ファラオの愛は時を越えて

「コラ！　お前達そこで何をしている!?」

ピラミッドの中に男の声が響いた
男の名はファディル・ラホメド・・・　考古学者である

「さては墓荒らしだな！」

ファディルはピラミッドの中にいた二人の不審な男達の方へ歩み寄って行く
墓荒らしは遺跡の損傷や貴重な歴史資料の紛失をもたらす憎むべき行為だ
考古学者として許す訳にはいかない

コツン・・・

それは一瞬の出来事だった
二人のうちの一人がファディルに近付いてきたかと思うと
指の背でファディルのこめかみを軽く小突いたのだ
しかし　それは恐るべき威力を秘めた一撃だった

ファディルは気を失いその場に倒れこんでしまった

「ヒュー！　ナイス一撃だぜフリーザ様！」

「フフン・・・　邪魔はさせませんよ」

フリーザ様とジェレミーは薄ら笑いを浮かべると闇の中へ消えて行った

・・・・・・

「まったく　あの二人は・・・」

砂の上を二人の人間が歩いていた
哀とウォッカである
朝から見当たらないフリーザ様とジェレミー・・・
キミーに聞いたところピラミッドに宝探しに行ったとのことだった
罰当たりな・・・　哀は怒りを露にしながらピラミッドへ向った

「まぁまぁ・・・　そんなに怒るなよ」

ウォッカは哀をなだめながらそれに続いた
そして　そうこうしているうちにピラミッドが見えて来た

「アレね・・・　行くわよ」

哀が足を踏み出そうとしたその時だった
突然　ビュウ！と突風が吹いた
ウォッカはビックリして顔の前を両腕で覆う

そして・・・
その腕を退かした時　目の前にいたのは地面にバッタリと倒れ込んだ哀だった

「おい・・・　どうした？　おい！？」

揺すっても揺すっても・・・　哀は全く反応しない
一体何が？
ウォッカが困っていると　そこに人がやって来た

「ウォッカさんじゃないですか・・・　どうしたんですか？」

そこにはジェレミーを背負ったフリーザ様と　見覚えの無い初老の男が立っていた

「ハイバラさんじゃないですか？　何でこんな所で寝てるんですかこの人は？」

「それが突然倒れちまって・・・」

「えぇ！？　ハイバラさんもですか？」

フリーザ様はそう言って背中のジェレミーを見せた
ジェレミーも哀と同じくぐったりして動かない・・・　ピラミッドの中で突然倒れたのだ

「フン・・・　ファラオの呪いだ」

ファディルがそう吐き捨てた・・・

・・・・・・
とりあえず飛行機まで運ばれた二人
しかし　シートに寝かされたその体は依然としてピクリとも動かない
「まるで寝ているみたいだ」とキミーは言った
熱も何も無いらしい・・・

「どうなっちまうんだ？　まさか・・・　このまま目を覚まさないなんてこと・・・」

そうウォッカが言いかけた時だった
バッ！と毛布を跳ねのける音が聞こえたのでそちらを見ると　ジェレミーが起き上がっていた

「ジェレミー！　大丈夫か？」

全員ジェレミーに駆け寄った
しかし・・・　当のジェレミーは黙ったまま中空を見つめている

「ジェレミー・・・？」

「ジェレミーではない・・・　我が名はヘテプセケメイ・・・　偉大なるファラオなり・・・」

ウォッカが声をかけるとジェレミーはそんなことを言い始めた
訳が分からない・・・
ウォッカがそんな顔をしているとコーヒーを持ってキミーがやって来た

「きっと寝ぼけてるんですよ・・・　これで目を覚ましてください」

キミーはそう言ってコーヒーをジェレミーに差し出した
しかし　ジェレミーの手はコーヒーカップではなくキミーの手を掴んだ
その拍子にこぼれたコーヒーがズボンにかかる・・・
しかし　ジェレミーはお構い無しに　目を見開いてキミーを見た

「おぉ・・・！　リーンよ！　愛しきリーンよ！」

「え？　私ですか？」

「会いたかった・・・　会いたかったぞリーンよ！」

そう言って　ジェレミーはキミーを抱しめた
明らかにいつものジェレミーではない

「やれやれ・・・　大変な騒ぎですね」

フリーザ様は溜息をついた
しかし　その時フリーザ様は隣に立っている哀に気が付いた
いつの間にか目覚めたらしい

「おやおや・・・　おはようございますハイバラさん」

しかし　哀は返事をしない
虚ろな眼差しでジェレミーの方を見るばかりである

「ヘテプ様・・・　やはり私が見えていないのですね・・・」

「何を言ってるんですかハイバラさん・・・　もしも～し？」

訳の分からないことを呟く哀の目の前で
フリーザ様はパチンパチンと指を鳴らして見せた
すると哀はようやっとフリーザ様の方を向いた

「あなた様にお願いがございます・・・」

しかし　やはりその様子はおかしかった・・・

・・・それからしばらくして
哀は砂漠の上にいた

「ここです・・・」

そう言って地面を指差す

「砂の中か・・・　こいつはちと骨が折れそうだな」

発掘用の機材を取り出しながらファディルが言った
しかし　フリーザ様はそれを押しのけて　手の平を地面に向けた

ボンッ！

轟音が響き渡って砂が巻き上がる・・・
それが収まると　そこには遺跡の入り口が露になっていた

「馬鹿モン！　遺跡が傷ついたらどうするんだ？」

「そんなこと知ったことじゃありませんね・・・　行きますよ」

そんなやり取りをしながら　二人は入り口を見た
哀が中に入って行く・・・　二人もそれに続いて遺跡に入った
中には人一人がやっと通れる程度の通路・・・　そこを進んでいくと少し広くなった部屋があった
部屋の中心には大きな石の箱が置かれている・・・

「文字が掘られているな・・・」

ファディルがルーペを取り出してそれを解読していく

『ここに眠るは遠く異国の地よりやって来た者・・・『リーン』である
ヘテプセケメイ王に近付き　この国を崩壊させようとした罪深き女なり・・・
今生冥府　いずれの世界においてもこの者が王に近付くことを禁ず
故に　この棺を開けてはならない
開ければたちまち女の魂は王の下へ駆け　この国を滅亡へと追いやるであろう』

そう書かれているとファディルは言った

「と言うことは　この中にあなたがいるんですね？」

フリーザ様の問いかけに哀はコクリと頷いた
それを確認するとフリーザ様は人差し指を石の箱の方へ向けた
「開けるな」と言うフタの警告を無視して　その重いフタがゆっくりと持ち上がる
中には一体のミイラ・・・
ブロンドの髪・・・　整った顔立ち・・・　キミーに似た女性である

「さて・・・　あなたの願いは叶えてあげましたよ？」

『私を見つけて下さい』
それが哀がフリーザ様にしたお願いであった
哀は棺に歩み寄り　中のミイラの首にかけられた首飾りを取り外した
そして優しげな瞳でそれを見つめながら　静かに語り始めた

「ヘテプ様は・・・　私をたいそう可愛がってくださいました
異国の地から流れて来た　ただの小娘であった私を・・・
いつしか私達は愛し合うようになり　共に時間を過ごすようになりました・・・」

「しかし周りの人間に迫害され殺された・・・　そんなところだろう？」

「はい・・・」

頷いてから　哀は首飾りを自分の首にかけた

「ヘテプ様・・・　今参ります」

・・・・・

「おーい！　危ねぇぞー！　早く降りて来い！」

ピラミッドの頂上にいるジェレミーとキミーに向ってウォッカが叫んだ
しかし　ジェレミーはそれを無視すると声高に言い放った

「私はこのリーンと永遠の愛を誓い　共に冥界に旅立つ！
もう誰にも文句は言わせない！　もう誰にも邪魔はさせない！」

キミーを道連れに死ぬ気らしい・・・
ウォッカは今度はキミーに向って呼びかけた

「キミー！　ジェレミーはダメだ！　完全にイカレちまってる！
お前だけでも降りてくるんだ！　死んじまうぞ！」

しかし　キミーはあくまで笑顔のまま呑気に手を振った

「せめてもの罪滅ぼしですー！」

きっと　この娘は何をされてもこの一言で片付けてしまうのだろう・・・
ウォッカは困り果ててしまった

「さぁリーンよ・・・　一緒に来なさい」

「はーい！」

「ちょーっと待ったーッ！」

冥界に旅立とうとした二人を止めるべく一人の男が叫んだ
何事かと周りを見渡すと・・・　砂漠の向こうから猛スピードで走ってくる者がいる
よく見るとそれはフリーザ様だった
フリーザ様はウォッカの横を通り過ぎると　ピラミッドを一気に駆け登り

そしてジェレミーとキミーの前に立った

「ヘテプ様！　その者はリーンではございません！」

フリーザ様に抱えられていた哀が地面に降り立つ
そしてジェレミーに歩み寄ると首飾りを見せた

「こ・・・これは・・・　私がリーンに送った物！　それでは・・・」

「はい・・・　私がリーンでございます」

「ではあの者は・・・？」

「私はキミー・ヴァレンタインでーす！」

「そして私は宇宙の帝王フリーザ様です」

「いや・・・そっちの男の名は聞いていないが・・・　そうか・・・
お前がリーンだったか・・・」

ジェレミーは哀の前にしゃがみ込むとその目をしっかり見つめた
そうして二人はしばらくの間見詰め合うと　突然力無く倒れ込んでしまった
驚いてフリーザ様達は二人に駆け寄る
まさか・・・
一瞬心配したフリーザ様達だったが　次の瞬間二人は目を覚ました

「うぅ・・・　何だよ痛ぇな・・・　ファック！」

「あら・・・？　私・・・どうしてたのかしら？」

どうやら元の二人に戻ったらしい
とりあえずは一件落着だろうか？
しかし皆が安堵の溜息を漏らす中　哀は自分の首にかかった首飾り
に気が付いた

「何これ・・・　さてはフリーザ様が盗んで来たのね？」

「人聞きの悪い！　殺しますよハイバラさん！？」

おかしくなった哀の方がおしとやかで良かった・・・
フリーザ様がそんなことを思っていると　哀の後から手が伸びて来
て首飾りを取り上げた
見ると　遅れてやって来たファディルだった
ファディルは真剣な表情で首飾りを眺めると　再び哀の首に戻した

「そいつはお前さんのモンだ・・・」

「へ・・・？」

ファディルは後は何も言わずに去って行った
しかしファディルにはしっかりと読む事が出来た

『体を貸してくれてありがとう・・・　素適なお嬢さん』

首飾りには　確かにその文字が刻まれていた

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード４４　「英祐ファイト３」

「お見事！　ＷＤＣのニューチャンピオンは本堂英祐だ！」

天国のお母さん・・・
僕はついにあの伝説のドジＮＯＢＩＴＡを上回りました
僕はやったんです

「ふふっ・・・参ったよ・・・
調子に乗って映画版『やればできるＮＯＢＩＴＡ』で出て来てしまったのが敗因だ・・・」

「それはそれでドジなのでは・・・？」

それでも僕が勝者であることに変わりはありません
複雑な気分ですが・・・
でもやっとこれで終わりです
今はただ　家に帰ってゆっくり休みたいです

「それでは本堂英祐には賞金１００万ドルとそして副賞の・・・」

おっと・・・
副賞があるみたいです

「そして副賞の『セーム・シュルトへの挑戦権（Ｋ－１ルール）』だぁ！」

「ノーサンキュー！」

母さん・・・

そっちに逝く日も近いかもしれません・・・

１２６．ファラオの愛は時を越えて（後書き）

この物語はフィクションです
実際の歴史とは全然違います
ヘテプセケメイ王というファラオは実在しますがリーンは嘘んこキャラです
ヘテセケ王の名は便宜上使わせて頂いただけで・・・
呪わないでー！　ぎゃあああーッ！

ってことで１２６話でした
ピンピンしているのでヘテセケ王もお許しになられたということでしょう
えがったえがった・・・

まぁそんな訳でエジプト編は終了です
次回からまたジャパンです
久しぶりにコナンキャラが書ける・・・＾＾；
最近書いたコナンキャラと言えば哀とウォッカだけ
オリジナルでやろうと思えば出来るな・・・

ん？
日本に帰る描写？
・・・・・・
カットの方向で！

こりゃ呪われても仕方ないな・・・

１２７．ある発明家の暗黒面

ちょっと会わないうちに・・・
そんなことは日常で良く起こりうることである
例えば・・・

「あ～ら！　見ないうちに大きくなったわねタカシ君！」

「うるせぇババア！」

と言うような具合である

第１２７話　ある発明家の暗黒面

昼の阿笠邸にチャイムの音が鳴り響いた
玄関には三つの人影・・・
フリーザ様と哀・・・・・・そしてメイド化して下僕にされたカーターである

「博士さん！　いないんですか？　早く開けなさ～い！」

フリーザ様が家の中に向って言い放つ
するとその数秒後　扉が開かれ中から博士が顔を出した

「おぉ～君達！　今まで何をしていたんじゃ！」

「ほっほっほ・・・・・お久しぶりです博士さん」

「ごめんなさいね　だいぶ留守にしちゃって・・・
爆弾騒ぎとか飛行機墜落とかメイド化とかファラオの呪いとか色々あったのよ」

哀がそう言うと博士は目を点にした
何があったのかまったく理解できない・・・・・・そんな顔である

「まぁ色々と大変だったんじゃな・・・・・・それで？　そっちのお嬢さんは？」

「私はカーター・フィーンテッドですぅ！　メイドですぅ！」

「下僕として連れてきました・・・・・・うちで家事を担当してもらうことになりました」

一体何が・・・
博士はいよいよ分からなくなってしまったが　とりあえず三人を家に入れた

・・・・・・

「何よこれ・・・・・・散らかり放題じゃない」

リビングまでやって来て哀は呆れ果ててしまった
目の前には散乱するガラクタの山
一体何をどうすればこんなに散らかるのか・・・
哀は博士を睨みつけると溜息をついた

「はっはっは・・・・・君らがいない間　発明に没頭しておってのぅ」

「片付けながらやって下さいよ！　まったく・・・ってことでカーターさん！　さっそく片付けるんですよ！」

「はいご主人様！」

とりあえず片付けはカーターにやらせることにして
三人はガラクタをどかしながらソファーに腰掛けた
そして一息ついてから旅先での話・・・・・といきたいところだったが
フリーザ様と哀はむしろ博士が何を作っていたのかが気になっていた

「ふむ・・・・・『何を』と言うわけじゃなく色々と作ったぞい」

そう言うと　博士はガラクタの山の中からいくつかを選別して二人の前に並べた
どれも用途不明の物ばかりである・・・
それらを手にとって怪しそうに観察するフリーザ様と哀を見ると
博士は一つずつ説明をすることにした

「このコーヒーカップみたいなのは何？」

「ふむ・・・・・これはこの中に水を注いで・・・
そして下にあるスイッチを押すと・・・」

博士がスイッチを押すとカップの中の水がぶくぶくと泡立ち始め
それはどんどん紫色に変わっていった
そしてぶくぶくが収まったのを確認すると博士はカップを持ち上げ・

・・

「きゃあああああああッ！！！」

掃除していたカーターにその得体の知れないものを浴びせかけた
ドロっとしていてあまり気持ちの良い物ではない・・・

「はっはっは！　ほれヌ～ルヌル！」

「それで？　あのヌルヌルにはどんな効果が？」

「ヌルヌルになるだけじゃ」

「何の意味があるのよ・・・」

カーターにヌルヌルを落としてくるように言うと　哀は次の発明の
説明を求めた・・・
すると次に博士が取り出したのは目覚まし時計のような物
博士はそれを操作すると床に置いた

ピピピピピピピ・・・

しばらくすると　突然アラームが鳴り始めた
何が起こるのかと見ていると　ヌルヌルを落としたカーターがやっ
て来た

「時計が鳴ってますよ」

そう言って　アラームを止めるため時計のボタンを押したカーター・
・・

するとその時　時計はいきなり風船のように膨らみ始め
そしてバンッと破裂するとカーターにまとわりついた

「な・・・なんですかぁ!?」

するとカーターを覆った風船状の何かは次第に液化し始め
ヌルヌルになってしまった・・・

「ほれヌ～ルヌル！　ひっひっひ・・・」

「嫌がらせアイテムですか？　今度ハイバラさんの目覚ましとすり替えてやりましょう」

「やめてちょうだい・・・」

少し会わないうちに博士は随分とマッドになったものだ・・・
哀はそんなことを思いつつも次の発明品の説明を求めた

「今度のはすごいぞ?」

博士は自信たっぷりにそう言うと靴を取り出した
見ると　コナンのキック力増強シューズに似ている・・・

「これはキック力増強シューズを改良したものじゃ
なんと以前の増強シューズの１０倍の威力を誇るのじゃ」

「それはすごいわね・・・」

どうやらまともな発明もしていたらしい・・・
またヌルヌルが来ると思っていただけに　哀はホッと胸を撫で下ろ

した

「どれ・・・ちょっと威力を試してみたいですね・・・
カーターさん！　ちょっと履いてみなさい」

とりあえずヌルヌルを落としてきたカーターに履かせてみる・・・
カーターは靴のダイヤルを調整するとフリーザ様が用意したボール
を蹴った

ボン！

すると次の瞬間　家の壁に大穴が空いた
恐るべき破壊力である

「素晴しいですよ博士さん！」

「ちょっと・・・・・・威力強すぎない・・・？」

「フフン！　分かっとらんのぅ　二人とも・・・・・・この靴の真
価は威力ではない」

「え？」

一体どう言うことか？
それを聞こうとした時だった

「あぁッ！」

カーターが奇妙な声を上げた
何かと思って見ると・・・・・・靴から紫のヌルヌルが出ていた・・

・

「ほれヌ～ルヌル！　ウヒョヒョヒョヒョヒョ！」

「ふぇ～ん・・・！　ひどいですぅ・・・」

哀は頭を抱えながら後悔した
二回目で気がつくべきだった・・・・・・明らかに博士の様子がおかしい
哀は恐る恐る博士に聞いてみた

「博士・・・・・・一体どうしたの？　何か変よ？」

「変？　何が変だと言うのじゃ？」

「変よ！　前のあなたはこんなヌルヌル趣味はなかったじゃない！」

叫ぶように言い放つ哀・・・
それを聞くと博士は顔を両腕で覆い隠し　小さく震え始めた
そして少し間をおいて　博士は拳をテーブルに打ちつけた
ドン！　と音が響き渡る・・・

「ヌルヌルするのことこそ『生きる』ということじゃないのかね！？」

「絶対に違うわよ！」

「くっ！　分からずやめ！　こうなったら皆ヌルヌルにしてやる！」

そう言うと博士は水鉄砲の様なものを取り出し

そこからヌルヌルを発射しはじめた

「わっ！　何をするんですか博士さん！」

「ちょっと・・・やめなさいよ！　ヌルヌルするでしょ！？」

「ヒャッハ～！　汚物はヌルヌルじゃあーッ！」

狂ったように辺りをヌルヌルにしていく博士・・・
しかし　その行為がついにフリーザ様の怒りに火を灯してしまった

「ヌルヌルは秋○だけで十分ですよ！」

そう言って　フリーザ様は博士の腹に当身を食らわせた
すると博士は力無くヌルヌルする床に倒れ込んでしまった

「私はくだらない冗談が大嫌いなんですよ！　まったく・・・」

「本当にクレイジーすぎるわよ博士・・・」

溜息をついて二人は辺りを見回した
ほれ・・・ヌ～ルヌル・・・
酷い有様である
しかし　哀はその中に電話の受話器を握り締めて涙を浮かべるカーターを見つけた

「何してるの？」

「ふえ～ん・・・・・おまわりさんと救急車を呼びましたぁ～・・・」

カーターがそう言うのと同時に二つのサイレンの音が聞こえてきた
何はともあれ一件落着・・・
しかし　家の主と言うべき博士がいなくなると言うまさかの事態になってしまった

「何も問題ありませんよ！　この家の主はこのフリーザ様なんですからね」

「そう言う問題じゃないわよ・・・」

続く

おまけ：ショート劇場

エピソード４５　「和葉のイメチェン」

「待てや和葉！　今何て言ったんや！」

「良く聞いときいやボケ！　ポニーテールをやめる言うたんや！」

「何でや・・・・・何で今更・・・」

「ただのイメチェンや」

「んなアホな・・・・・お前はずっとポニーテールで来たやんか？
今髪型を変えたら漫画の読者やアニメの視聴者が誰か分からんようなってまうで！？」

「知らんわ！　私は私のいじくりたいように髪をいじったるわ！」

「シスの理論やな・・・・・独裁主義や・・・
こうなってしもたら　俺は俺の義務を果たすまでやで和葉・・・」

「果たせるんか？」

そして遂に二人のライトセイバーが火花を立てて交わった・・・
イメチェンしたい和葉と真っ向から反対する平次
果たして和葉はヘアースタイルを変えることができるのだろうか？

Ｔｏ　ｂｅ　ｃｏｎｔｉｎｕｅｄ・・・？

１２７．ある発明家の暗黒面（後書き）

久々に更新しといてこれか・・・＾＾；
まぁとりあえずは日本に話を戻せて良かったです
本当に・・・
これからまたコナンキャラをたくさん絡めてがんばりたいですね
ここ数回はひどすぎました＾＾；

ってことで猛反省の中　次回は１２８話をお送りします。

それがいつになるかは・・・・・不明です
最近オリジナルの新連載始めたもんで＾＾；
すみませんですだ

お詫びに歌います

こなーゆきー！

以上です
はい・・・・・ふざけました・・・
すみませんですだ

１２８．空手少女に気をつけろ

久しぶりの道……
フリーザ様と哀はやや懐かし気な街並みを眺めながらその中を歩いた
今日は日本に帰ってきて初めてのポアロ
店は繁盛しているだろうか？
梓は元気にしているだろうか？
ダイガクセイは相変わらずレポートだろうか？
そんなことを考えながら　二人はついにポアロの目の前までやって来た

第１２８話　空手少女に気をつけろ

「何よこれ……」

二人は目を丸くした
ポアロは……いや　ポアロだけではない
その上の毛利探偵事務所も
更にその上の毛利宅も
ビルその物が壊滅状態だった
窓ガラスは割れ　建物全体も歪み　所々大きなヒビが入っている
崩壊寸前といったところだ

「一体何があったのよ……」

「リフォームってやつじゃないですか？」

「とんだ匠の業ね……」

何がどうなってこんなことに……
そんなことを考えながら二人は瓦礫にまみれたポアロの中を覗き込んだ
すると　奥の方にマスターと梓が見えた

「おぉ～……ポアロ……あなたはどうしてポアロなの？」

「マスター　しっかりして下さい！」

地面にへたり込んだマスターの腕を梓がぐいぐい引っ張っている
どうやら　このポアロの惨状にマスターがへこんでいるらしい……

「もう終わりだ……『首吊り』と『飛び降り』　どっちが楽に死ねるかな？」

「マスターそんなこと言わないでください！　また復旧すれば良いじゃないですか」

「もう嫌だ～！　ポアロと運命を共にするんだ！」

崩れかかった店内でそんなやり取りをしている
こんな場所にいては本当に店と運命を共にすることになる……
フリーザ様と哀はとりあえず二人を店の外に連れ出した

「お久しぶりですフリーザ様！」

「ほっほっほ……お久しぶりですね
それで？　この惨状は一体どういうことなんですか？」

フリーザ様が聞くと　梓は困ったような顔をした
そして「それが……」と前置きをすると　言い難そうに話し始めた

「蘭ちゃんの仕業なんです……」

「何ですって!?」

梓の話によると……
朝の十時を回った頃
突然上の毛利宅から　腹の底で爆発でも起こったのかと思うほどの
雄叫びが聞こえ
次の瞬間建物が大きくひしゃげてしまったのだという

「私達も最初は何が起こったのか分からなかったんです……」

しかしその時　ちょうどポアロに入ろうとしていたダイガクセイが
外で見ていた
彼の話では「蘭が建物にパンチをしたらこうなった」とのことだった

「人のパンチぐらいで建物がこんなになるの?　フリーザ様ならともかく……」

「でも　ダイガクセイさんはふざけている感じじゃなかったですよ?」

「で?　当のダイガクセイはどこですか?」

「毛利さんやコナン君といっしょに蘭ちゃんを追いかけていったきりです」

梓はそう言って三人の向った方角を指差した
その方向を確かめると　とりあえずフリーザ様と哀も蘭を探すことにした

……

しばらく行くと　二人は道端に倒れている男を発見した
ダイガクセイだ……

「ちょっとどうしたのよ!?　しっかりしなさい!」

哀が駆け寄ってその体を抱き起こす
そして軽く揺すってやると　ダイガクセイは何とか意識を取り戻した

「ダメだ……蘭ちゃんじゃ……ない……」

「え?　ダイガクセイ?」

途切れ途切れに聞こえてきたダイガクセイの言葉
その意味を哀は問いただそうとした
しかし　ダイガクセイは次の言葉を発する前に再び気を失ってしまった

「一体何が起きてるのよ?」

分からなかった……
しかし　蘭を捕まえれば何か分かるだろうと思い
二人は再び蘭の捜索を開始した

……

「おや！　あれはコナンさんじゃないですか？」

しばらく行った所で　フリーザ様は路上に倒れている少年を発見した
指し示された場所を見ると　哀もそれがコナンであることに気が付いた

「工藤君！　しっかりしてちょうだい！」

「うぅ……灰原か……久しぶりだな……」

意識を取り戻すと　コナンはそう言ってニッと笑った

「何があったのよ？」

「俺も分からない……突然蘭が暴れだして……おっちゃんやダイガクセイと後を追ってきたんだけど……」

「そうですか……それで？　蘭さんと小五郎さんは？」

フリーザ様が聞くと　コナンはかけていたメガネをはずして差し出した

「おっちゃんに発信機をつけといた……追跡メガネで追える……俺はもう立つ気力も無い……後は任せたぜ？」

そう言って　コナンも再び気を失ってしまった
しかし　手がかりを得ることはできた

フリーザ様と哀は追跡メガネのスイッチを入れると　発信機の反応を追って走り出した

……

電波の発信源を追ってやって来たのは　とある廃ビルだった
建物の中は不気味な静寂さと暗闇に包まれている
二人は意を決して中に入ろうとした……その時だった
中から誰かが出てきた

「小五郎さん！」

中から出てきたのは小五郎だった
その体はボロボロに傷つき　目の焦点は定まっていない
虫の息である……

「中で一体何が？」

「二人とも……逃げろ……！」

哀の質問には答えず　小五郎はどこか慌てた様子でそう言った
しかし　そうは言っても怪我人を置いて逃げる訳にもいかない
二人は地面に崩れ落ちそうになっている小五郎に駆け寄ろうとした
しかしその刹那
上から突然何かが落下して来て　そのまま小五郎の体を地面に叩きつけた

「フフフ……これで三人目」

「蘭さん！？」

二人は驚いた
空から降ってきて小五郎をねじ伏せたのは蘭だった

「あ！　哀ちゃんとフリーザ様……久しぶり～！」

「久しぶり～じゃないわよ！」

「何でこんなことをしているんですか？」

哀とフリーザ様が聞くと　蘭は白目をむいて失神している小五郎の胴体に蹴りを入れながら笑った

「ただのストレス解消だよ？」

「ストレス解消？」

哀が聞き返すと蘭は二人に背を向けて……そして溜息を漏らした

「新一……全然帰ってこないんだもん……」

今までずっと一緒にいた想い人……
その不在に蘭はかなりのストレスを感じているらしい
哀は原因の一旦を担っているだけに　蘭の言葉を聞くと俯いてしまった
しかし　蘭は空を見上げると明るい口調で続けた

「でもね……良いんだ！　新一が推理が好きなの分かってるし……」

「蘭さん……」

「だけど……だけど……ストレスは溜まっちゃうでしょうがあッ！！」

それまでの穏やかさから一変して
蘭は眉を吊り上げると　目の前の廃ビルに拳を突き入れた
ガーン！　と耳を左から右へ突き抜けるような轟音が響き渡る……
そして　次の瞬間ビルはガラガラと崩れ落ちてしまった

「ほっほっほ……蘭さんってば　いつの間にこんな力を手に入れたんでしょう？」

「笑ってる場合じゃないわよ……」

二人の目の前は一面灰色……
ビルが巻き上げた大量の砂埃の霧に覆われている
そしてそれが晴れると……鬼のような形相で二人を睨む蘭が現れた

「二人とも……随分長い間日本にいなかったよね？
博士をほったらかし……待ツ人の気持チ考えたコトアル？
心ノ痛ミヲ知ラヌ者ドモメ……シネエエエ……！」

「言語能力が低下してる……」

「野生ですね」

哀とフリーザ様がその言葉を交わした時
既に蘭の体は舞い上がっていた
そして一直線に二人に向って飛んでくると　鋭いキックを繰り出した
フリーザ様は哀の服を掴んで持ち上げると　バンッと地面を蹴って

その場を飛びのいた

「速い……！」

哀は呟いた

目の前には攻撃を外して舌打ちをしている蘭

あんな攻撃が当たったらひとたまりもない……

しかし　哀とは逆にフリーザ様はいたって冷静だった

「いえいえハイバラさん……ああ言うのは『遅い』って言うんですよ」

「ストレス……カイショウ……サセロ……がああああああああ！！！」

再び蘭が飛びあがった

しかし　フリーザ様は今度は避けない

蘭の繰り出したキックを片腕で軽く受け止める

それを見て　蘭は目を丸くした

「アレ？　アタルナイ？　キック……アタナイ……」

「チッ……猿が！　私は蘭さんのことを買っていたのに残念ですよ！」

逆にフリーザ様の拳が蘭を捉えた

すると　蘭の体から力が抜け　そのまま地面に崩れ落ちた

「まったく博士と言い　蘭さんと言い……何なんですか？」

気を失って穏やかな顔つきを取り戻した蘭を見ると　フリーザ様は溜息をついた

「さてハイバラさん……救急車を呼んでください」

「救急車って言ったって……」

哀は目の前の瓦礫の山を見た

「素手でビルを破壊できるような人間を閉じ込めておけるほど頑丈な病院なんて無いわよ」

「地球の建物はどれもヤワですからね……じゃあどうするんですか？」

「とりあえず家に連れて帰りましょう
この蘭さんを止められそうなのはフリーザ様ぐらいしかいないだろうし……
また暴れ出さないように常に監視下に置いておく必要があるわ」

どうするかはそれから考えよう……
そういう結論に至り　二人はとりあえず気を失っている蘭と小五郎を連れて家を目指した

続く

１２８．空手少女に気をつけろ（後書き）

久しぶりに更新～！
ってことでご無沙汰でした。
久しぶりに更新しといてまたキャラ破壊ですが＾＾；

まあそれはそれとして……
パンクノベリストになって一年
色々あったけど、まだ何か殻をやぶれていないのではないか？
自分の目指すべき場所はもっと違う所にあるのではないか？
そんな風に色々考えてました。
考えたのですが良く分からず……

で、まあ気晴らしに漫画を読んでいました。
『デトロイト・メタル・シティ』です＾＾；
で、読んでいたらこんな言葉が出てきました。

『音楽は人を殺(や)れる！』

……

「これだ！」と思いました。
いえ、ふざけてませんよ？
例えば小説に置き換えてみますと……
読んだだけで読んだ人が死ぬほどのインパクト！
そんな爆発力と破壊力を私は求めていたんだなと……
本当に死んだら困りますけど＾＾；
それぐらいの『威力ある小説』を書きたいなと思ったんです。

ってことで、私はこれからメタルノベリストを目指して精進して行きます。

合い言葉は……

『小説は人を殺(や)れる！』

１２９．忍び寄る『あの頃』

人は生きているうちにたくさんの人と出会う
家族……恋人……友人……
それらは人生の中で　深く心に焼きつき
自分にとって大切な役割を担う存在となるだろう
しかし……
顔しか見たことがない……名前を聞いた事がある程度……
そんな間柄でも　それは決して馬鹿にしたものではない
こちらからすれば　人生というＲＰＧに登場する『村人Ａ』に過ぎない者も
向こうは　こちらのことを『打ち倒すべき魔王』と思っているかもしれない……

第１２９話　忍び寄る『あの頃』

哀は考えながら歩いていた
思えば　日本を長いこと離れていた……
今朝のニュースも軽く見た程度
博士とも　ろくに話をしないうちにあんなことになってしまった
考えて見れば　自分達がいない間のことをまったく知らない

何かあったのだろうか？

フリーザ様の肩に担がれている蘭を見ながら哀は考えた
博士にしても　蘭にしても　唐突に人格が壊れすぎである
何かあったとしか思えない……

しかし　そうだとしたら……一体何が？

「あ！　梓さん！」

そのフリーザ様の声が　哀に考え事を一時中断させた
足元に落ちていた視線をパッと上げる
いつの間にか　ポアロの所まで戻ってきていたらしい

「……サワー」

「え？　何ですか梓さん？」

梓は下をうつむきながら　小声で何かを呟いた
最後の方しか聞こえなかった……
耳に手を当てて　フリーザ様は「もう一度言ってくれ」と聞き返した
すると　梓は下を向いていた顔をおもむろに上げ
そして両手の拳を首の辺りまで上げて軽くファイティングポーズをとった

「アイ・アム……アンディ・サワー」

「ブアカーオじゃないの？」

二人はそこで梓の様子がおかしいことに気付いた
『ブアカーオ』から『サワー』に乗り換えているとかそう言うことではない
襲いかかってきたこと
そして　その顔にまったく生気が感じられないことである
まるで何かに取り憑かれたかのようだった……

「哀ちゃ～ん……」

「キャアッ！」

そんな梓に気を取られていたので　哀は背後から近付いてくる者の存在に気付けなかった

背中から　自分の体に腕を絡めて抱き付いてきた者……

それは　梓と同じく生気の無い顔をしたマスターだった

「ポアロと運命を共にしてあげてよ……ポアロは寂しがりなんだ……」

「しっかりしなさい！」

哀は叫ぶように言った

すると　マスターの腕の力が緩んで体が自由になった

思いが通じたのか？

と思ったが……マスターの体はそのまま地面に倒れ

代わりに　その後にいたフリーザ様が姿を現した

「失礼しますよ梓さん！」

フリーザ様はそう言うと　拳を繰り出そうとしていた梓にも当身を食らわせた

すると　ファイティングポーズをとっていた腕がだらりと下がり

梓もマスターと同じく気を失ってしまった

「まったく……荷物が増えたじゃないですか」

フリーザ様は二人と……そして蘭と小五郎……

横たわる四人を見て溜息をついた
肩には担ぎきれないので　仕方なくサイコキネシスを使うことにした

……

家に着くと　哀は小五郎以外の三人を地下室に連れていった
今は眠っているが　また起きて暴れられたら適わないので手足を拘束する
それが終わると　今度は色々な器具を準備し始めた

「何をするつもりですか？　まさか……寝ている隙に良からぬイタズラを……」

「そんな訳ないでしょ！」

変な想像をするフリーザ様を睨みつつ
哀はフゥーと溜息をついてから話し始めた

「おかしいと思わない？　博士に蘭さん……梓さんにマスター……こうも立て続けに変になるなんて……まるで示し合わせたみたいに……」

「そうですね」

「何か人為的なものを感じるのよ……」

「あぁ……ドッキリってことですね」

フリーザ様はあちこち見回して隠しカメラを探した
しかし　哀は首を横に振ってそれをやめさせる

「蘭さんの馬鹿力の説明がつかないでしょ……」

「あぁ　そうですね……」

哀の言葉を聞くと　フリーザ様はアゴに手を添えて考え込む……
そして数秒後　何かを思い付いたのかポンと手を叩いた

「原油の値上げでイラついているんですよ！」

「……」

いくら聞いても　フリーザ様からは不毛な意見しか出てこないので
灰原哀は突っ込むのをやめた……

「あの～……コーヒーですぅ」

「おやカーターさん……」

その時　コーヒーカップ二つを持ってカーターが地下室にやってきた
とりあえず　コーヒーでも飲んで落ち着こう……
哀はそう思って　カーターからカップを受け取った

「ちょっと待って！」

その瞬間　閃いた
哀は部屋を出て行こうとするカーターを呼びとめた

「カーター……あなたって一応　元テロリストの親玉よね？」

「テロリストなんて！　ひどいですぅ……否定できませんけど……」

「そんなことはどうでも良いわ……何か知らない？　人を狂わせるような方法とか？」

哀が聞くと　カーターは「うーん」と言って考えた
自分が萌え萌えのメイドでは無かったあの頃……
はぐれソルジャー純情派の将軍だった頃の記憶をたどる

「う～ん……一番それに近いのは……『ゾンビ化ウィルスをばら撒く作戦』だったですぅ」

「今流行りよね　そう言う展開……で？　成功したの？」

「科学者達に『そんなウィルスできる訳ない』って一蹴されたですぅ……」

「そりゃそうよね……」

ゾンビ化はともかく……しかしウィルス……
狂犬病などの例もある
哀はそう考えると　注射器を取り出した
採血して調べるためである

「コラ！　何ですかあなた達！」

今まさに注射針を刺そうとしたその時だった
しかし　上からは何かが割れるような音と　フリーザ様の怒鳴り声が聞こえてきた
面倒臭いことになりそうだ……

哀は大きな溜息を漏らした

「カーター……ちょっと見てきてちょうだい」

「はいですぅ」

地下室を出ると　カーターは途中で転びそうになりつつ階段を上がった

そして　そーっとリビングの様子を覗う

「あ～い～ちゃ～ん！　あ～そ～ぼ～！」

「歩美たん萌えー！　灰原たん萌えー！」

「うな重うまい……うな重うまい……うな……うま……」

「大人しくなさい！　消し去られたいんですか！」

探偵団が暴れていた……

フリーザ様はやめさせようとてんてこ舞い

しかし　こっちを止めれば向こうが暴れ……向こうを止めれば　今度はあちらで暴れだす……

フリーザ様のこめかみのヒクつきは離れたカーターにも分かるほどだった

「そんな感じでした……」

ブルブル震えながら地下室に戻ると　カーターは哀に報告した

「そう……」

「どうしましょう？」

カーターは困った顔で哀を見た
しかし　哀は黙々と作業を続けるばかり……
その背中は「今手が放せないのよ」と冷たく語っている

「フリーザ様なら大丈夫だろうけど……逆に殺さないか心配ね
カーター……あなたは上に行ってフリーザ様を手伝ってらっしゃい」

「えぇ……怖いですぅ！」

もじもじしながらそう言ったカーターだったが
しかし　哀はそれ以上何も言わない
「行け」という無言のプレッシャーがカーターを地下室から追い出した

……

「まったく！　部屋をこんなに散らかして！」

カーターがリビングに戻ると　探偵団はフリーザ様に拘束されていた
フリーザ様は荒れ果てた部屋を一瞥すると溜息をつき
そしてカーターの方を見た

「何ボサッとしてるんですか？　片付けるんですよ」

「あっ……はい！　ご主人様！」

カーターは慌てて掃除用具を取りに行こうと駆け出した
しかし　内心はホッとしていた
恐ろしい子供達の相手をせずに済んだのだから……

バリン！

が……突然音が響いて何かが飛んできた
カーターの顔面スレスレの所を横切ったそれはサッカーボール
しかし　皮と空気の塊であるはずのそれが当たった壁は大きく変形してしまった

「ひいぃぃぃ……！」

「誰ですか！？」

フリーザ様はそれが飛んできた方……窓の外を見た

「江戸川コナン……探偵さ」

「井上祐介（いのうえゆうすけ）……大学生さ」

そこにいたのはコナンとダイガクセイだった

「お二人もですか！？　それにしてもダイガクセイ……そう言う名前だったんですね……」

「あぁそうさ！　それをどいつもこいつも『ダイガクセイ』って呼びやがって！」

気にしていたのか……

フリーザ様がそんなことを考えたその刹那
コナンは既に動いていた
左腕につけた腕時計型麻酔銃を構え　スイッチを押したのである

「ったく……何だよさっきから騒々しいにゃっ！」

蘭達といっしょに連れて来られソファーに寝かされていた小五郎……
彼が起き上がったちょうどそこに麻酔銃の針は命中した
その瞬間　小五郎は奇声を上げながら再び夢の世界に連れ戻されてしまった

「コラ！　何をするんですかコナンさん！」

コナンは博士が作った危険物をたくさん所持している……
フリーザ様はすかさずコナンを取り押さえた
しかし　それと同時に後からはカーターの悲鳴が聞こえてきた

「メイドめ！　冥土へ行けぇ！」

「ふぇ～ん！　来ないでください～！」

見ると……ダイガクセイがカーターに迫っていた
しまった！
フリーザ様は一瞬心の中で叫んだが……

「まあ良いでしょう……メイドですし……」

「ひどいですぅ！　助けてください～！」

さよならカーター……と思われたが

しかし　ダイガクセイの魔の手はカーターに触れることはなかった

「まったく……役に立たないメイドね……」

哀が足をひっかけてダイガクセイを転ばせたのである
そして間髪入れず　後頭部に蹴りをお見舞いする
すると　ダイガクセイはそのまま気を失ってしまった

「おぉハイバラさん！　何か分かりましたか？」

「えぇ……この二人も調べてみるけど　あの三人の血液から面白いものが見つかったわ」

コナンを気絶させて部屋に戻ってきたフリーザ様の前で
哀は血液の解析結果をプリントしたものを取り出した

「三人とも……血液中から見たこともない毒素が検出されたわ」

「毒ですか？」

「えぇ……いよいよ『何者かの仕業』って線が強まってきたわね」

「フフフ……ようやく気付いたようね……」

するとそこへ　割れた窓から誰かが入ってきた
笑いながらその言葉を発したのは外国人の女性……
透き通るような白い肌に綺麗なブロンドの髪……スラッと背の高いモデルのような美女である
彼女は哀を見るとニヤリと笑った

「久しぶりね志保……何年ぶりだったかしら？」

「あなたは……」

哀は……宮野志保はその女を知っていた……

「メルレイ……メルレイ・ホーラネモ！」

続く

１２９．忍び寄る『あの頃』（後書き）

めちゃくちゃ久しぶりに更新……
ってことで
ついに黒幕メルレイ・ホーラネモの登場です。
この人……年末には設定出来上がってたんだけどなぁ……
更新サボりまくりで2月末にようやく登場です＾＾；
この人と志保の関係は……次回をお楽しみに。

へ？　次回？

……いつになることやら。

まるで漫画家の、冨が…（自重）

１３０．くたばれオンリーワン

雪に包まれたスウェーデンの田舎町
そこに一人の女の子が住んでいた……

「メルレイ……メルレイは大きくなったら何になりたい？」

暖炉の前で本を読む娘に向かって父親は聞いた

「う～んとねぇ～……」

メルレイは頬に手を当てると　しばらく考えた
そして　目の前の本を見る
小難しい薬学の本……しかし　彼女の大好きな本……

「お薬を作る人になる！　それでおばあちゃんのお病気を治してあげるの！」

「そうか……メルレイは優しい子だな」

父親はメルレイを膝に抱き上げると優しく頭を撫でてやった

第１３０話　くたばれオンリーワン

「なぜ……なぜなのメルレイ？」

哀は驚きの表情を隠さず　震える声で聞いた

すると　メルレイは鼻でフッと笑ってから口を開く

「なぜ？　まだ分からないの志保？」

メルレイは「やれやれ」と頭を振って見せた
そして　今度は憎しみのこもった視線を哀の方に向ける

「あの日の屈辱……私は絶対に忘れないわ！」

……それはメルレイが十八歳の時の話
十三歳にしてアメリカの大学に入学した彼女は
既に薬学の博士号を取得するため大学院で研究の毎日を送っていた
喘息持ちだった祖母はその三年前に他界していたが
しかし　彼女にとってはもうそんなことはどうでも良かった
彼女は希望に満ち溢れていたのだ
あの日から……自分が『特別な人間』であることを自覚したあの日から……
彼女が興味を持つのは「どうやって世間に自分の能力を知らしめるか？」
そして「どうやって偉大な自分を愚民どもに崇めさせようか？」とそればかり……
クレオパトラか？　はたまたエリザベス女王か？
神のごとく崇められる自分の姿を思い浮かべては　彼女は何度もほくそ笑んだ
そしてそんな彼女の希望通り　周りの人間は彼女の秀でた能力に注目し
そして最大の賛辞を贈った
ところがある日　同じ大学で研究する知人が彼女にこんな話をした

「ねぇねぇメルレイ知ってる？　こんど入学した天才少女の話」

「天才少女？」

メルレイは眉をピクリとさせて聞き返した

「シホ・ミヤノって言ってまだ小学生くらいの日本人なのよ？　すごいわよね～」

その知人にとってはただの世間話だったに違いない
しかし　メルレイにはその言葉がこう聞こえた
『お前なんてたいしたことはない……お前はナンバー1ではない……』

「ナンバー1は私よ！」

メルレイはそれまで以上に研究に勤しんだ
そして　遂には念願だった薬学博士号も取得した
しかし……気が付けば皆の視線はシホ・ミヤノに集まっている……
メルレイの論文が掲載された科学雑誌を手で弄びながら
彼らが口にする名前はいつも『シホ・ミヤノ』だった……
そして　そんな状況を彼女の自尊心が受け入れられるはずがなかった

……

「大学を出てからも……私はあなたへの復讐のことばかり考えていたわ」

「そんな……確かに私はあの時注目されてたわ……

でも好奇の視線がほとんどよ？　あなたに贈られていた尊敬と賞賛の眼差しとは違うわ
それにあなたの論文を私も読んだけど　とても真似できるものじゃなかったわ……
あなたにしか出来ないことじゃない！」

「黙りなさい！」

哀の言葉を遮るように　メルレイは声を張り上げた
そして　スーと一つ呼吸をすると　再び冷静な口調で続けた

「ナンバー1にならなくても良い……元々特別なオンリー1……
日本のアイドルグループの歌だったかしら？　馬鹿みたい……
私はナンバー1になりたいのよ！　『オンリーワン』なんて負け犬への慰め言葉はいらないわ！」

「そんな勝手な理由で皆を変にしてしまったの？　何で直接私に復讐しなかったのよ！」

哀は自分の胸をバンと叩いて言った
しかし　メルレイはその言葉を聞くと面倒臭そうに溜息をついた

「あなた自分に何かあっても泣いたり怖がったりしないじゃない……それに……」

メルレイはあの日からずっと志保のことを見ていたのだ
監視付きの大学生活……組織でのこと……そして唯一の肉親との死別……
真っ暗な人生……

「さすがの私もだんだん可哀想になってきて　何枚もハンカチを濡らしたわ」

「……どうも」

もう復讐などやめようか……メルレイがそう思い始めたある日　その変化は訪れた
志保は哀になったのだ
一人ぼっちの可哀想な少女の周りにはどんどん人が増えていった
博士……コナン……探偵団……刑事やその他の人々……そしてフリーザ様……
その生活ぶりは慌しくなったが　傍から見ると楽しそうだった

「『今こそ復讐の時』だと思ったわ……この楽しい時をぶち壊してやろうって……
そしてあなた達が日本を離れた隙にあなたの周りの人を薬で改造してやったのよ！」

「何てことを……」

顔を真っ青にする哀をメルレイは嬉々とした表情で見た
哀はガタガタと震え　その口からはもう何の言葉も出てこない……

「困りますね……」

しかしその時　隣で黙って話を聞いていただけのフリーザ様が前に出てきた

「ハイバラさんに復讐するのはあなたの勝手としても……
このフリーザ様を巻き込むとは何事ですか……どうやら　消し去ら

れたいようですね？」

フリーザ様はそう言ってメルレイの方に指先を向けるとエネルギー波を放った
心臓めがけ飛び出した光の矢は……しかし　彼女の目の前で進行方向を変えてしまった
いや　突然二人の間に割り入った何者かに弾き飛ばされてしまったのだ

「なんですと！？」

「フフン……ミスターフリーザ……正直今回の計画で一番私を悩ませたのがあなたの存在だったわ
でも　私はあなた達をずっと見ていたのよ……そう全部……忍者の世界征服未遂とかもね……」

フリーザ様はメルレイの話を聞きつつ　エネルギー波を弾き飛ばした張本人を見た
そこにいたのは……見慣れた顔だった……

「園子さん！」

「あの忍者達は良いヒントをくれたわ……薬で人を強くする……私なら十分可能よ
さあ改造戦士1号！　あの二人を八つ裂きにしてやりなさい！」

メルレイが命令すると　園子は虚ろな眼差しを二人に向けた
そして　力ない歩みでジリジリと近づいてくる

「正気に戻って園子さん！　あなたは薬で改造されてるだけなのよ

！」

哀が叫ぶ……
しかし　園子はそれを聞いてもニヤニヤと薄ら笑いを浮かべるだけだった

「改造？　違うわよ～……願いが叶う魔法の薬を飲んだだけよ～……うふふ……これで私もモテモテに……でもそれより真さんとラブラブに……
いや……蘭と新一くんを早くくっつけたいような気も……
あれ？　私の願いって何だっけ？　アハハハハハハハハハハハ！
殺してやる……ゴロジデヤル……」

「何でそうなるのよ……」

哀の願いも虚しく　園子は獣のような形相で二人に襲い掛かってきた
また気絶させるか……
フリーザ様は面倒臭そうに拳を繰り出した
が……気が付くと目の前から園子が消えて　拳も空を切っていた
そして次の瞬間　逆に背後から拳が飛んできた

「ギャッ！」

物凄い勢いで吹き飛ばされ　フリーザ様は隣の工藤邸の壁を突き破ってしまった
モクモクと煙が上がるそこに　園子はさらにエネルギー波を打ち込む
その攻撃は　フリーザ様も負けじと弾き返したが
しかし　その体にはしっかりとダメージが残っていた……

「今までの奴らはほんの小手調べ……

この改造戦士1号にはあの忍者達以上のパワーを与えてあるのよ」

「ぬぅ……鬱陶しいですね……」

しかし　宇宙の帝王に逃走などありえない
フリーザ様は戦闘力を高めると園子に向かって飛び出そうとした
が　その手を哀が掴んで制止する

「あなた何も学習してないの？　『天神如術』の時のことを……」

「なら大丈夫ですよ……あの時だって我々が勝ったじゃないですか」

「あの時は私が秘薬に細工をしたから……でも今回薬を作ったのは
あのメルレイなのよ！」

ここは一時退却して　対抗手段を見つける他ない……
フリーザ様は『逃げる』と言う言葉に物凄い拒否反応を示したが
しかし　哀が『ジョジョの奇妙な冒険』を例に『逃げの美学』につ
いて熱弁をふるうと
最後は渋々納得し　フリーザ様は哀を脇に抱えて勢い良く飛び出し
が……

「え！？」

次の瞬間　目の前には園子がいた

「知らんのか？　大魔王からは逃げられない……」

「いつから大魔王になったんですか！」

続く

１３０．くたばれオンリーワン（後書き）

ＳＭ〇Ｐのメンバーの皆さま……
関係者及びファンの皆様……
すみませんですだ。
私は別にあの名曲を侮辱したい訳ではありません。
むしろ、カラオケに行ったら必ず歌ったり歌わなかったりします。

違うんです！
私のせいじゃありません！
メルレイです！
全てはあの女のせいなんです！

……ん？
人が一生懸命後書きを書いている時に、誰だろう？
誰か来たようなので見に行ってきます……

１３１．戦術名『逃亡』

その日の朝
目が覚めると同時に男はピーンと来た
そして　自分の店の扉に「ＣＬＯＳＥＤ』の札をさげると
荷物をまとめて出かけるのであった……

第１３１話　戦術名『逃亡』

メルレイが現れてから３０分……
フリーザ様と園子は依然攻防を続けていた
正直　フリーザ様が本気になれば或いは殺すことは出来たかもしれない
しかし　相手は園子である
無闇に殺すわけにもいかず　フリーザ様は手加減を余儀なくされていた

「マ……マゴドザン……ラブ……」

「キモッ！」

園子の攻撃がフリーザ様を捉えた
さすがのフリーザ様もいらぬ手加減で体力と神経をすり減らし
徐々に疲れを見せ始めてきた
しかし　園子はまったく疲れる様子を見せない……
このままではまずい……
側で見守っていた哀とカーターも　事態の深刻さに息を呑んだ

「いよいよのようね……さあ改造人間1号！　フリーザにトドメを！」

勝利を確信し　高らかに笑うとメルレイは命令した
それに応えるように　園子の体は気を放出して激しく光り輝く
しかし　その時だった……

「待てえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇい！」

突然の叫び声にその場にいた全員が一瞬固まった
そして　声の主を探す……
するとそれは少し離れた家の屋根の上に立っていた

「弱き者の泣き声が空を翔け抜け届くとき……怒りの雄叫び轟かせ光の速さでやってくる！
イナズマ戦士ブリッツ・ガイ！　ただ今参上！」

そこにいたのはブリッツ・ガイだった……
メルレイはすかさず持っていたノートパソコンを開いてデータベースに目をやる
フリーザ様や哀と過去に接触した人々……その中に彼はいた

「ただの雑魚か……良いわ！　あいつから始末してやりなさい！」

「ラン……ドモダヂ……！」

園子はゴウッと風を切りながらブリッツ・ガイに突進する
しかし　ブリッツ・ガイは素早くポージングを決めてそれを迎え撃つ

「シャイニング・ブリッツ・バーニング！」

技名と共にブリッツ・ガイの体からは激しい光が放たれ
そして園子を巻き込んで大爆発を起した
目も眩むような激しい閃光と巻き起こる砂煙……
それを見ると哀は叫んだ

「今のうちに逃げるわよ！」

カーターの手をとって走り出す
フリーザ様もその後を渋々と付いてくる

「チッ！　まあ良いでしょう……次会った時は後悔させてあげます……」

「それ……逃げながら言うセリフじゃないわよ……」

……一時間後
フリーザ様達は呆然と立ち尽くしていた
場所は占いの館『現命館』……があった場所
しかし　今はただの瓦礫の山と化している
近所の人の話では　変な奴らが破壊していったらしい……

「トロッタさんは無事でしょうか？　カーターさん！　突っ立ってないで探すんですよ！」

「はいですぅ！」

フリーザ様とカーターはそこにあったはずの館の主を探し始めた

そもそもフリーザ様達三人がここにやって来たのはトロッタに会うため……
皆をメルレイの呪縛から解き放つ手段を知るには彼の占い（のような何か）が手っ取り早いと思ったからである

「でも……メルレイは私達の考えなんてお見通しだったようね……」

哀は溜息をついた
しかしそうしていても始まらないので　哀も瓦礫の山に足を踏み入れた
トロッタの安否を確認するために……

「トロッタさ～ん！　無事ですか～？」

叫べども返事は無し……
もっとも　巻き添えを食らっていたとしても警察や救急隊員が見つけているはずであるし
どのみちその場に彼がいるはずはないのであるが……
哀がそんなことを考えながら立ち尽くしている時であった

ガチャ！

と……後の方で音がした
トロッタか？
そう思って哀は振り返った

「ご主人様！　金庫開きました！」

「ほっほっほっ……でかしましたよカーターさん！」

「何やってんのよ……」

そこにいたのはトロッタではなく福沢諭吉……が百人くらいだろうか？

金庫には札束が一つだけ保管されていた

もちろん　フリーザ様は何の躊躇いも無くそれを手に取った

すると……

『フリーザ様……』

どこからともなく聞こえてきたのはトロッタの声だった

それに驚いて　フリーザ様は札束を地面に落としてしまった

しかし　探してみてもトロッタの姿は見当たらない

「トロッタさん？　どこですか？」

『そこにはいないよ……別の場所からグレート占いパワーを使って喋ってるんだよ』

フリーザ様達は耳を澄ませた

どうやら声は目の前に落ちている札束から聞こえてきているらしい……

『フリーザ様なら必ずこの金に手を付けると思っていたからね……こいつを媒体にしたんだ』

「うるさいですよ！　それで？　あなた今どこにいるんです？」

『事前に危険を察知したから避難させてもらったよ……今は軽井沢

の別荘にいる』

「悠長なことね……」

しかし　とりあえず無事であるらしい……
フリーザ様達はほっと胸を撫でおろすと　再び札束の言葉に耳を傾けた

『とりあえずこのお金はフリーザ様に上げるから　軽井沢まで来てよ……
そろそろそいつに込めたグレート占いパワーが切れる頃だから』

「仕方ないですね……軽井沢のどこです？」

『軽井沢の駅で待ってるよ……大宮から新幹線で来れるよ』

それ以降　札束からは一切の言葉が聞こえなくなった
福沢さんは口を真一文に結んだまま生気の無い視線をフリーザ様に投げかけている
フリーザ様はそれを手に取るとその場を後にした

続く

１３１．戦術名『逃亡』（後書き）

すごく、お待たせしました。
土下座しましょうか？
……分かりました。

この通りです（今土下座してます）。

ダメ？
ですよね……＾＾；

ってことで土下座は諦めてください。
まあ、参加していた企画も終了したので、もう少し更新スピードを上げれると思います。

私、こんなこと言って早く更新したことほとんどないですけど。

あ　き　ら　め　ろ

あ、怒らないでください……すみません。

１３２．消えたマーチ

駅舎を出てフリーザ様達はターミナルにやって来た
そこは軽井沢……
到着したことを連絡しようと　フリーザ様は携帯電話を取り出した
しかし　良く考えてみたらトロッタの電話番号など知らない……
どうしたものか……
フリーザ様含め三人は顔を見合わせた
が……その時　突然三人の前に一台の車が止まった

第１３２話　消えたマーチ

「良く分かりましたねトロッタさん　私達が到着したって……」

「ははは……僕にはグレート占いパワーがあるからね」

久しぶりに会った自称占い師との会話がはずむ中
フリーザ様達の乗った車は緑の中の道路をつき進んでいた
目指すはトロッタの別荘……

「実はすでにメルレイの薬の力を打ち破る策は立ててあるんだ」

話が途切れたところで　トロッタはそう言った
車窓からのぞく景色を眺めていたフリーザ様だったが
その言葉を聞くと　すぐさまトロッタの顔に視線を向けた

「仕事が早いですね……で？　どんな策なんですか？」

「目には目を……歯には歯を……薬には薬を……」

トロッタが言うには
占いの結果　メルレイの薬に対抗できる薬の材料
そしてその調合ができる人物が分かったらしい

「幸いその人って言うのが知り合いでね……
もう別荘で調合してもらってるところだから」

そんな会話があって数分後
車は一軒の家の前に止まった
トロッタの別荘だ
四人は車を降り　玄関に向かって歩きだした
そして扉の前までやって来た時だった
トロッタがノブに手をかける前に扉が開いた

「おや？　もう帰ってきたのかい？」

中からは……
長い白髪に大きな鼻を持つ　目の下に隈のできた……
そう　まるで絵本に出てくる「魔法使いのおばあさん」みたいな老婆が顔を出した
そのあまりの風貌に　フリーザ様も哀もカーターも思わず目を丸くした

「紹介するよ……薬の調合をしてくれてる多槻結琵（たつきゆうび）さんだよ
多槻さんは弥生時代から続くシャーマニズムを受け継いでいてね……
見た目は胡散臭いけど　作る薬は超科学級だよ」

「ヒェッヒェッヒェッ！　なんだい　そんな顔して？　そんなにバ
バアが珍しいかい？」
紹介するトロッタの横で　多槻は目をギョロリと動かしながらフリ
ーザ様達を見た
「ババアは珍しくありませんが　あなたの様なババアは珍しいです
よ」
「ちょっと……フリーザ様！」
「ヒェッヒェッヒェッ！」
「まあババアが珍しいかどうかは置いといて……どこに行こうとし
てたんですか？」
トロッタが聞くと　多槻は「思い出した」といった表情を浮かべた
「あんたね　材料が一つ足りてなかったんだよ……」
「あれ？　忘れてました？　買ってきますよ」
「若いのに何やってんだい！　早く買って来んだよ！」
多槻が背中や尻を小突きながら言うので
トロッタは苦笑いを浮かべながら車に引き返した
「そう言う訳でこれからコンビニ行くけど……三人は何か買って来
てほしい物ある？」

「材料って……コンビニで手に入るような物なの？」
哀はあまりに日常的なその四文字に　一瞬不安を覚えた……

……一時間後
トロッタと……そしてフリーザ様と哀はまだ車の中にいた
カーターと多槻を別荘に置いて　残りの材料を買いに出かけた三人だったが
しかしどこのコンビニに行っても　なぜかそれは品切れだった

「無いね……コアラのマーチ」

最後の材料
それは子供が喜ぶスナック菓子の定番だった
どこのコンビニやスーパーにも必ず置いてある代物なのだが
しかし　今日に限ってどこにも置いてないのだ
ドライブにも疲れて　哀は溜息をついた

「ねぇ……似たようなスナック菓子じゃダメなの？」

「え？　あぁ……どうなんだろう？
ちょっと占ってみるから待ってて……」

哀の言葉を聞くと　トロッタはハンドルを握りながら精神を集中させ始めた

「もうちょっと安くなりませんか？　えぇ？　５００円でどうですか？
じゃあ８００円！　ダメ？　何でだよ～安くしろよ～！」

突然聞こえてきた意味不明な言葉と同時に
車のタイヤは「キキキキキ！」と甲高い音を立て始めた
哀は忘れていたのだ……
この男の占いは運転中にやって良いものではないということを

「来た！　来た！　来た！　きたあああああああ！」

「ちょっ！　ちょっとストップ！　占い中止！」

車は右へ左へ蛇行運転
幾度となく対向車とぶつかりそうになった
が……トロッタは占いをやめず
そして　いつものように得体の知れない何かをその手の中に掴んだ

「捉えました……」

「ハンドルを捉えてえぇぇぇー！」

「ほっほっほっ」

「『ほっほっほっ』じゃない！」

哀の絶叫が響く中出た占いの結果……
やっぱり「コアラのマーチ」でないとダメだということが分かった
……

……そしてさらに一時間が経過した時
別荘から大分離れたところにある小さな個人商店で

三人はようやっとコアラのマーチを発見することができた

「まさかこんなに苦労するなんてね……」

「まったくね……」

早く買って帰ろう……

そう思ってトロッタがその六角柱の形をした箱に手を伸ばした時だった

突然　目の前に合ったコアラのマーチ全てが消えてしまった

「えぇ!?」

見るとレジの所には若い男が立っていた

そして手には大量のコアラのマーチが入った箱……

「大人買い」と言うやつだ

よっぽどコアラのマーチが好きなのか?

しかし　数時間もコアラのマーチを探しているフリーザ様達の前でのそれは

自殺行為に等しいものだった

「おいコラ!　このフリーザ様のコアラのマーチを奪うとは良い度胸ですね!」

「あ?　何だよあんた?　文句あんのか?」

「あるに決まってるでしょう　このサルが!」

怒りに任せ若い命を葬り去ろうとするフリーザ様

哀とトロッタは慌ててそれを止めに入った

しかし　そうは言ってもコアラのマーチを諦めるわけにはいかない
二人は何とかコアラのマーチを分けてくれるよう　男に交渉してみた

「う～ん……分けてあげたいのは山々なんだけど……俺も仕事でやってるからなぁ」

しかし　返ってきたのはそんな言葉だった

「仕事……？」

「うん……ある人にコアラのマーチを一つ残らず買い占めて来いって……
だから分けて良いかはその人に聞いてみないと何とも言えないな」

妙な仕事があったものだ……
哀はそう思ったが　しかし男の話が本当だとするとこの辺りのコアラのマーチはその人物によって買い占められている可能性が高い
三人は仕方なく　男の雇い主の元へ向かうことにした

雇い主は相当な金持ちなのか
男に案内された場所は物凄い豪邸だった
そこには黒服の男達や家政婦と思しき女性達
そして　箱一杯のコアラのマーチを持った者達……
皆男と同じく　この豪邸の主に雇われたらしい

「コアラのマーチを分けて欲しいだと？」

豪邸の主はフリーザ様達の話を聞くなり眉尻を上げながら口を開いた

主の名前は藤堂倖俊（とうどうゆきとし）
目つきの悪いやつれた顔の上で　金髪をオールバックにしている
その人相だけでフリーザ様達には男の回答が分かった

「嫌だね……」

「ほらね……やっぱりですよ」

男の言葉にフリーザ様は「やれやれ」と溜息をつくと
ニヤリと笑って口を開いた

「そう言うと思いましたよ……しかし　我々もコアラのマーチが必要なんですよ
あなたがそう言う態度なら　無理矢理にでも頂いていくことにしましょう」

「フン……今『我々も』と言ったか？」

しかし　フリーザ様の言葉を聞いた藤堂は小さなリモコンを取り出すと
一つだけ付いている赤いスイッチを押した
すると次の瞬間　遠くの方で「ドーン！」と何かが爆発する音が聞こえてきた

「その言い方では私もコアラのマーチを必要としているみたいじゃないか
それは誤解だな……私はコアラのマーチをこの世から消したいんだ」

「何ですって？　じゃあ今の音はまさか！？」

「あぁ……木っ端微塵に吹き飛ばしてやったよ……だから君らの取り分もゼロだ」

イカレていた
目の前の男は何かの怨霊に取り憑かれているのかもしれない
哀には……フリーザ様ですらその男を理解することなど出来なかった

「なぜ？　なぜこんな馬鹿なことを？」

哀は思わず聞いた
白目の多い藤堂の眼が哀の方を向いた

「お前らに……いや　人類にコアラのマーチを食する権利なんて無いからだ」

藤堂は語り始めた……
己の過去を……

藤堂には奈々子と言う名前の恋人がいた
しかし奈々子はガンにその体を蝕まれており
ついには医師から「余命わずか」との宣告をされてしまった
日に日に近付く死と向き合いながら
二人は別れを惜しみつつも残された時間　懸命に愛し合った
そんなある日だった

「ねえユキ君……お願いがあるの……」

いつも通り　藤堂が彼女の病室に行くと
奈々子は唐突に口を開いた

「コアラのマーチが食べたい……」

「あぁ分かった！　今買ってくるよ！」

藤堂はコアラのマーチを買うためコンビニへと走った
しかしそのコンビニはおろか　その辺り一帯のどのコンビニやスーパーでも
コアラのマーチは品切れ状態だった
不思議に思って人に聞くと
「コアラのマーチの中に一つだけカールおじさんが紛れている」と言う噂が流れ
それを発見した人には賞金を出すという金持ちが現れたせいで
皆がコアラのマーチを買ったからだと言う
しかし藤堂は諦めるわけにはいかなかった
何しろ　恋人の最後の頼みになるかもしれないのだから
そして走り回ったあげく……ついにコアラのマーチを発見したが……

「あぁ！　ちょっと！」

目の前で大人買いされてしまった……
だが　脳裏には病室で見た奈々子の顔が浮かぶ
藤堂は必死に頭を下げて分けてくれるよう頼んだ

「うるせえな！　カールおじさんは俺が見つけるんだ！」

返ってきたのはそんな冷たい言葉だった

結局　彼は隣の県のコンビニまで行って

ようやくコアラのマーチを手に入れることができた
しかし　それを手に藤堂が病室に戻ると
奈々子は……

「分かるか？　彼女の願いを叶えてやれなかったこの俺の気持ちが？」

「それは気の毒だと思うけど……私達もコアラのマーチが必要なのよ
その時のあなたと同じでどうしても必要なのよ」

「黙れ！」

詰め寄る哀を一喝し　藤堂は邪悪な笑みを浮かべて話しを続けた

「俺はもう悪魔に魂を売ったんだ！
この世からコアラのマーチを消すために！
多くの人間どもに俺と同じ思いをさせてやるためにな！
そしてそれを可能とする力も手に入れたんだ！」

バシッ！

乾いた音が響いた
哀の平手が力強く藤堂の頬をぶったのだ

「そんなことをして……何の意味があるの？
あなたがそんなことをしても天国の奈々子さんは悲しむだけよ！」

哀は力一杯叫んだ

「ちょっと～……今の何の音？」

しかし　その時奥の部屋から一人の女性が顔を出した

「ちょっとユキ君……何を騒いでるの？」

「あ……奈々子……」

「え？　何……死んだんじゃないの？　奈々子さん……？」

哀にはわけが分からなかった

悪いのは藤堂だった
誤解を受けるようなところで話を切ったのだから
詳細に当時の話をするとこうだ
『コアラのマーチを買って帰ったら
奈々子はすでにトッポを食べて満足していた』

「ごめん……帰ってくるの遅いし……『もうトッポで良いや』って思って……」

そう笑いながら言ったのは奈々子だった
結果的に藤堂は奈々子の「コアラのマーチが食べたい」という願いを叶えられなかったのだ

「え？　じゃあ『余命わずか』っていうのは？」

「あぁ……あれは医者の誤診

本当はただの風邪だったのよね」

「どうやったら風邪とガンを間違えるのよ……」

笑いながら当時を振り返る奈々子を前に
哀はもう溜息をつくしかできなかった

「まあ……それはそうと……」

そんな哀の代わりに今度はフリーザ様が口を開いた

「お宅の旦那さんがコアラのマーチを一人占めして困っているんですよ
あなたからも説得してくださいませんかね？」

フリーザ様が頼むと
奈々子は藤堂に二・三発拳を叩きこんで
藤堂が隠していたコアラのマーチをフリーザ様達に分けてくれた
どうやら　藤堂は奈々子の尻にしかれている現状を嘆いてこんなことをしたらしい……

「ま……何はともあれこれで材料はそろったわね……」

「そうですよ！　これであのメルレイとか言う女をギャフンと言わせてやれますよ！」

続く

１３２．消えたマーチ（後書き）

めちゃくちゃお久しぶりです。
企画が終わったのにまた別の企画に参加してたり
他にも私生活が忙しくなったりでなかなか更新できませんでしたが
やっとこさ更新しました。

ってことで
「なにやってたんだこの野郎ー！」
と、罵声や石ころが飛んできそうですが……

まあ、所詮はパソコンの画面上の出来事。
無視すれば良かろう……
あ、聞こえちゃいました？
いやだなぁ、ジョークですよ。
とりあえず６月中にメルレイ編を終了したいと思います。

こんなこと言って、またどうなるか分かりませんけどね。
うそつきは福田内閣の始まり？

残念でしたね。

私は元々自民党派の人間なんですよ！

はい……
調子に乗りました……
すみません。

１３３．反撃の狼煙

それはファンタジー世界のような光景だった
ぐつぐつと沸騰する釜の中の液体を
魔女のような老婆が大きな棒でぐるぐるとかき回している

「ねるねるねるねは……ヒェッヒェッヒェッ！」

「ちゃんと完成するんでしょうね……」

第１３３話　反撃の狼煙

こうして　多槻（たつき）の手によって対メルレイ薬は完成した
しかし　完成したは良いがフリーザ様達は問題に直面した

「どうやって摂取させるか……よね」

相手は暴れ狂う中毒者達
数も相当多いと思われる
大人しく薬を受け入れてくれるはずがなかった

「なんかこう……全員に一気に摂取させる方法とかないんですか？」

「ご主人様　空中散布なんてどうでしょう？」

「まあ　雑魚はそれで効果あるだろうけど……
改造戦士とか言われてる強い中毒者には効かないんじゃないかな？」

「あーだこーだ」と意見は出るが　どれも決定的ではなかった……
あの策を取ればこの問題点……この策を取れば今度はこの問題点……
いたちごっこが続き　次第に皆口が重くなっていった……が
その時哀が口を開いた

「ねえ……二つの案の複合とか思い付かないの？　あなた達は……
二手に別れて　一つのチームが空中散布……もう一チームが改造戦士に直接……
これで良いんじゃないの？」

「おぉ！　さすがハイバラさん！」

「天才ですぅ！」

「あなた達……よくそれで宇宙の帝王やテロリストの親玉が務まったわね……」

哀のこの提案により
結局……
飛行機を操縦できるカーターと危険地帯に行くのが嫌なトロッタが散布班
戦闘力５３万のフリーザ様と薬学知識のある哀が突撃班ということになった

そんなわけで
四人は多槻にお礼を言って別れると一路東京に向かった

……そして突撃班

フリーザ様と哀がやって来たのは天下の警視庁……

「まさか警察を乗っ取るなんて……」

「ハイバラさんのお友達にはろくなのがいませんね」

「その通りだけどあなたに言われるとムカツクわね……」

トロッタの占いでこの場所が示された時　哀は自分の耳を疑ってしまった
おそらく　佐藤や高木などの知り合いとの対決も避けられないだろう……

「行きますか……」

「そうね……あら?」

作戦が成功すれば皆を元に戻すことができる
そう意を決して二人が乗り込もうとした時
哀はそれに気が付いた
警視庁の建物から　パトライトを光らせてサイレンを鳴らしながら
大量の車両が飛び出して来たのだ
そして次の瞬間
車両からはバタバタと警官達が降りてきて　拳銃の銃口を一斉にフリーザ様と哀の方に向けた

「やば……フリーザ様!　ここは任せたわよ!」

哀がそう言って物陰に隠れた瞬間　一斉に爆音と火花が乱れ飛んだ
照準は全てフリーザ様に合わせられている……

さすがの宇宙の帝王も跡形もなく

「なるわけないじゃないですか」

そう……なるわけない

一瞬で間合いを詰めたフリーザ様は警官隊をデコピンで薙ぎ倒していった

そんな様子を　メルレイは警視庁最上階の特等席から眺めていた

「さすがにあの雑魚どもでは無理があったようね……

でも知り合いは殺せない……フリーザ様！　そして志保！

地獄の苦しみを味わうが良いわ！」

メルレイは命令を下した

と同時に……二つの陰が警視庁の建物から飛び出し

フリーザ様の前にその姿を現した

「改造戦士一号……ソノコ！

改造戦士二号……ラン！　やっておしまい！」

「ぬぅ……園子さんに続いて蘭さんも改造完了ですか？

『紺碧の棺』気取ってて勘に障るタッグですね……」

しかしフリーザ様達にとっては好都合

小出しにされるよりも一斉に出てきてもらった方が

こちらの策を警戒されずに済むからだ

フリーザ様が気を引き付けている間に　哀が猛獣用の麻酔銃で薬を撃ち込む

それが作戦だった

「さあ！　今ですよハイバラさん！」

「待って！　まだ射程距離に入れてないわ」

問題は　哀が射程に入ろうとしても
その他の雑魚警官達が拳銃を発砲して妨害してくることだった
しかもメルレイの薬のせいか　倒しても倒しても起き上がってくる
……
まるでゾンビ映画だった

「空中散布組が来るまで持ち堪えてちょうだい」

「役に立たないですね……」

不死身の警官隊に園子と蘭の最強女子高生タッグ……
フリーザ様はかなりピンチだった

「すっかり遅くなっちゃっいましたね……」

フリーザ様がピンチに陥っていた頃
カーターとトロッタの乗った空中散布用の小型機はようやっと飛行場を飛びたった
本当はもう少し早く出発する予定だったのだが……

「お金下ろすので時間くっちゃったね」

「まさか原油価格高騰の余波に煽られるとは思わなかったですぅ…

…」

飛行機のチャーター料が予想を超えていたため
銀行へ行った分のタイムロスを食らってしまったのだ

「ご主人様！　今行きますぅ！」

警視庁上空を目指して
カーターは操縦桿を握り締めた

「カーターさん……方向逆ですよ」

「あぁ！　間違えたですぅ！」

しかし　到着はもう少し後……

「だああ！　カーターさんは一体何をしているんですか！？」

一向に到着しないもう一チームにイライラしながら
フリーザ様は警官隊……そして女子高生タッグとの戦いを続けていた

「ゾノゴ……イグヨ！」

「オッゲー……ラン！」

幼馴染の親友通し……
そのコンビネーションはやはりすごいもので
手加減しなくてはならないフリーザ様にとってはかなりの威力を発揮していた

「まったく……部下に欲しいですよ！
ハイバラさんも少しは手伝ってくださいよ！」

「やーよ！　危ないじゃない！　私はもう少し物影にッ……！」

突然のことだった
哀の言葉が途切れてしまったのだ
不審に思い　フリーザ様はまとわりつく警官隊と襲いかかる女子高生二人を吹き飛ばし
すかさず哀が隠れている方を見た

「悪いな……灰原」

「コナンさん！」

哀はコナンの麻酔銃によって眠らされていた

「今のうちだよ！　蘭姉ちゃん！　園子姉ちゃん！」

「くっ……後で覚えてなさいよコナンさん」

が……後があるかどうかはフリーザ様にも良く分からなかった
事実　その時フリーザ様は襲いかかる中毒者達によってもみくちゃにされていた
このまま手加減を続けて殺されるか？（果てしない時間を要するが……）
本気を出して地球ごと消してしまうか？

「ぬぅ……地球のことは大分気に入っていたんですが……

ここまでこの私をコケにするというのなら仕方ないですね……」

フリーザ様は今まさに指先にエネルギー球を作り始め
二つの選択肢のうち後者を選ぼうとしていた……が
その時だった
突然　まとわりつく警官達の力が弱まった

「あれ？　俺達何やってたんだ？」

数秒後にはそんな声まで聞こえてきた
何が起こったのか分かっていないらしく　一同キョロキョロとしている
その様子にフリーザ様は上空に目をやった

「遅いですよ！　カーターさん！」

空中散布チームがようやっと到着したのだ
弱中毒者達……警官隊やコナンはすっかり正気を取り戻した

「何が起こったというの？　どういうこと？」

メルレイは唖然とその様子を見ていた
目の前では次々と兵隊達が解放されていく……

「どうやら私の薬を打ち破る手段を見つけたみたいね……
でも　空中散布ぐらいじゃ改造戦士までは元に戻せないわよ！」

そう……園子と蘭はまだ狂気を放ち続けていた
そしてメルレイが指をパチンと鳴らすと　弾かれたようにフリーザ様に襲いかかった

「コナンさん！」

「へ？　フリーザ様？」

「寝ぼけている場合じゃありませんよ！
さっさとハイバラさんが持っている銃で二人を撃つんですよ！
それで二人を元に戻せます」

コナンは正気に戻ったばかりで完全に状況を理解できなかったが
蘭が狂気に駆られていて　それを元に戻すためには撃たなければならないということは理解した

「少し我慢してくれ蘭！　園子！」

襲いかかってきた二人をフリーザ様が捕まえたところで
コナンは慎重に狙いを定めて引き金を引いた

「シネェェェ！　フリーザ……ア……アァァァ……あれ？　フリーザ様？」

「効くの早っ！　お久しぶりですね蘭さん」

ついに　フリーザ様達の逆襲が始まろうとしていた……

続く

１３３．反撃の狼煙（後書き）

この間隔で更新するのいつぶりでしょうか？
今回は「お久しぶり」じゃないですよ。
すごい！

すごくない？

あ、そうですか……

ってことで１３３話でした。
実は１３４話ももう出来上がっているので
もうちょっと推敲して明日には出せるかと……
そして次回でメルレイの逆襲編は終了です。
この間の公約は守れそうですね。

終わったら次のネタ考えなきゃ……
久しぶりに探偵団とかポアロとか出そうかな
まあ終わってから考えましょうか。

ところで最近原作の方でも梓が活躍ぎみで
梓好きな私としては嬉しい限りです。

１３４．宿敵からの激励

「え～……お久しぶりです～　お元気でしたか？
あ　そうですか……
ところで突然ですが
皆さんは『火事場の馬鹿力』って信じますか？
ピンチに晒された時　自分が持てる以上の力を発揮できる……
現実にはあまり聞いた事ありませんよね～　んっふっふっ
え～人間　自分が持てる力しか発揮できないものです
でも　ご安心ください
これは小説……フィクションですから」

「ん？
私は一体誰なのかって？
ん～……ふっふっふっふっふっ
答えは本編で……」

第１３４話　宿敵からの激励

「よくも私の兵士達をジャンクにしてくれたわね……」

次々と皆が元通りに戻っていく中
警視庁の屋上から　とうとうメルレイが姿を現した

「おや……やっと登場ですかメルレイさん」

「驚いたわ……まさか改造戦士まで元に戻してしまうなんてね」

「このフリーザ様に敵う者などいないということです
それで？　処刑される覚悟はできていますね？」

「馬鹿言わないで……まだ私のターンは終了していないわよ」

そう言うとメルレイはまた指をパチンと鳴らした
すると数秒後
建物の中から静かな……しかし力強い靴音が聞こえてきた

「鬼札を切らせてもらうわ……出てくるのよ！　改造戦士三号！」

メルレイが呼ぶと　それはゆっくりと暗い建物の中から光の中へと
姿を現した
それは何とも……またまた見知った顔だったので　フリーザ様は溜
息をついた

「え～お久しぶりです～……白鳥任三郎です～」

白鳥だった
真っ黒な服に身を包んで　おでこに指を当てた……
いつもと若干イメージが違うが確かに白鳥だった

「え～……完全勝利に見えたフリーザ様
しかし　彼は大きなミスを犯しました……そのミスとは？
ん～……ふっふっふっ　続きは解決編で」

「明らかにキャラを間違えてるじゃないですか！」

頭の中はすっかり某刑事ドラマの主人公だが

しかし　そこにいるのはどう見てもあのダメ刑事だった
鬼札というからどんなすごい改造戦士かと一瞬ヒヤリとしたフリーザ様だったが
現れたエセ畑任三郎を前にして　もう負ける気はしなかった

しかし　メルレイはそれでも余裕の絵顔だった
彼女には　なぜ白鳥が古畑を気取っているのかは意味不明だったが
今までにないほど強力な改造戦士に仕上げることができたという自信があったからだ

「笑っていられるのも今のうちよ
改造戦士三号！　あなたの力を見せてやりなさい！」

「ん～ふっふっふっ……分かりました～ご覧に入れましょう！　白鳥任三郎でした」

相変わらず古畑を気取りながら　白鳥はフワリと空に浮き上がった
そして次の瞬間　フリーザ様に向けて両手の平を突き出すと　体の中にある気を全てそこに集中させ始めた

「え～皆さん……これが私の必殺技『ウルトラスーパーズビズバメチャンコキャリア波』です～
ん～ふっふっふっふ……フリーザ様～　え～私のエネルギー波受けられますか？」

「舐められたものですね……」

フリーザ様は組んでいた腕をダラリと垂らすと
白鳥の放つエネルギー波を弾き返す体勢を整えた

「よろしいですか～？　いきますよ～？
はあああああああああああああああああああ！」

それは　予想を超える威力を秘めたエネルギー波だった……
最初は軽く蹴り返すぐらいの気持ちでいたフリーザ様だったが
青白い光が目の前まで来ると　思わず垂らしていた両手を前に突き出した

「ぐぅおぉぉぉ……！」

ズシリと重たい……
押し返そうとするが　エネルギー波は逆にフリーザ様を地面に向かって押し始めた

「く……ぬぅ……こんなもの……こんな……ものぉ……！」

「ん～？　受け切れませんか～？　手加減……はやめておきましょうか……んっふっふっ」

「ぐぬぅぅぅ……おのれぇぇぇ……」

血管を体中に浮き立たせながら　フリーザ様は必死に堪えた
しかし　エネルギー波の勢いは全く衰えない

「馬鹿な……この俺が……負けるのか……？　あんなダメ刑事に……」

『情けねえぞ！　フリーザ！』

その時　突然どこからともなく声が聞こえてきた

コナンのものでもない……哀のものでもない……どこか忌々しい声
……

「孫……悟空……？　貴様ぁ……！」

『地球の命運はおめえにかかってんだぞ！　宇宙の帝王の力はその程度なんか！』

「うるさい……サル野郎……！　お前の指図なんか……お前の指図なんか……！」

「フフフ……フリーザ　そして志保……
いよいよ終わりの時が来たようね！　さあ改造戦士三号！　トドメを刺しておしまい！」

苦しむフリーザ様を見てほくそ笑みながら
メルレイはついにフィニッシュサインを白鳥に送った
白鳥はそれを見ると　相変わらず古畑を気取りながらニヤリと笑った

「それではごきげんよう……白鳥任三郎でした」

そう言って白鳥が全エネルギーを放出しようとした時だった
しかし　次の瞬間彼の手はネトっとした感触に襲われた

「ほれヌ～ルヌル！　ワシの発明した物にガラクタなんか無いぞい！」

少し離れた場所から奇妙な銃で狙いを定めていた人物がいた……
それは正気に戻った博士だった

博士が放ったあのヌルヌルの液体だったのだ

「あぁ～何だよこれ～……ちょっと今泉君……拭くものない？」

「ば……馬鹿！　トドメに集中しなさい！　あと私は今泉なんて名前じゃない」

「西園寺君　拭くものない？」

「西園寺でもない！」

それは一瞬のコントだった……

しかし　こういったエネルギー波の押し合いにおいて

その一瞬の隙はあまりに大きいものだった

『今だあ！』

「お前の指図なんかあああああああああああああああああ！」

合図を受け　ついにフリーザ様はその光の球を押し返すことに成功した

そして返されたエネルギー波は今までよりも勢いを増し　白鳥とメルレイの方に向かって突き進んだ

「な……何ですって！　改造戦士三号！　押し返すのよ！」

「向島君　拭くものない？」

「馬鹿野郎おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

そのまま……
白鳥とメルレイは光の中に消えて行った

『やったな！　フリーザ！』

「ちっ……サル野郎め　礼なんか言わないぞ」

耳元で聞こえる宿敵の声……
しかし　あるはずのない姿を求めてほんの少し顔を上げた時
フリーザ様の目には意外な人物が飛び込んだ

「なあに……礼なんていらねえよ」

「貴様は……テツ！　相変わらず神出鬼没な奴め……」

声の正体は悟空ではなくテツだった

何はともあれ……
その後　一緒に吹き飛ばされた白鳥も無事発見された
メルレイの改造により肉体が強化されていたおかげで死ななかったらしい
そして残されていた中毒者達にも解毒が施され
その日の夕方には一連の事件は幕を閉じた
メルレイの恐怖は去ったのだ

「今回ハイバラさんは本当に役立たずでしたね！」

「悪かったわね……」

続く

おまけ：その後の警視庁

「いや～酷い目に遭ったよ……今日からやっと職場復帰だ」

「あ　白鳥さん！　おはようございます」

「おはよ……えっと　君は向島君だっけ？　『向かう』に『島』」

「いえ……千葉ですけど」

「あ……そうだったっけ？　ごめんごめん……『向かう』に『島』……覚えた！」

「……」

「……ねえ高木君？」

「何ですか佐藤さん？」

「白鳥君あのまま復帰させちゃって良いの？」

「さ……さぁ……？」

白鳥が完全に白鳥に戻ったのは
それから一ヶ月後のことだった……

１３４．宿敵からの激励（後書き）

やっとメルレイ編終了です。
話数にしたらそれほどでも無いですが
ものすごい時間がかかりましたね。
主に更新スピードが原因で……。

でもフリーザ様と灰原さんの話が終了したわけではないので
またネタを考えないといけません。
次の更新はいつになるやら……

ん～……わがんね。

できるだけ早くお届けします。

今「嘘だッ！！！」って言った人はアニメの見すぎです。

１３５．ベイカ・ヒートアイランド

現代人は猛暑に脅かされている
しかし……自業自得とも言える
便利さを求めて
ビルを建て……道路を舗装し……都会を築いた
都会は人を集め　さらなる人間活動を生み出し
そして都会はヒートアップしていった
暑さに脅かされた人々は冷房をつけ
あるいは二酸化炭素を撒き散らしながら走る車で涼しい所まで逃げたりする
それが悪循環だと知ってか知らずか……
それはきっと　人間が灼熱の大気に焼き尽くされるまで続くのだろう

第１３５話　ベイカ・ヒートアイランド

アブラゼミのジージーと言う鳴き声が響き渡る中
そこは人類にとって楽園（エデン）と呼べる場所になっていた
セミ達が全力で求愛の絶叫を上げている外界は気温３０度なのに対し
そこは２２度……
愚の骨頂とも言える８度差だが
しかし　温度の支配者は罪悪感すら感じていなかった

「ハイバラさん……文明は素晴しいですね……」

「そうね……」

フリーザ様と哀は冷房の効いた部屋の中でだらけきっていた

「カーターさん！　何か冷たい飲み物を！」

宇宙の帝王は
「動いたら負けかな」と思っているらしい
ナメック星でのあの華麗な動きはどこへやら……
しかし　そんなフリーザ様の願望とは裏腹に
いつものタラちゃん口調は聞こえてこなかった

「カーターなら買い物に行ったわよ」

「あ……そうでしたっけ？　じゃあ博士さん！」

「博士は夕方まで学会」

「ぬぅ～……じゃあ」

「嫌よ」

「まだ何も言ってないじゃないですか」

「嫌よ」

「ぬぅ～……」

そんなやり取りを終えた時だった
突然部屋の中が静かになった
最初は気にも留めなかった二人だったが
次第に先ほどまであった「音」が消失していることに気がついた

「あれ？　クーラー止まっちゃいましたよ」

「え？　やーね……故障かしら？」

哀はリモコンを手に色々と操作してみる
しかし　全く反応がない……

「故障……みたいね……」

「馬鹿な！　この暑い中クーラー無しで生活しろと！？」

「博士が帰ってくるまで我慢するしかないわね」

部屋は閉めきってある
「博士が帰ってくる夕方までにそれほど室温は上がらないだろう」と
哀は楽観的な予想を立てて　再びファッション誌に目を落とした
しかし　それは甘い考えだった
８度差と言う不平等に対しセミ達は怒りのシュプレヒコールを上げ
それに呼応するかのように地球の逆襲が始まった
一度は国外退去を言い渡された熱気達だったが
エアコンが止まったと見るや　怒涛のごとく再征服を開始した
窓や扉の僅かな隙間から……

「だあー！　夕方まで我慢できるわけないですよ！
こうなったらどこか涼しい所へ逃げましょう」

フリーザ様と哀はついに楽園を追放された

カランカラン！
と……すっかり元通りに復旧したポアロの扉が音を立てた
灼熱地獄を「えんやこら」と歩いてきたフリーザ様達を
店内で冷やされた空気が優しく出迎える

「いやー　やっぱりクーラーは良いですね！」

「あ！　フリーザ様」

フリーザ様の声に気付いたのか　店の中にいた数名が振り返った
ダイガクセイにマスター……それから蘭と園子……
あんな騒ぎがあったせいでお馴染みの面子しかいないらしい
どうやら皆　暑さから逃げてきたらしい

「この間はすみませんでした……
洗脳されていたとはいえ　ご迷惑をおかけしちゃって……」

「ほっほっほっ……まあ済んだことですし　別に良いですよ」

謝ってくる四人に絵顔で返すフリーザ様……
しかし　その時一人足りないことに気付いた

「……梓さんはどうしたんですか？」

「え？　そこにいるじゃん」

フリーザ様が聞くとマスターはカウンターの中を指差した
見ると　そこには確かに梓が立っている
ただし目が虚ろで　まるで亡霊のようだが……

「どうしたんです？　何でそんな浮かない顔してるんですか……」

あまりの様子に驚いてフリーザ様は聞いた
すると　無表情だった梓の目から涙がこぼれ出した

「うぅ……ブアカーオが……ブアカーオがぁ……」

目を覆ってグスグスと泣き出した梓
これだけではわけが分からないが
しかしその人名を聞いて　哀は数日前に何気なく見たテレビ中継を
思い出した

「あぁ……この間見事にＫＯされたものね」

「うわあああああああああああああああん！」

「まあまあ　泣かなくても良いじゃん梓ちゃん
格闘技なんだから勝ち負けあるって……」

「そうですよ……ブアカーオだかカカオマンだか知りませんけど仕方ないんです
それよりクーラーもっと強くしてくれませんか？」

それは格闘技に興味の無い人間にとって当然の言葉なのかも知れない
しかし　フリーザ様は分かっていなかった
梓がどれだけブアカーオを応援していたかということ
そして　冷房の主導権が誰にあるのかということ……

「うるさい！　うるさい！　うるさい！」

皆のあまりに素っ気ない態度に梓はついに切れ
近くにあった棒きれでエアコンを叩き始めた

「何がクーラーだ！　こんなものにブアカーオが負けるものかー！」

「やめて下さいよ梓さん！　壊れちゃうでしょう！」

「こんなもの！　こんなもの！　こんなもの！」

「ちょっとハイバラさん！　梓さんの洗脳　まだ解けてませんよ！」

「元からでしょ……」

とにかくやめさせなくては……
フリーザ様は梓を止めようと席を立った
しかしその時だった
フリーザ様の耳はいきなり静寂に襲われた
そう　またあの「音」が消失してしまったのだ

そこでもまた　大気の大規模なクーデターは始まった
涼しかった店内だったが
エアコンがＫＯされてしまった今　熱気の侵入を防ぐことはできなかった
やっとのことでやって来たオアシスが枯れてしまったのだ

「梓ちゃんがごめんね　みんな……お詫びにこれ食べて良いから」

申し訳なさそうにマスターがカキ氷を持ってきた
地獄に仏……皆　無我夢中でカキ氷を貪った

「で？　エアコンは？」

「ダメだね……完全にお釈迦だよ」

「ブアカーオパワーを思い知ったか！」

「お黙りなさい梓さん！　何てことしてくれたんですか」

梓に対して罵声を浴びせてやりたいフリーザ様……
しかし　この熱地獄でさらなる熱を生み出すのは御免だった
それ以上は何も言わず　またカキ氷を食べ始めた
が……そんな様子を見ながら哀はクスリと笑った

「まあ良いじゃない……普段はやらないエコ活動ってことで……」

「何言ってるんですか！　エアコン頼りまくりの生活してるくせに……」

「まあエコは良いとしても　この暑さはさすがに……」

カキ氷を食べ終えたダイガクセイが手をパタパタさせながら言った
すると　それまでずっと苦笑いを浮かべているだけだった蘭も口を開いた

「風通しを良くしてみたらどうですか？」

文明がブアカーオ信者に破壊されてしまった今
頼れるものは自分達が侵してきた地球だけだった
マスターは藁にもすがる思いで　さっそく扉やら小窓やらを開いて

みた……

「……あんま涼しくなんないですね」

「元が暑いから仕方ないわね……」

「レポートでまとめたことあるよ……ヒートアイランドって奴だね」

「ヒートアイランド……」

かったるそうにフリーザ様達は世間話をするが
しかし　園子はダイガクセイの言った環境用語に耳をとめた

「水でもまいたら？」

近年　ヒートアイランド現象の対策として行われている「打ち水大作戦」
それをやってみようと言うのだ
マスターはさっそくバケツと柄杓を持ち出し店の外に出た

「おぉ！　何か涼しげだよ！」

水のしぶきが気持ち良い……
それを感じているうちにだんだん楽しくなってきたマスター
次第に水をまく手を激しくしていく……が
歩行者にかかってしまった

「おぅコラ！　何晒しとんじゃいボケ！」

それも運悪く……そっち系の人に……

「おや？　マスター水もまかずに知らない人と話しこんじゃってますよ」

相変わらずダイガクセイ等と話をしていたフリーザ様だったが外から聞こえてきた物音に振り返った時　それに気付いた

「って言うか……絡まれてるわね」

「あ……殴られた」

「フリーザ様……助けてあげたら？」

「まったく……この暑いのに世話の焼けるマスターですね」

フリーザ様は気だるそうに椅子から立ち上がると表に出て行きそっち系の男をボコボコに叩きのめすと　そのまま男に打ち水をまかせ
マスターを連れて店内に戻ってきた

「助かったよ……」

「まったく　気をつけてくださいよ
結局さして涼しくなりませんし……カキ氷もう一杯ください」

無駄に動いたことと　それに対するイライラで
フリーザ様の体温はまた上がっていた
これ以上熱くさせるとエアコンだけでなく店を失いかねないので
マスターは大人しく突き返されたカキ氷の器を受け取った

が……その時　哀が外の異変に気がついた

「雨……」

夕立だった
ぽつぽつと降ってきたそれは次第にバラバラと音を立て始め
雷の音と共にアスファルトの地面を冷ましていった

「何か涼しくなってきましたよ」

「フフッ……自然には敵わないわね」

これだけ侵しても　なお恵みを与えてくれる地球に
フリーザ様と哀は少しだけエコロジーな気分になったのだった……

「雨ごときにブアカーオが負けるものかー！」

「やっぱり洗脳解けてませんよ！」

「天然には……敵わないわね……」

続く

おまけ：白鳥の部屋

「こんにちわ……みんなのキャリア組こと白鳥任三郎です
前回は思わぬ手違いがありましたが　今回は大丈夫です

ゲストはこの方！　佐藤美和子さんです！」

「カツオ！　宿題はやったのか？」

「あ……アレレ～！？」

「おや？　これは失敬……てっきり息子が遊んでるものかと……」

「誰ですかあなたはー！？」

「ゲストに呼ばれた者です」

「美和子さんは！？　え？　高木と……張り込み？　そうなんだ……」

「どうかされましたかな？」

「いえ……ただの恋の悩みです……」

「ふむ……私で良ければ相談に乗りますぞ？」

「え？　そうですか……？　じゃあ……
僕には好きな女性がいるんですが　彼女には別に好きな男がいて……
何度もデートを邪魔してやったんですが　彼女は僕に振り向いてくれないんです」

「バカモンッ！！！」

「ひいいっ！」

「恋敵を貶めて想い人の心を得ようとは何事だ！
男とは己を磨いてこそ……顔を洗って出直せ！」

「は……はいぃぃぃ！」

「……いやあ　さすがお父さん！　言うことが違いますね」

「うむ……分かってるじゃないかねマスオ君」

１３５．ベイカ・ヒートアイランド（後書き）

ハローハロー！
ボンジュール！
久しぶりに事件でも何でもない平和な話でした。
これ系の話は１１８話以来でしょうか？
事件起こりすぎ？

「事件は会議室で起きてるんじゃない！」

「フィクションで起こってるんだ！」

ってことで……
納得して下さいよ、キャリア組の皆さん。
あと何か言うことは……え～っと

「ブアカーオ大好きー！」

「助けてー！」

これぐらいですかね。
ってことで、次回をお楽しみに。

１３６．シャッフル・ロマンスを守れ

学級劇の思い出というものは　時が経っても忘れられないもので
それはこの作品の作者であるおっとりも同じことだった
おっとりは小学校の時　劇で主役をもらったのだが
その役は最後　お姫様にプロポーズしなくてはならない
それも　見に来た両親の目の前でだ
おっとり少年は顔から火が出るほど恥ずかしかった
そしてそれから十年以上の時が流れたが
おっとりはまだ　時々そのことを思い出しては顔を赤くするのだった

第１３６話　シャッフル・ロマンスを守れ

「ねぇフリーザ様！　お願いがあるのよ」

園子はフリーザ様の前で手を合わせた

それは　フリーザ様と哀がいつものようにポアロにやって来た時だった
そこで待っていたのは蘭と園子……そして二人のクラスメイトの女子だった
そして　フリーザ様を見つけるなり　自分達の席に招きいれたのだ
園子からの頼みなど珍しいので　フリーザ様はとりあえず話を聞くことにした

「実はね　今度の文化祭でうちらのクラスまた劇をやるんだけどね……」

「ほぅ……劇ですか」

「えぇ！　前やった『シャッフルロマンス』の続編よ！」

園子はカバンから台本を取り出すと
それをフリーザ様と哀の前に差し出した
台本の表紙にはデカデカと
『シャッフル・ロマンスZ～燃えつきろ！！　熱戦・烈戦・超激戦～』
と書かれている……

「……本当に続編なの？」

哀は前作の雰囲気に似つかわしくない「Z」の文字とサブタイトルを見つめながら尋ねた
しかし　園子は「前作を超える大作だ」と言って自分の胸を叩いた

「で……『頼み』と言うのは？」

フリーザ様は話を戻した
すると　それまで笑顔だった園子の眉間に深いしわが刻まれた

「それがね……私達がこんなに素晴しい劇をやろうっていうのにね
脅迫状が届いたのよ！　あの『人斬り学園斎』からね！」

「随分久しぶりな名前ね……」

それは　フリーザ様と哀が出会って間もないころに遭遇した殺人鬼の名前だった

フリーザ様はその名前を聞くと　若干楽しげに笑った

「脅迫状には何と？」

フリーザ様が聞くと　それまでアイスコーヒーのストローを咥えていた蘭の口が動いた

「『学業を疎かにし　恋愛劇に現をぬかす愚者どもは皆殺しだ』って……」

「今朝職員室に届いたのよ！　この園子様に対する挑戦だわ！」

園子はバンとテーブルを叩いた
ポアロ中がシーンと静まり返る……
少しバツが悪くなって　園子は咳払いをすると話を続けた

「だからフリーザ様～お願い！　学園斎から守って！」

「そういうことですか……」

フリーザ様は　直ぐ目の前で少女漫画キャラのように瞳を輝かせる園子を見ると
フーっと溜息をついてからコーヒーを一口飲み
それからまた口を開いた

「良いでしょう……私の力で学園斎さんを蹴散らしてあげますよ
その代わり　報酬は弾んでもらいますよ」

「任せといて！　サポーティッド・バイ・鈴木財閥よ！」

契約成立……
フリーザ様と園子だけでなく　蘭ともう一人のクラスメイトも嬉しそうな表情を浮かべた
そう……もう一人……
哀はその時　ようやっと彼女を気に留めた

「ところでそちらの方は？　初めて見る顔だけど……」

「ん？　あぁ……彼女は劇で『黒衣の騎士』を演じる一ノ瀬さんよ」

黒衣の騎士は男なのだが
しかし……例のごとく男子達が恥ずかしがったため
彼女に白羽の矢が立ったらしい

「一ノ瀬里美よ……フリーザ様と哀ちゃんね？　噂はこの二人から聞いてるわ」

里美は優しく微笑みながら自己紹介したが……その声は何とも……

「宝塚の男役みたいね……」

「だから彼女が適任なのよ」

園子はそう言ってケラケラと笑った

さて……
そうして当日の警備の段取りなどを話し合っていた時だった
カランカラン……とポアロの扉が音を立てた

「いらっしゃいませ！」

梓に迎え入れられたのは中年のくたびれた男……
別に何のこともない　ただの来客だ
フリーザ様達は一瞬だけその男を見たが
すぐにその視線を戻した
が……里美だけは違った

「・・・・・・里美？」

里美と目が合った瞬間　男は彼女の名を呼んだ
知り合いらしい……

「久しぶりだな……元気にしてるか？」

「まあね……お父さんは？」

そう……男は彼女の父親だった
いや　戸籍上の話をすれば過去の関係で
男と里美の母親は数年前に離婚してしまっていたのだが……

「こちらの方達はお友達かい？　学校はどうだ？」

「別に……今度劇で役をもらったってことぐらいかしら」

「へぇ～……里美はどんな役なんだい？」

思春期の少女……その目の前にいる元父親……
そんな状況からか　里美の態度は素っ気無かった

しかしそんな時　園子はいつものノリで声を上げた

「カッコイイ騎士様の役よね～！」

「鈴木さん……」

「そうか……良い役もらえて良かったな
その劇は一般の人間も見れるのかい？」

「大丈夫ですよ！　是非見に来てくださいよ　この鈴木園子の超大作を！」

園子は里美の肩に手を乗せた体勢で調子よく言った
が……肝心の里美の方はムスっとした表情をしている

「来なくて良いわよ……」

「でも見たいな……里美の出る劇なんて小学校以来だし」

「学園斎に狙われてるもの……危険よ？」

先ほど　フリーザ様に警備してもらうことになったので　危険ではないのだが
しかし　里美はとにかく父親に来て欲しくないようだった

「学園斎って……あの？　大丈夫なのか？」

「ほっほっほっ……このフリーザ様が消し炭にしてあげますよ」

「とにかく　来なくて良いから！」

フリーザ様の言葉を遮って　半分怒鳴るように里美は言った
それを聞くと　男は里美の気持ちを察したのか
それ以上のことは言ってこなかった
ただ最後……「それじゃ」と一言だけ残して
彼はポアロから出ていった

「コーヒーぐらい注文してくれても良いのに……」

梓の言葉が静かな店内に響いた

何はともあれ……
文化祭当日はやって来た
帝丹高校はその日ばかりは教師も生徒も楽しげに笑っており
それぞれクラスで力を合わせた出し物や屋台などがそこかしこに並んでいた
蘭達のクラスの劇は体育館……
フリーザ様はその入り口にデーンと構えて
いずれ来るであろう学園斎を待っていた
しかし……

「何かお腹減っちゃいましたよ……
ちょっとその辺の屋台で食べ物買ってきますね」

時間帯はちょうど昼過ぎ……
グーグーと鳴る腹に我慢しかねて　フリーザ様は屋台の方に歩きだした

「フリーザ様！　もうすぐ劇が始まる時間よ！」

哀は呼びとめたが
しかし　フリーザ様は振り返ることもせず行ってしまった

「まったく……この隙に学園斎が来たらどうするのよ?」

「拙者がどうかしたのかね?」

突然声をかけられ　哀はバッと振り返った
目の前には……忘れもせぬあの顔……
人斬り学園斎が立っていた

「フン！　あれほど警告したのに……愚かな」

体育館の前に出された劇の宣伝の看板を見て　学園斎は吐き捨てた
そして懐から　巨大な……人殺し用のメスを取り出した

「いざ！　天誅！」

「待ちなさい！」

フリーザ様がいない以上　哀が止めるしかなかった
こんなこともあろうかと持ってきた博士の発明品の入ったリュック
哀はそれを背中から下ろした

「死にたくなければやめておきたまえ……」

「子供だからって馬鹿にしないことね」

哀はすかさず　時計型麻酔銃を取り出すと学園斎に向けて放った

が……針は命中せず　学園斎の人差し指と中指の間に捕まえられてしまった

「こんなものが通用すると思ったのかい？」

「まだ道具はあるのよ！」

今度はキック力増強シューズ……
のはずだったのだが
足がヌルヌルの液体に包まれてしまった

「これ前のヌルヌル靴じゃない……博士ったら間違えたわね」

「フン……相手にならんな……」

哀がヌルヌルに足を捕られているその隙に
学園斎は体育館に入ろうとした
しかしその時
学園斎は風を切る音を耳にした
何かが自分に向かってくる……
そう思ってとっさに飛びのくと　そこに一人の男が飛び蹴りでやって来た

「誰だ？」

学園斎が聞くと　男は素早くポーズをキメてみせた

「弱き者の鳴き声が　空を翔け抜け届くとき……怒りの雄叫び轟かせ　光の速さでやって来る！
イナズマ戦士ブリッツ・ガイ！　ただ今参上！」

「でも……私叫んでも泣いてもいないわよ？」

「せっかくキメたんだからさ……そういう突っ込みはやめてよ……」

正直あまり期待できる人間ではないが
フリーザ様が戻ってくるまでの時間稼ぎにはなるだろう……
哀はそっとほくそ笑んだ

続く

１３６．シャッフル・ロマンスを守れ（後書き）

素人のやる演劇ほど面白いものはありません。
彼らは劇のルールもタブーも知りません。
演じ方もまるでなっていません。
彼らはただ自分の魂を全力で舞台上にぶちまけるだけ。
だからまとまりのないカオスな内容になったりします。
大抵グダグダで終わりますが
中には超神展開なものもあります。
ルール無用な分、カオスで無限大な学級劇ってステキですね。
フリーザ様と灰原さんも
そんな学級劇みたいなところがあるのかも知れません。

即ち、やりたい放題。

作者の気分に左右されるこの作品はきっと地獄に落ちます。
で、地獄で連載し続けます。

１３７．父と娘のシャッフル・ロマンス

百人いれば　そこには百の物語がある
同じ時間の中でも
物語の序章にいる人……
中盤に差しかかった人……
クライマックスを向かえている人……様々だ
同じ時間の中でも
ある者は劇を演じているし
ある者はホットドッグの屋台に並んでいるし
ある者は必死に敵と戦っている
自分が楽しいときでも　誰かは辛い思いをしているのだ

第１３７話　父と娘のシャッフル・ロマンス

突如現れた正義の戦士ブリッツ・ガイ
しかし　彼を目の前にしても
学園斎はなおも余裕の表情を保っていた

「誰かと思えば　最近この辺りに出没しているヒーロー気取りのアホじゃないか」

見下したように言い放つ学園斎
その邪悪な笑顔をブリッツ・ガイはキッとにらみ返した

「人斬り学園斎！　善良な高校生の文化祭を邪魔することは許さん！」

「善良？　ゆとり教育の生み出したカスどもに善良もクソもあるか！」

「お前には『善良』の意味など一生分るまい！
食らえ！　ライジング・クロス・ウェーブ！」

聞く耳を持たない学園斎に
ブリッツ・ガイは拳から強烈な電撃を発して　それを放った
電気が通用しない人間などいない……はずだが
学園斎は平然としていた

「ば……馬鹿な……」

逆にブリッツ・ガイの全身から血が噴き出した
そしてその場に崩れ落ちた彼を　学園斎は足でぐいぐいと踏みつける

「拙者が着ているのは特殊強化ラバースーツでね……電気は通用しないんだよ」

「おのれ……」

「無駄だ……主要な腱や筋肉を切断した
もはや動くこともできまい……死ぬが良い！」

冷酷な眼差しと共に
学園斎はまたメスを一本取り出した
しかし　その瞬間踏みつけていたブリッツ・ガイの体に力がこもる

「まだまだあああああああああ！」

「何!?」

物凄い力で起き上がったブリッツ・ガイに　学園斎の体は吹き飛ばされた
すぐに体勢を立て直すが　すかさずブリッツ・ガイの追撃が襲いかかる

「サンダーボルト・ダガー!　そんなラバースーツ切り裂いてやる!」

「図に乗りやがって……」

哀の目の前で　二つの影が交錯した
一瞬間があって……
そして　そのうち一つが崩れ落ちた

「ぐあああああああああああ!」

ブリッツ・ガイだった
弱い……
哀は溜息すら出なかった
その目の前では　学園斎がまたニヤリと笑っていた

「そのタフネスには敬意を表するが……貴様の攻撃など拙者には止まって見えるわ」

完全に力の差は見えていた
ブリッツ・ガイは良く頑張った
が……残念なことに学園斎は人を超越していた

「まだだ……まだ……」

しかし　それでもブリッツ・ガイは立ち上がろうとしていた

「無茶よ！　あなたのライフはとっくに0よ！　動ける状態でないことが分からないの？」

たまらず哀は止めに入った

だが　ブリッツ・ガイは哀に向かって微笑むと言った

「娘が……良い役を貰えたんだ……せっかくのあの子の晴れ舞台を……邪魔させてたまるか！」

「まさか……あなたは里美さんの……？」

ブリッツ・ガイは質問には答えなかった

ただ黙って立ち上がり　学園斎と対峙した

「死に損ないめ！」

しつこ過ぎて頭に来たのか　学園斎はついにトドメに入った

鋭利なメスを何本も　ブリッツ・ガイの急所目がけて投げつけたのだ

「ブリッツ・ガイ！」

哀は叫んだ……が　メスが止まるはずもなく……

はずもなかったのだが……

メスは止まっていた

そして代わりに一本の光の筋が駆け抜ける

「ぐあっ！」

「ほっほっほっ！　お久しぶりですね学園斎さん！」

それはフリーザ様のエネルギー波だった
学園斎はそれによって胴体を貫かれ　腹に風穴が開いていた

「遅いわよフリーザ様！」

「仕方ないでしょう……ホットドッグの屋台が混んでいたんですよ」

そう言ってフリーザ様はホットドッグにかぶりついた
余裕過ぎるその態度……
学園斎は怒り狂った

「フリーザあああああああ！　良くも拙者を……許さん！」

「許せないのはお前の方だ！」

「何！？」

学園斎の前に立ちはだかったのは
加勢を受け　息を吹き返したブリッツ・ガイだった

「ファイナル・ブリッツ・デストロイ！」

「ぎゃあああああああああああ！」

フリーザ様が開けた風穴に　ブリッツ・ガイは渾身の電撃を叩き込み

そして……気絶した

しばらくして……
白いベッドの上でブリッツ・ガイは目を覚ました

「こ……ここは？」

「保健室よ……ブリッツ・ガイさん」

ベッドの横にはフリーザ様と哀
そして里美がいた……

「……！！！」

慌てて　ブリッツ・ガイは顔に手を当てた
いつも付けていたヘルメットが無い
治療のために外されたのか……とにかく彼は素顔だった

「お父さん……ヒーローなんてやってたんだね……」

当然　娘にも正体がバレてしまった
自分に向けられるその視線がいやに冷たくて
ブリッツ・ガイは顔を伏せた

「父さんな……母さんと離婚してから　里美のことばかり考えてた……」

とりあえず　何か話そうと思い
ブリッツ・ガイは語り始めた

「そしたら里美のことが心配になって……
私達の離婚が原因で　学校でいじめられたり　除け者にされてたらどうしようって……
だから……せめて里美が胸を張れるように　父さん考えたんだ
離婚した原因は　父さんがヒーローになるため
家族を犠牲にしないため……そう言う設定にすれば里美は胸を張れるって……」

「馬鹿すぎ……」

昔からダメな父親だと思っていたが
ここまでだったとは……里美にも想定外だった

「そっか……父さん馬鹿だな……」

「うん……多分　脳味噌にウジ湧いてるよ……」

「そうかもな……」

「それどころか半分かびてるかも……」

「そうだな……」

「むしろ脳味噌じゃなくて味噌なんじゃ……」

「そ……そこまで酷いかな……？」

「でも……」

里美は絵顔を作った

「最高にカッコイイお父さんだよ」

「里美……」

もう言葉はいらなかった……
壁にかけられた時計の音だけが　保健室の中で響いていた
しんみりとした空気……
哀はフリーザ様を連れて　邪魔にならないように保健室を出ようとした
が……そこに園子が入ってきた

「これから劇の第二回上演を始めるわよ～！」

それはスケジュールには無いものだったが
園子の提案で実施されることとなった
フリーザ様や哀……そしてブリッツ・ガイのため
劇を守ってくれた人達のためだけの上演だった
客席には三人だけだった……

『シャッフル・ロマンスZ～燃えつきろ！！　熱戦・烈戦・超激戦～』

ブリッジ公国のハート姫はあれから平和な時間を過ごしていた
彼女の現在の楽しみは　頻繁に訪れてくれる黒衣の騎士ことスペイド
今日は彼がやって来る日だ……
彼女は花の咲き誇る花壇の前で　彼の到着を待っていた
一方その頃　スペイドは彼女の元へ行く道中にあった

が……その行く手を突然暗雲と稲光が遮った

「やあ……君が黒衣の騎士かい？」

「誰だお前は？」

「ボクの名前は魔導師バビディ……この世界を制する者さ」

「魔導師だと？　そんな奴が私に何のようだ！」

「君……ダメじゃないか……黒は昔から悪役って決まってるんだよ？
なのに君は正義……だからあるべき形に戻してあげようと思ってね」

「何だと？」

「パッパラパー！」

バビディが呪文を唱えると　スペイドの中で恐ろしい変化が起こった
頭の中に沸き起こる　怒り……哀しみ……憎悪……
そして彼はついに暗黒面に落ちてしまった

「ふふふ……よしよし！　今日から君は暗黒の騎士ダース・ペーター
だ
それじゃあ手始めに君の恋人であるハート姫を誘拐しようか
ボク　ちょっと彼女に用があるんだよ」

「仰せの通りに……マイ・マスター」

こうして……
ハート姫はバビディとダース・ペーターによって誘拐されてしまった

ブリッジ公国は大騒ぎ……姫の救出作戦が練られたが
相手は空中要塞「死兆星」の中……並の人間では近づけない
そこで公国は　二人の男に姫の救出を依頼することにした

「マンママミーヤ！　俺達の出番だな兄弟！」

それはブリッジ公国の配管工で数々の武勇伝を持つマルオ・ブラザーズ
兄のマルオと弟のノレイージだった

さて……二人はさっそくハート姫を助けるため
空中要塞「死兆星」に向かって　土管をくぐったり旗を下ろしたり
しながら進んだ
しかし　妙だった
外ではそこそこ襲ってきた敵も
死兆星の中に入るとまったく現れなくなっていたのだ

「兄さん……これは罠なんじゃないか？」

「おいおい　ノレイージ！　ビビリすぎさ！　俺達が強すぎるだけだぜ　マンママミーヤ！」

ノレイージの考えは外れていた
それは罠ではなかった
罠ではなく……もっと恐ろしい事態が起こっていたのだ

それは彼らが乗り込む一時間前……
バビディとダース・ペーターは実験をしていた

「ボクの考えではこのハート姫には凄まじい潜在能力が隠されている

そいつを引き出して悪用してやるのさ」

バビディはハート姫を装置にいれると　脇にある機械を操作し始めた……

が……手元が狂ってしまい　装置はハート姫の肌を傷つけてしまった

ハート姫の腕からは真っ赤な鮮血がにじみ出る

「血……」

それはハート姫が自分の血を見た瞬間に起こった

「痛えええええええええええよぉ！」

「しまった！」

「どうしたペーター？」

「ハートは血を見るのが大嫌いで

見ると敵味方関係無く攻撃する殺人狂になってしまうのです！」

「何だって！？」

「痛えよ！　痛えよ！」

このままでは危ない！

そう判断したバビディはペーターにハートを抹殺させることにした

ペーターは暴れるハートの首筋に狙いを定め　一気にライトセイバーを振り下ろした

が……何とハートはそれを素手で防いでしまった

「何!?」

「うおおおおおおおおおおおおおおお!」

「何だ!?　ハートの戦闘力がどんどん上昇していく……」

雄叫びと共に　ハートは光に包まれ
髪の毛は金色になって逆立ち……筋肉は盛り上がり……
ハートは伝説の超サイヤ人だったのだ

「マンマミーヤ!　何だこの化け物は!」

「兄さん……すごい気だよ」

「あぁ……ノレイージ!　さっきの言葉は訂正するぜ
こいつは今までに無くハードな仕事になりそうだ!　気合い入れて行くぜ!」

「マンマミーヤ!」

こうして……マルオ・ブラザーズと超サイヤ人ハートの死闘が幕を開けた……

観客席でそれを見て……
哀達はただ唖然とするしかなかった

「何……このカオスな劇……」

「まったくですね……」

こんな劇のために体を張ったのかと思うと
なんだか悔しい三人だった……

続く

おまけ：脚本家鈴木園子の次回作（予告編）

『シャッフル・ロマンスGT～クララは二度死ぬ～』

伝説の超サイヤ人ハートによって瀕死の重傷を負わされたダース・ペーター
彼は命からがら「死兆星」から脱出しアルプスに逃げのびる
そこで彼はヤギ使いの魂に目覚めるのだが
そんなある日　彼は少女ハイジと出会う……
穏やかなアルプスでの日々……立ち上がるクララ……
しかし　平和な日々は終わりを告げる
ペーターの元にブリッジ公国から刺客が送られてきたのだ
陰謀渦巻くアルプス……
そこで　ついにクララが銃を取った

前作・前々作と見てきた灰原哀さんの批評
「園子さんにとってまったく新しい挑戦になるでしょうね……
でも……前々作のファンを失望させる内容になることは間違いないわ」

１３７．父と娘のシャッフル・ロマンス（後書き）

やべえ……久しぶりにやりすぎた気がする。

ってことで１３７話でした。
新蘭ファン……
とくにシャッフル・ロマンスを愛する方々は
きっと怒りで顔を真っ赤にしていることでしょう。

しかし、それで良いのです。
怒りはパワーです。
憎しみもパワーです。

ようこそダークサイドへ……

まあ、それはそうと
すっかり忘れていましたが
フリーザ様と灰原さんが始まってもう2年経ったんですね。
早いものです。
学園斎とか、そう言えば二年前のキャラですね。
タイムカプセルを掘り起こした気分です。
掘り起こした瞬間殺しましたけど（笑）

１３８．弱虫ロボコップ

夢のような話……という言葉がある
漫画や映画を見て

「こんなことが現実だったらまるで夢のようなのになぁ……」

これがかの有名な現実逃避だ
しかし
ただ涎を垂らしながら妄想の世界に逃げる人もいれば
妄想を現実にするため　日夜努力している人もいる
今回は後者の話を紹介する

第１３８話　弱虫ロボコップ

それはある日曜日のこと
フリーザ様と哀はデパートにやって来ていた
ここ最近は色々な事件……いや大事件に巻き込まれていたので
ゆっくり買い物など久しぶりだった
しかし
何も久しぶりにゆっくりとした時をすごしているのは二人だけではなく……

「おや？　あれは佐藤さんと高木さんじゃないですか？」

フリーザ様の視線の先には久しぶりに非番の日にちが合った恋人同士の姿があった

本当に楽しそうで　邪魔をするのは忍びない……

「デートしてるのね……そっとしといてあげましょう」

「お～い！　クサレバカップルのお二人さ～ん！」

「バカ……」

哀が気を利かせたのも虚しく
美和子と高木はフリーザ様に絡まれてしまった
高木は青い顔……美和子は笑顔でその宇宙の帝王を迎えた

「この間は迷惑かけちゃったみたいでごめんね」

フリーザ様と哀がやって来ると　美和子は申し訳なさそうに言った
もはや飽き飽きするようなパターンだ

「そうだ！　二人ともお昼まだじゃない？　お詫びにご馳走するわよ……高木君が」

「おぉ！　それはありがたい！」

美和子とフリーザ様は笑顔で話を進めようとする
しかし　高木は最後の一言にどうにも引っかかりを覚えた

「ぼ……僕が出すんですか？」

「なに？　まさか『彼女』に払わせようなんて考えてないでしょうね？」

「いえ……ご馳走させていただきます……」

逆らえるわけもなく……高木はため息をついた

「いつも悪いわね　高木刑事……」

「良いんだ……もう……良いんだ……」

顔を見上げてくる哀に向かって　高木はやつれた笑みを浮かべた

その隣で　美和子は普段見せないイタズラな笑顔ではしゃいでいる

「で？　何食べたい？　スシ？　テンプーラ？　フジヤマ・ゲイシャ？」

「あの佐藤さん……あまり高すぎる物は……」

「ケチケチしない！」

「フジヤマ・ゲイシャは食べ物じゃないわよ……」

と……

そんな感じで四人がレストランエリアに向かった　その時だった

突然「ダダダダダ……」っと　物凄い音がデパート内に響いた

「何！？」

音がしたのは一階

四人は近くの吹き抜けから下を覗き込んだ

一階では機関銃を持った覆面男達が逃げる客や従業員を捕まえていた

どうやら　また事件に巻き込まれたらしい……

「我々は強盗団『マンハッタンカフェ』
このデパートはたった今　我々が占拠した！」

「我々とは関係なさそうですね……お昼を食べに行きましょう」

「食べてる場合じゃないわよ……」

哀は突っ込みつつ　以前見た新聞を思い出した
「マンハッタンカフェ」
今回のデパートのような商業店を襲って売上金や貴金属を奪い
その綿密な計画で警察の追っ手をかわしている強盗団……
それが今　目の前にいるのだ

「あんにゃろーども！」

「佐藤さん……ここは冷静に……」

高木は完全に「刑事の眼」になってしまっている美和子をなだめながら言った
刑事と言えど　非番の日はただの人間だ
まして相手は凶悪強盗団……
太刀打ちできる人間など　いるわけない……のが普通なのだが

「あ！　フリーザ様！」

「何ですか？」

フリーザ様なら太刀打ちできるではないか！
高木はすぐそれに気がついた

警視庁を救ったフリーザ様の力をもってすれば　強盗団など……

「また民間人の手を借りる気？」

しかし　美和子の手がメリメリと肩に食い込んでくるので
高木はその思考をストップせずにはいられなかった

「いや……その……」

「まあ確かに　私ならあんな奴ら『ちょちょいのちょい』ですが
佐藤さんの言う通り　少しは民間に頼らずに解決したらどうですか？」

フリーザ様の言うように　ただでさえ普段から探偵などに頼りまくりの警視庁
警察としてのプライドがある美和子が　これ以上その権威を失墜させるわけにはいかなかった

「とりあえず……あいつらに見つからない所に隠れて対策を練りましょう」

「はい……」

「ほっほっほっ……楽しいイベントになりそうですね！　ワクワクしてきました！」

「不謹慎よ……」

そして一時間が経過した

四人はとりあえず物置に隠れていた
そこから外の警察と連絡を取り合い　連携して犯人を……
が　美和子の考えだったのだが
本部からの指令は「大人しく隠れていろ」だった

「はぁ！？」

まるで自分達が役立たずみたいで　美和子は不満の声をもらした
「非番だから仕方ない」と高木は苦笑いを浮かべる
しかしその時
哀が二人の会話を制止した

「シッ！……何か聞こえるわ」

ウィーン　ガチャ！　ウィーン　ガチャ！

静かにしているうちに聞こえてきたのはそんな機械音だった
敵なのか？　いや　それにしては……
哀は分らなかった
が……美和子はその音に聞き覚えがあった
美和子はそのまま隠れていた物置を飛び出すと　音のする方へ走り出した
すると　そこには美和子が想像していた通りのモノがいた

「やっぱり！　ロボコップ！」

「ロボ……コップ……？」

哀はキョトンとした
目の前にいるのは頭の天辺から爪先までメタリックに輝く

ＳＦ映画に出てきそうなロボットだったのだ
なんでも……
メルレイの事件を受けて警視庁では警察力の強化が検討され
結果　どんな凶悪犯罪者にも屈することなく活動できる
人間以上の力を持った警察として　このロボコップが開発されたそうだ
まあ何はともあれ……
美和子はホッと胸を撫で下ろした

「ロボコップならあんな強盗団……」

しかし
美和子の言葉を遮って　ロボコップは言った

「すみません……追われているんで僕も一緒に隠れさせてください」

「え？」

「いや……ですから追われているので……」

「ちくしょう！　あのメタル野郎どこに行きやがった！」

「は……早く隠れましょう！」

「ちょっと！？　ロボコップ！？」

四人はロボコップによって　また物置に押し込められた

……

「一体どういうことよ？」

美和子は聞いた

警視庁の虎の子であるロボコップの醜態には納得がいかないのだ

「こういう……ことなんです」

そう言って　ロボコップは頭の部品を外した

すると……

その中に現れたのは機械仕掛けの複雑機構……ではなく

まだ二十代前半と思われる青年の顔だった

「うわぁ！　中の人だ！」

「ロボットじゃなかったの！？」

「はい……」

彼の名前は飛田健彦（ひだたけひこ）……

東部工業大学の大学院生で　ロボコップ開発チームの一員だった

最初は中の人ではなく　普通に開発に参加していた

完成したロボコップも完璧だった

警視庁で行われた運用試験では　その人知を超えた性能を発揮して見せた

驚く警視庁の幹部達を前に　チーフの羽久田（はくだ）博士も誇らしげに言った

『中に誰もいませんよ……？』

それなのになぜ　飛田が中に入っているのか？

それはロボコップが配備される三日前のことだった……

「こんなもんで次世代ゲーム機戦争に勝てるか！」

そう言ったのは開発チームの一人……
かなり泥酔しているせいで　ロボコップ開発の目的も忘れてしまっていた
しかし　飲めば飲むほど彼の工学的頭脳はさえるのか
朝になると　ロボコップは超高性能携帯ゲーム機１００台に改造されていた

「どうすんだよ　これ……配備まで時間無いぞ」

開発チームは悩んだ
せっかく天下の警視庁に抜擢されたのに……こんなことで終わってしまうのか？
悩んだ……そして彼らは結論を出した

「飛田君……君確か　前にトロピカルランドで『中の人』のバイトしてたよね？」

「え？　えぇ……」

……

「税金の無駄使いですね」

フリーザ様達はその話を聞いて　驚くやら呆れるやら……
しかし　飛田は目に涙を浮かべつつ声を荒げた

「僕には無理です！　ただの大学院生が強盗退治なんて！」

「そこにいやがったか！」

声を荒げたのがいけなかった……

数分後……

四人とロボコップは銃を突き付けられて
警察と野次馬がいるデパートの外へ連れ出された

「警察ども！　人質の命が惜しかったら大人しくしているんだな！」

リーダーの男が拡声器を使って言った
そして続けざまに　ロボコップの背中を思い切り蹴飛ばした

「それにこんな役立たずのメタル野郎が『秘密兵器』だなんて
国民の税金　もっと有効に使えねえのか？」

ロボコップはガチャンと音を立てて地面に倒れ
そして　その衝撃で顔面のパーツが取れてしまった
瞬間　野次馬達から悲鳴にも似た声が沸き起こった

「うわ！　こいつ……『中の人』がいるぞ！」

「おいおい……完全なロボット警官じゃなかったのかよ？」

「警察も何やってるんだか……」

それは侮蔑と嘲りの声だった

「あ～あ……晒し者ですね」

「警視庁の威信が……」

フリーザ様と美和子も顔を背けたくなるような光景……
警察への信用が音を立てて崩れ落ちたのを見届けると
リーダーの男はニヤリと笑った

「警察ども！　こんな子供だましは通用しないぞ！」

悪人である男の言葉……
しかし　野次馬達からは拍手まで起こり始めていた
税金泥棒……国家への怒り……
が……その大喝采を一喝する者が現れたのは突然だった

「子供だましではない！」

「誰だ！？」

その男はゆっくりと……一歩一歩力強く地面を踏み締めながら近付いてきた
群衆の間を割りながら……
何人かは　その顔に見覚えがあるようだった

「ば……バカな……！　彼は確かに引退したはずだ！
山形の実家に帰って　さくらんぼ農家をやっているはずだ！」

「帰ってきたんだ……あの伝説の『中の人』が……

通称『中の帝王』と呼ばれたあの男が……」

「……マスコット中野！　彼が帰ってきたんだ！」

それは　フリーザ様が初めてトロピカルランドに行った時に出会った彼だった……

「中野先輩！」

「飛田君……久しぶりだね」

中野は飛田に微笑みかけながら言った
が……すぐにキッと真剣な面持ちに変わり
中野は強盗団をにらみつけた

「『中の人』は子供だましじゃない……子供達に夢を与えているんだ」

「何だと？」

「私もかつて……君達と同じように『中の人』を……
そしてそれをやっている自分が酷くつまらないものであると思ったことがある
実際……鬱になった私はきぐるみを捨てて実家に帰り　さくらんぼ農家を継いだ
しかし　気付いたんだ！」

中野はそう言うとさくらんぼを取り出した

「君達……さくらんぼの中には何が入っている？」

「さくらんぼの中……？　果肉……いや種か？」

「そう……さくらんぼの皮と果肉の中には種がある
同じように……マスコットの中には『中の人』がいる
いや……いなくてはダメなんだ！」

「何の話よ……」

「ハイバラさん……きっと新手の宗教ですよ」

フリーザ様達は次第に話についていけなくなった
が……中野は話を続ける
強盗団や野次馬……警官隊も聞き入っていた

「さくらんぼの果肉は美味しい！　マスコットは人々に夢を与える！
だが種は食べられない……中の人は姿を見せれば子供達の夢を壊し
てしまう……
でも　忘れないで欲しい！
美味しい果肉がなぜできるのか？
その実（み）は元々　一つの種から始まったのだということを！
マスコット達はなぜ元気一杯に動き回れるのか？
中の人が汗まみれになって頑張っているということを！
忘れないで欲しい……」

拍手が起こった
その場が一つになったような　大喝采だった
野次馬も警察も……強盗団も……

「ボス……何だか俺……目から水が」

「うむ……人々の幸せの裏には必ず陰ながらの支えがある……
忘れがちだが　とても大切なことを学んだな……」

「まあそれはそうと……」

気付いた時……
リーダーの後ろにはフリーザ様と美和子の姿があった

「逮捕するわよ！」

「な……何だと！？」

「まったく……楽しいイベントがつまらない説教で台無しです！
このフリーザ様を輝かせるための裏方どもの事情なんて知りません
！」

美和子によってリーダーは取り押さえられ
残りのメンバー達と……ついでに飛田も
フリーザ様に光の速さでやられてしまった

「何で僕までえええええええええ！」

「うるさいですよ！　この税金泥棒！」

「あなた税金払ってないじゃない……」

続く

１３８．弱虫ロボコップ（後書き）

実家に帰ってきたは良いんですが
田舎過ぎて暇です。

ボスケテー！

ってことで１３８話でした。
もうすぐお盆です。
それなのにこんな馬鹿小説を書いているなんて
ご先祖様に顔向けできるのでしょうか？

できます。

厚顔無恥？
今流行の羞恥心のかけらもないのが私です。

１３９．魔王降臨

突然だが……「じじい」と言われたら何が思い浮かぶだろうか？
ゲートボール……入れ歯……ステテコ……おでこにあるメガネ……
「ばあさん！　飯はまだかね？」
と……色々思い浮かぶだろう
しかし　私はこれが思い浮かぶ
「大魔王の第一形態」
というのは
おそらく　私が少年時代にプレイしたドラゴンクエストシリーズ……
もっと言えば　ミルドラースやデスタムーアの影響に他ならない
「あなたのおうちやご近所のじじいは大丈夫ですか？」
いつも笑顔で言葉を交わしているあのおじいちゃまも
もしかしたら……第一形態かもしれない

第１３９話　魔王降臨

「ハイバラさん！　博士さん！　カーターさん！　フリーザ様のお帰りですよ～！」

「あと俺も用事で来たぜ～……ははっ……」

その日……家に帰ってきたフリーザ様はコナンと一緒だった
追跡メガネの充電を頼みにやって来たらしい
何もおかしなことではない……良くある日常だった
そんな中で　一つ「いつもと違うこと」を挙げるとするなら

「誰も出て来ねえな……」

……誰も二人を出迎えようとしないことだ
今日は全員家にいるはずなのに……

「ぬぅ……日頃のしつけが甘かったようですね……」

フリーザ様は眉間にしわを寄せると　仕方なく家に上がった
そしてズカズカと足を踏み鳴らしながらリビングに向かう

「そんなに死にたいのですか　あなた達は！」

と……リビングに入るなり叫んだのだが
そこには予想外の光景が広がっていた
リビングは爆弾でも投げ込まれたかのような散らかり具合だったのだ

「一体このフリーザ様の留守中に何が？」

博士の実験の失敗？　哀の凶暴化？
フリーザ様の頭の中を様々な予想が駆け巡ったが……その時だった

「ご……ご主人様ぁ～……」

瓦礫の中でうめき声を上げた人物……
カーターだった
フリーザ様はすかさず彼女に駆け寄って　覆い被さっていたソファーをどかした

「カーターさん！　一体何事ですか？」

「はい……実は……」

……それは一時間ほど前のこと

「こんにちは～！」

そう言って阿笠邸の扉を叩いたのは教祖……
以前　米花公園で怪しげな宗教を広めていたあの男だった

「……何の用？」

「そんな露骨に嫌そうな顔しないでよ……」

教祖は哀をなだめると何とか家に入れてもらった
どうやら　何か話があって来たらしい……
カーターが出したお茶を一口飲むと　教祖は真剣な面持ちで話し始めた

「哀君……君ねぇ……狙われてるよ？」

終始狙われているが……
しかし教祖が言うのだからおそらく組織の人間ではないだろう……
哀はそんなことを考えた
では誰が？

「何に狙われておるんですかな？」

隣に座っていた博士が苦笑い交じりに聞いた

「魯戸勇（ろといさむ）という男です」

教祖が説明するには……

彼が今やっている宗教「アイ様に萌える会」では哀が神様ということになっており

皆で哀の肖像を見ては萌えていたそうなのだが……

「殺すわよ？」

「萌えるくらい良いじゃない……それに君のお友達も入信してるよ？」

「へ？」

「何て言ったっけ？　円谷……光彦君だっけ？」

「……もう良いわ……話を続けてちょうだい」

そんなある日……魯戸勇と言う男が親の勧めで入信して来た

彼は根っからの荒くれ者だったが　入信するや否や完全に哀に心を奪われ

そしてその信仰心は……やがて恋に変わったのだった

「で……この間『アイ様にはモデルの女の子がいる』って口を滑らせちゃったから

たぶん血眼になって君を探してると思うんだ……

それで……惚れた腫れたの話しなら別に良いんだけど……

彼の性格上……多分力尽くで哀君をさらいに来ると思ったからさ……」

「迷惑な話ね……」

「そんなに乱暴な男なんですか？」

「乱暴？　凶暴ですよ！
元ヤンで　不良界では『知る人ぞ知る』って感じみたいですよ」

教祖は「がおー」と二人の前で熊のようなポーズをして見せた
哀と博士は一瞬怯んだが……しかし　すぐに落ち着いた面持ちに戻った

「大丈夫でしょ……宇宙の帝王がいるし」

それに尽きる……
教祖も分ってはいたのだが　一応責任を感じて忠告をしに来たのだ

「それに　私としても教団の大切なシンボルに何かあったら困るしね」

「誰がシンボルよ……」

と哀が突っ込んだその時だった
突然笑い声とバイクを吹かす音が響き渡ったのは……

「残念だったな教祖様！」

「その声は……！」

次の瞬間　窓ガラスが砕け散り　リビングに一台のバイクが乗り込

んできた

「ふぎゃ！」

カーターを跳ね飛ばしてから停止したそのバイクに乗っている男
どうやら彼が噂の「魯戸勇」らしい……

「セイント・アイ様を頂きに来たぜ！」

「セイント……アイ？」

どうやら　自分が知らない所でとんでもない呼び名を付けられていたらしい……
哀はそのことを知って眉をピクリとさせたが
しかし　そんな哀を置き去りにして　教祖と魯戸はにらみ合いを始めてしまった

「セイント・アイ様は貴様だけのものではない！　まだ分からんのか！」

「皆の嫁……だろ？　そんなもの知ったことか！」

「誰の嫁でもないわよ」

「愚かな……ならばこの一撃で目を覚ますが良い！
食らえ！　ファイナル教祖パーンチ！」

「フン……」

思い切り殴りかかった教祖だったが　相手は泣く子も黙る元ヤンキー

あえなくかわされ　そして逆に下からアッパーを突き挙げられてしまった

「うわー……うわー……うわー……」

「スト2風に倒れなくて良いわよ」

「ハッハッハッ！　お呼びじゃねえんだよ窓際族が！」

そう言うと　魯戸は素早く哀を脇に抱え上げ
そして再びバイクに跨った　そして……

「セイント・アイ様は頂いたぜ！　がっはっはっはっはっ！」

と　それだけ言い残して走りさってしまった
残された博士は大慌てだ

「大変じゃ！　助けに行かなくては！」

フリーザ様やコナンに助けを求めるが……
連絡がつかない……
仕方なく博士は大きめのリュックに発明品をありったけ詰め込み
一人魯戸を追ったのだった

……カーターはそれだけ説明すると気を失った

「あ……確かに博士さんからメールと着信が来てますね……気付きませんでした」

「俺は電池切れてる……気付かなかった」

とりあえず……そういう事態らしい……
知った以上　見て見ぬフリをするわけにもいかない
コナンとしては解毒剤もかかっている
二人は魯戸を追うことにした
と言うわけで　フリーザ様はカーターの頬をバシバシっと叩いて彼女を起した

「ってことでカーターさん……私は出かけますがね
帰ってくるまでにリビングを元通りにしておきなさ～い！
もし片付いてなかったら消し去りますからね？」

「ふえぇ～……分りましたぁ～……」

……さて　所は変わり
そんなフリーザ様達より先に　博士は魯戸の元に辿り着き
その発明品を駆使して魯戸に立ち向かっていた
が……道具の効果はいまいちだった
コナンが犯人に対して使用すると抜群の効果を発揮するのに……

「フン……道具なんざストリートファイトじゃ当たり前だ
ケンカ無敗の俺には通用しないぜ？」

目の前に立った魯戸は余裕の笑み……
道具もいよいよ尽き……
博士に「なす術」は無くなった

「ぐえ！」

問答無用に殴りつけられて床に転がった博士
その体を踏みつけて魯戸は笑う

「安心しろ！　セイント・アイ様は俺が養ってやる」

「セイント……」

哀はその呼ばれ方は物凄く嫌だった
が……魯戸はお構いなしで笑っている

「ふっふっふっ……力こそが正義！　良い時代になったものだ
強者は心置きなく欲しいものを手にいれることができる……」

「誘拐罪で……逮捕されるわよ？」

と……その時だった
哀の突っ込みと言うのは「登場」の予兆なのか？　それともスイッチなのか？
その「登場」も哀の突っ込みを契機として起こった

『ふぅ……やはりじじいの姿では勝てんか』

それは突然の博士の言葉だった
いや……博士の声ではあるが……

「いや……今のはわしじゃなくて……」

博士自身も否定しようとしたが　その体は突然の眠気に襲われて崩れ落ちた

そして同時に　どこからともなく物凄い煙が立ちこめた

『見るが良い！　このわしの真の姿を！』

「何！？」

それは確かに博士の声だった……

が……煙が晴れた時そこにいたのは博士ではなかった

「ついにこのアガサ様を本気にさせてしまったようですね……」

「阿笠」を名乗るフリーザ様だった

「フリーザ様？」

「良いですかハイバラさん？　私は今『アガサ』と名乗ったでしょう？

助けてあげますから　少しお黙りなさいな！」

哀には当然バレバレだったが

頭が悪いのか？　鲁戸は完全に「変身」だと思いこんでいた

「変身したからって……この俺が負けるかよ！」

「負けるんですよ」

その後はあっと言う間だった

果敢に挑んだ鲁戸だったが

デコピンで額を割られ　気合い一発でゴミクズのように吹き飛ばされただけ……

「他愛ないですね……」

「で？　本物の博士はどこに隠したのよ？」

「ハイバラさん……あなたは本当に洒落が通じない人ですね
向こうでコナンさんが介抱してますよ」

こうして……
鲁戸は警察に誘拐犯として突き出され
事件は一件落着した
が……

「阿笠さん！　我が『大魔王アガサ下僕の会』の神に……
いえ！　魔王様になってください！」

「勘弁してくれ！」

……博士はしばらく　知らない人達から畏れ敬われたと言う

続く

おまけ・白鳥の部屋～魔王降臨～

「どうもこんにちは……皆のキャリア組こと白鳥任三郎です
前回・前々回と手違いが続きましたが……
今日こそは！　今日こそは愛しのあの方にゲストとして来ていただ
いています！

どうぞ！　お入りください！」
「貴様……この俺に指図をする気か？」
「あ……あれれ～！？　おかしいぞ～！？」
「地獄から来た魔王……ヨハネ・クラウザー2世であるわ！」
「え？　あの？　美和子さんは？」
「貴様！　この俺がゲストでは不満だと抜かすか？　ＳＡＴＳＵＧＡＩするぞ！」
「ひっ！　すみません！」
「貴様……そんなにその美和子とか言う女が好きなのか？」
「はい……でも全然振り向いてもらえなくて……」
「馬鹿野郎！　メスは振り向かせるものじゃねえ！　犯るものだ！」
「え……えぇ！？」
「要は貴様のチ○ポが情けないのが問題なのだ！」
「そ……そう言えば……小さいかも……」
「分ったようだな……」
「はい……手術を受けます！」
「よし！　手術の成功祈願に貴様にはこの曲をくれてやる……デスペニス！」
「うおおおおおお！　クラウザーさあああああああああん！」

……

「うぅ……ごめん白鳥さん……ああ言わないと社長が怒るんだ
でも僕は白鳥さんに下品なことを吹き込んで彼の恋を邪魔した……
最低だ……僕は最低だ……」

１３９．魔王降臨（後書き）

夏は忙しかったので更新がほとんどできませんでしたが……
フリーザ様と灰原さんの……
最新話が……

キタ――――――（ ゜∀ ゜）――――――！！！！！

皆さんが待ち望んでいたかは分りませんが……

待ち望んでいたと言えば……
私は先日ようやっと見たかった映画が見れました。
『デトロイト・メタル・シティ』です。
「あぁ、やっぱり……」って言わないでください。
ってことで
それを記念して我がフリハイもクラウザーさんにレイプして頂こうと思い
今回のおまけに降臨して頂いた次第です。

これは年齢制限した方が良かったかもしれない……
伏字してあるけど……

そんな感じで
ややビビり気味に投稿するおっとりなのでした。

１４０．おつかい撮影禁止

「どうしたのアシュリー？　さっきからそわそわして……」

「ステフ……何だかさっきから誰かの視線を感じるの……ストーカーかしら？」

「考えすぎよ……」

「そうかしら？」

「そうよ！　ひょっとしたらストーカーじゃなくてテレビカメラかもしれないわよ？」

「テレビカメラ？」

「うん……前チャックから聞いた日本の米花町で起きた話なんだけどね……」

第１４０話　おつかい撮影禁止

光彦の家にフリーザ様がいる……
なんとも不思議な光景だが　それは確かに現実のものだった
招待したのは光彦の姉　朝美……
道を歩いていたフリーザ様を
そこに偶然現れた朝美が「見せたいものがある」と言って家に招いたのだ

「実はね……この間　私とみっちゃんがテレビに出たのよ～！」

嬉しそうにケラケラ笑いながら朝美はビデオテープをデッキに押し込んだ
どうやら見せたいものとはそれらしい
正直どうでも良いと思ったフリーザ様だったが
目の前のケーキと紅茶を平らげるまでは黙っておくことにした

『今回おつかいに挑戦してくれるのは円谷光彦君！
お姉さんの言う通りに　ちゃんとおつかいできるかな？』

朝美が再生ボタンを押すと　ナレーションが聞こえてきた
「ＴＨＥ　ＯＴＳＵＫＡＩ」というタイトルのその番組は
子供がおつかいをする様を陰から盗撮するという趣旨の番組だった

「しかし　光彦さんなら訳のないことでしょう……
彼はコナンさん　ハイバラさんに続いて使える部下ですからね」

「フン」と鼻で笑ったフリーザ様
しかし　画面に映る光彦は困った顔をしていた
トラブルが発生したらしい……
もちろん　番組スタッフが事前に仕組んだ罠だったのだが

「なかなか粋なことをしますね　この番組は……ほっほっほっ」

『完全に途方に暮れてしまった光彦君……さあどうする！？
……お姉さんの朝美さんも　心配そうに家から出てきました』

「心配だったのですか？」

「別に……『そうした方がテレビ映りが良いかな～？』って思ったのよ」

朝美はそう言いながらテレビに映った自分を見ている
その表情からすると　どうやら自分の映り具合に満足しているらしい

『さあ光彦君！　涙を堪えて……お姉さんの待ってる家まではあと１００メートルだ！』

「ほっほっほっ！　泣きそうになってますよ！」

『弟は大丈夫だ！　弟は大丈夫だ！　弟は大丈夫だ！』

テレビ画面の中で抱き合う姉弟……
そこでビデオは終わりだった

「どうだった？　私の名演技？」

朝美はフリーザ様に感想を求めてきた
フリーザ様は適当に「良かったですよ」などと返事をする……
が　頭では別のことを考えていた

……一週間後
なぜか哀はフリーザ様におつかいを頼まれていた
普段　博士からおつかいを頼まれることはあってもフリーザ様からというのは珍しかったので
哀は少し小首を傾げたが……
しかし内容は簡単で「バイオレンスケーキへ行ってショートケーキ

を買ってこい」というものだったので
別に必要以上に怪しむこともなく　哀は出発した

「フフン……行った行った……」

哀を見送ると　フリーザ様はニヤリと笑った
そしてその脇からは隠れていたカメラマンが出てくる
「ＴＨＥ　ＯＴＳＵＫＡＩ」の撮影スタッフだ
フリーザ様が呼んだのだ

「くっくっく……ハイバラさんの泣きっ面をテレビで全国に晒して
差し上げますよ」

「では私はこのまま哀ちゃんを追いかけますので」

「えぇ　いってらっしゃいな」

こうして　哀の「ＴＨＥ　ＯＴＳＵＫＡＩ」は始まった
カメラマンはカメラをカバンの中に隠し　微妙な距離を保って哀の
後をついていく
バレないように……しかし……

「あの人……なんでさっきから付いてくるのかしら?」

普通の子供ならともかく
尾行に敏感な哀には完全にバレていた
それに良く見ると　カメラのようなものも……

『この間　私とみっちゃんテレビに出たのよ～!』

哀はそんな朝美の言葉を思い出した
朝美は哀にも自慢していたのだ

「まさか……フリーザ様……」

最悪だった
哀がテレビに映れば　組織に彼女の正体がバレるかもしれないのだ
どうしたものか……
哀が考えながら歩いていると　その時　誰かの脚にぶつかってしまった

「痛ぇなコラァ！！」

「あら……桜塚さんじゃないの」

久しぶりの桜塚だった……
と　その時
哀は良いことを思いついた

「あそこにいる男……あなたのファッションセンスを笑ってたわよ？」

「何だとぉ！？　てめぇコラァ！！」

「ひ……ひいいぃぃぃ！」

カメラマンに桜塚をけしかけたのだ
しめしめ……哀はクスッと笑うと逃げ出すように走り出した

「ぶへぇあぁッ！」

「何だこのヤクザ……弱ぇな……」

しかし　桜塚を倒したカメラマンもすぐにその後を追いかけた

「ったく……役に立たないヤー公ね」

哀は呆れつつまた考え始めた
どうしたものか……

「あれ？　哀ちゃん？」

そこへ　今度はトロッタがやって来た
トロッタをけしかけても……効果はないだろう……
そんなことを考えていると　トロッタは不思議そうに哀の顔を覗き
こんできた

「悩みでもあるの？　相談に乗ろうか？」

そう言えば　この男は占い師（みたいな何か……）だったと思い出し
哀はことの事情をトロッタに説明した
するとトロッタはしばらく考えてから口を開いた

「出演拒否すれば？」

「フリーザ様が許さないわよ……」

「お面でも被れば？」

「もう顔撮られちゃってるもの……今更意味ないわよ」

「そうだ！　全裸になって卑猥な言葉を叫んびまくれば？
放送できないから向こうも諦めると思うよ」

「代償が大きすぎるわね……」

哀は突っ込みを入れつつトロッタを小突いた
トロッタに普通の相談など期待していないのだから……

「グレート占いパワーを使いなさいよ」

「あ……そっか……」

「てへへ」と言って頭を掻くと　トロッタはいつものアレを始めた
その様は……一緒にいた哀に「全裸で卑猥な言葉を叫ぶ」と同等の
恥ずかしさを感じさせた

……数分後
哀はトロッタと会った場所から１００メートルほど離れた場所を黙々と歩いていた

『ここから南へ真っ直ぐ歩いていった時　突然角から飛び出してくる知り合い……
その人に事情を全て話せば解決するよ』

それがトロッタの占い（らしい何か……）の結果だった
知り合い……全ての事情を話しても大丈夫な人間だと良いが……
そう考えながら哀が歩いていると　その人物はついに現れた

「ん？　あぁ！　志保……」

ウォッカだった……
正直「こいつかよ……」と思ったが
しかしトロッタの占い通りにするには目の前のサングラスに相談するしかない
哀は観念してウォッカに事情を説明した

「そうか……ジンの兄貴は『ＴＨＥ　ＯＴＳＵＫＡＩ』なんて見ないと思うが……
しかし　確かにテレビに映るのはやべぇな……
よし！　付いて来い志保！　裏道使って撒くぞ」

「それが良いわね……」

ウォッカと哀はそう言うと「せーの」で一気に裏路地に走りこんださすがにビックリしたカメラマンも追いかけるが　裏路地は迷路のようで
ついに哀の姿を見失ってしまった

「くそ……これじゃあ番組が……」

この後　色々な罠が哀を待ちうけていたのだが
これで全てがパーになってしまった
哀を泣かせようとしたフリーザ様の思惑だったが
実際に泣きそうになっているのはテレビ局のカメラマンだった

「よぅ……どうしたんだ若いの？」

そこに一人の男がやって来た

捻りハチマキをした初老の男だった

「あ……毒島さん！」

「なんでぇ……島田じゃねえか」

その男の名は毒島哲蔵……

一ヶ月前　日売テレビを定年退職したベテランカメラマンだった

思わぬ所で再開した島田は　事の次第を毒島に説明した

「ったくしょうがねえ奴だな……まだまだ未熟ってことだ

カメラを貸しな！　俺がその『哀ちゃん』を撮ってきてやるぜぃ」

「え？　でも……もう見失って……」

「良いか島田？　カメラマンってのはな……撮りたい対象のその時じゃなく

次の次の次ぐらいの動きを予想しながら動かなきゃだめだ

見失った？　この毒島哲蔵の勘はまだ鈍っちゃいねぇよ！」

毒島はそう言って裏路地を出ると表の道を走り出した

哀は裏路地に入って行ったのに……

訳も分らず　島田もその後をついていくと

しかし　突然少し先の角からウォッカと哀が出てきた

「おぅコラてめぇら！　撮影させやがれぃ！」

「げ！　先回りされた！」

「逃げるわよ！」

「待ちやがれぃ！　カメラ目線を寄こせ！」

「ぶ……毒島さん！　隠れながら撮ってください！」

「うるせえぞ島田！　カメラマンは堂々としてなきゃだめだ！」

「そうじゃなくて……」

もう「ＴＨＥ　ＯＴＳＵＫＡＩ」でもなんでもない
それは哀と毒島の壮絶な追いかけっこだった
しかし　この毒島と言う男　体力は相当なもので
子供の姿の哀はおろか　ウォッカさえへたばってしまうぐらいの追跡者だった

「さあ！　大人しく撮られやがれぃ！」

「毒島さんももう少し大人しくしてください！」

「くそ……なんてジジイだ！」

しかし　ウォッカもただ逃げ回っているだけではなかった
「その場所」に向かっていたのだ……

「よし！　志保！　乗るんだ！」

突然車に乗り込み　ウォッカが叫んだ
それはウォッカが停めていた車だった
哀はすかさず乗り込むとドアを閉めた
それと同時にウォッカは一気にアクセルを踏みしめ

タイヤのキュキュキュッという音と共に車は発進した

「野郎！　この毒島哲蔵を舐めるんじゃねぇ！」

島田は目を疑った
それはまるでアクション映画のワンシーン……
毒島はウォッカの車のボンネットに飛び乗ったのだ

「毒島さん！」

叫んだ時にはもう遅かった……

「撮らせろぉい！」

「ジャッキー・チェンかこの野郎！」

「タフなおじいちゃんね……」

毒島は片手にカメラを持ち
もう片手で車にしっかりと掴まっていた

「そろそろ観念しやがれぃ！　この毒島のカメラからは誰も逃れられねえんだよ！」

フロントガラス越しに哀を撮影しながら毒島は言った

「ば……馬鹿野郎！　前が見えねえだろうが！　どきやがれ！」

「うるせえよ！　この毒島哲蔵は絶対退かねえのさ！」

「いや……そうじゃなくてねおじいちゃん……前がね……」

哀の忠告も虚しく……

毒島をボンネットに乗せたウォッカの車は電信柱に突っ込んだ……

……

「で……ハイバラさんの泣きっ面を収めたテープもお釈迦ですか……」

ボロボロになって哀が家に帰る

フリーザ様はそう言ってがっかりした

結局　哀は見事にテレビの撮影を振り切ったのだが

毒島はそのまま病院行き

ウォッカは道路交通法違反で警察に連れて行かれてしまった

「全部あなたのせいよ……」

「ほっほっほっ！　まあボロボロになったハイバラさんを見れたことだし良しとしますか！」

「笑い事じゃないわよ！」

……

「で……サツに行っていたわけか……」

一方　ウォッカは警察から帰って来るとジンの前にいた

哀のことは隠しながら　事故の事情と　何とか罰金ですんだことを説明したのだ

「サツの世話になるとはな……そこまで馬鹿とは思わなかったぞウォッカ？」

「すいやせん……」

その後……ウォッカは3時間ほどジンにしぼられ
その間何度か死を覚悟したそうな……

続く

おまけ：ステファニーとアシュリーと……

「ね？　だからあなたの感じてる視線もきっとテレビカメラよ」

「そう？……うん……そうよね！」

「そうそう！」

「う……うわあああああ！」

「え！？　ティム！？　そんな所で何してるの？　カメラなんか持って……」

「え？　あ……違うんだ！」

「まさかアシュリーの感じてた視線って……ティム？」

「……ステフ？　これって何の番組の撮影？」

「……『初めての盗撮』……かしら？」

１４０．おつかい撮影禁止（後書き）

あの手の番組って最近やってるんですかね？
最近あまりテレビを見なくなったので分りません。
私の初めてのおつかいはいつでしたか？
もうかなり昔のことなので忘れてしまいました。
しかし、かなり簡単だったのは覚えています。
何しろ私の実家は酷く田舎で
近所のスーパーまでの道中にあるものと言えば
田んぼと畑ばかりでしたから……

道に迷う方が難しいんですよね。

まあ、それはそれとして……
フリーザ様と灰原さんももう１４０話を超えましたね。
ご愛読していただいている皆様には本当に感謝感謝です。
とりあえず、当面は２００話を目標にがんばりたいですね。
ＤＡＩＧＯ風に言うと

がんばウィッシュ！

……
あんな３０歳にはなりたくないですね。
まあＤＡＩＧＯは好きですけど。

１４１．道頓堀魔人の恐怖

阪神タイガースが優勝した時の風物詩として
道頓堀に飛び込むファンと言うのがある
大阪らしい元気な風物詩なのだが……
しかし　その度に問題視されているのも事実だ
道頓堀ははっきり言って汚い
汚染された水の中に飛び込む行為は決して褒められたことではない
そして何より　酔った勢いで飛び込んだりすると
当然溺れたりすることもあるわけで……

第１４１話　道頓堀魔人の恐怖

「おう！　よう来たな！」

平次は駅の改札口で　自分達の方に歩いてくる三人組に向かってそう言った
その隣では和葉が笑顔で手を振っている
しかし　その二人にしては歓迎の仕方が大人しかった
それもそのはず……
やって来た三人の中にコナンや蘭は含まれていない
その三人とは　フリーザ様と哀……そして見知らぬメイドが一人だったのだから

「そう言えばカーターさんは二人に会うの初めてでしたね……」

「なんや……また訳の分からんの増えたんかい」

それはともかく
今回　フリーザ様達は大阪観光にやって来たのだ
と言うのも……カーターが買い物中立ち寄った福引で
見事「ユニヴァーサル・スタジオ・ジャパン」のチケットを手に入れたので
どうせなら行ったことのない大阪観光もしようと言うことになったのだ
しかし　三人では大阪の勝手が分からないので　平次と和葉に案内を頼んだのだ

「ま……とりあえず飯にしよか」

「せやな」

「ほっほっほっ……大阪の食事は大変美味であると聞いております……
ですが　もし不味かったら４７都道府県のうち一つが日本地図から消えることになりますよ」

「安心しいや！　大阪の飯は日本一や！」

と言うわけで
五人はまず平次の知り合いが営む定食屋に向かうことにした
そこは駅から歩いて１０分ほどの所にある店……
普通に考えれば大した距離ではないが
しかし　１０分もあれば彼らの性質上……

「おい聞いたか？　道頓堀でまた仏さん上がったらしいで……」

「ホンマか？　また道頓堀魔人が出たんやな」
と……事件が起こっても不思議ではない
「どうとんぼりまじん？　何ですかそれは？」
立ち聞きした噂話の中に登場したその名前にフリーザ様は反応した
その質問を受けると　前を歩いていた平次も足を止めて振り返った
「道頓堀魔人か？　あぁ……最近よう出る殺人鬼のこっちゃ」
道頓堀魔人……
それはここ最近大阪の特に道頓堀周辺に出没する殺人鬼だった
その手口はいつも決まっていて
被害者を酒でベロンベロンに酔わせた後
道頓堀に突き落とすと言うものだ
「ただ酔っ払って落ちただけじゃないの？」
哀は思い当たる可能性を口にしてみた
しかし　平次は「いやいや」と言ってそれを否定する
「それがな……見つかった被害者の遺体に残されてんねん
『罰』って大きくプリントされた紙がな……」
「……それは確かに人為的としか思えないわね」
「それで？　被害者はどれぐらいいるんですか？」
「今日も出たみたいやしな……確かこれで１３人目や」

「ひぃふぅ」と指折り数えながら平次は言った
すると　途端にフリーザ様は目を輝かせた

「１３人？　ほぅ……そこらの地球人とは訳が違うようですね」

フリーザ様はその時考えた
警察に捕まらずに１３人もの人間を道頓堀に突き落とせる人間が部下になれば
いつでも好きなときに哀を堤無津川に放り込めると……

「よろしい……その道頓堀魔人さんとやらを部下にしましょう」

「いきなり何言うてんねん!?」

「そうですよご主人様ぁ！　そんなおっかない人が同僚になったらカーターは……」

「テロリストの親玉が何言ってるのよ……」

皆でフリーザ様を説得した……
が　フリーザ様は聞き入れず　結局みんなで道頓堀に向かうことになった

五人が現場に到着すると
すでにそこにはたくさんの警察と野次馬が集まっていた
とりあえず　前に行かなければ話が見えない……
人の壁を掻き分けて五人は進んだ

「あれ？　平ちゃんやないか……和葉ちゃんも」

「おう！　大滝はん！　また出たそうやな……」

ちょうどやって来た大滝と話を始めた平次……

しかし　そこへフリーザ様が割って入った

「それで……道頓堀魔人さんはどこですか？　出しなさ～い！」

「は？……平ちゃん　誰やこの人……？」

「東京から遊びに来た知り合いや……道頓堀魔人に会いたいそうやで」

「会ってどないすんねん？」

「部下にするんですよ……良いから出しなさ～い！」

意味が分らなかった……

正直　大滝は目の前にいるビジュアル系を知り合いに持つ平次が何か変なことに巻き込まれているのではないかと心配になってしまったが……それはそれとして

「なんなら一緒に来るかい？　これから容疑者の女性に会いに行くんやけど？」

実は大滝もそろそろ平次の所に行こうと思っていたので

「ちょうど良い」とばかりに提案した

「えぇんか？」

「あぁ……その代わりちょっと知恵貸してや」

大滝が言うには……
容疑者の女性は若浦公子（わかうらきみこ）と言う名のホステスで
実は割りと早くから特定されていたらしい

「なんでその人が容疑者なんや？」

「どの被害者も最後に一緒におったのが彼女なんや
それは証言も取れとるし　この間尾行した時もそうやったから確実や」

「尾行していながら被害者を出してしまったんですか？　無能ですね……」

「痛いとこ突くお人やな……」

フリーザ様の言葉に　大滝は苦笑いを返した
いや……実際　大滝はちゃんと尾行していた
しかし　ほんの一瞬……本当に一瞬目を離した隙に
若浦と一緒にいたはずの被害者がいなくなってしまったのだ

「気付いた時にはもう被害者見えななってしもうて……それで翌朝な……」

被害者はおそらく　大滝が目を放した一瞬の間に道頓堀に突き落とされたのだ
しかし　容疑者はか弱い女性……

いくら相手が酔っているとはいえ　大の男をその一瞬で突き落とすには無理があった

「なるほどな……容疑者特定できたはええけど　決定的な犯行を裏付けられてへん言うことやな?」

「そういうこっちゃ」

「あなたが一瞬たりとも目を放さなければ……」

「ホンマに痛いとこ突くお人や……着いたで」

そうこうしているうちに　大滝とフリーザ様達はそこに到着した
容疑者の若浦が務めているスナックだ
中に入るとその女性は目を細めて大滝達を出迎えた

「また来はったんですね警部はん……
何度も言う通り私を犯人や言うならそれなりの証拠を持ってきてくれまへんか?」

麦茶の入ったグラスを差し出しつつ若浦はイヤミったらしく笑った
これが刑事ドラマだったら「あ……絶対こいつが犯人だ」と思わせる態度だが
それだけでは逮捕できないのが法治国家というものだ
大滝はぐっとこらえつつ口を開いた

「しかしなあ若浦はん……あんたが被害者と最後の最後までおったことは間違いないんや
わしかてこの間あんたを尾行させてもらったさかいそれは断言できる……」

「で？　私が被害者を突き落としたところを見たんですの？」

「それは……」

「目を放してたんですよね」

「フリーザはん……ホンマに容赦を知らんお人やで……」

大滝は「勘弁してくれ」とフリーザ様に視線を送りつつ言った
すると　それに続いて若浦も口を開く……

「そう言えば……その人ら誰ですの？　さっきから気になってはいたんですけど」

若浦はフリーザ様や平次達を見た
高校生くらいの男女……女の子……メイド……変な奴……
刑事には見えなかった
怪訝そうな顔をする若浦……大滝は忘れていたと口を開いた

「知りまへんか？　高校生探偵の服部平次君ですよ
……恥ずかしい話ですが知恵借りよ思ってついて来てもらったんですわ」

「それにしても……付録が多すぎとちゃいますの？」

「あぁ……この人らはたまたま平次君と一緒にいた人らで……」

「宇宙の帝王フリーザ様です！　あなたが道頓堀魔人さんなのでしょう？

素直に白状してこのフリーザ様の部下になりなさ～い！」

「何ですの……この人？」

若浦は余計に分らなくなってしまった……

が　そんなことはどうでも良かった

「ま……とにかく証拠がないんなら帰ってもらえます？
こっちもお店の準備やら色々ありますさかいに……」

若浦は冷ややかな態度で手をヒラヒラさせると
そのまま席を立って店の奥に行ってしまった

続く

１４１．道頓堀魔人の恐怖（後書き）

次回に続きます。
最近原作では頻繁に登場するようになった平次と和葉……。
しかしフリハイではかなり久々の登場です。
ってか二回目ですか？
「変なオリキャラ出す間にもっと原作キャラ出せやぁ！」
と、思っていた皆様……
大変、おまんたせいたしました。

平次の、登場です。

ってわけで、しばらくフリーザ様を大阪に滞在させてもう少し出番を上げようかなと思っています。

１４２．タイガースとサンダース

前回のあらすじ……
大阪に来たフリーザ様は道頓堀魔人に会いたかった
若浦公子（わかうらきみこ）と言う女性がそうかと思われたのだが証拠がなく
どうしようもない……
それもこれも全部社会のせいだ！

第１４２話　タイガースとサンダース

大滝はすぐにでも若浦の手に手錠をかけたかった
が……それができず　言われた通りに引き上げるしかできない自分
が悔しかった

「この悔しさ晴らすためにも平ちゃんの力借りたいんや！　頼むわ
！」

大滝は店を出ると改めて平次に頭を下げた
それを見て「警察がこんな他力本願で良いのか？」と思いつつ
哀は平次に聞いた

「それで？　何か分ったことはないの？」

「今んとこはあんまやな……ただあの人が犯人やとして
随分捕まらん自信があるん言うんは分ったけどな」

大滝が目を離したのは一瞬のこと……

その間に大の大人を女の細腕で突き落とすのは実質不可能ではないか？
その謎を解かない限り　若浦を犯人と言うことはできないだろう……

「弱そうに見えて実はめっちゃ強いんとちゃうの？　ほら！　蘭ちゃんみたいに！」

和葉は手をポンと叩いて言った
しかし大滝は首を横に振る

「彼女の周辺は調べたけど　特に格闘技や武術やってる言う話は出てこうへんかったわ」

「先ほどスカウターで計測してみましたが　戦闘力もさほどでしたねまあ力を隠しているということはありえますが……あの地球人のように……」

「クリリンのことですね　ご主人様！」

「誰よ……」

強い女性説は却下……
和葉はそれを聞くとまた考え始めた
一瞬で被害者を道頓堀に落とすには……？

「こういうのはどう？
さっきの若浦さんが被害者と一緒に歩いてる時に
『あんたを突き落とすにはそうだねぇ……３０パーセントってとこかな？』
って言うて突然筋肉モリモリに……」

「なるほど　ありえますね……」

「ありえへんわ！　真面目に考えやボケ！」

六人はまた考え始めた
しかし　どんなトリックを使えばそんなことができるのか……
まったく分らなかった
そんな状況に　哀は思わず溜息をついた

「被害者自らが進んで飛び込まない限り無理な気がするわ……」

諦め混じりな哀の言葉……
しかし　平次はそれに食いついた

「いや……逆に言えば自ら飛び込ませることができたら犯行は可能やで……」

平次が帽子を被り直したのはそのすぐ後のことだった……

……その夜
若浦は店にやって来た客と一緒に道頓堀の側を歩いていた
客はベロンベロンに酔っている……
一人では心配ということで若浦が付き添っているのだ
しかし　もちろんそれはただの名目だ
横で千鳥足になっている男を見て　若浦はニヤリと笑った

「お客さん……？」

「うひひ……なんでござーしゅかぁ？」

「阪神が優勝したらしいですよ？」

「えぇ！？　ホンマですか！？　やった～！」

「えぇえぇ　ホンマですよ……道頓堀に飛び込んだらどうです？」

「うひひ……よ～し飛び込んじゃうぞ～」

客の男はそう言って道頓堀に飛び込もうと柵に手をかけたが……その後ろから腕が伸びてきてそれを止める

「ほっほっほっ……そこまでですよ」

フリーザ様だった
まさかの登場に若浦は一瞬ギョッとしたがしかし　すぐに平静を装って口を開いた

「あら……昼間の人やないですの……何かご用ですか？」

「あなたの犯行を暴きに来たんですよ」

「何のことかしら……分からへんわ」

「とぼけても無駄ですよ……もう全てお見通しなんですよ」

フリーザ様がそう言うと　物陰に隠れていた平次と大滝も出てきた

「あんたは大阪人……もっと言えば阪神ファンなら誰でも乗ってま

うような言葉を使い
被害者を自ら道頓堀に飛び込ませてたんや……
後で目撃証言が出ても『被害者が自分で飛び込んだ』って言い訳できるし
飛び込まんでも相手はベロンベロンやから細かいこと覚えてへんやろうしな……
せやけど……今回は証拠もばっちりやで」

「あんたが客や思てたんはうちの部下や……
こいつには酔うたフリしとくように指示を出しといたさかい
あんたの言うたことも全部覚えとる……せやろ？」

「へぇ？　何ですかぁ大滝警部ぅ？　うへへへへ……おえっ！
ボクちゃんもう分りまへ～ん！　ウヒヒヒヒヒヒヒ……ううぇっ！」

「おま……ホンマに酔ってどないすんねん！？」

「大丈夫や大滝はん……
こんなこともあろうかとレコーダーも持たせといたから　そっちに記録されとるはずや」

「なんや平ちゃん……それならそうと先に言うといてくれや」

ともかく……
若浦に言い逃れの余地はなかった
それを悟ったのか若浦はうつむき……そして笑い出した

「ふふふ……さっすが！　高校生探偵の平次君やわ～！
まさか全部バレてまうなんて……でもあんたの推理一つ間違ってるで？」

「なんやと?」

「さっき言うたやろ?　『大阪人……もっと言えば阪神ファン』て……

それは間違いやで……うちも大阪人やけどタイガースは大嫌いや!

いや……タイガースファンが大嫌いや」

「どういうこっちゃ?」

それから　若浦は遠くを見るような目で話し始めた……

……それは１９８５年のことだった

若浦は当時まだ４才の女の子だった

特別に秀でたところもない普通の女の子……

ただ一つ変わったことを上げるとすれば

「ママ!　ケンタ行こ!　ケンタ!」

ケンタッキーフライドチキンが大好きなところだった

いや……ケンタッキーが好きと言うより……

カーネル・サンダースが大好きだった

祖父がすでに他界していた彼女は

赤ん坊の頃に出会ったサンダース像を祖父と思い込んでしまったのだ

「おじいちゃんこんにちわ!」

「公子それおじいちゃんやない!　サンダースや!」

母親がなんと言おうと……
サンダース像は彼女にとっておじいちゃんだった
大好きなおじいちゃんの所で食べるフライドチキンは本当においしかった……
あの日までは……
そう……あの日　阪神タイガースは見事優勝を果たした
道頓堀周辺は大盛り上がり……幼い彼女と両親もそのお祭騒ぎを見に来ていた
しかし　その時だった

「あ……おじいちゃんが！」

「そーれ！　胴上げや！」

ふざけた阪神ファンがサンダース像を胴上げ……
そして道頓堀に放り込んでしまったのだ！

「おじいちゃん！　おじいちゃん！　ママ！　おじいちゃんが！」

「あかん公子！　危ないからそっち行ったらあかん！」

……

「目の前で肉親を失ったうちの哀しみ！　あんたらに分るか？」

「いや……肉親て……ケンタに行けば今でもおるやん」

「微妙に違うんや！　あんなのおじいちゃんやない！　サンダースや！」

「さいですか……」

平次にはもうついて行けなかったが……

若浦は叫び続けた

「せや！　うちのたった一人のおじいちゃんを奪ったタイガースファンに罰与えたったんや！

おじいちゃんと同じ苦しみを味わわせたったんや！」

たまに……

物に対してすごく愛情を持つ人はいるが

若浦はその極端な例だった

一般人とはもう感覚がズレにズレまくっているのだ

大滝はそれを悟ると　若浦との対話を諦めた

「まあ……道頓堀に物投げ込んだらあかんけど

人殺すんはもっとあかんで……」

「『物』やない！　おじいちゃんや言うとるやろ！」

「分った分った……後は署でな……」

こうして……

若浦は警察に連行され　大阪を騒がせた一連の事件は無事解決となった

夜の闇の中に遠ざかっていくパトカーの赤いランプを見送りながら

しかし　哀はふと思い出した

「そう言えば……部下にするんじゃなかったの？」

「そうしようと思ったんですが期待していたのと違ったんで……
あ～あ……ハイバラさんを堤無津川に放り込む計画もパーですね」

「私が言うのも何だけど……自分でやった方が早いんじゃない？」

フリーザ様はそれを聞くと
地球での生活により丸くなった自分に思わず溜息をついてしまった

「この宇宙の帝王とあろう者が……
と言うわけでさっそく　ハイバラさんを道頓堀に放り込むことにしましょう」

「え？　ちょっと……きっ……きゃあああああああああ！」

続く

おまけ：灰原動物記

「エフビーアイ」

私の名前は灰原哀……
生物学者だ
今回は久しぶりに日本に戻ってきた
と言うのも　少し珍しい現象が起こっていると聞いたからだ
私はすぐ　その情報を元に米花町郊外の草原に出てみた

「本当に……これはどういうことかしら？」

そこにはエフビーアイの群れがいた
「エフビーアイ」は数十頭の個体が群れをなし　集団で生活を営む
霊長類の動物で
情報を収集し扱う能力があり　非常に高い知能を有する生物だ
本来は北アメリカにしか生息しないはずなのだが
今回　日本で初めてその群れが確認されたのだ
一体どういう訳で？
私はさっそく観察を始めた……

しかし　観察するといっても　エフビーアイは数十頭もいる
そこで私は　何頭かに絞って観察することにした
まずは群れのボス……「ジェームズ」と名付けることにする……
それからいつも顔色が悪いが群れの中で力を発揮している「アカイ」
さらに　アカイにつき従っている人相の悪いオス「キャメル」
そしてメスの「ジョディー」
この四頭を観察することにする

「あ……あれは……」

観察十日目……エフビーアイの群れに動きが出た
メスのジョディーが連れてきた日本在来種の小型猿エドガワコナンが
群れに加わって行動するようになったのだ
エフビーアイが他の霊長類や猿と行動を共にすることは良くあること
だが
エドガワコナンとエフビーアイは何やらそれ以上の関係にあるように
に見える……
ひょっとしたら　エフビーアイが日本にやって来た理由が分るかも
しれない
私はさらに　エドガワコナンの観察も始めることにした……

観察日誌はここで終わっている……

１４２．タイガースとサンダース（後書き）

最初に断わっておきますが、この話は別に阪神ファンをどうこう言う意図があって書いたわけではありません。
ってことで１４２話でした。

今年はどうなるんでしょうね……。
阪神なのか？　それとも巨人なのか？
私はアンチ巨人なので阪神だとありがたいです。
まあ、言ってしまえば野球自体あまり興味がないんですが。
それを言ったらお終いなんで……あ、今言っちゃったか。

野球最高（笑）

１４３．服部静華の因縁

その日……
ついにその女は服部邸にやって来た
もう二十年近くこの日を待ちわびていた……
その日々を思い出すと女は一瞬ぶるりと震え
同時に湧きあがる興奮と歓喜に口元を歪ませた
そして……
刃はついに　服部邸に突き立てられた

第１４３話　服部静華の因縁

「トロピカル・ランドも良かったですが……
ＵＳＪもさすがと言ったところでしょうか？」

ＵＳＪからの帰り道……フリーザ様は満足気に言った
初日に色々あったが　それでもフリーザ様は当初の目的通り
ＵＳＪでの一日を有意義に過ごすことができた

「大阪……ここまで出来るとは驚きです……ほっほっほっ」

「なっはっはっ！　どや！　大阪の凄さが分ったやろ！」

フリーザ様の満足ぶりを見て　平次も鼻高らかに笑った
宇宙の帝王に大阪をアピールできたので　彼としても良い一日となったのだ
しかし　まだこれで終わりではない

平次の大阪アピールには最後の「とっておき」があるのだ

「ってなわけで！　夕飯はうちで『てっちり』食っていくとええで！
そうすれば　もう東京なんか屁みたいに感じるようになるで！」

「すばらしい！　何と言うもてなしの心！　こう言うのを私は待っていたんですよ！」

「悪かったわね……ろくにもてなしもせずに……」

ともかく……夕食は平次の家で「てっちり」を食べることとなった
楽しい時間……
しかし　それは家の前までやって来ると終わってしまった

「な……なんやこれ！？」

平次は目を丸くして大声を上げた
それもそうだろう……
自分の家の玄関に大穴が開いていたのだから

「何があったんや……」

「そないなことより平次……おばちゃん家におるはずやろ？　大丈夫なん？」

「せや……！　おかん！　おかん！」

平次は叫びながら家の中に入って行った
その後を和葉と　そしてフリーザ様達も続く……

「何かしら……これ……」

平次は母親の静華が心配なのかせっせと家の奥に行ってしまったが
哀はそれを見逃さなかった
玄関に　何やら大きな箱が置いてある……

「石田散薬……？　薬屋さんが置いて行ったんやろか？」

「にしても……随分古風な薬屋ね……」

和葉と哀はその時代錯誤な薬箱を前に首を傾げた
しかし　カーターはその意味に気付いた

「いや！　これは薬屋さんが置いて行ったものじゃありません！」

「心当たりがあるんですかカーターさん？」

「これはかつて新撰組が変装用に用いた物……
つまり　『やつ』がここに来たと言うことですぅ！」

「どこ情報よそれ……」

「昔読んだ漫画に書いてありました」

「あなた……本当にテロリストだったの？」

哀はカーターの……カーター将軍の経歴に疑問を抱かざるを得なかったが
しかし　事態はそれどころではなかった

「おかん！　おかん！」

「平次の声や！　おばちゃんに何かあったんや！」

薬箱の件は置いておくことにして
四人は平次の声がした方に駆け出した
すると……
そこには平次の腕に抱えられ　ぐったりとした静華の姿があった

「おばちゃん！」

「何と！　てっちり職人がやられてしまったと言うのですか！？」

その場にいた全員が驚愕した
特に平次……
いつもは冷静な彼が　もはや正気を失いかけていた

「おかん！　おかあああああああああああん！」

「……ん？　なんや平次か……どないしたんや大声出して」

「……へ？」

その言葉を聞くと　一転して平次の目が点になった
しかし　呆然とする彼を尻目に　静華は体を起すとあくびをした

「よう寝たわ……今何時や？」

「六時半ですよ」

言葉も出ない平次達に代わってフリーザ様が答えた

「寝すぎてしもたわ……すぐ夕飯の準備しますさかい　少し待っといてくれます？」

「えぇ良いですよ……楽しみに待っていますよ……ほっほっほっ」

「待てや！」

そこまで会話が進んだところでようやく平次が口を開いた
あまりに訳が分らなさ過ぎて　色々聞きたいことはあったが
平次は必死で頭を整理すると　とりあえず一つずつ質問を始めた

「おのれは何時から寝とったんや？」

「さて……三時ぐらいやったかな……？」

「三時……それまでに客来うへんかったか？」

「誰も来(け)えへんかったで？」

「と言うことはや……ちょうこっち来いや」

「何やのこの子は……？」

ちんぷんかんぷんな静華……
その袖を引っ張って平次は大穴の開いた玄関まで彼女を連れて来ると
大きく息を吸ってから口を開いた

「おのれはこの大惨事の中　呑気にグースカ寝とったんかい！」

「あらホンマや……どないなっとんのこれ？」

「俺が聞きたいわ！」

とりあえず……

静華が寝ている間に何者かがやって来て

そして玄関を破壊した後に薬箱を置いて去っていったことは確かだった

今の段階ではこの薬箱を手がかりにするしかないが……

「おかんはこの箱に見覚えはないんかい？」

「……ないな」

まったく手がかりにならなかった……

「ま……うちに用があるならまた来はるやろ

それよりうちはてっちり作るさかい……平次　玄関片しといてや」

自分の家の玄関に大穴が開いているというのに

まるで何事もなかったかのように言うと　静華は郵便受けだけ覗きに外に出た

しかし……

その郵便受けに『それ』は入っていた

「あら？」

それは手紙だった……

『挑戦状……我が宿敵服部静華へ……
私からのごあいさつは気に入ってもらえただろうか？
随分時が経ってしまったが　あの日の雪辱を晴らさせてもらいに来た
今日の午後七時……あの日戦ったあの場所で待っている……
かならず来い！
ナムサヤ・ゲットソーンサックリットムックより』

そう……それは宿敵からの挑戦状……

……静華が挑戦状を見つけたのと同じ頃
その女……ナムサヤ・ゲットソーンサックリットムックはその場所
で待っていた
宿敵の到着を……

「早ク……早ク来イ……シズカ……」

手に竹刀を握り締めながら
ナムサヤが思い出すのは二十年以上も前のこと……
元々ムエタイの女子選手だった彼女が剣道に出会ったのは十七歳の時
それ以降……めきめきと力を付け　日本の強豪達を次々に撃破し
「タイの女武蔵」と呼ばれたのが二十歳の頃……
そして　彼女は日本に上陸し　剣士として栄光を掴むはずだった
が……彼女はあの日打ち破られてしまった
若き日の静華に……
もちろんすぐにでも再戦したかった
しかし　タイで貧しい暮らしをする彼女には　一回の来日だけでも
困難で
結局その後　再戦は叶わなかった
それからの彼女はタイで剣道を広める一方で結婚し

両親から受け継いだムエタイジムを夫と二人で切り盛りする生活を送っていた
静華のことも忘れかけていた
ジムの選手のセコンドとして　大阪行きが決まったあの日まで……

「ダカラ……早ク来イ　シズカ……」

日本のマンガを読んで覚えた挑戦状の叩き付け方も完璧……
後は宿敵の到着を待つだけだが……待ちきれない！
そんな思いで彼女は時計を見た
時刻は八時……約束の時間はとっくに過ぎていた……

……その頃　服部邸では

「平次？　例の手紙の解読終わったんかいな？」

ナムサヤの挑戦状の解読が急ピッチで行われていた
なにせ　全てタイ語で書かれていたため誰一人理解することができなかったのだ
そこでタイ語の辞書を買って来て　帰ってきた平蔵も加えて皆で解読をしていたのだ
もっとも……静華だけはてっちりを作っていたが……

「何とか内容は分ったで……『今日の夜七時に勝負しろ』やと」

「あら……もう時間過ぎとるやないの……今から行って間に合うんやろか？」

「間ニ合ワナイヨー！」

そこに　片言の日本語と共に一人の女が乗り込んできた
色黒の……小柄だが筋肉質な女だ

「誰や？」

「色黒の女性……さては平次さんの本当のお母さんですね？」

「うわ……ありえへんけど何か納得してまうわ……」

「納得すんなや！　この流れからすると……挑戦状出したナムサヤさんやろ」

女は……ナムサヤは大きく頷いた

「遅イヨ！　ズット待ッテタノニ何デ来ナイノー！」

「えろうすんまへん……せやけどうち　タイ語分からへんので……」

「エ！？　アァ……ソッカ……何カゴメンネ
デモ　ソレハトモカク勝負スルヨ！」

ナムサヤは竹刀を構えると言った
思わぬトラブルがあったが　その構えからは念願の再戦に対する意欲が感じられる
が……お腹を空かせたフリーザ様にとってはどうでも良いことだったよ」

「それより『てっちり』食べましょうよ……もう待ちくたびれましたよ」

「あぁそうやった……ナムサヤはん……決着は夕食の後でよろしいですか？」

「エ？　ア……ウン……仕方ナイネ」

「静……せっかく来てくれはったんやし　ナムサヤさんにも上がってもらったらええやろ」

「エ？　イエイエ……オ構イナク……」

「まあそう言いませんと……どうぞどうぞ」

「ア……ソウデスカ？　何カ……スミマセンネ」

平蔵の勧めで……ナムサヤも加わり
服部家とフリーザ様達は少し遅くなったがようやく夕食にありつくこととなった
フリーザ様達は念願のてっちりに舌鼓をうち
そして静華達もナムサヤを交え　昔話やら近況やらに話を咲かせた

「ナムサヤはんはお子さんおられますの？」

「三人イルヨー……ムエタイバッカリシテルケドネ」

「元気でようおまへんの……うちの馬鹿なんて推理ばっかりなんですよ？」

「やかましいわ！」

「賢ソウデ良イジャナイノー」

そんなこんなで時は過ぎ……

「あら　もうこんな時間や……ナムサヤはんお泊りは？」

「ホテルガアルヨー」

「もう遅いですし　わしが車で送っていきましょう……」

ナムサヤは静華からお土産を貰い……
平蔵の運転する車に乗って帰って行った

「で？　あの人何しに来たんですか？」

「さぁ……」

こんなことで良かったのか？
しかし……
そんなことはフリーザ様と哀にはもうどうでも良かった

続く

１４３．服部静華の因縁（後書き）

この間、私はテレビでＫ－１ＭＡＸを見ていたのですが、アルトゥール・キシェンコ選手と言うウクライナの選手が決勝まで上がっていました。
魔裟斗選手からダウンを奪う大健闘でしたが、惜しくも判定で敗れてしまったキシェンコ選手。
実は彼がまだＫ－１に出始めた頃……テレビにも映してもらえないような選手だった頃に、私は一度、彼をモデルにしたキャラクターをこの小説に登場させています。
誰だかお分かりですか？

答えは、仮面戦士アルトゥールことライアン君です。

いやはや、あの頃はただのリザーバーだった彼が、今やチャンピオンベルトを争うほどの選手に……
時の流れは早いですね。

と、言うわけで……
フリーザ様と灰原さんは、アルトゥール・キシェンコ選手を応援しています。

１４４．ボクこそは女の子

自分のことを呼ぶとき
日本語には様々な言い方がある
「わたし」に始まり
「オレ」……「わし」……「我輩」に「拙者」……
そして……

第１４４話　ボクこそは女の子

カフェ「カシオペア」
……最近新しくオープンしたそこの評判を聞きつけ
その日　フリーザ様と哀はカシオペアにランチをとりに来た
上品な雰囲気の店の中を　ウェイトレスに導かれ席まで……
と　そこでフリーザ様は見慣れた「とんがり」を発見した

「おや？　蘭さんじゃないですか？」

「あ！　フリーザ様！　それに哀ちゃんも」

笑顔で挨拶をしてきた蘭は一人だった
小五郎やコナンの姿はない……
聞くと　久しぶりに英理と食事をするのだと言う
その言葉通り　すぐに英理がやって来た

「あら？　阿笠さんの所の……」

「宇宙の帝王フリーザ様です……お久しぶりですね妃さん」

会釈を交わすと　英理は「相席しないか？」と提案した
哀は久々の親子の食事に水を差すまいと思ったのだが
そこはフリーザ様……
遠慮などするはずもなく　また英理と蘭もそれを望んだので
四人はそのまま椅子を並べることになった

「一度じっくり話してみたかったのよね……
蘭から話は聞いていたし　前に会ったこともあったけど……」

英理の興味はフリーザ様にあるようだった
そう言えば……この二人が直接やりとりをするのは初めてかもしれない……
哀が考えているところに　ウェイトレスが注文をとりにきた

「『ボク』はアサリのクリームパスタで……」

フリーザ様と英理の初めてのやり取り……
そちらに気を取られて思わず聞き逃しそうになった
しかし　哀はハッと気付いた

「ボク？」

その　日本語の一般的な一人称も　放った人物が人物なだけに
それは異様な音となって　哀になんとも言えない居心地の悪さを覚えさせた
『ボク』
それは紛れもなく　妃英理……その人が放った言葉だった

「お母さん……そんなキャラだったっけ？」

娘の蘭もそれに気付いたらしく　フリーザ様との会話を遮って聞いた
英理は「何のこと？」と言う顔をする……

「今『ボク』って……」

「え？　ボクがボクのことを『ボク』って言って何が悪いのよ？
変な子ね……」

「ほっほっほっ……ボク尽くしですね」

「そう言う問題じゃないわね……」

もう間違いない
英理は自分のことを「ボク」と呼んでいる
蘭は肌に泡立つものを感じ　ブルッと振るえた

「お母さん　何でボクっ娘になってるの！？
イメチェン！？　お父さんのため！？　戻ってきてくれるの！？」

訳が分らなくなって　蘭はまくしたてた
そんな娘を前に　英理は怪訝そうな顔をして見せた

「あの男のため？　馬鹿言わないでよ……」

おかしなことは「ボク」だけで　あとはいつも通りの英理……
だが　そのせいで余計に「ボク」が際立っていた

「じゃあ　何で急に……」

「この間目覚めたのよ……良いじゃない　女が『ボク』って可愛くない？」

「歳とキャラクターを考えなさいよ……」

「哀ちゃんの言うとおりだよお母さん……気持ち悪いからやめてよ～」

軽い冗談だと思った
だから蘭は笑いながらそう言ったのだが
それを聞いた英理は真剣な……少し怒ったような顔つきになった

「男は『俺ボク』女は『私』……そう言いたいんでしょう？」

「お母さん……？」

次の瞬間
「バン！」という音が響き渡った
英理がテーブルを叩いた音だ

「ボクっ娘は全ての女性に許された権利よ！
あなたは理解が足りないからそんな偏見を持つのよ！」

「お母さん！？」

「様子があからさまにおかしいわね……」

「面白くなってきましたね……ほっほっほ」

変だった……

数日後……
フリーザ様と哀……そして蘭は集会場のような場所に来ていた
そこには段になった座席が並び　そして前には立派な舞台があった
三人以外には若者から婦人まで……様々な年齢層の女性ばかり
舞台の上に掲げられている白い看板には「ボクっ娘連合総会」と書かれている

「どうやらここで間違いないみたいね……」

三人は目立たないように隅の方に座ると　総会の開始を待った
このボクっ娘連合こそ　英理がボクっ娘になってしまった元凶……
妃法律事務所の栗山にそっと調べてもらって分ったことだが
英理のパソコンのお気に入りに連合のホームページが登録されていたそうだ

「お母さんを元に戻す方法が掴めればいいけど……」

蘭はつぶやいた
英理はいくら説得しても「ボク」をやめる気配がなかったのだ……
「もしかしたら　洗脳されている可能性もある」と言ったのは哀だった
そこで　今日三人はその真偽を確かめに来たのだ
と……そうこうしているうちに会場が暗くなり
舞台の上だけが明るく照らし出された

「これより　第17回ボクっ娘連合総会を開始します」

司会の女性がマイクで言うと同時に
舞台には一人の女性が現れた
どうやら　連合の長らしい……
が　その人物を見て三人は驚いた

「あれは……ボクっ娘タレントの南井奈津美(みないなつみ)！」

それはつい最近　アイドルからバラエティに転向した女性タレントだった
確かに　昔から自分のことを「ボク」と呼んでいたが……
呆気にとらっれる三人を他所に　奈津美は舞台の中央まで来るとマイクのスイッチを確認した

「ジーク・ボクっ娘！」

右手をピンと斜め上に突き上げながら叫ぶと　奈津美は演説を始めた

「今日はボク達にとって記念すべき日となる！
『わたし』呼称の影で迫害されてきたボク達の歴史に光をもたらす時がきた！」

奈津美はそう言うと　何やら怪しげな機械を取り出し
皆の前に高々と掲げて見せた

「ボクはついに手にいれた！　世界をボクっ娘で埋め尽くす力を！
その名も『一人称変換装置』！　これを使えば　今どんな呼称を使っていようと瞬時にボクっ娘になる！
『わたし』だろうが『オレ』だろうが『我輩』だろうが『拙者』だろうが……
英語のテキストも改訂されるだろう！

皆はアイアム……と習っただろう？
しかし　今度からはボクアムになる！
自己紹介しよう！　ボク　アム　ナツミ　ミナイ！」

「おおおおおおおお」っと　会場全体がどよめいた
三人には良く分からなかったが　ボクっ娘にとっては喜ばしいことらしい
皆うれしそうに「ジーク・ボクっ娘！」とコールをあげていた
良く分からない……
が　一つ分った
英理はあの『一人称変換装置』の被害にあったのだと
そうなれば　もう話は早い

「そうはさせませんよ！」

「だ……誰だ！？」

フリーザ様達は一斉に舞台に乱入した

「ほっほっほっ……その装置をよこしなさい
それで妃さんを元に戻し……ハイバラさんの一人称を『おいどん』にするんですから」

「……今余計なこと言わなかった？」

「と……とにかく！　お母さんを元に戻してください！」

三人が一斉に言うと
奈津美は最初キョトンとしていたが……しかしすぐにニヤリと笑い
そして装置のボタンを押した

「きゃあああああああああああああ！」

次の瞬間
哀と蘭が白い光に包まれた

「装置を渡せって？　嫌に決まってるだろ……
せっかく高い金を払って手に入れた力なんだ
ボクは世界をボクっ娘で埋め尽くす！
文句はないだろう？　そっちの二人？」

奈津美は哀と蘭に問いかけた

「そうね……ボクとしては何の問題もないわ」

「ボクも……これでお母さんとおそろいだし」

「ほぅ……やはり　ある程度の洗脳も可能なようですね」

メルレイと言い……
最近は洗脳するのが流行りなのか？
フリーザ様は軽く溜息をついてみせた

「しかし　ますます欲しくなりましたよ……
何としてもハイバラさんを『おいどんっ娘』にしなくては……くっくっくっ」

「へえ……あくまで邪魔をしようって言うんだね？
良いよ……ボクを倒せたら装置はあげるよ！」

そう言うと　奈津美はまた装置のボタンを押した
すると奈津美の髪は金色になって逆立った

「装置を開発したハーラ・ミルダブディ博士はボクの肉体の改造もしてくれた！
装置から発せられるエモーエナジーを受けてスーパーボクっ娘に変身できるようになったのさ！」

「なるほど……どこかで見たような装置だと思ったら　ハーラさんが作ったんですね」

「ミルダブディ博士を知ってるの？……ってどうでも良いか
ボクの『ボクっ娘エモー波』を受けて一生『ボク』って単語しか言えないようになるがいい！」

奈津美はエモーエナジーを腰まで引いた両手の中で高めると
それを一気にフリーザ様に向けて放った
さながら「かめ〇め波」のようなフォームで……

「その髪型……そのエネルギー波……まるであのサル野郎みたいでムカつきますね」

フリーザ様は片手でエネルギー波を受け止める

「しかし……覚えておくのですね
このフリーザ様が生きている限り　ナンバー1は常に私です！」

「う……うわあああああああああ！」

ドーンと轟音が響き渡った……

奈津美のボクっ娘エモー波はあえなく跳ね返され　彼女自身を襲った
立ち込める煙……
それが晴れると　しかし奈津美は無事だった
いや……奈津美の体は無事だった……

「うぅ……やられた……でもどうなったの？　『矢沢』どうなったの？」

クラクラする頭で　奈津美は近くにいた連合幹部の女性に聞いた
しかし　聞かれた方はキョトンとしてしまった
……矢沢？

「あれ？　矢沢……矢沢どうなっちゃったの？
何で？　何で自分のこと『矢沢』って呼んじゃうの？
うわあああああああああああああああ！
助けて！　やだ！　ボクっ娘に戻りたい！　矢沢ボクっ娘に戻りたいよ！
助けて！　ブルーレイで録画したくてしょうがないよ！
ハイビジョンで綺麗に見たくてしょうがないよ！」

「フン……どうやらあのエモー波の副作用が出たようですね
私の勝ちです！　約束どおり装置はもらっていきますよ？」

こうして……
フリーザ様は「一人称変換装置」を手に入れ
蘭と英理を元に戻し……
哀を「おいどんっ娘」にすることに成功したのだった……

続く

おまけ・キャリアの部屋

「皆様こんにちは……
もうすっかりお馴染みとなりました白鳥任三郎です
今日のゲストは……美和子さん……で……間違いない……はずです
大丈夫だよね？
うん……大丈夫……
ではお入りください！」

「やっほー白鳥君」

「お……おおおおおおおおおおおおお！
皆さん！　美和子さんです！　美和子さんです！」

おやおや……
白鳥さんたら大はしゃぎ
でもそこに突然サングラスをかけたガタイの良い男が乱入してきました

「騙されるな……そいつは佐藤美和子ではない」

「え？　あなた誰ですか？　今収録中なんで部外者は入って来ないでくれます？」

「伏せろ！」

「え？　ってあぁ！　美和子さんがショットガンで打たれた！」

「佐藤美和子ではない……そいつはＴ－１０００
最新型のターミネーターだ」

「えぇ！？　じゃあ……また美和子さんじゃなかったってことですか？」

「そういうことだ……さぁ死にたくないならついてこい
奴はすぐに再生し　君を襲うぞ」

「た……助けて美和子さあああああああああああん！」

こうして・・・・・・
白鳥さんはカリフォルニア州知事に似たサイボーグ戦士と
未来を変えるための戦いに望むのでした

１４４．ボクこそは女の子（後書き）

テレビで競馬の天皇賞を見ました。
最後のウオッカとダイワスカーレットの叩きあいには感動しましたが、結果としてはハナ差２ｃｍでウオッカが勝ちました。
ただ、ダイワスカーレットを応援していた私としては残念です。
なぜウオッカを応援しないのか？

どうしてもサングラスの悪者の顔がちらつくからです。

どうでも良いですね。
それはそうと、もうそろそろ１５０話か……
年内に辿り着きたいですね。

１４５．ゲレンデ・エボリューション

世の中には人に見えない所でがんばっている人達がいる
例えば　我々が夜の暗闇に怯えずに済むのは
絶えず送電設備に目を配る人々がいるおかげであるし
ガスや水もそれに同じである
ライフラインに限った話ではない
例えば今のシーズンだとスキー場
温暖化が叫ばれるこのご時世にスキーができるのは
やはりスキー場のスタッフによる努力の賜物である
しかし　スキー場のスタッフの努力は時として思いもよらぬ分野に
及ぶ

第１４５話　ゲレンデ・エボリューション

その日　フリーザ様と哀は探偵団を連れ立ってスキーにやって来ていた
探偵団が「どこかに出かけたい」と言い出したのもあるが
一番の要因はやはり「この私をスキーに連れて行きなさ～い」というフリーザ様の言葉だった

「ほっほっほっ……楽しいものですね」

「そうね……登って下りての単純作業なんだけどね」

「ハイバラさん……水を差すようなことを言わないでください」

滑れば良いのに哀はゲレンデのわきで缶コーヒーを飲みながら冬山を眺めていた
「あまり運動をしない哀はきっと将来メタボだろう」とフリーザ様は頭の中で哀をブクブク太らせさらにボブ・サップと対戦させて曙のようにダウンさせる……という想像をした

「ぎゃっ！」

それを察知したのか　哀はフリーザ様の顔面に雪玉を投げつけた
雪の塊はフリーザ様の顔に数秒まとわりつくと後はバラバラと割れてこぼれ落ちていった

「やってくれましたねハイバラさん……良いでしょう！　本当の雪合戦というものを教えてさしあげますよ！」

フリーザ様はそう言うと雪玉を丸め始めた
その横では哀も負けじと新たなる雪玉を作る……
と……そこへコナンがスノボーで滑り降りてきた

「おい！　吹雪いてくるらしいから　馬鹿なことしてないで中へ入ってろ」

「おや……そうなんですか　残念ですね」

「隙あり……！」

「ぬおぅっ！　何をするんですかハイバラさん！おのれ……倍にして返してあげますよ！」

「良いから！　建物に入ってろ！
……俺はもう一回上まで行って　遊んでる元太達を連れてくるから」
雪玉を投げあう二人に呆れつつ　コナンはリフトへ向かった
が……その時　突然リフトが止まってしまった

『天候が悪化します！　お客様は一時　スキー場建物内にお戻り下さい！』

流れてきたのはそんなアナウンスだった
コナンは「マジかよ」と舌打ちをする

「まあアナウンスがあったんだし　あの子達も今に滑り降りてくるでしょ」

哀はそう言って雪が降り始めたゲレンデに目をやった
スキー客が「急げ急げ」と滑り降りてくる
ウォーリーを探せのように……目を凝らす……
すると　見慣れたおにぎり頭がやって来た

「おう元太！　光彦と歩美はどうした？」

「ん？　あれ？　ついさっきまで一緒に滑ってたんだけど……」

元太はそう言って首を傾げた
「まあ……すぐ来るだろう……」とそれでも楽観的に四人は考えたがしかし　吹雪がいよいよ本格的になり　視界が完全に白に閉ざされてしまうと
笑っているわけにはいかなかった……

……

「とりあえず　吹雪がやむまでここにいましょう」

「うん」

光彦と歩美はとっさに見つけた山小屋の中に逃げ込んでいた
歩美がゲレンデに落とし物をしたので　それを探していたのだが
そうしているうちに吹雪になってしまったのだ

「このまま夜になっちゃったらどうしよう……」

「大丈夫ですよ……この吹雪は一時的なものらしいですから」

「そっか……でも寒いね」

歩美は自分の両肩をさすりながら言った
光彦はそれを見ると　男らしく自分のウェアを脱いで歩美にかけてやった
が……格好つけたものの本当に寒かったので
光彦は思わず身震いして　それから部屋の中を見渡した

「何か……暖かくなるようなものはないでしょうか？」

しかし簡素な山小屋で　中には暖房なども無く
あったのはロッカーが一つだけだった
せめてその中に何か無いかと光彦はそれに近付く……
と……そこでその異様さに気がついた

「何でしょう……これ？」

ロッカーにはまるで封印をするように紙が貼り付けられていた
いや「封魔」と書いてあるので　実際に封印しているのだろう
しかし言っても見た目はただのロッカー
光彦はこれといって深く考えることもなく　その封印を解いてしまった

「かあああああああああああああああああ！」

「うわあっ！」

開けた途端　中から男が飛び出してきたので　光彦は驚いて尻餅をついた
歩美もその声に驚いて　そちらを見る
そこに立っていたのは「初老の男」……と言えば普通だが
しかし「魔」と下手な字で書かれた黒っぽい空手着のような服を身にまとい
しかもつるっぱげた頭に触角が二つ生えたカチューシャをしていたのだから
歩美も光彦も目をパチパチさせるしかなかった

「ふっ……ふっふっふっ……はっはっはっはっはっはっはっ！
ついに封印が解けたようだな！」

唖然とする二人を差し置いて　男は愉快そうに笑う
歩美はまだわけが分らなかったが　とりあえず聞いてみた

「おじいちゃん……誰？」

「んん？　何だこの小娘め……貴様らが我が封印を解いたのか？
そうかそうか……口の利き方は気にいらんが　そう言うことなら教えてやろう」

男はそこまで言って　数秒溜めると
バッと腕を開いて　まるで演劇の主役のように言い放った

「わしこそが世界を恐怖と絶望に突き落とす存在！
ピッコリ大魔王様であるわぁ～！　はっはっはっ！」

「ぴ……ピッコリ大魔王！？」

「長きに渡りあのロッカーに封印されていたのだが貴様らのおかげで復活できた
礼を言うぞ？　がっはっはっはっはっはっはっはっはっ！」

二人は……とりあえずロッカーを開けてはいけなかったということだけ理解した
しかし　そんな二人を置いてけぼりにして　ピッコリ大魔王は外を見た

「ふむ……吹雪もやんだようだな！
それでは人間どもの悲鳴を聞きにいくとするか」

……

一方フリーザ様達四人はスキー場のスタッフである男と一緒に二人の捜索をしていた
最初は全員吹雪に顔をしかめていたが

しかし　幸運にも吹雪はすぐにやんだので　四人は十分な視界を確保することができた

「ねぇ……あれ……」

「どうしましたかハイバラさん？　見つけたんですか？」

哀はゲレンデの上の方を指さしている
何か見つけたようだが……歩美と光彦を見つけたにしては顔が引きつっていた
残りの四人も哀が示す方を見た
そこには歩美と光彦……と……

「がははははははは！　スキー場の雪などこうしてくれるわぁ～！」

ピッコリ大魔王は「爆裂魔光砲（ばくれつまこうほう）」と書かれた大きなドライヤーでゲレンデの雪を溶かしている
歩美と光彦はその横でオロオロしていた
しかし　自分達を探しに来たフリーザ様達を見つけると駆け出した

「大変です～！　ゲレンデの雪が！」

「そうね……とりあえず……あれは誰よ」

駆け寄ってきた二人に哀は聞いた

「……ピッコリ大魔王」

その名前は光彦や歩美の口からでなく　スキー場のスタッフである高田正則（たかだまさのり）の口から漏れ出た

「わけが分からない」という顔をしたフリーザ様達と違い
正則はドライヤーを振り回す初老の男を知っているのか
そのシワだらけの顔を睨みつけるようにしている
すると　ピッコリ大魔王も正則に気付いた

「貴様か……親父には世話になったぞ！」

「馬鹿な！　父さんの魔封波（まふうば）は完全に決まったはずだ！」

「そうさ！　そしてこのわしは忌々しいことに一日も封印されてしまった！
だが……くっくっくっ！　あんな山小屋に置いておいたのが悪かったな！
さっき　そのガキどもに封印を解いてもらったところよ！」

「なんてことだ……」

「ちょっと良いかしら？」

にらみ合う二人の間に　哀が割って入った
歩美と光彦が見つかったからどうでも良いが……
こんなわけの分からないやり取りを見せられては事情を知りたくなるのが人の性である
正則は目の前の男……ピッコリ大魔王について説明をし始めた

「昨日の朝うちのスキー場に魔族が現れました」

「昨日……割りと最近の因縁なのね」

「それが奴……ピッコリ大魔王です」

「……で……あなた本名は？」

「はっはっはっ！　ピッコリ大魔王様だぁ！」

「本・名・は？」

「……山岡二郎（やまおかじろう）です……」

正則の説明は続く……

「奴は平和だったうちのスキー場を地獄に変えてしまいましたさっきみたいに雪を溶かしたり　あとリフトを降りずに延々グルグル回ったりしてました」

「チャチな話ね……」

「そこでこのスキー場のオーナー……僕の父が戦いを挑んだんです！」

「警察を呼べば済む話だと思うわよ……」

「戦いは夕方まで続きました……」

「暇だったのね……」

「そして父さんは伝説の秘術『魔封波』を使い　ロッカーの中に奴を封印したんです」

「監禁の間違いでしょ……」

「しかし　その代償は大きく……父は腰を痛めて　今日は家で寝ています」

「良い歳こいた大人が無茶するからよ……」

説明が終わると正則はキッと　またピッコリ大魔王をにらみつけたピッコリ大魔王はしかし「フン」と鼻で笑って余裕を保っている

「頼りの親父は家で腰にシップを貼っているのか？残念だったな！　貴様の力ではまだ魔封波は使えまい！」

「くそぉ……！　それでも……お前を野放しにするわけにはいかないんだ！」

正則は雄叫びと共に飛びかかると　キックだのパンチだのを続けざまに繰り出したピッコリ大魔王もそれを受け止めつつ応戦する

「警察呼ぶ？」

「いやハイバラさん……面白いからもう少し見ていましょう」

いつの間にか　ゲレンデには人だかりができていた吹雪がやんだので　皆スキーを再開したのだがゲレンデで格闘を繰り広げているのを見つけて集まってきたのだフリーザ様達を中心に　皆「やんや　やんや」と応援を始めたが……闘う二人のうち一人はその声援に応えられなかった

「ごめん……疲れた……」

ピッコリ大魔王であった
言っても本当はただの山岡二郎（６３歳・無職）……
体力的に　若い正則に勝てるはずもなかった

「どうした大魔王！　動きが鈍いぞ！」

「くっ！　図に乗りおって若造が！」

ピッコリ大魔王は苦しそうな顔で
しかし正則を弾き飛ばしてニヤリと笑った

「こうなったら奥の手だ！　わしの爆力魔波（ばくりきまは）であの世へ行くが良い！」

そう言うとピッコリ大魔王は爆竹を取り出し　火をつけた
バン！　バン！　バン！
とそれらが爆ぜる音がゲレンデに響き渡った

「ぐあああああああ

「はっはっはっ……へぇ？」

哀は山の上を指差していた
聞こえてくるのはゴゴゴゴゴという地響き……
爆力魔波の破裂音のせいで雪崩が起きたらしい
すぐに白い津波がゲレンデに押し寄せてきた

「た……大変だ！」

「逃げろ～！」

スキー客達は一斉に逃げ出す
しかし哀達は板を履いていなかったので滑って逃げるわけにもいかない
そこでフリーザ様を見た

「止めてちょうだい」

「まったく……仕方ないですね」

フリーザ様は溜息をつくとピッコリ大魔王を掴み
そして次の瞬間　その体をコマのように回転させて雪崩に突進させた

「のわあああああああああああああああああ！」

ピッコリ大魔王の体は激しく回転し
竜巻のようになって雪崩を切り裂いていった
ドーンと音が鳴ったあと……ゲレンデは再び静寂を取り戻す

「封印に成功したわね……」

「そうですね」

あとに残ったのは雪崩の中で高速回転した挙句カチカチの雪像になってしまったピッコリ大魔王……

光彦は黙ったまま　それに山小屋から持ってきた「封魔」の紙を貼り付けるのであった

続く

１４５．ゲレンデ・エボリューション（後書き）

しばらくぶりの更新です。
いや、ＰＣがぶっ壊れたり色々大変だったんですよ。
まあ、少なからずサボってましたけど。

それはそうと、この間ドラゴンボールの実写版映画の予告を見ました。
何ていうか……カオス（笑）
フリーザ様のあたりをやるのかと思っていましたが、どうやらピッコロ大魔王のあたりをやるみたいですね。
ってことでピッコロ大魔王みたいな奴を登場させてみました（笑）

ダーレガツツイタポコペンポコペン……。

ってことで、久しぶりのフリーザ様でした。
次の更新は……

未定です。

１４６．素敵な恋人いらんかね？

愛は素晴しい
が……冷める時は冷める
愛は素晴しい
が……絶対的なものではない
出会った瞬間ビビッと来たら
その人が運命の人……

……ねーよ

第１４６話　素敵な恋人いらんかね？

水ぬるむ三月……
風も穏かになった街を　フリーザ様と哀は歩いていた
ポカポカ陽気に　行き交う人々もどこか明るい
が……そんな雰囲気をぶち壊すように
ドンヨリとしたオーラを撒き散らしながら歩く男がいた
なんと空気の読めない……
眉をひそめたフリーザ様だったが
次の瞬間　その男が知り合いであることに気付いた

「おや高木刑事……何を辛気臭い顔してるんですか？
あまり場の雰囲気を盛り下げると殺しますよ？」

「えぇ！？」

「いきなり脅してるんじゃないわよ……
で？　何をそんなに悩んでるの？」

哀はフリーザ様を小突きつつ聞いた
しかし　高木刑事はいつもの如くモジモジとして
なかなか話を切り出そうとしなかった

「いや……あの……」

「死刑ですね」

「は……話します！　話しますから！」

フリーザ様が脅すと高木は話し始めた……

高木が言うには……それは一週間前のこと
高木が張り込みの途中　買い出しに行った時のことだった
ちょうど向かい側の道を美和子が歩いているのが見えた
手でも振ってみようか……と　そう思った時
その隣に……

「相手はどんな男？」

「あ……あのさ哀ちゃん……サクサク進めないでくれる？」

「で？　どんな男だったの？」

「う……うん……顔は見なかったから……
でも　すごい親しげに歩いてたんだよ」

思いがけず飛び出した「良くある話」に
フリーザ様は「な～んだ」と失望の溜息を漏らした

「あれですね！　お父さんとかお兄さんってオチでしょう
まったくベタですね……殺しましょう」

「ひいいいいいい～！　やめてくださいよ！
それに佐藤さんのお父さんは殉職されてますし
ご兄弟がいるって話も聞いた事ありませんよ」

「お父さんじゃなくて……パパかもしれないわよ？」

「あぁ……愛人的な意味で」

「ひいいいいいい～！」

と……あまりに高木が悲鳴を上げるので
通行人の痛々しい視線が三人に突き刺さった
それに　立ち話もつかれたので三人はポアロに移動することにした
ポアロに入り　テーブル席に座り
梓がコーヒーの配膳を終えたところで話は再開した

「とりあえず……本人に確認してみたら？」

「あ……うん……そうしたいんだけど……」

高木はまたモジモジとしだした

「勇気が無い？　ってわけ？」

「はい……」

「いつものパターンですね……
梓さん　こう言う男どう思いますか？」

フリーザ様は隣で立ち聞きしていた梓に聞いた
すると　梓は「ははは」と笑ってから答えた

「とんだチ○カス野郎ですね」

「えぇ！？」

「マスターはどう思います？」

「ははは……チ○カス野郎だね」

「そこのおじさん……あなたはどう思います？」

「チ○カス野郎かと……」

「ね？　あなたはチ○カス野郎ですよ高木さん」

「す……すみません……」

知らないおじさんにまで散々なことを言われた高木
しかも何も言い返さず　うつむくだけ……
哀はだんだんイライラしてきた

「……あなたがそんなんだから浮気されたんじゃないの？」

「うぅ……やっぱりそうなのかな……」

「自分を変えなきゃダメですよ！
今ならまだ間に合います！　佐藤刑事を取り返したくないんですか？」

梓が叫ぶように言うと　高木はハッとした

「……取り返したい！」

「ふむ……善は急げって言いますし
今から佐藤さんを探しに行きましょう」

こうして……
フリーザ様と哀と高木は美和子を探しに出た
と言っても　美和子は今日非番なので三人は美和子の家に向かった

「美和子なら高木さんとデートって言ってましたけど……」

以上が美和子母の証言だった
しかし高木は美和子とデートなどしていない
つまり美和子は嘘をついてどこかに出かけたことになるのだが……

「多分　この辺りだと思うんですが……」

その事情は美和子に直接聞くことにして
三人は美和子母の証言でショッピング街にやってきた

「あ！　いたわよ」

しばらく探すと　哀が美和子を見つけた
フリーザ様もその声を聞いて振り返る

「おやおや本当だ……おぉ！？」

高木の言う通りだった
美和子の隣には男の姿が……

「良く見えませんね……どんな男ですか？」

「顔は見えないわね……
でも背格好は高木刑事と同じぐらいかしら」

しかし……美和子の笑顔から
相当仲が良いと言うことは覗い知れた
高木は悔しそうに拳を握り締める
と……そうしているうちに
二人は食事のため　和食レストランに入ってしまった

「あ～あ……お食事まで……」

「ちょっと？　いつまで見てる気？
このまま二人がホテルに入るまで待つの？」

哀がたきつけると　高木の眼の色が変わった

「そんなことはさせません！」

いつもとは違う力強い声で言い放つと
高木は二人の入った和食レストランにズンズンと向かい

そして……勢い良く暖簾をくぐりながら叫んだ

「美和子さんと食事をしているのは誰だぁ！」

そこには美和子と……
その向かい側には……
もう一人の高木渉の姿があった

「た……高木くん？　が？　二人？」

美和子も　そして遅れて入ってきたフリーザ様達も
目の前の高木ともう一人の高木の顔を見比べながら口をぱくぱくさせた

「ダブル高木バーガーセットですね」

「あなたは黙ってなさい……
それにしてもこれはどういうことかしらね？」

哀は「ふーむ」と口元に手をあてた
と……その時

「私が説明しよう！」

と言って……
もう一人　男が勢いよく暖簾をくぐった

「誰？」

「私の名前は羽久田一成（はくだいっせい）……ロボットを研究する工学博士だ」

「羽久田博士……？　あぁ！　ロボコップを作った……！」

なぜその羽久田博士がここに？

全員が聞きたかったが　聞くまでもなく羽久田は語り始めた

「そう……あのロボコップの件以来

私のロボット工学者としての評価はガタ落ち！

私の話など誰も聞いてくれなくなってしまった……」

「自業自得でしょ……」

「そこで！　この大暴落した羽久田株をどうしようかと考えた結果がこれだ！」

羽久田は叫ぶと　高木を指差した

そしてさらに言い放つ

「独身女性向けに開発した恋人型アンドロイド！

ラヴ・ターミネーターＬ－８００だ！」

「えぇ！？」

「何をターミネートするのよ……」

「それより……あなたアンドロイドだったんですか？　高木さん？」

驚きのあまりキョドキョドとする高木

だったが……しかしもう一人の高木はスッと手を上げた

「博士……それは僕の方です」

「あ……そっちか
そっくりに作りすぎたな……」

「ってか……なんで高木刑事そっくりに作ったのよ」

「今年は草食系男子がモテモテなのだ」

メガネを指で持ち上げながら
羽久田は自らの研究熱心さを誇るように言った

「というわけで……そこのチ○カスをモデルに製作してな
彼女に商品のテストをしてもらっていたのだ……無断で」

「佐藤刑事は気付かなかったの？」

哀はチラリと美和子の方を見た
しかし……

「気付かなかった……
どうりでガソリン飲むわけだわ……」

「……気付きなさいよ」

そんな美和子の言葉を聞くと
羽久田は大声で笑いながら続けた

「そうだろそうだろ！　完璧に高木君を再現したからな」

そうだとしたらすごい技術だ
驚くやら感心するやら……
哀はもう一人の高木を見た

「そうなの……？」

「この俺の名は高木……俺の邪気眼の力を侮らないことだな」

「中二病じゃない……
こんななのに本当に気付かなかったの？」

美和子に聞くが……

「高木君には邪気眼の力があるものと……」

「あなたも中二病ね……」

哀は溜息をついて　「やれやれ」と首をふった
しかし　その横で羽久田は笑いが止まらない

「まあ何はともあれ　これで商品テストは終了だ！
いよいよ大量生産を開始し　私は一気に億万長者だ！
感謝するよ諸君！　ハッハッハッハッハッ！」

「これ……発売するの？」

「街が僕だらけになっちゃうじゃないですか！？」

「チ○カスだらけですね……」

「ちょっと高木君！　街を汚さない！」

「ぼ……僕のせいですか！？」

こうして発売されたラヴ・ターミネーターＬ－８００
しかし　中二病に罹患していることが分り……
さらには美和子でテストしたのが悪かったのか
普通の女性からしたら理想の恋人とはかけ離れたものであったため
ラヴ・ターミネーターＬ－８００はまったく売れず
羽久田は多額の負債だけ背負ったと言う……

続く

１４６．素敵な恋人いらんかね？（後書き）

ちょっと前に道頓堀のカーネル・サンダースをネタに一話書きましたが、あれから数ヶ月……
なんとサンダースが発見されました。
何かの予兆だったのでしょうか？

うん……

気のせいだよね。

それはそうと、もうすぐルパンＶＳコナンがやるみたいですね。
なんか黒歴史の予感がしますが……面白いと期待して見たいと思います。

ちなみに、来年はもちろんフリーザ様ＶＳコナンです。

うん……

嘘です。

１４７．フリーザ様ＶＳ名探偵コナン（其の一）

その日……
ポアロにはフリーザ様と哀
そしてコナンが珍しくも同席していた
テーブル席に座った三人の位置関係は
フリーザ様と哀が並ぶように座り
そしてコナンがその向かい側……
というものだった

「この間は随分ご活躍でしたね」

「何のことだよ……」

フリーザ様の質問に　コナンは面倒くさそうに答えた

「あなた……かのルパン三世さんと対決したそうじゃないですか
『ルパン三世ＶＳ名探偵コナン』だったそうじゃないですか」

「……それが何だよ」

コナンがストローでゾゾゾっと音を鳴らせながら言うと
フリーザ様は「ふふっ」と笑みを浮かべ
しかし　鋭い目つきで続けた

「……私の出番は……どうしたんですか？」

「はぁ？」

「この私の出番が無いとはどういうことですか！？」

フリーザ様はテーブルをバンと叩いた
シーンと静まるポアロ……
コナンも一瞬ひるんだが　しかし苦笑いを浮かべつつ返した

「あのなぁ……フリーザ様はルパン側でもコナン側でもないだろ？
出せったって……出せるわきゃねえだろ！」

「あら……私も出てなかったわよ？」

いらない口を挟んできた哀をコナンはにらみ付けた
しかし「何かしら？」ととぼけた視線を向けられたので
コナンは諦めて　言葉を飲み込んだ

「んなこと言ったって……終わったことだろうが……」

「そうですね……その通りです
もう終わったことはどうしようもありませんね」

コナンはふと違和感を覚えた
やけにフリーザ様の諦めが早い……
その奥に潜む企みが何なのかコナンは探ろうとしたが
そんなことをするまでもなく　フリーザ様はそれを言い放った

「そういうわけで……
『フリーザ様ＶＳ名探偵コナン』を始めます」

「……はぁ！？」

第１４７話　フリーザ様ＶＳ名探偵コナン

「じゃあ　パーティのシーンから始めましょうか」

パーティ会場の中心に立って　フリーザ様は言った
と言っても　阿笠宅のリビングをちょっと装飾した程度の
ホームパーティだったのだが……

「それじゃあ始めましょう
ほら！　小五郎さん！　ヨーコさんを探しに行きなさい！」

「一目瞭然だろうが！」

「そうですね……呼んでませんから
まあこれでストーリー通りです
博士さん！　始めなさい！」

忙しい（ヨーコちゃんの出演番組チェック等で）中呼び出され
イライラする小五郎を無視して　フリーザ様はマイクを持った博士
に指示する

「えぇ～……それでは本日のスペシャルゲスト……」

「司会博士かよ」

「うるさいのぅ……わしだって本物の方に出たかったぞい……
……えぇ～　スペシャルゲストのミラ王女です！　どうぞ！」

フリーザ様と哀の乾いた拍手が虚しく響く中
そこに王女が現れた……
コナンと園子はその姿を確認して……
何の反応も示さなかった

「リアクション薄いですよ！」

「いや……そんなこと言ったって……」

「『蘭にそっくり！』とかセリフがあるでしょう！」

「いや……だって……」

園子はもう一度ミラ王女を見た
そこにいるのは親友の毛利蘭と……
似ても似つかぬ老婆だった

「わしはミラ王女じゃ」

「……おばあちゃん本名は？」

「山下菊江（やましたきくえ）じゃ」

「うるさいですね！　役者を探す時間がなかったんですよ！
ほらほら！　さっさとシーンを進めなさい！」

フリーザ様が急かすと　博士がミラ王女に質問を始めた
ダイガクセイ（役名キース）がマイクを持って
王女の変わりに受け答えをする……

「好きな食べ物は」

「王女はお寿司が……
「わしはたくあんが好きじゃ」
……おばあちゃん勝手にしゃべらないで」

グダグダだった……

何はともあれ……
シーンは進み　王女が脱走した場面に……
ドレス姿の老婆が息も絶え絶えに走る
その後ろをウォッカ（役名カイル）が
追いつかない程度に手加減しながら走った
街の人々の痛々しい視線にウォッカは少し泣きそうになった……
と……しばらく行くと　蘭がやって来た

「なんかフリーザ様に呼ばれたけど……何なんだろ?」

考えながら歩いていると　前から老婆が突っ込んできた

「ひぃえええ～!」

「わあぁ!　おばあちゃん大丈夫!?」

「助けておくれ!　あの男に追われておるんじゃ!」

「おいババア!　大人しくしろ!」

見ればサングラスをかけた黒服の男……
どこからどうみても悪人だった

「さては年金をむしりとるつもりね！
それとも定額給付金詐欺かしら？　どっちでも良いか……
あああああああああああああああああああ！」

蘭の蹴りがウォッカに炸裂した
その大柄な体が尻餅をついて倒れたのを見ると
蘭は王女の手を引いて走り出した
ウォッカはその背中を見送ると　携帯を取り出す

「痛てて……ちくしょう本気で蹴りやがって……」

アゴを押さえながら電話をした先はフリーザ様だった
フリーザ様はウォッカから報告を受けるとニヤリと笑い
そして電話を切るとコナンを見た

「そういうわけで……
スケボーに乗って王女様を探しに行ってください」

「ったく……分かったよ」

コナンは阿笠宅を出るとスケボーに乗って街に繰り出した
……おそらく　蘭と服を交換したのだろう
帝丹高校の制服を着た老婆は予想以上に周囲から浮いていて
すぐに見つけることができた

「おばあちゃん……一緒に帰ろう」

コナンは王女に駆け寄ると声をかけた

「わしは女子高生じゃ
ピチピチぎゃるじゃ……うっふ～ん！」

「殺すぞ……ばばあ」

「ひっひっひっ！　イヤーン！」

「あ！　待て！」

逃げ出した王女を追うコナン
しかし　所詮は老婆……
すぐに追いついてしまった
が……そこに自転車に乗った梓がやってきた

「王女様！　乗ってください！」

梓はそう言って王女を後ろに乗せると
自転車で走り出した

「え～っと……この後桜塚さんとチェイスをした後
コナン君とのチェイスシーンか……」

梓は自転車をこぎながら頭に叩き込んだ台本の内容を確認した
しかしその時
梓は体をトントンと叩かれた
見ると　スケボーに乗ったコナンがもう追いついていた

「わぁ！　コナン君！」

「……梓姉ちゃん……もう良いよ
僕のことは気にせずに……行って良いよ……」

「え？　あ……そう？」

慣れない二人乗りでヨタヨタとする梓の自転車を
コナンは呆れ顔で見送った

そんなコナンの遥か上空をジャンボジェットが飛んでいた
機内にはフリーザ様と哀の姿……

「我々はルパン的ポジションですからね
そろそろヴェスパニア王国に行っておいた方が良いでしょう」

日本でのストーリー進行は博士達に任せてある
フリーザ様は飛行機の窓から地上を見下ろすと
計画がうまくいくことを祈った

「でも……ヴェスパニア王国なんて聞いたことないわよね」

隣の席で哀がぼやいた
フリーザ様はそれを聞くと「ふむ」と相槌をうった

「そうですね……地図見ても見当たりませんでしたし……
まったく……架空の国ってのは困りものですね
そういうわけで　カンガルー帝国で代用することにしました」

「カンガルー帝国の方が現実味がないけどね……
それはそうと……」

哀は思い出したように雑誌を閉じた

「『ルパンＶＳコナン』でも言ってたけど
私達のパスポートってどうなってんのよ？
これまでも何度か海外行ってるわよね？」

それを聞くと　フリーザ様は「シー」と口元で人差し指を立てた
そして小声で答える

「忘れちゃったんですかハイバラさん？
桜塚さんに偽造パスポートを用意してもらったんじゃないですか」

「めちゃくちゃね……」

哀はため息をつくと　フリーザ様と同じく窓から地上を見下ろした
明日の朝……他の蘭やダイガクセイは「王室専用機」で来ることになっている
しかし……王室専用機のあてなどフリーザ様にあったか？
疑問に思ったが……哀はもう質問するのが馬鹿らしくなっていた

そして翌日……
蘭やダイガクセイ達は空港に来ていた
フリーザ様が「王室専用機で来い」と言っていたからだ

「でも……どれがそうなんだろう？」

蘭はキョロキョロとしてみたが　それらしい機体はない
他のメンバーも探してみるが……見つけることはできなかった

「げぇっ！」

そんな中　カイル役に抜擢されたウォッカだけが素っ頓狂な声をあげた
見つけたのかと思い　皆ウォッカの視線の先を見た
そこにはとても王室専用機とは思えないようなオンボロプロペラ機があった

「アレは……違うんじゃないですか？」

蘭が言った
しかし……

「皆さん　ひょっとしてヴェスパニア王室専用機をご利用ですか？」

後ろから元気な声が響いた
一同振り返ると　金髪のキャビンがそこに立っていた

「キミー！」

「あ！　ウォッカさん！　お久しぶりです！」

ＡＴＨのキャビン　キミー・ヴァレンタインだった
フリーザ様が用意した王室専用機はＡＴＨのプロペラ機だったのだ

「マジかよ……またコレに乗るのかよ……」

ウォッカのため息の意味を　蘭たちは微妙に察した
が……「きっと大丈夫」と首を横に振って
それぞれ搭乗を開始した
まず蘭……ダイガクセイにウォッカ……
メイド役の……と言うよりメイドのカーター
そしてコナン……は……

「何で俺だけ前輪に縛り付けられてるんだよ！」

「ごめんなさい～！　フリーザ様からのご用命で……
後でちゃんと機内にご案内いたしますので
少々がまんしてくださいね」

キミーは笑顔でそういうとコナンの手にお守りを握らせた

「せめてもの罪滅ぼしです！」

そう言って　キミーも機内に入っていった
しかし　コナンがお守りを見ると
そこには「安産祈願」と書かれていたそうな……

さて……
ウォッカの心配をよそに　フライトは順調を極めていた
コナンも前輪格納庫から機内に移され
キミーの「せめてもの罪滅ぼし」の暖かいサービスを受けていた
プロペラ機はフィリピンやインドネシアで給油をし
後はヴェスパニアならぬオーストラリアの大地に降り立つだけとな

った

「キミー！　キミー！」

しかし　皆でトランプをしていた時
機長のオリヴァーが大声でキミーを呼んだ
キミーはトランプを置くと　操縦席に向かった

「何ですか？　コーヒーですか？」

「いや　いらねぇ……墜落すんぞ！」

「皆さ～ん！　墜落しま～す！」

「唐突だなおい！」

ウォッカが突っ込むのと同時に……機体は急降下を始めた

『コラ！　おうちに帰るまでが遠足ですよ！
気を抜いてると事故に遭いますよ！』

遠い昔の先生の言葉が　ウォッカの脳裏をかすめた……

「ぎゃあああああああああああああ！
美代子先生えええええええええええええ！」

ウォッカの叫び声と共に
プロペラ機は海に墜落した

「おじさん！　おじさん！」

気がつくと　ウォッカはコナンに体を揺すられていた
ガバッと起き上がる
頭がクラクラした……

「ここは？」

「分からないよ……どこかの島に流れ着いたみたい」

ウォッカが見ると　そこは浜辺だった

「ほら行くよおじさん！　とりあえず助けを呼ばなきゃ！」

ボーっとしているウォッカを
「仮にも組織の人間かよ……」と内心呆れつつ
コナンは引っ張った
蘭やカーター……機長のオリヴァーはとっくに起き上がっていた
ウォッカは慌てて起き上がると
皆と一緒に島の奥に向かって歩き始めた
しかし　歩けど歩けど　人の住んでいるエリアには出なかった

「この辺りは無人島の多い一帯だからな……」

オリヴァーはチッと舌打ちをしながら言った
気分が滅入る……
ウォッカはため息をついた
まあ……キミーのような元気要員がいることがせめてもの……

「ん!?　キミーとダイガクセイはどうした!?」

ウォッカはハッとして言った
しかし　他のメンバーは「はぁ……」とため息をつくだけだった

「しっかりしてよおじさん!　だから助けを求めて歩いてるんでしょ!」

コナンはウォッカの脚に蹴りを入れながら言った
キミー……ダイガクセイ……無事なら良いが……と
ウォッカは空を仰ぎ見ながらまたため息をついた

「痛ぇ!」

そのせいで　足元の木の根につまづいて転んだ

「おじさん!　しっかりしてよ!」

ハハッ……もうやだこのグラサン……
コナンはウォッカを起こしつつ苦笑いするしかなかった

続く

１４７．フリーザ様ＶＳ名探偵コナン（其の一）（後書き）

ってことで、今回は久しぶりに長編です。
５・６話くらいになると思います、多分。
一応ルパン三世ＶＳ名探偵コナンに対抗したつもりなんですが、後半面影もなくなりました。
素敵ですね。

それはそうと……
この間何気なくテレビを見ていたら突然コナンのアニメが始まりました。
まさかコナンがやると思っていなかったのでビックリしましたが、そうでしたね……
そういえば時間帯移動するって聞いたような気がします。
で、他に見るものもなかったのでそのまま見ていたんですが。

「これ……第１話じゃん」

しかも次回予告はまさかの第２話。
あの１０年も続いた長寿アニメを最初からって……。

安西先生……見る気力はありません。

助けてー！

１４８．フリーザ様ＶＳ名探偵コナン（其の二）

結局その島は無人島だった
キミーとダイガクセイのことは心配だったが
そうなると自分達の命も心配しなくてはならない
そこでコナン達は一度浜辺に引き返し
蘭とカーターをそこに残すと男３人で食料調達に出た

「はぁ……大変なことになっちゃいましたね」

「うぅ～……心細いですぅお嬢様ぁ！」

目いっぱいに涙を浮かべるカーターの肩を抱きながら
蘭は「ははっ」と苦笑いを浮かべた

「お嬢様だなんて……『蘭』で良いですよ」

「いいえ！　全人類が私のご主人様・お嬢様ですから」

一変……カーターは胸を張って拳を握り締めた
それがおかしくて蘭は思わずプッと吹き出してしまった
と……その時だった

「あれ？」

蘭は耳をそばだてた
聞こえる……
「ブーン！」というモーターの音が！

「お嬢様！　あそこ！　ボートがこっちに向かって来ますぅ！」

カーターが大声で言いながら海を指差した
そこには確かに　何隻かのモーターボートがいて
そしてこちらに向かって来るようだった
蘭はすかさず立ち上がると　大声を出しながら両手を振った

「おーい！　おーい！」

これで助かる……
蘭の表情は明るく緩んだ
が……それはすぐに険しいものへと変わり
そしてカーターを腕で庇いながら身を前に乗り出した

「おい……ヒッヒッヒッ！
こんな所に女がいるぜぇ！？」

「おっほ～！　しかも何だぁ！？　結構な上玉じゃあねぇか！」

降りてきたのは品のなさそうな男達だった
それも武装している
人を見た目で判断するのは良くないというが
この場合……見た目で判断すべきだということは明らかだった

「安心しなよお譲ちゃん達……俺達は紳士だからよ！」

「優しくしてやるからちょっと相手してくれよ～……ヒヒッ！」

「オルセン軍曹！　ちょいっと味見しても構いませんよね？」

男達の一人は蘭とカーターをいやらしい目で見ながら
自分達がさっきまで乗っていたボートの方に向かって聞いた
すると　ボートから一人の女が出てきた

「まったく好きなやつらだな……手加減してやれよ？」

「オルセン軍曹」と呼ばれた女は呆れながらも言った
そして「可哀想に」と同情しつつ
しかし笑いながら蘭とカーターの方を見た……

「ん？　おい！　ちょっと待て！」

突然……オルセン軍曹は男達を制止した
そして強い歩調で歩み寄ってくると
蘭の後ろに隠れて震えるカーターを見た

「ま……間違いない！　将軍！　カーター将軍ですよね！？」

「はぁ？」

蘭はおろか……男達も全員目が点になった

「な……何言ってるんすか軍曹
こりゃどう見てもメイドの女じゃあねぇですかい」

「そうですぜ……カーター将軍はもっとこう……
冷酷で……いつも企んでるような顔の……」

「いやいや！　そもそも将軍は男だ！」

男達は顔を見合わせながらガヤガヤと騒いだ
しかしオルセン軍曹は「黙れ！」とそれを一喝する

「お前達はあの日　紅海基地にいなかったから分からんのだ
私はあの時のことを良く覚えている！
目の前で……将軍は間違いなくこのメイドに変えられてしまったのだ」

「あ……あの話……本当だったんですかい？」

にわかに信じられない……
そんな顔の男達をよそに　オルセン軍曹はカーターの下にひざまずいた

「将軍！　私であります！　ドロシー・オルセン軍曹であります！」

「え？　あぁ！　どうも～お久しぶりですぅ！」

カーターはドロシーの顔を確認すると深々とお辞儀をした
すると　ドロシーの目から涙が溢れてくる

「将軍……すっかりしおらしくなってしまって……」

しかし　ドロシーはすぐに手の甲で涙を振り払い
そして男達に命令した

「将軍がお帰りになられた！　我らの基地に案内するぞ！」

「こっちの娘はどうします？」

蘭は身構える
しかし相手は銃を持った集団なので半ば諦めかけていた
「面倒くさい……とりあえず一緒に連れて行くぞ」
「待て！」
その時
浜にコナン達が帰ってきた
「その二人は渡さないよ！」
「そうだぜ！　蘭もカーターも俺達の連れだ！」
コナンとウォッカは臨戦態勢で言った
その後ろでオリヴァーもかったるそうにドロシーをにらむ
しかし　言っても男二人に子供が一人
相手にするのも馬鹿馬鹿しいと　ドロシーは鼻で笑った
「行くぞ……」
「待て！」
「おいお前達……その三人を始末してから来い」
ドロシーは数人の男に命令すると
ボートに乗って出発してしまった
「コナンくーん！」

「蘭姉ちゃん！　蘭姉……らあああああああああああああん！」

叫びながら走るが　モーターボートは猛スピードで去っていく
そのうち　コナンはバランスを崩して大きく転んでしまった

「らあああああああああああああああああああああん！」

もう一度叫んだ
しかし　もうその姿は見えない
と……そんなコナンの肩を一人の男が掴んだ

「へっへっへっ！　安心しな！
お前の姉ちゃんは俺達がたっぷり可愛がってやるよ」

男は舌を出しながら下品に笑った

「ひゃ～っはっはっはっはっはっ……はれぇ！？」

しかし
すぐに情けない声をだして地面に崩れ落ちる
その横では　コナンが時計型麻酔銃を構えて立っていた
それが合図……
ウォッカも素早く懐から銃を出すと
男達に銃口を向けて引き金を引いた

「ぐあぁっ！」

突然のことで一瞬遅れ
男達はその弾丸を胸に受けて力なく倒れた

「野郎！」

それを見て怒りながら
もう一人の男は小銃を構える
が……その腕を横から掴まれ
本来腕が曲がらない方へと捻りあげられた

「痛てててててて！」

腕を掴んだ手に力をこめ
眉間の血管をヒクつかせながらオリヴァーが立っていた

「舐めるなよ？　俺は酒場のケンカじゃ負けたことがねえんだ」

そう言って
オリヴァーは男の腹に拳を叩き込む
男は嘔吐にも似たうめき声をあげて倒れこんだ

「ひっ……ちくしょう！　て……てめぇら！」

最後に残った男は銃を構えながら叫んだ
それはもう悲鳴にも近い叫びだった
銃を構えているが銃口はあらぬ方向を向いている
仲間を一瞬で倒されパニックになってしまったのだろう
そんな男を哀れむように
コナンがベルトから出したサッカーボールが
男の顔面　ど真ん中に突き刺さった
ドサッ……
と　砂の音が響き渡り　浜は一瞬の静寂を取り戻した
しかし　それはすぐに破られた

「ブルルルン！」「ブウウウウウウン！」という
二つのエンジン音によって……

「おい坊主！　乗れ！」

「あいつらを追いかけるぞ！」

倒した男達が乗るはずだったボート
それにオリヴァーとウォッカが乗り込み　コナンを待っていた
コナンは一度だけうなずくと　ボートに飛び込んだ

そんなことが起こってからしばらくのこと……
コナン達とはぐれてしまったダイガクセイとキミーだったが
流れ着いたところがオーストラリアで
しかもダイガクセイが大体の場所を覚えていたため
何とかカンガルー帝国にたどり着くことができていた

「で……他の皆さんはどうしたんです？」

「さぁ……無事だと良いけど……」

「ふむ……やはりあなた達に頼んだのが間違いでしたね」

ダイガクセイの報告を受けながら
フリーザ様はキミーをちらりと見た

「すみませ～ん！　アハッ！」

「『アハッ』じゃないですよ
仕方ないですね……ケリトバさん！」

「はい……私どもも捜索にご協力いたします
しかし……海は私達の管轄外と言いますか……
うまくカンガルーのいる場所にたどり着いていれば良いのですが……」

ケリトバは渋い顔で言った
フリーザ様はそれを見て　またため息をついた
帝国の恩人であるフリーザ様の落胆に
ケリトバは少し気まずくなった

「やれるだけのことはやってみます！
おい！　ブチノメはどこだ？　ブチノメを呼んでくれ」

一番優秀な部下なのだろう……
ケリトバは一匹のカンガルーを呼ぶように部下に命令した
部下のカンガルーは深くお辞儀すると
そそくさと屋敷を出て行った

ブチノメ・スゾは帝国の中心にある宝物庫にいた
別に彼はそこに住んでいるわけでもないし
そこで働いているわけでもない
しかし彼は生真面目な男で
コラ族の独裁体制が崩壊してからはスゾ族のカンガルーとして
帝国内の見回りをするのが彼の日課となっていた
宝物庫に寄ったのはたまたまだった

たまたま……今日は宝物庫から見回りをしようと思ったのだ

「異常は特にないか……」

「はい！　ありません！」

ブチノメは独り言のつもりだったが
しかし　見張りのカンガルーは威勢よく報告した

「ブチノメ様～！」

外から自分を呼ぶ声が聞こえた
ブチノメはもう一度宝物庫を一瞥して異常がないことを確認すると
「きっとケリトバ様がお呼びなんだろうな」と予想しながら
宝物庫を出た……

「何！？」

出た瞬間　彼は驚いた
さっき自分の名前を呼んでいた部下……
彼が目の前に倒れていたからだ
ブチノメが声を聞いたときはまだ元気そうだった……
出てくるまでの数秒のうちに　一体何が？
とりあえず……
ブチノメはその部下を抱き起こそうとした
が……その時だった

「はっはっはっ……なんともか弱きことかな……
フリーザ様の力を以ってシバクゾを倒したは良いが
お前達は相も変わらず貧弱よのぅ？」

背筋がゾッとするのをブチノメは感じた
気づかなかった……
自分のすぐ横に立っていると言うのに
声をかけられるまでその存在に気づかなかった

「スゾの若いの……何を怯える？」

「あぁ……し……シメルゾ・コラ様……！」

次の瞬間
ブチノメは宝物庫から数十メートル離れた地面に叩きつけられていた
そして気を失った

「情けなや……情けなや……」

シメルゾ・コラは笑いながら言うと　静かに宝物庫に入っていった

続く

１４８．フリーザ様ＶＳ名探偵コナン（其の二）（後書き）

久々に二日連続投稿とかしました。
全盛期を思い出します。
ま、もう全部完成してるので全部まとめて出しても良いんですけど……。

そこは焦らしプレイってことで。

すみません。

１４９．フリーザ様ＶＳ名探偵コナン（其の三）

フリーザ様達のイラつきは頂点に達していた
ブチノメを呼びに行った部下は一向に帰ってくる様子がない
結局その部下を探しに別の部下を行かせる始末
コナン達の捜索もできず
カンガルー帝国ですべき準備もできず
フリーザ様の当初の予定は完全に狂っていた

「まったく……どういうことですか？
『フリーザ様ＶＳ名探偵コナン』のはずなのに
まだ対決はおろか競演シーンにも至ってませんよ！」

フリーザ様の貧乏揺すりはその速度を増していった
ケリトバも冷汗をかきながら
そわそわと部下の帰りを待った……
と……そこに待ちわびた部下が帰ってきた
息も絶え絶えに……慌てた様子で……

「ケリトバ様！　大変です！
宝物庫が……！　宝物庫が……！」

「落ち着け……ブチノメはどうした？」

「と……とにかく宝物庫へ！　大変なことが……！」

どうやら緊急事態が発生したらしい
ケリトバは困った顔でフリーザ様を見た

「まったく！　この国は来るたびに色々起きますね！
退屈させられずに結構なことです！」

「申し訳ありません……」

「とりあえず『宝物庫』とやらに行きましょうよ
それを解決するのが今は最優先なんじゃないの？」

哀がたしなめるように言うと
少しその場が落ち着いた
フリーザ様達はケリトバと宝物庫に向かうことにした

「キミーさんとダイガクセイはお疲れでしょうから
ここで大人しくしていてくださいね」

「は～い」

「ナメンナ……お二人のお相手を頼む」

「分かりました」

こうして……
フリーザ様達は宝物庫へ急いだ
遠巻きに見たところ　これといった異常は感じられないが……近くまで来ると様子が変わった

「な……！　どうしたことだ！？」

見張りのカンガルー達がやられていた
先に来ていたカンガルー達に手当てを受けているが

しかし　そのダメージは大きそうだった

「一体何が……」

「分かりません……皆『気づいたらやられていた』と……
それより大変なんですケリトバ様！」

一人のカンガルーが急かす
ケリトバとフリーザ様達はそのカンガルーにうながされるまま
宝物庫の一番奥にある部屋までやってきた

「そんな……馬鹿な！」

部屋の奥にある扉は開いていた
扉の奥には何もない部屋があるだけだ……

「『ウルルの鍵』が持ち出されているではないか！」

「何ですかそれ？」

「このカンガルー帝国に伝わる禁断の秘宝……
その秘宝につながる最初の鍵です
滅多なことがない限り触れることすら禁止されています
あのシバクゾ・コラですらその掟を破ることはしませんでした」

「それが持ち出されたと言うわけですか……」

フリーザ様はにやりと笑った

「なんだかちょっと『スペシャル的な事件』じゃないですか

ワクワクしてきましたよ……」

「不謹慎なことね……
それで？　その大事なお宝は普段から持ち出し可能な状態だったの？」

哀が聞くと　ケリトバは青ざめた顔で答えた

「いいえ！　この扉には何重もの封印が施され
数名の族長カンガルーがそろわないと開けることができないはずです！」

「ケリトバ様……」

そこに……ふらつきながら一匹のカンガルーが入ってきた

「ブチノメ！　どうした！　その傷は！？」

「大変です……ウルルの鍵は……」

ブチノメはそこまで言うと崩れ落ちた
ケリトバが何とかその体を受け止める
すると　ブチノメは搾り出すように話を続けた

「ウルルの鍵を持ち出したのは……
シメルゾ・コラ様です……！」

「何！？」

「面白くなってきましたね」

「フリーザ様ちょっと黙って……
それで？　私たちを置いてけぼりにしないで欲しいんだけど？」

哀が聞くと　ケリトバは話し始めた……

コラ族に初めてのスーパーカンガルーが現れた頃
同じくコラ族の中に恐ろしく頭の良いカンガルーが現れた
その名はシメルゾ・コラ……
彼は少し変わったカンガルーで
それまでのカンガルー帝国では皆が部族意識を持ち
他部族のカンガルーに対しては
大なり小なり敵対心を持つのが当たり前だったのだが
シメルゾはコラ族に限らず
自らの頭脳を求めるあらゆるカンガルーと交流を持っていた
相談されれば例えどの部族のカンガルーだろうとアドバイスを送り
助けを求められれば誰にでも力を貸したそうだ
いつしか……
カンガルー達は彼を「大賢者」と呼ぶようになっていった
そんな大賢者がある日……
スーパーカンガルーであるシバクゾの先祖に頼みごとをされた
「スーパーカンガルーの力を子孫に継承したい」と言うのだ
シメルゾはしばらく頭を捻ったが
結局「人間の科学力をもってしないと無理」という結論にいたった
そこで　シメルゾは一人人間界に出て
協力してくれる科学者を探して歩いた

「その話は前にも聞いたわね

シメルゾって名前は初めて聞いたけど」

「えぇ……しかし問題はその後でして……」

無事に人間の科学者を連れ帰ったシメルゾだったが
彼はその後　カンガルー帝国を去ってしまった
それ以降は時折帰ってくるだけで
カンガルー達と顔を合わせることもほとんどなくなっていた
噂では人間界を知ったことでカンガルー帝国が嫌になったとか……

「突然帰ってきたかと思えば『ウルルの鍵』を……
悪い人間と協力していなければ良いのですが」

「見張りをぶっとばして持ち出すぐらいよ？
何も企みが無いって思うのは希望が大きすぎない？」

「そうですね……その通りです！
こうなったら一刻も早くウルルに向かわねば……
フリーザ様！　お願いです！
シメルゾ様相手に我々だけでは歯が立ちません！」

「まったく情けない！
と……言いたいところですが良いでしょう
ようやっと『フリーザ様ＶＳ名探偵コナン』
カンガルー帝国フリーザ様活躍シーンが盛り上がって来ましたよ」

「『名探偵コナン』の方が行方不明だけどね……」

そんなわけで……
フリーザ様達は一路ウルルへ向かうこととなった

その頃……
「はぐれソルジャー純情派」のオセアニア基地には
ドロシーとその部下達……そしてカーターと蘭が到着していた

「おぉ……！　このメイドが将軍だと言うのか！」

「お久しぶりですぅ！　その節はお世話になりましたぁ～
……キュンキュン！」

「何てことだ……こんな……！」

ドロシーの報告を受け
オセアニア基地に残された残党を指揮していた男
バリー・キッドマン中尉は嘆くしかなかった
あの威厳に満ち溢れた将軍閣下は今やメイドだ

「だが……たとえメイドになろうと忠誠は変わらない
街の不良でしかなかった俺をここまでにしてくださったのは将軍だ！」

「萌え萌えジャンケン！　ジャン・ケン・ポン！」

「……忠誠は変わらない」

バリーは咳払いをするとドロシーを見た

「作戦は順調か？」

「はい……今日将軍を発見した無人島から
部下が数名帰って来ませんが……その他は順調です」

「規律の乱れも将軍が帰ってきた今なら……」

「ふわわぁ～！　紅茶にお砂糖と間違えて塩を入れちゃったですぅ
！」

「将軍！　そんなものこっちでやりますから！」

「ぬぅ……将軍を元に戻す方法も探らねば……」

バリーは頭を抱えた……

「とにかく……今は作戦の進行が第一だ！」

バリーはそう言うと
作戦会議をするためドロシーと部屋を出ることにした
しかしその時　何か思いついたように振り返ると
部屋の隅で二人をにらみつけていた蘭に向かって言った

「お前を将軍の世話係に任命してやる
将軍の身の回りの世話をしっかりしろよ！
分かったな！　ラン・モウリ二等兵！」

「勝手に二等兵にしないでください！」

蘭は怒鳴ったが
しかし　バリーは無視して行ってしまった

蘭はため息をつくと　カーターを見た

「はわわぁ～！　お砂糖と間違えて片栗粉を入れちゃったですぅ！」

とりあえず……

カーターに任せると紅茶がまずくなりそうなので

蘭は紅茶を入れることにした

一方その頃……

ウルルの草原をシメルゾは歩いていた

そして辺りを見回すと……それを見つけた

一見するとただの岩だが　それこそシメルゾが探していたもの

シメルゾは『ウルルの鍵』をそこに差し込んだ

鍵は岩の中に溶け込むように消えていく……

それから数秒すると

ゴゴゴゴゴ……と地の底から聞こえてくるような轟音が響いた

「来たか……」

岩が砕け……目の前には光輝く宝石が現れた

それを手に取り　シメルゾはにやりと笑う

「それから手を放しなさい！」

と……そこにフリーザ様達がやって来た

「ケリトバさん……アレですか？」

「はい……アレが宝玉『精霊の玉袋』です」

「下品な名前ね……」

「なんでも良いですよ……
放しなさい！　すぐに！　玉袋を！」

「下品……」

フリーザ様が啖呵を切る
が……シメルゾは表情一つ崩さなかった

「まったく……恐ろしいボディーガードをつけたものだ」

シメルゾはため息をつきながらケリトバを見た
そして続ける……

「ケリトバよ……チェスというものを知っているか？」

「……チェス？」

突然の質問にケリトバは首を傾げた

「知らんか？　まあお前は人間界に出たことがないからな……
チェスと言うのは人間達の遊びでな？
様々な性能を持った駒を駆使して王の駒を守り
そして逆に相手の王の駒を獲るという遊びだ」

「そ……それが何だと言うのです？」

「このゲームの難しいところはな　守りつつ攻めなければならんところだ
たとえ自らの駒で王を追い詰めてもその前に自分の王を獲られてしまえばそれまでだ
攻めなければ王を獲れんが　守りも疎かにできん……
常に全ての駒に目を配り　先の先を予想しなければ勝つことができんのだ」

ケリトバはシメルゾの言っていることが理解できなかった
そんな様子にシメルゾは「はっはっはっ」と笑うと
今度はフリーザ様を見た

「さて……わしは今追い詰められている
フリーザ様という恐ろしく強力な駒によってな……
一見するとわしの負けだ……だがなケリトバよ……
お前がわしを獲る前にわしがお前の王を獲ったらわしの勝ちだ
大丈夫か？　全ての駒に目は届いておるか？」

そう言うと……
シメルゾはカンガルー帝国のある方向を見た

「実は帝国のある場所に爆弾をしかけておいた
わしになにかあれば爆発する仕掛けのものをな……
どこに仕掛けたかは……お前の想像に任せようかのぅ」

その言葉を聞くとケリトバは一気に青ざめた
自分達がシメルゾの存在に気づいたのは宝物庫に行ってからそれまで……誰もこのシメルゾには気づかなかった……
最悪の可能性が頭の中を過ぎった

「ナメンナ！」

ケリトバは駆け出した
カンガルー帝国に向かって

「ふむ……早くした方が良いぞ
わしが死んでも爆発するし……時間が来ても爆発するからな」

「汚い話ね……」

哀も駆け出した
その場にいたカンガルー達もそれに続いた
しかしフリーザ様だけはその場に残った

「一つ……覚えておくことですね」

「なんだ？」

「このフリーザ様を駒扱いしたことを……
すぐに後悔させてあげますよ！
猿知恵が通用しないような絶大な力をもってしてね……」

それだけ言うと
フリーザ様もカンガルー帝国に引き返した
草原にはシメルゾだけが残された

「おぉ　こわいこわい……
まあ良い……目的の物は手に入ったしのぅ」

静かな草原……

しかし　しばらくすると物凄いプロペラ音と共に
軍用のヘリが一機やって来た
シメルゾは高く飛び上がってそれに乗り込む……
すると　ヘリはその身を翻して
空の彼方へと飛んでいった

さて……
その頃ケリトバの屋敷の庭では
キミーとダイガクセイ……そしてナメンナが散歩をしていた
中で座っているのにも疲れたので体を伸ばしに出てきたのだ
と……その時
庭の片隅で　キミーが何かを見つけた

「何かしらこれ～？」

キミーは呑気な声で言いながらそれを持ち上げた
銀色の球体のようだった

「何だろう？　球？」

「さぁ……私は知りませんわ？」

ダイガクセイもナメンナも首を傾げた
と……そこにケリトバとフリーザ様達がなだれ込んで来た
そしてキミーの姿を確認すると　哀が叫んだ

「キミー！　それ捨てて！」

「えぇ～？　何ですか～？」

相変わらずニコニコと呑気にしているキミー
今度はフリーザ様が怒鳴った

「空に向かって投げるんですよ！」

「は～い！」

キミーはようやっとそれを投げた
するとフリーザ様はそれをサイコキネシスでさらに空高く持ち上げ
そして一気に解体してしまった
爆発は……
起きない
カンガルー達が総出で他も探してみたが見当たらない

「助かったようね……」

哀はホッと胸を撫で下ろした
しかし　次の瞬間気になったのは「精霊の球袋」のこと

「宝玉……盗られちゃったわね」

「どうするんですかケリトバさん？
大切な秘宝だったんでしょう？」

フリーザ様と哀はケリトバの顔を見た
しかし　ケリトバは諦めていないようだった

「大丈夫です……アレは秘宝ではなく

秘宝を手に入れるための第二の鍵ですから」

「へ？」

「できればあそこで食い止めたかったですけど……仕方ないですこうなったら秘宝の眠る地で決着をつけましょう！」

ケリトバとフリーザ様達は
さっそく準備を整え　秘宝の眠る地に向かうことにした

続く

１４９．フリーザ様ＶＳ名探偵コナン（其の三）（後書き）

３日連続投稿です。
わーすごーい！

うん……すごくないね。

ってことで、どんどん脱線してきました。
でも次回コナン君が活躍するので、それで勘弁してください。

１５０．フリーザ様ＶＳ名探偵コナン（其の四）

「はぐれソルジャー純情派」オセアニア基地では
バリーがある人物の到着を待っていた
会議室にこもったまま……ただひたすら……

「待たせたのぅ……」

声と共に……待ちに待ったそのカンガルーがやって来た
バリーはその姿を確認すると一瞬笑みを浮かべ
しかしすぐに神妙な顔つきに変わると口を開いた

「例のものは？」

「この通り……なあに！　軽い仕事だったわい」

光り輝くその宝玉を目にして
会議室にいた兵士達は「おぉ～」っと声を上げた

「これで手に入るんだな？
こっちはそれ込みで作戦を立ててるんだ
『嘘でした』じゃ済まされないぞ？」

「ふん……信用しろ！　本当だ
これで手に入るのさ……カンガルーの……
大地の大いなる力の結晶が……
世界を七日で焼き尽くすことができる力がな」

そう言うと

シメルゾとバリーは一緒に肩を震わせて笑った
静かに……

そんなことが会議室で行われている頃
オセアニア基地の入り口に三つの影があった

「さて……どう忍び込んだものかな……」

「しゃらくせぇ！　正面から堂々と入りゃあ良いんだよ！」

「機長さん……それはちょっと……」

コナンとウォッカとオリヴァーだった
三人はどうしたものかとあれこれ思案する……
しかし中の様子が分かるわけでもないし
とりあえず気づかれないように潜入して
それからのことは潜入してから考える……
ということで一致した

「見張りは二人……あ！　でも一人居眠りしてやがるな」

「チャンスだね……」

入り口を見ながら三人は入る方法を探った
どうにか起きている一人を何とかできれば良いが……
銃を持っているし……できれば騒ぎを起こしたくない……
ウォッカはそう考えていたが

「おじさ～ん！」

コナンは身を乗り出して
こともあろうに見張りの兵士に声をかけてしまった

「ば！　馬鹿野郎！」

「良いから……！　二人はそのまま隠れてて……！」

コナンは小声でウォッカとオリヴァーに言うと
再び兵士に向かって叫ぶ

「おじさ～ん！　お～い！　ここだよ～！」

「何だぁ！？　おいガキ！　どっから入ってきた！」

兵士は銃を撃たなかった
子供だと思って油断しているらしく
ゆっくりとコナンの方に歩いてくる

「コラ！　ここはてめぇのいて良い場所じゃねえんだぞ！」

「んなこたぁ分かってんだよ！」

兵士がコナンの所まで来た瞬間
ウォッカとオリヴァーが飛び出した
そして後頭部と腹に　それぞれきつい一発をお見舞いすると
兵士は静かに気を失った
寝ていた方の兵士も同じく
気持ちよさそうに寝ている所を一撃……

「よし……オリヴァーこいつを着ろ！」

二人の身包みをはぐと
ウォッカはそのうち一着をオリヴァーに渡した
兵士に成りすます作戦だ

「しかし……この基地結構広そうだな……」

「手分けして探した方がいいかもな」

「いや……俺達は良いけどよ……
この坊主はどうすんだよ？」

ウォッカはコナンを見た
外で待たせるか……
そう思ったが
しかし　コナンは天井を指差した

「これ……通気口だよね
僕なら小さいからこの中を移動できると思うけど」

なるほど……
ウォッカが納得すると同時にオリヴァーがコナンを持ち上げた
コナンは網目を外すとその中に体を滑り込ませた

「無理はするなよ？」

「分かってる……二人も気をつけてね」

コナンはそれだけ言うと行ってしまった

「……最近のガキはしっかりしてんだな」

ウォッカは通気口を眺めながら呟いた
しかし　オリヴァーがその頭を小突く

「馬鹿言ってねえで　俺らも行くぞ！」

「お……おう！」

さて……
通気口を進むコナン
時折下を通る兵士達に気づかれないように
慎重に進んでいった
しかし　なかなか蘭が見当たらない
薄暗く狭い天井裏の迷路……
コナンはねずみに生まれなくて良かったと思った

「あの！　カーターさん！」

その声が聞こえてきたのはそんな時だった
コナンは声のする方に進んだ

「お嬢様は座っててください
お掃除ならカーターがやりますぅ！」

「いや……でも一応あの悪い人達に命令されてるし……」

「気にしなくて良いのですぅ！
あとでカーターが……ふにゃあ～！」

「きゃあ！　大丈夫ですかカーターさん！」

「ふえ～ん！　また掃除機で自分の顔を吸い込んじゃったですぅ」

何してんだこいつら……
予想外に平和な光景に　天井裏のコナンは思わず呆れた
しかし同時に　無事だったことが分かり安心した
コナンは部屋に他の人間がいないことを確認すると
網目を外して飛び降りた

「蘭姉ちゃん！」

「こ……コナン君！　どうして？」

「助けに来たんだよ
ウォッカさんもオリヴァーさんも一緒だよ
さあ逃げよう！」

コナンが言うと　蘭もカーターも強く頷き
そして三人で部屋を出た
……ところが
そこにちょうどバリー達が戻ってきた

「なんだ小僧！？　どこから入った！」

バリーはコナンの首根っこを掴んで持ち上げると

そのまま壁に放り投げた

「ぐあっ！」

「コナン君！」

「何だ知り合いか？　まあどうでも良い……
カーター将軍！　出撃の準備が整いました！
さあ……我々と一緒に！」

「ふえ～ん！　恐いですぅ～！」

出撃と聞いてカーターは泣き出してしまった
困った顔で頭を掻くバリー……

「面倒くさいな……もう良いや！
おい！　将軍をお連れしろ！」

バリーが命令すると　二人の兵士が入ってきて
蘭とカーターを無理矢理連れて行った

「ふえ～ん！　何ですか～！」

「やれやれ……さて我々も行くか」

「待て！　蘭を返せ！」

部屋を出て行こうとするバリーにコナンは突進した
しかし　蹴り一発で弾き飛ばされてしまう……

「くそ……！　逃がさないぞ！」

「やめておきな」

もう一度バリーに突進しようとした時
コナンの目の前にドロシーが立ちふさがった

「中尉は子供でも簡単に殺すよ？
命が惜しくないのかい坊や……」

「うるさい！　大切な奴を守れないなら命なんて……」

コナンの言葉を聞き
そしてその真剣な眼差しを見ると
ドロシーは一つだけため息をついて
それからバリーの方を見た

「中尉！　自分は後から追いかけますので先に行ってください」

「なんだドロシー？　そんなガキで遊ぶ気か？
まあ良い……早く来いよ？」

そう言って去っていくバリー……
それを見送ると
ドロシーは再びコナンを見た

「勇敢な小僧だ……名前を聞かせろ」

「江戸川コナン……」

「コナン……コナンか……お前のような奴は好きだ
チャンスをやる！　私と決闘しろ！」

「何？」

「私は素手で戦ってやる……お前は何でも武器を使うが良い
私に勝てたら……お前の大切な人の行き先を教えてやる」

コナンはドロシーの目を見て
しばらくその真意を考えあぐねていた
しかし……今はこれしかないと悟ると
臨戦態勢をとった

「行くぞ……コナン！」

ドロシーは踏み込んで回し蹴りを繰り出す
コナンは慌てて飛びのいた
と同時に体勢を立て直して時計型麻酔銃……

「やべ！　そういえば無人島で使っちまったんだった！」

一瞬できた隙……
そこにドロシーの二度目の蹴りが飛んできた

「あぶね！」

コナンは紙一重でそれをよける
少し頬をかすめた
うっすらと滲んだ血を手の甲で払う
そこへまた蹴り

蹴り
蹴り

「くっ！……ふっ！……」

コナンの口から軽い声が漏れ始める
余裕がなくなってきた
頬から一滴　また血がこぼれる
コナンはそれをまた手の甲で払った
そこへまた蹴り……
試合中にカットをしたボクサーは
その傷が気になってしまい集中力が落ちると言う……
今のコナンも同じ……
集中力を欠いたところにまた蹴り
この足さばきは見たことがある
サッカーの試合中……
そう　フェイントだ

「があっ！」

うっかりボーっとしたところに飛んできた蹴りは
まともにコナンを捉えた
コナンの体はもんどりうって壁にぶつかる
痛む体を押さえつつコナンは何とか立ち上がったが
しかし　そこにドロシーの腕が伸びてきて
コナンは首をねじり上げられた

「ぐっ……はっ……！」

「どうした？　ここまで来たんだ

ただ勇敢ってだけじゃないはずだ！」

ドロシーの手に力が入る
コナンの喉は悲鳴を上げ始めた
頸動脈が圧迫され
脳に血が回らなくなる
目がかすみ始め
意識がぼんやりとしてきた
ダメだ……やられる……
諦めかけたその時
コナンの頭の中で蘭が微笑んだ

「ん？」

と……
その時何かが宙を舞った
腕時計だった
ドロシーが「何だ？」と見ていると
コナンはその隙にキック力増強シューズに手をかけていた
レバーをひねるとシューズが輝き出す
そこに腕時計が落ちてきた

「何……！？」

ドロシーが気づいた時
コナンの足と腕時計が重なった
閃光と共に腕時計の矢は砕けつつも飛び
ドロシーの額を捕らえた

「ぐあぁぁっ！」

鮮血が飛び散り
コナンの首を締め上げていた手から力が抜けた

「げほっ！　げほげほっ！」

コナンは咳をしつつも辺りを見回した
テーブルの上に……重量感のある灰皿が見えた
額を押さえてうずくまるドロシーを横目に
コナンはテーブルに飛び乗ると
灰皿を手で押さえながらドロシーを見た
ドロシーはその気配に気づき
血まみれの額を手で押さえながらそちらを見た

「お姉さん……僕は今からこいつをお姉さんに向かって蹴る
この靴はキック力を増すんだ……相当な一撃になるよ
でもお姉さんを殺すわけにも　気絶させるわけにもいかないんだ
負けを認めて……教えてくれないかな？」

「……負けたよ」

ドロシーは「フー」とため息をついてから
少し自嘲気味に笑った
するとそこにウォッカとオリヴァーもやって来た

「坊主！　ここにいたか！」

「嬢ちゃん達は飛行機で連れてかれちまったぜ」

それを聞くとコナンはもう一度ドロシーを見た

ドロシーは一度頷くと　静かに口を開いた

「エアーズロックだ」

「エアーズロック？　オーストラリアの？」

「そうだ……」

「よし！　追いかけるぞ！」

「待ちな！」

ドタドタと部屋を出ようとしたコナン達をドロシーは引き止めた
そして振り返ったコナンに何かのキーを投げて渡した

「私の使ってる小型機がある……使いな」

「ありがとう……」

コナンは軽く頭を下げると　格納庫に向かった
そこには確かに　ドロシーの小型機がある

「坊主！　キーを寄こせ」

オリヴァーはコナンからキーを受け取ると
慣れた手つきで離陸の準備を始めた……

続く

１５０．フリーザ様ＶＳ名探偵コナン（其の四）（後書き）

記念すべき１５０話です。
いやはや、連載開始からもうすぐ3年ですが、ここまで来ましたか。
って……あれ？

……。

フリーザ様も哀も出てねえ！
どういうことなの……。

１５１．フリーザ様ＶＳ名探偵コナン（其の五）

バリー達はエアーズロックに到着していた
草原にとめた飛行機を降り
隊列を組んでぞろぞろと歩き始める

「ん？　おい総員警戒！　何かいるぞ！」

巨大な岩山を登り始めたところで　バリーはその気配に気づいて叫んだ
すると　岩の陰から大勢のカンガルー達が飛び出してくる

「かかれー！」

ケリトバが命令すると
カンガルー達は一斉にバリー達に襲い掛かった

「隊列乱すな！　相手はたかがカンガルーだ！　迎え撃て！」

岩山にカンガルー達の怒号と銃声が響き渡る
それを聞きながらケリトバはフリーザ様を見た

「やはり……シメルゾ様は悪しき人間と手を組んでいましたね」

「ふむ……しかし肝心のシメルゾが見当たりませんが？」

「えぇ？」

フリーザの言葉にケリトバはもう一度人間達を見た

確かに……どこにもシメルゾの姿はない

「まずい……シメルゾ様は先に秘宝を手に入れるつもりです！
フリーザ様！　人間達は私達が相手をしますから
シメルゾ様を探してください！　この岩山のどこかにいるはずです」

「仕方ないですね……
ハイバラさん！　ダイガクセイ！　キミーさん！　行きますよ！」

「はいはい……」

「おう！」

「は～い！」

四人は手分けして岩の間など
シメルゾが隠れていないか探し始めた
一方……

「はう～！　こわいですぅ！　戦争はダメですぅ！」

「カーターさん！　起き上がったら危ない！」

思わぬ争いに巻き込まれてカーターは泣いていた
蘭が必死になだめるがパニックを起こしている……

「立ち去れ人間ども！　お前達に秘宝は渡さん！」

その時カンガルーの一匹が蘭とカーターに襲い掛かった
が……蘭が蹴り一発で撃退する

「私達は関係ないっての！」

もう誰が敵なのか味方なのか……
蘭に撃退されたカンガルーを見て
味方のカンガルー達は憤った

「気をつけろ！　あの女できるぞ！」

「三匹がかりで行くぞ！」

今度は三匹……
蘭は歯を食いしばってそれを迎え撃とうと構える……
が　三匹は突然爆炎に包まれてしまった

「大丈夫ですか将軍！」

バズーカを持ったバリーがやって来た
カーターを心配しつつ手に持った大ぶりのマシンガンを乱射する

「ここは危険です！　私とシメルゾの所へ行きましょう！
行くぞラン二等兵！　援護しろ！」

「ラジャー！
……って違う！　二等兵じゃないってば！」

しかし　今この危険地帯を抜けるには協力しあうしかない
蘭とバリーはカーターの左右について守りを固めると
銃弾とエネルギー波の嵐の中をかけていった……

しばらく行くと……
怒号と爆音が遠く小さくなった
そこはエアーズロックの岩の間
外からは死角になっている場所を三人は走り抜けていく

「見えたぞ！」

すると　少し先の方に光が見えた
青白い……少し怪しげな光だ
三人は一気にそこに駆け込む

「シメルゾ！」

「おぉ……来たか」

そこではシメルゾが「精霊の球袋」を手に呪文のようなものを唱えていた

「外はあの騒ぎだ……さっさと秘宝とやらを出せ！」

「そうはさせませんよ！」

バリーが急かすと同時に声が響いた
四人は驚いてそちらを見る……

「フリーザ様！」

「ご主人さまぁ！」

「おや……蘭さんにカーターさん……
無事だったんですね
ダイガクセイとキミーさんに飛行機が墜落したと聞いたので
心配していたんですよ……」

「あなたほとんど気にしてなかったじゃない……」

哀は突っ込みを入れつつ
バリーとシメルゾを見た

「とにかくゲームオーバーよ
大人しく二人を解放しなさい」

その言葉と同時に笑顔で駆け出した蘭とカーター
しかし……
二人とフリーザ様達の間にバリーが立ちふさがった

「そうはさせるか！
カーター将軍もラン二等兵も　もううちの人間だ！
引き抜きは困るな」

「だから二等兵じゃないってば！」

「どうやら口で言っても分からないようですね
思い知らせてあげましょう」

フリーザ様は「やれやれ」と首を振ると
バリーとシメルゾを捻るべく　一歩踏み出した
と……その時だった

突然エアーズロックが揺れ始めた

「地震？」

フリーザ様も哀も……
外のカンガルーや兵士達も動きを止めてゴクリと唾を飲んだ
そんな中　シメルゾだけが肩を震わせて笑っていた

「おしゃべりが過ぎたようだな……
たった今『秘宝復活の儀式』が完了した」

「何ですって？」

フリーザ様が聞くと同時に
シメルゾとバリー……そして蘭とカーターは岩に飲み込まれてしまった

「な……何事ですか！？」

エアーズロックは轟音と共にバラバラに砕け散った
しかし　岩の一つ一つは地面に落ちることなく
まるでそれぞれが意志を持っているかのように宙を舞い
そして再び一箇所に集合を始めた
まるで何かを形作るように……

「な……なんだぁ！？」

遅れてやってきたコナン達……
飛行機の窓にピッタリはりつきながら
ウォッカは驚きの声をあげた

「あ……！」

「どうした？」

飛び回る岩達……
しかし一瞬
コナンはその中に蘭の姿を見つけることができた

「僕　行くよ！」

「へ？　え……！　おい坊主！」

一瞬の出来事だった
コナンはパラシュートを背負うと
飛行機のドアを開けて飛び出した
そして空中で体勢を変え
うまく岩を避けながらパラシュートを開くと
岩の集合している所に飲み込まれていった

「坊主！」

ウォッカは叫んだがコナンの姿はもう見えない
それどころか岩達の集合は完了しようとしていた
宙を飛び交う岩の数は徐々に少なくなり
そして最後の一つが定位置についた……

「これはこれは……ほっほっほっ！」

地上でそれを見上げながらフリーザ様は笑った
他の者達にそんな余裕はない……
それほどのものだった

「岩でできた……巨大カンガルー？」

哀は見たままをつぶやいた
目の前にはゴジラを思わせる姿
カンガルーの形をした巨大な岩の集合体がいた

「はっはっはっ……これがカンガルー帝国最終兵器
巨大戦闘カンガルー『カンガルザー』だ」

シメルゾは岩の塊の中で笑った
手の上では「精霊の玉袋」が光り輝いている
その光を浴びながらシメルゾは念じた
すると　カンガルザーはゆっくり口を開き
そしてまばゆい怪光線を発射した

「うおっ！」

次の瞬間　ウォッカとオリヴァーの乗っていた小型機は
凄まじい風に煽られて墜落した

「な……なんだぁ！？」

何とか飛行機から這い出してウォッカが見ると
数キロ先の大地が真っ赤に燃えていて

空高く爆煙が上がっていた
それを見てフリーザ様は思わず笑った

「ほっほっほっ！　ご覧なさいハイバラさん！
とても綺麗な花火ですよ！」

「喜んでる場合じゃないでしょ……
まったく……探偵団の子達に見せたら喜びそうね」

「確かにセンスは子供ですが……
それでも世界を七日で焼き尽くす威力があるのです」

いつの間にかやってきたケリトバが嘆きの声を上げる……

「フリーザ様！　もはや頼れるのはあなた様だけです！
どうか！　どうかカンガルザーを破壊してください！」

「よろしいんですか？　帝国の大事な秘宝なのでしょう？」

フリーザ様が聞くと　ケリトバは首を横に振った

「実際に見て分かりました……
アレは我々の手に余る代物です！
お願いします！」

ケリトバは力強く言った
フリーザ様はその言葉を聞くと小さく頷き
そしてゆっくりとした動作で
手のひらをカンガルザーに向けた

「ちょっと待って！」

「何ですかハイバラさん？」

フリーザ様が今まさにエネルギー波を放とうとしたとき
しかし　哀がそれを制止した

「忘れたの？　あの中には蘭さんとカーターがいるのよ！」

「おっと……そうでしたね」

「いや！　二人だけじゃねえぜ！」

突然会話に割って入った声……
フリーザ様と哀が振り返ると　そこにウォッカとオリヴァーがいた
「無事だったのか」と声をかけるが
ウォッカは「それどころではない」と言った感じで話を続けた

「あのコナンって坊主があの中に飛び込んだんだ！」

「何ですって！？」

哀は驚いて……
しかしどうして良いか分からずフリーザ様を見た
フリーザ様は……笑っていた

「ようやく役者が揃いましたね……
さぁ！　蘭さんとカーターさんを救い出すんですよコナンさん！
その時私が『トドメ』という美味しいポジションを奪ってあげますよ！」

フリーザ様に全てを託されているとも知らず
コナンはカンガルザーの中で気を失っていた
勢い良く飛び込んだは良いが
着地がうまくいかなかったのだ

「コナン君……コナン君……」

「ら……蘭……」

気がつくと　縄で縛られた蘭が隣にいた
コナンは驚いて飛び起きる

「蘭姉ちゃん！」

「シー！　大きい声出したら……」

「気がついたようだな小僧……」

「……バレちゃうって言おうとしたのに～」

バリーはコナンのところにやってくると
自分より遥かに小さいコナンをギロリとにらみつけた

「ドロシーの奴……しくじったのか？
よくもここまで来れたな小僧……」

コナンの頬を汗が一筋流れた

そして喉をゴクリとならすと
しかし　コナンはニヤリと笑って口を開いた

「返してもらうよ……
カーター姉ちゃんと蘭姉ちゃんを」

「図に乗るな！」

間髪いれず　バリーは持っていた小銃でコナンを殴りつけた
コナンは床に叩きつけられ
そして気がつくと額から血が流れ出ていた
そんなコナンを見下ろしながら　バリーは続ける

「お前なんぞ　ただの小僧だ！
何一つできない……何一つ守れない！」

二発目……
さらにバリーは倒れたコナンの背中を踏みつけた
背骨をギリギリ圧迫され
コナンは思わず悲鳴をあげた

「があっ……！」

「コナン君！
……やめて！　相手は子供じゃない！」

蘭はバリーに訴えた
しかし　バリーは冷ややかな表情を返すばかり……

「子供？　関係ないな……

お前達は日本人だから分からないだろうが
戦場に出て敵と向かい合えば年齢など関係ない
大人だろうと子供だろうと一人の兵士になるんだ
お前達は知らないのか？
機関銃を抱いて眠る子供達の存在を……」

バリーはさらに脚に力を込める
それは必死に逃れようともがいていたコナンに
更なる苦痛を与えた

「素晴らしいじゃないか……戦いは平等だ
きっとこいつも『子供』と呼ばれ馬鹿にされていたことだろう
だが俺の前では兵士として対等に扱われるのだ
よろこべ小僧！　お前を兵士として殺してやる！」

「そんなもの平等なんて言わない！」

蘭は怒鳴りながら体に力を入れた
が……縄は切れる様子がない
何とか縄を外す方法は……？
考えていた時
カーターが後ろから耳打ちをしてきた

「お嬢様……縄を外してあげますぅ
だからあの人をやっつけて下さい」

「カーターさん……
良いんですか？　知り合いじゃないんですか？」

「うぅ……あんな怖い知り合いなんかいらないですぅ」

そう言いながらカーターは蘭の縄を解き始めた
しかし……一方でバリーもコナンにトドメを刺そうとしていた
腰に下げていた大ぶりのナイフを取り出すと
踏みつけていたコナンを今度は壁に押し付け
ナイフを振りかぶった

「死ね……小僧！」

それだけ言って　バリーはコナンの体にナイフを突き立てた
はずだった……
しかしナイフは甲高い音を立てて床に落ちた
驚いてバリーが見ると
自分とコナンの間を一本のしなやかな脚が貫いていた

「あああああああああああああああ！」

次の瞬間
蘭の凄まじい雄たけびがこだまし
振り返ったバリーの側頭部を渾身のハイキックが襲った

「ぐっ……！　おのれ……ラン二等兵！」

気を吐いたバリーだったが時すでに遅し
蘭は追撃体勢に入っていた

「私は……！」

正拳突きの連打

「二等兵じゃないって……！」

フグトルネード

「言ってるでしょうがぁー！」

かかと落とし

……バリーの後頭部に綺麗に決まり

その大きな体は力なく崩れ落ちた

「はぁ～！　すっきりした！」

強い……

あまりの強さにコナンは唖然とするしかなかった

「さて……あとはあの悪そうなカンガルーを倒すだけね」

俄然やる気が出てきた蘭

今まで拘束されていて溜まったフラストレーションを

ここぞとばかり開放しようと息巻いた

しかしその時

突然蘭の足元に落とし穴が開いた

「えっ！？　きゃあああああああああああ！」

「蘭姉ちゃん！」

「お嬢様ぁ！」

驚いてコナンとカーターは穴に駆け寄ろうとした

が……その瞬間二人の足元にも穴が開いた

「うわあああああああああああ！」

コナンとカーターも落ちていった
その叫び声が聞こえなくなると
落とし穴は静かに閉じてしまった

「まったく……カンガルーも人間も
どいつもこいつもたるんどるのぅ……」

最後に気絶していたバリーの下にも落とし穴が開く

「もう少しわしを楽しませてくれると思ったが
つまらんつまらん……本当につまらん
仕方ないのぅ……暇つぶしに世界を燃やしてしまおうかの」

シメルゾはそう言うと　再び念じた……

続く

１５１．フリーザ様ＶＳ名探偵コナン（其の五）（後書き）

せっかくの日曜日なので二つ投稿してみました。
ってことで、話はいよいよクライマックスへ。
フリーザ様とコナンはシメルゾに勝てるんでしょうか？

まあ……勝てるだろうね……。

ところで、さっき競馬の皐月賞を見ていたんですが、そっちの方は見事に負けてしまいました。

私の財布もクライマックス＼（＾ｏ＾）／

１５２．フリーザ様ＶＳ名探偵コナン（其の六）

「おかえり……」

「は……灰原？」

穴に落とされたコナン達は外に放り出されていた
そしてそこにたまたまいたフリーザ様達と合流することができたのだ

「蘭さんもカーターもいるわね……
フリーザ様！　もうぶっ飛ばして良いわよ！」

「ほっほっほっ！　ついに主役の出番というわけですね！」

フリーザ様は嬉しそうに笑った
しかし　ウォッカは焦った表情で言う

「おい！　急いだ方が良いぞ！
あいつ……街に向かってやがる！」

見ると　カンガルザーは街に向かってピョンピョン跳び始めていた
着地の度に大地がズシンズシンと揺れる……

「あんなモノが街に言ったら……何人の人が犠牲になるか……」

「フリーザ様！　お願いします！」

皆が一斉にフリーザ様を見た
しかし　フリーザ様は依然のんびりと構えていた

「ギリギリで行った方が……格好良いでしょう」

「早く行きなさい！」

哀が怒鳴り声を上げる
フリーザ様はそれを聞くと「やれやれ」と言って
ようやくカンガルザーを追って飛びたった
しかし　その飛行スピードはかなり遅め……
不真面目極まりないその姿に哀達はひたすらイライラした

その頃
カンガルザーに乗ったシメルゾは早速最初の街を見つけていた

「ふむ……なかなか大きな街だな……
ご挨拶代わりに消し飛ばしてやるとしよう……」

シメルゾはニヤリと笑って念じる
するとカンガルザーは口を開き
再び怪光線の発射体勢を整え始めた
エネルギーが口内に集束されていく……

「ほっほっほっ！　主砲を撃つ気ですね……
そうはさせません！　私が主役として阻止してあげますよ！」

フリーザ様は一気に飛行スピードを上げ
一瞬のうちにカンガルザーと街の間に割って入ると
右手でデスボールを作り始めた

「さぁ！『フリーザ様ＶＳ名探偵コナン』のフィナーレですよ！」

「こしゃくな宇宙人め！　カンガルザー砲の威力を思い知るが良い！」

シメルゾは全快までエネルギーを溜めると
一度フリーザ様を見てから念じた
カンガルザー砲……発射！

「え！？」

その時フリーザ様の横を猛スピードで何かが通り過ぎ
そしてそれは　今まさにカンガルザー砲を発射しようとした
カンガルザーの口の中に飛び込んだ

「ば……馬鹿なあああああああああああ！」

カンガルザー砲は誤爆し……
カンガルザーを形成していた岩達は無残に崩れ
そして飛び散っていく
岩達は本来の姿を思い出したのか
空を翔けて草原まで飛ぶと
再び集合して元のエアーズロックに戻ったのだった

「な……何が起こったんですか？
私の最大の見せ場はどうなってしまったんですか？」

フリーザ様はただ呆然とその光景を見つめていた
納得がいかない……

混乱していると　突然声がした

「フリーザ様〜！」

見ると　近くをパラシュートで降下している女がいた

「誰ですかあなたは？」

「私です〜！　梓です〜！」

「梓さん！？」

フリーザ様はその名前を聞くとすぐにパラシュートを追いかけた

梓を吊るしたパラシュートはゆっくりと地面に着地する……

「どういうことですか梓さん？　説明してください」

「いや……フリーザ様に言われた通りにミラ王女を連れて来たんですよ」

コナンに見逃してもらった後

梓はフリーザ様に言われた通り米軍基地を訪れていた

『ミラ王女を戦闘機で送り届けるんですよ』

そう命令されていたからだ……

「でも……戦闘機なんて貸してくれるかな？」

梓はダメもとで頼んでみた
答えはもちろん「ＮＯ」
梓は諦めて普通の飛行機でカンガルー帝国に向かうことにしたが……その時だった

「コレ！　わしの頼みを聞けんと抜かすか！」

ミラ王女が出てきて米兵に言った
すると米兵の態度が一変
戦闘機を貸してくれることとなった

「おばあちゃんすごい！　どうしてですか？」

「ん？　あぁ……
昔ここの司令官と色々あってね……」

そんな会話をしながら梓と王女は戦闘機に乗り込んだ
しかし再び問題が発生した

「私……戦闘機操縦できないよフリーザ様……」

梓は操縦席に座ってシートベルトを締めたところでやっと気づいたが　この窮地を救ったのも王女だった

「まったく最近の若い娘は戦闘機も操縦できないのかい？
そんなんじゃ嫁の貰い手がつかないよ！　代わりな！」

「おばあちゃん……何者なんですか？」

「ミラ王女じゃ！　ひっひっひっ！」

「いや……そうじゃなくて……」

「舌噛むぞい」

こうして戦闘機で飛びたった梓……
しかし　オーストラリア上空についた時　それは起こった
カンガルザー砲の一発目が近くの平原を焼き払ったのだ
立ち込める爆煙を見ながら
梓は「またフリーザ様が事件を巻き起こしている」とため息をついた

「な～に！　まだまだ若いもんには負けん！
あんなカンガルー岩……わしが吹っ飛ばしてやるわい！」

王女はそう言うと
戦闘機を旋回させた
カンガルザーは街に向かって動き出している
梓は焦った

「おばあちゃん！」

「分かっとる！　ターゲットロック！
イーグル・ワン！　フォックス２！」

王女はミサイル発射のボタンを押した……
しかし　ミサイルは発射されない

「どうしたんですか？」

「おかしいのぅ？
イーグル・ワン！　フォックス２！」

それでもミサイルは発射されなかった
王女はモニターを確認する
どうやら発射装置が故障しているようだった

「娘っこ……頼みがある」

王女は静かに口を開いた

「何ですか？」

「わしの孫達に……『愛している』と……
『わしの預金を勝手に引き出すのはやめなさい』と伝えておくれ」

「え？　それってどういう……
きゃあああああああああああああ！」

気がつくと　梓は座席ごと外に放り出されていた

「へっへっへっ……長い人生じゃったのぅ……
じゃが……幸平（こうへい）さん……まさかあんたと同じ道を歩むとは思わなんだ
天国の幸平さん……わしもあんたと同じように突っ込むぞい！」

王女は……山下菊江（やましたきくえ）はカンガルザーの口に向かって
戦闘機の出力を全開にした

「ひ～ひっひっひっ！　カンガルー！
これが日本のカミカゼじゃ！　インデペンデンス・デ～イ！」

こうして……カンガルザーは破壊されたのであった

「あのババァ～……このフリーザ様の見せ場を！
許さんぞ　クソババァあああああああああ！」

「うぅ……おばあちゃん……
おばあちゃあああああああああああん！」

草原に
フリーザ様の怒りの雄たけびと
梓の哀しみの泣き声が響き渡った……
と……その時
少し離れた場所で一匹のカンガルーが瀕死の重傷を負っていた

「ひっひっ……まったくやってくれるわい……
人間のババァごときにここまで深手を負わされるとは……」

シメルゾは自嘲気味に笑いながら
隠れられる場所を探して這っていた
しかし　その目の前に二本の脚が立ちふさがる

「逃げられると……思ってるのかしら？」

哀だった

「こ……小娘……！」

「フリーザ様はまだ良いわよ……一応活躍してたし
私なんて今回……ただの突っ込み役だったわ……」

「なんの話だ！」

シメルゾが怒鳴ると　哀はカプセル剤を取り出した

「幸いフリーザ様はまだあなたに気づいていない
だから私があなたにお仕置きしてあげるわ……
結構美味しい役だと思わない？　ふふふ……」

「な……何をする気だ」

「この『飲んだらスケールが小さくなる薬』を飲んでもらうわ
大丈夫……死にはしないから……
ちょっとスケールが小さくなるだけだから……」

「待て待て待て！　そんな説明じゃ分からん！」

「スケールが小さくなるんだってば……良いから飲みなさい」

哀が無理矢理飲ませようとしてくるカプセル剤を
シメルゾは飲むまいと必死で抵抗したが
しかし　体に大きなダメージを受けた状態の今では
その小さな少女に抗うことすら叶わなかった
哀はシメルゾの口の中にカプセル剤を押し込むと
続けて持っていたペットボトルの水を流し込んだ

「の……飲んでしまった……！
は……早く吐かなくては！」

「ダメ……吐かせない」

哀が羽交い絞めにしたシメルゾの体……
2・3分すると　その体に変化が起こり始めた

後日……
哀とコナンは探偵団や蘭達と一緒にポアロにいた

「良いな～……コナン君達オーストラリア行ったんだ
歩美も行きたかった～！」

「良いもんかよ……大変だったんだからな」

「私は別にどうということもなかったけどね……」

探偵団の三人に「行きたかった」と非難されたコナンだったが
その体にはまだ包帯やら絆創膏やらが貼りついている
探偵団に体を揺すられるたびに傷がズキズキ痛んだ
しかし　そんな様子を見て蘭は嬉しそうに笑う

「でもありがとねコナン君！　一生懸命助けに来てくれて」

「良いな～……歩美も助けられたかった～！」

「いや……歩美ちゃん……
私は私で大変だったんだよ？」

コナンに助けられる自分の姿を想像している歩美を見て
蘭は苦笑いを浮かべた
と……その時
ポアロの扉が開いて二人の客が入ってきた

「いらっしゃ……」

そのうちの一人を見ると梓が固まった
そこにいたのはフリーザ様と……
ミラ王女だった

「ひっひっひっ！　この間は世話になったの！」

「お……おばあちゃあああああああん！」

梓は持っていたトレーを投げ出すと
ミラ王女に抱きついて泣いた

「おやおや……どうしたんだいこの子は」

「だって……死んじゃったと思ったから……」

「あの程度で死ぬほどヤワじゃないさ
突っ込む瞬間私も脱出していたんだよ」

「しかし……このフリーザ様の活躍の場を奪ってしまいました」

二人が感動の対面をはたしている横で
「ゴホン」と咳払いをしながらフリーザ様が切り出した

「どうも役者達との意思疎通がとれていなかったようですね
それがこの間の反省点です……」

フリーザ様はそう言うと
隣にいたミラ王女の肩をポンと叩いた

「今度はしっかり頼みますよ?
良いですか?　フィニッシュはこのフリーザ様ですからね?」

「分かっとるわい……任せろ」

盛り上がる二人……
しかし　コナンはフリーザ様の言葉に引っかかりを覚えた

「こ……『今度』って……?」

コナンが恐る恐る聞く
すると　フリーザ様はニヤリと笑った

「『フリーザ様ＶＳ名探偵コナン』……
やり直します!」

『もう嫌!』
コナンと蘭の心の叫びが
ポアロにこだました

……ポアロでそんなことがあったころ
オーストラリアの草原には小さなカンガルー

ワラビーの群れがいた

「俺達もカンガルー帝国みたいに国を作るべきだと思うんだ」

一匹のワラビーが言った

「あいつらは引きこもってるけど……
俺達はもっと人間達と交流して発展していくのも良いかもな」

「ワールド・ビジネス・サテライトだね」

他のワラビー達も「やんややんや」と発言する
そのうち……一匹のワラビーは
つい最近群れに加わった　年老いたワラビーに意見を求めた

「じいさんはどう思う?」

年老いたワラビーは「フー」とため息をつく

「自分……ワラビーですから……」

「じいさん……
身も心も小さいな〜」

年老いたワラビーは
スケールが小さかった……

続く

おまけ：灰原哀の愚痴

その日……フリーザ様と哀はリビングでダラダラ過ごしていた

「ねえフリーザ様……」

「何です？」

「この間……『ルパン三世ＶＳ名探偵コナン』ってのがあったじゃない？」

「……ありましたね」

「あれに関して……ちょっと気に食わないことがあるのよ」

「ほぅ……？」

「私って……暗いじゃない？」

「何ですか唐突に？
まあ……確かに陰湿を極めてますけど」

「そうなのよ……これは私の暗い生い立ちのせいなんだけどね……」

「ふむ……で？　それがどうしたと言うのです？」

「……暗い過去を背負った美少女なのよ？
私の方が『ルパン三世』のヒロインに相応しいと思わない？」

「あぁ……そう言えば皆さん暗い過去をお持ちですよね」

「そうなのよ！　それなのに何よ？
蘭さんもミラ王女も……私に比べたら全然暗くないじゃない
私の方がルパンのヒロインに絶対適してるのに」

「ハイバラさん　全然出てませんでしたね」

「おかしいわよ……こんなの……」

哀は「納得いかない」と言って頭を振った
しかし　フリーザ様はそれを見ると
ため息をついてから口を開いた

「でもハイバラさん……あなたをヒロインにした場合
ルパンさんはあなたの暗い過去に決着をつけようとするでしょう」

「そうね……」

「正直ルパンさんなら組織を潰すことも可能でしょう」

「そうね……」

「春の特番ごときで組織を潰されてみなさい
青山剛昌さんの立つ瀬が無くなってしまうじゃないですか」

「……」

しばしの沈黙……
それを破って哀は再び口を開く

「パラレルワールドってことで……」

「お黙りなさい！」

１５２．フリーザ様ＶＳ名探偵コナン（其の六）（後書き）

ってことで、フリーザ様ＶＳ名探偵コナンは終了です。
次回に関してはまだ考えていないので、またしばらく更新間隔が空くと思いますが……。

それはそうと、
今回の話で、フリーザ様と灰原さんの文字数が５０万字を超えました。
読了時間も１０００分オーバー。

長ぇ……。

でも５０万字ですか。
５０万字ってことは、もうすぐ５３万字ってことですね。

５３万字に到達したら……あのセリフが言える……！

１５３．灰原哀～横綱への道～

それは哀がリビングでくつろいでいた時のことだった
外から帰ってきたフリーザ様は
ソファーに座る哀の背中に向かって口を開いた

「ハイバラさん……『ちびっこ相撲大会』に申し込んでおきましたから」

「……」

一瞬何を言っているか理解できなかった
いや……数秒考えても
理解できたのはフリーザ様が無茶ブリをしてきたということだけだった

「はぁ！？」

その意味をなさない声を上げるのが
哀には精一杯だった

第１５３話　灰原哀～横綱への道～

哀は向かいのソファーに座ったフリーザ様をにらみ付けていた
今まで……
何度となくフリーザ様に無茶ブリをされてきたが
今回のものはその中でも群を抜くもので

なおかつ……意味不明だった

「相撲って……私が出るわけじゃないわよね？」

「ハイバラさんが出るに決まってるじゃないですか」

念のための最終確認も無駄だった

フリーザ様は悪びれる様子もなくニヤニヤ笑っている

「私……女の子なんだけど？」

「大丈夫ですよ……女の子も参加ＯＫってチラシに書いてありましたから」

「そう……でも私　相撲に興味なんか無いんだけど？って言うか……やりたくないんだけど？」

「知ってます」

「ＯＫ……一応聞いてあげるなら何で申し込んだの？」

哀はやや語気を荒げながら聞いた

すると　フリーザ様はため息をひとつしてやや真剣な面持ちで口を開いた

「ハイバラさん……組織とやらが怖いですか？」

「何よ急に……」

「怖いですか？」

フリーザ様は哀の目をまっすぐ覗き込んでくる
哀は思わずたじろいだ

「……怖いわよ」

思わず　本音を漏らした
それを聞くと　フリーザ様は「フフッ」と笑ってから続けた

「じゃあ……相撲するしかないでしょう」

「説明になってないわよ」

「分からないですかね？
度胸試しですよ！　度胸試し！
相撲を通して強い精神と肉体を作り上げるんですよ
そりゃもう……相撲をやる前と後じゃ全然違いますよ
劇的ビフォーアフターですよ
良いですか？　もしハイバラさんが相撲をやったら……」

……

『もしハイバラさんが相撲をやったら～作・フリーザ様～』

黒尽くめの男ジンはついに裏切り者シェリーの居場所をつきとめました
彼は拳銃片手にそこに乗り込みます

「久しぶりだなシェ……リー……？」

しかし　そこにいたのは相撲を極め横綱となったハイバラさん
その威圧感に思わずジンはたじろぎました

「クソ！　これでも食らえ！」

ジンは震えながらハイバラさんに銃口を向けます
でもハイバラさんは全然怖くありません

「無駄だ……横綱は銃では殺せない……」

ジンが引き金を引く前に　ハイバラさんのぶちかましが炸裂
思わずふらついたジン……
そこにトドメの上手投げ！
土俵下で見ていたデーモン閣下も大満足の横綱相撲です

「すみませんでした！」

敗れたジンは泣きながら土下座をし
そして裸で逆立ちをしながらハイバラさんに謝りました
ハイバラさんの完全勝利です

「相撲は強いんだよ！」

ハイバラさんの雄叫びがこだましました……

……

「と……このようなことに……」

「なるわけ無いでしょ！」

「とにかく　もう参加料も払っちゃいましたから……
カーターさん！　今夜はちゃんこですよ！　ちゃんこ！」

「は～い　ご主人様ぁ！」

こうして……哀の相撲大会参加は強制的に決定された

数日後……
哀の希望に反して「ちびっこ相撲大会」の当日がやってきてしまった
どうやら元太も出るらしく……
哀は応援の探偵団達と一緒に会場に向かった

「それじゃ！　行って来るぜ！」

「おう！　全員すっ飛ばして来い元太！」

父親に背中をバンと押されながら元太は控え室に向かう
探偵団の皆も　それを笑顔で見送った

「じゃ……私も言ってくるわ……」

続いて哀もあくびをしながら歩き出した
今度は探偵団の目が点になる……

「灰原……どっか行くのか？」

「控え室よ……」

「元太君を応援しに行くんですか？」

光彦の質問に　哀は面倒くさそうな表情を浮かべた

「私も出るのよ……」

「えぇ！？」

「哀ちゃんお相撲できるの？　すごーい！」

「できないわよ……フリーザ様に無理矢理参加させられたのま……適当に負けてくるわよ」

「何を言っているんですか！」

哀がかったるそうに言った時
カーターを連れたフリーザ様が怒鳴り声を上げた

「敗北など絶対に許しませんよ！
横綱審議委員会にアピールする絶好のチャンスなんですから！」

「そうですぅ！　応援してますお嬢様！」

「横綱審議委員は来てないわよ……」

それに勝てと言われても勝ちようもない……

哀は熱くなるフリーザ様とカーターを無視して控え室に向かった

「でもよぉ……灰原も出るなんてビックリだぜ」

元太は控え室で一緒になった哀に言った
手にはプラスチック製のお椀と箸……
会場でふるまわれているちゃんこを食べているようだ

「食うなら灰原の分も取ってきてやるぞ?」

「いらないわ……」

「そんなんで勝てるのかよ?」

元太はちゃんこを口にかきこみながら聞いた
哀はため息をついて首を横に振る

「勝つ気なんか最初から無いわよ……嫌々出てんだから」

「なんだ……決勝で対戦できると思ってたのによ」

「小嶋君……私のこと何だと思ってるのよ?」

哀は元太をにらみつけた
その視線が恐ろしかったのか……元太は青い顔をしている
いや……顔面蒼白だ
哀があまりに恐ろしすぎるから……と言うわけでもなさそうだ

「ちょっと?　大丈夫?」

「な……何か急に……腹が……」

「ちゃんこ食べすぎたんじゃないの？」

「まだ2杯しか……」

元太にすれば食べすぎというほどでもない……

では一体？

哀が見ると　他の子供達も何人か苦しそうにうずくまっている

「まさか……」

そのまさかだった

会場でふるまわれたちゃんこを食べた人達は皆腹痛を訴えていた

その日……

相撲大会は食中毒発生により中止となった

不謹慎な話だが……哀は相撲をとらずにすんだのだ

「私も悪運だけは強いわね……」

続く

おまけ：キャリアの部屋

「皆さん……こんにちは……

白鳥任三郎です……

え？　元気がないって？

当たり前じゃないですか……なにせ……
高木の奴が……美和子さんの唇を……
あの甘く柔らかそうな唇を……！」

「憎いか？」

「え？」

「嫉妬心で腸（はらわた）が煮えくり返っているのだろう？」

「だ……誰ですかあなたは？」

「今日のゲスト……ダースベイダーだ」

「えぇ！？　あなたがかの有名なベイダー卿ですか？」

「いかにも……それより想い人を盗られて悔しいのだろう？」

「え……えぇ……」

「ならば奪った男を憎め！　もっと怒れ！
悪いのは高木だ！　悪いのはオビ＝ワンだ！」

「オビ＝ワンは関係ないと思いますけど……」

「いや！　奴のせいだ！　８割方奴のせいだ！」

「そうなんですか？……うん……そんな気がしてきた！
憎い！　高木め！　オビ＝ワンめ！　殺してやりたい！」

「そうだ……その調子だ……気分はどうだ？」

「力がみなぎってくるようです……！」

「それがダーク・フォースだ
さあ行け白鳥よ！　世界を暗黒に染めてしまえ
高佐ファンに目にもの見せてやれ！
……あとオビ＝ワンを殺せ」

「仰せの通りに……ベイダー卿」

１５３．灰原哀～横綱への道～（後書き）

お久しぶりです。
もうそろそろ夏ですね。
そんな６月最初の日なんですが、フリーザ様と灰原さんも４年目に突入です。
色々馬鹿な話をお届けして来ましたけど、これからもそれは変わりません。
だって……馬鹿なんだもん、私が。
これから１年、またどんなフリーザ様と灰原さんが書けるのか、私自身も楽しみです。

ってことで、決意のあいうえお作文をします。
「フリーザ様と灰原さん」で……

ふ……「ふんどし姿の」
り……「りりしいお姿」
ー……「――あ、あの方は！」
ざ……「残飯を漁っておられるのか！」
さ……「最低！」
ま……「まあでも……」
と……「とりあえずそれは置いといて」
は……「早めの更新」
い……「いっぱい更新」
ば……「バテずにがんばりたい」
ら……「ラオウにも勝ちたい」
さ……「最強めざすその名も……」
ん……「んだ！　オラ、おっとりだ」

１５４．ストーカー毒島

誰しも　どうしても譲れないものがある
そこを譲ったら……
アイデンティティーがなくなる
自分の信条が大きく傷つく
そこを譲ったら……
明日から自分でいられなくなる気がする
なぜなら
そこにこだわり続けたのが今の自分であり
そこを譲った明日の自分とは別物だからだ

だから譲らない

第１５４話　ストーカー毒島

哀はフリーザ様と街をぶらついていた
ただそれだけだった……
何も悪いことはしていないし
おかしな行動をとっているわけでもない
まあ隣を歩いているフリーザ様はおかしな男だが
それはフリーザ様がおかしいのであって
哀がおかしいわけではない
だから……哀は納得がいかなかった

「なに撮ってるのよ？」

目の前では初老の男がビデオカメラを構えている
そのレンズは哀をばっちり捉えていた

「この間は思わぬ事故で撮り損ねちまったからな
今日こそ撮らせてもらうぜ　哀ちゃんよぉ！」

先ほどポアロを出たところからだった……
この男……毒島哲蔵（ぶすじまてつぞう）がついてきたのは
しかも隠れるでもなく
哀の目の前で堂々と撮影を始めるものだから
哀は少々突っ込むのが遅れてしまった

「撮ってどうする気よ？」

「テレビ局は引退しちまったからな
『ようつべ』にでもアップするかな……」

「ユーチューブでしょ……」

組織の人間が見ないとも限らない……
哀は今回も取材拒否の方向に決定した

「フリーザ様……ぶっ飛ばして良いわよ」

フリーザ様も目の前をうろちょろする毒島に苛立っているだろう……
哀はそう考えた上で隣のフリーザ様にデストロイ許可を与えた
が……

「え？　何でですか？」

フリーザ様はとぼけた顔でそう返してきた

「何でって……鬱陶しいでしょ？」

「いえ別に……
このフリーザ様が何か被害を受けているわけでもないですし……」

ここぞと言うところで役に立たない……
哀は舌打ちをすると諦めた
そして拳を握り締めると……
次の瞬間毒島の持つカメラにゲンコツを叩き込んだ

「ぬぉあ！　何しやがるんでい！」

「カメラ……壊れちゃったわね
これでもう私を撮影することはできないわ
そこ……どいてくれる？」

哀はそれだけ言うと　毒島を押しのけて行ってしまった
しかし毒島は取り乱さない
背負っていたバッグの中をあさり……
予備のビデオカメラを取り出した

「逃がさないぜ……
局のカメラマンをやっていた頃
『不死鳥の毒島』と恐れられたこの俺のしつこさを見せてやる！」

哀は「どうしようか？」と思案していた

目の前にはまたカメラを持った毒島がいる……

「お巡りさん助けて！」

可愛い子ぶって　歩いていた警官に訴えてみたが……

「うんうん……おじいちゃんに撮ってもらえて良かったね」

「おじいちゃんじゃないわよ……ねぇフリーザ様？」

「我が家のおじいちゃんです」

……フリーザ様が非協力的だったために失敗した
どうしようか？
哀は一人頭を捻った……

「はっはっはっ！　いい加減諦めろい！
良い画が撮れてるぞ？　あとは笑顔だ！　笑顔をよこせ！」

困り果てた哀を見ながら毒島が「カッカッ」と笑う
それは降伏要求だったのだろう
しかし……その余計な一言が哀にヒントを与えた

「フリーザ様……映画見ましょう」

「映画ですか……実は見たい映画が数本あるんですが……」

「えぇ良いわよ……全部見ましょう」

「おや良いんですか？　えらく気前が良いですね」

そういうわけで……二人は映画館に向かって歩き始めた
そして映画のチケットを購入し……劇場内に入って行く
何をいきなり「映画」など……
毒島は少し不思議に思ったが……カメラ片手に哀の後をついていった
三人が席に座ると　ちょうど劇場内が暗くなり
本編前のＣＭやら予告編の上映が始まった

『劇場内での撮影や録音は法令により禁止されています』

海賊版撲滅のＣＭが流れ始めた……
と同時に……哀達の後ろに座っていた子供が毒島に気がついた

「ママ！　あのおじいちゃんカメラ持ってるよ！」

「まあ本当！　スタッフの人に言わなきゃ！」

その瞬間毒島はハメられたことに気がついた
レンズ越しに見る哀は「ニヤリ」と邪悪な笑みを浮かべている

「コラ！　こっちに来い！」

「ち……違う！　俺は海賊版を作りに来たわけじゃない！」

「言い訳は警察を呼んでから聞いてやるよ！」

『Ｎｏ　Ｍｏｒｅ　映画泥棒……』

毒島はつまみ出された

「いやぁ……楽しかったですね」

「そうね……」

空がすっかり暗くなった頃……二人は映画館から出てきた

「それにしても……毒島さんはどうなったんでしょうね？」

「知らない……警察に捕まったんじゃない？」

海賊版の撮影と見なされてカメラも没収……
哀の動画が世に出回ることもなくなりハッピーエンドだ
哀は「ふふっ」とほくそ笑んだ
しかし……

「はっはっはっはっはっ！　残念だったな」

「げっ！？」

そこに毒島が現れた

「警察に捕まらなかったの？」

「おう！　映像にはお前しか映っていなかったしな
『孫を撮影することに夢中になっていた法律に無知な老人』を装ったら
奴ら今回に限って見逃してくれたわ！」

「勝手に孫にしないでよ……」

「おかげでカメラを押収されることもなかったし……
本当はもう少し撮影を続けたいところだが
それはまた後日にして……今日のところはこれにて引くとするか
今日の分は『ようつべ』にアップしておくから　楽しみにしておけよ！」

「ちょ……ちょっと！」

毒島はそれだけいうと早速家に帰り
すぐに哀の動画を編集して　ユーチューブにアップした

「まあまあの出来だな……どれどれ視聴者の反応はどうかな？」

改心の出来とまではいかなかったが……
しかし　それなりに満足のいく動画に仕立てることができた
毒島は自信を胸に……動画に対するコメント欄を開いた

『クソ動画上げんな！』

『女の子普通に嫌がってるだろ……うｐ主はキ○ガイなの？』

『ロリコン犯罪者乙』

『女の子カワユス＆カワイソス……うｐ主死ねよ』

『マジキチ消えろ！　それより隣のビジュアル系奇抜すぎワロタｗ』

あったのはそんな批難のコメントばかりだった

「や……やべぇ……」

思わぬ炎上に　毒島はすぐに動画を削除した……

……

もっともコメントは全て哀本人によるものだったのだが……

「『犯罪者は警察に通報シマスタｗｗｗ』
『この女の子の可愛さは異常』と……これで良し」

「ふむ……『灰原・自演乙・哀』って名前に改名したらどうですか？」

「どこぞのコスプレファイターみたいだからやめてちょうだい」

続く

おまけ・英祐ファイト・リターンズ

天国の母さん……元気ですか？
英祐ファイトがお休みしている間……僕の周りの環境は激変しました
例えば姉さんが見つかったり……
あと失恋したりもしました……
毛利蘭さんって言う……とても可愛らしい人でした

「でも失恋って言っても告白もしてないんでしょ？」

「す……鈴木さん!?　いつからそこに?」

「あんたが独りごと言い始めた時からずっとよ……
そうかそうか……あんたやっぱり蘭が好きだったのね」

「いや……その……毛利さんには内緒にしといてください」

「内緒にすることないじゃない!　告っちゃいなさいよ!
新一君のことなんか気にすることないわよ!
蘭の恋人なんだから蘭自身が決めることよ!」

「でも……」

「そうね……今のあんたじゃ間違いなくフラれるわ
だから男を磨きなさい!　頼りになる男になって蘭を振り向かせるの!」

「毛利さんを……振り向かせる?」

「そうよ!」

「……分かりました!　僕やります!」

「その言葉が聞きたかったのよ……
実はあんたをレベルアップさせるための教官をすでに呼んであるわ」

「そうなんですか?」

「えぇ……先生!　先生どうぞ!」

「んちゃ！　アラレだよ！」

「ってことで……則巻アラレ先生よ
先生……この子のことよろしくお願いします」

「ほーい！」

母さん……不安でなりません

１５４．ストーカー毒島（後書き）

ストッパー毒島とは何の関係もありません。

それにしても、「フリーザ様ＶＳ名探偵コナン」みたいに一綴りになっている話でなく、一話完結の話をこの間隔で更新したのは久しぶりな気がします。

次の話もなんとなく思いついているので、またすぐ更新できるかも……。

前回のあとがきで書いた「早めの更新」「いっぱい更新」が守れそうでよかったです。

またいつサボりだすかは分かりませんが……。

あと文字数が少なめだったので書いたおまけの「アラレちゃんと英祐くん」ですが、これはこれで有りな気がしてきました。

うん……。

あると思います！

え？

ない？

ダメ？

ですよねー。

１５５．ウォッカのスキャンダル

「弱みを握られる」
と……言葉にすると「なんだそんなこと」と思うかもしれないが
しかし　これがなかなかどうして厄介なもので
弱みを握られた瞬間から……
極端な話をすれば　人間は人間でなくなってしまう
自分で考え　自分の思ったように行動して生きるのが人間だからだ
が……弱みを握られた人は　握った側の人間の言いなりになるしか
ない
自分の弱みを握った人間の考える通りに動くしかない
それは……操り人形やラジコンと同じだ
心停止や脳死を迎えていなくても……もう人間ではない
ただ……それでも考えることはできる
抗う手段さえ見つければ……もう一度人間に戻ることもできる

第１５５話　ウォッカのスキャンダル

大量の買い物袋を抱え……哀は家路を歩いていた
小さな体は買い物袋の重みに振られ
左へ右へ……ヨロヨロと危なっかしい

「はぁ～……重いわね」

出かける時は大した買い物をする予定ではなかったのだが
いざ買い物を始めると必要なものがあれこれ思い出され……
結局はこの重労働だ

しかも　手伝いを頼もうにもフリーザ様も博士も連絡がつかない
仕方ない……
と　哀は諦めてまたヨロヨロと歩き出した
その時だった……

「よぅ……重そうだな？」

哀は誰かに声をかけられた
荷物を落とさないようにゆっくり振り返ると……
そこにはサングラスをかけた黒尽くめの男がいた

「……」

哀は特に何を言うでもなく歩きだした

「え！？　無視！？　ちょっと待てって！」

「何ようるさいわね……」

哀は面倒くさそうに立ち止まる
すると　腕が少し軽くなった
ウォッカが荷物を持ち始めたからだ

「手伝ってやるよ」

「と言いつつ……中の食料品に毒を……」

「仕込まねぇよ！　家まで運んでやるだけだって……」

「と言いつつ……家に着いたとたん無理矢理中へ入ると

男は強引に少女をベッドに押し倒し……服を……」

「だからしないって！」

ウォッカは叫びつつ哀から全ての荷物を受け取った
哀も怪訝そうな顔をしてはいるが
ウォッカに運ばせた方が楽なのでそれ以上は何も言わなかった
どうせ家まであと少し……
以前の哀ならそんな甘い考えは持たなかったことだろう
フリーザ様との生活で鈍った勘……
それが仇となった

「ヒッヒッヒッ！　見たぞウォッカ」

それはウォッカが阿笠宅から出てきたときのことだった
目の前に黒尽くめの男が二人現れた
痩せ型の小柄な男とガタイの良い巨漢……
漫画に良く出てくる悪役みたいだと以前から思っていた二人……

「照葉樹林（しょうようじゅりん）！　田村がビールと間違えた奴！」

二人のコードネームを叫びつつ　ウォッカは銃を取り出した
が……それは次の瞬間　甲高い音を上げて弾き飛ばされた
ガタイの良い方……
田村がビールと間違えた奴の握った拳銃から煙が上がっていた
それを見つつ……
ウォッカは静かに両手を上げた

「おいおいウォッカさんよぉ？　これは一体どういうことだ？」

「な……何がだ？　俺は何も……」

「しらばっくれてんじゃねぇよ……
今のガキ……シェリーだろ？」

「ははっ……んなわけねぇだろうが……
シェリーが今何歳だと思ってるんだよ？」

「ＡＰＴＸ４８６９……ありゃただの毒薬じゃねぇんだよな？」

「……てめぇら末端が何でそんなこと知ってやがる？」

その言葉を吐いた次の瞬間
ウォッカは壁に叩きつけられた
目の前では田村がビールと間違えた奴がこめかみをヒクつかせていた

「今質問してんのは俺達だ……」

「質問を質問で返すな……ってジョジョに書いてあったぜ？」

ウォッカは口を閉ざしたまま
ただ顔に冷や汗を一杯浮かべていた
それを見て　照葉樹林はまたニヤリと笑う

「まあどういう理由か知らねぇがお前はシェリーと繋がってる
組織に報告する気もない……それってよぉ裏切りだよなぁ？
ジンが聞いたらどうするだろうなぁ？　ヒッヒッヒッ！」

「チッ……殺すなら早く殺せ」

「殺す……？　殺す気ならとっくにやってるさ
分からねぇかな……見逃してやるって言ってるんだぜ？」

「何だと？」

ウォッカは驚いて顔を上げた
しかし　照葉樹林は「チッチッチッ」と舌を鳴らす

「ただし……『俺達の頼みを聞いてくれたら』だけどなぁ」

そう言うと　二人はウォッカを車に乗せた
１０分ほど走って　三人がやってきたのは倉庫街
そのうちの一つ……
人気（ひとけ）の無い空き倉庫に入るなり　ウォッカは聞いた

「一体てめぇらはなんだ？
ＡＰＴＸのことと言い……何者なんだ？」

「またその質問か？　まあ良い……
俺達の正体を隠したままだと話もし辛いしな」

そう言うと……
突然照葉樹林と田村がビ（以下略）は服を脱ぎ　上半身裸になった
ウォッカはそれを見ると驚いた
二人の胸には同じタトゥー……
『おかあさんへ』の文字が刻まれていた

「てめぇらは……！」

「そうだ……俺達はお前達の仲間ではない

秘密結社『とうもころし』から送り込まれたスパイだ」

秘密結社「とうもころし」……
それはウォッカのいる組織と敵対する犯罪組織だった
そしてその全容は謎に包まれている
目的……規模……ボスの名前……
分かっているのはただ一つ
その構成員の胸に『おかあさんへ』というタトゥーがあることだけだ

「お前達の組織にもぐりこみ地道に情報を盗み出していたが
言っても俺達は信用がねぇ……盗む情報にも限界がある
だが……下っ端とは言え幹部であるお前が手伝ってくれれば
今より多くの情報を盗み出すことができる……
我々のボスもさぞかしお喜びになられるだろう」

「俺に……スパイの片棒を担がせる気か？」

「そういうことだ……嫌とは言わせねぇぜ？」

「俺達の正体をバラしたくばバラすが良い
しかし……その時はお前とシェリーも道連れだ」

「そういうことよ！　なぁウォッカ？
お前はもう組織を半分裏切りかけちまってるんだ
今更俺達の手伝いをするぐらいどうってことねぇだろ？
それだけのことでお前はお前とシェリーの命を守れるんだ」

「くそ……」

ウォッカは従うしかなかった……

数日後……
ウォッカは組織の重要施設のうちの一つにやってきていた
照葉樹林達に言われた情報を手に入れるためだ
幸い今日はジンとは別行動……
うまくやればバレることはないだろう
ウォッカは組織の重要情報が保存されているパソコン端末の電源を入れた
起動するまでの時間がえらく長く感じる……
緊張が頂点に達して……喉がゴクリと音を立てた

「何してるのウォッカ……？」

「いえへぁぁあいん！？」

びっくりして意味の分からない叫び声を上げてしまった
振り返ると……ベルモットがいた

「あ……姉さん……別に何でもないですぜ？」

「何でも無いのにその端末をいじってるの？」

ベルモットはそういうと怪しく笑った
これは完全に怪しまれている……
ウォッカはとりあえず……電源を切った

「いや……手持ち無沙汰だったんで……
特に意味はないんですけどね……ははは……」

どれだけ誤魔化しになっているかは分からなかったが
ウォッカは情報を一旦諦めて引き上げることにした
ベルモットの横をすり抜けて……部屋を出る
と……その時だった

「ウォッカ……困り事ならあのタフガイに相談したら？」

立ち去るウォッカの背中越しにベルモットは言った
ウォッカはビクッと肩を震わせて立ち止まる
思い浮かぶのはフリーザ様だ……

「はは……誰のことですかい？
それに何も困ってなんかいやせんぜ？」

ベルモットはあとはクスクス笑っているだけだった
ウォッカは何だか全て見透かされてしまうような気がして
あとはほぼ逃げるようにその場を立ち去った

「確かに……もうフリーザ様に頼むしかないかもしれねぇ」

ウォッカは車を走らせながら考えた
ベルモットがあんなことを言った真意は分からない……
本当にウォッカのことを思いやったのかもしれないが
しかし……あれは忠告だったのかもしれない
『裏切ったら殺す……その前に決着をつけろ』と……
最後の逃げ道としてフリーザ様を提示してくれたのかもしれないと……そんなことを考えているうちに
ウォッカは阿笠宅にやってきていた

「ふ……フリーザ様！　フリーザ様！」

ウォッカは叫びながら扉を叩いた……

翌日……
ウォッカは例の空き倉庫にいた
照葉樹林達との約束では
今日そこで情報を渡すことになっている
数分待つと……照葉樹林と田村がビ（以下略）が現れた

「どうだウォッカ……うまくやったか？」

照葉樹林が問いかける
しかしウォッカは黙っていた
痺れを切らして今度は田村がビ（以下略）が問いかける

「どうなんだ？」

「……ない」

「何だと？」

「情報はない……」

口を開いたかと思えば……
照葉樹林と田村がビ（以下略）は顔を見合わせた

「お前……自分が何を言ってるか分かってるのか？」

「組織にバラすぞ？　シェリーのことを」

「バラせば良いでしょう！
その前にこのフリーザ様が消し去りますがね……」

その言葉と共に……
倉庫の天井からフリーザ様が降ってきた

「何だお前は！」

「そこにいるウォッカさんの本当の上司……
宇宙の帝王フリーザ様です」

「何だ……ッ！」

『何だと!?』と言うつもりだったが
言い終わる前に照葉樹林はやられていた
田村がビ（以下略）は何が起こったか分からず
一瞬遅れて銃を取り出した
が……

「ものすごく遅いですよ」

フリーザ様の一撃が先だった

「くそ……もう少し……
戦闘シーンとか書けよ……」

それだけ言うと……田村がビ（以下略）も気絶してしまった

「フン！　余計なお世話ですよ……ハイバラさん！」

二人が気絶したのを見ると　フリーザ様は哀を呼んだ
哀は物陰から現れると気絶した二人に近付き
その口の中にカプセル剤を流しこんだ

「これで良いのか？」

ウォッカが恐る恐る尋ねる

「えぇ……この『記憶が消し飛ぶ薬』を飲めば
前世に至るまで記憶がぶっ飛ぶわ……
催眠療法でも記憶の再生は不可能よ」

それを聞くとウォッカは安堵のため息をついた
これで……自分と哀が危険にさらされることはない……

「まあ……今回は私の不注意もあったしね……
貸し借りは無しにしておくわよ……私はね」

「恩に着るぜ……
……ん？　『私は』？」

なぜだか妙に引っかかる……
ウォッカが哀の最後の一言の意味を考えていると
後ろからフリーザ様が口を挟んできた

「部下の分際で私を働かせたんですから
当然それなりの対価を払ってもらいますよ？
そうですね……とりあえず組織とやらを辞めてきなさい
そしてこのフリーザ様の専属奴隷として一生をささげなさい」

「え？　マジで？」

「マジに決まってるでしょう！
早く組織に辞表を出しに行くんですよ！
何ならあることないことバラしましょうか？」

「じ……辞表じゃすまねぇよ～！」

弱みは弱みを呼び……悪循環から抜け出せない
どうあがいても絶望……
ウォッカは目の前が真っ暗になった

続く

１５５．ウォッカのスキャンダル（後書き）

スキャンダルって怖いですね。
なぜ人は人を貶めることしかしないのでしょうか？

Ａ．知らね。

それはそうと、更新スピードが上がってきました。
それと同時にテンションも上がってきました。
テンションが上がりすぎて「ひゃっはー！」って叫びそうです。
そう、北斗の拳に出てくる野盗のように。

ひゃっはー！

２１世紀に入ってまだ１０年もたってないのに、一人で世紀末です。

ひゃっはー！
水と食料を置いていけー！

と、なぜ人は自分のことしか考えないのでしょう？

Ａ．知らね。

１５６．高佐撃滅大作戦（前編）

漫画『北斗の拳』のなかで
かの聖帝サウザーは次のように述べている

「愛故に人は苦しまねばならん！
愛故に人は悲しまねばならん！
愛故に……」

愛は素晴らしいものだ
しかし　その素晴らしさ故に人は愛に狂う
これまさに「愛故に……」

第１５６話　高佐撃滅大作戦（前編）

警視庁捜査一課の刑事千葉は考える
「最近あの二人の様子がおかしい」と……
彼の目の前で　今まさにその二人……
高木と美和子の両名が口論になっている
原因は……両者にある
口論のきっかけは
「高木が最近美和子以外の女とべた付いている」
と聞いた美和子が高木を追及したことによるが
それに対し高木は
「佐藤さんこそ若い男と仲良くしゃべってたらしいじゃないですか」
と返す……
両者それなりに言い訳をしてはいる

本当にささいなケンカなのかもしれないが
しかし……最近そのささいなケンカが頻繁に起きているのだ

「高木君……佐藤君……仕事の話かな？」

咳払いをしながら目暮が止めに入った
そこでようやく二人の口論は終了したが
しかし　まだお互いをにらみ合っていた

「やっぱりおかしいよな……最近……」

二人を応援している千葉としては
「大したことはない」と思いたかった
しかし……彼は知っているのだ
確かに　最近高木は知らない女といることが多いし
美和子にしても先日知らない男と喫茶店にいるのを見てしまった
あの二人のことだから……何かの間違いだとは思うが……
コーヒーを飲みつつ千葉は「う～ん」とうなった
と……その時
千葉は休憩所にいる白鳥に気が付いた

「くっくっくっ……計画は順調そうだね」

「はい白鳥さん……あの二人　最近ケンカばかりですよ」

千葉は声をかけるのをやめて物陰に隠れた
白鳥と数名の刑事達が話をしているのは……
あの二人のこと？

「今までは大々的に妨害しすぎたね……

恋人達が破局する一番の原因は些細な行き違いの積み重ね
それを見落としていたとは僕も不覚だったよ」

「効果は上々……
この間なんか二人そろって非番だったのに
デートの約束もしなかったんですよ？」

「まさか全て我々の仕組んだこととも知らず……くくっ！」

千葉は耳を疑った……
いや……白鳥ならやりかねないか……
どうでも良い訂正を頭の中でしつつ
千葉は耳をそばだてた
白鳥はコーヒーを飲みながら刑事達に語り始める

「高木君はよくやってくれてるよ……引き立て役としてね
例えるなら美和子さんは花……高木は雑草さ
雑草の中に生える花はとても美しく見える……相対的にね
だけど……それは美和子さんにとって本当の幸せではない
美和子さん自身の輝きをもっともっと引き出してあげるべきなんだ
それがパートナーとしての最大の務めさ
でもそれは高木君では無理だ……そうだろう？」

『おまえは何を言ってるんだ』
千葉の頭の中でミルコ・クロコップが突っ込みを入れた
千葉もそれに賛同する……
本当に言っていることが滅茶苦茶すぎて
千葉は呆れるしかなかった
とにかく……これ以上二人の邪魔をされてはたまらないので
千葉は白鳥を止めることにした

「おまえは何を言ってるんだ」

とりあえず脳内ミルコと同じセリフを言いながら
千葉は白鳥達の前に現れてみた

「千葉君!?」

「聞いたなこいつ!」

颯爽と現れたつもりだったが……
次の瞬間千葉は刑事達に羽交い絞めにされてしまった
身動きが取れなくなった千葉……
その顔を見つめながら白鳥はニヤリと笑った

「千葉君……君最近働きすぎじゃないかい?」

「な……何を突然……この間非番でしたよ」

「いいや!　働きすぎだ……
どうだね?　少し休暇をとってみるっていうのは?」

「僕の口を塞ごうったってそうは行きませんよ!」

言い放ってみた
が……先輩刑事の拳が腹にめり込んだ

「千葉刑事は捜査の途中暴行事件に巻き込まれ
数日間病院で療養……お大事に」

白鳥が合図をすると
さらに無数の拳が千葉を直撃した
ぼろ雑巾のようにされていく千葉を
白鳥は冷たい眼で見下ろす

「『Ｎｅｅｄ　ｎｏｔ　ｔｏ　ｋｎｏｗ（知る必要のないこと）』
それを知ってしまった君が悪いんだよ」

薄れ行く意識の中で
白鳥の言葉がこだました……

千葉が目を覚ました時
彼はゴミ捨て場に放置されていた
空から降ってくる雨が重たかった
まるで千葉の体を地面に縫い付けているようだ……

「うぅ……高木……佐藤さん……」

このままでは二人とも白鳥の手によって……
どうにかしなくては！
力を入れたが　体がズキンと痛んだ

「くそ……俺にもっと力があれば……」

ミルコのセリフで格好良く登場したつもりがこの様だ
千葉は悔しくて涙が出てきた
口先だけでなく……本当にミルコぐらい強かったら……
力が欲しかった
ミルコのように強くなりたかった

「千葉刑事じゃない！　どうしたのよこんな所で……」

千葉が天に向かって祈っているところに
たまたまやって来た哀が声をかけた
大の大人がゴミ捨て場に捨てられているものだから
哀は驚いた様子で千葉に駆け寄った

「おやおや……刑事って自治体で回収してくれるんですね」

「そんなわけないでしょ？　誰にやられたのよ？」

後ろからひょっこり現れたフリーザ様に哀が突っ込みを入れた
と……その時　千葉は閃いた
警視庁の危機を救ったフリーザ様なら……
フリーザ様なら力を貸してくれるかもしれない

「お願いです！　俺をミルコ・クロコップにしてください！」

「おまえは何を言ってるんだ」

フリーザ様と哀は突っ込まずにはいられなかった
しかし……そのまま放置していくわけにもいかないので
二人はとりあえず千葉を連れて帰ることにした

「で？　なんでミルコ・クロコップになりたいの？」

手当てが終わって……
哀が聞くと千葉はことの顛末を話した
警視庁仕事しろよ……

哀はそう思ったが黙って最後まで話を聞いた

「しかし……白鳥さんも懲りない人ですねぇ」

「そうね……いい加減あきらめれば良いのに」

「そうなんです！
だから僕がこの手で止めなくてはならないんです」

「いや……本人達に言えば済む話だと思うけど……」

哀が言うと　千葉はポカンとした表情に変わった

「……その発想はなかった」

「一番最初に思いつきなさいよ……」

「まあでもハイバラさん……
殴り合いの方が見てて面白いですから
ここは千葉さんに力をお貸しして
是非あのお坊ちゃま刑事を鉄拳制裁してもらいましょう」

「俺をミルコにしてくれるんですか？
ありがとうございますフリーザ様！」

「せいぜい曙どまりでしょ……」

とにもかくにも……
こうして千葉は白鳥が無理矢理くれた休暇を使い
フリーザ様の下で修行を積むこととなった

その日も……朝から庭で博士のビートルを洗わされている

「ワックス塗って……拭き取る……
ワックス塗って……拭き取る……」

「フリーザ様……これ何か意味あるの？」

ワックスを塗っては拭き取る千葉を見ながら哀が聞いた

「ふむ……私も意味はよく分からないのですが
『ベストキッド』という映画でやってたので大丈夫でしょう」

「そう……」

それから……
千葉はワックスを塗って拭き取るという作業を延々繰り返した

そして数日後
千葉は上半身裸でポーズをとってみた
そしてフリーザ様と哀に尋ねる

「強くなったでしょうか？」

「数日前のあなたより戦闘力が大幅にアップしています
……多分」

「本当に大丈夫なの？」

「大丈夫ですよ……あれだけ修行したんですから

じゃあさっそく白鳥さんを倒しに行くとしましょう」

「はい！」

千葉は目暮に電話して白鳥の所在を確かめると
フリーザ様達と共に家を出た

続く

おまけ：アラレちゃんと英祐くん

蘭を振り向かせるため
英祐はアラレの指導を受けることとなった

「則巻先生……今日はどんな特訓を？」

不安たっぷりな英祐が聞く
するとアラレは満面の笑みで答えた

「今日はうんちをつんつんして遊ぼうよ！」

そう言うとアラレは木の枝を片手に「キーン」と走り出した
英祐もその後を何度か転びながらついていく
やってきたのは河川敷……
アラレはキョロキョロ辺りを見回すと
目的のものを発見した

「うっほほ～い！」

アラレは大喜びでそれに近づくと
持っていた木の枝でそれをつつき始めた

「ほれつんつん！　つんつくつん！
ねぇねぇ！　ぴーすけ君も一緒にやろうよ！」

「英祐です……
則巻先生……そんなことで蘭さんは振り向いてくれるんですか？」

「わかんない！　きゃはははははは！」

アラレは大笑いしながら目の前に落ちている排泄物をつつき続ける
その様子を見ながら……英祐は大きなため息をした
と……その頭をいきなり園子が小突く

「何してるの？　先生が『やれ』ってんだからやんなさいよ」

「えぇ！？　でも……」

嫌がる英祐だったが……
園子は英祐の肩に手をめり込ませながら
どこからか拾ってきた木の枝を差し出した

「やんなさい……！」

「……はい」

母さん……高校生にもなってこんなことするとは思いませんでした
……

英祐は真っ青に晴れた空に向かってつぶやいた

１５６．高佐撃滅大作戦（前編）（後書き）

オリキャラが一切出てこない話を、本当に久々に書いた気がします。
いつぶりでしょうか？
思い出せません。
今回は極力オリキャラを出さないようにがんばりました。
北京だってがんばってるんだから、シジミがトゥルルってがんばりました。

がんばった結果がこれだよ！

でも、後編ではちょっとした脇役としてオリキャラが出てきます。
うわぁ……。

まあ、村人Ａみたいな感じなんで勘弁してください。

村人Ａだって生きてるんです！
この作品を通して……
私はそれを全世界に訴えたい！

「おれは何を言ってるんだ」

１５７．高佐撃滅大作戦（後編）

「さて……今日の作戦が終了すれば
高木と美和子さんの仲は決定的に破壊されるでしょう」

一緒にやってきた刑事達に言いながら
白鳥はいやらしい笑みを浮かべた
待ちに待ったこのときのため……
白鳥は取っておきの秘策を用意していたのだ

「例の人達は？」

「はい……捜査協力という名目で来てもらいました」

「そうですか……順調で何より……」

部下の報告を受け
白鳥は笑いが止まらなかった
ダメだ……まだ笑うな……
そう自分の心に念じてみても
どうにも笑いが止まらなかった
が……その時だった

「そこまでだ！　白鳥任三郎！」

千葉とフリーザ様達が現れた

「高木と佐藤さんはこのままゴールインしますよ
なぜなら……この僕があなたを倒すからです！」

「貴様千葉ぁ！　邪魔だてする気か！」

啖呵を切る千葉に
刑事達は一斉に殴りかかる
が……それを白鳥が止めた
それどころか　白鳥は進んで千葉に歩み寄った

「君は分かっていないな……
僕のこの美和子さんへの想いの強さを」

「そんなもの！　高木のそれに比べれば！」

「どうかな？　受けてみるかい？」

そう言うと白鳥は腰を沈めて右腕を大きく引き
拳法家のような構えをとった
千葉は一瞬たじろいだが
しかし歯を食いしばって自分の頬を叩くと
ファイティングポーズをとった

「来い！　修行の成果を見せてやる！」

「そうですよ千葉さん！」

「がんばんなさいよ」

フリーザ様と哀の応援を受け
千葉はさらに自分の力が強くなったような気がした
これが絆の力……誰かを思いやる心の強さなんだな……

千葉はそう思いながら白鳥の攻撃を待った

「覚悟は良いようだね……」

白鳥は一瞬ニヤリと笑った
しかしすぐにキッとした表情に変わると
力強く踏み込んだ

「ウルトラスーパーズビズバメチャンコキャリアパーンチ！」

まっすぐ伸びてくるナヨナヨパンチ
千葉はその軌道を良く見ると
白刃取りの要領でそれを受け止めにかかる

「遅い！」

千葉は叫びつつ両手で白鳥の腕をキャッチ……
したと思ったのだが
ウルトラスーパーズビズバメチャンコキャリアパンチは
まるでジャイアンパンチのように千葉の顔にめり込んでいた

「ひでぶぅッ！」

「わあ！　何してるんですか千葉さん！」

フリーザ様達が見守る目の前で
千葉は鼻血を盛大に噴出しながらダウンした

「立て！　立つんだ千葉ぁ！」

哀も声援を送るが……
千葉は完全に伸びていた
絆のや思いやりの心という抽象論では
結局何も解決しなかったのだ

「見たか！　これがキャリアの力だ！
これが美和子さんを想う僕の愛だ！」

「こっちはこっちで抽象論だと思うけど……」

「抽象論で結構！　最後に笑うのはやはりキャリアなのさ
色恋沙汰にしたってそれは同じ……
高木と美和子さんの関係は今日で終わり
そして美和子さんは白鳥美和子になるのさ！」

「ヘタレのくせにえらい自信ですね
そんなに今回の作戦とやらはすごいんですか？」

フリーザ様が聞くと白鳥は大きく頷いた
そして……少し離れたところに停まっているパトカーを指差した
フリーザ様と哀が見ると……
中には美和子と　知らない男が乗っていた

「ふふっ……彼女の名前は森下結衣（もりしたゆい）さん
そして一緒にいるのは彼女の旦那さんだよ……
どうだい？　美和子さんそっくりだろう？
彼女達には今日『捜査協力』という名目で来てもらっている」

「何をする気？」

「なに……ちょっと二人でキスをしてもらうだけさ
……高木君の目の前でね！」

「なるほど……高木さんに『佐藤さんの浮気』と思わせるわけですね」

「その通り！　どうだい？
最近ケンカが増えてきた二人にとっては致命的だろう？」

白鳥はそう言って高らかに笑った
しかし……哀は考える

「今の話……私達にして良かったの？」

「へ？……あ！　しまった！」

あせる白鳥……
その姿を見て　フリーザ様はニヤリと笑った

「黙っていてあげても良いですけど？
その代わりとして　当然見返りがあるんですよね？
今欲しいものは特にないので現金だとありがたいです」

「私プラダで良いわ……当然新作ね」

「わ……分かったよ」

白鳥は何とか二人の口止めをすると
さっそく高木の元へと向かった……

高木は家の近くの喫茶店でぼけーっとしていた
コーヒーが冷めるのも気にせず
彼が考えているのは美和子のことだった

「やっぱ……俺から謝った方が良いよなぁ……」

最近なぜか自分の周りに女性達が寄ってくるのは事実だ
しかし……高木はそれらの女性とやましい関係は持っていない
高木の首筋についたキスマークも
先輩刑事がストローで吸引してきた際についたものだ
高木に落ち度はない……
しかし　美和子の方の噂話を引き合いに出してしまった
結果……ただ謝れば済む話がここまでこじれてしまったのだ

「よく考えてみれば……
佐藤さんは前も食べ物につられて合コンに行ったりしてたし
俺の誤解なんだろうな……」

やっぱりちゃんと謝ろう
そう決心して　高木は携帯を取り出した
と……その時だった
高木は窓の外にその人物を見つけた……

「佐藤さん……？」

そこにいたのは森下夫婦だった
二人は白鳥に言われたとおりに喫茶店の前で立ち止まる

「高木君の様子は？」

白鳥は無線で　喫茶店に張り込んでいる刑事に聞いた

『高木刑事は森下さん達に気づいた模様
作戦決行するなら今です！』

「分かりました……それでは森下さんお願いします！」

白鳥が言うと
高木が見るその目の前で……二人はキスをした

「……！」

高木は言葉も出さず
ただ口を大きく開けたまま固まってしまった

「高木君の反応はどうですか？」

『成功です！　呆然と二人を眺めています！』

興奮を抑えきれない様子の刑事……
その目の前で高木はただ二人を見つめていた
そして数秒後……
ようやくその唇が動いた

『高木刑事が何か言おうとしています』

「ふむ……どんな失望の言葉が出てくるか楽しみですね
一文一句聞き逃さないでください」

白鳥の指令に「はい」と答えつつ刑事はその言葉を待った

「……あの人　佐藤さんにそっくりだな」

『えぇ!?』

無線から刑事の驚く声が響いた

白鳥がどうしたのか尋ねると……刑事は作戦の失敗を告げた

「馬鹿な……そんな馬鹿な……！」

「分かったでしょう白鳥さん……あなたと高木の違いが」

そこに千葉がやってきた

「ふ……ふざけるな！　まだ終わっちゃいないさ！」

「もうお終いなんですよ……

今度はあなたに休暇をとってもらいます！」

「ほざきやがってノンキャリのデブが！

ウルトラスーパーズビズバメチャンコキャリアパ～ンチ！」

白鳥は怒りの全てを右の拳に集め

それを千葉に向かって解き放つ

しかし　その時フリーザ様が叫んだ

「修行を思い出すんですよ千葉さん！」

「修行……」

ワックスを塗って拭き取り続けた数日間……
千葉はワックスを塗る動作で腕をくるりと回した
するとそれは回し受けの形になり
白鳥のなよなよしたパンチの軌道をそらしてしまった

「なんだと!?」

「今度は僕の番ですよ!」

驚愕のあまりがら空きになった白鳥のガード……
千葉はそれを見逃さず
懇親の一撃を叩き込んだ

「ノンキャリ・左ハイキ〜ック!」

「ぐあああああああああああ!」

ミルコがのり移ったかのような千葉の蹴りを受け
白鳥は大げさに叫びながら地面に転がった

「ぎゃあああああああああああ!」

そして千葉も悲鳴を上げながら地面に転がった……
驚いて　フリーザ様と哀が駆け寄る

「どうしたんですか?」

「慣れないハイキックなんかやったから……
股関節の筋をやっちゃったみたい……」

「ダサ……何やってんのよ」
千葉はどこまで行っても千葉だった……

一方高木は携帯で美和子にメールを打っているところだった
と……そこへ

「高木君……」

偶然かそれとも……
美和子がやって来た
高木は驚いてメールを打つ手を止める

「ここ良い？」

美和子はそう言うと高木の向かい側の席に腰掛けた
そして　そのまま何を言うでもなく
高木の顔をジーっと見てくる
その視線に気圧されて高木は口を開いた

「あ……あの……すみませんでした！
あの……『誤解です』って言えば済むことなのに……
本気で疑ってたわけじゃないのに……
本当に！　佐藤さん一筋です！
信じてください！　ごめんなさい！」

「おまえは何を言ってるんだ」

そうは言いつつも　美和子は微笑んでいた

「私も……疑ってごめん……
それと……高木君一筋だから」

「佐藤さん……」

二人はぎこちなく笑った
そして……
また仲良くおしゃべりを始めた

「くそ……なぜだ……！」

遠巻きに二人の様子を見ながら白鳥は嘆いた
そこにフリーザ様と哀がやってくる

「あの二人はきっと運命の赤い糸で結ばれてるのよ」

「そんな糸！　切断してやるさ！
こうなったら……帰って次の作戦を……」

「まあどうでも良いですが……」

ヨロヨロと立ち去る白鳥……
その首根っこを捕まえながらフリーザ様が切り出した

「私達との約束はまだ生きていますからね」

「えぇ！？」

「当たり前でしょう……
勝手に失敗したのはそっちなんですから
まあ今日は初回ですし
持ち合わせの現金全部で勘弁してあげますよ」

「初回って……まさか……！」

白鳥は愕然とした
しかし　そこにさらに容赦ない哀の言葉が突き刺さる

「言う通りにしないと全部バラすわよ？
これから毎日プラダを買おうぜ？」

哀はそう言ってニヤニヤ笑いながら白鳥の足を踏みつけた
逆らえば……永遠に美和子に嫌われかねない
白鳥は頭が真っ白になった

続く

１５７．高佐撃滅大作戦（後編）（後書き）

「オリキャラが出てこない話は何話ぶりなんだろう？」という話を前回しましたが……
調べてみたら１００話「フリーザ様と灰原さん」以来でした。
１００話以降……これでもかってくらいオリキャラ書いた気がします。

もうね……出すぎ。

しかし、そんな彼らに負けず劣らず、高木＆佐藤両刑事も出てる気がします。
多分、出番ランキング作ったら、フリーザ様、哀に次ぐくらいの勢いじゃないでしょうか？
そういや、一回主役だった気が……。
それだけ使い勝手が良いってことなんですけどね。

何だろう……すごく、いじりやすいです……。

つまり、高佐いじりです。
『高佐いじり』

すごく卑猥に聞こえるのはなぜでしょう？

１５８．蘭ボー～怒りの脱出～

目が覚めたら……自分がどこにいるかも分からない
と……そんなことを体験する人間は希だろうが
しかし　毛利蘭は今まさにそんな状況の中に置かれていた
街を歩いていたところまでは記憶があるのだが
その先がどうにも思い出せない
ただ……手足が縛られているので
どうやら「誰かにさらわれた」と考えた方が良さそうだ
では誰に？
答えはすぐに出た
蘭が閉じ込められていた部屋に
人相の悪い男達が入ってきた……

第１５８話　蘭ボー～怒りの脱出～

「やあ……わざわざ来てもらって済まなかったねぇ」

蘭の目の前で　男はペコリと頭を下げながら言った
一見丁寧な対応に見えるが
それからは誠意の欠片も感じられなかった

「あなたみたいな人が私に何の用ですか？」

蘭は聞いた
男の顔はテレビで何度か見たことがある……
たしか衆院議員の篠上康栄（しのがみやすえい）だったか？

蘭は自分とは別世界の人間だと思っていたので
こうして拉致されている意味が分からなかった

「いやねぇ……君のお母さんいるだろう？
妃英理弁護士……とても優秀な弁護士先生だねぇ
今まで裁判で負けたことがないそうじゃないか」

「……それが何ですか？」

「うん……それがねぇ……
実は妃先生が今弁護を担当している裁判なんだけど
妃先生に勝たれると私がすごく不利益を被ってしまうんだ
だから妃先生にはこの件から降りて欲しいんだけどねぇ」

「どうせ悪いことしてたのがバレるからでしょう？」

「うん……ぶっちゃけた話そうなんだ
でもほら？　妃先生はご立派な方だろう？
いくらお金を積んでも私のお願いを聞いてくれないんだ
だから娘の君からお願いしてもらいたいんだよ」

「私だって嫌ですよ」

「大丈夫だよ
すぐに『助けてママ』って言わせて上げるからねぇ
それじゃあお前達……」

篠上は男達に目配せをした
何かを承知したのか　男達はヘラヘラと笑う
それを見届けると篠上は部屋を出て行った

「それじゃあ始めるか」
篠上と入れ代わりに
ビデオカメラを持った男が入ってきて言った

「まったく……蘭さんはどこに消えてしまったんですか？」

フリーザ様はため息をついた
三日前……
フリーザ様は蘭に人気サーカスのチケットをもらう予定になっていた
その日の朝　蘭から『今から持っていく』というメールも受けていた
しかし……それ以降蘭は行方知れずだ
フリーザ様はチケットの失踪にイラ立っていた

「でも　江戸川君の話だと家にも戻ってないらしいから
きっと何かの事件か事故に巻き込まれたと考えた方が良いわね
まあ……どうせ事件なんでしょうけどね」

哀はあくびをしながら言った
どうせコナンやその他が解決するだろう……
と……そう考えながら
しかし　その不真面目な態度にフリーザ様は憤った

「何を言ってるんですか！
蘭さんはどうせコナンさんが救出するでしょうけど
チケットはどうするんですか！
『チケットはダメだったけど蘭が無事だったから……』

っていうパターンだったらどうするんですか！」

「そんなこと知らないわよ……また貰えば？」

「あのサーカスは人気すぎてチケットの入手が困難なんです！
今回だって蘭さんの知り合いであるアイドルの
沖野ヨーコさん経由でやっと手に入れたんですからね！
まったく！　蘭さん！　どこですか！」

フリーザ様は怒りに任せて怒鳴った
すると通行人の一人がビクリと肩を震わせた
フリーザ様はその反応を見逃さない
足早に立ち去ろうとするその人をパッと捕まえた

「今の反応……さては何か知ってますね！？」

「あなたが大声出すから……ってわけでもなさそうね」

偶然か……
それは帝丹高校の制服を着た女子高生だった
フリーザ様は厳しく追及する
最初は黙っていた女生徒だったが
ついには泣き出してしまった

「ごめんなさい……私のせいです……
私があんなことしなければ……
ごめんなさい……
私のせいで毛利さんはさらわれたんです……」

「何ですって！？　さらわれた！？」

女生徒の名前は沢由津紀（さわゆづき）
彼女は三日前……街であった蘭に薬をまぜたジュースを飲ませたそうだ
ほんの嫌がらせのつもりで……
中身は下剤だと聞いていたらしいが
ジュースを飲んだ蘭は突然眠ってしまったらしい

「そしたら……突然薬をくれた人たちが現れて……」

『よくやってくれたねぇ……これはお駄賃だよ』

そう言って男は由津紀に札束をよこした
そして　続けて彼女の耳元で囁いた

『他言は無用だ……君の人生を無駄にしたくはないだろう？』

「そう言って……毛利さんを連れて行っちゃったんです……」

「そうですか……よく話してくれましたね
で？　私のチケットを持ち去ったその不届き者はどこの誰ですか？」

一方その頃
蘭は男の構えるビデオカメラのレンズとにらめっこをしていた
その怯えきった表情を眺めながら
男達は「どうしてくれようか？」とあれこれ思案すると……一人の男が蘭の胸を見下ろした

「ったく……最近のガキは発育が良いな……
なんて生意気なおっぱいだ！」

「確か……殺す以外は何しても良いんだよな？」

男達は一斉にニヤニヤと笑い出す
蘭は男達の考えていることが分かりゾッとした

「おい！　俺カメラ係嫌だぜ！」

「うるせぇな……みんな嫌だっつーの」

「三脚持ってくりゃ良いだろうが」

「そうだな……
三脚取って来るからそれまで始めるなよ！？　絶対始めるなよ！？」

男はそう言ってビデオを置くと部屋を出た
蘭は必死で身をよじって逃げようとするが適わない
そのうち男の一人が鬱陶しく思ったのか
蘭を足蹴にした

「大人しくしろガキが！」

蘭は悔しさと痛みで涙を流した
そして思うのは　こんな時いつも助けてくれた幼馴染……

「助けて……新一……」

しかし……

蘭が呟いたその名前を聞くと男達はさらに笑った

「そうだったな……お譲ちゃんあの高校生探偵に片思いしてんだったな」

そう言いつつ　男は蘭の髪を掴んで顔を上に上げさせた
そしてニタニタと薄ら笑いを浮かべながら続ける……

「実は俺達は工藤新一の彼女からも頼まれてるんだよ……
あの生意気な幼馴染を痛い目に遭わせて欲しいってな」

蘭は呆然とした
わけが分からなかった
別に付き合っているわけではなかったが
でも……「待っていて欲しい」と言われた
帰ってきたら……
きっと幼馴染以上の関係になれると
少なからず期待していた
なのに……
蘭はパニックになった
自分がこんな目に遭っているのに
新一は助けに来てくれない
どころか……グル……？
分からなくなった
頭の中で色々な感情が全部ごちゃごちゃになり……

「新一……！」

怒りの炎となって燃え始めた
刹那……蘭の髪を掴んでいた男は後ろに吹っ飛んだ

さらに別の二人も同時に鼻血を噴出して倒れる
もう一人の男は唖然としつつ床を見た
蘭を拘束していた縄が千切れ飛んで散乱している
と……ボーっとしているうちに
男は蘭に体を掴まれると
そのまま振り回され……
壁に叩き込まれた

「お待たせ～！　三脚持ってきたぞ！」

部屋に戻って来た男……
だが次の瞬間腹を正拳突きの連打が襲う
息ができなくなって男は床に突っ伏した
が……蘭は容赦することなく
その側頭部をサッカーボールのように蹴る
男は低いうめき声を上げると気絶した
部屋にいた男達は全滅……
しかし蘭の怒りは治まらなかった

「マードック……じゃなかった
新一……殺しに行くから待ってなさい！」

蘭は決意を新たにすると廊下に出た
警備に当たっていた男達が慌てて銃を取り出す
が……蘭は引き金を引く暇すら与えず
男達を次々倒していった
これは堪らん！
慌てた男達……今度はドーベルマンを連れてくる
鎖を外し……蘭を襲うようけしかけた
利口なドーベルマン達だ

主人の言うとおりに　まっすぐ蘭に突進する

「ギャン！」

甲高い声が響いた
可哀想にドーベルマン……
蘭に蹴り飛ばされ　壁に当たって動かなくなってしまった
男達はただ何が起こったかもわからず立ちすくんだ
気がついたときはもう手遅れ
蘭の拳が顔面に突き刺さっていた
男達が動かなくなったのを見届けると
蘭は廊下の置くに立派な扉を見つけた

「ここかぁー！」

扉を蹴破る
するとそこには呑気に椅子に腰掛ける篠上が一人だった

「なんだいお譲ちゃん！？
どうやって抜け出して来たんだい！？
おーい！　誰かー！」

篠上は叫んだ
が……その首を蘭が捻り上げる
万力のような力……
首の骨がギシギシと音を立てた

「マードック……じゃなくて新一はどこ？」

「し……知りません……！」

さらに力がこもる
もう首が折れてしまいそうだ

「本当……本当に知らない……！
リアルに……！　リアルに……！」

「小悪党が……あんたは用なしよ！」

蘭は篠上の腹に膝蹴りを叩き込むと解放した
そしてトタトタと走って去っていく
その背中を咳き込みながら見送ると
篠上は外の警備を担当している部下達に通信を入れた

「私だ！　小娘が逃げた！
絶対に……絶対に生かして帰すな！」

外にある見張り台で　男は通信を受けた
やれやれ……
ため息をつきつつ……男はライフルについたスコープを覗く
目の前に広がるのは篠上が所有する別荘とそれを囲む森……
木々の間を慎重に探る
小娘はどこだ？
と……その時だった

「すみません」

男は不意に声をかけられたので驚いて振り返った

目の前にはビジュアル系の奇抜な男
それと茶髪の女の子がいた

「ここに毛利蘭さんという方は来ていませんか？」

「……！　小娘の仲間か！」

「ここのようですね……ありがとうございました」

フリーザ様はお礼を言うと男を殴り飛ばした
男は思いっきり吹き飛ぶと別の見張り台にいた男を直撃……
二人仲良く地面に墜落していった

「さて……チケットを回収しますか」

「蘭さんもね……」

フリーザ様は哀を抱えると
篠上の屋敷に向かって飛び立った
と……ちょうどその下を蘭が走り抜ける
木の陰に隠れ……見張り台を伺う

「何だ……誰もいないじゃない……」

これ幸運……
蘭はしめしめとそのまま走り出した
さて……目指すは新一……
事件だ何だと言いつつ恋人をこさえ
影で自分のことを笑っていたに違いない！
蘭は怒りの炎をエネルギーに一気に森を駆け抜けた

「毛利さん！」

そこに待っていたのは由津紀だった

「え？　沢さん？　どうしたのこんな所で……？」

蘭は思わぬ学友との遭遇に驚いて立ち止まった

そんな蘭に……由津紀はゆっくり歩み寄る

「私……工藤君にね……告白したの！

『好きだ』って……

でも……フラれちゃったんだ……

でね！　思ったの！

『工藤君の心を独り占めするあなたが憎い』って……

妬ましくて……悔しくて……

思わずそのことブログに書いたの

そしたらあの悪い人たちがそれを見て……

『手を貸してくれれば痛い目に遭わせてやる』って……

私……悪魔の囁きに負けちゃって……

あなたをこんな酷い目に……ごめんなさい！

許してもらえるとは思ってない！

どんな罰でも受けます！」

由津紀は顔を上げて……歯を食いしばった

蘭に殴られても良い……

いや……殴られて当然だ

殺されても……構わないとすら思えた

「やめろ蘭ボー！　殺すな！」

トラウトマン大佐は蘭に向かって叫んだ
しかし……
蘭は首を横に振ると「ふっ」と微笑んだ

「なーんだ……そうだったんだ……」

蘭は静かに由津紀に歩み寄り
そして彼女の肩を抱いた
それを見て　トラウトマン大佐はまた叫ぶ

「やめろ蘭ボー！　殺すな！」

「殺しませんって……」

蘭はそう言うと優しく由津紀を抱きしめた

「ありがとう……助けに来てくれたんでしょ？」

「ごめんなさい毛利さん！……ごめんなさい！」

「大丈夫……大丈夫だよ……」

「やめろ蘭ボー！　殺すな！」

「っていうか誰なんですかあなたは！？」

その頃……

部下達からの連絡が無く
通信も途絶えてしまったことに篠上はイラだっていた
と……その時
ガタッと音がした
部下が報告に来たのかと思い
篠上は扉のほうを見る

「おや……蘭さんではありませんね……」

そこにいたのはフリーザ様だった

「だ……誰だね君は!?」

振り向いて人差し指を突きたてながら
篠上はフリーザ様に尋ねた
するとフリーザ様はその胸ポケットに気づいた
紙切れの先が顔を出している……
フリーザ様は篠上に近づいてそれを抜き取った

「おぉ！　これぞまさしく!」

それはサーカスのチケットだった
蘭が持っていたのを　篠上が何となく抜き取っていたのだ

「これにて一件落着！」

「待ちなさいよ……蘭さんが見つかってないでしょ?」

「うるさいですねハイバラさんは……
で?　蘭さんをどこへやったんですか?」

フリーザ様は唖然としている篠上に聞く……

「逃げてしまったんだ！　私が知りたいくらいだよ！」

「そうですか……」

フリーザ様はそれだけ言うと篠上を殴りつけた
その体は窓を突き破り
遥か彼方まで吹っ飛んでしまった

「今度こそ一件落着で良いですか？」

フリーザ様は哀に聞いた
哀は篠上の飛んでいった方を見る
篠上は夕暮れの空の中でキラリと輝く一番星に……
それを見ると　哀はやっと口を開いた

「一件落着」

「では帰りましょう」

続く

１５８．蘭ボー～怒りの脱出～（後書き）

正直、タイトルがやりたかっただけです。
反省はそれとなくしてます。

それはそうと雨ですね。
梅雨ですね。
ジメジメしていて嫌な季節です。
でも入道雲と夕立の香りが好きだったりします。

ただ、どうしても納得できないことが……。

「つゆ」って「梅雨」って書くじゃないですか？
なぜ梅の雨なんでしょう？
梅なんかとうに散ってしまったと言うのに……。
しかし梅雨とは……どういうことなの？

納得できません！

教えて梅雨前線！

梅雨「ググれカス」

１５９．猫の恩返し

動物にやさしくしたことはあるだろうか？
作者は幼少の頃より
たくさんの動物に優しくしてきた
小学校の頃は飼育係だったし
道端で血を流している小鳥を連れ帰って手当てしてやったこともある
だがおかしい……
いまだにうちの玄関を叩く美女がいないのだ
あれだけ助けてやったんだから
そろそろ美女が来てもいい頃だと思うのだが……
おかしい……

第１５９話　猫の恩返し

哀は窓辺に腰掛けて庭先を眺めていた
手にはにぼしの入った袋を持っている
それは　これからやってくるだろう来客のためのものだ
最近……
阿笠宅の庭に　一匹の猫が毎日のようにやってくる
茶色い毛色の……おそらくは雑種
人懐っこい猫だった
最初は特に気にかけていなかった哀だったが
向こうから擦り寄ってくるものだから
元々の動物好きもこうじて猫の相手をするようになった

「コナン……」

哀はその名を呟いた
とりあえず付けた名前だが
好奇心旺盛なその猫にはピッタリだと哀は思っている
同時に　メガネ面の探偵を思い浮かべながら
哀はまた庭を見渡した
その時……ガサッと音がした

「コナン？」

「にゃーん！　遊びに来たにゃ！」

現れたのは……
茶色い全身タイツを身にまとい
尻尾とネコミミを装備した謎の男だった

「……誰よあなた」

「コナンだにゃ！　にゃーん！」

そう言うと……
コナンを名乗る男は猫の様に両手両足を使って駆け寄ってきた
そして哀の肩に手を乗せて　頬をペロペロ舐めてきた

「汚いわね！」

哀の鉄拳が炸裂した
猫男は「おうふ！」と一瞬素の声を上げ……
しかし　すぐに猫らしさを取り戻すと　涙目で訴えた

「痛いにゃ……いつものように遊んで欲しいんだにゃ」

「えぇ……本物が来たらそうするつもりよ」

「だから僕が本物のコナンなんだにゃ！
そうそう……今日はいつも遊んでくれてるお礼をしに来たんだにゃ」

そう言うと　猫男は一度門を出ていった
塀の向こうからは「ガチャ」「バン！」という
明らかに車のドアを開閉する音が聞こえてくる……
そしてその数秒後
猫男は普通に二足歩行で　手に紙袋を持って戻って来た

「心ばかりの物ですにゃ」

差し出された紙袋を哀は受け取る
中にはクッキー詰め合わせとトロピカルランド優待券が入っていた

「猫の恩返しなんだから……
猫の国の王子のお妃様にしてくれるとかじゃないの？」

「いや……そういうのはちょっと……」

猫男は哀の反応に困ったような顔をし……
それからもう一度門の外に停めた車に行くと
財布をとって戻って来た

「こ……これで全部ですにゃ……」

お札を数枚取り出すと　猫男は震えながらそれを差し出した

「生々しすぎるわよ」

哀はそれを付き返す
そして　とりあえず紙袋だけ頂いてお礼を言った
いつもの恩返しができて
猫男も嬉しそうに笑うと　また哀にすがり付いてきた

「哀お姉さん大好きだにゃ！」

またペロペロと顔を舐める
哀は　今度は腰の入ったアッパーカットを下から突き上げた

「げぺぇ！」

舌を噛んだのか　猫男はしばらく悶絶していた
と……そこへフリーザ様がやって来た

「おや……今日は変な人がいますね」

てっきり哀と猫（コナン）がじゃれ合っているのだと思っていたが
見ると　全身タイツの気持ち悪い男だったので
フリーザ様は一瞬目を見開いた

「こ……コナンだにゃ……」

しかし猫男はあくまで自分がコナンだと主張する

「少し見ない間にえらい変わりようですね……変身ですか？」

「そんなわけないでしょ」

言われたままを鵜呑みにするフリーザ様に哀は突っ込んだ
と同時に……フリーザ様が持つビデオカメラに気が付いた

「あ……コレですか？　実はですね……
日売テレビの企画で『面白ペット・ビデオ大賞』というのがありまして
なんと最優秀賞に輝くとグアム旅行が貰えるんですよ！
ちょうど猫（コナン）さんもいることですし……応募してみようかと」

フリーザ様の話を聞くと
哀はなるほどと頷く反面　ため息をついた

「コナンは可愛い子よ……
でも賞が貰えるほどの変わり者だとは思わないけど？」

「何を言ってるんですかハイバラさん
こんな変な猫は世界中探したっていませんよ」

哀の言葉に首を振ると　フリーザ様は猫男を見た
哀は数秒の間　猫男を凝視してからフリーザ様に問いかけた

「コレで応募する気？」

「最優秀賞間違いなし！　グアムは頂いたも同然です」

「悪ふざけと見なされて一発アウトでしょ……」

「にゃーん！」

「黙れ」

再びすがり付いてきた猫男の顔面に　哀は容赦なく蹴りをおみまいした

猫男はもんどりうって床に倒れる

と……その衝撃でネコミミが取れてしまった

「……！？　どなたですかあなたは！？」

フリーザ様が驚愕の声を上げる

すると猫男も気が付いたのか　頭に手をやった

ドラえもんのようなことになっている……

「うわあああああああああ！

見るなぁ！　見るなあああああああああ！」

「いや……最初から分かってたから……」

バレていないとでも思っていたのか？

温度差についていけない哀はため息と共に言った

とにもかくにも……

正体がバレてしまった猫男は自分の素性を話し始めた

名前は河内章吉（かわちしょうきち）

ここ最近来ていた猫（コナン）は彼のペットらしい

「ちなみに本当の名前はセクレタリアトです」

「そう……」

章吉はセクレタリアトと二人で暮らしていた
しかし……2ヶ月前
彼は事故に遭い　記憶を失ってしまった
自分が誰なのかも分からず……
病院のベッドの上で数日前まで過ごしていたらしい

「お陰様でこの通り記憶も戻ったんですが……」

章吉は同時にセクレタリアトのことも思い出した
家には1ヶ月以上も戻っていない
近くには世話をしてくれそうな知り合いもいない
彼は走って……すぐに家に帰った

「するとそこには元気なセクレタリアトの姿が！」

誰かに餌を貰っていたのか？
章吉は気になり……次の日
外に遊びに行くセクレタリアトの後を尾行した

「それでうちに来たわけね？」

「いや～本当にお世話になりました」

章吉は笑顔で言ったが
しかしすぐにしゅんとした表情に変わってしまった

「今日はお礼と……お伝えしたいことがあってきました」

章吉はそこで一度口を閉ざした
喉がゴクリと音を立てる
眉間には深いしわ……
そんな表情でしばらくの間黙っていた
しかし　決心がついたのか彼は切り出した

「セクレタリアトは……もうこの世にはいないんです」

「え……？　だって……昨日だって……」

「そうなんです……昨日……
ここから家に帰ってくる途中で車に……」

哀は目頭が熱くなるのを感じた
しかし　どうにも泣く気になれなかった
信じられなかったというのもあるが……
目の前で「あの子」の死を語る人物が
全身タイツ姿でいるというのが一番の原因だろう

「本当は……言わないつもりでした
君の悲しむ顔を見たくなかったから……
僕がこのままセクレタリアト……
いや……コナンになりきろうと思ったんです
だけど……バレてしまったらしょうがない」

それだけ言うと……
章吉はフラフラと立ち上がり　玄関へ向かった
そして……後は何も言わずに行ってしまった

数日後……
哀はまだ悲しみが癒えきっていなかった
が……いい加減立ち直らなくてはならないということも分かっていた
哀は気晴らしにテレビを点ける
やっていたのはペットの番組……
視聴者が送って来たペットのビデオを放送しているようだ

『どのペットも可愛いですね
この中から最優秀賞を決めなくてはならないのかと思うと
いやいや……困ってしまいますね』

タレントがにこやかに言う……
どうやら数日前フリーザ様が言っていた番組のようだ
哀がそんなことを考えていると　次のコーナーが始まった

『このコーナーは番外編です
最優秀賞の選考からはもれてしまったんですが
しかし内容が面白かったので放送することにしました
投稿してくださったのは
東京都在住のペンネーム『フリーザ様』さんです』

「はぁ！？」

テレビから聞こえてきたその名前に
哀は飲んでいたコーヒーを吹き出した
そのまま画面を凝視していると　ＶＴＲが始まった
画面には……
泣きながら話をする全身タイツの男が映っていた

『これがフリーザ様さんのペット『セクレタリアト君』

一応猫だそうですが……ははっ……
これは耳が取れてしまい泣いているところだそうです』

『んなわけねぇだろ！』

お笑いタレントの的確な突っ込みが入る
スタジオは大受けしているようだったが
哀は顔を引きつらせて固まっていた
そして数秒後……

「フリーザ様あああああああああああ！」

続く

おまけ：アラレちゃんと英祐くん２

排泄物をつつき始めて数時間……
英祐は妙に清清しい気分だった
最初は周囲の視線に泣きたくなるほどだったが
今は何とも感じない
見るなら見れば良い
笑いたければ笑えば良い
『裸で何が悪い』と某ツヨシさんは言ったそうだが
それに近い開き直りだった

「ねぇねぇ！　えーすけくん！」

「へ……？　あ！　はい何ですか？」

無我夢中で排泄物をつついていたので気づかなかった
英祐は慌てて振り返ると　アラレを見た

「うんちツンツンするの楽しい？」

アラレは英祐の顔を覗き込みながら聞いてきた

「いえ……楽しくは……」

「ほよ？　うんちさんとお友達じゃないの？」

「お……お友達って……無理ですよ」

「あのねえ！　あのねえ！
うんちさんとお友達になればねえ
もっとツンツンするのが楽しくなるよ！」

「へ？」

意味が分からず呆然とする英祐を放ったらかしにして
アラレは先ほどまで英祐がつついていた排泄物を……
こともあろうに素手で持ち上げた

「きゃはははは！」

アラレは笑いながら
さらに排泄物を探し出すとそれを頭にのせた
目の前の……
いともたやすく行われるえげつない行為に

英祐はただ唖然とするしかなかった

「ほい！」

そんな英祐の頭にアラレは排泄物を容赦なく乗せた

「うあああああああああああ！」

慌てて振り払う……

しかし髪の毛にも……振り払った両手にもそれはベッタリ

英祐の全身から変な汗が噴出し

そして心を絶望感が覆い尽くした

「きゃはははははははははは！」

アラレはそんな英祐を指差し

お腹を抱えながらひたすら笑っていた

「もうやだ……こんな……こんな……！」

１５９．猫の恩返し（後書き）

来年の春のスペシャルは「アラレちゃんＶＳ名探偵コナン」で良いと思います。
でも、もしベルモットが出るとしたら、一人二役になるから大変ですね。

それにしても……ベルモットとアラレちゃん。
あんな１８０度違うキャラクターの声を同じ人が演じているなんていまだに信じられません。
どんな声帯してるんでしょうね。
摩訶不思議。

それはそうと７月です。
七夕が近いですね。
今年は短冊にどんな願いを書いてくれようか……。
最近、どんどん欲が無くなって来たので困り者です。
う～ん……

もっと面白い話が書けますように！

……かな。

１６０．こと座のベガ

七夕の伝説を知っているだろうか？
働き者の織姫と働き者の夏彦……
二人を結婚させたら　なんと二人ともニートになってしまった！
マジギレした天帝は　天の川で二人を隔て引き離した
が……冷静になって考えた天帝
ちょっとやり過ぎた感が……
そこで天帝は一年に一度
７月７日は七夕の夜に二人が逢うことを許した
ただし……
雨天中止！

第１６０話　こと座のベガ

その日……
博士は新たなる発明品を披露した
その名も『妄想力増強ヘルメット』

「何ですかそれは？」

その怪しげなネーミングを聞いて　フリーザ様は尋ねずにはいられなかった

「ふむ……簡単に説明すると　妄想力を強くする装置じゃ」

「意味が分からないわよ……」

哀が突っ込む
博士は「最後まで聞け」と苦笑いした

「妄想力を強化することによって何が可能となるか？
それは『完全なる思い込み』じゃよ」

「どういうことです？」

「例えば……『もしわしがディカプリオだったら』と考えるとする
しかし一方で『そんなことあるわけがない』とも考えてしまう
それは妄想力が弱いからなんじゃ
妄想力が強ければ自分がディカプリオと信じきることができるようになる
つまり『完全なる思い込み』じゃ」

「どうしようもない発明ね……」

哀はため息をつくと　閉じていたファッション誌を再び開いたが……そんな哀とは正反対にコナンと共に遊びに来ていた蘭はその装置に強い興味を示した

「なんだか面白そうですね！
ちょっと試してみても良いですか？」

「あぁ良いぞい！
で？　蘭君はどんなことを思い込みたいんじゃ？」

博士が聞くと蘭は顔を赤くしてから首をブンブン横に振った
『新一と恋人』と一瞬答えそうになったからだ
が……さすがにそれは恥ずかしいし
思い込んだところで虚しいだけなので　蘭は別のものを考えた

「今日は七夕だから……
『もしも私が織姫様だったら～』みたいな……」

「ふむ……簡単じゃ」

博士はヘルメットを操作すると蘭の頭にかぶせた
ウィーンという機械音が数秒響く……
それが鳴り止んだのを確認すると
博士はヘルメットを取り去った

「どうじゃ？」

「あぁ～楽しみ！　今夜は夏彦様と一年ぶりに会えるわ！」

「完璧みたいじゃな」

蘭は窓から空を眺めて目をキラキラ輝かせている
そんな様子を見て
先ほどまで興味なさそうにしていたフリーザ様も
妄想力増強ヘルメットに興味を示した

「これは面白い！
よし……次はハイバラさんで試してみましょう！
そうですね……
『靴下の臭いを嗅ぐことに人生をかける人』なんてのはどうでしょ

う？」

「嫌に決まってるでしょ！」

フリーザ様は哀の頭にヘルメットを被せようとするが
靴下の臭いなど嗅ぎたくもない……
哀は必死で抵抗した
と……揉み合っているうちに手がすべった
ヘルメットは勢いよくフリーザ様の手を離れ
テーブルの角を直撃した

「あぁー！」

ヘルメットは見事に壊れていた

「どうするんじゃ！
蘭君を元に戻せなくなってしまったではないか！」

「何！？　どうするんだよ博士！」

それまで黙って見ていたコナンが声を荒げる
それを聞くと博士はヘルメットを手にとってよく見る

「う～む……やっかいな所を壊してくれたもんじゃ
こりゃ修理に時間がかかるぞい」

「早く直せよ！」

「分かっとる！　なるべく早くするが……
とにかく時間がかかるんじゃ！

みんなは蘭君を見張っておいてくれ
何せ今の彼女は織姫なんじゃ
天の川にでも行かれたらこまるからの」

博士はそれだけ言うと　ヘルメットの修理に必要なものを買いに出かけた

さて……
残されたフリーザ様達は蘭が変な行動をしないように見張っていた
今のところは大人しくテレビを見ている……

「ひいぃぃぃぃ！」

蘭は唐突に悲鳴を上げた
フリーザ様達は驚いて蘭に駆け寄る

「どうしました？」

フリーザ様が聞くと蘭は震えながらテレビ画面を指差した
放送されているのは天気予報……
七夕だというのに　今夜の予報は雨だった

「そんな……一年に一度しか会えないのに……
ひいいぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！」

「やかましいですね……」

蘭の金切り声にフリーザ様は耳を塞いで顔をしかめた
ヘルメットの修理が終わるまでこの調子では敵わない

フリーザ様は意を決すると外に飛び出した
そして空を見上げる……なるほど
今夜には雨が降ってきそうなどんより曇り空だ
フリーザ様はそのまま飛び上がると空高くまで昇ってゆき
数秒後には雲のど真ん中に到着した

「はあああああああああああああああ！」

激しく輝くオーラを発しながらフリーザ様が気合を入れると
米花町……いや　日本の上空から雲が消えてしまった
遠くまで吹き飛ばされて見えなくなったそれを確認すると
フリーザ様は地上へ降りていった

「これで今夜は晴れでしょう
分かったら静かにしてくださいね」

「ありがとうございますフリーザ様……
ひいいいいいいいいいいいいいいい！」

「言ったそばからなんですか！？」

蘭は　今度は頭を抱えてうずくまっている
フリーザ様はため息をついた

「今日会えても次会えるのは一年後……
ひょっとしたらこれから毎年雨かもしれない！
あぁ！　結局私はお父様の呪縛から逃れられないのね！」

「どこの劇団員ですかあなたは」

突っ込むフリーザ様……
しかしその姿を見るやいなや　蘭はすがり付いてきた

「フリーザ様！　お願いです！
天帝を倒してください！　あの男が全ての元凶なんです！」

「天帝とやらを倒したら静かになりますか？」

「なります！　借りてきた猫のように！」

フリーザ様はそれを聞くと　天帝を倒すことにした
しかし……

「そもそも『天帝』とは何者なんですか？」

フリーザ様は哀に聞いた

「天帝って言うのは織姫のお父さんよ」

「なるほど……つまり蘭さんのお父さん
小五郎さんを叩きのめせば良いんですね？」

フリーザ様はそう言うとまた家を出て行った
そして数分後　小五郎の首根っこを掴んで戻って来た

「さぁ天帝さん！
二人が会って良い日を『毎月7の付く日』にしなさい！」

「パチンコ屋のＣＭみたいね……」

フリーザ様は小五郎が死なない程度にいたぶり続ける
そして毎月7日・17日・27日の逢瀬を認めるよう要求した
しかし小五郎は訳が分からない
ぼろ雑巾のようになりながら彼は訴えた

「何で俺がいたぶられなきゃいけねぇんだよ！」

「良いから『認める』と言いなさい！
『毎月7の付く日』にするんです！」

「フリーザ様！　私は毎日夏彦様に会いたいです！」

「そうですか……『毎日』認めなさい！」

「痛てててててててて！
分かった！　分かったからやめろぉー！」

小五郎が叫ぶとフリーザ様はようやく攻撃をやめた
静かになった部屋……小五郎の息遣いだけが響いた

「夏彦様との仲を引き裂いた罰！」

「うぐっ……！」

蘭がトドメを刺したので　その息遣いも聞こえなくなった

そして夜がやって来た……
フリーザ様のおかげで　気象庁が大騒ぎになったりはしたが
空には白く輝く天の川が流れた

蘭は窓辺に立ってその一つ一つが瞬くのを眺めている

「ひいいいいいいいいいいいいい！」

「今度は何ですか！？」

蘭は胸を掻き毟りながら床を転がっていた

「カササギが来て橋にならないと夏彦様に会いに行けない！
ひいいいいいいいいいいいいい！」

フリーザ様はため息をついて
それからヘルメットの修理をしている博士を見た
しかし　博士は首を横に振る
まだまだ時間がかかるのだろう
どうしたものか……
困り果てていると　横から哀が出てきた

「カササギが来なくても夏彦さんに会えれば良いのよね？」

哀が確認する
蘭はピタリと静かになってうなずいた

「ＯＫ……今連れてきてあげるからちょっと待ってて」

哀はそう言った
しかし……フリーザ様は腑に落ちない

「ハイバラさんは夏彦さんとやらを知っているんですか？」

「いいえ……そんな人知らないわよ」

「えぇ!?　じゃあどうする気ですか？
あ！　さては……光彦さんで代用する気ですね？」

「『彦』しか合ってないじゃない……
そうじゃなくてね……蘭さん織姫の中の夏彦を連れてくるのよ
さっき天帝はチョビヒゲで代用できたでしょ？
だから夏彦も現実の誰かとリンクしてると考えるのが普通でしょ」

「なるほど……で？　誰ですか夏彦は？」

フリーザ様が聞くと　哀はコナンをチラリと見た

「工藤君……ちょっと元の姿に戻りましょうか」

「え？　良いのか灰原？」

コナンは目を丸くする
哀は一度頷いてからコナンの手を引き　そのまま研究室に入った
それから机の戸棚を開け　中から薬ビンを取り出す

「新しく作った試作品よ……
ただあなた最近どんどん耐性ついてきてるから
ちょっと強めにした分副作用とかもどうなるか分からないわ
でも飲むでしょ？
せっかくの七夕の夜……ロマンチックに過ごしたいわよね？」

コナンは強く頷くと哀から薬を受け取った
そして口に流し込む……

数秒後襲ってきた激痛
でも耐えられた……蘭のためだから……
と……格好良くいきたいところだったが　コナンは違和感に気づいた

「痛てててて！　何かいつもより痛ぇぞ！
それに全然体が元に戻らないような気がするぞ？」

コナンは涙目になりながら哀を見た
哀は首を傾げながら薬ビンを見る

「あ……ごめん工藤君　間違えたわ
今飲んだのは『飲んだが最後無駄に体が痛くなる薬』だったわ
本物はこっちよ」

「ふざけんな！」

怒鳴りつつコナンは本物の試作品を受け取った
そして再度口の中に流し込む
今度は成功
コナンの体はみるみる元の姿に戻っていった

「だけど灰原……！　痛みが強くなったぞ！
くそっ！　痛えええええええええええええええ！」

「ごめん……試作品と『無駄に体が痛くなる薬』は飲み合わせ悪いのよ
仕方ないわね……モルヒネ打ってあげるわ」

「コナンさん完全に薬物中毒ですね」

このままでは痛みは消えても体を破壊されかねない……
そう考えた新一はモルヒネを断り　痛みを気合で我慢することにした

「夏彦様！」

愛しの蘭が抱きついてくる
しかし……痛すぎて新一にはもう何も分からなかった

その後……
何とか修理が完了した妄想力増強ヘルメットによって
蘭は織姫ではなく元の毛利蘭に戻ることができた
新一もその後コナンに戻ってしまったが
無駄な痛みだけはその後しばらくの間続いたという……
そしてそれから数日後のことだった
阿笠宅にコナンがやって来た

「灰原さん……もう解毒剤の研究はしなくて良いですよ」

開口一番コナンはそう言った

「何よ……まだ怒ってるの？」

哀は恐る恐る訪ねた
しかしコナンは穏やかな顔つきで首を横に振る

「いいえ……むしろ感謝しています
あの激痛のおかげで私の心から全ての邪念と煩悩が消え去りました
とても清らかな気分です……
そして私は悟りました……私はコナンになるべくしてなったんですね

だから私は『江戸川コナン』を自分として受け入れることにしました」

「何言ってるのよ……組織はどうするのよ？　蘭さんは？」

「組織は悪事を働いていますが……
きっと彼らには彼らの苦悩があるのでしょう
今はその苦しみを少しでも和らげてあげたいと思っています
蘭さんは……この姿であろうとも支えることができるでしょう」

「しっかりしなさいよ」

彼の名前は江戸川コナン
体は子供　頭脳は仏
煩悩無しの悟り人
宇宙の真理はいつも一つ……

続く

１６０．こと座のベガ（後書き）

ってことで七夕です。
皆さんは星空に何をお願いするか決めましたか？

……あ、そうですか。

それはそうと、フリーザ様と灰原さんの文字数が前回をもって５３万になりました。
普通なら中途半端な数字ですが、フリーザ様的に言えば５３万は節目の数字です。
いや、しかし……最初は軽いネタのつもりで始めたこの話もここまで来ましたか。
なんとも感慨深いですが、別に最終回とかではないのでこの辺にしておきます。
次は第２形態の戦闘力……１００万以上（曖昧）を目指してがんばりますか。
でもこのままがんばり続けたら最後は１億２０００万文字に……。

そこまでがんばるのは正直どうかと思う七夕です。

１６１．ある日、夢枕に兄

「夢枕に立つ」という言葉がある
幽霊だったり　神様だったり
ご先祖様だったり　何だったり……
色々と立ってくるが
彼らがそこに立つ理由もまた様々
恨みつらみか愛故か……
お告げというパターンも良くあるが
やはり外せないのが「戒め」だろう
今のふがいない己を叱咤激励しにくるのである
磯野家の大黒柱波平はよくご先祖様に怒られる
それはさておき……
宇宙の帝王の夢枕物語

第１６１話　ある日、夢枕に兄

ある晩　フリーザ様はスヤスヤと眠っていた
静かな夜だった
遠くにはかすかに虫の声が聞こえる
静寂の中……フリーザ様はゴロンと寝返りをうった

『おい……』

フリーザ様の寝息はピタリと止んだ
突然声をかけられて　かすかにまぶたが開く

「むにゃ……こんな夜中に何か用ですかハイバラさん？」

『ハイバラさんではない』

確かに……哀の声とは違う
男の声だ
博士？　とも違う……がどこかで聞いたことのある声
フリーザ様はもう一度寝返りをうって
声の主を確かめた

『久しぶりだな弟よ』

「お前は……クウラ」

兄クウラの姿がそこにあった
フリーザ様は目を丸くする

「何しに来たのさ……」

『決まっているだろう……今のふがいないお前を笑いに来たのだ』

キッとクウラは一気に険しい表情になった

『前々からお前の甘さにはうんざりだったが
ここ最近は特に酷い！　何を馴染んでいるんだ！』

「いや……居心地がいいものだから……」

『見下げ果てた奴だ……愚弟め！
とにかく一刻も早く誇りを取り戻せ！』

「取り戻せって言われても……具体的に何をしろって言うのさ？」

『そこまで腑抜けたか……
そうだな……とりあえず街を破壊してゴミ共に恐怖を味わわせて来い』

「乱暴だけど……それが手っ取り早いね」

『良いなフリーザ！　これ以上兄の顔に泥を塗るなよ！』

……
気がつくと　フリーザ様は朝日に照らされていた

「夢……ですか？」

フリーザ様はベッドから体を起こすとしばし考えた
クウラのいた痕跡は全くない
やはり夢か……

「しかし確かに最近丸くなったのは事実ですね
ここらで宇宙の帝王としての力を地球人共に見せ付けるのもありでしょう」

フリーザ様は「よし！」と体に力を入れる
そして洗面所に向かい顔を洗うと　朝の食卓についた
朝の優雅なひと時……
コーヒーを飲みながらフリーザ様はほぅっと一息ついた

「おっと……こんなことしている場合じゃなかった」

フリーザ様はハッとした
この優雅なひと時が自分をダメにしていることに気づいたのだ

「こんな食卓消し飛ばして差し上げますよ」

「朝っぱらから何する気よ……」

哀がトーストを頬張りながらフリーザ様を睨みつける
その目の前にはまだ食べかけの朝食が並んでいた

「もったいないですね……
ハイバラさん！　ここ消し飛ばしますから早く食べてください！」

「……何がしたいの？」

「……
自分でも良く分からなくなってきたのでやめます
そうだ！　代わりに街でも破壊しにでかけましょう！」

「今なんつった！？」

意気揚々と家をでるフリーザ様
その後を哀はトーストをくわえたまま追いかけた

「さて……とりあえずこの辺から破壊しますか」

適当なところまでやって来たフリーザ様は
とりあえずエネルギー波をくりだそうと構える
そこに哀が追いついた

「ちょっと……まさか本気じゃないわよね？」

「本気ですよ？
何を隠そう今年の私のテーマは『本気』ですから」

「どこの熱血漢よ……そんなことお正月には言ってなかったじゃない」

「今日から本気になりました」

「ニートに見習わせたいわね……でもダメよ！」

哀はフリーザ様の前に仁王立ちになる
フリーザ様はそれを見ると眉間にしわを寄せて舌打ちをした

「おどきなさいハイバラさん！」

「私の今年のテーマは『引かぬ、媚びぬ、省みぬ！』よ」

「どこの南斗鳳凰拳伝承者ですか！
ぬぅ～……どかないと言うなら仕方ないですね」

フリーザ様の指先がまばゆい光を放つ
エネルギー波がまもなく放たれるのだ
哀はぐっと歯を食いしばった

「あれ？　フリーザ様と哀ちゃん……何してるんですか？」
そこに呑気な声色の梓がやって来た
フリーザ様の指先から光が消える……
「おや梓さん……こんな所で何をしているんですか？」
「こんな所って……ポアロの店先ですよ？」
フリーザ様はふと振り返る……ポアロの店先だった
「おっとしまった……それでは破壊するわけにはいきませんね」
いくらなんでも贔屓にしているポアロの店先を破壊するわけにはいかない
フリーザ様は場所を変えることにした
「っと……その前にポアロでコーヒーでも飲んでいきましょう」
フリーザ様はニコニコ笑う梓と共にポアロの中に入っていく
その後ろ姿を哀は呆然と見つめた
「助かったわ……」
「何呆けているんですかハイバラさん……早く入りなさいな」
結局……
その日フリーザ様は1日中ポアロに入り浸り
その後どこも破壊することなく終わった

そしてその日の夜……

『おい……起きろ！』

昨晩よりもドスの効いた声が響いた
フリーザ様はパチリと目を覚ます

『今日一日……何してた？』

「……ポアロでコーヒー飲みながらダイガクセイ達とおしゃべりを……」

『誰がそんなことしろっつったこの阿呆がぁ！』

幻影のくせにすごい迫力
フリーザ様は気合だけでベッドからふっとばされてしまった

『別に難しいことじゃないはずだ
デスボールでもスーパーノヴァでも……一発だろう』

「分かったよ……明日こそやるよ」

言ったところで目が覚めた
寝相が悪い方ではないのだが
ベッドから転がり落ちていた
本当にクウラにふっとばされたのだろうか？

「仕方ない……やりますか」

フリーザ様はそのまま窓から空に飛びたつ
ある程度の高さまで行くとエネルギー球を作り出した

「宇宙の帝王の本分……見せてあげましょう」

そう言って遥か下の街並みを見下ろす
なんだかんだで住み慣れた街だ

「米花町はやめておきましょう
お気に入りのお店とかたくさんありますし……」

では……と違う方に目をやる
が……

「あの辺には美味しいケーキ屋が……
あっちには確か良い雰囲気のレストランがありましたね……
向こうにはトロピカルランドがあるし……」

思い入れが多すぎるので
フリーザ様は知らない街を破壊することにした
空を飛んで……だいぶ離れた街の上に移動する

「ふむ……この辺りは全然知らないですね
よし……この辺りを破壊してやりましょう」

フリーザ様は再びエネルギー球を作り出す
しかし　それが放たれることはなかった

「良いお店とかあるかもしれませんしね……
念のため一回下りて調査しておきましょう」
フリーザ様はそう言うと　眼下の知らない街に下りていった

夕方……
哀が夕食の支度をすませた頃フリーザ様は帰ってきた
「朝っぱらからどこに行ってたのよ?」
怪訝そうに聞いた哀に　フリーザ様は紙袋を差し出した
「うかつでした……素晴らしい和菓子屋を発見してしまいましたよ」
「あら美味しそうなお土産……」
「私は一日中歩き回って疲れたので寝ます」
フリーザ様はそう言うと
夕食も食べずに横になってしまった
『ってコラぁ!』
「う~ん……またですか?」
『またですかはこっちのセリフだ!』
「いや美味しい和菓子屋が……」

『スイーツ……女子高生かお前は！
もう明日の夜まで待たん！
今すぐにやり直して来い！』

クウラの気合とともにフリーザ様は窓の外まで吹き飛ばされる
体勢を立て直すと同時に　フリーザ様は慌てて空を飛んだ

「ぬぅ……クウラめ
仕方ない……どこか適当な　何も無さそうな所を破壊するか」

しかし　何もない街に見えて実は隠れ家的な店があったり
お宝とかが眠っていないともかぎらない……

「ドカンとやったら次の日ニュースで……
ふむ……よくあるオチですね
ですがそうはさせません！」

フリーザ様は飛びながら両手の人差し指を頭にあてる
ポクポクポクポクポク……

「チーン！
閃きましたよ！」

フリーザ様は自分で効果音を言うと
ニヤリと笑って飛行速度を上げた
すると　しばらくして見えてきたのは海だった
月の光をあびて　静かに輝くその上を飛んでいく……

「どれ……ここらで良いでしょう」

フリーザ様はそういうと海を見下ろした
そして両の手の平を下に向ける

「はあああああああああああああ！」

フリーザ様の手からは次々とエネルギー波が発射される
静かだった海は打って変わって波打ち
まるで白い柱が突き立ったようにしぶきをあげた
と言っても……フリーザ様は大分手加減をしたので
それ以外の被害はなかったが

「ふっ……このフリーザ様の力を思い知ったか」

『思い知るか！』

したり顔のところを横から蹴りが入る
フリーザ様は大きく吹き飛ばされた

「幻影のくせに痛いじゃないか……」

「フン……貴様の寝ぼけた脳みそを覚ますには温すぎるぐらいだ
哀れな弟よ……せめてこの兄が直々に屠ってくれる」

驚くべきことに
今まで夢か現かもわからなかったクウラが実体化していた
しかし……フリーザ様は怯むことなく言い放った

「前から思っていたことだけど……
クウラは少し血の気が多すぎるんだよ

そりゃあ帝王として力を見せることは大事さ
でも……もう少し風情ってものを持ったらどうだい？」

「ムカつく……野郎だあああ！」

クウラは怒りに任せてとびきりのエネルギー波を放つ
避けるのが遅れたフリーザ様はとっさに両手でそれを受け止めた
とはいえパワーでは上を行く兄クウラの一撃
受け止めつつ最終形態に変身してはみたが
それでもやはり形勢は逆転しなかった……

「フッフッフッ……所詮そんなものだ
貴様などでは結局この兄を超えることはできん
少しはやってくれるかと長い目で見守ってきたがそれもこれまでだ！
この惑星と共に宇宙の塵になれフリーザ！」

クウラはトドメとばかりに気を放つ
みるみるエネルギーの波がフリーザ様を襲った
フリーザ様は両手一杯にそれを受け止め
歯を食いしばりながら　なんとか持ちこたえる

「ま……負けると……分かっていても……」

しかし　フリーザ様は諦めない

「負けると分かっていても……！
やらなきゃいけないときがあるんだぁ！」

叫び声と共に
今まで一方通行だったエネルギー達が逆流を始める

「なに！？」

今度はクウラの番
襲い掛かってきたエネルギー波を受け止める
ずしりと両腕が軋んだ

「くっ……これなら……どうだぁ！」

クウラはフリーザ様より一回多く変身できる
弟相手に使いたくはなかったが……
クウラはまばゆい光とともに最後の姿へと変貌した
これで確実にフリーザ様の上をいった……
かに見えたがエネルギー波は返らない
なおもクウラの体を後ろへと押しやる

「馬鹿な……この俺がフリーザより劣るというのか！？
そんなことがあるわけない！　弟など！
兄より優れた弟など！　存在するわけないんだ！」

「フッ……決まりですね」

クウラの必死の叫びを聞くとフリーザ様はニヤリと笑った
それがフィニッシュのサインだったのか
エネルギー波はさらに勢いを増してクウラを飲み込んだ

「ばかなあああああああああああ！」

夜だというのにまるで昼のように辺りが明るくなる
それが再び宵闇に包まれた頃には　クウラの姿は無かった

「私は地球でフラグというものを学びました
言葉一つで力の優劣が変わるなんて便利ですよね
ほっほっほっほっほっ……」

……
フリーザ様は目を覚ました
ベッドの上で……目の前には博士の顔がある

「おっとしまった！　バレてしまったか」

博士はフリーザ様の頭に取り付けていた装置を慌てて取り外す

「……何をしているんですか博士さん？」

「いやなに……新しい発明の実験じゃよ
この間の妄想力増強ヘルメットは現実世界に影響をもたらして危ないからのぅ
改良したんじゃ！」

「ほぅ……」

「名づけて『夢増強ヘルメット』
ぼんやりした毎晩の夢もこれを付ければ臨場感が１００倍
超ド迫力のバーチャル体験を毎晩寝ながらできるんじゃ」

「ほほぅ……その実験台に私を選んだ訳ですね？」

「哀君とカーターもじゃが……どうじゃった？」

「えぇ……素晴らしい臨場感でしたよこのジジイが！」

博士の全身の骨がバラバラになったことは言うまでもない……

続く

おまけ：哀と夢増強ヘルメット

「お姉ちゃん！」

死んだはずの姉が今目の前に立っていた

哀は目をこすり　首を横に振り

何度も「夢だ」と念じたが明美の姿は消えなかった

嬉しさのあまり……涙がこぼれる

哀は明美に駆け寄ってすがりつくように泣き崩れた

「でも……お姉ちゃん……」

ただ一つ問題があった

「なあに志保？」

「何で全身メタリックなの？」

鋼の肉体にも程があるメタルボディを手に入れた明美に

哀は目をパチパチさせた

「あの日……私はジンに殺されたはずだった
でも死の直前　私の体はビッグゲテスターに取り込まれたの
あとはビッグゲテスターの高度な科学力で蘇ったというわけ
……よりパワーアップしてね」

「パワーアップは余計じゃない？」

「そんなことないわ」

明美はいつの間にか現れたジンとウォッカを一瞬で蹴散らす

「あんなに怖かったこいつらも……今はゴミクズ同然よ」

「まあ……生きててくれれば何でも良いわ」

突っ込みが追いつかずに哀はため息をつく
そしてふと遠くにある岩の上に目をやった……

「え！？」

そこにはもう一人のメタル明美がいた
いや……一人だけではない
二人……三人……いや百……千……万……
地平線を埋め尽くすほどのメタル明美軍団がそこにいた

「ぎゃあああああああああああああ！」

目を覚ました哀によって
博士の入院期間がさらに延びたことは言うまでもない

１６１．ある日、夢枕に兄（後書き）

もはや懐かしゅうございます。
と、久々に更新してみました。

ってことでお待ちの皆さん、お待たせいたしました。
待ってなかった皆さん、とくに言うことはないよ。
ってことで再出発です。
まあ、またのんびりゆっくりペースになりますが……またがんばっていきます。
全速力で走るのも良いけど
たらたら長い距離走るのも楽しい。

……休載の言い訳ですが何か？

１６２．恋敵ドリームチーム

「どうしたんだいマイケル？　そんな難しい顔して」

「あぁチャック聞いてくれよ……
大学に提出する論文のことで悩んでるんだ
いくら考えてもアイデアが浮かばないんだよ」

「フムム……マイケル
そんな時は些細なことから研究を始めてはどうだい？」

「でもあの教授　つまらない論文は受け取ってくれないしな……」

「何もつまらない論文を書けとは言ってないさ
でも考えてごらんよマイケル
ノーベル賞をとったような学者の中にも
些細な研究から思わぬ発見をしたってケースが結構あるんだよ？」

「そう？　うん……そうかもね」

「そうさ！
ＯＫ……じゃあ些細なことから思わぬ副産物を得た二人の話をしてあげよう」

第１６２話　恋敵ドリームチーム

「暇ですね……」

フリーザ様はふと呟いた
哀は「いつものこと」と　特に返事も返さない

「暇ですね……」

フリーザ様はもう一度呟く

「ねぇハイバラさん？」

そして今度は哀の返答を求める

「そうね」

しかし　哀の口からはその三文字が出てくるだけだった
一瞬ムカっと来たが
哀のそういう態度はそれこそいつものことで
またそれに一々腹を立てるのも毎度お馴染みで飽きたので
フリーザ様は握り締めた拳からフッと力を抜いた

「何か面白いことでもないでしょうか？」

天井を見上げながら考える
白い天井……白……白鳥……
なぜか知り合いのキャリア組が頭に浮かんできた

「そうだ！　白鳥さんをけしかけて
また高木さんと佐藤さんを困らせてみましょう！」

名案だとばかりにフリーザ様は手を叩いた

しかしその言葉に哀が反応をしめした

「あら……知らないの？」

「何がですか？」

「白鳥警部は彼女ができたのよ」

「なんですって！？」

フリーザ様の顔が驚愕で歪む
その顔を見つつ哀は続けた

「私の担任の小林先生いるでしょ？　彼女と付き合いだしたのよ」

「……なんということでしょう」

フリーザ様はわなわなと震えながら　また天井を見上げた

「せっかくのおもちゃが……」

「酷いこと言うわね……良いじゃないみんな幸せになれば」

「おや？　ハイバラさんも人の幸せとか祈るんですね
てっきり『リア充爆発しろ』とか言うかと思いました」

「リアルが充実してない根暗女で悪かったわね……」

しかし　そうなるといよいよ暇さ極まってしまう
フリーザ様は机に突っ伏した

「いや……ちょっと待ってください」

が……すぐに起き上がった

「白鳥さんが恋敵でなくなったということは
今はだれが高木さん達を邪魔しているのですか？」

「さあ……他の刑事共がいるでしょ」

「なんと！　それはいけませんね」

哀は面倒くさそうにフリーザ様を見た
さっきまで死んだ魚のようだったフリーザ様の目が輝いている

「あのうじ虫共では高木さん達の恋の障害にはなりません！」

「まあ……そうよね」

「それならばハイバラさん！
私達で新しい恋敵を用意してあげましょうよ！　そうしましょうよ！」

「別に恋敵いらないでしょ……」

「いります！　昼ドラには必ず恋敵が出てきます！」

「昼ドラ基準……ドロドロしそうね」

「そういうわけで早速オーディションを開催しましょう！」

もはやフリーザ様を止める手立ては無かった

そして数日後……
都内某所でフリーザ様と哀による
「高木・佐藤カップル妨害恋敵オーディション」が開催された

「よく会場借りれたわね……
ってかこんなのに参加する人間いるのかしら？」

「結構な応募がありました
告知もしたし大丈夫ですよ……ねぇ桜塚さん？」

「あぁ……おれのツテを使って大々的に宣伝しといたぜ」

「久しぶりのヤー公ね……」

「どうでも良いでしょう
それじゃあ早速始めますよ……最初の方どうぞ！」

フリーザ様が呼ぶと最初の男が入ってきた
爽やかなイケメンだ

「あら？　雑誌とかで見たことあるわねこの人」

哀がつぶやくと　男は笑顔で挨拶した

「エントリー番号1番　平岡一成です！

現在モデルとして活動中！
仕事の幅を広げたいと思い応募いたしました！」

「ふむ……爽やかですしイケメンですし　なかなか良いですね」

「仕事の幅は広がらないと思うけどね
それにしても……」

哀は桜塚を見た

「あなたまともなツテがあるのね
てっきりヤバげな人ばかり来るのかと思ったわ」

「うるせぇ！」

「ほっほっほっ……出だしは上々ですね
次の方どうぞ！」

フリーザ様が呼ぶ
するとまた見覚えのある人物が入ってきた
今度はエキゾチックな美女だ

「エントリー番号2番……アンドレア・リー……」

色っぽい動作で自己紹介するリー
最近アジアを中心に人気上昇中の女優だ

「たかが刑事の恋敵にすごいの出てくるわね」

「映画一本撮れそうですね……考えておきましょう」

「世界のフリーザ様」と……
インタビューに答える自分をふと想像してみたフリーザ様
悪くない……

「でも……」

しかし……その妄想を打ち破るように哀が口を開いた

「なんですか？」

「あのカップルもずいぶん仲良くなったことだし
ただイケメンや美女が出て行っても
二人の障害にはならないんじゃないかしら？」

「なるほど……確かにそうですね
でも大丈夫です！　個性派もいますよ！
次の方～！」

すると次は……
サッカーボールを持った黒人風の男が入ってきた

「ペレです」

男はそれだけ言うとリフティングを始めた

「おぉ！　ペレですよペレ！」

「いや……似てるけど偽者でしょ……
あ……でもリフティング上手いわね」

しかし恋敵という感じではない
ものまね芸人のオーディションに出て欲しいところだ……
そんなことを考えているうちに次の者が入ってきた

「高橋です……」

「ふむ……特技は？」

フリーザ様が聞くと　高橋と名乗ったその男はスイカを取り出した

「指の連打でスイカを割ります」

「何か知ってる！　この人知ってる！」

哀が言ってるうちに高橋はスイカを連打
数秒としないうちに割ってしまった

「良いですね～……次はどんな超人が出てくるんでしょう？」

「ビックリオーディションになってきたわね……
次の人どうぞ～」

次に入ってきたのは白人の少年
顔色は悪いが　どことなく凄みのある少年だ

「ドゥウェイン・ボンドラチェックです……
超能力が使えます」

そういうとドゥウェインは念じ始める

すると哀の脇においてあったコップが持ち上がった

「ほぅ……サイコキネシスですか」

「すごいわね……他には何かできないの？」

「何でも透かして見ることができるよ……」

ドゥウェインはニヤリと笑いながら答えた
つまり透視もできるらしい
では何かを透視してもらおうということになるのだが
そこでフリーザ様が口を開いた

「ハイバラさんの下着の色とかで良いんじゃないですか？」

「何でよ……」

「読者サービスです」

つまらないことに気を使うフリーザ様を哀はにらみつけた
しかし　その間にドゥウェイン少年は透視を始めていた
マジマジと哀を見つめる……

「穿いて……ない……？」

「穿いてるわよ！」

「透かしすぎです」

はてさて……

哀がドゥウェイン少年を叩き出したところで
入れ違いに次の候補者が入ってきた

「うえ……」

その瞬間　哀は思わず鼻をつまんだ
室内が一気に酒臭くなる
たまらず哀は入ってきた男を見た

「まったく……飲んでからくるんじゃないわよ……
って……あれ!?」

その男を見て　哀とフリーザ様は同時に目を丸くした

「アイヤー!　お久しぶりネー!」

そこにいたのは以前飛行機で一緒になった張明泰（ジャンミンタイ）だった

「何でいるのよ?」

「かわいいオネエちゃんのおっぱいモミモミできるって聞いて来たネ!」

「どういう告知したのよ?」

哀は桜塚を見る

「知らねぇよ……その辺は全部知り合いに任せたからな」

「いわゆる丸投げですね……まあ張さんは酔拳の達人ですし良いと

思います」

「飲みすぎて気持ち悪いネ
どこか横になれる所はないのネ？」

「何しにきたのよ……」

哀は呆れてため息をつく
仕方なくオーディション会場の片隅で寝かしておくことにした

「次の方！」

張が横になったところで次の候補者が入ってきた
今度は緑色をした少年だ

「デンデ……ナメック星から来ました」

「特技は？」

「触れるだけで人を治すことができます」

デンデがそう言うと張が起き上がった

「気持ち悪いネ！　治してほしいネ！」

「分かりました」

「あぁ～……もう訳分からなくなってきたわ」

ごちゃごちゃしてきた目の前の状況に

哀は頭を抱えるしかなかった……

……そしてオーディションは終了し
そこには世界中から集まった超人軍団ができあがっていた

「すばらしい……レアル・マドリードにも勝てますよこれ！」

「ジャンルが違うけど　まあ銀河系軍団よね……」

「この新フリーザ軍をもってすれば一大帝国の建設も可能です！」

「あ……ついでに組織潰してくれる？
それにしても……」

ぞろりと整列した新フリーザ軍を一瞥して
それから哀は思い出したように呟いた

「そもそも何のオーディションしてたんだっけ？」

「……あれ？」

続く

おまけ・チャックとマイケル

「どうだい？　フリーザ様は些細な理由からオーディションを開いた

でも終わってみると最強軍団が誕生していたんだ」

「なるほどね……まずは始めることが大事なんだね」

「その通りさ！
まあ……『論文を書いていたつもりが　出来上がったら官能小説だった』
なんてことになっても責任は負わないけどね」

「なに……その時は官能小説家としてデビューするさ」

「ハハッ！　ハリウッドから映画化の話が来るといいね
それじゃあ前祝に食事でもご馳走してくれよ！」

「まったく君って奴は……ＯＫ！　行こうか」

１６２．恋敵ドリームチーム（後書き）

お久しぶＲＹＹＹ

次はもっと早く更新します～（棒読み）。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6426a/

フリーザ様と灰原さん

2010年10月11日17時26分発行